

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第9集

田端遺跡

(第1分冊)

1988

群馬県教育委員会
群馬県埋蔵文化財調査事業団
東日本旅客鉄道株式会社

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第9集

田端遺跡

(第1分冊)

1988

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
東日本旅客鉄道株式会社

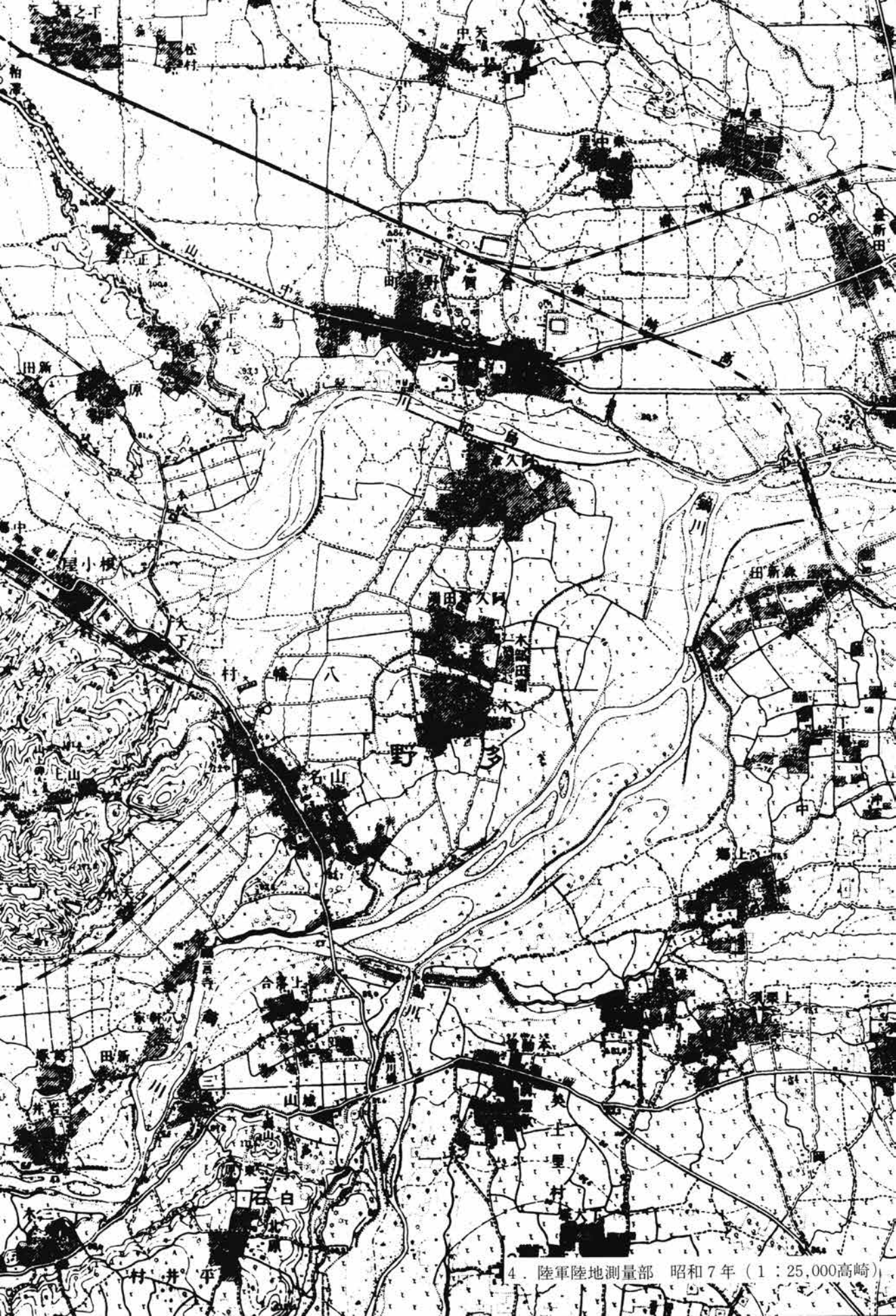


1. 航空写真 昭和49年3月2日 (1:4,000)



2. 心洞寺と東部城跡 (1:2,000)







5. 寺東地区土塁・1号溝（西から）



6. 田端地区B区東半(西から)



7. 田端地区B区（東から）



8. 田端地区B区232号土坑



9. 田端地区E区9号住居跡出土滑石製品・未製品



10. 田端廃寺の瓦一上：B区16号溝、下：B区157号住居



11. 田端地区C区
34号土坑出土
初期伊万里皿



12. 左：京焼系碗
田端地区遺構外出土
右：唐津系碗
田端地区D区2号溝出土



13. 瀬戸美濃系碗
左：遺構外出土
右：B区11号溝出土



14. 田端地区D区1号溝出土 在地系焙烙



15. 田端地区C区42号土坑出土 在地系風炉

序

日本全国において、高速自動車網、高速鉄道の整備は着々とおこなわれつつあります。本県を通過する上越新幹線は太平洋側と日本海側をわずか2時間の距離にしました。中間に位置する群馬県は首都圏と50分あまりの距離となり、首都圏との結び付きが強化されました。

この建設に先行して行なわれました埋蔵文化財の調査は24遺跡でありました。田端遺跡のあります本地域は烏川と鐺川の合流部分にあたり、明治の大洪水のときは、付近一帯が湖と化しています。古代においては住める環境ではなかったと考えられておりました。新幹線建設に伴う調査は昭和50年～57年にかけて実施され、古墳時代から奈良・平安時代の集落、中世・近世の遺構について調査を行い貴重な資料を得ることができました。

本遺跡のあります南八幡地区は、「特別史蹟 やまのうえひ 山上碑及び やまのうえこふん 山上古墳」があり、和銅4年に多胡郡が造られたときに片岡郡から分かれた「山等、の地と考えられる、歴史的な場所であります。発掘により、この時代から現代まで人々の生活が営々と続けられていたことが判明しました。

発掘調査、整理事業を通じまして、ご援助、ご指導を賜りました日本鉄道建設公団、東日本旅客鉄道株式会社、群馬県教育委員会ならびに関係各位に感謝申し上げます。

本報告書が記録類のすくない古代社会の解明に役立てられるとともに、県民の皆様が歴史学習をする際に資料の一部として活用されるところがあれば幸甚で有ります。

昭和63年2月18日

群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎

例 言

- 1 本書は上越新幹線建設工事に伴う事前調査として、昭和50年度から57年度にかけて実施した、高崎市阿久津町・木部町所在の田端^{たばた}遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 田端遺跡は事前の分布調査で7地区・8地区と呼んだ地点であり、所在地は次の通りである。
田端遺跡 寺東^{てらひがし}地区（7地区） 高崎市木部町字田端246-5他
田端遺跡 田端地区（8地区） 高崎市阿久津町字田端1232-5他
- 3 既発表の『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅲ・Ⅵ（群馬県教育委員会1976・1980）および『年報』1・2（財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団1982・1983）で、寺東遺跡・田端遺跡として報告してきた内容は、側道調査によって同一遺跡であることが判明した。そこで本書では、遺跡の呼称を統一的に表現するため、両地区を合わせて『田端遺跡』と呼ぶことにする。旧名称と新名称の関係は下記の通りで、遺物に直接記入してある記号は旧称による。

旧名称	新名称
-----	-----

「阿久津遺跡」（J S 8）	→田端遺跡 田端地区D区
----------------	--------------

「寺東遺跡」（J S 7）	→田端遺跡 寺東地区
---------------	------------

「田端遺跡」（J S 8）	→田端遺跡 田端地区
---------------	------------

- 4 調査は日本鉄道建設公団の委託を受けて、下記の機関が行った。
群馬県教育委員会文化財保護課
寺東地区第1・2次
田端地区第1・2次
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
寺東地区第3・4次
田端地区第3・4・5次
- 5 本遺跡出土鉄滓の科学的分析は東京工業大学 高塚秀治氏にお願いした。分析データの解析は高塚氏と当事業団 井上唯雄による。また、出土獣骨の鑑定は大江正直氏、出土石器・石製品の石材鑑定は群馬地質研究会 飯島静男氏による。記して感謝の意を表するものである。
- 6 遺構の写真は各調査担当者が、遺物の写真は当事業団技師 佐藤元彦が撮影した。
- 7 本書の執筆・編集は神保侑史（県教育委員会文化財保護課）・西田健彦（県教育委員会文化財保護課）・下城 正・関 晴彦・外山政子・大江正行・飯田陽一・大木紳一郎・石守 晃・新倉明彦が行った。
- 8 本遺跡の出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

- 1 遺物の観察表は原則として本文末尾に掲載した。
- 2 遺構番号は調査中及び整理の過程で欠番としたものがあるが、番号の付け直しはしないでそのままとした。
- 3 遺構及び遺構図の方位は磁北を基準としている。グリッド設定の基準とした新幹線中軸線と磁北とのなす角度はN56度16分20秒Wである。
- 4 住居跡の計測値については、下記の原則による。すべて1/20原図から起こした数値である。

①平面形は方形・長方形・台形・その他に分けた。向かい合う辺の midpoint を結ぶ線の長さが1/20図上で10cm以上の差があるとき、長方形と呼ぶ。向かい合う辺の長さが1/20図上で10cm以上の差があるとき、台形と呼ぶ。

②向かい合う辺の midpoint を結ぶ線の長さを計測して、短軸・長軸を認定する。長軸の方位を住居の主軸とする。両者の交点は直角をなすとは限らない。

③壁高は床面からの現存高を示す。

④支柱穴間の距離は支柱穴が認定できたときにのみ記入した。

⑤規模は各辺の長さまたは midpoint を結ぶ線の交点を通る線で測った。

⑥面積は下で測ったが、全形の判明するものに限定した。

- 5 文中または一覧表中で浅間山を給源とする軽石をA・Bで区別して表現したものがある。それぞれの降下年代は次の年代観をとっている。

浅間A軽石：天明3年（1783年）

浅間B軽石：天仁元年（1108年）

なお、浅間B軽石については弘安4年（1281年）説がある。

『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報 I』群馬県教育委員会、昭和50（1975）年

- 6 遺物に付した整理用ラベルの意味は次の通りであり、遺物観察表「備考欄④」の遺物番号により、遺物・測図・写真の検索が可能である。

TA¥A 1-2 ……………田端地区A区1号住居跡2番の遺物

TA¥B54-3 ……………田端地区B区54号住居跡3番の遺物

TA¥B54坑-3 ……………田端地区B区54号土坑3番の遺物

TE¥30-1 ……………寺東地区30号住居跡1番の遺物

TE¥1溝-6 ……………寺東地区1号溝6番の遺物

TE¥G-38 ……………寺東地区遺構外出土の38番の遺物（Grid）

TA¥BG-7 ……………田端地区B区遺構外出土の7番の遺物

TEA-8 ……………出土地区を特定できない遺跡内出土遺物の8番

目 次

卷 頭 図 版

序

第I章 調査に至る経過 3

第II章 調査の方法と経過 7

寺 東 地 区

田 端 地 区

整 理 の 経 過

第III章 遺 跡 の 立 地 15

第IV章 土 層 19

第V章 遺 構 と 遺 物

第1節 遺 構 の 概 要 23

1 田端地区A区

2 田端地区B区

3 田端地区C区

4 田端地区D区

5 田端地区E区

6 寺 東 地 区

本 書 の 構 成 24

第2節 現 代 ～ 近 代 27

新幹線着工前と開通一調査終了後

第3節 近 世 ～ 中 世

1 概 要 31

2 田端地区A区 32

3 田端地区B区 46

4 田端地区C区 137

5 田端地区D区 173

6 田端地区E区 192

7 寺 東 地 区 202

8 田端遺跡出土の石造物 270

遺 物 観 察 表 275

写 真 図 版

分 冊 目 次

第2分冊	第V章	第4節	奈良平安時代の住居跡1
第3分冊	第V章	第5節	奈良平安時代の住居跡2
		第6節	奈良平安時代の溝・土坑・その他
第4分冊	第V章	第7節	古墳時代の住居跡
		第8節	古墳時代の溝・土坑・その他
		第9節	縄文時代の遺構と遺物
第5分冊	第VI章	考 察	
		第1節	田端遺跡の変遷
		第2節	田端廃寺の推定—瓦類—
		第3節	田端遺跡出土の人骨
		第4節	田端遺跡出土の獣歯・獣骨
		第5節	田端遺跡出土の鉄滓分析
		第6節	田端遺跡出土の陶・磁器
		第7節	心洞寺と木部城
		第8節	遺構と家並み
	結	語	

写真図版目次

本文
対照頁

図版 1	田端地区A区全景（東から）	23
図版 2	田端地区A区第1面東半部（西から）	23
	第1面2a～2d溝（北東から）	40
図版 3	田端地区A区1号掘立柱建物跡（西から）	32
	北部ピット群（南から）	32
図版 4	田端地区A区南部ピット群（北から）	35
	南部ピット群（北から）	35
図版 5	田端地区B区71km295～315m南側土坑・ピット群（東から）	131
図版 6	田端地区B区南側土坑群（東から）	131
図版 7	田端地区B区同上（東から）北側道全景（西から）	23
図版 8	田端地区C区本線敷調査（西から）	23
図版 9	田端地区C区北側道（東から）	23
	北側道（西から）	23
図版10	田端地区C区南側道（東から）	23
図版11	田端地区D区全景（西から）	24
図版12	田端地区D区中央部ピット群（東から）	24
	ピット群（南西から）	24
図版13	寺東地区調査前（西から）	24
	トレンチ調査（西から）	24
図版14	寺東地区1次調査（西から）	24
	同上	
図版15	寺東地区1次調査（東から）	24
	同上（東から）	
図版16	寺東地区2次調査南側道（西から）第1面	24
	南側道（東から）	24
図版17	寺東地区2次調査南側道（東から）第2面	24
	南側道（西から）	24
図版18	寺東地区2次調査南側道（東から）第3面	24
	南側道（西から）	24
図版19	寺東地区1号溝—土塁トレンチ（西から）	202・211
図版20	寺東地区1号溝—土塁（東から）	202・211
	1号溝北辺（東から）	202
図版21	寺東地区1号溝東辺（西から）3次調査	212
	1号溝西辺（西から）4次調査	212
図版22	寺東地区遠景（西から）	24
	3次調査（西から）第1面	24
図版23	寺東地区3次調査南側道（西から）	24
図版24	寺東地区4次調査南側道（西から）	24
図版25	寺東地区4次調査南側道（東から）	24
図版26	田端地区A区1号井戸出土遺物	37
	2b号溝出土遺物	39
	遺構外出土遺物	45
図版27	田端地区B区4号溝出土遺物	50
	6号溝出土遺物	50
	5号溝出土遺物（1）	50
図版28	田端地区B区5号溝出土遺物（2）	50
図版29	田端地区B区11号溝出土遺物（1）	50
図版30	田端地区B区11号溝出土遺物（2）	50
図版31	田端地区B区16号溝出土遺物（1）	62
図版32	田端地区B区16号溝出土遺物（2）	63
図版33	田端地区B区16号溝出土遺物（3）	64
図版34	田端地区B区16号溝出土遺物（4）	65
図版35	田端地区B区16号溝出土遺物（5）	66
図版36	田端地区B区2・3・9号墓墳出土遺物	81・82
図版37	田端地区B区5・18・20・23号土坑出土遺物	105
図版38	田端地区B区42・48・38・49・58号土坑出土遺物	110

図版39	田端地区B区50号土坑出土遺物	110
図版40	田端地区B区64・71・80・99号土坑出土遺物	117
図版41	田端地区B区70号土坑出土遺物	118・119
図版42	田端地区B区133・150・161・238・260・261号土坑出土遺物	125・126
図版43	田端地区B区263号土坑・21号ピット出土遺物	130
	ゴミ穴出土遺物(1)	132
図版44	田端地区B区ゴミ穴出土遺物(2)	133
	遺構外出土遺物(1)	133
図版45	田端地区B区遺構外出土遺物(2)	134
図版46	田端地区B区遺構外出土遺物(3)	135
図版47	田端地区B区遺構外出土遺物(4)	136
図版48	田端地区C区1号掘立柱建物跡、1・4・10号溝、3・5号土坑出土遺物	137・142
図版49	田端地区C区4・6号土坑出土遺物	151
	9号土坑出土遺物(1)	155
図版50	田端地区C区9号土坑出土遺物(2)	155
	10・12号土坑出土遺物	155
図版51	田端地区C区18・19・20・21・23・29号土坑出土遺物	156・160
図版52	田端地区C区31号土坑出土遺物	166
	34号土坑出土遺物(1)	167
図版53	田端地区C区34号土坑出土遺物(2)・35号土坑出土遺物	167・166
図版54	田端地区C区42号土坑出土遺物(1)	168
図版55	田端地区C区42号土坑出土遺物(2)	169
	遺構外出土遺物	172
図版56	田端地区D区2号竪穴状遺構出土遺物	177
	1号溝出土遺物(1)	182
図版57	田端地区D区1号溝出土遺物(2)	183
図版58	田端地区D区1号溝出土遺物(3)	184
図版59	田端地区D区2・4号溝出土遺物	185
	遺構外出土遺物	188
	田端地区E区3号土坑出土遺物	199
図版60	田端地区E区遺構外出土遺物	201
	寺東地区土塁出土遺物	211
図版61	寺東地区1号溝出土遺物(1)	213
図版62	寺東地区1号溝出土遺物(2)	214
図版63	寺東地区1号溝出土遺物(3)	215
	3・5号溝出土遺物	227
図版64	寺東地区5・11・12・14号溝出土遺物	232
図版65	寺東地区1号火葬墓、1・3・17・20号墓壇、30号土坑出土遺物	239
図版66	寺東地区56A号土坑出土遺物	260
	遺構外出土遺物(1)	265
図版67	寺東地区遺構外出土遺物(2)	266
図版68	寺東地区遺構外出土遺物(3)	267
図版69	寺東地区遺構外出土遺物(4)	268
図版70	寺東地区遺構外出土遺物(5)	269
図版71	寺東地区遺構外出土遺物(6)	263

挿 図 目 次

第 1 図	上越新幹線と遺跡位置 (1:200,000)	2
第 2 図	田端地区グリッド設定図 (1:2,000)	6
第 3 図	整理事業風景・写真	10
第 4 図	遺跡周辺の地形 (1:50,000)	14
第 5 図	遺跡周辺の地形 (昭和22~26年米軍撮影)・写真	14
第 6 図	遺跡地周辺の地形 (1:100,000)	15
第 7 図	遺跡周辺の地形 (1:10,000)	16
第 8 図	田端地区E区北壁土層断面・写真	17
第 9 図	田端遺跡礫層断面・標準土層位置	18
第 10 図	標準土層	20
第 11 図	寺東地区第3次調査南側道1号溝東辺の調査風景・写真	21
第 12 図	各区遺構配置図 (1:1,000)	折込み
第 13 図	遺跡地付近を走るJR上越新幹線 とき・写真	25
第 14 図	最新地形図 (1:25,000) 昭和58年9月現地調査	26
第 15 図	舗装工事終了後の田端地区E区 (北から) 1987年5月・写真	27
第 16 図	阿久津工業団地・写真	28
第 17 図	心洞寺と新幹線・写真	28
第 18 図	新幹線建設工事着工前の家並 (1:1,000)	折込み
第 19 図	寺東地区調査前 (東から)・写真	29
第 20 図	田端地区A区1号掘立柱建物跡	32
第 21 図	田端地区A区1号掘立柱建物跡・写真	33
第 22 図	田端地区A区1号井戸	36
第 23 図	田端地区A区1号井戸出土遺物	37
第 24 図	田端地区A区1a・1b号溝・写真	38
第 25 図	田端地区A区1号石敷	38
第 26 図	田端地区A区1a・1b・2a~2d溝	折込み
第 27 図	田端地区A区2b号溝出土遺物	39
第 28 図	田端地区A区1~7号土坑	40
第 29 図	田端地区A区8~19号土坑	41
第 30 図	田端地区A区1号土坑・写真	42
第 31 図	田端地区A区8・9・14号土坑出土遺物	42
第 32 図	田端地区A区遺構外出土遺物 (1)	44
第 33 図	田端地区A区遺構外出土遺物 (2)	45
第 34 図	田端地区B区1号掘立柱建物跡	46
第 35 図	田端地区B区2・3号掘立柱建物跡	48
第 36 図	田端地区B区溝	折込み
第 37 図	田端地区B区5号溝 (1)・写真	50
第 38 図	田端地区B区5号溝 (2)・写真	51
第 39 図	田端地区B区4・6・8・9・10号溝出土遺物	52
第 40 図	田端地区B区5号溝出土遺物 (1)	53
第 41 図	田端地区B区5号溝出土遺物 (2)	54
第 42 図	田端地区B区8号溝・写真	55
第 43 図	田端地区B区5号溝出土遺物 (3)	55
第 44 図	田端地区B区11号溝・写真	56
第 45 図	田端地区B区11号溝出土遺物 (1)	57
第 46 図	田端地区B区11号溝出土遺物 (2)	58
第 47 図	田端地区B区南側道16号溝 (1)・写真	59
第 48 図	田端地区B区南側道16号溝 (2)・写真	60
第 49 図	田端地区B区南側道16号溝 (3)・写真	60
第 50 図	田端地区B区16号溝	61
第 51 図	田端地区B区北側道16号溝 (4)・写真	62
第 52 図	田端地区B区16号溝出土遺物 (1)	62
第 53 図	田端地区B区16号溝出土遺物 (2)	63
第 54 図	田端地区B区16号溝出土遺物 (3)	64
第 55 図	田端地区B区16号溝出土遺物 (4)	65
第 56 図	田端地区B区16号溝出土遺物 (5)	66

第57图	田端地区B区16号溝出土遺物(6)	67
第58图	田端地区B区16号溝出土遺物(7)	68
第59图	田端地区B区16号溝出土遺物(8)	69
第60图	田端地区B区南側道17・18・19・21号溝・写真	70
第61图	田端地区B区17・18・19・21号溝	71
第62图	田端地区B区16~21号溝推定図	72
第63图	田端地区B区23号土坑(墓塚)	73
第64图	田端地区B区23号墓塚・写真	74
第65图	田端地区B区1号墓塚(1)・写真	75
第66图	田端地区B区1号墓塚(2)・写真	76
第67图	田端地区B区1号墓塚(3)・写真	76
第68图	田端地区B区2号墓塚(1)・写真	77
第69图	田端地区B区2号墓塚(2)・写真	77
第70图	田端地区B区1・2号墓塚	78
第71图	田端地区B区2号墓塚(3)・写真	79
第72图	田端地区B区3号墓塚・写真	79
第73图	田端地区B区2'・3・4号墓塚	80
第74图	田端地区B区1・3号墓塚出土遺物	81
第75图	田端地区B区2号墓塚出土遺物	82
第76图	田端地区B区4号墓塚・写真	83
第77图	田端地区B区5~11号墓塚・写真	83
第78图	田端地区B区5・6号墓塚	84
第79图	田端地区B区5号墓塚・写真	85
第80图	田端地区B区4・5・9・10号墓塚出土遺物	85
第81图	田端地区B区5・6号墓塚・写真	86
第82图	田端地区B区7号墓塚・写真	86
第83图	田端地区B区9号墓塚(1)・写真	87
第84图	田端地区B区9号墓塚(2)・写真	87
第85图	田端地区B区10号墓塚・写真	88
第86图	田端地区B区11号墓塚・写真	88
第87图	田端地区B区7・9・10・11号墓塚	89
第88图	田端地区B区1・5・6・7・8号土坑・写真	100
第89图	田端地区B区1・5~8・10・11号土坑	101
第90图	田端地区B区10号土坑・写真	102
第91图	田端地区B区18号土坑(1)・写真	102
第92图	田端地区B区18号土坑(2)・写真	103
第93图	田端地区B区18号土坑(3)・写真	103
第94图	田端地区B区3・4・12~17号土坑	104
第95图	田端地区B区1・5・18・20・23・38号土坑出土遺物	105
第96图	田端地区B区19号土坑・写真	106
第97图	田端地区B区20号土坑・写真	106
第98图	田端地区B区18~21号土坑	107
第99图	田端地区B区22・24・25・34・38・39号土坑	108
第100图	田端地区B区41・45・46・51・52・53号土坑	109
第101图	田端地区B区50号土坑・写真	110
第102图	田端地区B区58号土坑(1)・写真	111
第103图	田端地区B区58号土坑(2)・写真	111
第104图	田端地区B区42・43A・B・48・49・50・57・58・60号土坑	112
第105图	田端地区B区41・49・58号土坑出土遺物	113
第106图	田端地区B区42・48号土坑出土遺物	114
第107图	田端地区B区50号土坑出土遺物	115
第108图	田端地区B区68・69・70・71号土坑	116
第109图	田端地区B区64・71・80号土坑出土遺物	117
第110图	田端地区B区70号土坑出土遺物(1)	118
第111图	田端地区B区70号土坑出土遺物(2)	119
第112图	田端地区B区62・63号土坑・写真	120
第113图	田端地区B区72~76号土坑	120
第114图	田端地区B区77・79・81・90・91・93・95・96号土坑	121
第115图	田端地区B区85・86・99・116号土坑出土遺物	122

第116図	田端地区B区97~100・126・128・129号土坑	123
第117図	田端地区B区133号土坑(1)・写真	124
第118図	田端地区B区133号土坑(2)・写真	124
第119図	田端地区B区131・133・150・161・164・192号土坑出土遺物	125
第120図	田端地区B区226・242号土坑	126
第121図	田端地区B区260・261・262・263・264・265号土坑	126
第122図	田端地区B区238・260・261号土坑出土遺物	127
第123図	田端地区B区260号土坑・写真	128
第124図	田端地区B区261・262・264号土坑(1)・写真	128
第125図	田端地区B区261・262・264号土坑(2)・写真	129
第126図	田端地区B区263号土坑・写真	129
第127図	田端地区B区263・264号土坑出土遺物	130
第128図	田端地区B区21号ピット出土遺物	130
第129図	田端地区B区南側土坑群	折込み
第130図	田端地区B区ゴミ穴出土遺物(1)	132
第131図	田端地区B区ゴミ穴出土遺物(2)	133
第132図	田端地区B区遺構外出土遺物(1)	133
第133図	田端地区B区遺構外出土遺物(2)	134
第134図	田端地区B区遺構外出土遺物(3)	135
第135図	田端地区B区遺構外出土遺物(4)	136
第136図	田端地区C区1号掘立柱建物跡出土遺物	137
第137図	田端地区C区2号掘立柱建物跡	137
第138図	田端地区C区1号掘立柱建物跡・写真	138
第139図	田端地区C区1号掘立柱建物跡	折込み
第140図	田端地区C区3号掘立柱建物跡	139
第141図	田端地区C区溝	折込み
第142図	田端地区C区5・6・7号溝・写真	142
第143図	田端地区C区8・9・10号溝・写真	143
第144図	田端地区C区11号溝・写真	144
第145図	田端地区C区1・3・4・10号溝出土遺物	145
第146図	田端地区C区12・13号溝・写真	146
第147図	田端地区C区2号土坑・写真	147
第148図	田端地区C区3号土坑・写真	147
第149図	田端地区C区4号土坑・写真	148
第150図	田端地区C区5・6・7号土坑(1)・写真	148
第151図	田端地区C区5・6・7号土坑(2)・写真	149
第152図	田端地区C区1~7号土坑	150
第153図	田端地区C区3・4・5・6号土坑出土遺物	151
第154図	田端地区C区9号土坑(1)・写真	152
第155図	田端地区C区9号土坑(2)・写真	152
第156図	田端地区C区10~14号土坑・写真	153
第157図	田端地区C区8~12・14号土坑	154
第158図	田端地区C区9・10・12号土坑出土遺物	155
第159図	田端地区C区18号土坑出土遺物	156
第160図	田端地区C区15号土坑・写真	156
第161図	田端地区C区13・15~18号土坑	156
第162図	田端地区C区16号土坑・写真	157
第163図	田端地区C区18号土坑・写真	157
第164図	田端地区C区19号土坑遺物出土状態・写真	157
第165図	田端地区C区19~21号土坑(1)・写真	158
第166図	田端地区C区19~21号土坑(2)・写真	158
第167図	田端地区C区19・20・21号土坑	159
第168図	田端地区C区19・20・21号土坑出土遺物	160
第169図	田端地区C区23号土坑出土遺物	161
第170図	田端地区C区22~25・37~39号土坑	161
第171図	田端地区C区23・24・25号土坑・写真	162
第172図	田端地区C区29号土坑・写真	162
第173図	田端地区C区31号土坑・写真	163
第174図	田端地区C区26~29・31~33号土坑	163

第175図	田端地区C区26・34号土坑・写真	164
第176図	田端地区C区39号土坑・写真	164
第177図	田端地区C区34～36・40～42号土坑	165
第178図	田端地区C区29・31号土坑出土遺物	166
第179図	田端地区C区35号土坑出土遺物	166
第180図	田端地区C区34号土坑出土遺物	167
第181図	田端地区C区42号土坑出土遺物(1)	168
第182図	田端地区C区42号土坑出土遺物(2)	169
第183図	田端地区C区遺構外出土遺物	172
第184図	田端地区D区1号竪穴状遺構・写真	173
第185図	田端地区D区1号竪穴状遺構	174
第186図	田端地区D区1号竪穴状遺構出土遺物	174
第187図	田端地区D区2号竪穴状遺構(1)・写真	175
第188図	田端地区D区2号竪穴状遺構(2)・写真	175
第189図	田端地区D区2号竪穴状遺構及び馬歯出土状況	176
第190図	田端地区D区2号竪穴状遺構(3)・写真	177
第191図	田端地区D区2号竪穴状遺構出土遺物	177
第192図	田端地区D区1号溝遺物出土状態・写真	178
第193図	田端地区D区1号溝(1)・写真	179
第194図	田端地区D区1～4号溝(1)	180
第195図	田端地区D区1号溝(2)・写真	181
第196図	田端地区D区1～4号溝(2)	181
第197図	田端地区D区1号溝出土遺物(1)	182
第198図	田端地区D区1号溝出土遺物(2)	183
第199図	田端地区D区1号溝出土遺物(3)	184
第200図	田端地区D区2号溝遺物出土状態(1)・写真	185
第201図	田端地区D区2・4号溝出土遺物	185
第202図	田端地区D区2号溝遺物出土状態(2)・写真	186
第203図	田端地区D区2号溝(1)・写真	186
第204図	田端地区D区2号溝(2)・写真	187
第205図	田端地区D区4号溝・写真	187
第206図	田端地区D区1～7・10～13号土坑	189
第207図	田端地区D区14・16・17号土坑	190
第208図	田端地区D区16号土坑出土遺物	191
第209図	田端地区D区遺構外出土遺物	191
第210図	田端地区E区1号溝(1)・写真	193
第211図	田端地区E区1号溝(2)・写真	193
第212図	田端地区E区2号溝(1)・写真	194
第213図	田端地区E区2号溝(2)・写真	195
第214図	田端地区E区3・4号溝・写真	196
第215図	田端地区E区3号溝土層断面・写真	196
第216図	田端地区E区1～4・6号溝	折込み
第217図	田端地区E区3号溝北壁土層断面・写真	197
第218図	田端地区E区1・2号土坑	198
第219図	田端地区E区3号土坑	198
第220図	田端地区E区3号土坑出土遺物	199
第221図	田端地区E区遺構外出土遺物	201
第222図	寺東地区調査前の土塁1(東から)・写真	202
第223図	寺東地区心洞寺土塁調査前現状図	203
第224図	寺東地区調査前の土塁2(南から)・写真	204
第225図	寺東地区1号溝	折込み
第226図	寺東地区1号溝—土塁土層断面(1)	205
第227図	寺東地区1号溝—土塁土層断面(2)	206
第228図	寺東地区1号溝—土塁第1トレンチ土層断面(西から)・写真	207
第229図	寺東地区1号溝—土塁第2トレンチ土層断面(西から)・写真	207
第230図	寺東地区1号溝—土塁第3トレンチ土層断面・写真	208
第231図	寺東地区1号溝—土塁第4トレンチ土層断面・写真	208
第232図	寺東地区1号溝—土塁第5トレンチ土層断面・写真	209
第233図	寺東地区1号溝北東隅北側土層断面(F—F')・写真	209

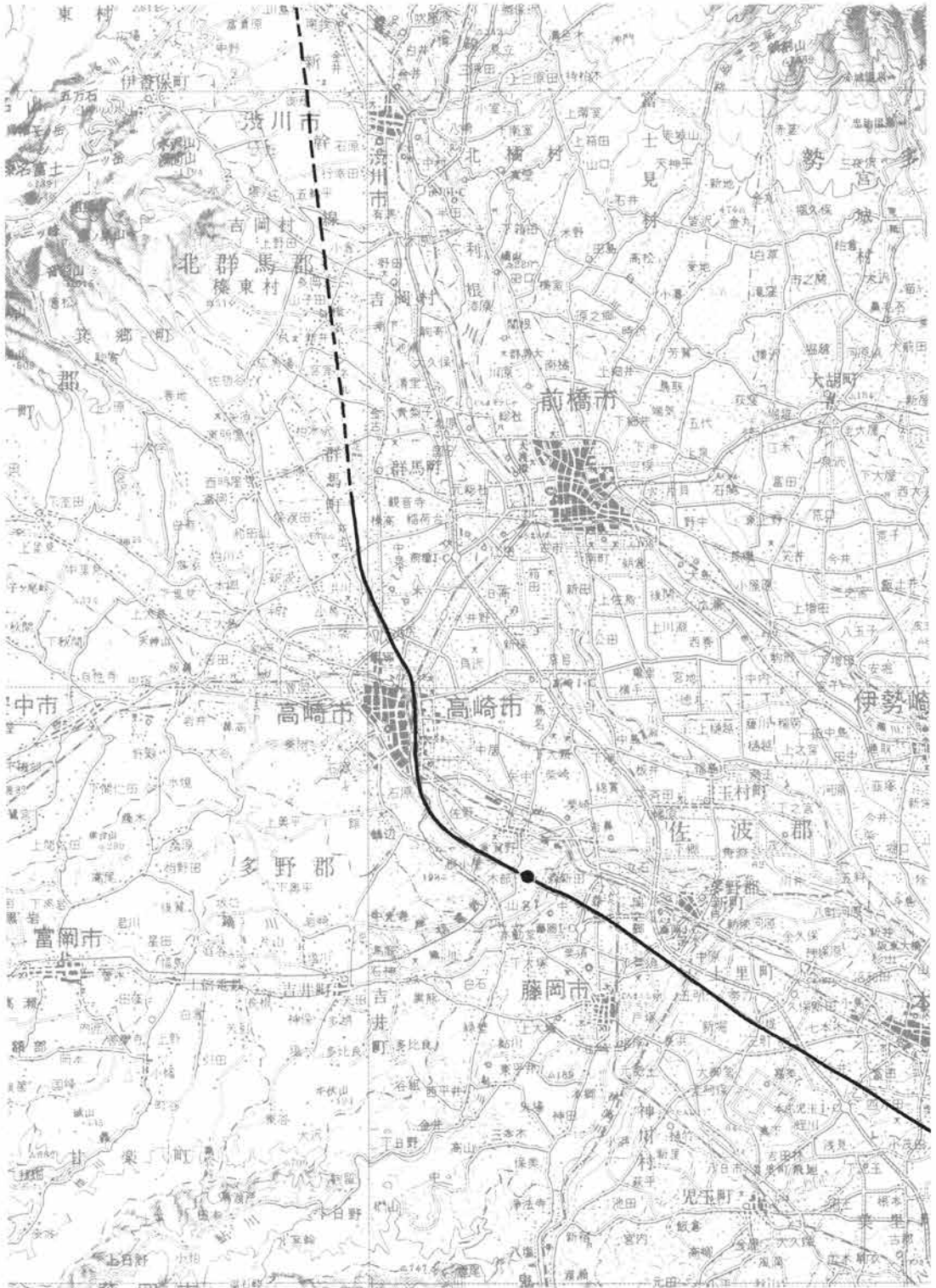
第234図	寺東地区1号溝G—G'土層断面・写真	210
第235図	寺東地区南側道部南壁土層断面土層下礫層・写真	210
第236図	寺東地区土塁出土遺物	211
第237図	寺東地区1号溝出土遺物(1)	213
第238図	寺東地区1号溝出土遺物(2)	214
第239図	寺東地区1号溝出土遺物(3)	215
第240図	寺東地区1号溝出土遺物(4)	216
第241図	寺東地区第1次調査3号溝・写真	219
第242図	寺東地区第2次調査3・11号溝・写真	220
第243図	寺東地区第2次調査4号溝・写真	220
第244図	寺東地区3・4号溝	折込み
第245図	寺東地区第4次調査3・4号溝・写真	221
第246図	寺東地区3号溝出土遺物	221
第247図	寺東地区第1次調査5号溝(1)・写真	222
第248図	寺東地区第1次調査5・6号溝・写真	223
第249図	寺東地区第1次調査5号溝(2)・写真	223
第250図	寺東地区第4次調査5号溝北壁土層断面・写真	224
第251図	寺東地区5・6号溝(1)	225
第252図	寺東地区5・6号溝(2)	226
第253図	寺東地区5号溝出土遺物	227
第254図	寺東地区第2次調査8号溝・写真	228
第255図	寺東地区8号溝	228
第256図	寺東地区9・10・11・12A号溝	229
第257図	寺東地区12B・13~15号溝	230
第258図	寺東地区6・11・12B・14号溝出土遺物	232
第259図	寺東地区16・17号溝	233
第260図	寺東地区1号火葬墓(1)・写真	234
第261図	寺東地区1号火葬墓(2)・写真	235
第262図	寺東地区1号火葬墓	235
第263図	寺東地区1号火葬墓、1・3号墓壇出土遺物	239
第264図	寺東地区1号墓壇(1)・写真	240
第265図	寺東地区1号墓壇(2)・写真	241
第266図	寺東地区3号墓壇(1)・写真	241
第267図	寺東地区3号墓壇(2)・写真	242
第268図	寺東地区4号墓壇(1)・写真	242
第269図	寺東地区1・3・4・8~11号墓壇	243
第270図	寺東地区4号墓壇(2)・写真	244
第271図	寺東地区6号墓壇(1)・写真	245
第272図	寺東地区6号墓壇(2)・写真	245
第273図	寺東地区5~7号墓壇	246
第274図	寺東地区8号墓壇・写真	247
第275図	寺東地区10号墓壇・写真	248
第276図	寺東地区12・13号墓壇・写真	249
第277図	寺東地区14号墓壇・写真	249
第278図	寺東地区15号墓壇・写真	250
第279図	寺東地区12~14・17・20号墓壇、29・30号土坑	251
第280図	寺東地区16号墓壇・写真	252
第281図	寺東地区17号墓壇・写真	253
第282図	寺東地区18号墓壇・写真	253
第283図	寺東地区12・17・20号墓壇出土遺物	254
第284図	寺東地区15・16・18号墓壇、21・23・28号土坑	255
第285図	寺東地区56A号土坑(1)・写真	256
第286図	寺東地区56A号土坑(2)・写真	257
第287図	寺東地区30・34・35A・56A・57A・58・60・61・62号土坑	258
第288図	寺東地区61号土坑・写真	259
第289図	寺東地区62号土坑・写真	259
第290図	寺東地区30・35A号土坑出土遺物	259
第291図	寺東地区56A号土坑出土遺物	260
第292図	寺東地区2号掘立柱建物跡	261

第293図	寺東地区2号掘立柱建物跡・写真	262
第294図	寺東地区1号石敷遺構	263
第295図	寺東地区第2次調査1号石敷(1)・写真	264
第296図	寺東地区1号石敷(2)石除去後・写真	264
第297図	寺東地区遺構外出土遺物(1)	265
第298図	寺東地区遺構外出土遺物(2)	266
第299図	寺東地区遺構外出土遺物(3)	267
第300図	寺東地区遺構外出土遺物(4)	268
第301図	寺東地区遺構外出土遺物(5)	269

表 目 次

第1表	各区検出遺構数	22
第2表	田端地区A区1号掘立柱建物跡計測値表	33
第3表	田端地区A区溝一覧表	39
第4表	田端地区A区土坑一覧表	43
第5表	田端地区B区1号掘立柱建物跡計測値表	47
第6表	田端地区B区溝一覧表	49
第7表	田端地区B区墓壇一覧表	75
第8表	田端地区B区土坑一覧表	90
第9表	田端地区C区2号掘立柱建物跡計測値表	140
第10表	田端地区C区3号掘立柱建物跡計測値表	140
第11表	田端地区C区溝一覧表	141
第12表	田端地区C区土坑一覧表	170
第13表	田端地区D区溝一覧表	178
第14表	田端地区D区土坑一覧表	190
第15表	田端地区E区溝一覧表	192
第16表	田端地区E区土坑一覧表	200
第17表	寺東地区溝一覧表	217
第18表	寺東地区墓壇・土坑一覧表	236
第19表	寺東地区2号掘立柱建物跡計測値表	262

第 I 章 調査に至る経過



第1図 上越新幹線と遺跡の位置 (1 : 200,000)

第I章 調査に至る経過

昭和48年4月1日付で日本鉄道建設公団（以下、鉄建公団と略称）と群馬県教育委員会（以下、県教委と略称）は群馬県内を通過する上越新幹線の路線上に分布する22箇所の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について、「上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結した。（協定書の内容は『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第1集』に掲載しておいたので、それを参照されたい。）そして、同日付けにて昭和48年度の「上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結し、発掘調査に着手した。用地買収が十分に解決しない中で、工事計画との関係があり、地権者の協力・了解を得て昭和48年5月より利根郡月夜野町上津に所在する十二原遺跡—No69地区—の調査を端緒として、高崎市、月夜野町を中心に昭和50年3月末日まで、次の遺跡を調査した。

1	昭和48年8月～10月	利根郡月夜野町上津所在	大原遺跡第1次調査—No70地区—
2	昭和48年12月	利根郡月夜野町上津所在	大原遺跡第2次調査
3	昭和48年10月～49年4月	高崎山下小鳥所在	下小鳥遺跡—No22遺跡—
4	昭和49年11月～50年3月	高崎村上佐野所在	船橋遺跡第1次調査—No21遺跡—
5	昭和49年4月～50年2月	高崎市大八木所在	融通寺遺跡—No24・25地区—
6	昭和49年9月～50年3月	高崎市大八木所在	熊野堂遺跡第1次調査—No26遺跡—
7	昭和49年9月～10月	利根郡月夜野町上津所在	大原遺跡第3次調査

ところで鉄建公団の用地買収は昭和50年度に入っても進展せず、上越新幹線内の埋蔵文化財発掘調査は南は高崎市、北は月夜野町の上記遺跡に限定され、その他の地域及び遺跡には着手できないような状況であった。しかし新幹線の工事工程を考えれば、新幹線上に分布する埋蔵文化財の発掘調査は急務であり、鉄建公団、県教委は新たな遺跡に着手すべく協議を重ねた。そして、高崎市木部町・阿久津にまたがるNo7、No8地区の遺跡を候補にあげ、地権者会及び対策協議会と交渉に入った。

当初、地権者会と対策協議会は上越新幹線の建設には絶対反対の立場であり、埋蔵文化財発掘調査も一連の事業と考え、話し合に応じる気配を見せなかった。しかし、地元をはじめとする関係者が埋蔵文化財発掘調査の必要性を説明していく中で、徐々に文化財に対する理解を示してくれた。そこで大方の理解が得られた昭和50年7月に地権者会等に埋蔵文化財発掘調査の説明会を地元公民館で開催し、他地区同様に借地方法で発掘調査したい旨申し入れたところ、了解が得られたので、さらに関係者が細部についてつめ、次のことを条件に発掘調査を実施することで協議がまとまり、調査に着手できるようになった。

- 1 埋蔵文化財発掘調査は鉄建公団が新幹線の通過が予定されている地域を地権者より借地して行う。借地の範囲は本線の部分のみで、側道は含まない。
- 2 借地の方法は高崎村上佐野所在のNo15遺跡と同じ方法で行う。
- 3 埋蔵文化財発掘調査は、当面工事が急務とされる本線部分（幅12m、長さ460m）のみとし、側道については後日の対応とする。
- 4 埋蔵文化財発掘調査に必要な測量等の立入については、これを認める。また立合いについても協

力する。

- 5 埋蔵文化財発掘調査に必要な地権者等の発掘承諾書は、鉄建公団がこれをまとめる。
- 6 埋蔵文化財発掘調査に必要な作業員の雇用は地元優先とする。

発掘調査は地権者の同意書が8月末日でまとまったのを受けて、約1ヶ月の準備期間をおき、調査体制が整った10月6日より開始した。No.7・No.8の地域は分布調査の段階で、遺構の有無が極めて不鮮明であったので、先ずは試掘調査を行い、遺構の有無確認後、本調査に入ることにした。試掘調査は11月末日まで行われ、その結果当該地域には古墳時代から平安時代にかけての集落が存在することが判明し、12月より本調査に入って、昭和57年11月に側道を含めた全調査が終了した。その間、本線・側道の調査は下記により実施した。

—No.7 地区—

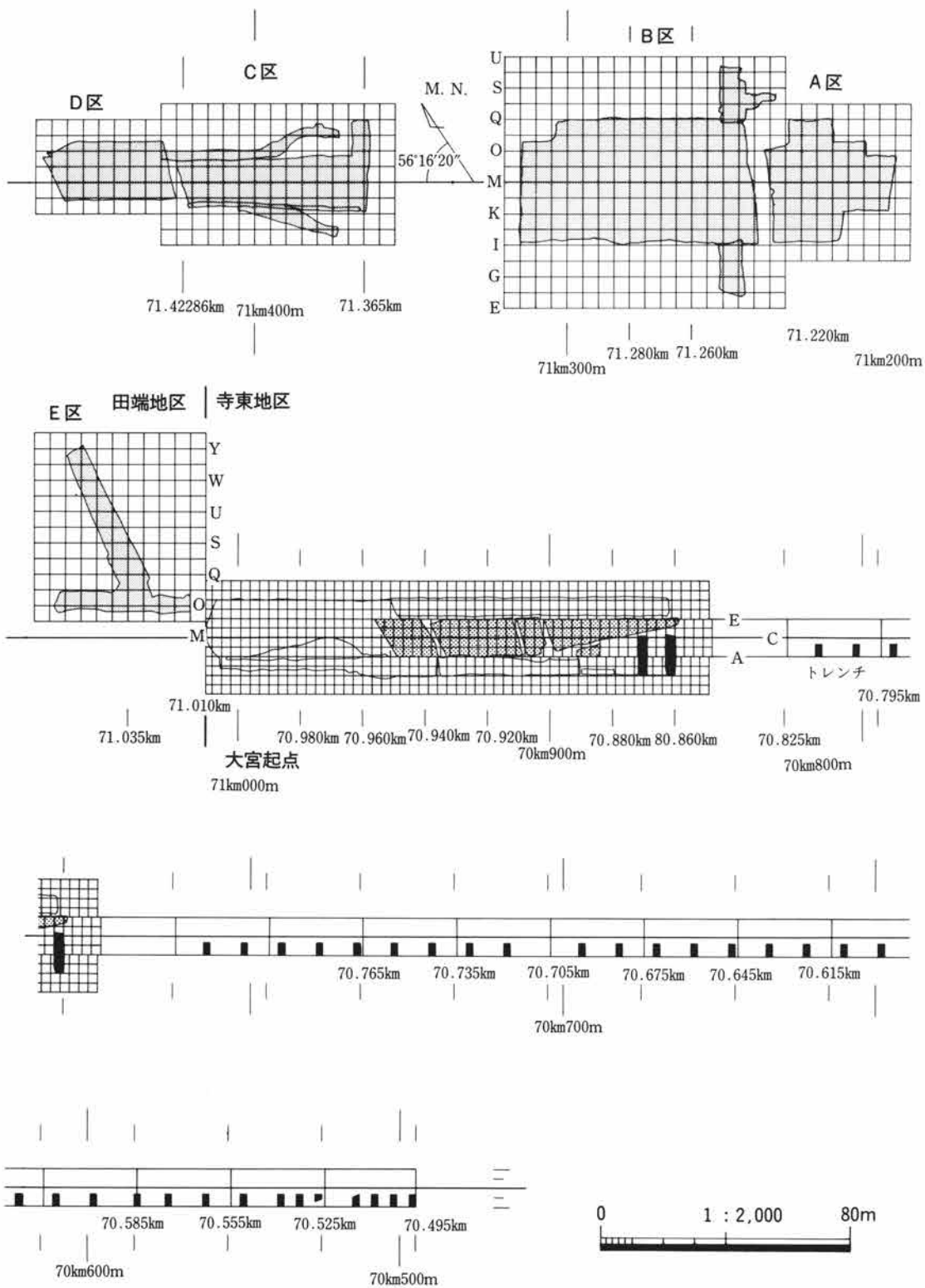
- | | | | |
|---|-------|----------------|----------|
| 1 | 第1次調査 | 昭和50年10月～51年3月 | (本線のみ調査) |
| 2 | 第2次調査 | 昭和54年11月～55年3月 | (本線のみ調査) |
| 3 | 第3次調査 | 昭和55年4月～55年9月 | (本線のみ調査) |
| 4 | 第4次調査 | 昭和57年5月～57年11月 | (側道調査) |

—No.8 地区—

- | | | | |
|---|-------|----------------|----------|
| 1 | 第1次調査 | 昭和53年5月～53年7月 | (本線のみ調査) |
| 2 | 第2次調査 | 昭和54年11月～55年3月 | (本線のみ調査) |
| 3 | 第3次調査 | 昭和55年4月～56年3月 | (本線のみ調査) |
| 4 | 第4次調査 | 昭和56年4月～56年5月 | (本線のみ調査) |
| 5 | 第5次調査 | 昭和57年5月～57年11月 | (側道調査) |

調査終了後、調査報告書作成のため、調査した資料の整理が急務であったが、他の新幹線地域の遺跡の報告書との関連からNo.7、No.8遺跡については昭和60年度より整理に着手することとなり、同年4月より63年2月までの間、これを行なった。そして以下に報告するところのものをまとめることができた。

第II章 調査の方法と経過



第2図 田端地区グリッド設定図 (1:2,000)

第II章 調査の方法と経過

本遺跡に於ける調査は田端地区で5次、寺東地区で4次にわたる。最初の調査は寺東地区の調査で、1975年（昭和50年）に行われた。最後の調査は7年後の1982年に行われ、側道部と道路の付け替え工事に伴うものである。それぞれの調査回数と担当者は次のとおりである。

調査担当

寺東地区	第1次調査	昭和50年10月～昭和51年3月	桜場一寿・下城 正
	第2次調査	昭和54年11月～昭和55年3月	長谷部達雄・西田健彦・外山政子
	第3次調査	昭和55年4月～昭和55年9月	長谷部達雄・関 晴彦・外山政子
	第4次調査	昭和57年5月～昭和57年11月	下城 正・井川達雄・関 晴彦 外山政子・新井順二・山口仁一
田端地区	第1次調査	昭和53年5月～昭和53年7月	長谷部達雄・大木紳一郎・外山政子 宮下万喜子・新井順二
	第2次調査	昭和54年11月～昭和55年3月	長谷部達雄・西田健彦・外山政子
	第3次調査	昭和55年4月～昭和56年3月	長谷部達雄・関 晴彦・外山政子
	第4次調査	昭和56年4月～昭和56年5月	長谷部達雄・下城 正・関 晴彦 外山政子
	第5次調査	昭和57年5月～昭和57年11月	下城 正・井川達雄・関 晴彦・外山政子 新井順二・山口仁一

寺東地区

第1次調査では、発掘区は3m×3mのグリッドを最小単位とし、30mを1区とした。藤岡市森新田飛び地に相当する鍋川堤防の直下を1区としてトレンチを設定し、本線敷き部分の幅12m分に着手した。グリッドの基軸は新幹線建設用センター杭を使用した。ラインCは新幹線センター杭を結ぶ線に一致する。1～12区では、1区当たり5本のトレンチ(2×4m)を設定して調査した。この区間では遺構を検出していない。トレンチを礫層まで掘り下げることによって、旧河川敷きの状態の復元を試みた(第9図 寺3の断面)。

心洞寺の北東部(13～16区)に至り、遺構とみられる落ち込みを検出したことから、全面発掘に移行した。1～7号溝、1a・1b～11号住居、1号火葬墓・2～20号墓壇はこのときの調査による。

1号火葬墓は1次調査中は1号墓壇と呼ばれていたが、2次調査でも同一番号の墓壇があり、整理の過程で焼骨を確認したことから、「1号火葬墓」と名称変更した。また、2次調査以降は「墓壇」の名称を避け、「土坑」の名称に統一して番号を付けている。「墓」であるかどうか、遺構確認の時点では確定できないことによる。

第2次調査では1次調査の方法を継承し、心洞寺北東部に相当する地点の14区～16区の南側道部を調査した。側道部分をグリッド設定区内に取り込むため、1次調査でCラインとした中軸線をMラインと読み替え、南北約24mを調査区とした。即ちA→K、B→L、C→Mであり、南側道部はI-J-Kのラインの間に相当する。幅6mの狭い範囲ではあったが、人骨を伴う1号墓墳等を検出した。このとき、1次調査におけるグリッド設定との間に1mのズレを生じている。このズレは最終調査まで持ち越し、訂正することができなかった。

第3次調査は心洞寺の北側部分の本線敷き、及び南側道の一部を調査した。心洞寺土塁、1号溝の範囲確認はこの調査で行った。古墳時代の住居の調査は主としてこの調査で行っている。

なお、寺東・田端地区とも軸線が直線であることから、この調査時から大宮を起点とするキロ呈を縦軸とし、横軸をA～Qの中軸線に平行するラインで表現することとした。今回の報告も当時の大宮を基点とするキロ呈で地点を表現している。

第4次調査では、第3次調査で残した心洞寺境内の南側道、第1次調査で未着手の北側道の調査を行った。この調査で、初めて水田跡を検出している。

以上、寺東地区では4次にわたる調査を行ったが、住居が本線敷きと側道敷きとにまたがるものがあり、実測図が正確につながらない場合や、写真が1軒の住居として撮影していないものがある。また、本線敷き調査と側道敷き調査との間に側溝が作られたり、橋脚建設のときにノリを付けて掘削しているため、両者の中間地点に薄い未調査部分が生じている。

田端地区

田端地区では県道金井倉賀野停車場線に接する、田端D区から調査に着手した。グリッドの最小単位は1mである。当初は「阿久津遺跡」と呼ばれたが（概報では『田端遺跡』）、第2次調査で田端A区を命名し、翌年度第3次調査でB～C区を設定したため、第3次調査の終了時点で「田端D区」と名称変更した。

第2次調査ではA区を調査し、住居を2軒検出した。グリッドは5m×5mで設定し、以後の調査でも田端地区ではこれを継承している。これより東側はすでに橋脚建設工事が進んでいたため、調査することができなかった。B区の調査が約20m西側へ進んだ時点で年度末を迎え、調査は一旦終了のかたちをとった。

翌年度当初から第3次調査を開始した。この調査ではB・C区に着手したが、先行して行った寺東地区の調査で予想以上の遺構を検出したことや、土塁・1号溝の調査に手間取ったこと、台風の来襲・作業員不足などの影響で調査が長引き、田端地区の調査着手が遅れてしまった。また、B区の住居は重複が激しく、遺構の範囲や前後関係の確認に多大の時間を費やした。B区の調査は年度末に至っても終了せず、3月末で一旦調査を終了した。なお、第23号土坑は第2次と第3次調査とで2基命名されているが、2次調査における23号が人骨を伴うことから、これを「23号墓墳」に名称変更した。このほか、1～11号の「墓墳」と呼んだ平面円形の掘り込みを検出しているが、側道部の調査では「土坑」に統一した。「墓」以外の可能性があるためである。ただし、すでに命名した1～11号「墓墳」に

については、番号と名称を継承して報告した。

第4次調査は、前年度に続いてB区の調査を進め、5月で終了した。従って、第4次調査は田端地区B区の調査のみ行ったことになる。ここまでの調査で本線敷き部分の調査を終了した。

第5次調査は寺東地区に接する北側道部と、これに連なる付け替え道路部分の調査を主体とし、「田端E区」と呼んだ。E区では調査中に2回にわたる大型台風の来襲により、調査区壁面が崩壊したため、安全対策としてノリを付け、壁面にビニールシートを張って対応した。この時点で、平安時代の住居の一部を失っている。また、E区の調査によって水田跡の存在を確認した。E区は寺東地区と道路1本を隔てるのみであり、土層の堆積状態・下位の遺構検出面とも寺東地区西側と類似している。寺東地区の発掘区との相互関係から、大宮基点71km010mを両地区の境界とした。この地点は境界とした道路の東端付近に位置する。地区名称が異なるため、両地区のグリッド設定は同じライン名称であっても南北方向の広がり異なる。

このほか、第5次調査ではB区の付け替え道路の調査（以下、「南側道」・「北側道」と呼ぶ）、C区の斜路建設に伴う調査を行った。斜路は南側・北側ともに予定されたため、C区の「南側道」・「北側道」と呼んでいる。B区の南側道では「163号住居」と命名した遺構を検出したが、調査を進めるうちに住居跡ではないことが判明し、整理の過程で番号を継承して「163号遺構」と名称を変更した。

以上、両地区の次数ごとに調査の方法と経過を報告したが、田端地区E区の調査終了時点で寺東地区と田端地区E区とは同じ遺跡の一部であることが判明し、両地区の名称を「寺東遺跡」、「田端遺跡」として分離しないほうが遺跡の性格把握のために適切であるという認識に至り、本書の遺跡名称は『田端遺跡』とした。また、両地区を分離する道路を境として西側は「阿久津田端」、東側は「木部田端」という字名で記録されていること、手元の資料を当たった限りにおいて「寺東」の字名を発見できなかったことから、遺跡の総称として『田端』をとることにした。ただし、これまでに公表された資料では「寺東遺跡」の名称があり、この名称を消してしまうことは各種記録類・遺物との対応関係を切断することになるので、地区名称として継承する。つまり、従来の「田端遺跡」は『田端遺跡』田端地区、「寺東遺跡」は『田端遺跡』寺東地区に読み替えることになる。

各地区の調査面積は下記の通りである。

平方メートル

田端地区	A区	1,110.8
	B区	3,101
	C区	1,306
	D区	683
	E区	648
寺東地区		3,212.5（トレンチ部分を除く）

これまでに公表された調査成果は次の通りである。

『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報 III』群馬県教育委員会、昭和51（1976）年

『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報 VI』群馬県教育委員会、昭和55（1980）年

『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報 昭和55年度』昭和56（1981）年

『年報 1』群馬県埋蔵文化財調査事業団、昭和57（1982）年

『年報 2』群馬県埋蔵文化財調査事業団、昭和58（1983）年

整理の経過

整理事業は昭和60年4月から63年2月にかけて、(財団法人)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施し、担当職員は以下の通りである。

事務担当職員 常務理事 白石保三郎 事務局長 梅沢重昭（転出） 井上唯雄
管理部長 大沢秋良（転出） 田口紀雄 調査研究部長 上原啓巳
庶務課長 定方隆史 調査研究第2課長 秋池 武（転出） 桜場一寿
庶務課主事 国定 均・笠原秀樹・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏



第3図 整理事業風景

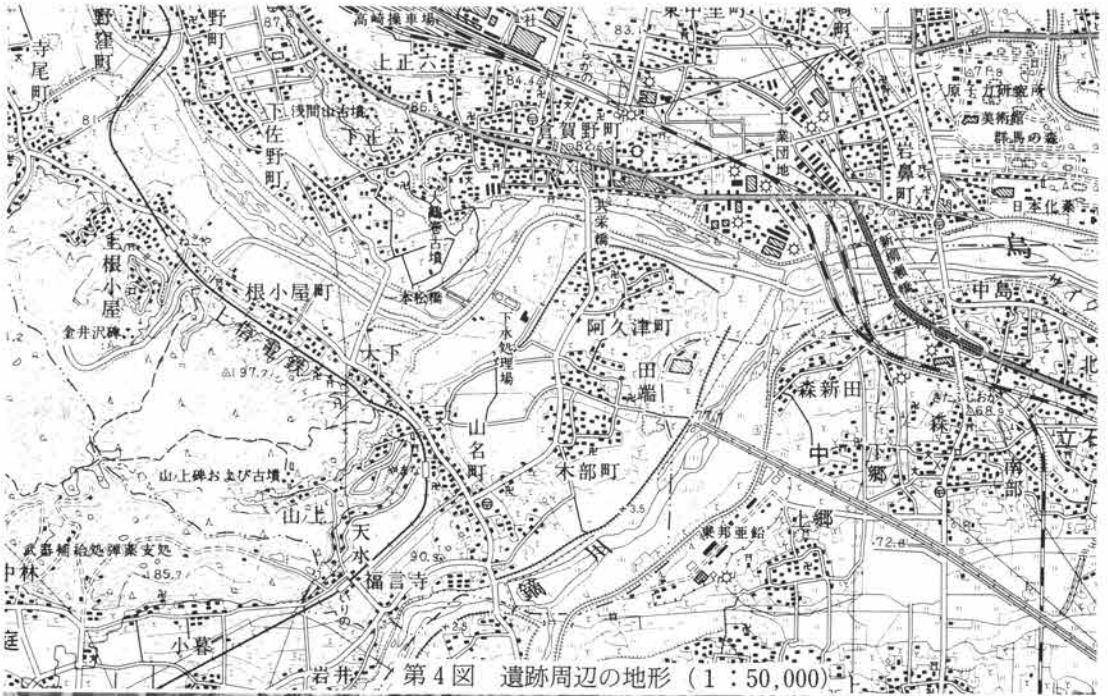
整理担当職員 主任調査研究員 関 晴彦 嘱託員 外山政子・宮下万喜子・坂庭常磐
狩野えり子 補助員 桜井都己子・狩野道子・田中容子・関口広美・功刀晴美
小池弘美・中沢芳子・淵本五子・狩野フミ子・富沢スミ江・田村千種・戸神晴美
井田裕子・千代谷和子・岡田美知枝・平野照美・小林幸枝・渡辺フサ枝・光安文子
永井真由美・安達好子・吉原清乃・藤井輝子・今井サチ子・宇佐美征子
須田はつ江・小池洋子・高橋伸子・嶋崎しづ子・小野寺仁子・筑井弘子

昭和60年度は図面の基礎整理・写真の基礎整理、遺物の接合・復元・写真撮影・実測を行った。接合・復元・写真撮影は約2,300点、実測個体数約1,800点である。

昭和61年度は前年度に続いて実測を行い、約1,250点を実測し、遺物実測は終了した。このうち住居跡出土遺物を整理し、トレース図については外部に委託した。文字原稿は約150軒分を執筆した。

昭和62年度は遺物図・遺構図ともトレースが終了し、印刷原稿に仕上げた。写真図版は前年度にプリントしたものに追加し、1頁大に組み上げて印刷原稿とした。文字原稿は逐次書き溜め、印刷原稿として編集した。

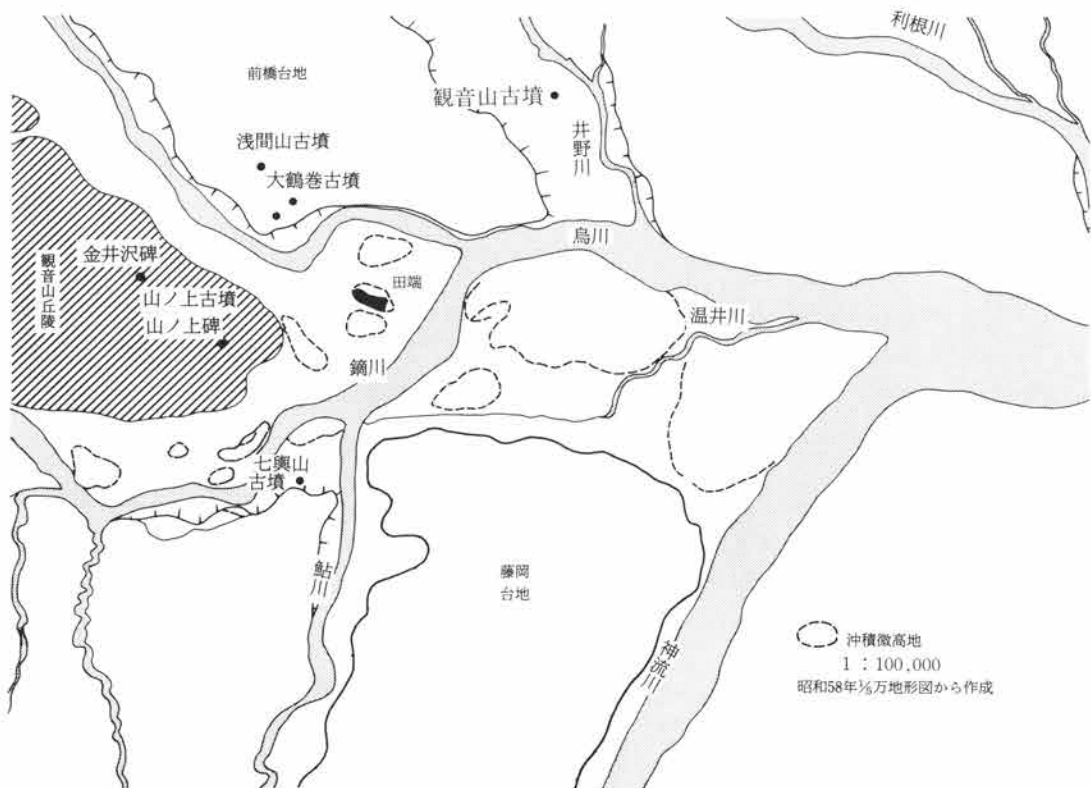
第III章 遺跡の立地



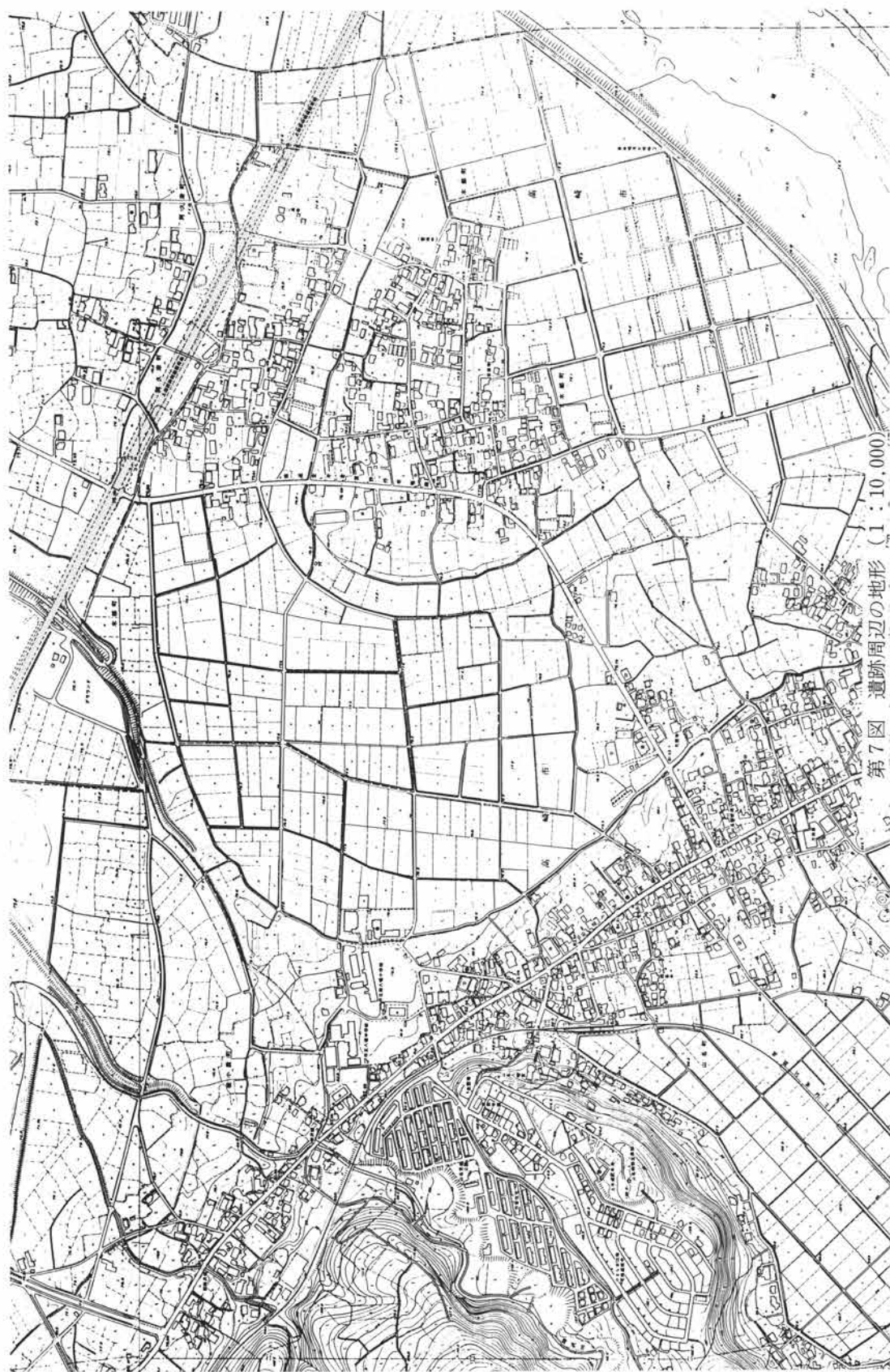
第三章 遺跡の立地

田端遺跡は北緯36度16分50秒・東経139度3分20秒付近に位置する。遺跡は群馬県西部の関東山地に源流をもつ鍋川、遺跡地南方1.5kmほどの地点で鍋川に合流する鮎川、遺跡地北方を屈曲して東流する烏川の3河川によって形成された氾濫原に位置し、鍋川の左岸自然堤防上にある。田端遺跡の乗る微高地と、その南側に位置する微高地の間には幅40～70mの河川蛇行の痕跡が明瞭に残っている。この蛇行痕跡の弦の長さは約500mである。木部城跡はこの蛇行痕跡の内部の微高地北寄りに位置する。心洞寺は木部城跡からみて、蛇行痕跡を渡った北東部に当たる。

この蛇行痕跡のさらに外周には、弦の長さ約1kmの同様の蛇行を示す道路が残っており、両者とも鍋川または鮎川の流れ込みによるものと考えられる。蛇行痕跡の鍋川寄りには耕地整理されてしまい、旧状を留めていないが、恐らく耕地整理された土地は鍋川の氾濫を常に受けていた地域と推定される。内側の蛇行痕跡、外側の蛇行痕跡とも現在の流路から推定すれば、鮎川の氾濫によるものと考えられる。内側の蛇行痕跡の北東部に当たる位置に、もうひとつの蛇行痕跡がみられるが、ここより東側には藤岡市の森新田飛び地があり、近年までの鍋川流路はこちらの蛇行痕跡であったことが、地元の人々の話からも裏付けられる。なお、周辺の遺跡と立地に関しては、本シリーズ第6集『下佐野遺跡II地区』を参照されたい。



第6図 遺跡地周辺の地形（1：100,000）

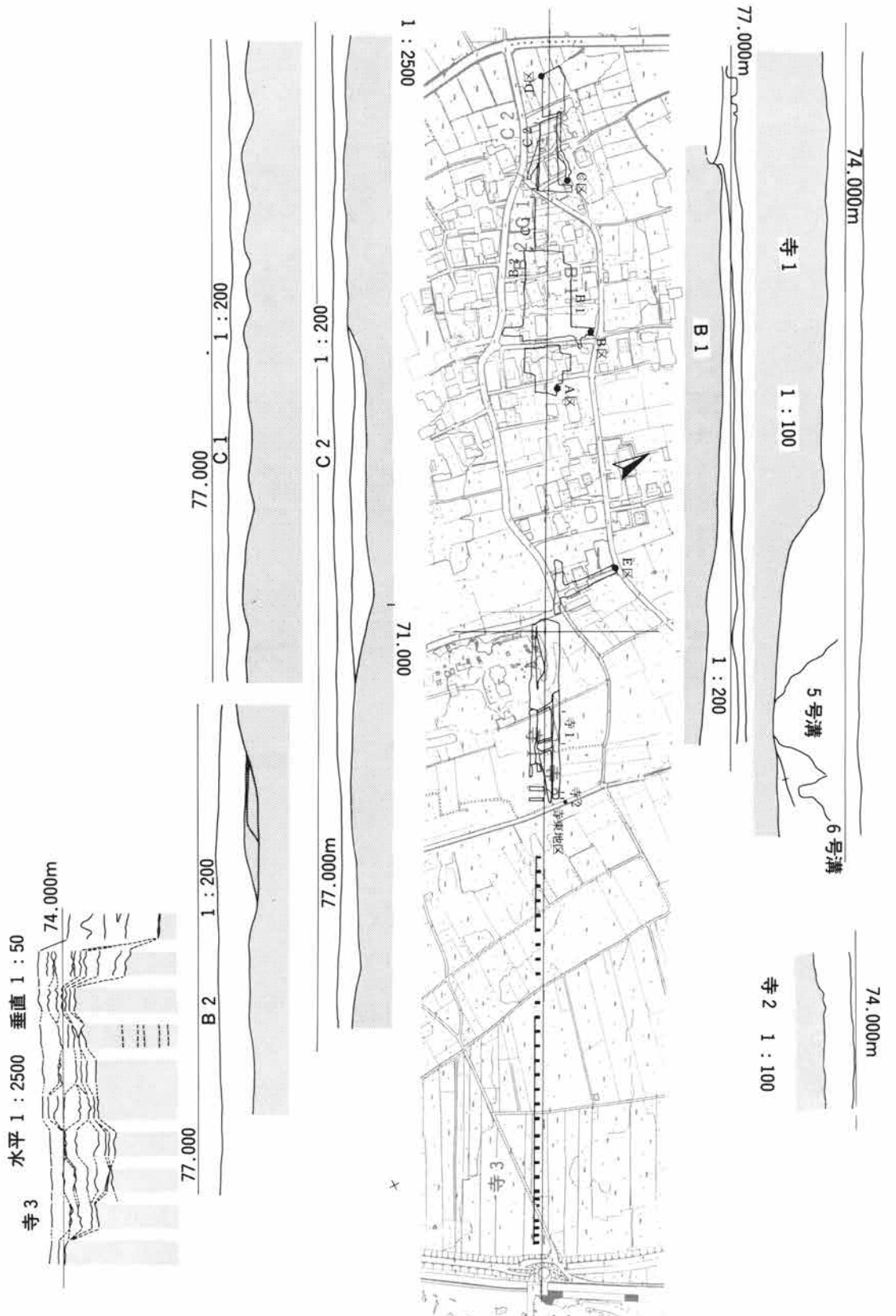


第7図 遺跡周辺の地形 (1:10,000)

第Ⅳ章 土 層



第 8 図 田端地区 E 区北壁土層断面



第9図 田端遺跡礫層断面・標準土層位置

第IV章 土 層

本遺跡は烏川・鐮川・鮎川の3河川が合流する沖積地上にあり、土の堆積状態は度重なる河川の氾濫のためか、調査地点ごとに、また同一地点内でも東端と西端とで堆積の様相に若干の差がある。局所的な1地点で全体の様相を示すことができないため、トピラ裏の図で報告することにした。同図の黒丸は各地区の標準土層を採集した地点であり、アミ点は砂礫層を表現している。寺東地区の台地では基本的に田端地区E区と同様の堆積状態であることから、E区の土層で代表した。

寺3土層断面はトレンチ調査の結果をつないだもので、鐮川堤防の西側直下に大きな旧流路があったことを示している。寺3断面と寺2断面の間には、さらに1つの旧流路があり、心洞寺ののる台地(心洞寺台地と仮に呼ぶ)の東端は寺1断面でみると約2mほどの落差をもっている。心洞寺北東部の礫層までの間は、浅間A軽石を含んだ砂と小石のラミナ状堆積層で、比較的最近まで心洞寺の近くに鐮川の流路があったことを物語る。

寺1断面に示した寺東地区5号溝は礫層に達する大きな溝である。また、ここでは断面図に表示しなかったが、同地区1号溝は礫層を掘り込んでいる。

田端地区E区では再び礫層が低くなり、古墳時代の住居掘形は礫層に達する。田端地区E区-A区の間では土層を採集することができなかったが、E区で確認した水田を形成する土層(灰色粘質土・赤褐色粘質土)と同様の土が堆積していたことが判明しており、両地区の間は礫層が盛り上がらない低地であったと推定される。

田端地区B区以西の礫層断面は、新幹線橋脚建設工事中に実測したものである。A区とB区との間には比高約1.5mほどの落差があり、B区側が高い。両地区の境をなす地点であり、着工前には道路であった所である。この地点からB1断面までは礫層が盛り上がり(B区の台地と仮に呼ぶ)、C1断面で再び礫層が高くなる。田端地区ではこれらの波状を示す谷の部分に黄褐色土が堆積している。

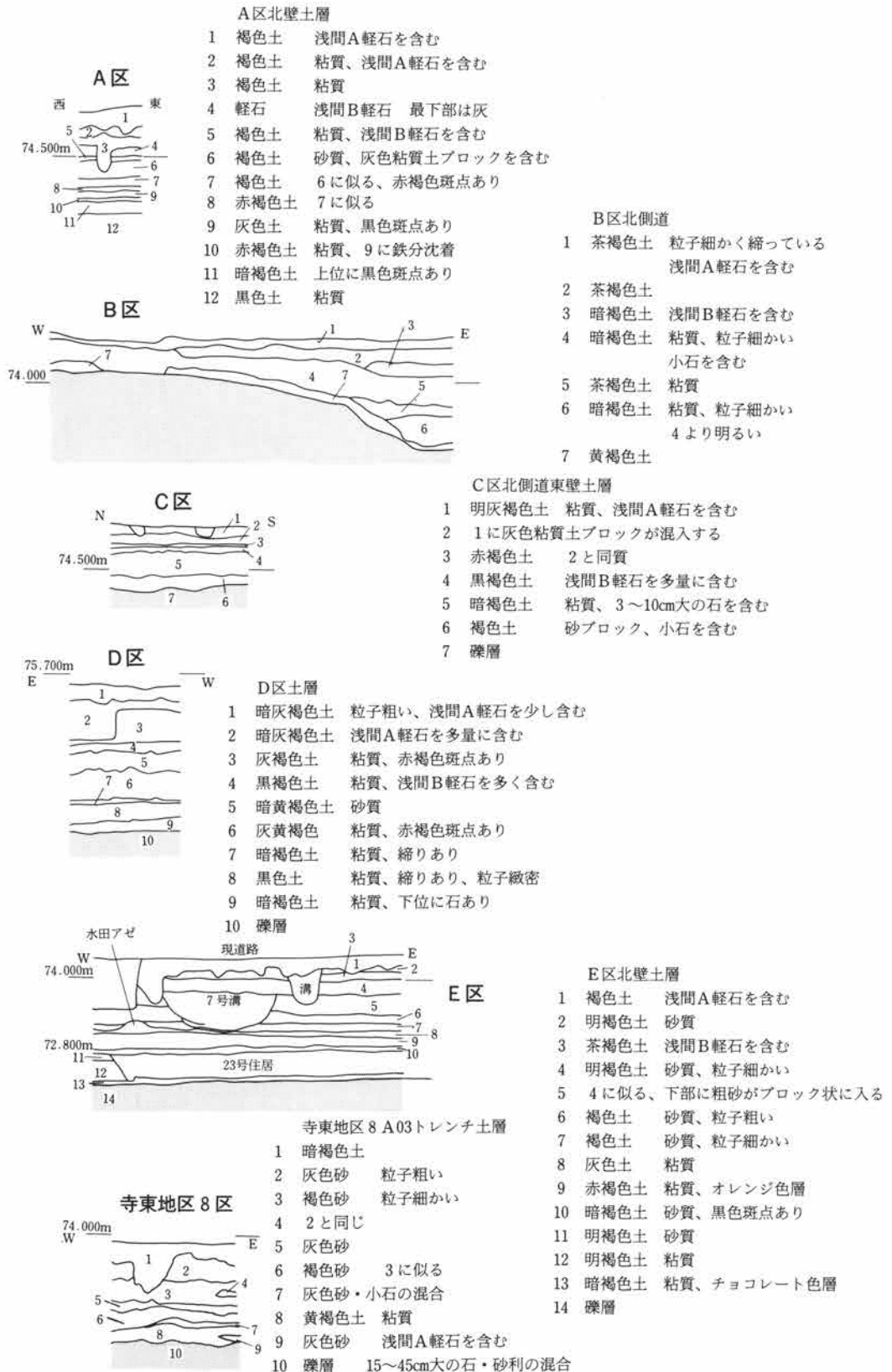
古墳時代の住居がE区・寺東地区で営まれたのに対し、B～C区では1軒も検出していないことは、本遺跡の変遷を考える上で重要なポイントになるとみられる。

本遺跡における遺構検出面は4面にわたり、

- ①地表～浅間B軽石を含む黒褐色土までの中世以降の面
- ②浅間B軽石を含む黒褐色土下の平安時代までの面
- ③灰色粘質土層上の水田面
- ④灰色粘質土層下の奈良～古墳時代までの面

に分けられる。ただし、これらすべての面が検出できなかった調査区もある。

B区では平安時代住居の下位に縄文時代後期の敷石住居があり、この地が古くから居住地として使われたことを示している。しかし、心洞寺の台地とB区の台地とは、住居の年代別分布をみると明らかに異なった様相をみせ、開発の時期に差が認められる。このことについては第5分冊の田端遺跡の変遷で展開される予定である。



第10図 標準土層

第V章 遺構と遺物



第11図 寺東地区第3次調査 南側道1号溝東辺の調査風景

第1表 各区検出遺構数

-：なし、+：プラスアルファ

	田 端 地 区					寺東地区	合 計
	A 区	B 区	C 区	D 区	E 区		
住居跡計	2	167	3	0	37	69	278
奈良～平安	2	143	3	—	6	24	178
古墳	—	—	—	—	31	41	72
縄文	—	2	—	—	—	—	2
欠番	—	22	—	—	—	4	26
掘立柱建物跡	1+	5+	3	+	1	2	12
井戸	1	1	—	+	1	—	3
		現代1					
溝	9	22	13	4	7	37	92
墓墳	—	14	—	—	—	18	32
欠番						1基	
土坑	19	269	41	14	16	51	410
欠番	—	4基	1基	3基	—	2基	10
水田跡	—	—	—	—	1面	1面+	2
その他	石敷1	製鉄1		竪穴2	集石4	畝状1	
						石敷1	
						土塁1	
						ピット群1	

第V章 遺構と遺物

第1節 遺構の概要

本遺跡では調査区が6カ所に別れており、寺東地区で4次、田端地区で5次にわたる調査を実施している。同一の調査区を数次にわたって調査しているため、遺構番号が重複したり、欠番扱いになるなど、多少の混乱を招いている。ここでは遺跡全体の遺構の概要を報告し、詳細は31頁以下の個別的説明を参照されたい。

1 田端地区A区

本地区の遺構は2面で検出し、上層では掘立柱建物跡・井戸・土坑・溝を調査した。これらは中世以降に営まれたと考えられ、第1分冊で報告する。下層では住居跡2軒と溝を検出し、これらは平安時代に属する。住居跡は第2分冊巻頭で、溝は第3分冊後半で説明する。

2 田端地区B区

B区本線敷きの遺構は2面で検出し、上層では近世以降の溝・土坑群を調査した。下層では奈良～平安時代の住居跡を検出し、2号～120号は第2分冊、120～162号は第3分冊前半で報告する。土坑・溝の大半は中世以降に属し、多量の陶器・磁器を出土している。これらは本分冊で報告する。井戸状の形態をもつ54・132号土坑は8世紀代とみられ、54号土坑からは獣骨がまとまって出土した。祭祀に関連する可能性がある。2軒検出した縄文時代後期の住居跡は、遺構外出土の縄文時代遺物と合わせて第4分冊で報告する。

側道部分は道路の付け替え工事に伴う調査で、北側道部と南側道部とがある。北側道では住居跡・土坑・溝を検出している。この調査区の住居跡は第3分冊で報告する。20号溝は同調査区で検出したもので、8世紀代に属するとみられ、これも第3分冊で報告する。土坑は比較的新しく、中世以降とみられるため、本分冊で報告する。

南側道では本遺跡の重要なポイントの一つである複弁七葉の軒丸瓦瓦当を出土した16号溝を調査した。16号溝そのものは、浅間B軽石を含む層を切って掘り込まれており、中世以降の溝と考えられるため、本分冊で報告した。瓦とこれに関連する遺構についての考察は第5分冊で展開される。もうひとつのポイントである、製鉄関連の遺構として163号遺構があり、これは平安時代に属し、第3分冊で報告する。鉄滓の科学的分析と結果の考察は第5分冊で報告する。

3 田端地区C区

本地区の遺構の大半は近世以降のものであり、本分冊で報告する。東西20m・南北16mほどの大型の掘立柱建物跡を検出している。多量の陶器・磁器を出土しており、18世紀代の陶・磁器としては比較的まとまっている。

住居跡は3軒検出したが、全体の形状の判明する遺構はない。第3分冊で報告する。

4 田端地区D区

D区の遺構は一部の土坑を除き、中世以降のものが多い。1～4号溝は互いにほぼ直交する走行をもち、関連した遺構群とみられる。1号溝に西辺が平行している1号竪穴状遺構は壁際に柱穴をもつ特徴ある遺構である。これとほぼ同じ様相をもつ2号竪穴状遺構からは馬骨が出土しており、これを含めた獣骨に関する考察は第5分冊で詳細に展開される。

5 田端地区E区

本地区では奈良～平安時代の遺構として1・2・4号集石及び5・7号溝があり、これらは第3分冊で報告する。平安時代の住居跡は検出数が少なく、古墳時代の住居跡が多い。古墳時代の住居跡は第4分冊の前半で報告する。本地区での重要遺構の一つは、水田跡である。これは第3分冊末尾で、寺東地区と合わせて報告する。

2～4号溝は互いに平行・直角方向の走行をもち、掘り込み面の確認層位から、中世以降に属するとみられる。心洞寺に関連する溝群の可能性があり、第1分冊で報告する。

6 寺東地区

本地区の心洞寺北東部から簗川までの間では、遺構を検出していない。トレンチ調査のみ実施した。本線敷き第1次調査では幅12mの範囲を調査し、1・5号の大型の溝を検出している。墓墳・土坑の多くは中世以降に属し、これらは本分冊で報告する。

住居跡は計67軒を検出しているが、そのうち1／3に当たる23軒は奈良～平安時代とみられ、これらは第3分冊で報告する。その他の住居跡は古墳時代のもので、第4分冊で報告する。

本書の構成

以上、各地区の検出遺構の概要を報告したが、本書では6カ所ある調査区の遺構を時代別に並べたため、かなり複雑な構成である。これは新幹線建設工事に端初を発する本遺跡の発掘調査を契機として、この土地の歴史をさかのぼりつつ、いくらかでも明らかにしたいという意図からきたものである。

昭和50年の調査開始以来、この地域の景観は全く変貌し、一つの歴史的展開を遂げているという見方から、本書のような構成となった。

本書の構成を一言であらわせば、地表から地下へむかって記述した報告である。以下、各分冊の内容を略記して便宜を図りたい。配列順序は遺構種別に田端A→B→C→D→E区→寺東の順である。

第1分冊 現代～中世 該当時期及び時期不明の遺構、遺構外出土遺物。

第2分冊 奈良～平安時代の住居跡1。A区・B区2～120号住居跡。

第3分冊 奈良～平安時代の住居跡2及び土坑・溝・その他。B区～寺東地区の住居跡を含む。

第4分冊 古墳時代・縄文時代の遺構と遺物

第5分冊 まとめ・考察

第V章 第2節

現代～近代



第13図 遺跡地付近を走るJR上越新幹線 1987年5月30日上野発1036 とき455号新潟行



第14図 最新地形図 (1 : 25,000) 昭和58年9月現地調査。昭和59年11月30日発行 国土地理院

第2節 新幹線着工前と開通一調査終了後

本遺跡の周辺は着工前までは農村地域であって、いくつかの機械工業その他の工場があったが、周囲の民家は殆ど農業を営んでいた。比較的土地の低い所では水田耕作を行い、砂地では桑栽培を主とする。桑の栽培は盛んで養蚕農家も多く、県内でも有数の養蚕地域である。蚕子飼育場を地区内にもち、大規模なカイコの飼育施設を各農家が保有していた。近年に至ってビニールハウスにおけるトマトの栽培が奨励され、選果場が建設されて各地へ出荷されている。着工前の家並は第18図の通りである。残念ながら、当時の家並の写真を提示することができない。

調査が終了した後、田端地区の調査区を囲む南北の道路の間は柵で囲われ、雑草が生い茂り、石が露出した荒地となってしまった。

調査終了後5年を経過した現在、田端地区のA区からE区に至る間は「阿久津工業団地」として、新幹線橋脚の両側に工場が立ち並ぶ、工業地域となっている。ただ、南北の道路の周囲は旧状を残している。心洞寺は真新しい墓石が並び、新幹線側道との間はブロック塀で囲われている。木部城主の墓とされている五輪塔は、立派な施設の中に納められた。東門の前の道は舗装道路となっている。



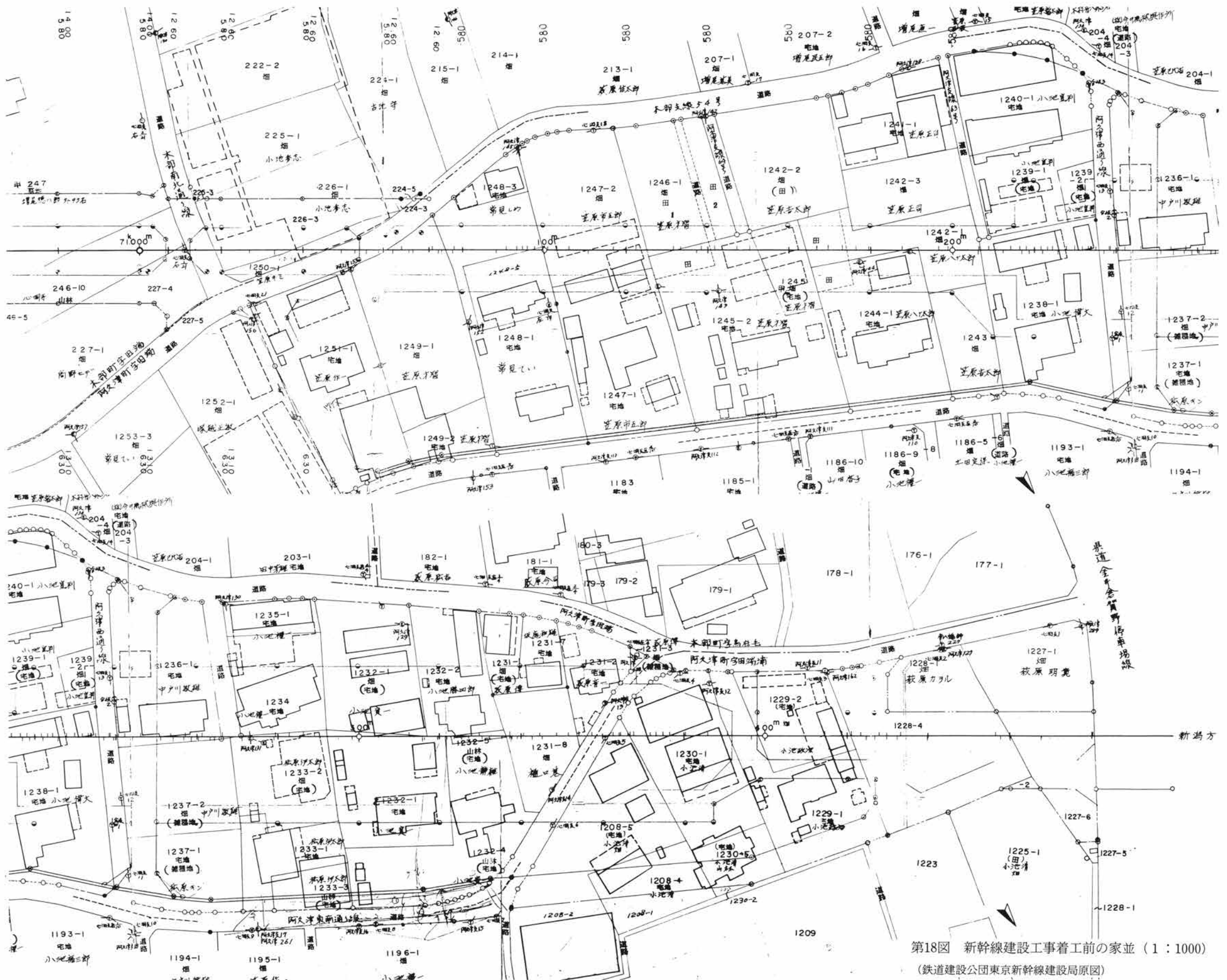
第15図 舗装工事終了後の田端地区E区（北から） 1987年5月



第16図 阿久津工業団地



第17図 心洞寺と新幹線



第18図 新幹線建設工事着工前の家並 (1:1000)
 (鉄道建設公団東京新幹線建設局原図)

第V章 第3節

近世～中世



第19図 寺東地区調査前（東から）

第3節 近世～中世

1 概 要

第1分冊では田端・寺東地区で検出した遺構のうち、およそ近世～中世に属するとみられる遺構を報告する。層位的に時期を推定できるが遺物を伴わず、時期不明としたものもここに含めている。また、各区検出の土坑・墓墳、溝に関しては、とりあえず本分冊の一覧表で示し、詳細は遺構の属する時期によって第3・4分冊で報告することにした。遺構外出土の遺物は縄文時代のものを除き、本分冊で報告する。

田端地区A区

A区では遺構が比較的少なく、1号掘立柱建物跡、1号井戸、1号石敷遺構、1a・1b号溝、2a～2d号溝、1～19号土坑がある。

田端地区B区

B区では土坑の数が多く、個別的な説明はできるだけ割愛し、大半は一覧表で示した。比較的まとまった遺物を出土している土坑は出土遺物のみ示した場合がある。

掘立柱建物跡は1～3号があり、いずれも時期不明である。B区の溝は1～22号までであるが、1～3A号・12～14号・20～22号溝は第3分冊で報告する。3B～11号溝は比較的新しい様相をもち、江戸時代の遺構とみられる。16号溝は本遺跡の中で最も多量の瓦破片を出土し、その個体数は1,000個体を越えている。瓦に関する詳細な分析は第5分冊で行う。その他、近世の陶器・磁器を出土した遺構がある。

田端地区C区

C区の遺構は住居跡を除き、すべて本分冊で報告する。掘立柱建物跡3棟、溝13本、土坑42基がある。なかでも34号土坑は初期伊万里皿を出土し、県内ではいまのところ、比較的遺存状態の良好な優品とみられる。

田端地区D区

D区の遺構は7・10・11号土坑を除き、すべて本分冊で報告する。D区1号溝はB区16号溝と同様の瓦を出土し、両者の間に密接な関連のあることを窺わせる。

田端地区E区

E区では溝7本を検出しているが、5・7号溝は3分冊で報告する。3・4号溝は土層観察では分離することができず、ほぼ同時期に埋没した遺構とみられる。寺東地区に近接していることから、心洞寺に関連する溝の可能性がある。2号溝は調査区内を方形に巡る浅い溝で、企画性の高い遺構である。台風の来襲によって壁面を失い、確実な切り込み面を把握することができなかった。6号溝は覆土に浅間B軽石を含んでおり、中世の遺構とみられる。本分冊で報告する土坑は少なく、1～3号のみである。

寺東地区

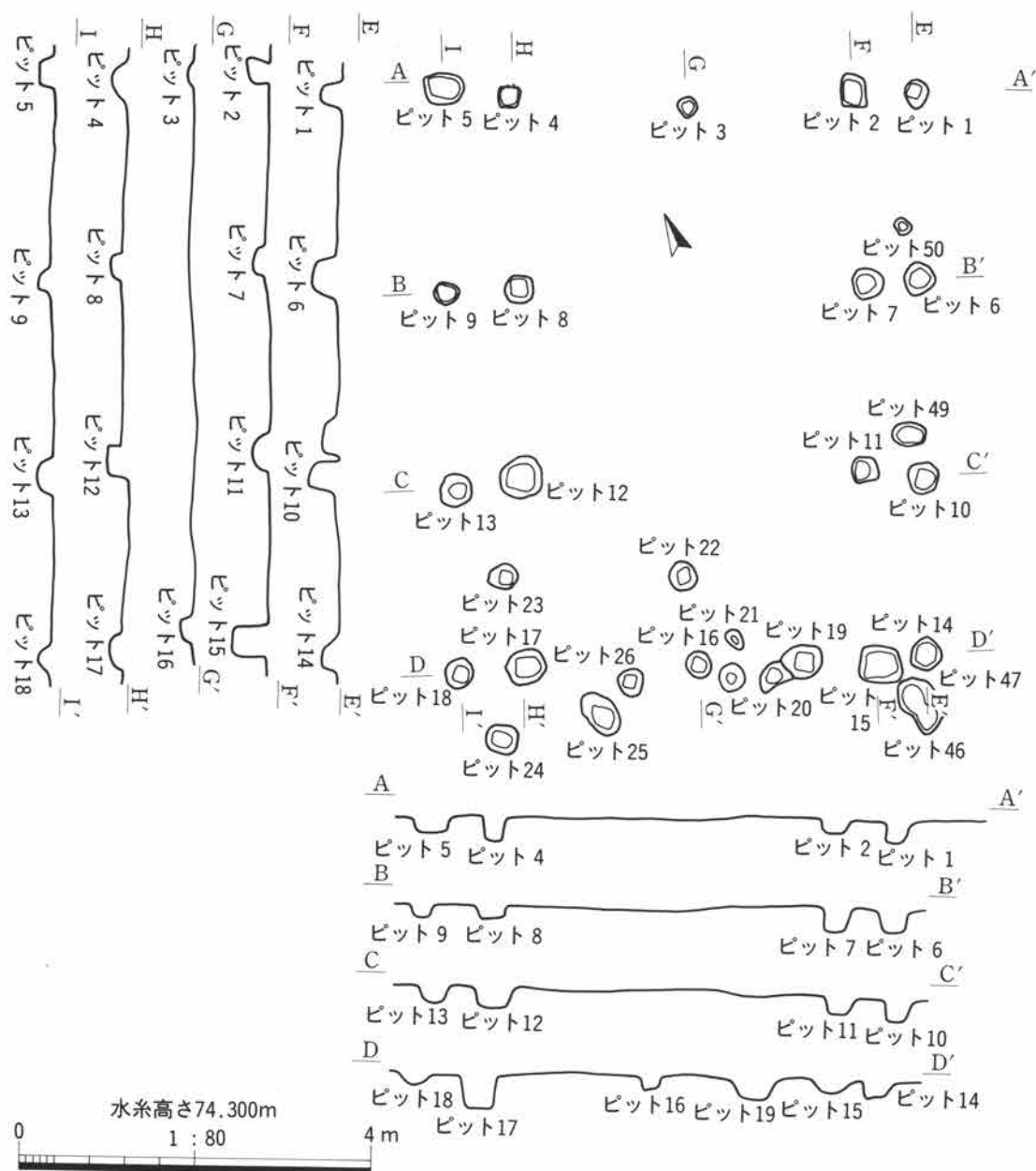
心洞寺に関連するとみられる溝・土坑がある。一部の墓墳は心洞寺に先行する可能性があり、付近

一帯は中世の墓地であったのかも知れない。溝・土坑からは多量の陶器・磁器が出土している。

2 田端地区A区

田端A区第1号掘立柱建物跡 (第20・21図、図版3)

Mライン・71km200m付近で検出した。確認面は第2層である。南東部の柱穴は3号溝と重複しており、3号溝→1号掘立柱建物跡の順に新しい。南北方向に長い3間×2間の建物跡で、東西の側に庇が付く。南側ではピットがやや密に検出されているが、本建物跡に伴うものかどうかは不明である。本遺構に伴うとみられるピット1～18のうち、下バが方形を呈するものは約半数を占めている。各ピット



第20図 田端地区A区1号掘立柱建物跡

トの計測値及び各ピット間の計測値は表の通りである。

ピット内からの出土遺物はない。時期は確かな根拠を欠くが、江戸時代以降と考えられる。



第21図 田端地区A区1号掘立柱建物跡

第2表 田端地区A区 第1号掘立柱建物跡 計測値表

長軸方向	桁 行cm	梁 行cm	桁行柱間cm	梁行柱間cm	番号	規 模		
						上ノバcm 長径×短径	下ノバcm 長径×短径	深さcm
N21°E	2-15 : 648	2-4 : 389	2-7 : 217	2-3 : 118				
	4-17 : 646	7-8 : 394	7-11 : 211	3-4 : 203				
	3-16 : 631	11-12 : 387	11-15 : 221	15-16 : 207	1	34×29	15×15	19
	1-14 : 636	15-17 : 402	4-8 : 216	16-17 : 194	2	38×27	26×20	14
	5-18 : 664		8-12 : 215		3	21×21	13×13	6

第V章 遺構と遺物

		12-17 : 215		4	24×23	23×19	27
平均 : 645	平均 : 393	平均 : 216	平均 : 198	5	44×35	36×23	16
	参 考	庇柱間cm	屋-庇柱間cm	6	径 34	24×22	23
	22-23 : 202	1 - 6 : 212	1 - 2 : 71	7	径 35	径 23	28
	16-22 : 103	6 - 10 : 228	6 - 7 : 60	8	34×32	20×20	15
	17-23 : 105	10-14 : 197	10-11 : 71	9	29×26	23×19	13
		5 - 9 : 231	14-15 : 52	10	36×34	23×21	23
		9 - 13 : 225	平均 : 63.5	11	31×27	20×17	15
		13-18 : 208	4 - 5 : 75	12	48×46	34×32	20
		平均 : 217	8 - 9 : 84	13	39×36	21×18	14
			12-13 : 74	14	38×35	26×24	16
			17-18 : 75	15	46×42	36×29	13
			平均 : 77	16	31×29	17×16	12
			総平均 : 70.3	17	45×39	29×25	38
				18	35×31	20×17	14
				19	48×39	23×21	22
				20	33×30	10×10	15
				21	25×19	10×8	7
				22	35×31	16×15	11
				23	33×31	15×15	13
				24	36×34	22×18	13
				25	55×34	35×23	18
				26	30×29	16×13	8
				46	50×30	30×23	15
				47	45×40	33×24	15
				49	37×26	31×17	10
				50	21×15	13×11	6

※ 計測値は1/20原因から起こした数値である。柱穴間の距離は心心で計測した。長軸方位は2-4・15-17の心心距離のそれぞれの中点を結ぶ線が、磁北方向と交わる角度である。

田端A区掘立柱建物跡推定（第12図、図版3・4）

A区調査区の北西部（O-Pライン・71km225m付近）に3～6号土坑があり、その周辺にピット群が認められる。これらの並びかたをみると、東西に長い建物跡2棟（または南北に長い1棟）が推定できる。3～6号土坑はこの建物に伴ったものの可能性がある。また、これらの南側に位置する7号土坑の周辺にもピットがあり、ここにも掘立柱建物の存在が推定できる。

A区1号掘立柱建物跡の南側（L-Mライン・71km200m付近）に、3号溝の上層でいくつかのピットを検出している。1号掘立柱建物跡の柱通りから外れるピットは、調査区南東隅付近のピットとともに、掘立柱建物跡の存在が推定できる。

調査区中央南寄りのJライン・71km215～71km220m付近にはピットが多数並び、ここにも掘立柱建物跡の存在が推定できる。

以上の推定は、調査中にそれぞれ多数のピットを検出したのみで、1号掘立柱建物跡のように明確な柱通りの認定ができなかったため、ここでは存在の推定にとどめておきたい。これらのピット群は平面略方形の掘り込みを呈するものが多いことをあげておく。

時期は確かな根拠を欠くが、江戸時代以降とみられる。

田端A区第1号井戸（第22・23図、図版26）

M-Nライン・71km210m付近で検出した。確認面は第2層である。1号住居と重複しており、1号住居→1号井戸の順に新しい。確認面では円形を呈し、約100cm下で平坦な面をもち、この面に人頭大～拳大の石を略方形に並べて石組みの縁を形成する。縁から底面までは約100cmで、この中間は石垣状に積み上げている。覆土は平坦面まではレンズ状に堆積し、石垣状に石を積んだ部分は礫を含んだ褐色土で埋まっている。最上層は浅間A軽石と黄褐色土との混合した土層で、この軽石が降下する頃までくぼんだ状態であったことを示している。壁は平坦面までは斜めに立ち上がるが、そこから下の石垣状の部分はほぼ直立している。底面は人頭大の石を検出したが、これを掘り上げると石積みが崩壊する危険があるため、積み上げた石が落ち込んだものかどうか確認できなかった。

遺物は覆土から土錘・陶磁器が出土している。時期は江戸時代以降であろう。

田端A区第1号石敷遺構（第25図）

M-Oライン・71km235m付近で検出した。A区西端に位置する。確認面は第2層である。西壁の直下で南北に約10mほど検出したが、B区との境をなす現道路の直下にあるため、B区の調査でもそのゆくえを充分検出することができなかった。

本遺構は全体に深さ5～10cm前後の溝状を呈し、掘り込みの中から人頭大～拳大の石が出土している。土層断面でみるとこれらの石は黒褐色土のなかにあり、掘り込みは灰黄褐色土で埋まっている。この掘り込みは浅間B軽石を含む土層を切っており、その上に浅間A軽石を含む土層が覆っている。本遺構の時期は中世以降とみられる。

遺物は小片が出土しているのみであるが、布目のついた瓦が出土しており、本遺構と同様の形状・遺物をもつ田端地区B区南側道調査区の16号溝に連なる可能性が高い。そうだとすれば、B区16号溝

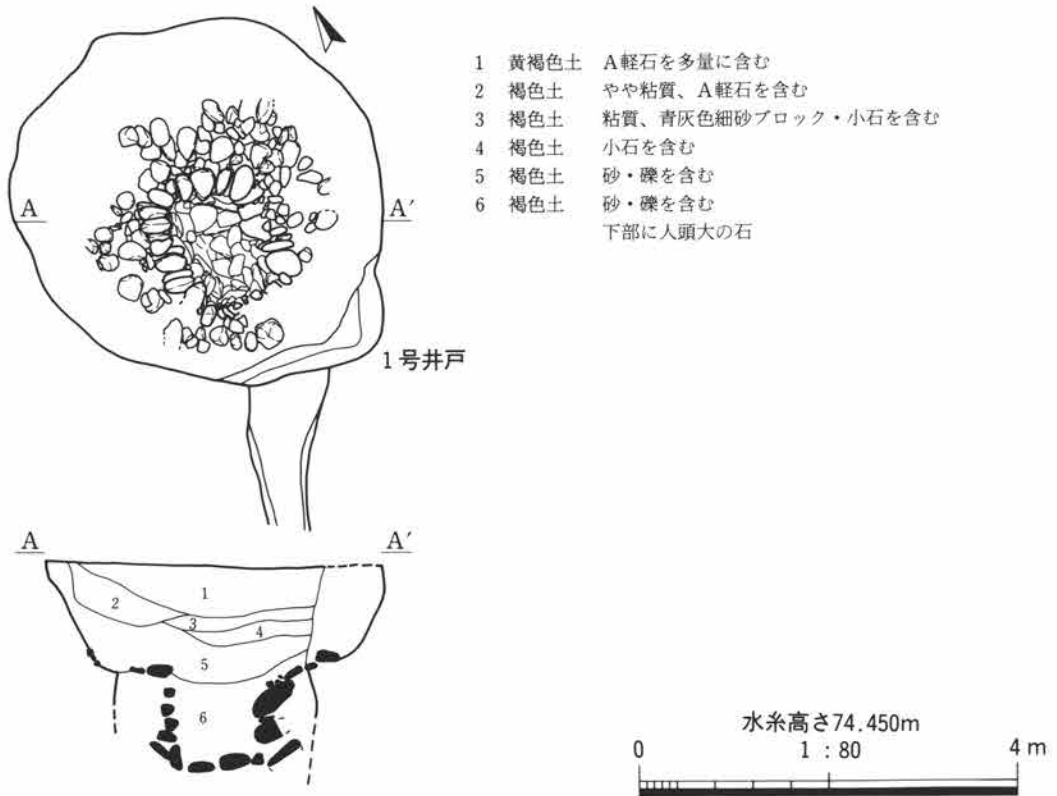
はA区とB区との境界部分の南側で直角に曲がることになる。また、田端地区B区北側道調査区の東側で検出した浅い溝にもつながることが考えられ、B区は溝で囲まれた範囲の中に納まる可能性がある。このことについては、田端地区B区の溝の報告のところでもう一度考えてみたい。

田端地区A区溝

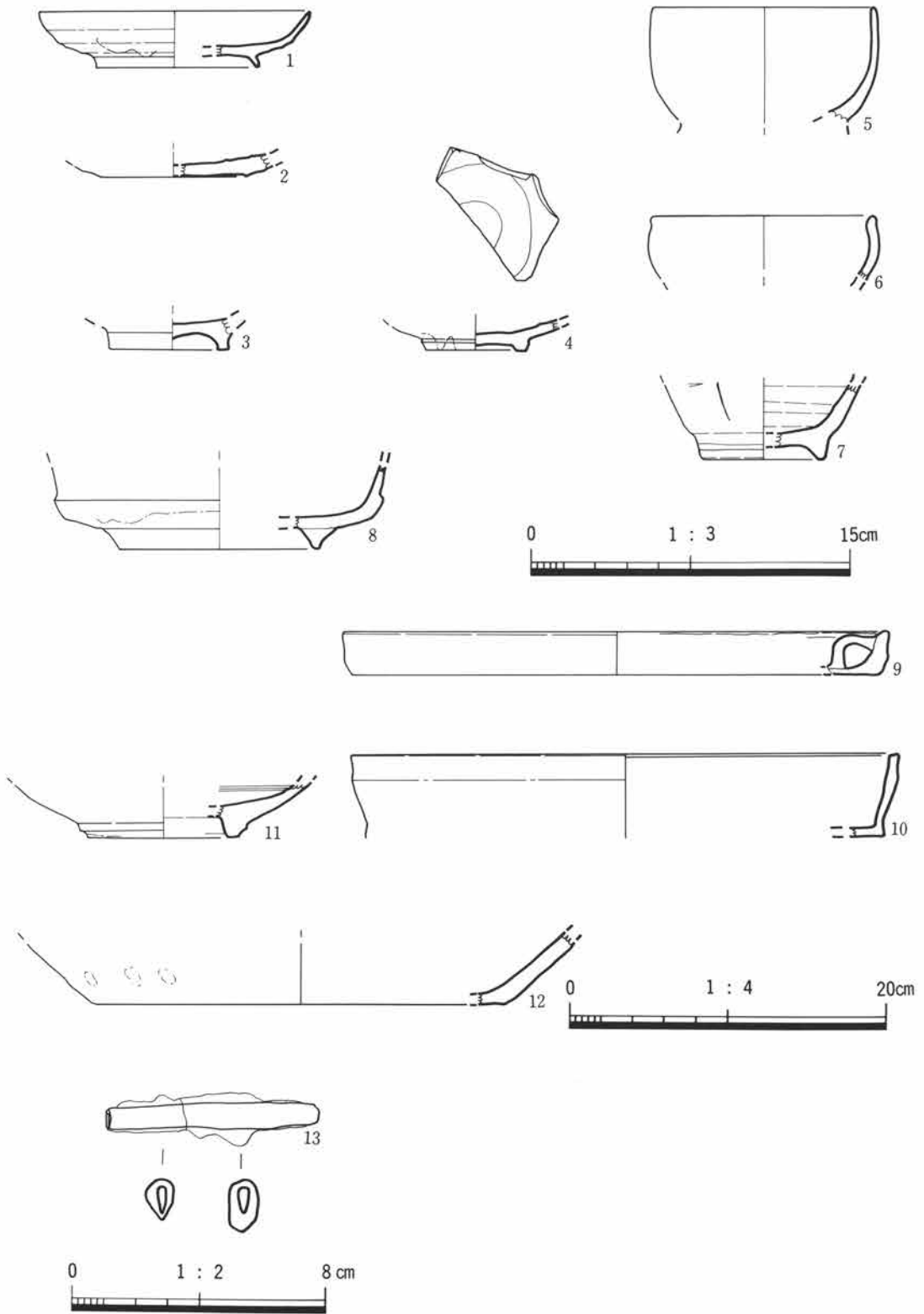
田端地区A区では計3本、個別の名称を含めると9本の溝を検出している。これらはすべて1～3号の名称が付けられ、その枝番号に小文字のa～dが付けられている。1a号溝と1号溝とは全く別の溝に対して付けられた番号であり、調査時における遺構番号の付けかたが本報告までついてまわることとなった。それぞれ遺構の検出面ごとに番号を付したためである。

しかし、遺構の番号付けや名称を変更すると、遺物注記との対応がとれなくなることが明らかであり、ここでは調査当時の番号付けをそのまま継承することにする。

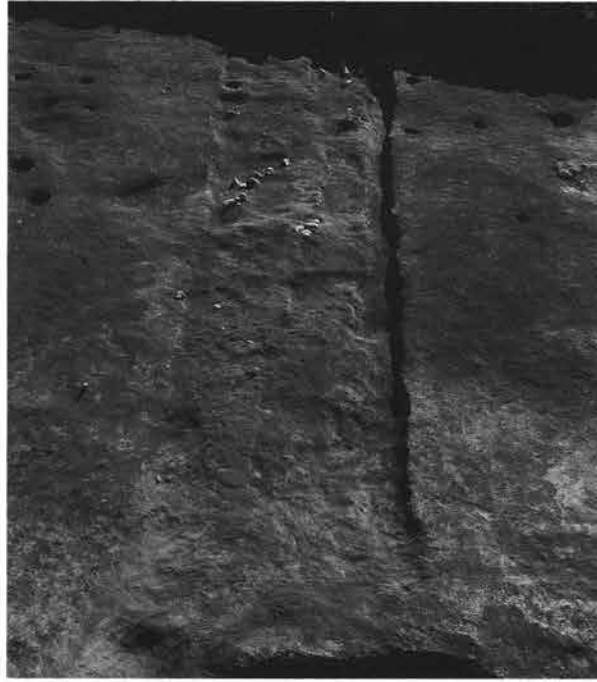
おおよばに言えば、1a・1b号溝は上層で検出した南北方向の溝、2a・2b・2c・2d号溝は調査区西側を南北方向に走る上層の細い溝群、1・2・3号溝は下層において検出した調査区南側を東西方向に走る形状の不明瞭な溝群のことである。



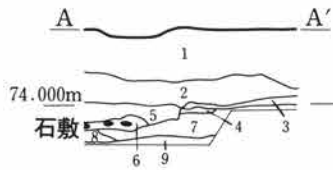
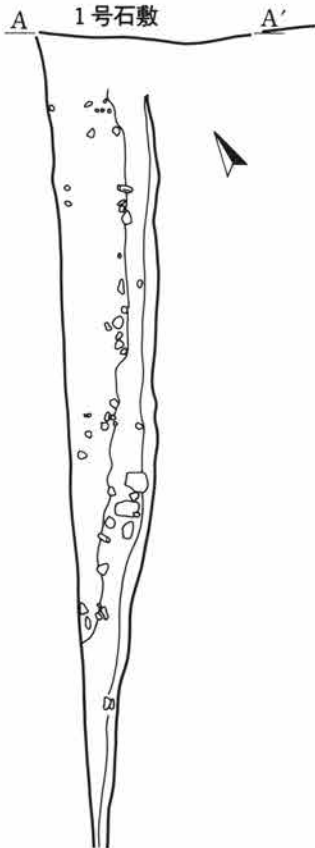
第22図 田端地区A区1号井戸



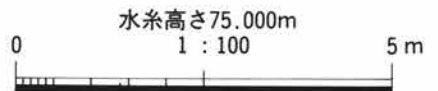
第23図 田端地区A区1号井戸出土遺物



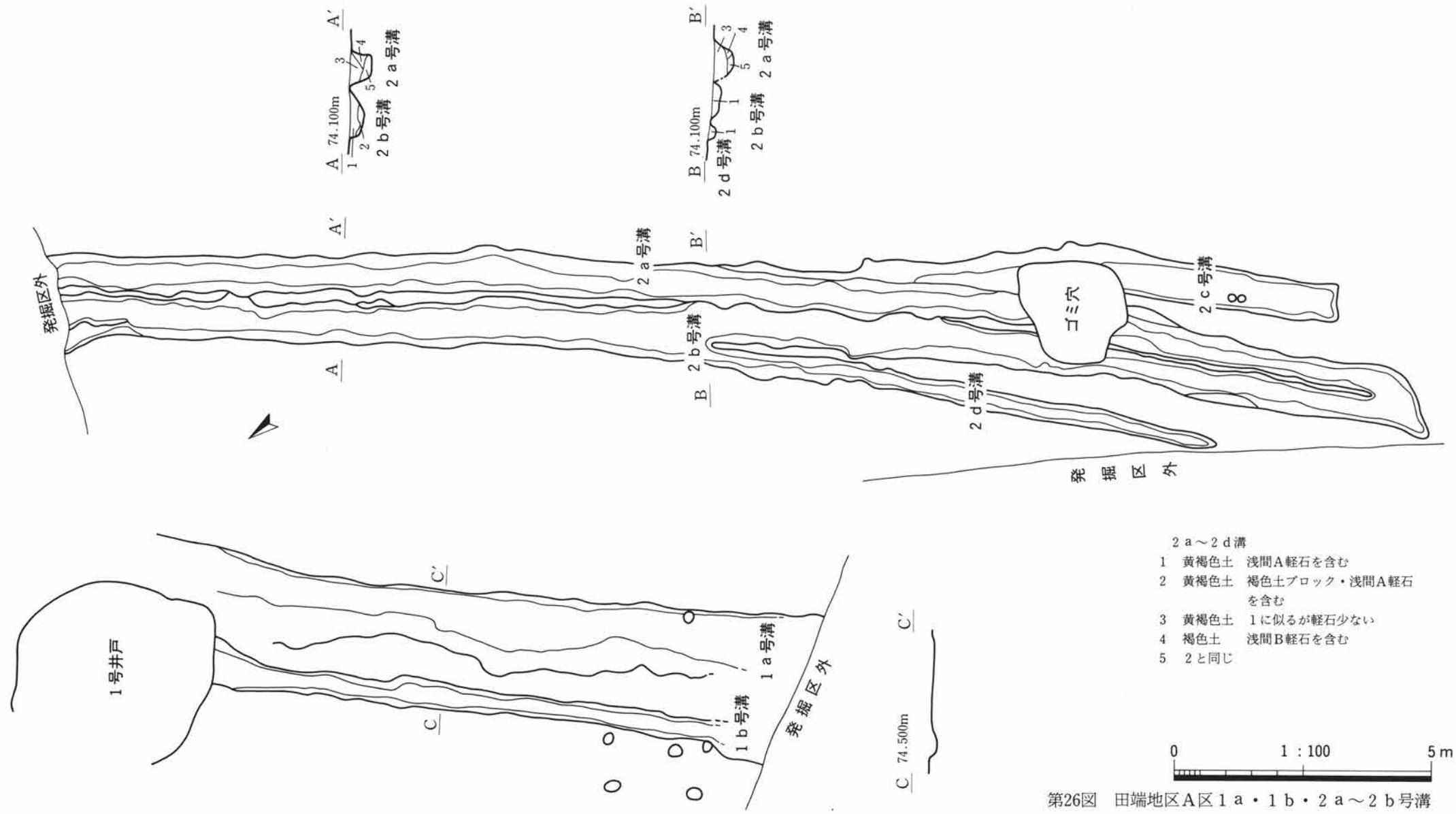
第24図 田端地区A区1a・1b号溝



- | | | |
|---|-------|---|
| 1 | 灰褐色土 | 浅間A軽石を多く含む、軟・粗粒 |
| 2 | 灰褐色土 | 浅間A軽石を含む、硬・粘質 |
| 3 | 灰色土 | 粘質、軽石を含む |
| 4 | 灰黒色土 | 粘質、浅間B軽石を多く含む |
| 5 | 灰黄褐色土 | 粘質、鉄分沈着あり |
| 6 | 黒褐色土 | 石を多く含む |
| 7 | 黒色土 | 上位に浅間B軽石を多く含む
下位に砂層を挟む
中・下位は焼土・炭化物を含む |
| 8 | 褐色土 | 炭化物を含む |
| 9 | 灰色土 | 砂質 |



第25図 田端地区A区1号石敷



第26図 田端地区A区1a・1b・2a~2b号溝

第3表 田端地区A区 溝一覧表

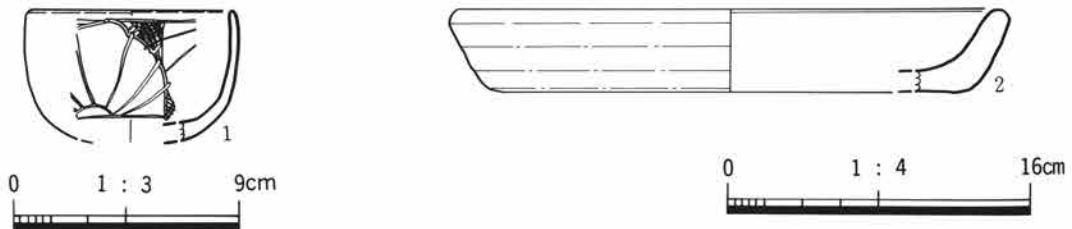
番号	幅cm	長さm	深さcm	重複関係 [旧→新]	遺物	時期	備考
1 a	230～290	14	3～7	1住→1 a・1 b溝→1井戸		18世紀以降	
1 b	20～50	14	17				N19°E
2 a	58～80	27	32～48		香炉、磁器茶碗、陶器・磁器小片	江戸 18世紀～	N40°E
2 b	60前後	27	27～48		陶器・磁器小片30		
2 c	75～90	13	8～46		焙烙片、陶磁器小片		
2 d	25～48	10	11		陶器碗小片、瓦小片		
1	38～300	28	33～43				
2	40～	34.5	13		須恵器大甕体部片、皿口縁部片	平安	
3	60～120	9.5	5～11				

田端地区A区第1 a・1 b号溝 (第24・26図)

K-Nライン・71km206m付近で検出した。確認面は第2層である。1号井戸・1号住居跡と重複しており、これらは1号住居→1 a・1 b号溝→1号井戸の順に新しい。また、調査区南側で1・2・3号溝と重複しているが、これらは下層で検出した溝であり、本溝の方が新しい。

1 b溝は1 a溝の内部のさらに細い部分であり、両者を含めた幅は230～290cmである。1 b溝は幅20～50cmをもつ。調査区内では長さ約14mを検出し、走行はN19° Eをとる。深さは1 a溝が3～7cm、1 b溝が17cmである。底面は1 b溝の断面が丸く、1 a溝は平坦面をもつ。壁は両溝とも斜めに立ち上がる。1 b溝の覆土に浅間A軽石を含んでいる。

遺物は小片が出土したのみで、図示しなかった。本溝の時期は18世紀以降とみられる。

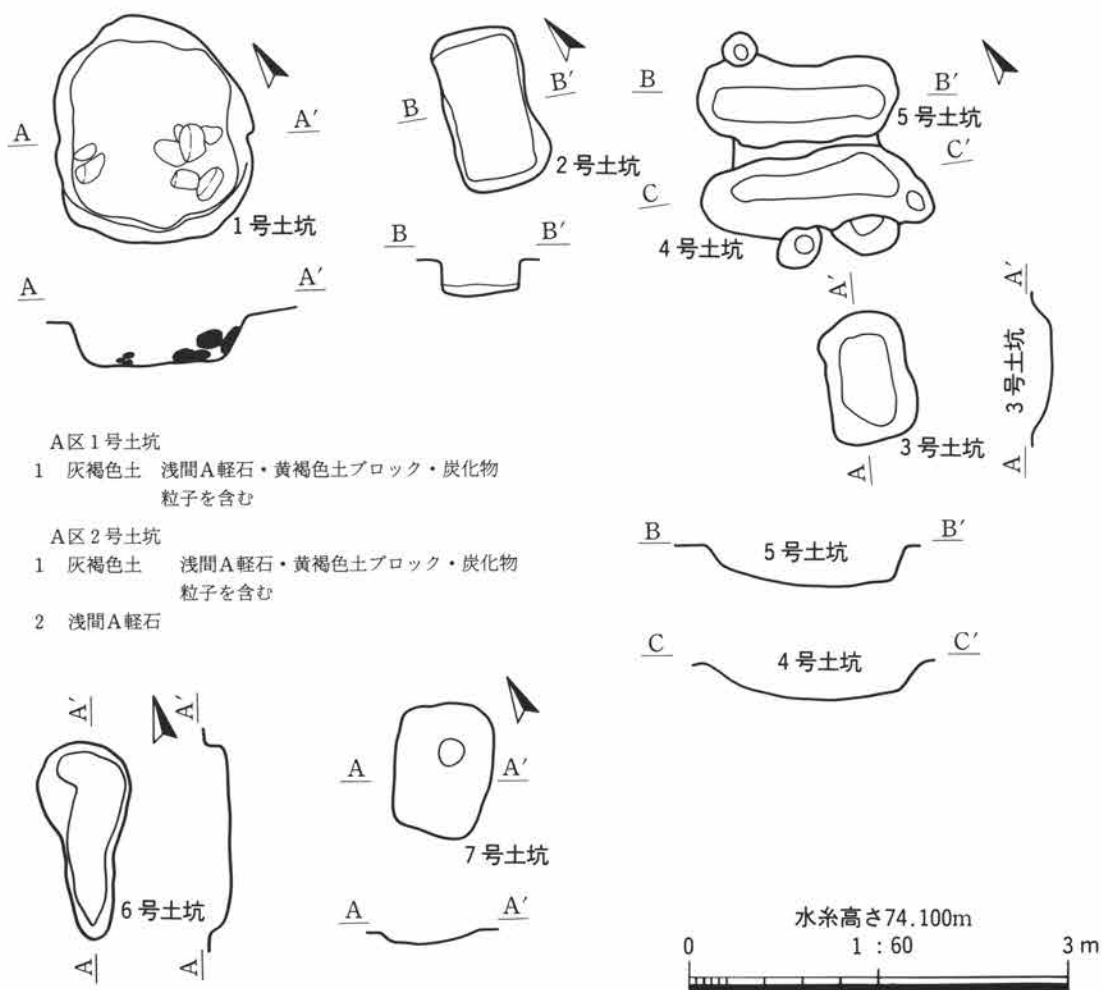


第27図 田端地区A区2 b号溝出土遺物

田端地区A区第2 a・2 b・2 c・2 d号溝 (第26図、図版2・26)

J-Oライン・71km231m付近で検出した。確認面は第2層である。全体に東側に向かってやや丸みをもって曲っており、走行はN40°E前後である。調査区内では長さ約27m分を検出した。深さは8~40cmである。覆土に浅間A軽石を含んでいる。底面は細かい凹凸があり、壁は斜めに立ち上がる。これらの溝は本来1本の溝であったものを、数回にわたり掘り直した可能性がある。

遺物は陶器・磁器、軟質陶器が出土している。第27図の1・2は2 b号溝出土の遺物である。溝群は18世紀以降に掘削されたとみられる。



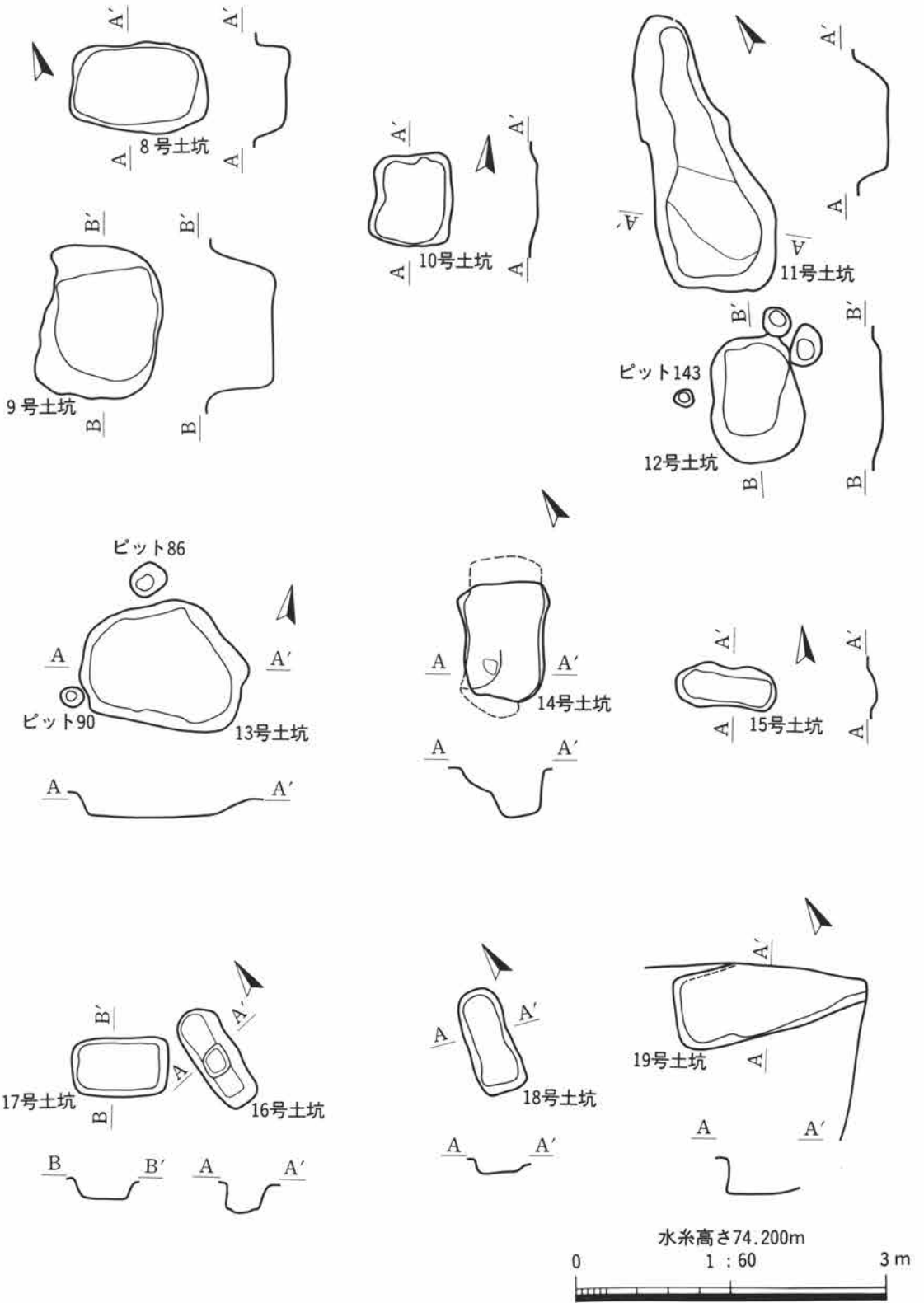
A区1号土坑

- 1 灰褐色土 浅間A軽石・黄褐色土ブロック・炭化物粒子を含む

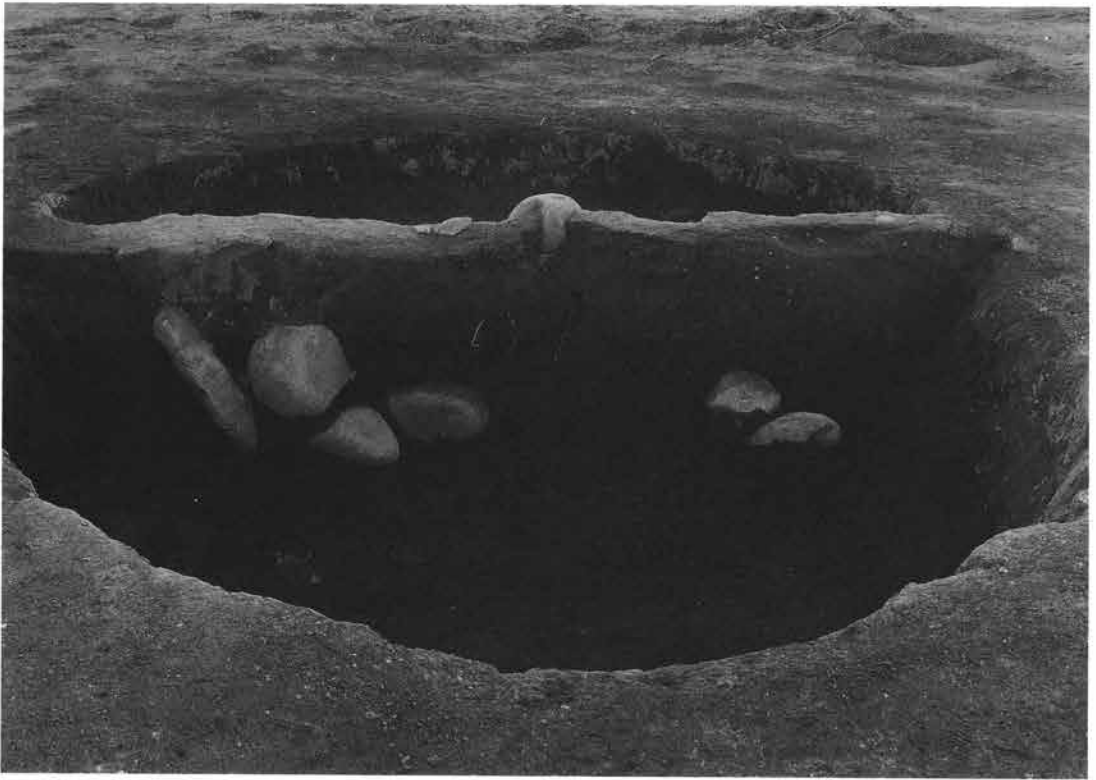
A区2号土坑

- 1 灰褐色土 浅間A軽石・黄褐色土ブロック・炭化物粒子を含む
- 2 浅間A軽石

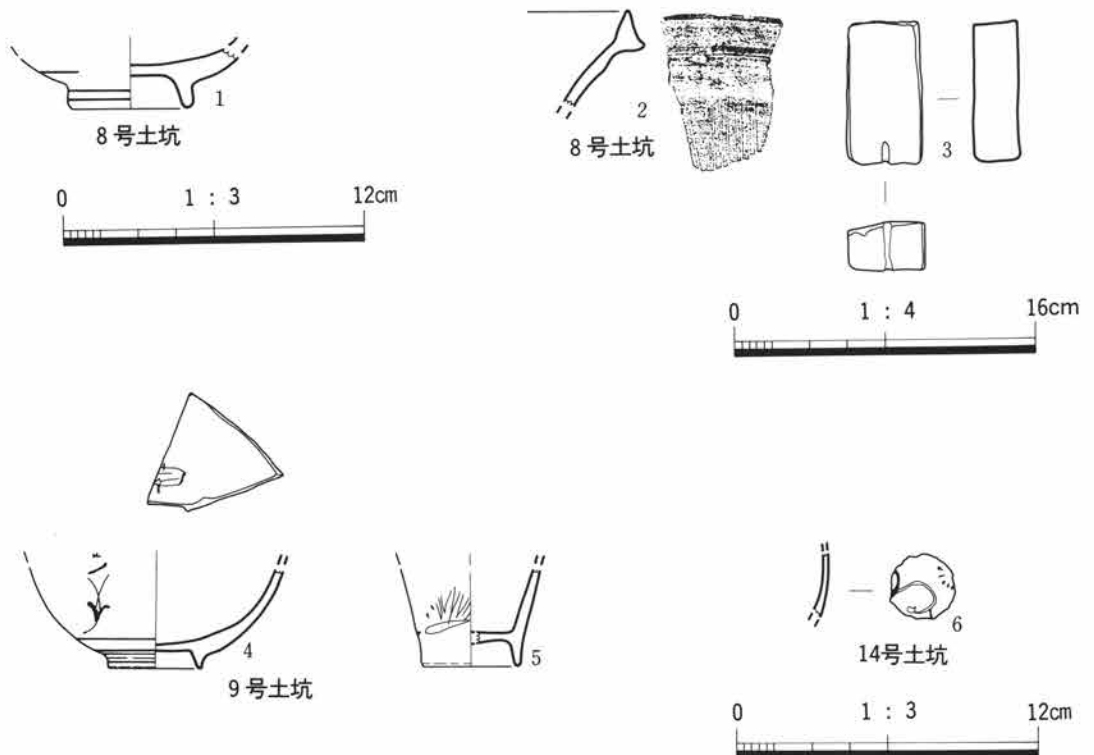
第28図 田端地区A区1~7号土坑



第29図 田端地区A区8～19号土坑



第30図 田端地区A区1号土坑



第31図 田端地区A区8・9・14号土坑出土遺物

田端A区第1～19号土坑（第28～31図）

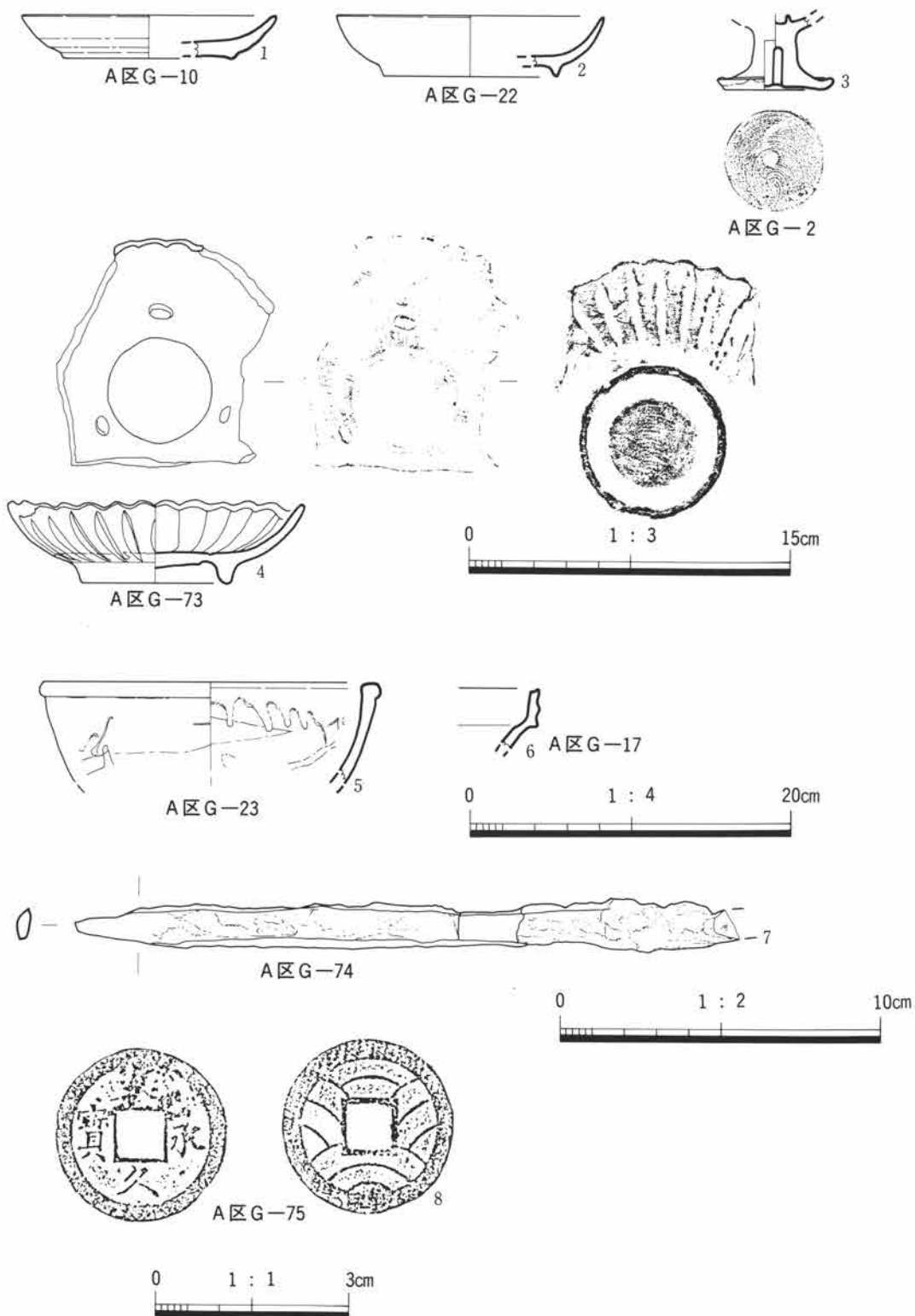
本地区の土坑は8・9・11・14号から遺物が出土しているが、その他の土坑からは遺物の出土がない。そのうち2号は最下層に浅間A軽石が堆積し、A軽石降下直後のものと考えられる。これ以外の土坑は覆土に浅間A軽石が含まれ、A軽石の降下以後に限定できる。

これらの土坑は調査中「イモ穴」と呼んでいたが、その性格は不明としておく。形状等は表の通りであり、確認面はすべて第2層である。

1号土坑は円形を呈し、中から石が出土している。3～6号土坑は本地区の北寄りに位置し、周辺にほぼ方形に巡るピット群がある。これらと組み合わせて考えると、近世以後のなんらかの建物の存在が推定できる。

第4表 田端地区A区 土坑一覧表

番号	大きさcm・深さcm	重複関係 [旧→新]	遺物	時期	備考
1	180 × 166・39	単独	なし	江戸	浅間A軽石を含む
2	130 × 68・27	単独	なし	江戸	浅間A軽石を含む
3	102 × 66・18	単独	なし		
4	184 × 64・29	単独	なし		
5	159 × 61・29	単独	なし		
6	156 × 74・18	単独	なし		
7	105 × 78・20	単独	なし		
8	129 × 86・30	単独	陶・磁器	江戸～	
9	146 × 112・68	単独	陶・磁器	明治	
10	88 × 74・5	単独	なし		
11	273 × 114・40	単独	陶・磁器	明治	
12	120 × 89・11	ピット2個	なし		
13	158 × 122・23	単独	なし		
14	155 × 74・86	単独	陶・磁器	明治	
15	96 × 44・9	単独	なし		
16	105 × 42・26	単独	なし		
17	92 × 57・16	単独	なし		
18	103 × 43・11	単独	なし		
19	185 × 74・24	単独	なし		



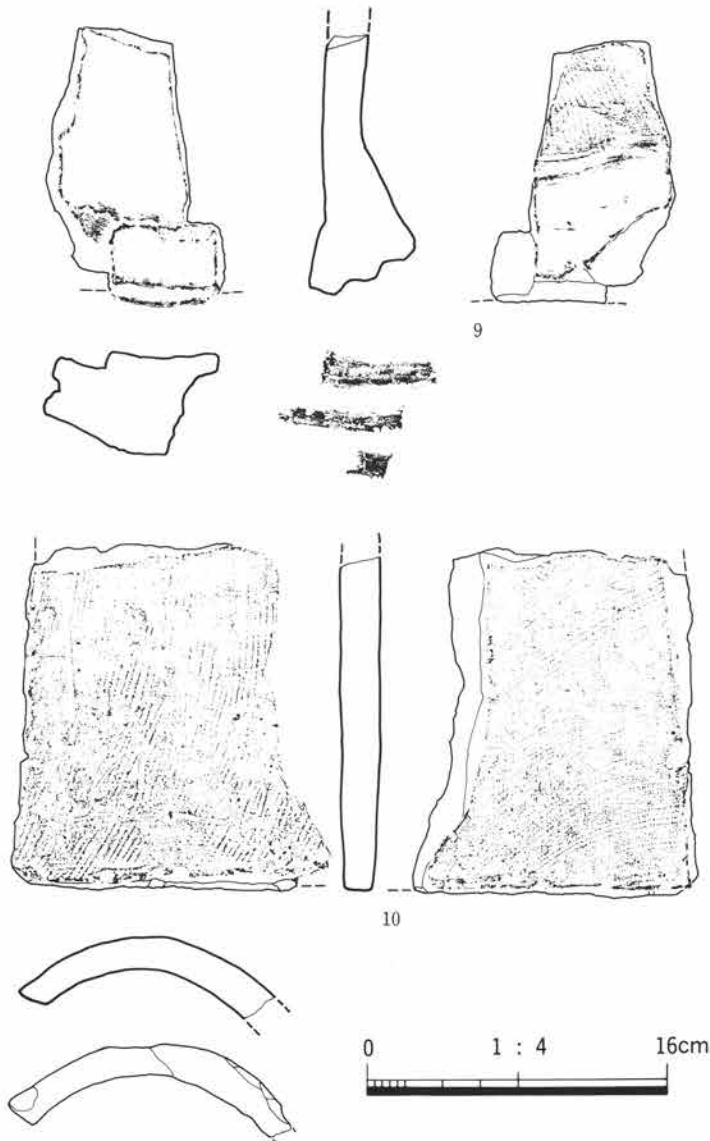
第32図 田端地区A区遺構外出土遺物(1)

遺構外出土遺物

以下、調査区別に出土遺構の特定できない遺物・採集資料を、遺構外出土遺物として報告する。遺構出土の遺物で同様のものがある場合や、小片であるものは割愛し、全体の形状の示せるもの、特徴のある遺物を掲載した。

田端地区A区遺構外出土遺物（第32・33図、図版26）

田端地区A区では陶器・磁器の出土が多い。また不明鉄製品、貨幣、布目のついた軒平瓦（三重弧文）・丸瓦が出土している。



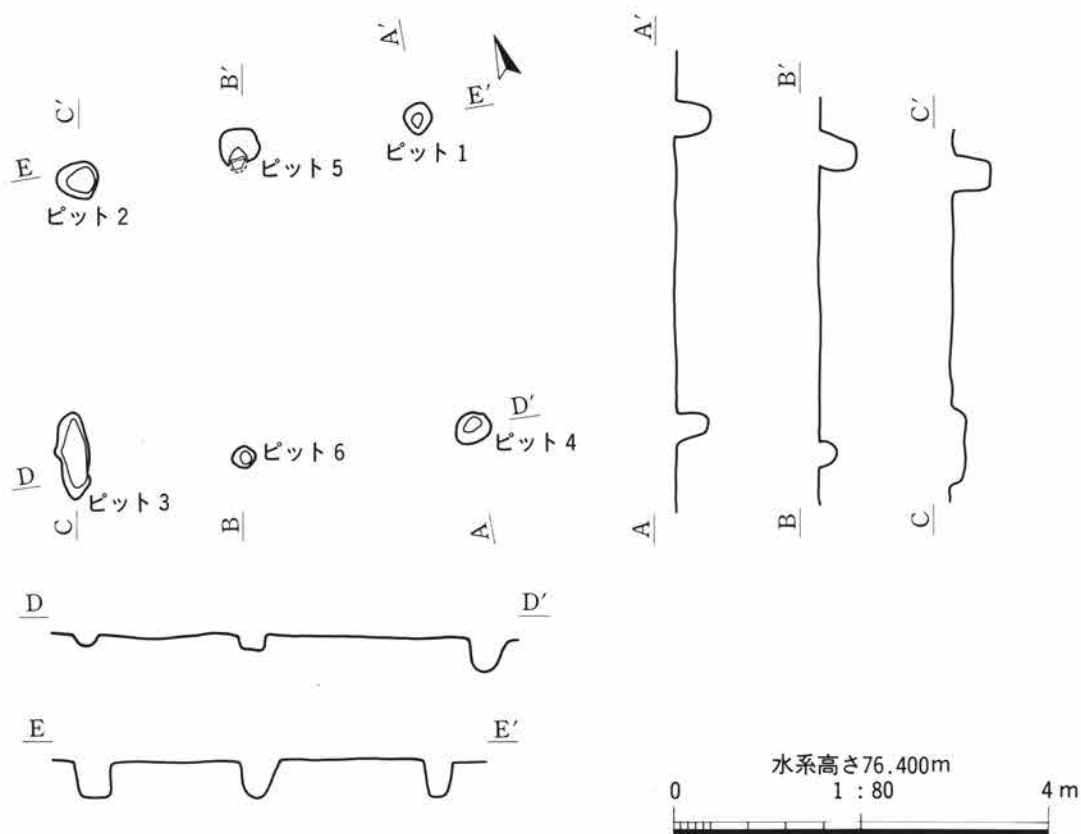
第33図 田端地区A区遺構外出土遺物（2）

3 田端地区B区

田端地区B区第1号掘立柱建物跡 (第34図)

L-Mライン・71km305m付近で検出した。確認面は第2層である。周辺の住居跡と重複しており、ピットの掘り込みはこれらよりも新しい。南西隅のピットは不整形で、南北方向に長い。他のピットは比較的揃っているが、南側中央のピットのみ規模が小さい。全体に台形を呈する。本掘立柱建物跡から南側は大小の掘り込みが多く、土坑・ピットとして番号を付けたが、2棟分を推定したにとどまる。各ピットの計測値およびピット間の計測値は表の通りである。

遺物の出土はない。時期は検出層位から、中世以降に属すると考えられる。



第34図 田端地区B区1号掘立柱建物跡

第5表 田端地区B区 第1号掘立柱建物跡 計測値表

長軸方向	桁行cm	梁行cm	桁行柱間cm	梁行柱間cm	番号	模		
						上バcm 長径×短径	下バcm 長径×短径	深さcm
N116°E	1-2 : 362	1-4 : 331	1-5 : 196					
	3-4 : 423	2-3 : 294	5-2 : 167					
		5-6 : 315	3-6 : 181		1	34×27	15×12	36
			6-4 : 243		2	43×40	30×22	39
					3	94×30	73×28	15
					4	39×32	20×12	34
					5	42×41	27×17	41
					6	23×21	13×11	15

※計測値は1/20原図から起こした数値である。柱穴間の距離は心車で計測した。

田端地区B区第2・3号掘立柱建物跡（第35図）

K-Mライン・71km300～71km310m付近で検出した。確認面は第2層である。第2・3号掘立柱建物跡は調査時点でもその存在が不確実とみられ、ピット群の組み合わせは整理の過程で推定したものである。各ピットの計測値、ピット間の距離等は割愛した。西側を第2号、東側を第3号とした。

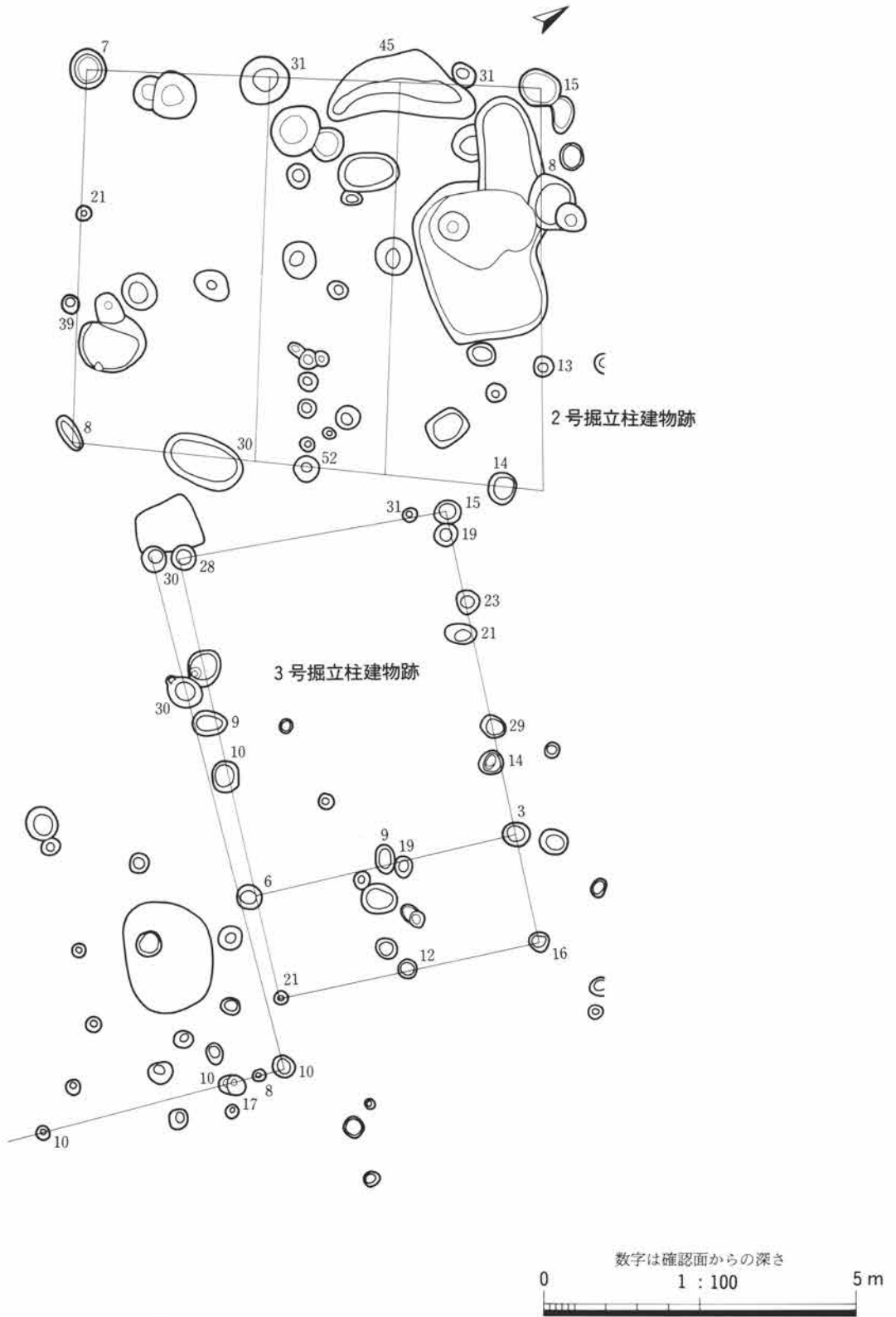
第2号は南北方向に長く、第3号は東西方向に長い。第2号の南東隅のピットは214号土坑と重複し、このピットは土坑よりも新しい。214号ピットからは刻書のある灰釉陶器が出土している。第2号の北東部には不整形の土坑があり、214号土坑の北側にも216号土坑が位置する。216号からは布目のついた瓦が出土している。西側の552・556・559号ピットは他のピットに比較してしっかりしており、本掘立柱建物跡の本体は、西側のC区内に続く可能性がある。西側のピット列から遺物は出土していないが、検出層位から、中世以降に属するものと考えられる。

第3号は第2号の東側に接するが、第3号を構成するピット群も同じ層位から検出している。ピットの規模は比較的揃っており、30～50cmの大きさである。第3号は第1号とほぼ同様の長軸方向をもち、同じ頃に設営されたものか。

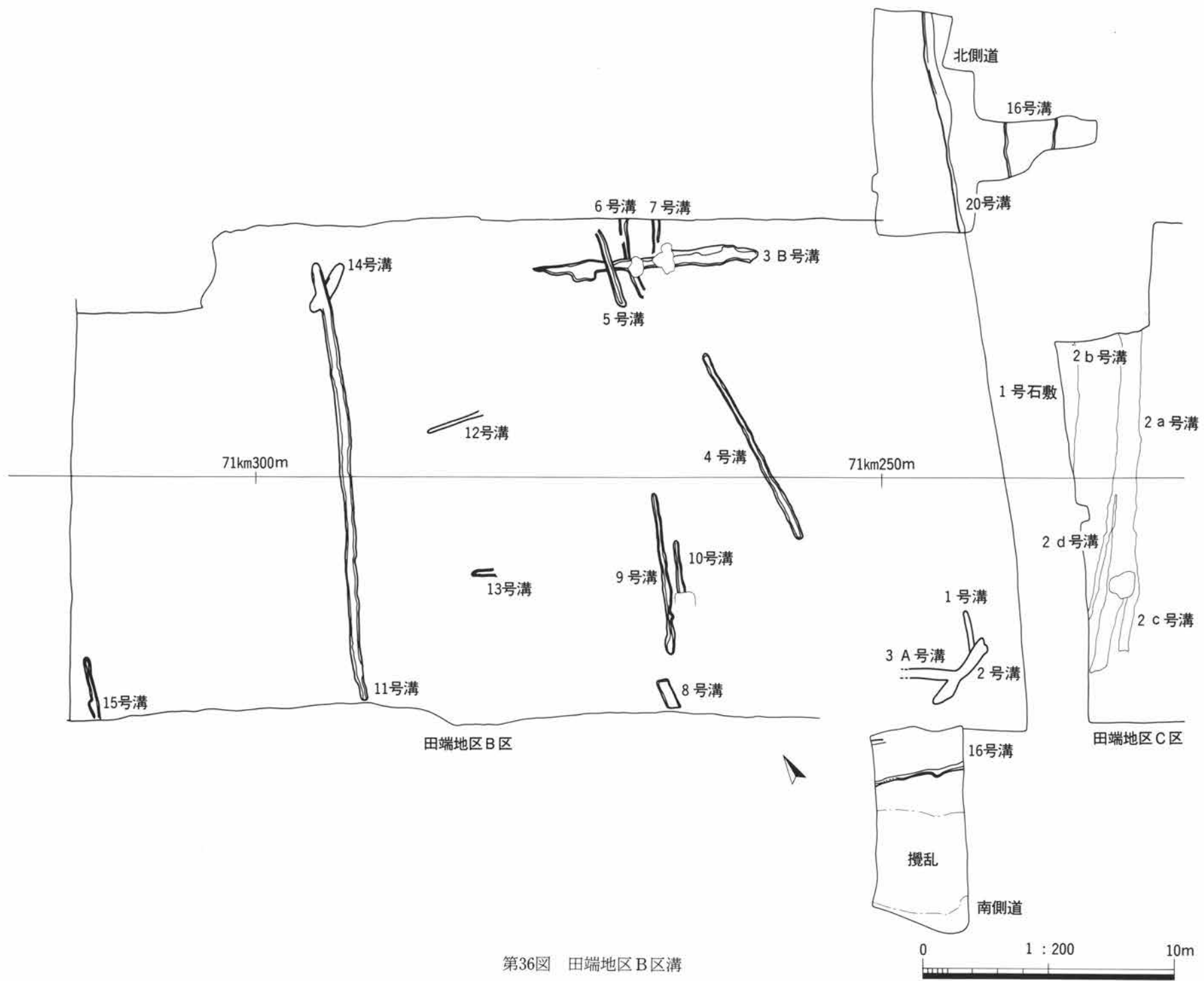
以上2棟のほか、第3号の南側にもいくつか直線的にピットをつなぐ線を設定できるが、調査区外に延びる線となってしまうため、ここでは省略する。

田端地区B区溝

本地区では総計23本の溝を検出したが、それらのうち近世の溝と考えられるのは3B・5・6・7・8・9・10・11・15号溝の9本である。また、中世以降とみられるものは4・16・17・18・19号溝の5本、平安時代の溝とみられるのは1・2・3A・12・13・14・21・22号溝の8本である。20号溝は奈良時代の溝と考えられる。近世の溝はほぼ南北方向に向かって走り、全体に規模が小さい。奈良・平安



第35図 田端地区B区2・3号掘立柱建物跡



第36图 田端地区B区溝

時代の溝はこれらよりもやや規模が大きく、不整形を呈する。

4号溝は7号溝に連なる可能性が高く、中世というよりも近世の溝かもしれない。9・10号溝と11号溝に挟まれた地点の南側はとくに近世以降の土坑を多く検出し、これらの溝群と土坑群との密接な関連を窺わせる。

12号溝は平安時代の住居跡から延びる溝で、他の溝とは性格が異なるようである。ただし、住居跡との同時期性は確認できていない。さらに13号溝は44号住居跡とした竪穴状遺構の南辺に沿って検出し、住居跡の内部施設の可能性がある。

南側道の16～21・22号溝は平安時代から中世にかけて掘削された溝で、互いに重複しており、これらは田端地区B区の乗る微高地の縁辺に位置するとみられる。

16号溝はB区南側道から北へ折れ曲がり、A区1号石敷を通り、北側道の20号溝の東を北へ向かうとみられる。

第6表 田端地区B区 溝一覧表

番号	幅cm	長さm	深さcm	重複関係 [旧→新]	遺物	時期	備考
1	40	3.3	5～7				N22°E
2	90～110	6.5	19～31		灰釉陶器	平安	N71°E
3A	75～90	4.1	10～12				N124°E
3B	60～140	17.7	22			江戸18C～	N119°E、浅間A軽石含む
4	40～60	16.7	13～18	13住→4溝	平安土器2点、刀子	中世?	N6°E、浅間B軽石含む
5	40～55	6.4	20～24	3溝→5溝	陶器・磁器	江戸	N16°E、石敷きあり
6	30～66	6.5	18	6溝→58・59坑	陶器椀	江戸	湾曲
7	38～53	2.7	10		陶器小片、平安土器		
8	90～100	2.5	18		陶器小片、平安土器	平安～江戸	N11°E
9	30～70	12.9	12～24			江戸～	N27°E、浅間A軽石含む
10	26～56	4.2	12～26			江戸?	N28°E
11	50～80	35.3	18～40		鉄滓・灰釉陶器・陶・磁器多数	江戸	南半でN28°E
12	23～30	4.6	10			平安～中世	N105°E
13	45～53	2.0	3～5			平安	
14	90～115	4.5	18	14溝→11溝		平安	湾曲
15	30～45	4.9	3～10			江戸?	N23°E
16	340～400	延べ22.0	50～70	17・21溝→16溝・159住→16溝	瓦多数	中世～	A区1号石敷き含む、浅間B軽石を切る、下部に石敷き

17	42～138	7.1	23～69	17溝→16溝・163遺構→17溝		中世～	浅間B軽石を切る
18	100～130	7.2	44～56	18溝→19溝		中世～	浅間B軽石を切る
19	90～115	4.3	22～44	18溝→19溝		中世～	
20	—	17.5	110	20溝→157・158・161・162住	奈良・平安土器多数	奈良平安	東の谷側に柵列あり
21	—	7.2	22	163住→21溝→16溝	瓦・平安土器30片以上 羽口・羽釜・灰釉陶器	平安	
22	220～340	7.2	70	22溝→163遺構	羽釜・小皿	平安	



第37図 田端地区B区5号溝（1）

田端地区B区第3B・4～11号溝

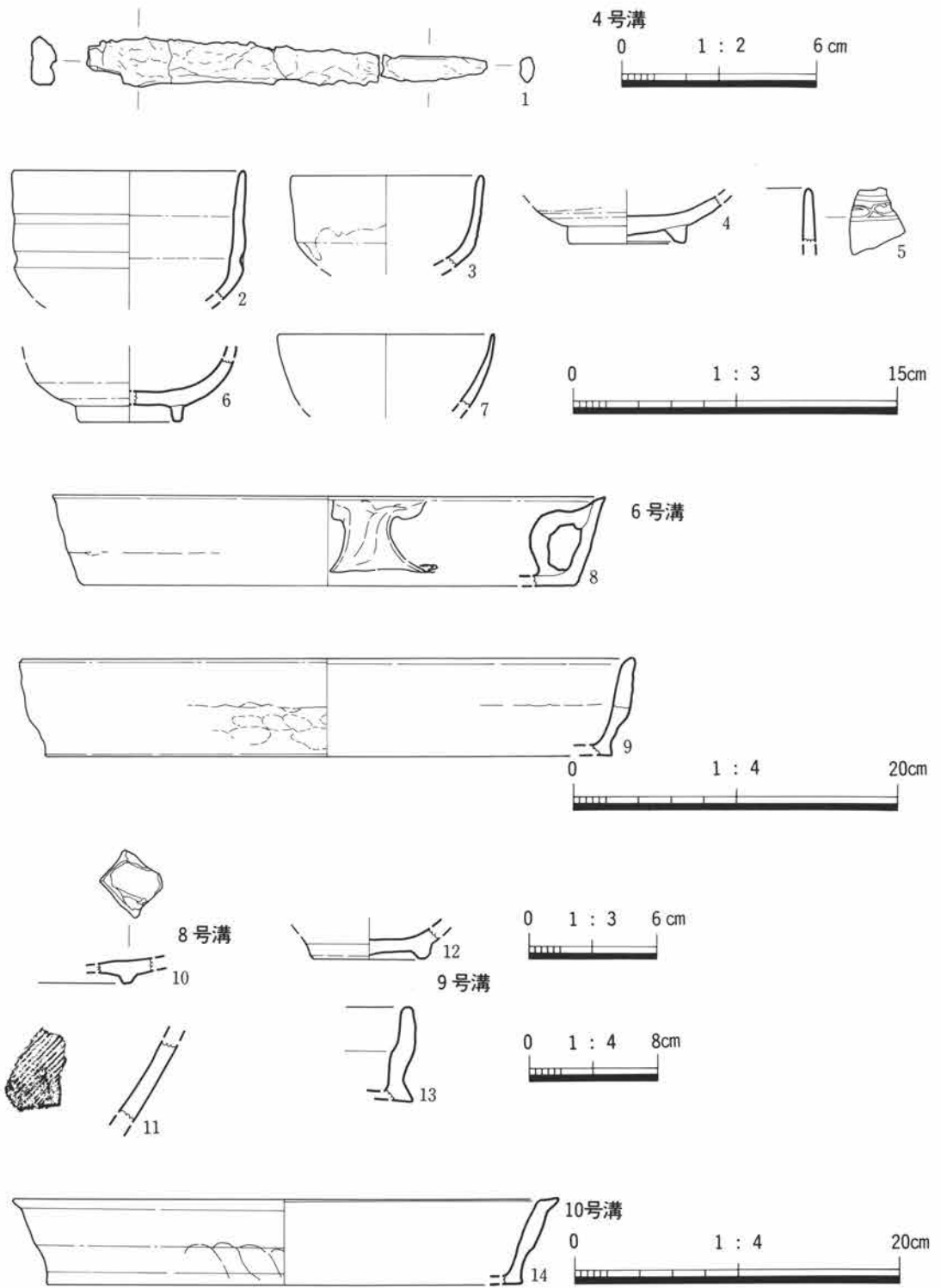
（第36～46図、図版27～30）

いずれも近世以降と考えられる溝で、4・7号は中世までさかのぼる可能性がある。これらのうち、5・6・9・10・11号溝はほぼ南北方向に走り、3B号溝はこれと直交する東西方向の走行をもつ。とくに5号・11号溝からは多量の陶器・磁器が出土し、本遺跡の近世を代表する遺構である。

9・10号溝と11号溝との中間地域ではとくに多数の近世土坑を検出し、11号溝の西側では近世土坑が少なく、小さな穴を多数検出している。これらのことから、これら3本の溝は当該時期にB区の内部を区切る役割があったこと、そして11号溝を境に東西に区切る区画の存在を推定しておきたい。

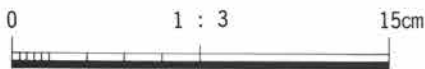
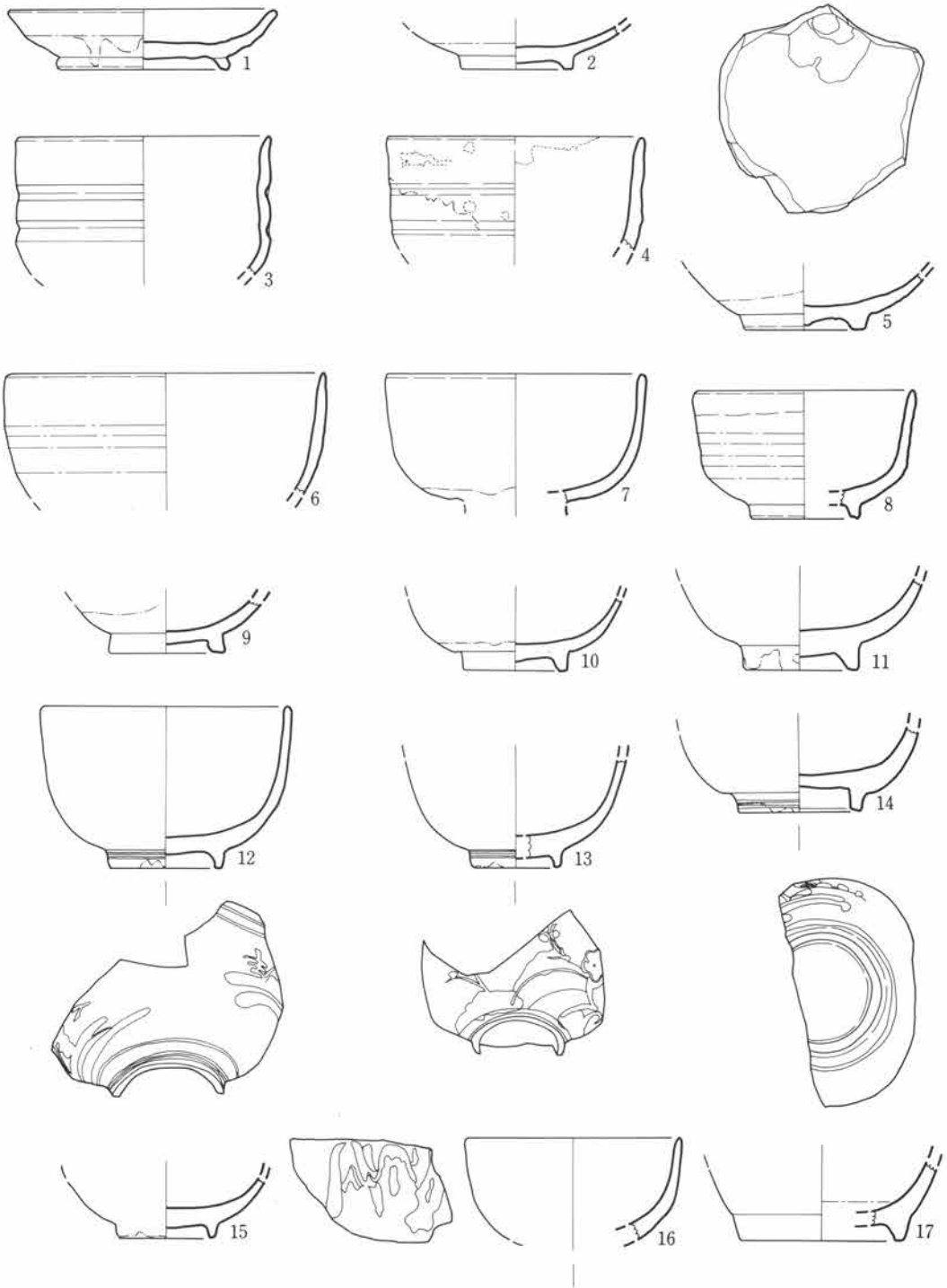


第38図 田端地区B区5号溝(2)

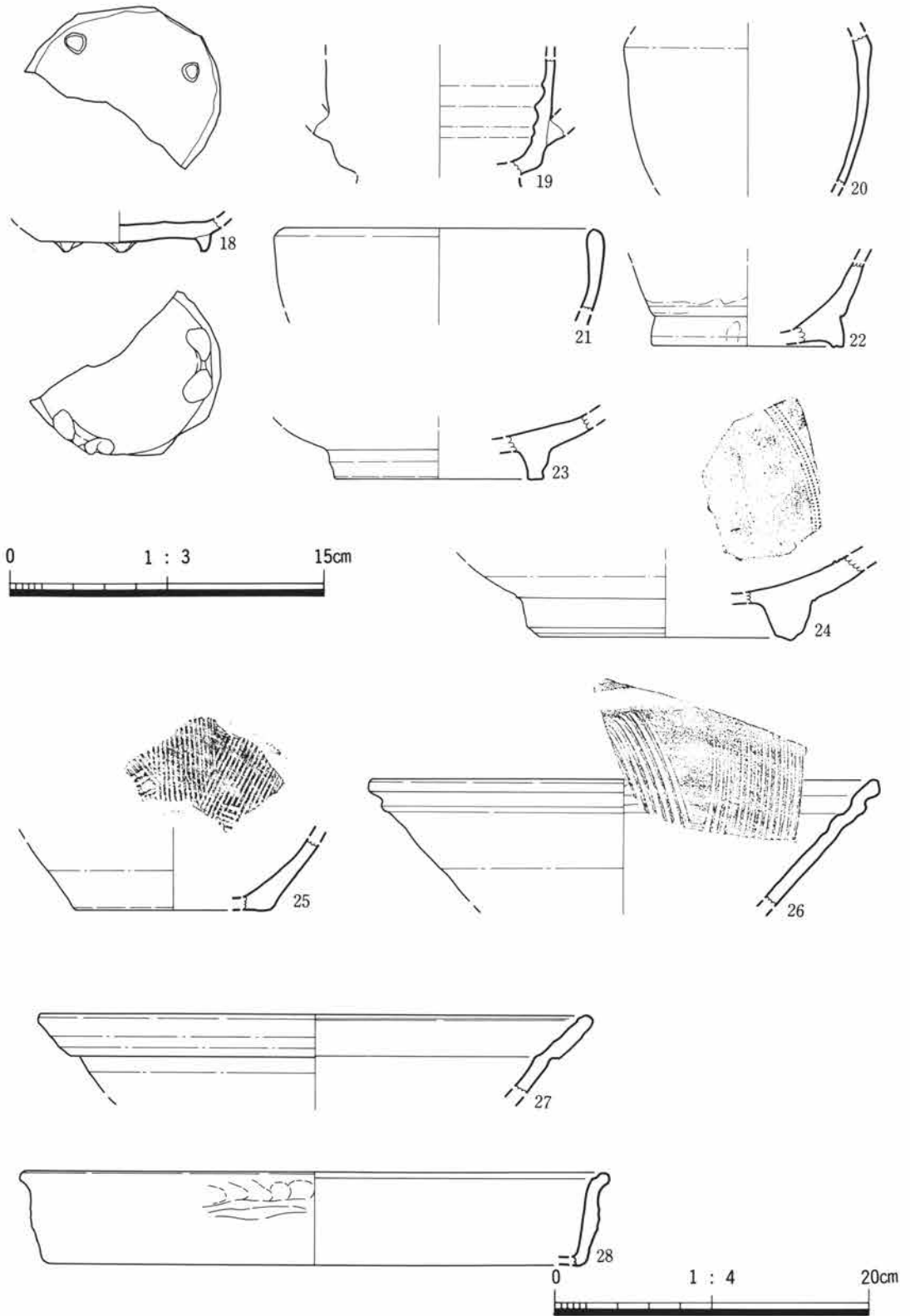


1 : 4号溝、2~9 : 6号溝、10・11 : 8号溝、12・13 : 9号溝、14 : 10号溝

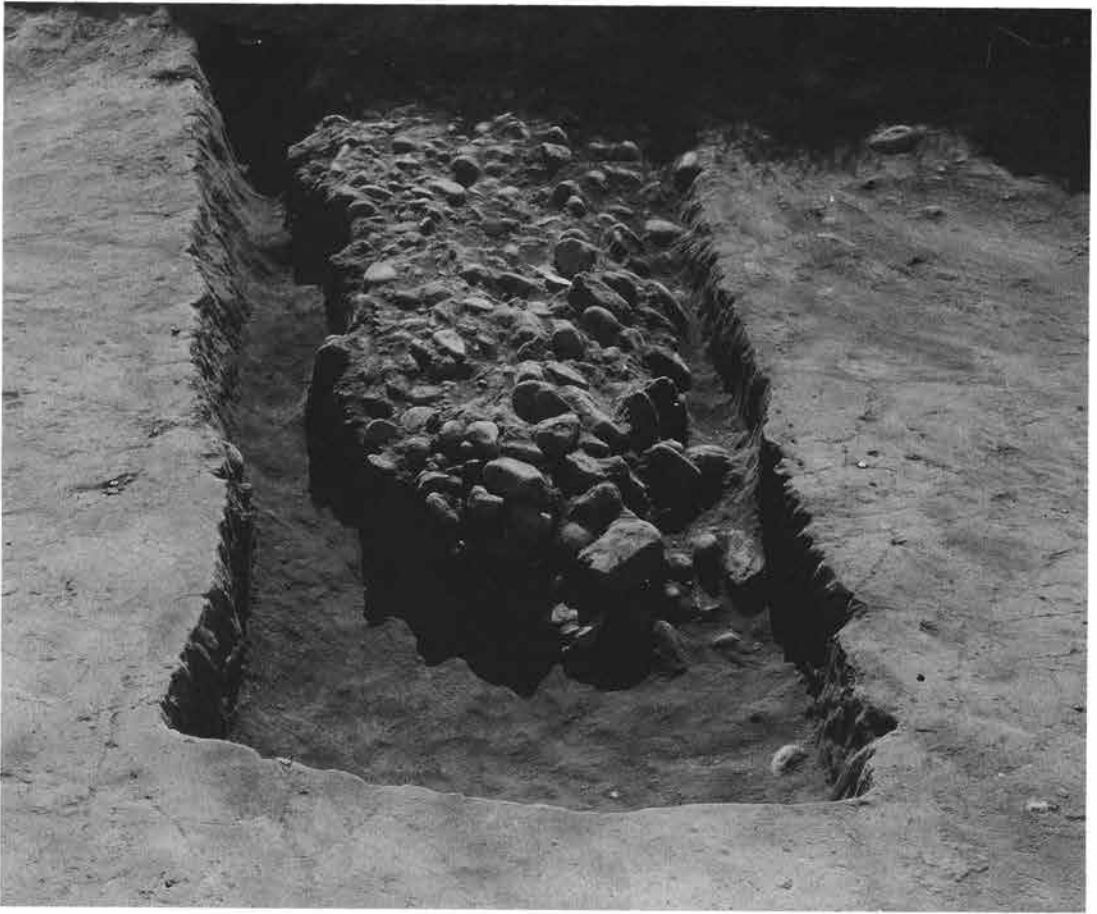
第39図 田端地区B区4・6・8・9・10号溝出土遺物



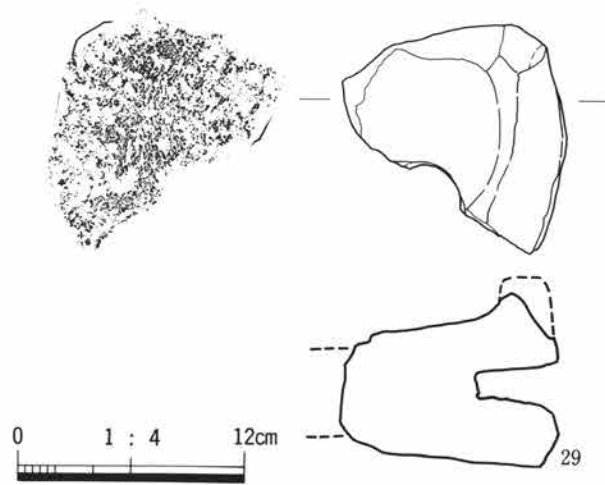
第40図 田端地区B区5号溝出土遺物(1)



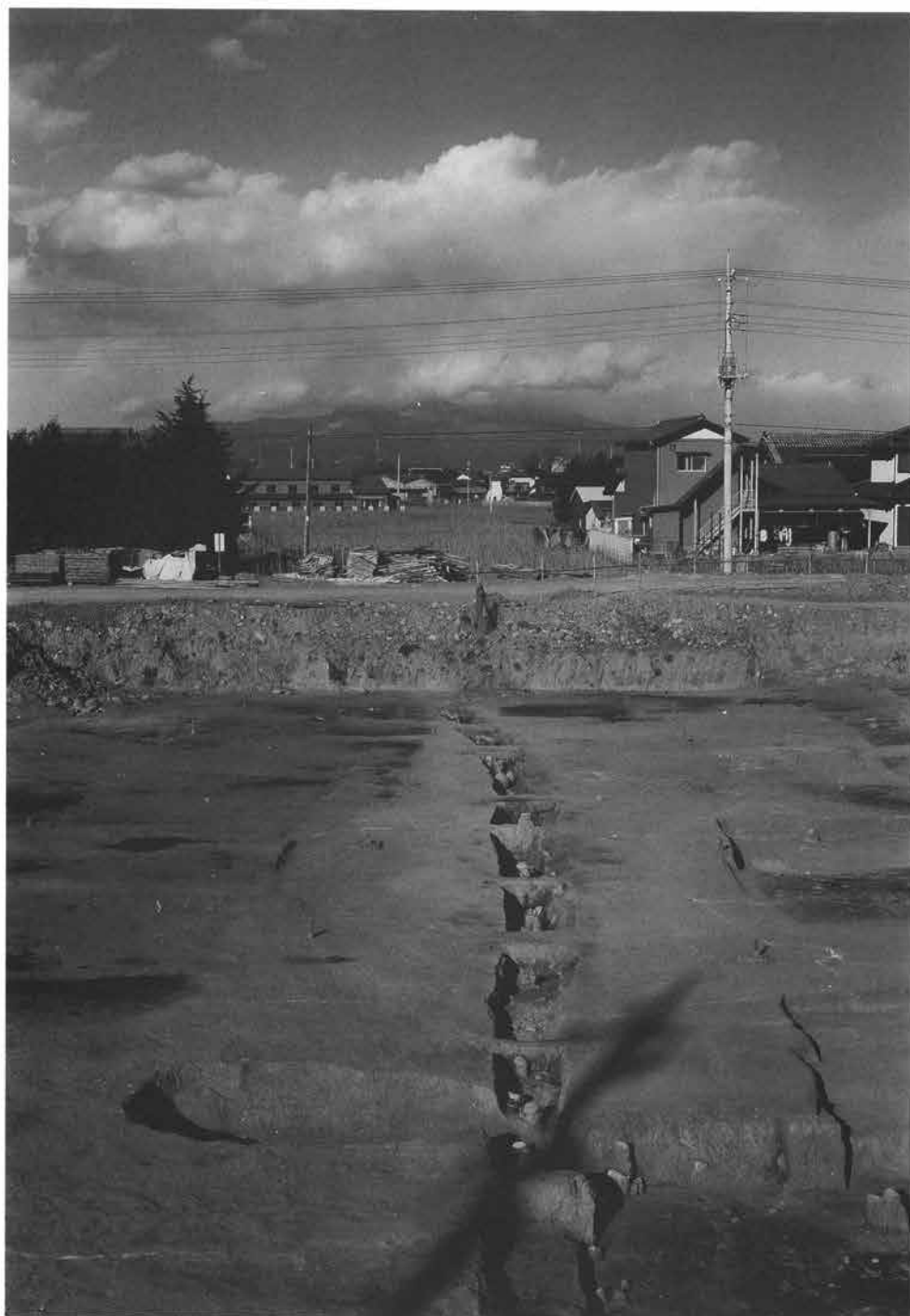
第41図 田端地区B区5号溝出土遺物(2)



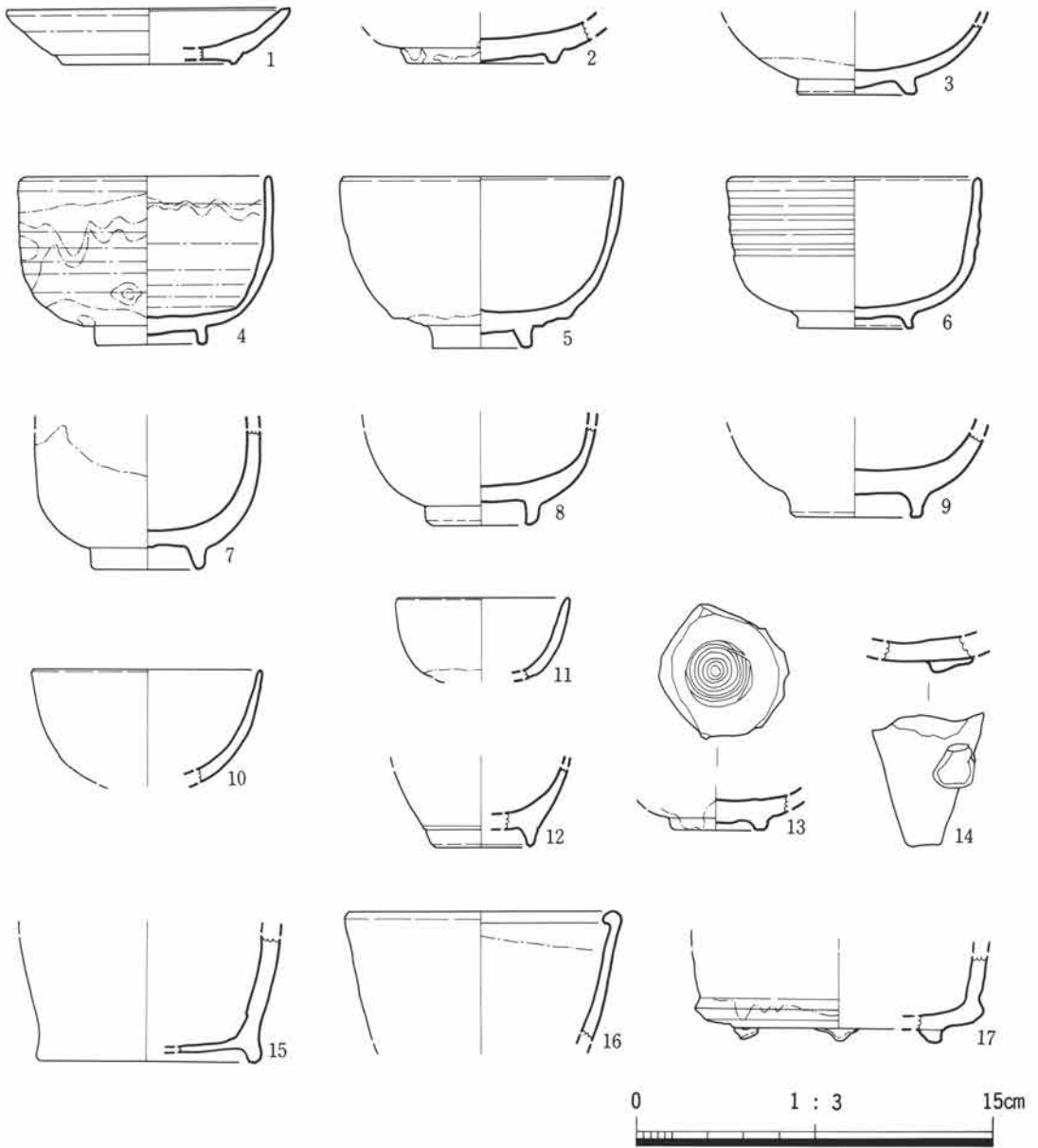
第42図 田端地区B区8号溝



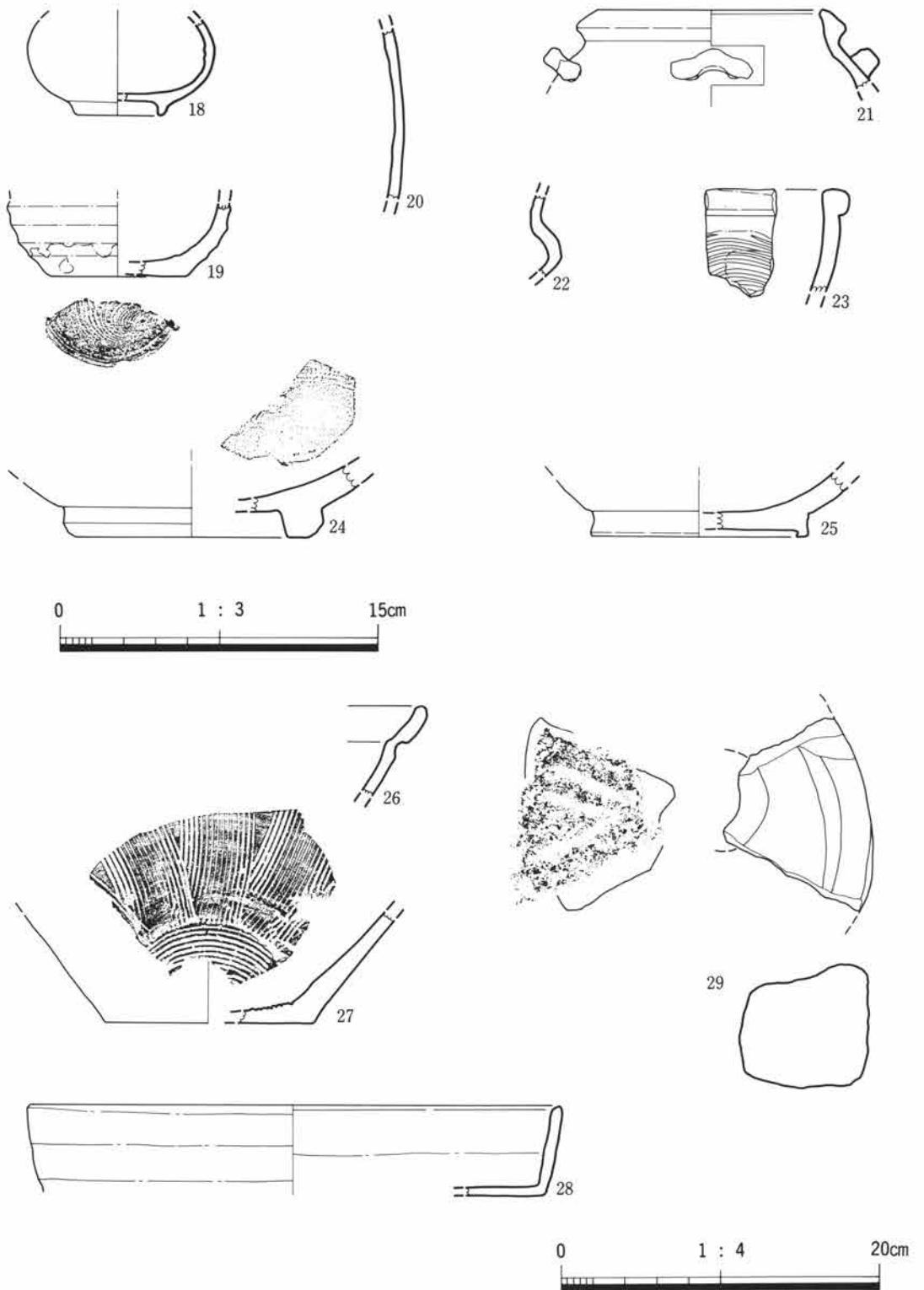
第43図 田端地区B区5号溝出土遺物(3)



第44図 田端地区B区11号溝



第45図 田端地区B区11号溝出土遺物(1)



第46図 田端地区B区11号溝出土遺物(2)

田端地区B区第15号溝（第36図）

Jライン・71km313m付近で検出した。B区の南西隅に位置する。確認面は第2層である。11号溝とは約21m離れて、ほぼ同様の走行を示す。幅は9・10・11号溝と同様であり、時期も同じころと見られる。遺物は出土していない。

田端地区B区第16号溝（第47～59図、図版31～35）

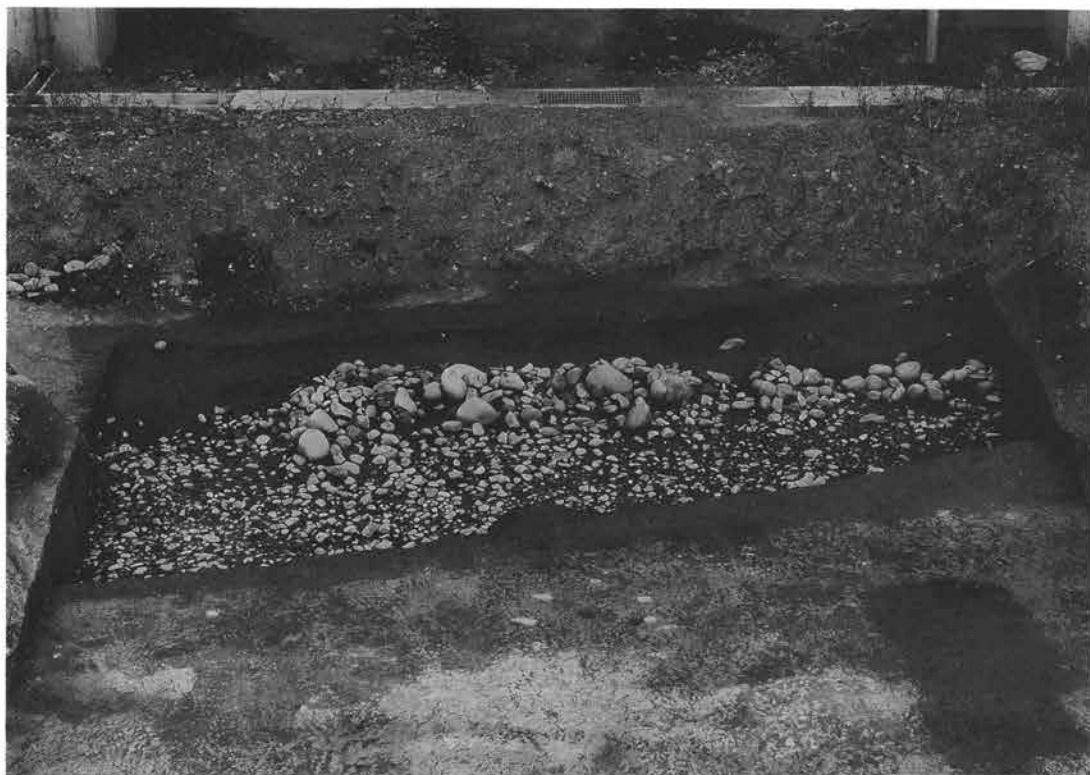
南側道のH-Iライン・71km247m付近、北側道のRライン・71km240m付近で検出した。確認面は第2層で、浅間B軽石を含む層を切って掘削されている。両側道の遺構とA区検出の1号石敷の三者が同一の遺構の一部であることは、本地区の第5次調査で積極的な根拠をもつに至った。つまり、三者は同一の層位から掘り込まれていること、ほぼ同様の覆土で埋没していること、底部に多数の石を検出していること、南北両側道では同様の瓦を出土していることなどがその理由である。三者が同一の溝であるとすれば、本溝は南西部のA区とB区との境付近で直角に折れ曲がることになる。また、本溝がB区を限る溝とすれば、その北限は調査直前に存在していた東西方向の道路とみることができるとする。本溝は調査直前まで機能していた生活道路の直下に位置する。溝の底面の標高は南側道、A区1号石敷ともほぼ同じである。

遺物は南側道で多量に出土した。硯に転用された灰釉陶器、羽釜、砥石のほか、布目のついた瓦が多数出土しており、軒瓦も出土している。瓦については第5分冊で詳しく考察される。

本溝の時期は掘り込み層位から、中世以降と見られる。



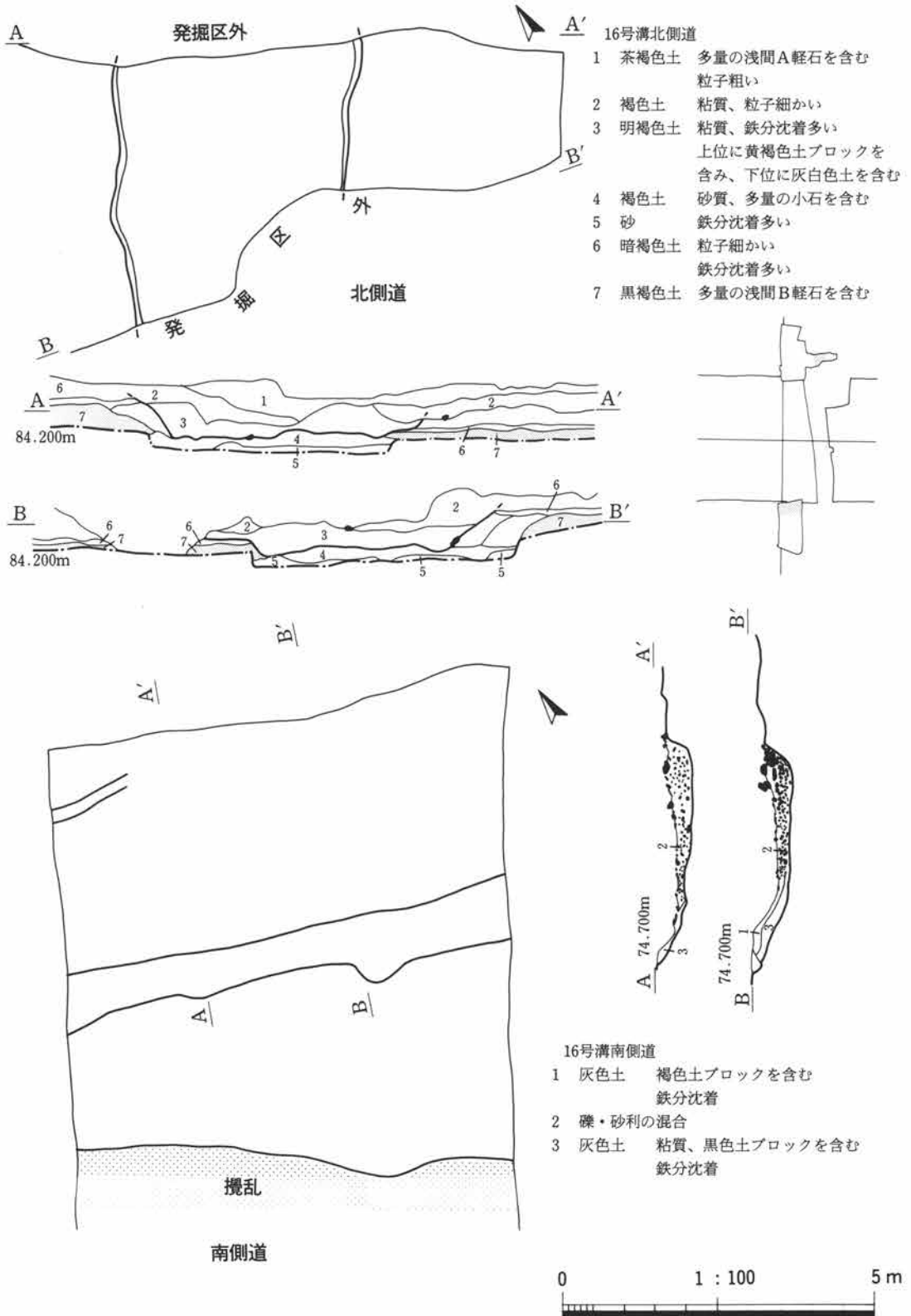
第47図 田端地区B区南側道16号溝（1）



第48図 田端地区B区南側道16号溝（2）



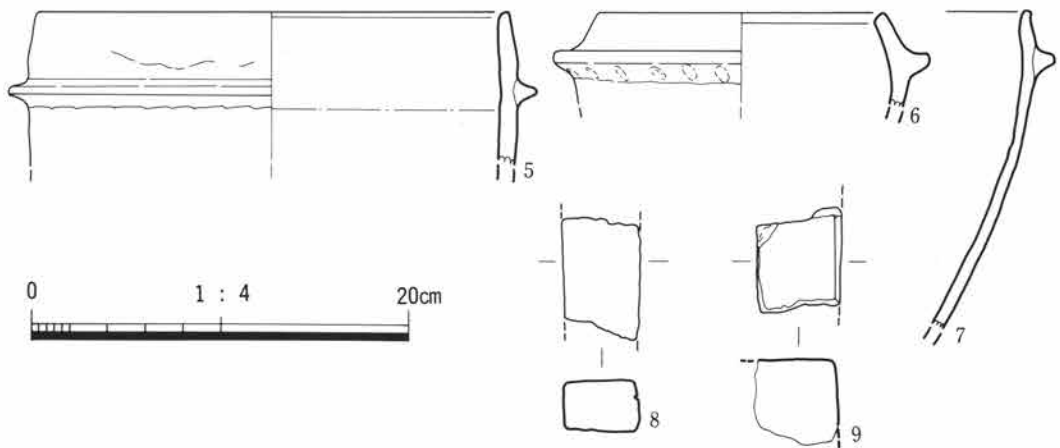
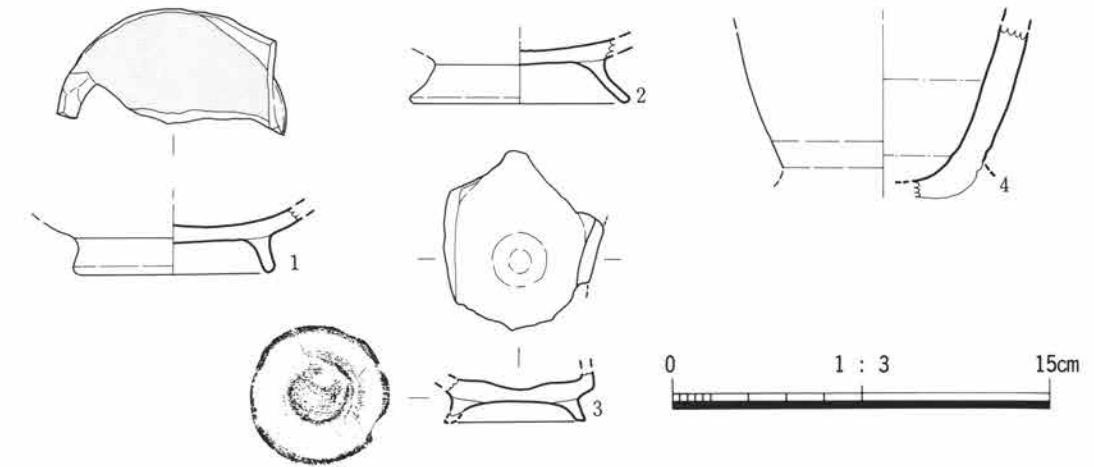
第49図 田端地区B区南側道16号溝（3）



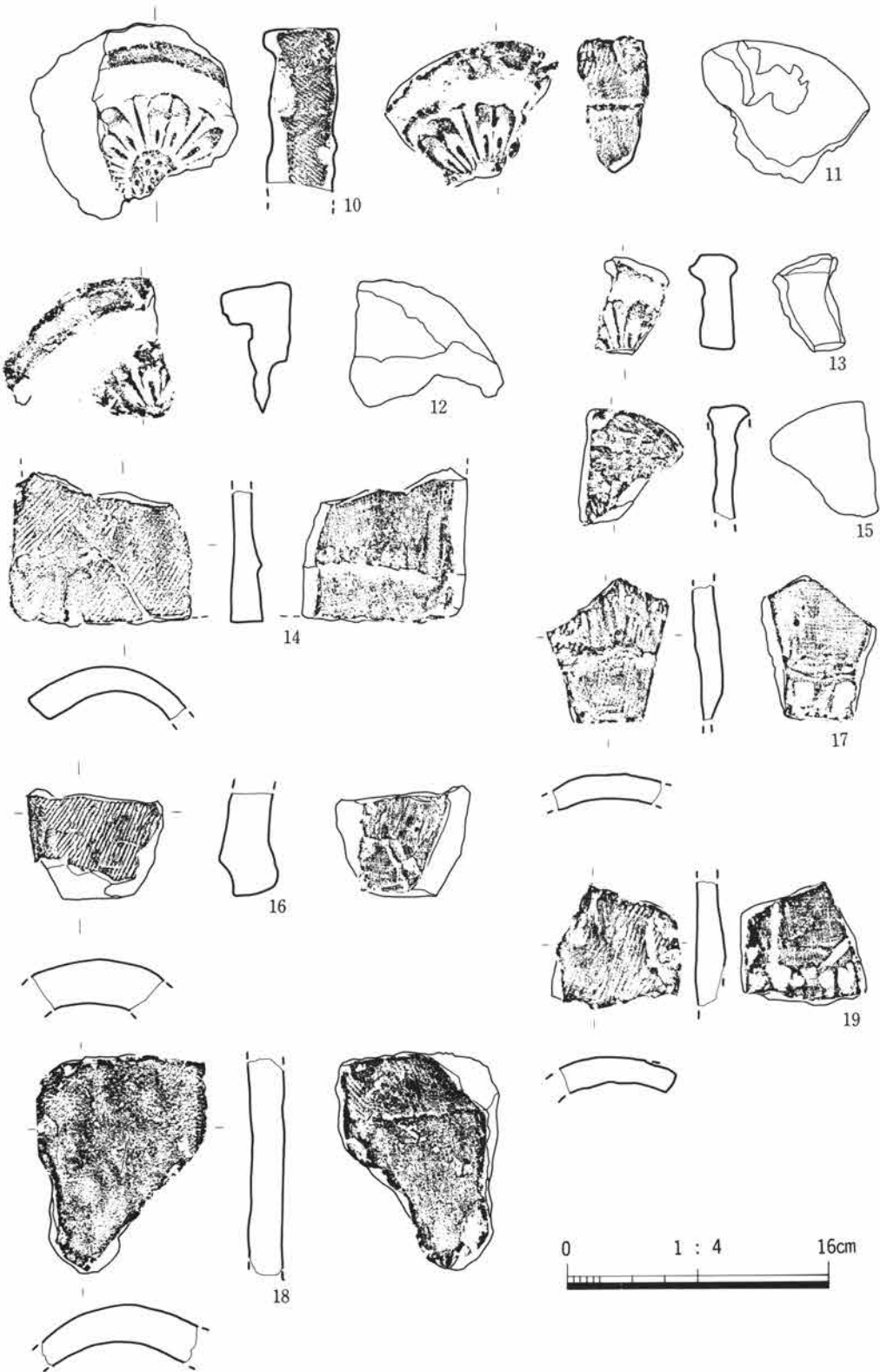
第50図 田端地区B区16号溝



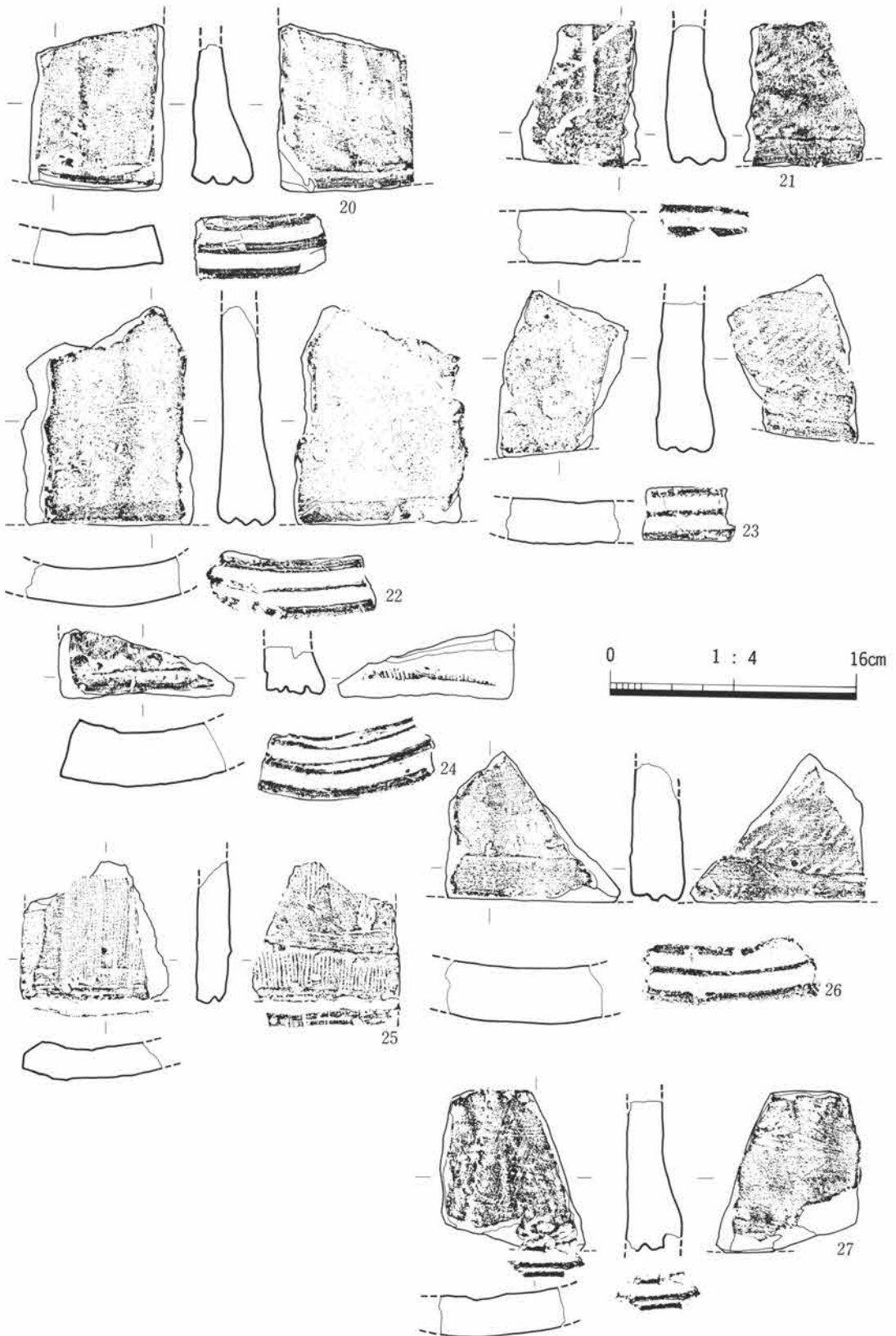
第51図 田端地区B区
北側道16号溝 (4)



第52図 田端地区B区16号溝出土遺物 (1)



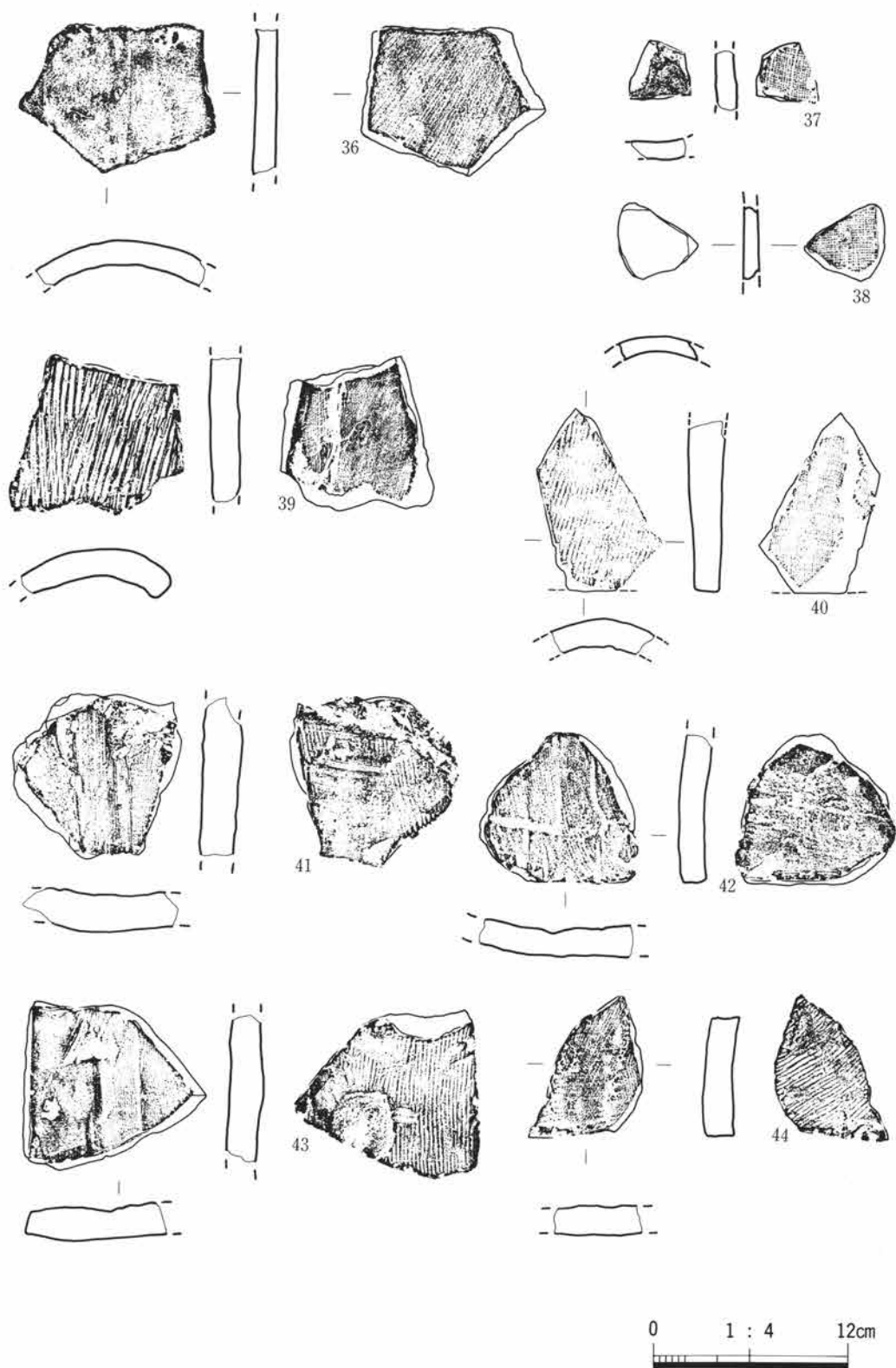
第53図 田端地区B区16号溝出土遺物(2)



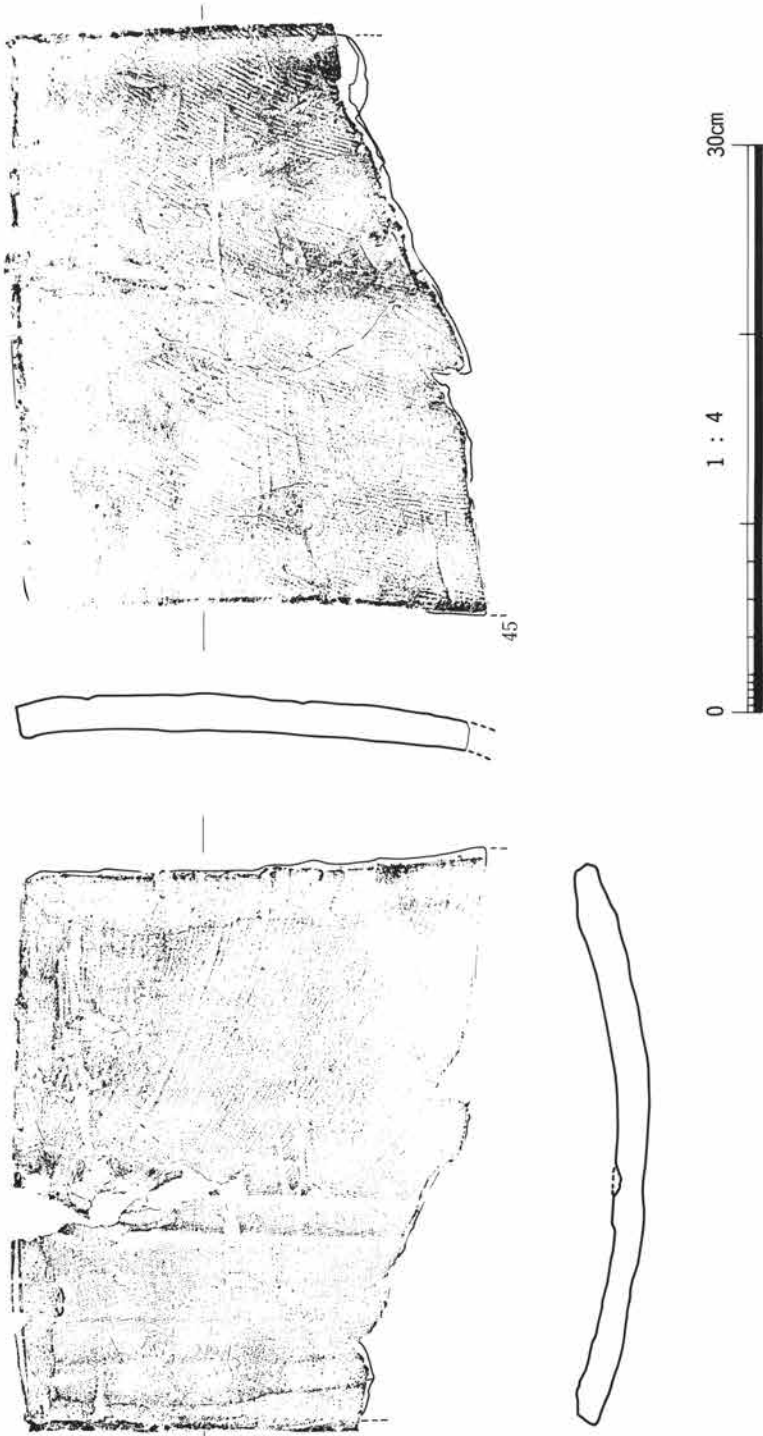
第54図 田端地区B区16号溝出土遺物（3）



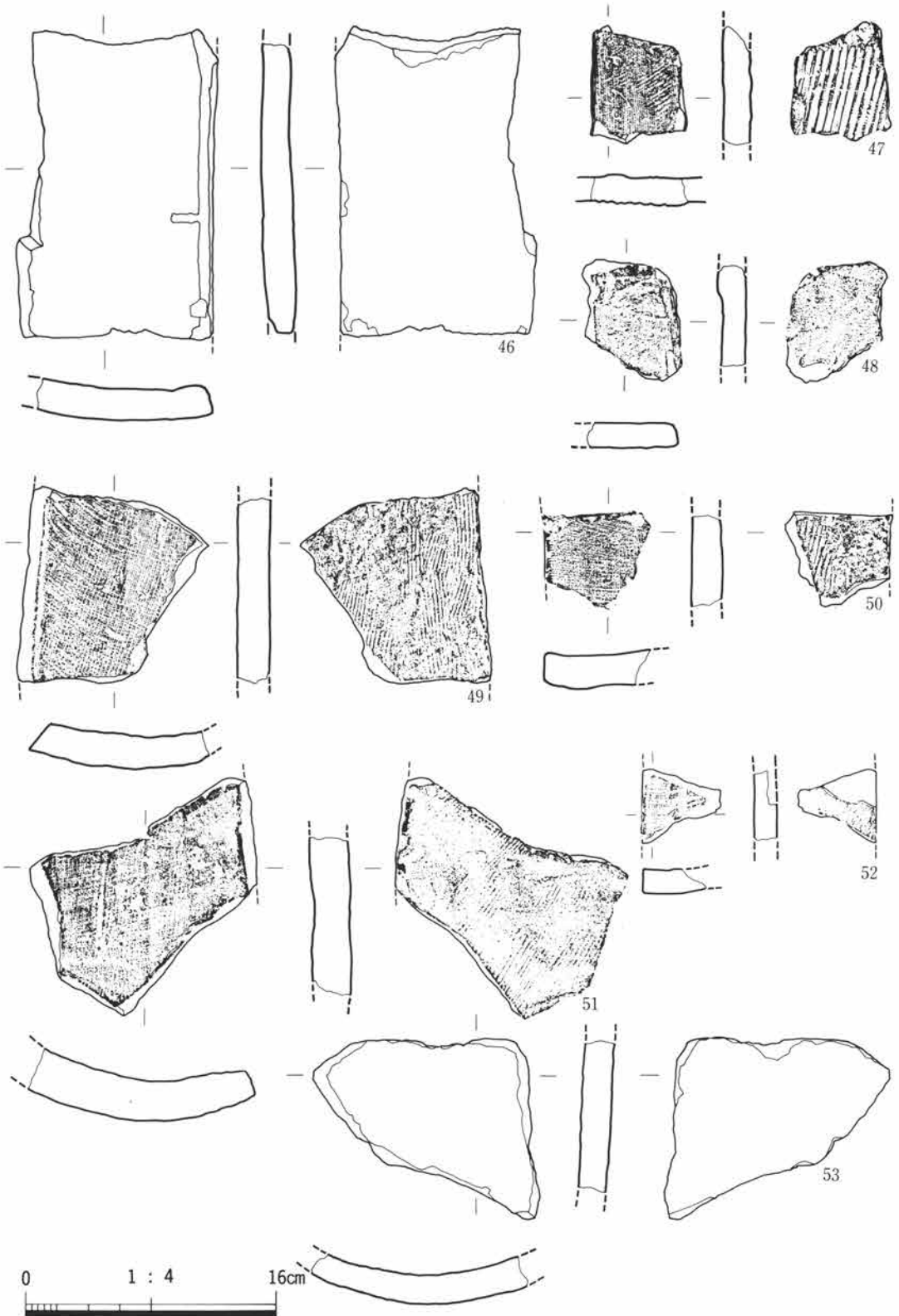
第55図 田端地区B区16号溝出土遺物(4)



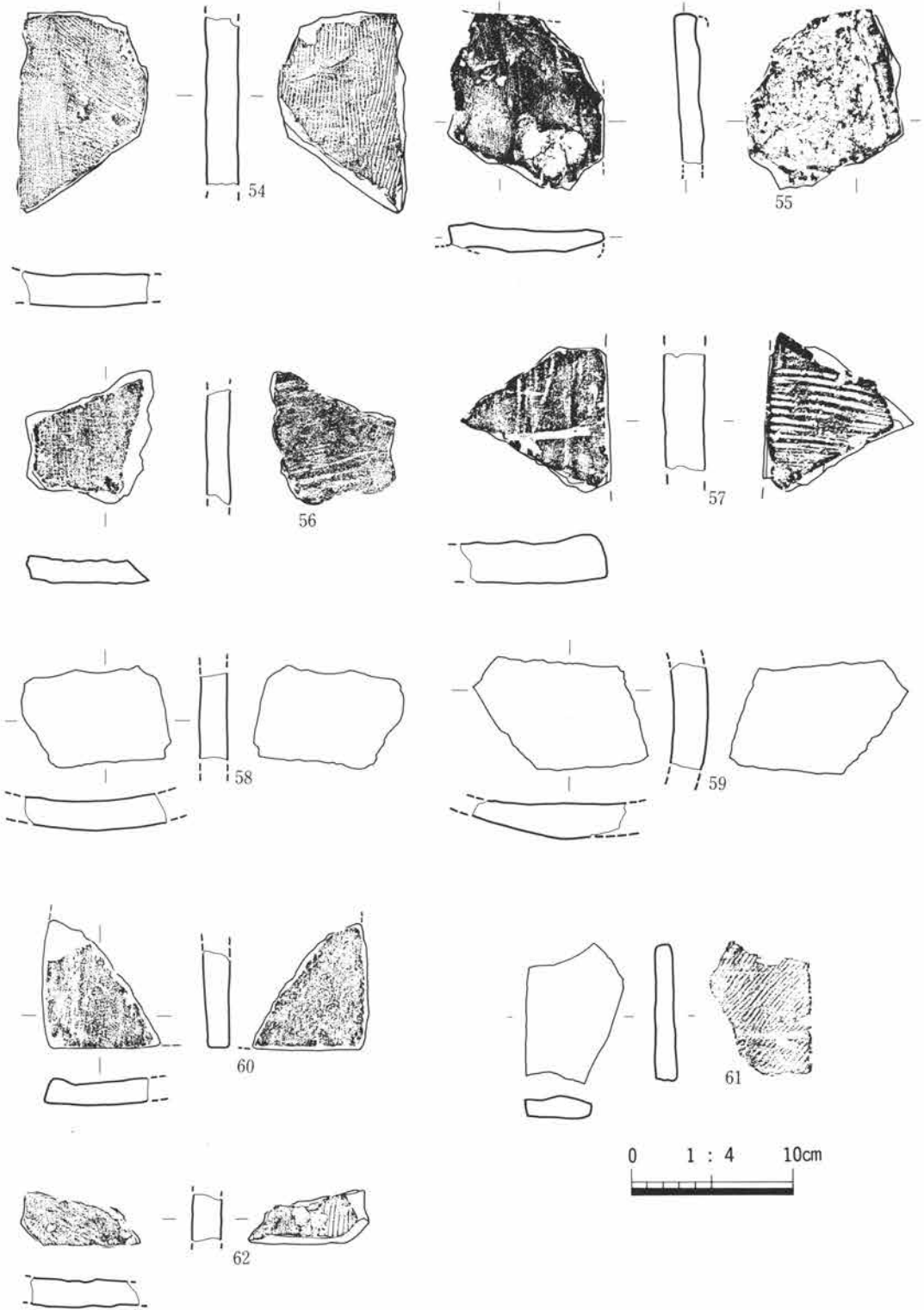
第56図 田端地区B区16号溝出土遺物（5）



第57図 田端地区B区16号溝出土遺物(6)



第58図 田端地区B区16号溝出土遺物(7)



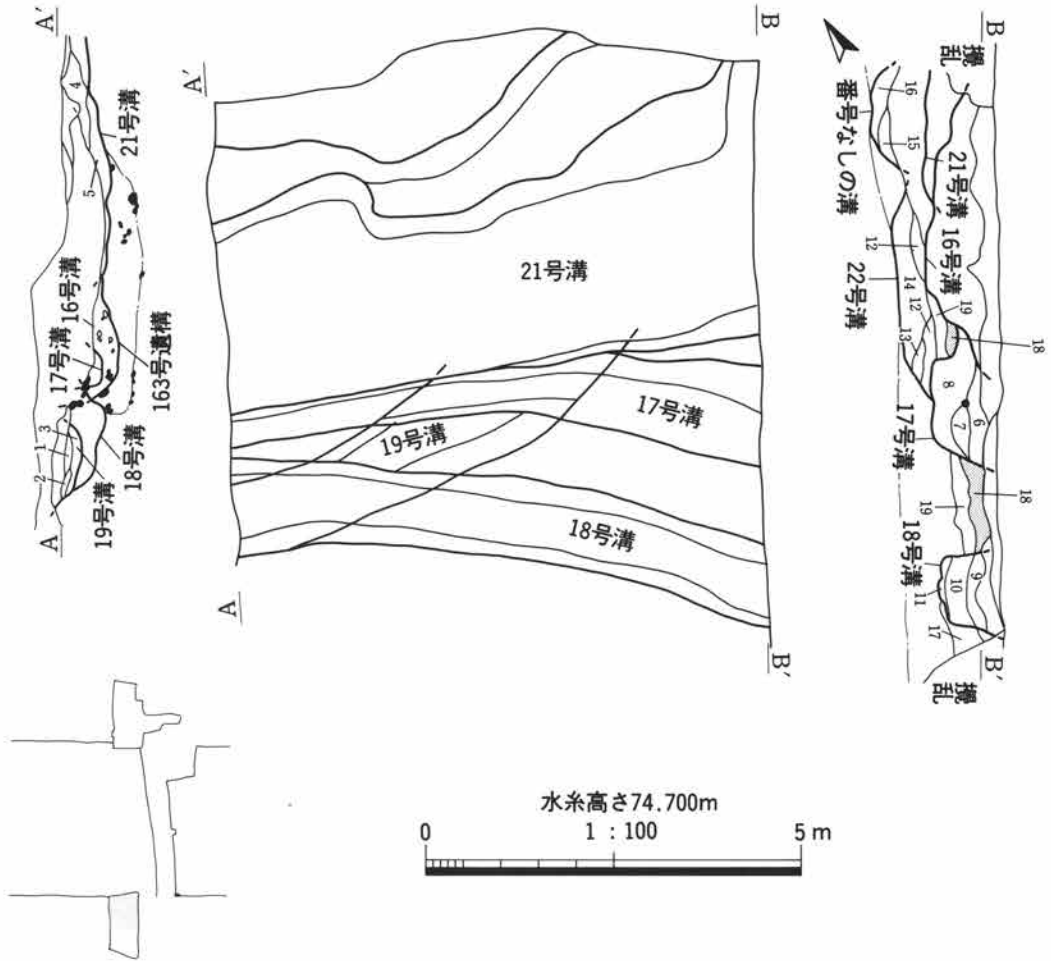
第59図 田端地区B区16号溝出土遺物(8)

田端地区B区第17・18・19号溝（第61～62図）

H-Iライン・71km245m付近の南側道で検出した。これらの溝は互いに重複しており、17・18号が古く、19号が新しい。16～21号溝推定図（第62図、72ページ）に示したように、16号溝の下層に切り込んでいる溝が19号溝であるとすれば、19号溝が古く17・18号の方が新しいことも考えられる。17・18号溝は明らかに浅間B軽石を含む層を切って掘削されており、中世以降の所産と考えられる。推定図の16号溝下層の溝は3・4層を切り込んでいるが、浅間B軽石を多量に含む層との切り合いは上層の16号溝の掘削によって不鮮明になっている。ここでは、南側道調査区での所見により、18→19号溝の順に新しいとしておく。3本とも覆土は自然に堆積している。底面はやや凸である。遺物は小片のみで図示しなかった。時期は平安時代～中世頃と考えられるが、16号溝よりは古い。



第60図 田端地区B区南側道17・18・19・21号溝



19号溝

- 1 黄褐色土 粘質、明茶褐色粘質土ブロックを含む
- 2 褐色土 灰色粘質土ブロックを含む
- 3 灰色土 粘質、褐色土ブロックを含む

21号溝

- 4 明褐色土 粘質、灰色斑点あり
- 5 砂礫 10cm以下の小石と砂利

17号溝

- 6 黒色土 浅間B軽石・褐色土ブロックを含む
- 7 黒褐色土 浅間B軽石を多く含む
明褐色粘質土ブロックを多く含む
- 8 灰色粘質土・褐色砂が交互にレンズ状堆積する

18号溝

- 9 明褐色土・灰色粘質土・黄褐色粘質土・褐色砂の混合
- 10 灰色土 粘質、褐色砂ブロックを含む
- 11 灰色土 粘質、鉄分沈着
底面直上に褐色砂あり

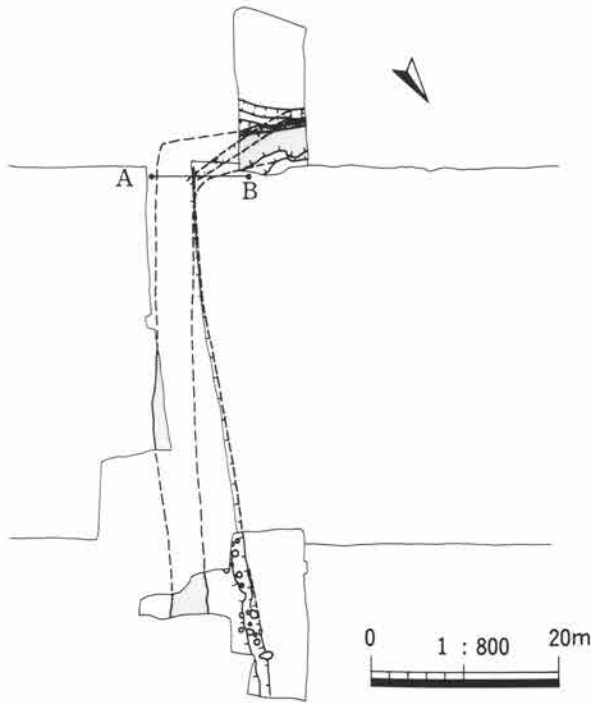
22号溝

- 12 明褐色土 焼土・炭化物を少量含む
- 13 暗赤褐色土 焼土ブロック・鉄滓を多く含む
- 14 暗褐色土 焼土・炭化物を多く含む

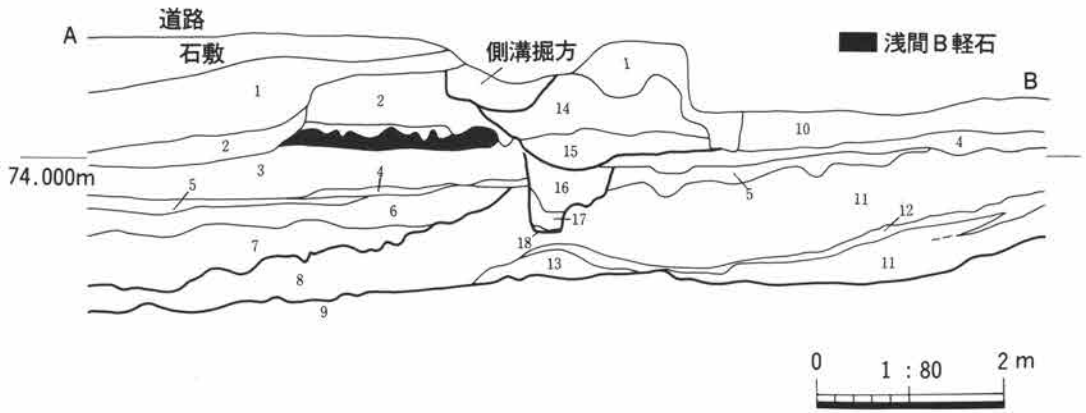
番号なし溝

- 15 明褐色土 焼土・炭化物を少量含む
- 16 暗褐色土 明褐色土ブロックを含む
焼土・炭化物を多く含む
- 17 黒褐色土 不明遺構フク土か
- 18 黒色土 浅間B軽石を多量に含む
- 19 黒色土

第61図 田端地区B区17・18・19・21号溝



- A区—B区間掘削面南壁土層
- 1 灰褐色土 浅間A軽石を含む
 - 2 褐色土 浅間A軽石を含む
 - 3 灰黄褐色土 粘質、灰色砂質土・焼土・炭化物粒を多く含む
 - 4 砂利
 - 5 砂 黒褐色斑点あり
 - 6 黒褐色土・灰褐色土の混合
 - 7 暗褐色土 粘質
 - 8 黄褐色土 砂質
 - 9 礫
 - 10 灰褐色土 砂質
 - 11 砂 灰色砂・褐色砂の混合
 - 12 小石
 - 13 暗褐色砂 粒子粗い
 - 14 褐色土 浅間A軽石を含む
強く締っている
 - 15 小石・砂利の混合
 - 16 暗褐色土 灰褐色土ブロック・小石・砂利を含む
 - 17 黄褐色土・灰褐色土・暗褐色土の混合
 - 18 黒褐色土 粘質、黒褐色砂ブロックを含む



第62図 田端地区B区16~21号溝推定図

田端地区B区第23号墓墳（第63～64図）

J-Kライン・71km245m付近で検出した。確認面は第2層である。本来、土坑の名称がついていたが、第3次調査で同番号の土坑を認定したため、第2次調査で付けた番号を継承して墓墳と読み替えた。本地区で唯一の人骨出土遺構である。

確認面での掘り込みは127×81cmで、深さ14cmである。人骨は右頭部を下にし、膝を折り曲げたように見える。遺物の出土はない。なお、人骨は第5分冊で扱う。

時期は、確かな根拠はないが、中世以降とみられる。

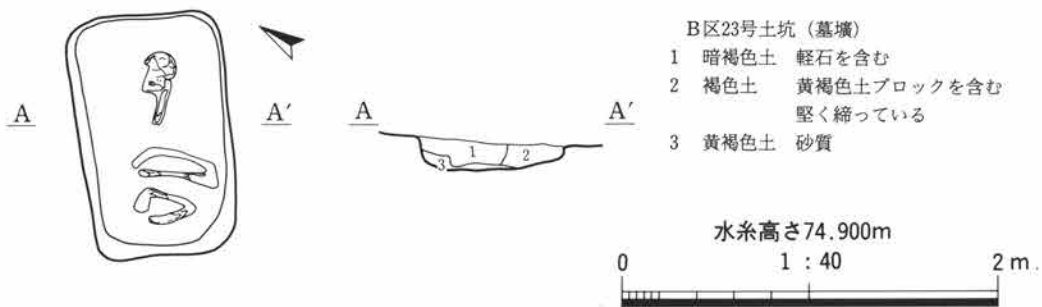
田端地区B区墓墳（第63～87図、図版36）

本地区の71km270m付近の調査区内で円形の掘り込みを検出し、中から少量の遺物を出土した。1・2・2'号はP-Qライン、4号はM-Nライン、3・5～11号はJ-Kラインの南側土坑群内に位置する。比較的限られた範囲のなかに分布し、南側では4m四方の中に6基が重複する。

いずれも径100～150cmで、深さは20～80cmと差がある。2・5・9号墓墳では壁にタガ状の圧痕が残り、掘形に壁溝状の壁に沿った溝を検出した10・11号墓墳の例もある。2号では底面近くから拳大～人頭大の石を検出した。これらの墓墳の覆土は灰褐色の砂質土で粒子が粗く、浅間A軽石を含んでいる。遺構は円筒形の掘形をもち、掘り込みの中心と掘形との間は粘質土を充填している。遺構内部の壁と底面の様相から、本遺構群は内部に樽を据えたものと推定する。

遺物は陶器・磁器を主体とし、2号では石塔の一部とみられる径10.5cmほどの石・キセル吸い口も出土している。なお、2号出土の石塔状の石については、遺構外出土遺物とともに、本分冊末尾で扱う。

本遺構群は当初、墓と考えて番号を付けていったが、便壺の可能性もある。



第63図 田端地区B区23号土坑（墓墳）



第64図 田端地区B区23号墓墳

第7表 田端地区B区 墓墳一覽表

番号	大きさcm・深 さcm	重複関係 [旧→新]	遺 物	時 期	備 考
23坑	127×81・14	単 独	人 骨	平安～中世	軽石あり
232坑	340×210以上・43(掘形)	232坑→11溝		平 安	
1 墓	径143・60	単 独	木片・石他	江戸～	浅間A軽石含む
2 墓	径146・80	2'墓→2 墓	石	江戸～	浅間A軽石含む
2'墓	径137・(45)	2'墓→2 墓	石	江戸～	浅間A軽石含む、未完掘
3 墓	径101・52	161坑→3 墓	土器・陶器	江戸～	浅間A軽石含む
4 墓	148×139・68	76坑→4 墓			
5 墓	径90・31	6 墓→5 墓		江戸～	浅間A軽石含む
6 墓	径88・32	6 墓→5 墓		江戸～	浅間A軽石含む
7 墓	—	土坑→7 墓		江戸～	浅間A軽石含む
8 墓	欠 番				
9 墓	径94・22	10・11墓→9墓→土坑		江戸～	浅間A軽石含む
10墓	径136・17	10墓→5・6・9 墓			
11墓	—・18	11墓→9 墓→土坑			

第65図 田端地区
B区1号墓墳(1)



第66図 田端地区B区1号墓墳(2)



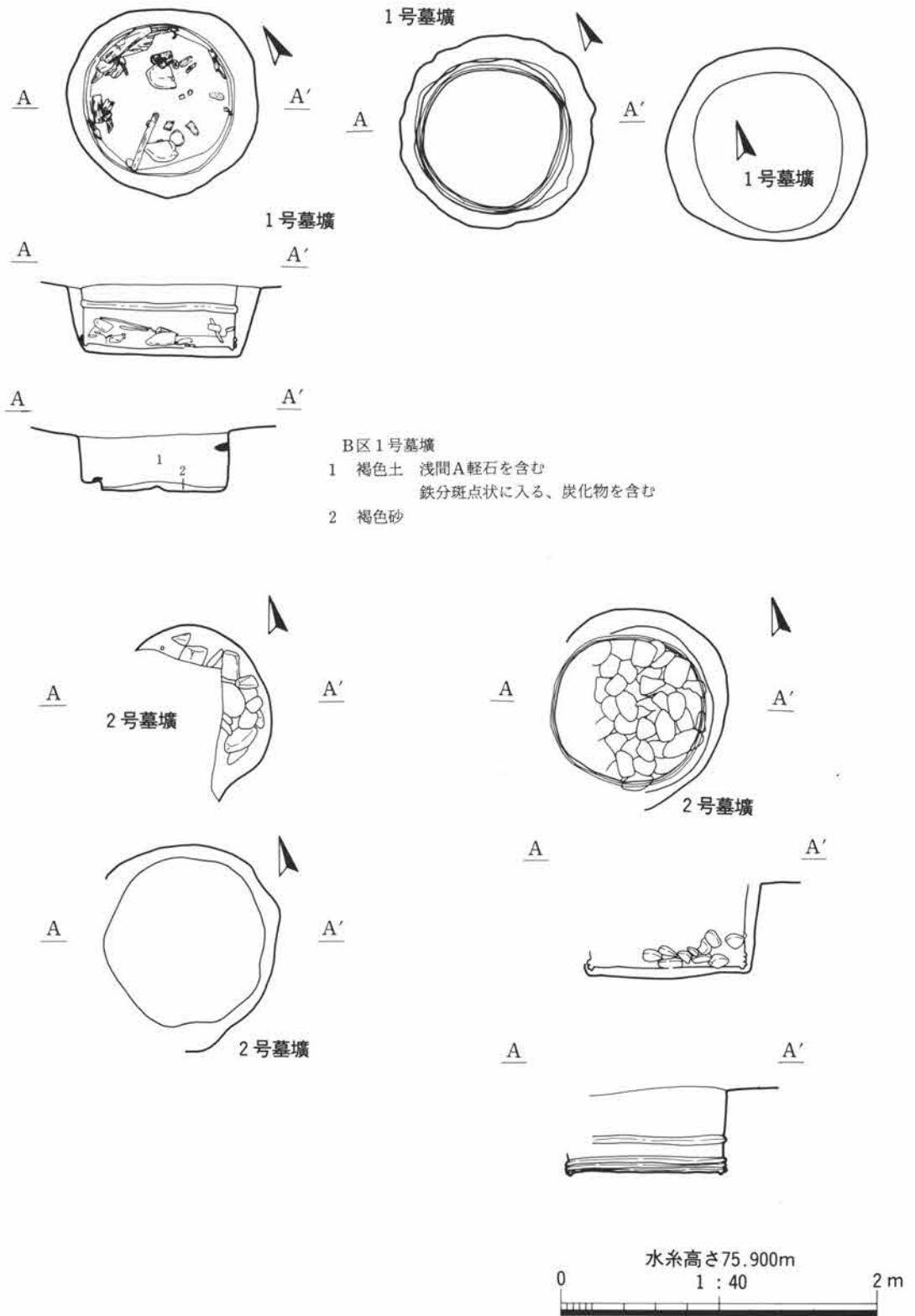
第67図 田端地区B区1号墓墳(3)



第68図 田端地区B区2号墓墳(1)



第69図 田端地区B区2号墓墳(2)



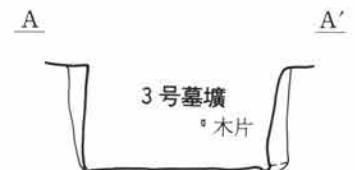
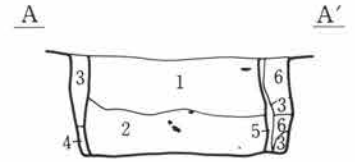
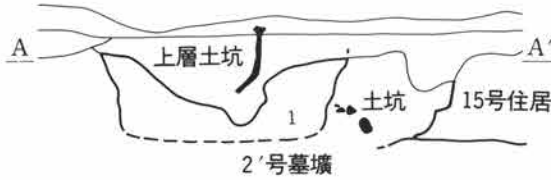
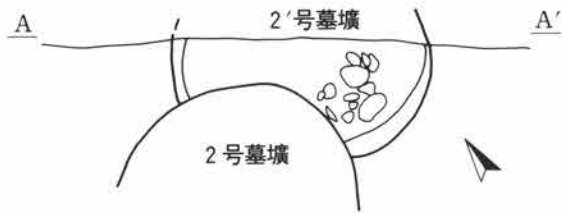
第70図 田端地区B区1・2号墓



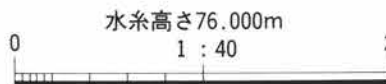
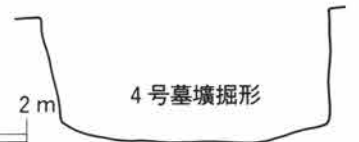
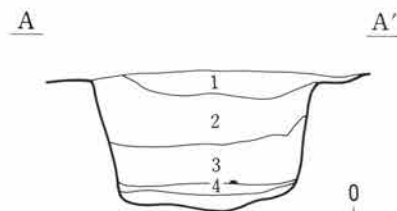
第71図 田端地区B区2号墓墳(3)



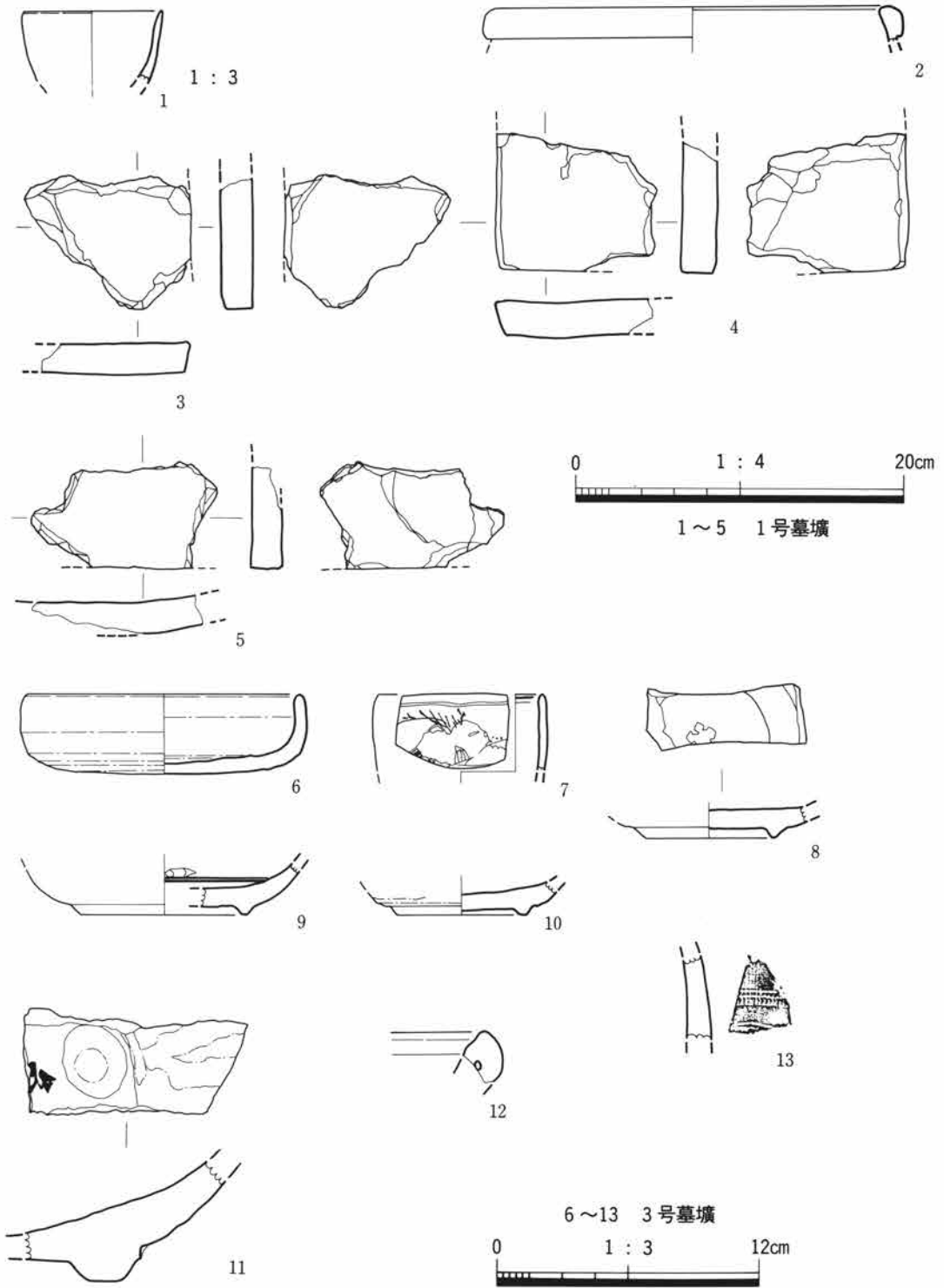
第72図 田端地区B区3号墓墳



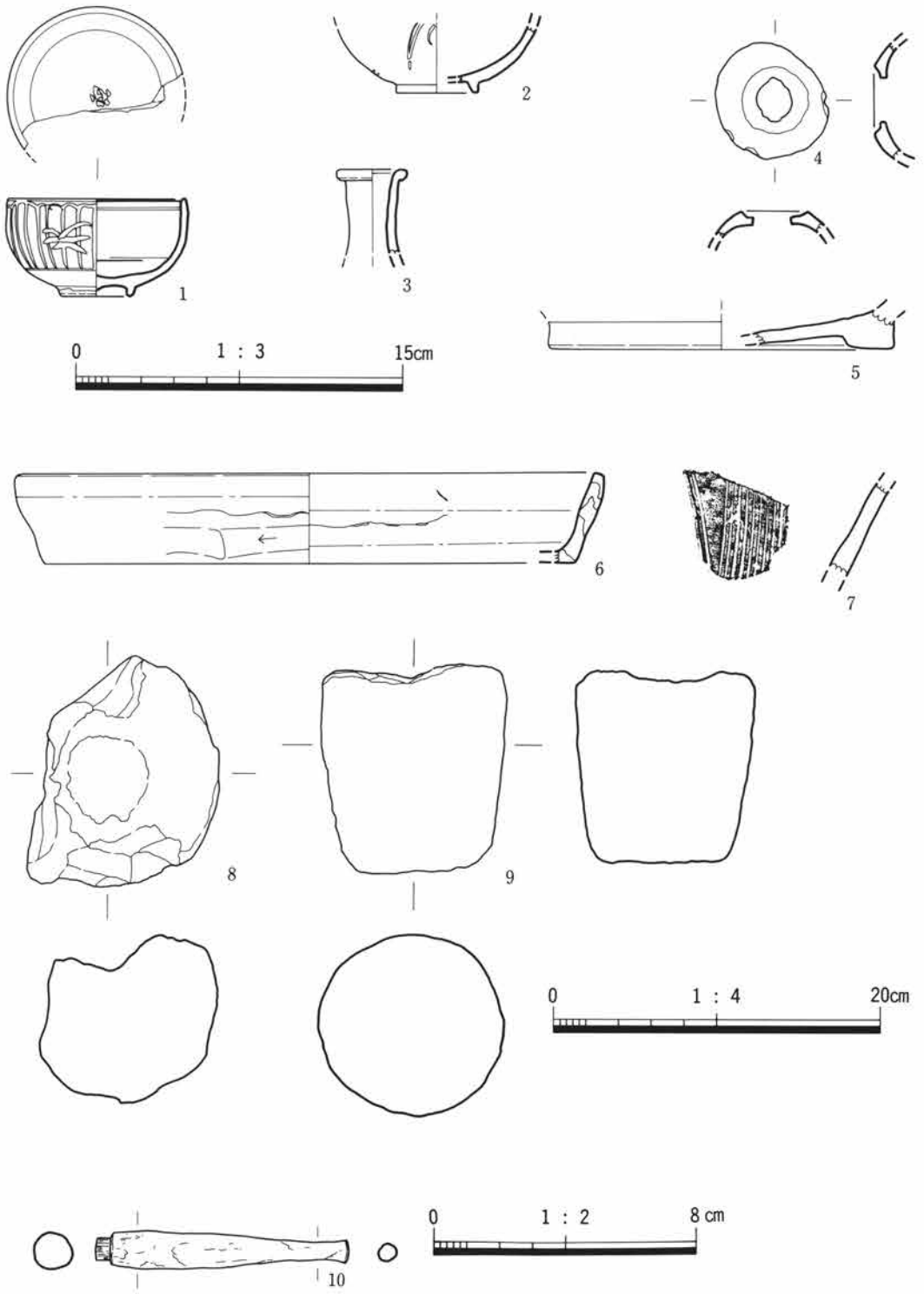
- B区 2'号墓墳
- 1 灰褐色土 浅間A軽石を含む
褐色土ブロックを含む
- B区 3号墓墳
- 1 褐色土 黄褐色土ブロック・炭化物粒子・浅間A軽石を多く含む
 - 2 褐色土 1に似る、炭化物殆どなし
- B区 4号墓墳
- 1 明褐色土 粘質、黄褐色土ブロックを含む
 - 2 灰褐色土 粘質
 - 3 褐色土 炭化物・黄褐色土粒子を含む
 - 4 灰褐色土 粘質
- 3 黄褐色土 粘質
 - 4 灰黄褐色土
 - 5 灰褐色土
 - 6 灰黄褐色土 黄褐色土ブロックを含む



第73図 田端地区B区 2'・3・4号墓墳



第74図 田端地区B区1・3号墓墳出土遺物



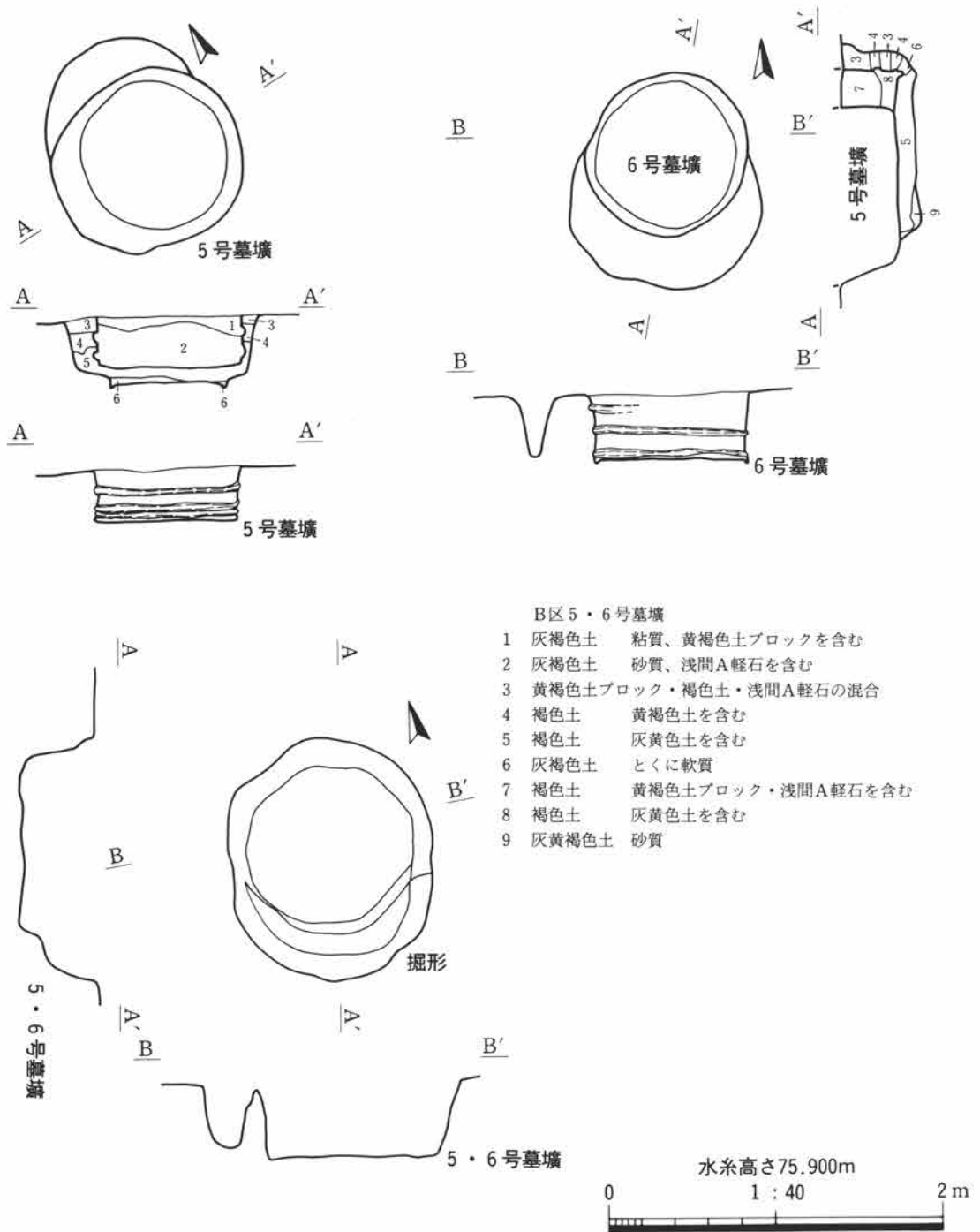
第75図 田端地区B区2号墓墳出土遺物



第76図 田端地区B区4号墓墳



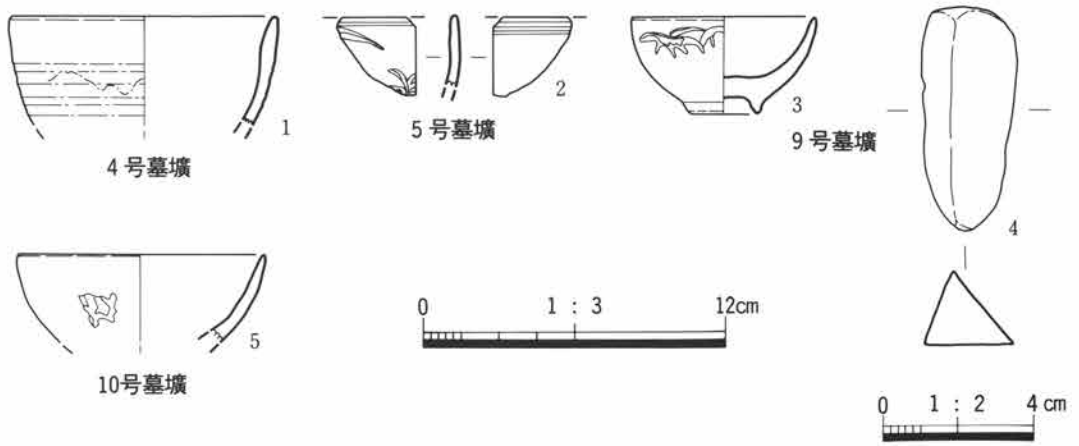
第77図 田端地区B区5～11号墓墳



第78図 田端地区B区5・6号墓墳



第79図 田端地区B区5号墓墳



第80図 田端地区B区4・5・9・10号墓墳出土遺物



第81図 田端地区B区5・6号墓墳



第82図 田端地区B区7号墓墳



第83図 田端地区B区9号墓墳（1）



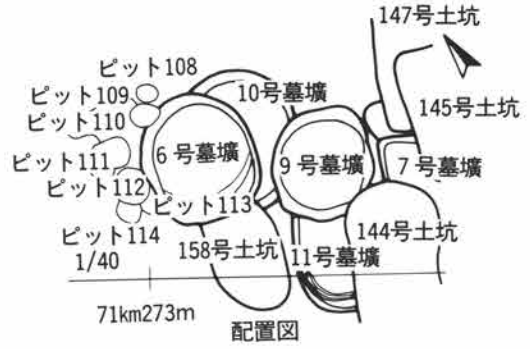
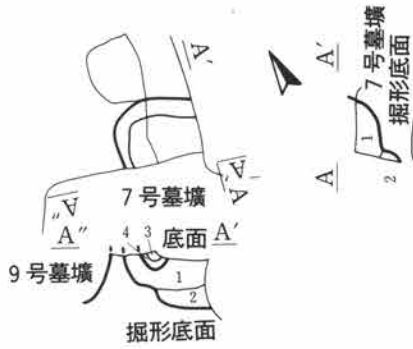
第84図 田端地区B区9号墓墳（2）



第85図 田端地区B区10号墓墳

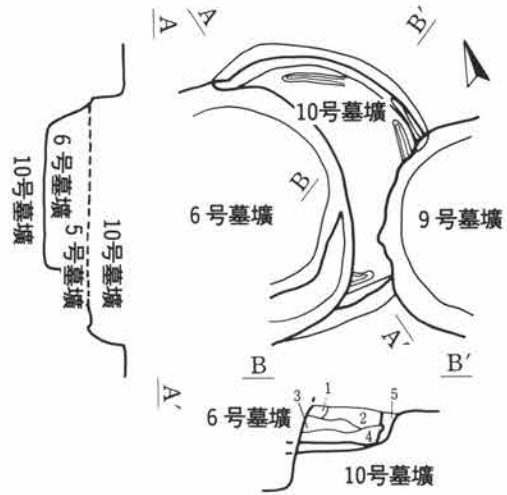
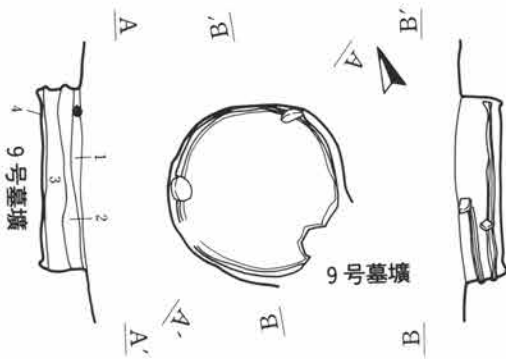


第86図 田端地区B区11号墓墳



B区7号墓墳

- 1 灰褐色土 黄褐色土ブロックを含む
- 2 褐色土と黄褐色土の混合
- 3 黄褐色土 褐色土ブロック・浅間A軽石を含む
- 4 暗褐色土 浅間A軽石を多く含む



B区9号墓墳

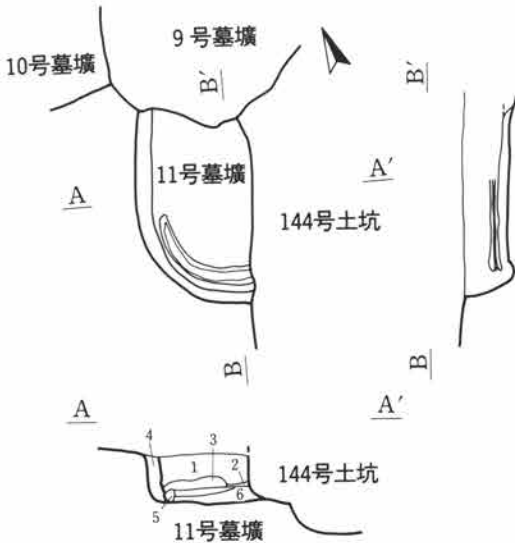
- 1 暗褐色土 黄褐色土粒子・浅間A軽石を含む
- 2 灰褐色土 黄橙色土粒子・浅間A軽石を含む
- 3 褐色土 黄褐色土粒子・浅間A軽石を含む
- 4 褐色砂

B区10号墓墳

- 1 黄褐色土
- 2 灰褐色土 黄褐色土ブロックを含む
- 3 灰褐色土 黄橙色土ブロックを含む
- 4 灰褐色土 黄褐色土粒子を含む、軟質
- 5 灰褐色土 黄褐色土ブロックを含む
- 6 灰褐色土 堅い、黄橙色粒子を含む

B区11号墓墳

- 1 暗灰褐色土 黄褐色土粒子を含む
- 2 灰褐色土
- 3 灰褐色土 黄褐色土ブロックを含む
下部に白色小粒子を含む堅く薄い層あり
- 4 灰褐色土 黄褐色土粒子を含む
- 5 暗灰褐色土 軟質、黄褐色土粒子を含む
- 6 灰褐色土 黄褐色土粒子・砂を含む



水糸高さ75.900m

1 : 60



第87図 田端地区B区7・9・10・11号墓墳

第8表 田端地区B区 土坑一覧表

A：浅間A軽石，B：浅間B軽石

番号	大きさcm・深 さcm	重複関係 [旧→新]	遺 物	時 期	備 考
1	129×124・41	5住→1坑	平安土器小片・小皿	江戸	A含む
2	欠 番				
3	143×128・31	4坑→3坑			A以降
4	199×—・30	4坑→3坑			A含む
5	129×115・39	5住→8坑→5坑	土器、石、鉄製品	江戸	A含む
6	57× 58・30	5住→6坑	石		
7	46× 47・29	5住→7坑	石		A含む
8	116×—・35	5住→8坑→5坑			純A含む
9	不 明				
10	76×105・14				A含む
11	—× 62・17				5住の一部か
12	90× 62・24	7住→12坑	土 器	平 安	A含む
13	79×133・83	14坑→13坑	土器、鉄製品、羽釜	平 安	
14	92×220・33	14坑→13坑			
15	—× 80・24	15坑→13坑			
16	45×—・ 6	17坑→16坑			
17	104×169・42	17坑→16坑			
18	119×112・53	6住→18坑	木片、石(白?)	江戸	上層にA含む、墓か
19	61×111・41	9住→19坑			
20	—×160・20	9住→20坑	平安土器、陶器、鉄滓	江戸以降	A含む
21	81×145・11	9住→21坑		江戸以降	A含む
22	75×—・21	11住→22坑→24坑		江戸以降	A含む
23	127× 81・14	単 独	陶器皿		
24	285×101・86	11住→22坑→24坑	ガラス瓶	明治以降	
25	201× 69・24	11住→25坑			A含む
26	97× 60・30	単 独	土 器	平 安	

番号	大きさcm・深 さcm	重複関係 [[旧→新]	遺 物	時 期	備 考
27	不 明				
28	99×111・14	単 独	鉄 滓	平 安	
29	77× 81・21	単 独		平 安	
30	66×152・48	単 独			上層にB含む
31	83×190・19	31坑→ピット		平 安	
32	80× 93・27	10住→ピット→32坑		平 安	
33	—×130・20	10住→33坑		平 安	
34	80× 75・ 6	単 独			
35	不 明				
36	住居掘形				
37	203×115・29	単 独		平安？	
38	119×332・21	39坑→38坑	土 器	江戸以降	A含む
39	61×150・20	39坑→38坑	土 器	中世以降	A含む
40	不 明				
41	165×173・22	54坑→41坑	陶 器	江戸以降	A含む
42	258×127・55	42坑→43坑		江 戸	A含む
43A	73× 83・17	42坑→43A坑	平安土器小片		A含む
43B	66×107・23	単 独			上層にA含む
44	不 明				
45	213× 96・ 5	54坑→45坑		江戸以降	
46	98×101・13	単 独		江戸？	上位にA含む
47	158× 39・35	10住→47坑→ピット		平 安	
48	137×100・39	16住→60坑→48坑		江 戸	A含む
49	122× 71・56	16住→49坑		江 戸	
50	203×103・19	単 独		江 戸	A含む
51	72×148・17	単 独			
52	88×109・72				上位にA含む

第V章 遺構と遺物

番号	大きさcm・深 さcm	重複関係 [旧→新]	遺 物	時 期	備 考
53	135×115・46	54坑→53坑	平安土器あり	江 戸	A含む
54	393×352・122		土器、獣骨	奈良末平安初	
55	90×101・19	17・19住→55坑	平安土器小片		上位にBを含む
56	不 明				
57	172× 99・20	16住→57坑		平 安	上位にA含む
58	223×135・68	16住→58坑		江 戸	上位にA含む
59	140×122・22	59坑→6溝、59坑→3溝		平 安	上位にA含む
60	—× 74・13	16住→60坑→48坑			上位にA含む
61	111×113・66	単 独			上位にA含む
62	87× 70・12	17住→62坑	平安土器		A含む
63	111× 55・15	17住→63坑			A含む
64	172×126・44	単 独		江 戸	
65	63× 81・39	66坑→65坑	土器小片		B含む
66	87×139・ 9	66坑→65坑			B含む
67	122×141・ 8	単 独			
68	145×105・52	167坑→68坑	石	平 安	上位にA含む
69	124× 99・16	23住→69坑	土器、高台椀	平 安	軽石含む
70	340×168・61	10溝→70坑		江 戸	
71	101× 69・27	20住→71坑	平安土器小片	江 戸	A含む
72	162×159・33	単 独			軽石含む
73	102×150・21	73坑→ピット	平安土器		
74	123× 47・14	単 独			
75	102× 93・12	単 独			軽石含む
76	—×136・15	76坑→4墓			A含む
77	159× 98・18	31住→77坑			A含む
78	86× 73・13	32住→79坑→78坑	平安土器		A含む
79	132×289・ 6	32住→79坑→78坑	平安土器		B含む

番号	大きさcm・深さcm	重複関係 [旧→新]	遺物	時期	備考
80	103×125・49	26住→80坑			上位にA含む
81	113×90・11	29住→81坑	平安土器		軽石含む
82	150×49・7	29住→82坑	平安土器、陶器		A含む
83	63×183・35	29・27住→83坑	平安土器小片		A含む
84	64×325・35	38住→84坑→85坑			A含む
85	25×94・7	84坑→85坑		江戸	A含む
86	172×52・18			江戸	
87	482×125・10		陶器、平安土器		
88	168×90・12			平安	
89	52×40・36				
90	67×90・10	単独			B含む
91	68×65・21	28住→91坑			B含む
92	74×57・9				
93	48×71・6	単独			B含む
94	不明				
95	74×47・21	31住→95坑			A含む
96	70×52・17	単独			B含む
97	106×—・30	97坑→98坑			上位にB含む
98	109×100・35	97坑→98坑			上位にB含む
99	166×142・84	10溝→99坑		中世～	上位にA含む
100	169×160・23	18・20住→100坑	平安土器小片		上位にB含む
101	96×34・8				
102	80×50・5				
103	66×84・4				
104	86×46・5				
105	206×52・15		平安土器小片		
106	82×72・61				

第V章 遺構と遺物

番号	大きさcm・深 さcm	重複関係 [旧→新]	遺 物	時 期	備 考
107	56×221・5			平安	
108	107×72・10				
109	51×250・10				
110	89×194・12				
111	100×224・10				
112	不 明				
113	不 明				
114	60×78・6				
115	80×205・14		平安土器、陶器	江 戸	
116	64×174・10		陶器、平安土器	江 戸	
117	146×70・23		平安土器、陶器	江 戸	
118	61×218・10				
119	48×182・5				
120	72×120・7				
121	85×117・22				
122	63×180・8				
123	146×54・8				
124	72×48・2				
125	65×103・9				
126	103×95・17	44・46住→126坑			軽石含む
127	—×139・15	132坑→127坑	緑釉陶器	平 安	
128	—×168・13	45住→128坑		平 安	上位にB含む
129	71×89・18	45住→129坑			B含む
130	不 明				
131	336×264・18			中世～	
132	268×319・147	132坑→127坑	土器、石	奈 良	
133	66×184・52			江戸?	

番号	大きさcm・深さcm	重複関係 [旧→新]	遺物	時期	備考
134	37×75・11	38住→134坑			B含む
135	98×97・17	70住→135坑	平安土器小片、瓦	平安?	B含む
136	88×87・20	33住→136坑	土器	平安	
137	不明				
138	—×—・16	138坑→139坑			
139	135×66・19	138坑→139坑	平安土器小片	平安?	
140	不明				
141	不明				
142	140×118・22			平安	
143	62×126・21		甕体部1片	平安	
144	72×183・11				
145	104×148・5		平安土器小片		
146	58×196・31				
147	70×182・21		須恵器1片	平安以前	
148	76×318・10		平安土器小片		
149	—×—		平安土器小片		
150	233×—・10		土師小皿		A含む
151	86×—・9	35住→151坑	平安土器小片		A含む
152	32×154・22				
153	不明				
154	128×58・14				
155	126×45・9		平安土器小片		
156	85×188・13				
157	98×82・18	157坑→89坑	瓦、椀	平安	上位にB含む
158	—×77・25	158坑→5・6墓	平安土器、羽釜	平安?	
159	92×83・14		瓦、羽釜	平安	
160	—×160				

第V章 遺構と遺物

番号	大きさcm・深 さcm	重複関係 [[旧→新]	遺 物	時 期	備 考
161	96×242・43			江戸?	
162	41×107・5	162坑→163坑?	平安土器	江戸?	
163	192×118・18	162坑→163坑?			
164	78×137・38		陶器、鉄滓		
165	—×—・25	58住→165坑		奈良	
166	133×154・30	97住→166坑			軽石含む
167	219×121・37	35住→167坑→68坑	黒色土器	平 安	
168	146×118・12		平安土器、瓦	平 安	
169	—×71・23	55住→169坑	平安土器小片	平 安	
170	欠 番				
171	111×—・22	67住→171坑	平安土器小片	平 安	
172	108×135・28				縄文?
173	148×283・88				縄文?
174	不 明				
175	80×90・13	175坑→116坑			B含む
176	不 明				
177	99×115・37	177坑→55住			
178	62×51・13	74住→178坑	石	平 安	
179	66×81・5	74住→179坑	石	平 安	
180			平安土器小片		1掘立ピット
181	111×77・9	81坑→掘立ピット	平安土器小片	平安?	
182					1掘立ピット
183	56×91・18			奈良?	
184	—×51・—			平安?	
185	—×49・6			平安?	
186	72×82・16	単 独			
187	—×—		平安土器	平安?	

番号	大きさcm・深 さcm	重複関係 [旧→新]	遺 物	時 期	備 考
188	—×—・—				
189	欠 番				
190	64× 50・18	78住→190坑		平安?	
191	53× 61・23	78住→191坑		平安?	
192	151× 91・ 7	54住→192坑	平安土器、軟質陶器	中世?	
193	—×—・21			平安?	
194	146×142・30	66住→194坑	灰釉陶器	平安?	
195	123× 51・19	81住→195坑	瓦、土釜	平 安	
196	—		平安土器	平 安	住居貯蔵穴
197	—× 85・22	81住→197坑	瓦、須恵器	平 安	
198	52×—・15			平安?	
199	57× 51・28	住居より新	平安土器	平安?	
200	79×118・21	住居より新	石	平安?	
201	—× 70・ 7	68住→201坑		平安?	
202	—×—・—				住居の一部か
203	—× 61・15		平安土器	平 安	
204	—× 53・32	204坑→11溝			
205	—× 47・ 7	205坑→11溝			
206	—×—・—				
207	—×—・—				
208	—×—・—				
209	—×—・—				
210	136× 87・15	210坑→ピット			
211	—×147・17	単 独	平安土器	平 安	
212	—×112・11	単 独			
213	101×149・11	単 独	椀	平 安	
214	124×128・30	100住・103住→214坑	平安土器	平 安	

第V章 遺構と遺物

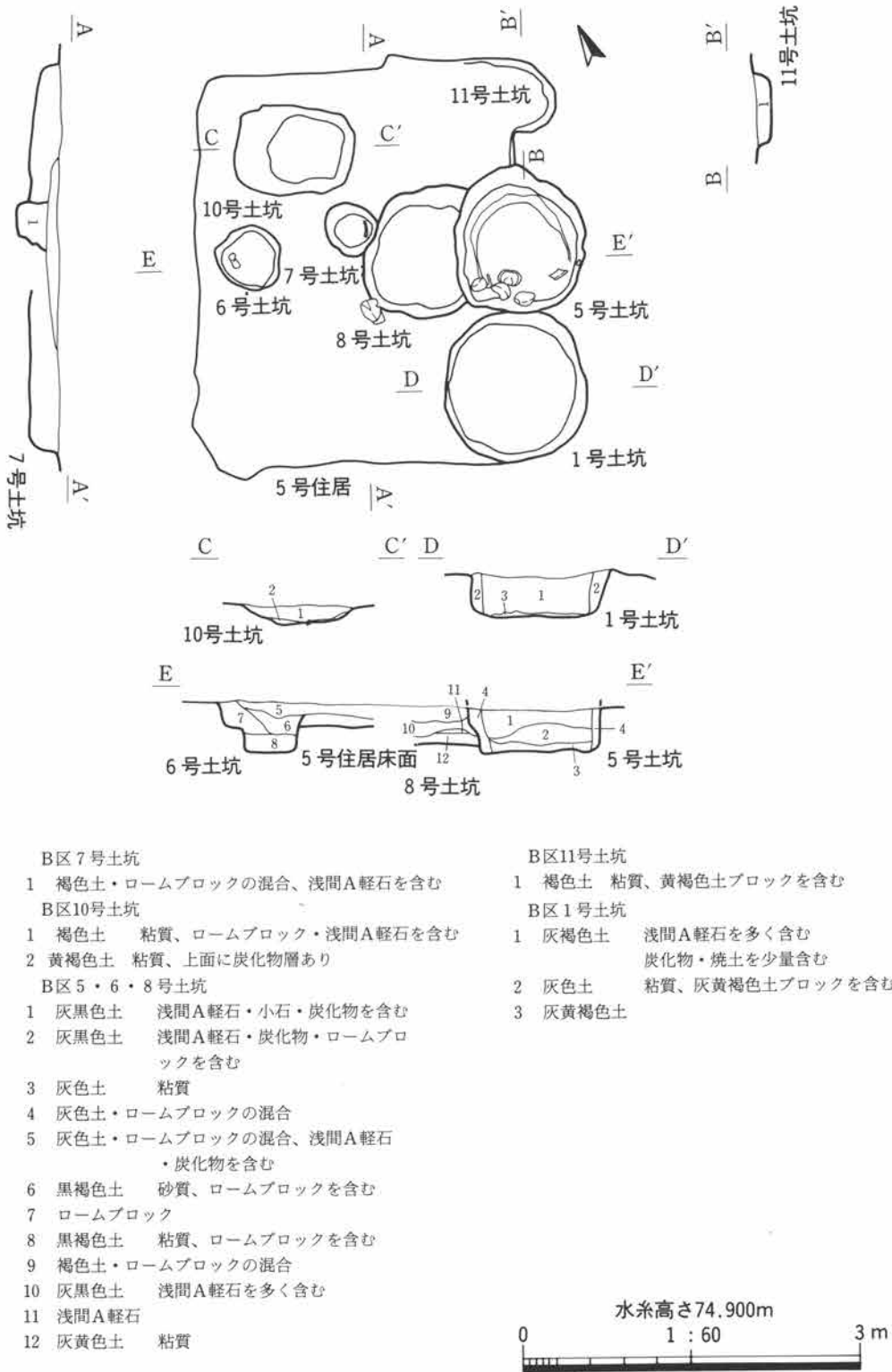
番号	大きさcm・深 さcm	重複関係 [旧→新]	遺 物	時 期	備 考
215	89× 91・37	単 独			
216	108×—・40	103住→216坑→ピット	瓦、平安土器	平 安	
217A	179×258・5	217A坑→217B坑		平安？	
217B	168×123・19		平安土器	平 安	
218	64× 51・19	単 独	平安土器	平 安	
219	82× 81・18	単 独			土層なし
220	欠 番				
221	171× 68・13	221坑→222坑			土層なし
222	398×116・31	221坑→222坑	平安土器、灰釉陶器	平 安	
223	—×—・—				222坑の北半
224	不 明				
225	—×—・14	99住→225坑→11溝	平安土器、羽口	平 安	
226	75× 80・11	116住→226坑	平安土器、瓦	中世以降	浅間B軽石含む
227	89× 86・25	116住→227坑	瓦、灰釉陶器	平 安	
228	67× 57・8	122住→228坑		中世以降	浅間B軽石含む
229	126×131・10	111住→229坑	平安土器	平 安	
230	88× 94・22	143住→230坑	平安土器	平 安	
231	64× 68・34	143住→231坑			
232	340×210～・43	232坑→11溝		平 安	墓壇掘形
233A	79× 79・11	121住→233A坑		奈 良	
233B	79×124・51	233B坑→248坑			
234	50×—・18	234坑→120住		平 安	住居の一部か
235A	106×77・9				
235B	121×—・33		平安土器	平 安	
236	65× 66・16	243A坑→236坑		中世以降	浅間B軽石含む
237	157×122・39	130住→237坑	平安土器	平 安	

番号	大きさcm・深さcm	重複関係 [旧→新]	遺物	時期	備考
238	197×165・27	119住→238坑		江戸	浅間A軽石含む
239A	194×177・47	単独			
239B	167×103・20	単独	平安土器	平安	
240A	178×130・44	132住→240A坑			
240B	129×—・22	131住→240B坑		平安?	
240C	99×—・13	240坑→217坑			
241	110×67・18			平安?	
242A	144×52・13	245坑→242A坑		平安?	
242B	48×75・14	単独		中世～	浅間B軽石含む
243A	123×194・33				
243B	150×79・10	243坑→236坑		平安	
244	—×97・17	89住→244坑	墨書土器	平安	
245	54×57・14	245坑→242坑			
246	70×90・66	143住→246坑	平安土器、灰釉陶器	平安	
247	105×80・52	143住→247坑		平安	
248	106×85・10	150住→248坑	平安土器	平安	
249	42×66・31	249坑→139住		平安	
250	74×95・31	250坑→153住		平安	
251	57×43・58	251坑→145住		平安	
252	78×70・37	253坑→252坑	平安土器小片	平安	
253	301×136・19	253坑→252坑	刀子、平安土器	平安	
254	—×—・25		平安土器	平安	
255	39×39・9		須恵器小片		
256	27×37・26		平安土器	平安	
257	—×—・—		平安土器小片	平安	
258	29×26・13		須恵器甕	平安	
259	—				

番号	大きさcm・深 さcm	重複関係 [旧→新]	遺 物	時 期	備 考
260	131×135・35		陶 器	江 戸	
261	91× 93・14		陶器、石臼	江 戸	
262	131×108・35		石	近世～	
263	148×144・35			近世～	
264	126×129・27		石	江 戸	
265	95×103・53		瓦	平安？	



第88図 田端地区B区1・5・6・7・8号土坑



第89図 田端地区B区1・5～8・10・11号土坑



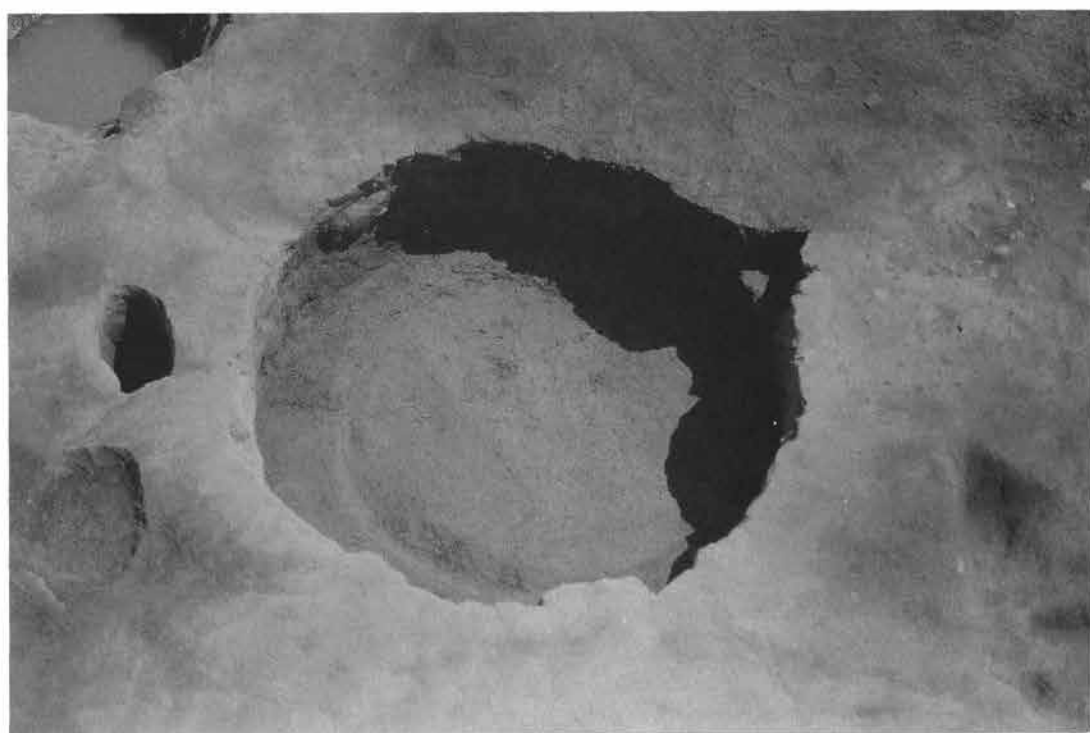
第90図 田端地区B区10号土坑



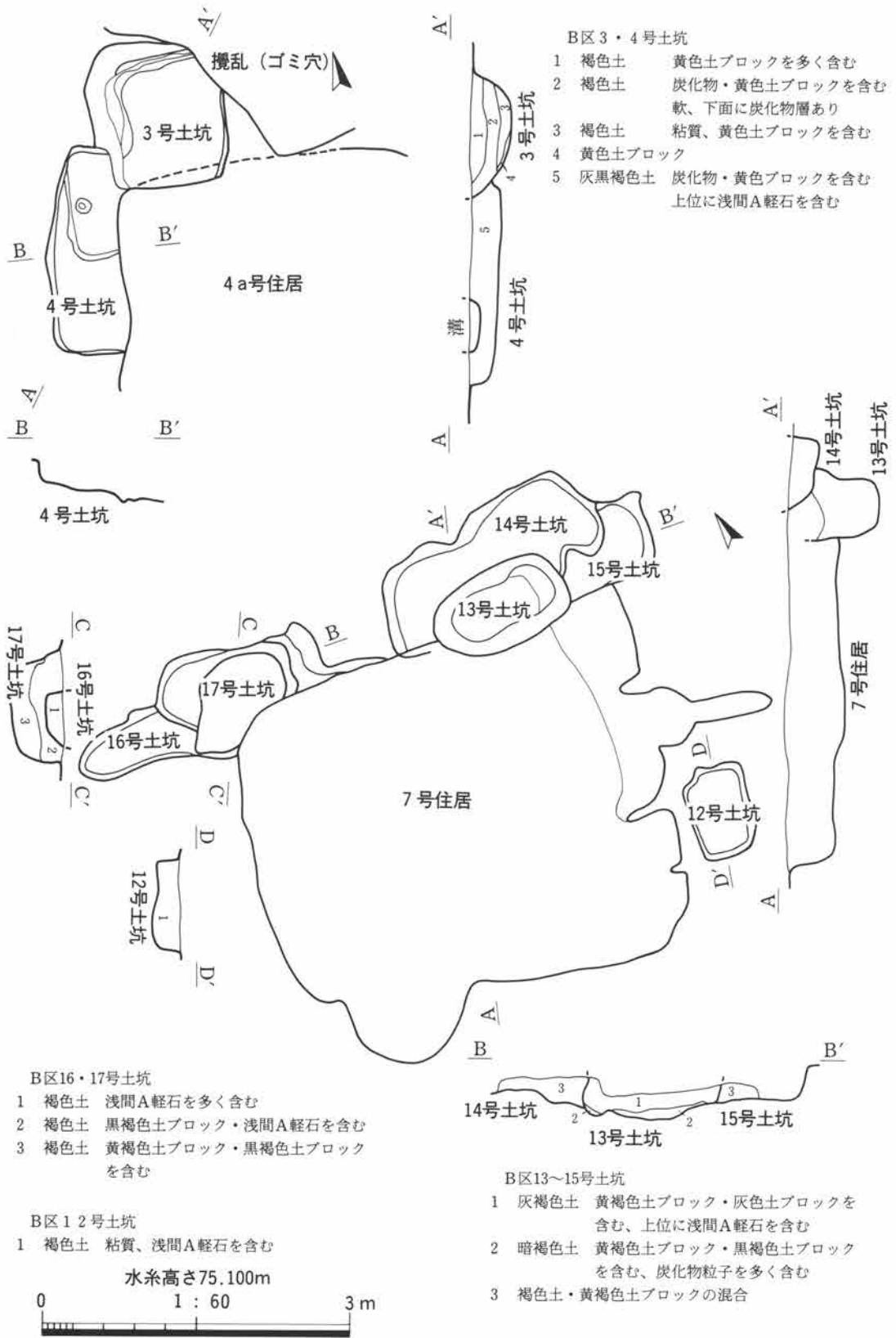
第91図 田端地区B区18号土坑（1）



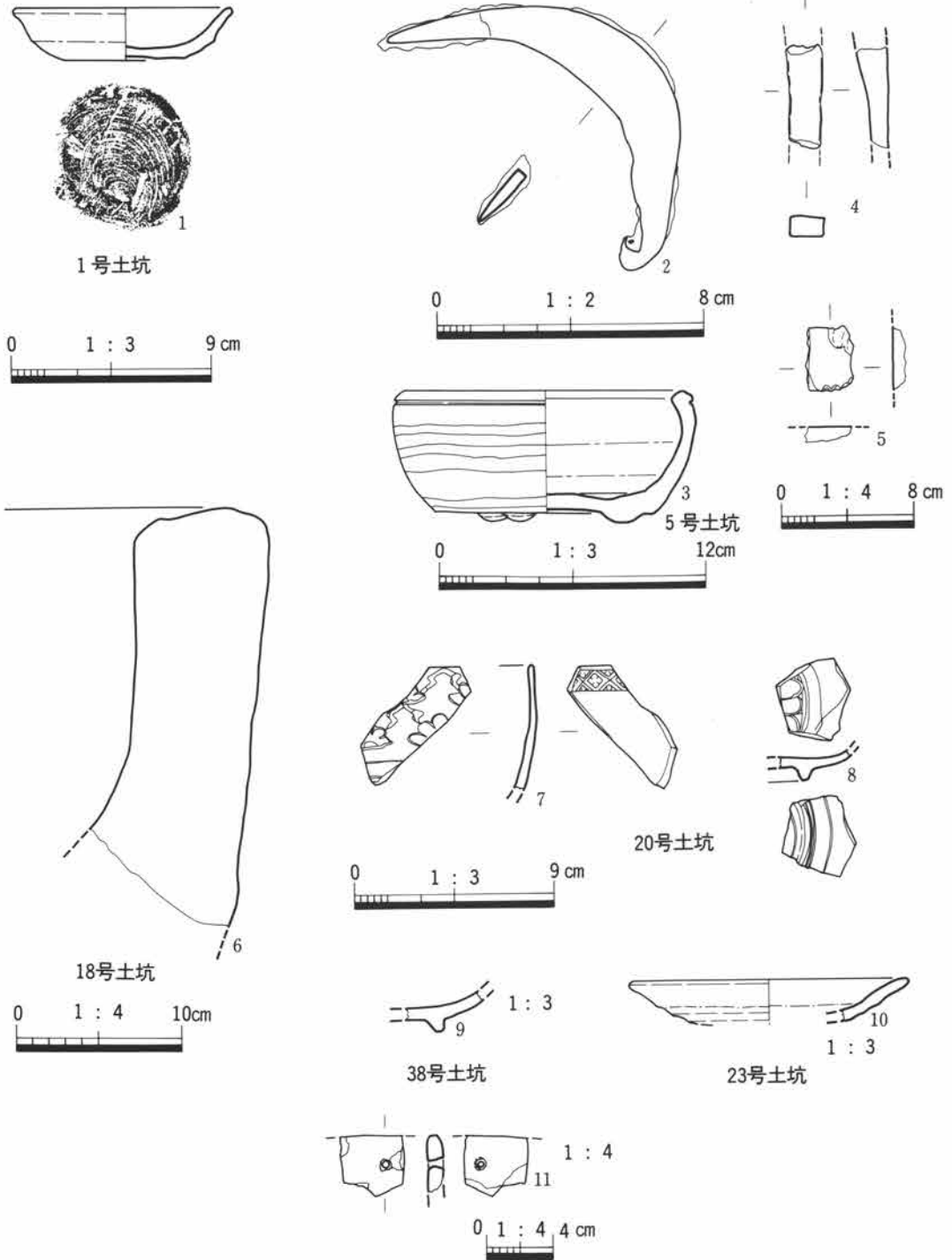
第92図 田端地区B区18号土坑（2）



第93図 田端地区B区18号土坑（3）



第94図 田端地区B区3・4・12~17号土坑



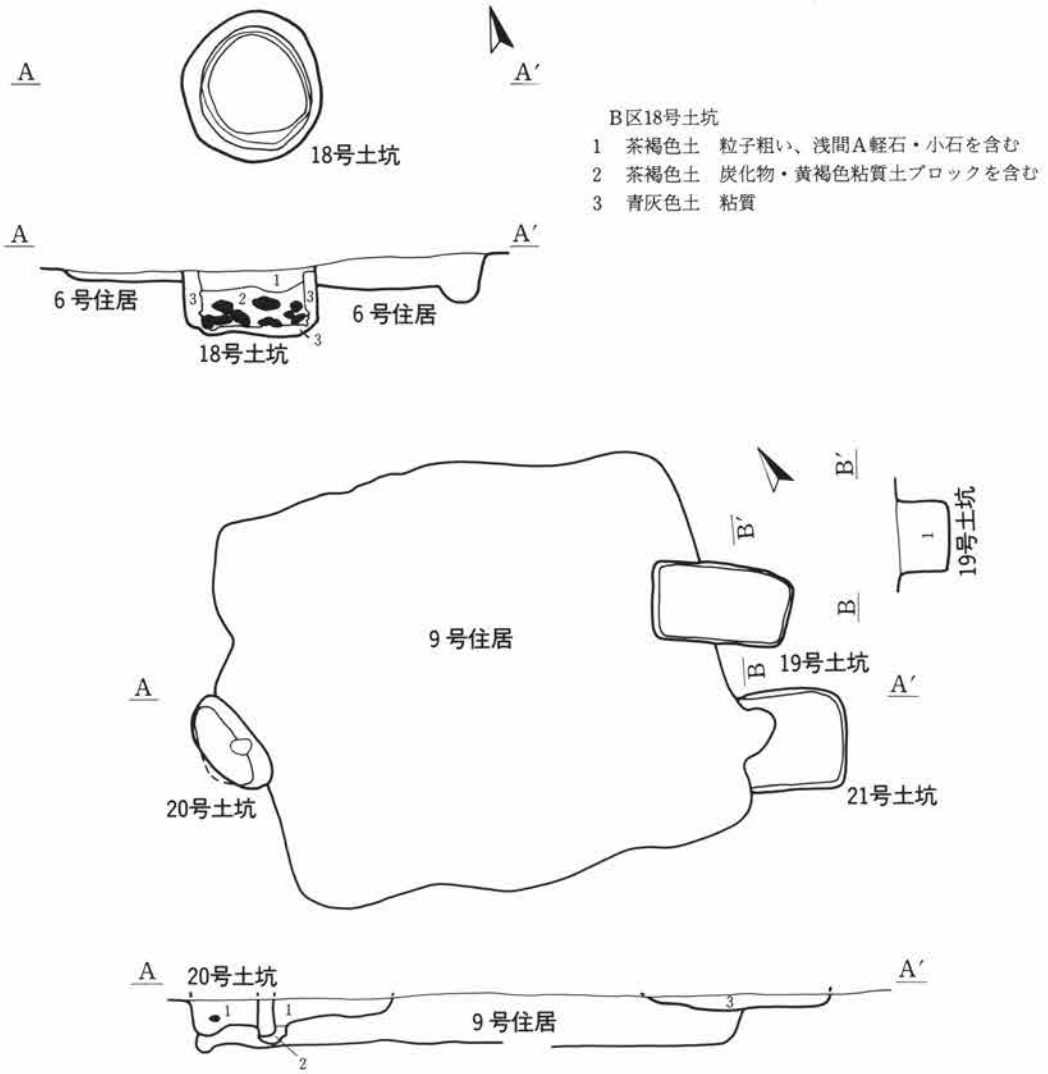
第95図 田端地区B区1・5・18・20・23・38号土坑出土遺物



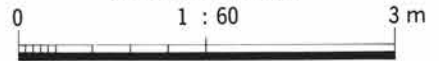
第96図 田端地区B区19号土坑



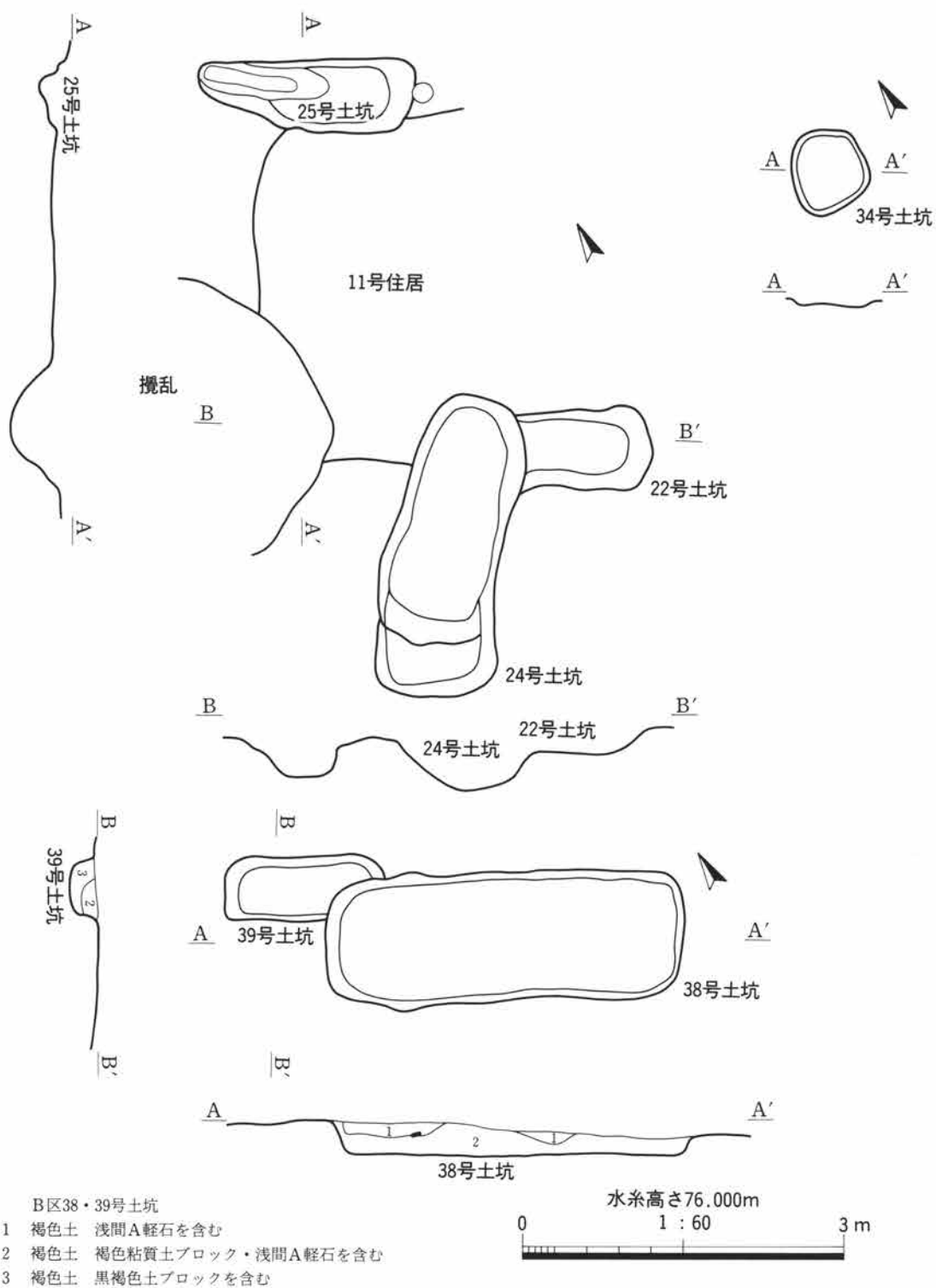
第97図 田端地区B区20号土坑



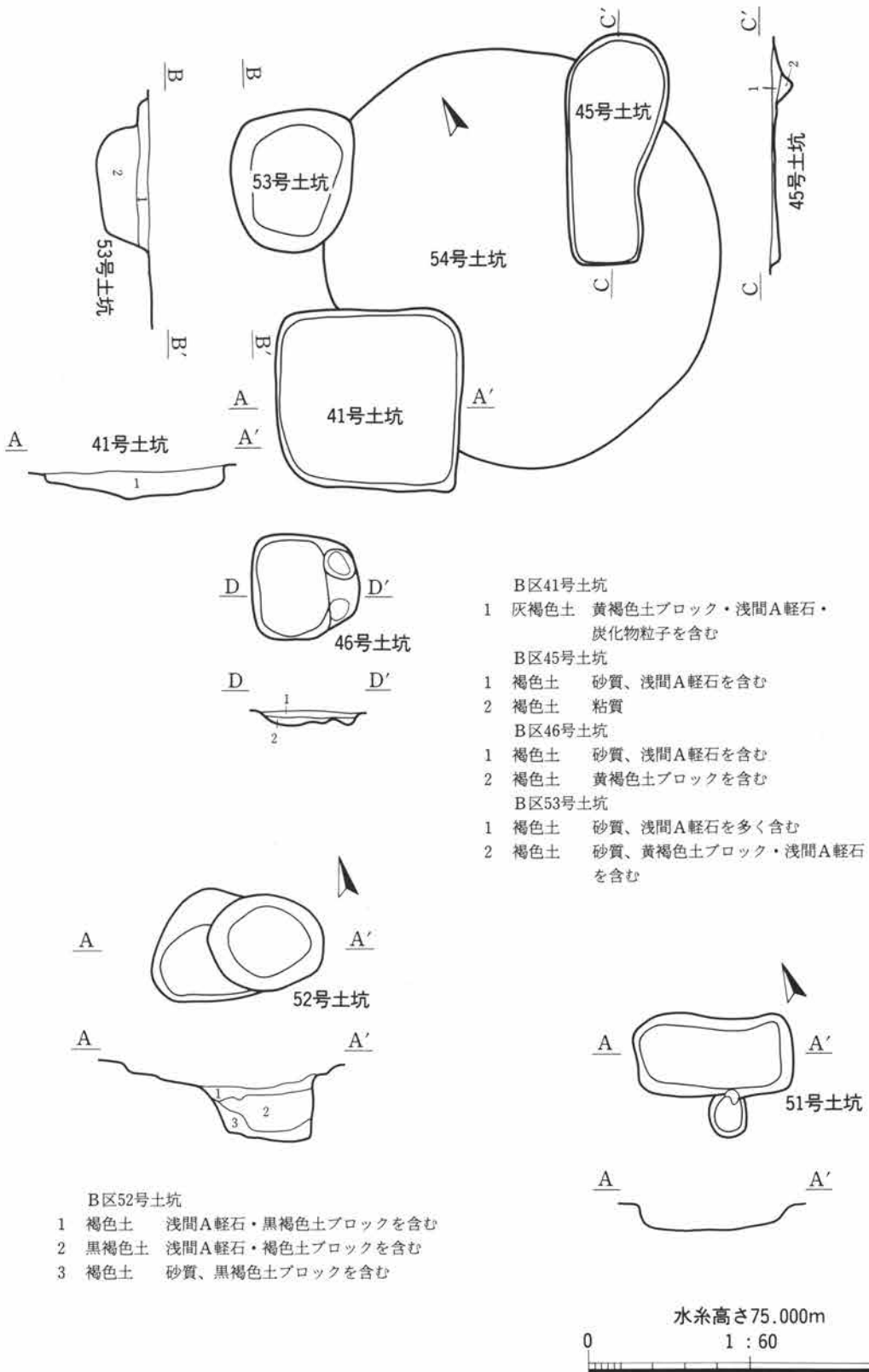
水系高さ75.000m



第98図 田端地区B区18～21号土坑



第99図 田端地区B区22・24・25・34・38・39号土坑



第100図 田端地区B区41・45・46・51・52・53号土坑

田端地区B区第42・50号土坑（第101・104・106・107図、図版38・39）

Pライン・71km267m付近で検出した。確認面は第2層である。

42号土坑は南北に長い長方形を呈し、中央部に方形の掘り込みがある。最深部の深さは55cmである。中から陶器・磁器のほか、土製の人形の破片が出土した。頭部を欠く接合しない破片で、和服を着ており、膝を折って正座し、手を膝に置いている。

50号土坑は南北に長い長方形を呈し、42号土坑の南側に位置する。深さは最深部で19cmである。中から多量の軟質陶器・陶器・磁器が出土した。いずれも破片のみである。

両者とも19世紀以降の遺構とみられる。

42・50・58号土坑は出土遺物の状態から、当時のゴミ捨て穴と考えられる。

田端地区B区第58号土坑（第102～105図、図版38）

O-Pライン・71km268m付近で検出した。確認面は第2層である。6号溝・16号住居と重複しており、本土坑の方が新しい。

平面形は北側に丸いなすび形を呈する。深さは最深部で68cmである。覆土は自然に堆積している。壁は西側が急角度で、東側はやや緩い角度をもつが、壁の確認が不十分であり、正確な形状ではない。底面は平坦面をもつ。覆土中位でほぼ完形に近い内耳土器が出土した。底部中央部は割れており、接合する破片は発見していない。

遺物は内耳土器のほか、陶器・磁器の破片を多数出土しているが、図示できるものは少ない。

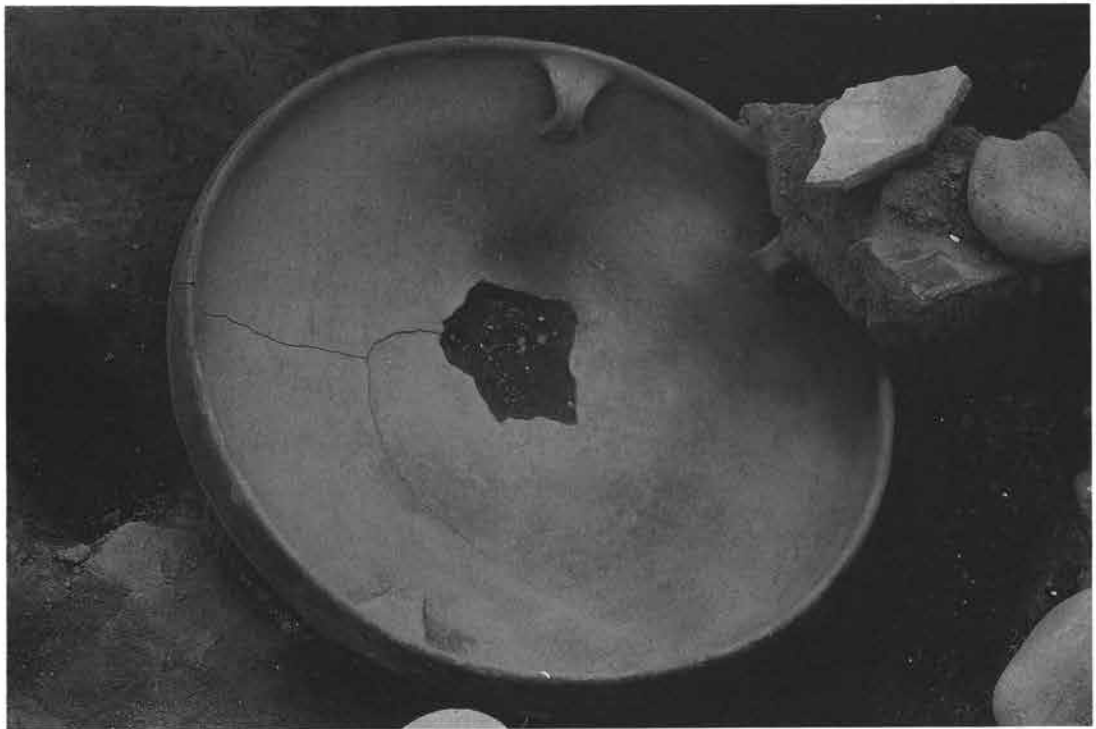
時期は18～19世紀とみられる。



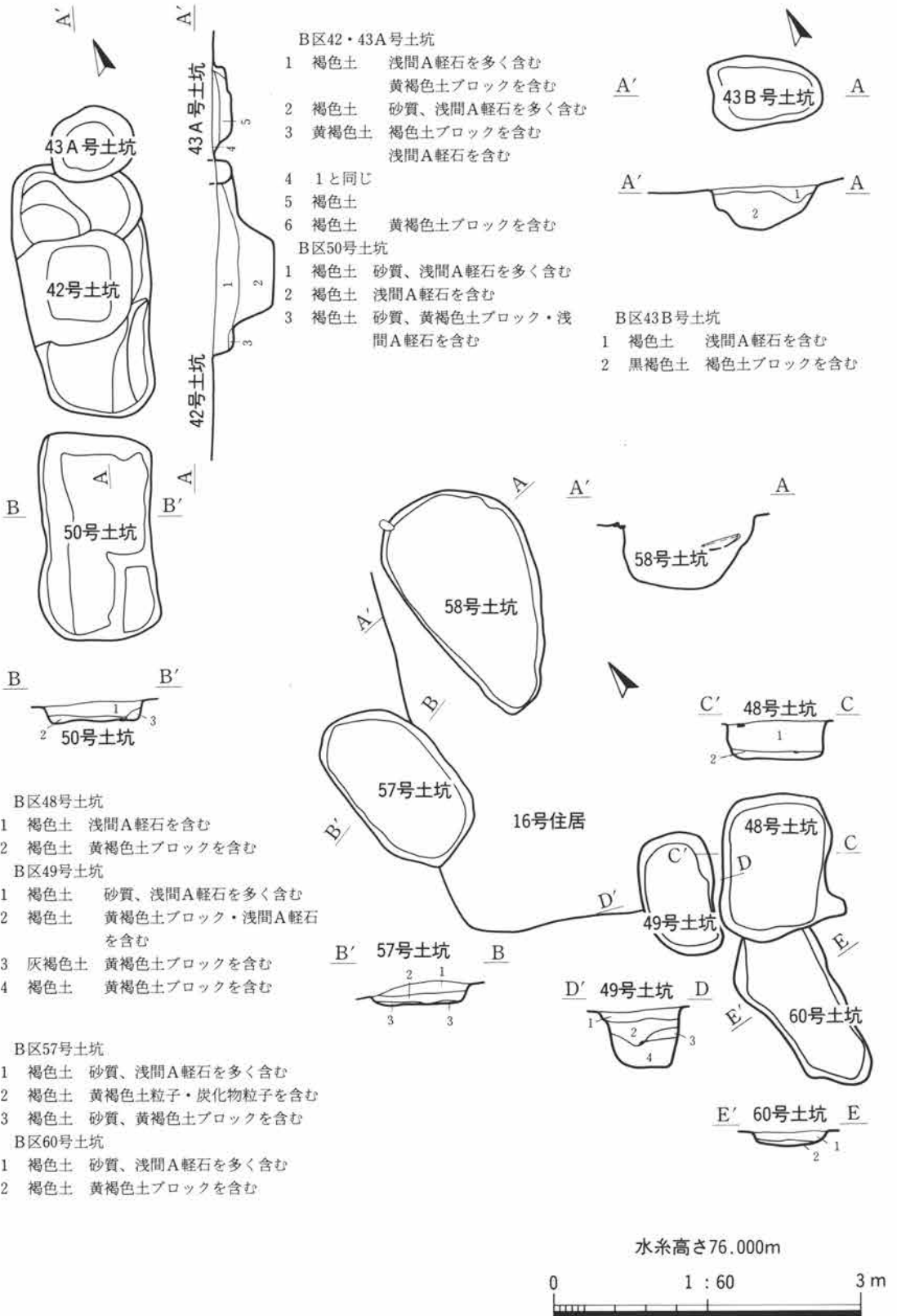
第101図 田端地区B区50号土坑



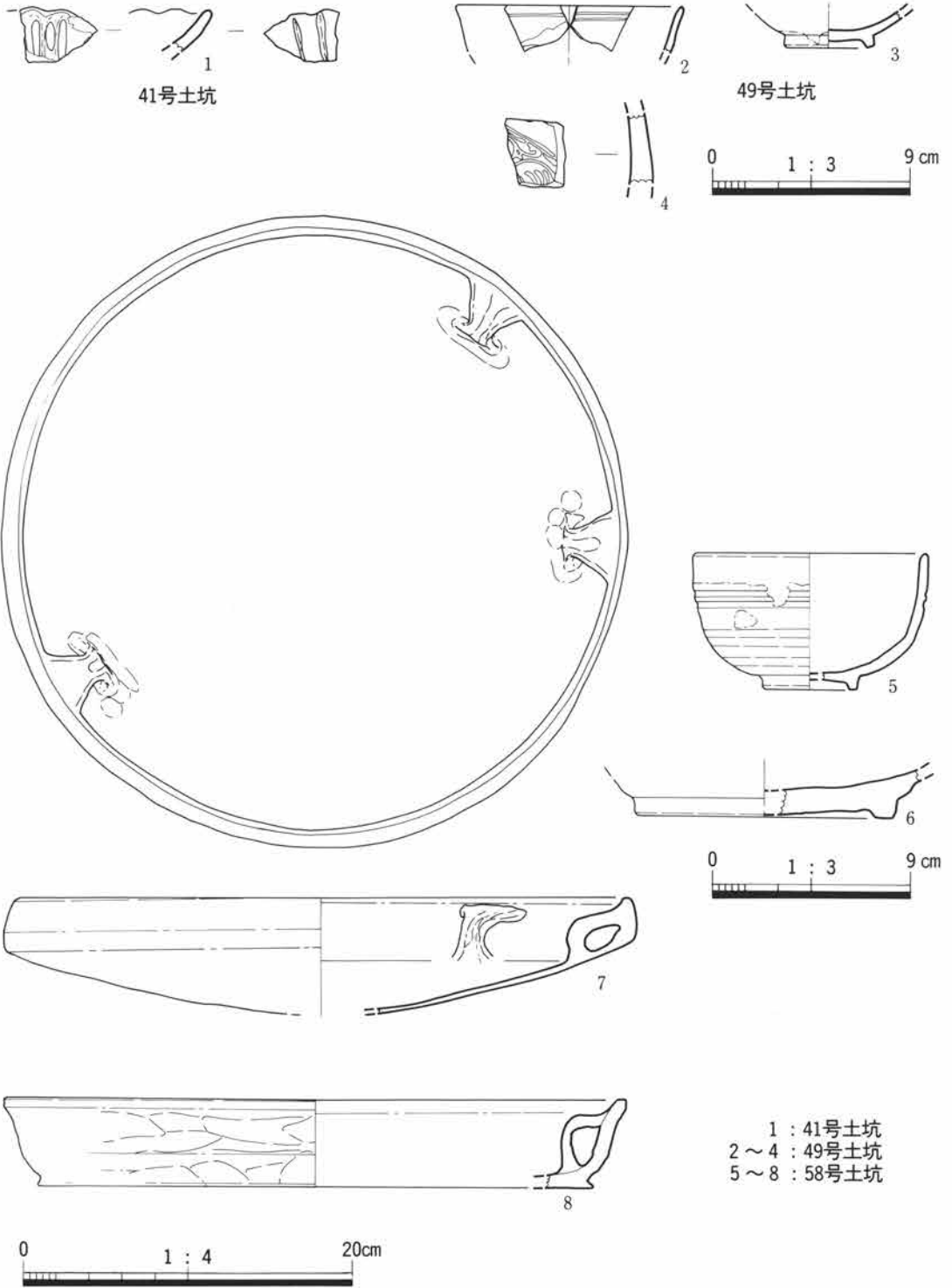
第102図 田端地区B区58号土坑（1）



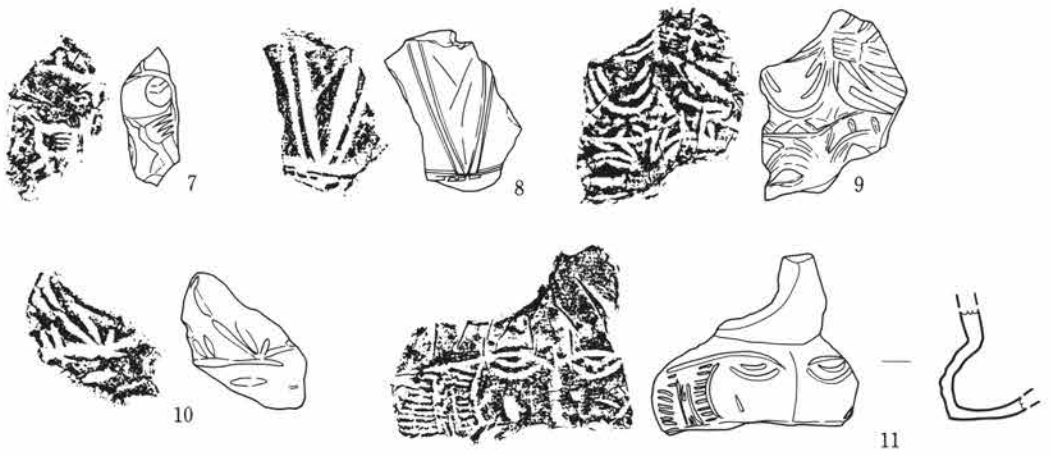
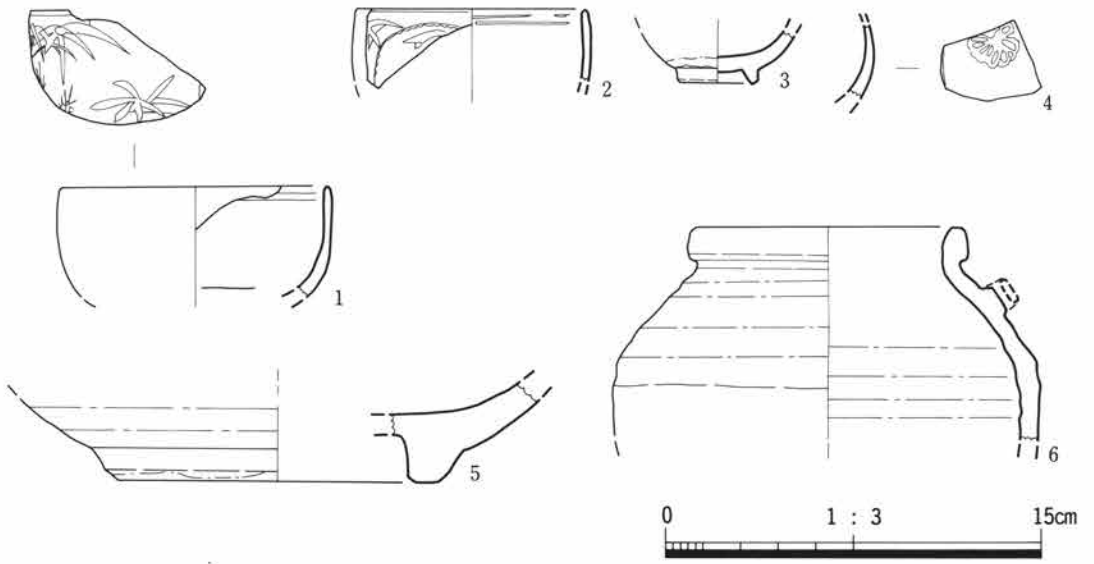
第103図 田端地区B区58号土坑（2）



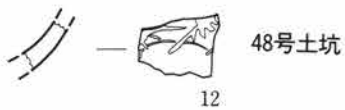
第104図 田端地区B区42・43A・43B・48・49・50・57・58・60号土坑



第105図 田端地区B区41・49・58号土坑出土遺物



42号土坑

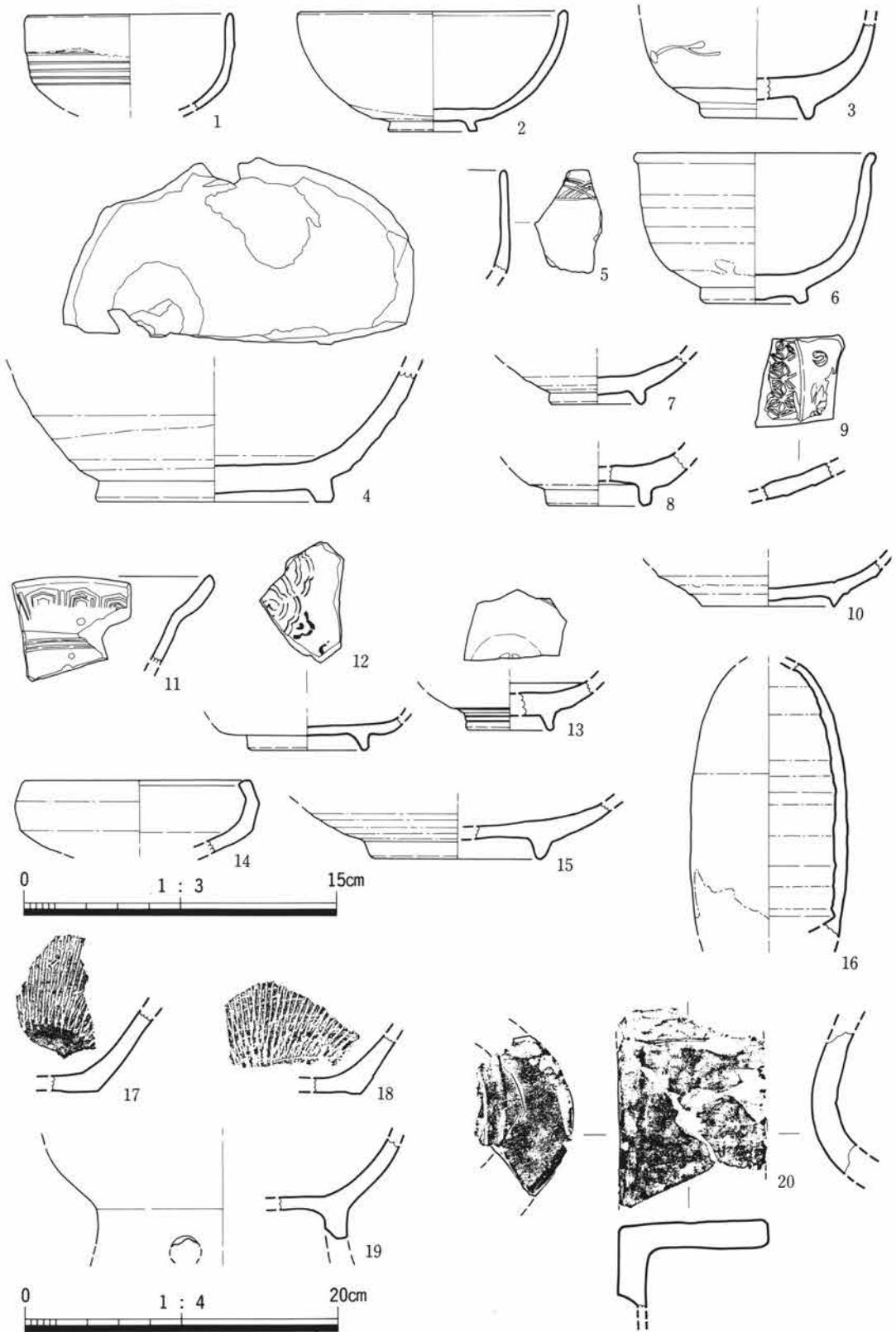


48号土坑

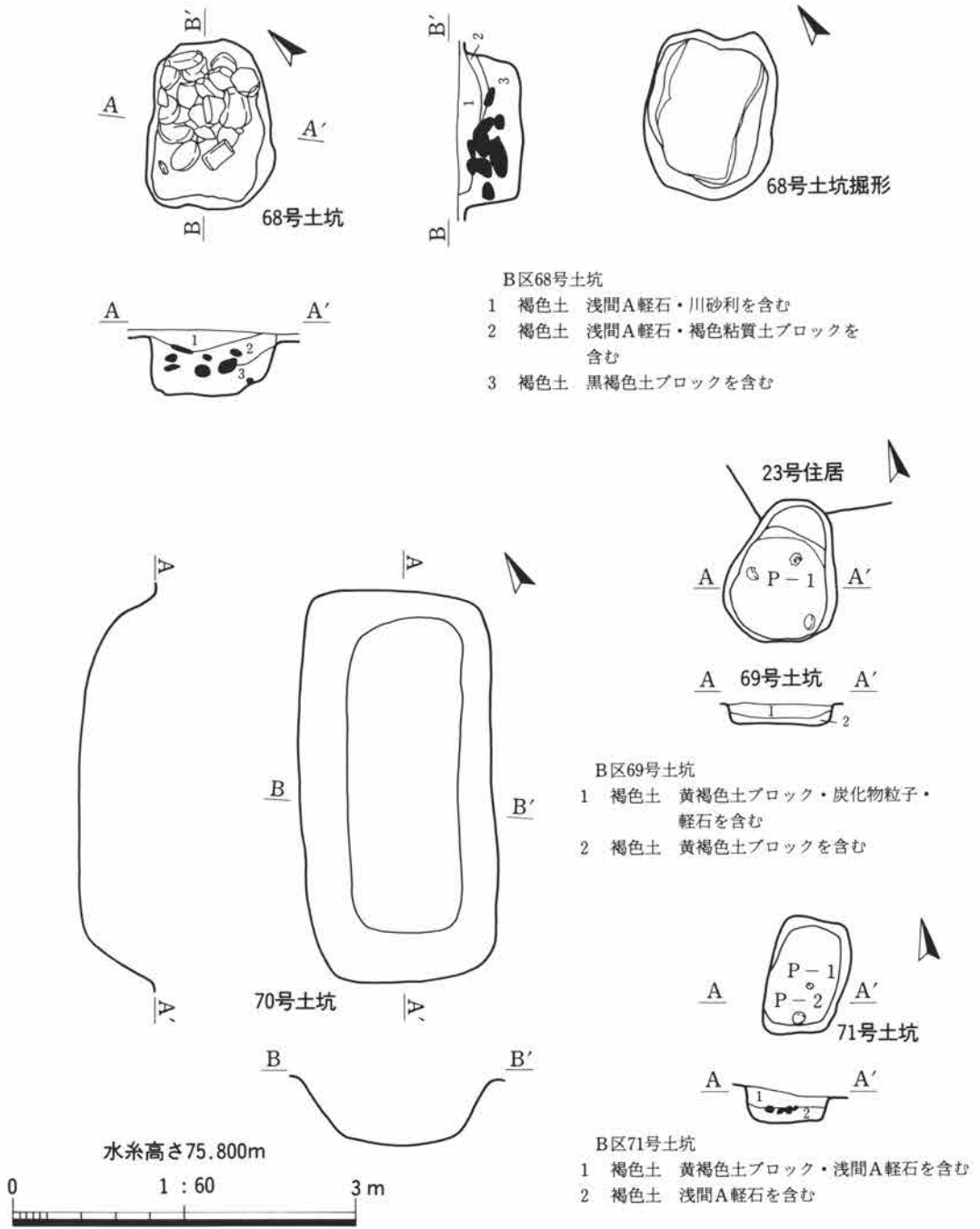
1~11: 42号土坑

12: 48号土坑

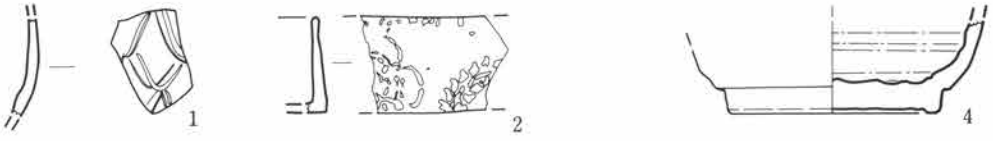
第106図 田端地区B区42・48号土坑出土遺物



第107図 田端地区B区50号土坑出土遺物

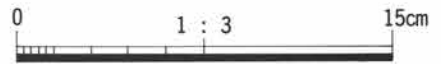
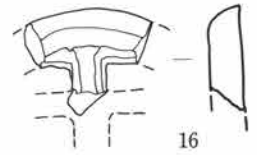
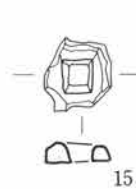
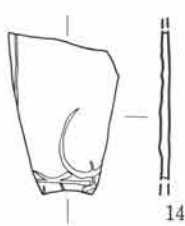
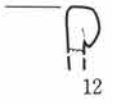
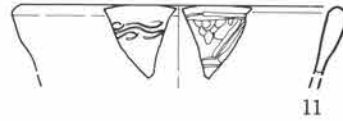
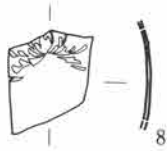
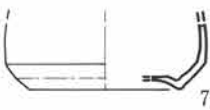
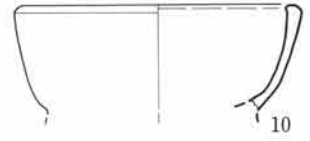
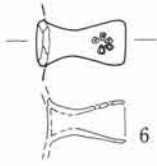
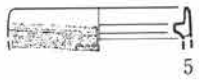


第108図 田端地区B区68・69・70・71号土坑

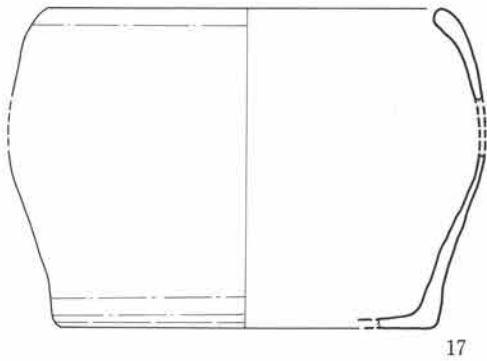


64号土坑

71号土坑

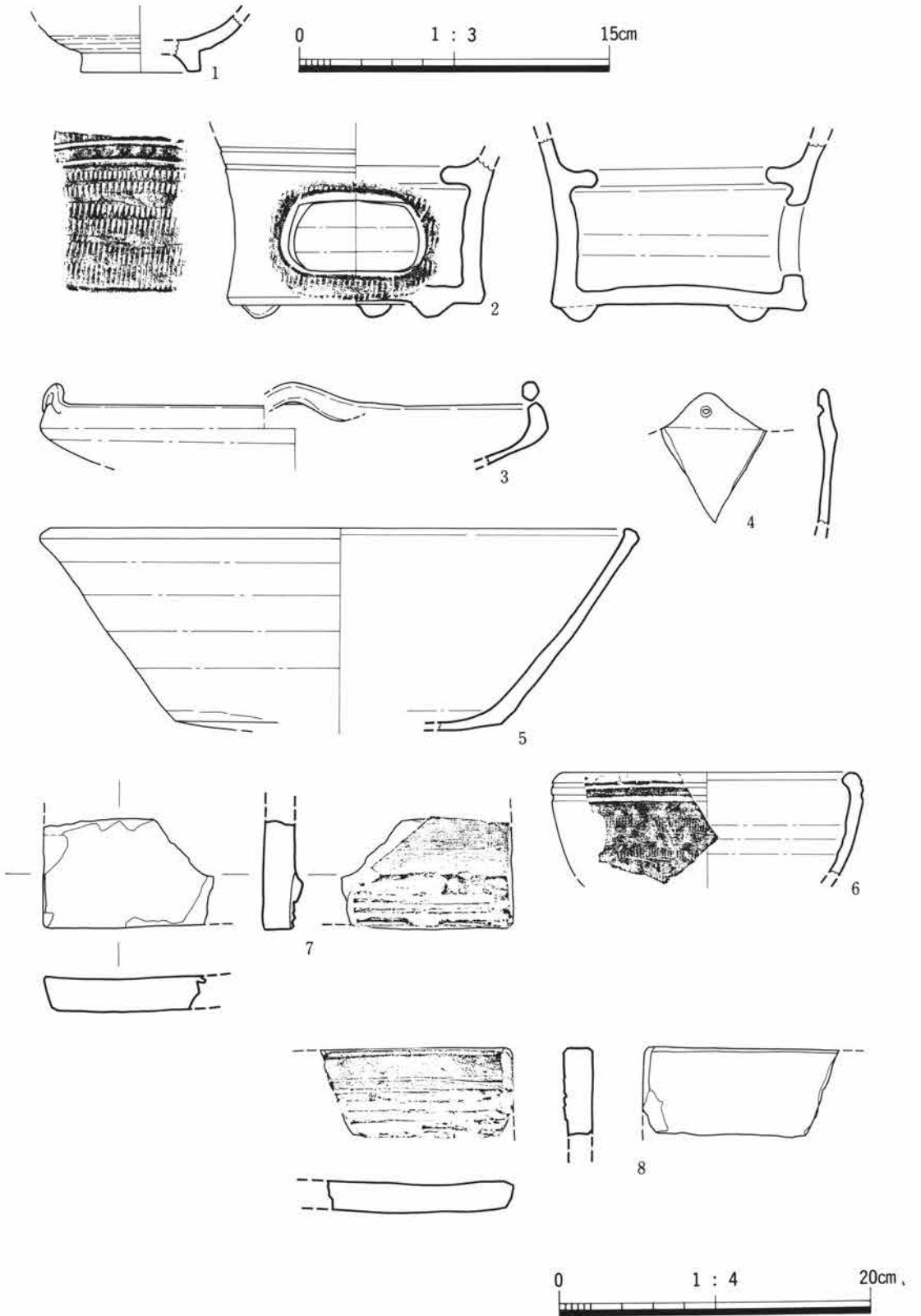


80号土坑

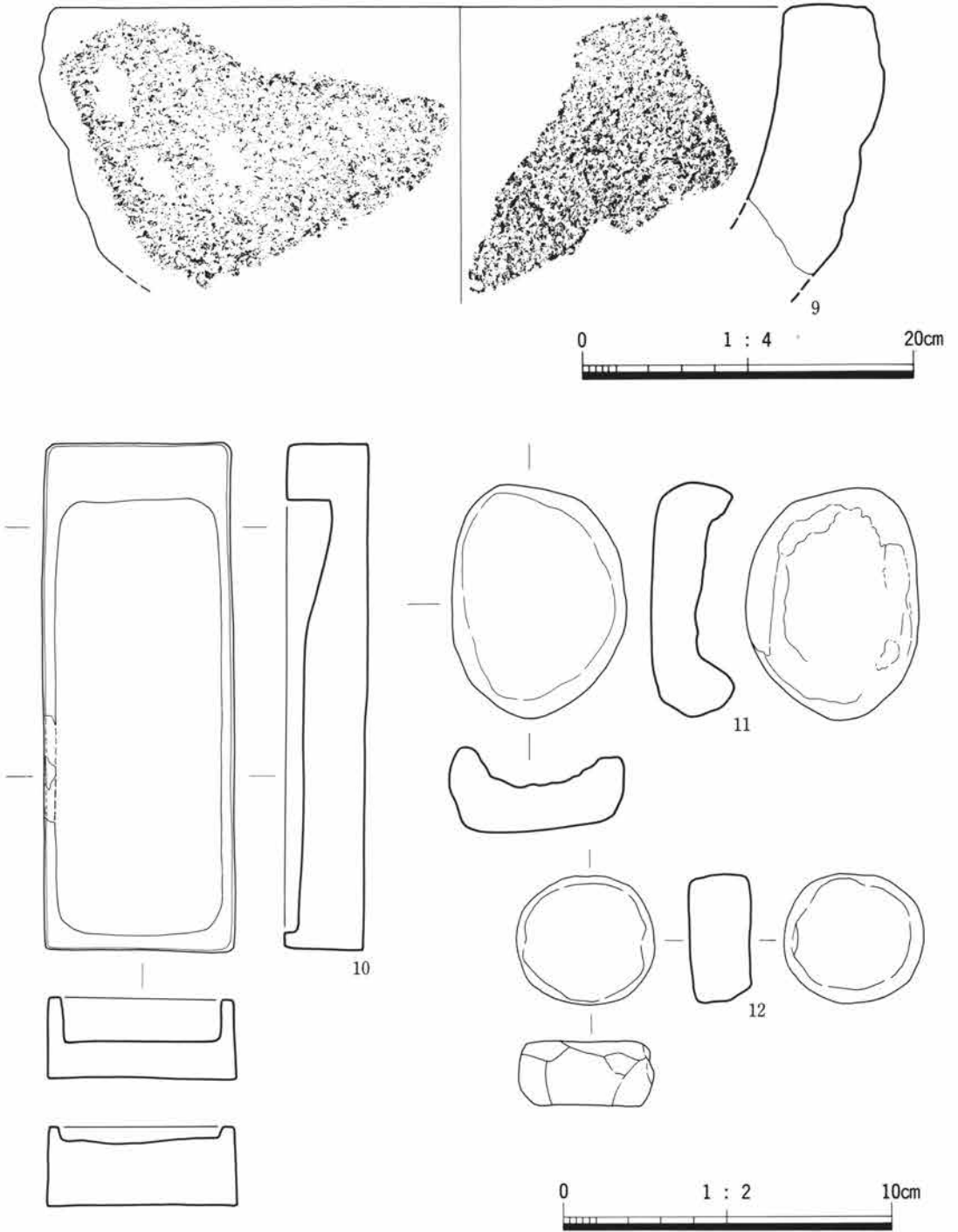


1～3 : 64号土坑
 4 : 71号土坑
 5～17 : 80号土坑

第109図 田端地区B区64・71・80号土坑出土遺物



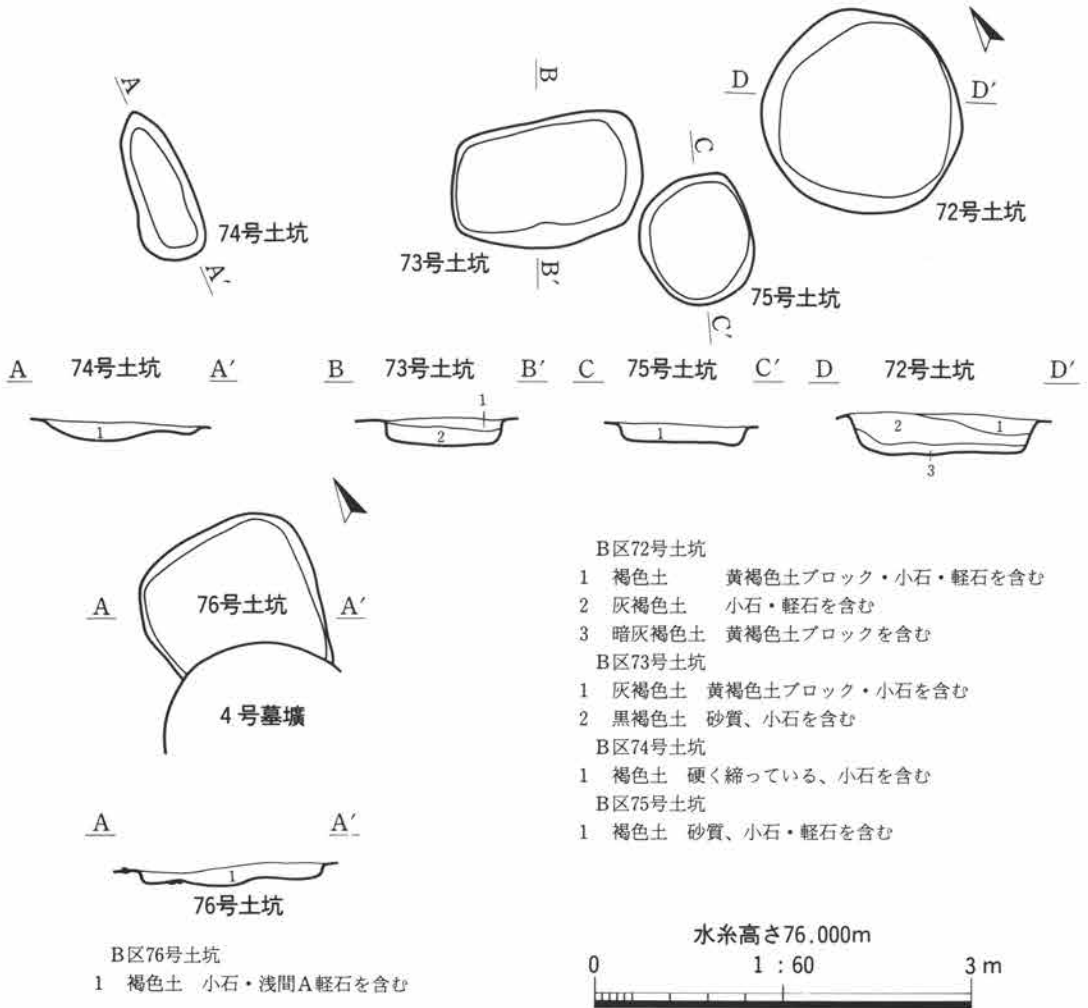
第110図 田端地区B区70号土坑出土遺物（1）



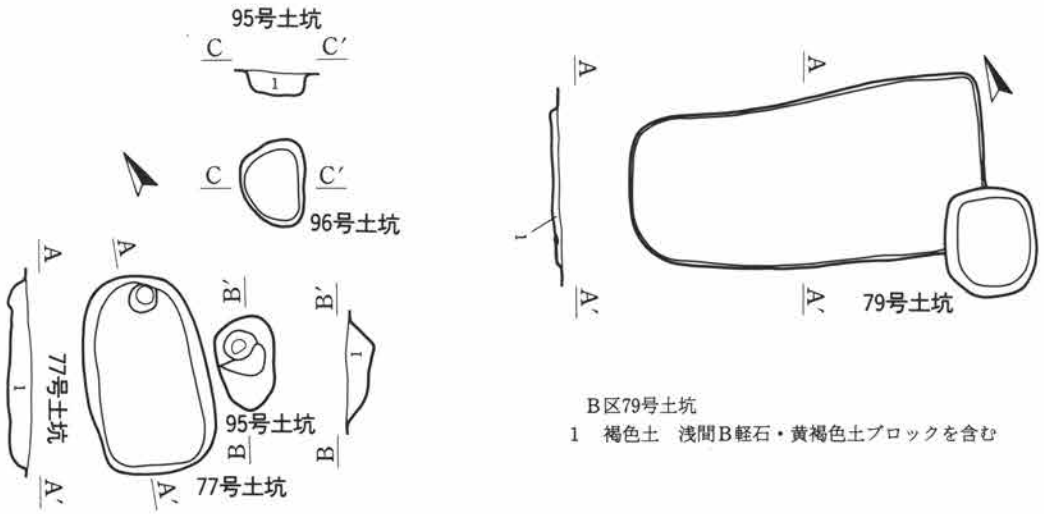
第111図 田端地区B区70号土坑出土遺物(2)



第112図
田端地区B区62・63号土坑



第113図 田端地区B区72～76号土坑



B区79号土坑

- 1 褐色土 浅間B軽石・黄褐色土ブロックを含む

B区77号土坑

- 1 灰褐色土 砂質、黄褐色土粒子・浅間A軽石を含む

B区95号土坑

- 1 褐色土 黄褐色土ブロック・小石・浅間A
軽石を含む

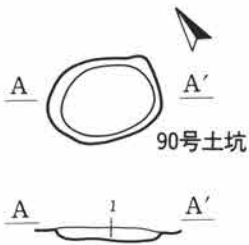
B区96号土坑

- 1 灰褐色土 黄褐色土ブロック・浅間B軽石を含む



B区81号土坑

- 1 褐色土 砂質、軽石を含む

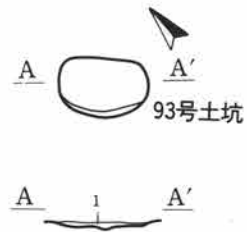


B区90号土坑

- 1 褐色土 黄褐色土粒・浅間B軽石を含む

B区91号土坑

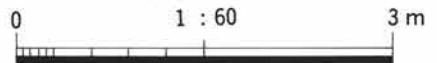
- 1 褐色土 小石・浅間B軽石を含む
2 褐色土 黄褐色土粒を含む



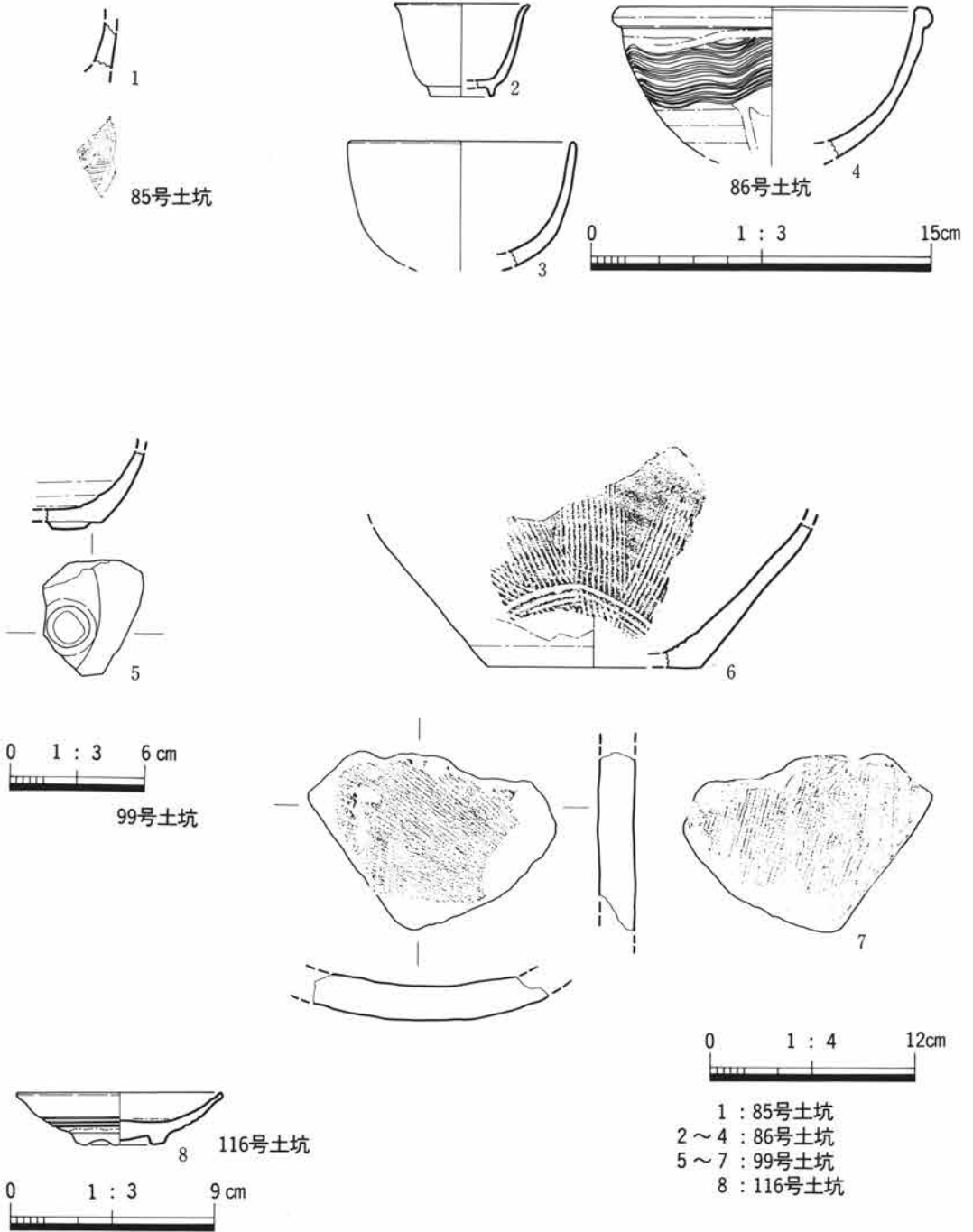
B区93号土坑

- 1 褐色土 浅間B軽石を含む

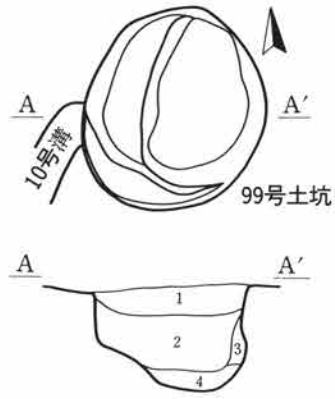
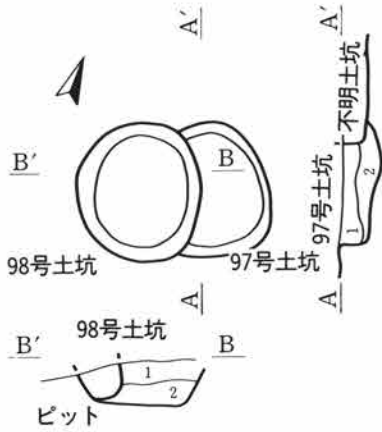
水糸高さ75.800m



第114図 田端地区B区77・79・81・90・91・93・95・96号土坑



第115図 田端地区B区85・86・99・116号土坑出土遺物



B区97・98号土坑

- 1 黒褐色土 黄褐色土ブロック・浅間B軽石を含む
- 2 黒褐色土 黄褐色土ブロックを含む

B区99号土坑

- 1 褐色土 黄褐色土ブロック・浅間A軽石・小石を含む

- 2 灰褐色土
- 3 黄褐色土と褐色土の混合
- 4 灰褐色土 黄褐色土ブロックを含む

B区100号土坑

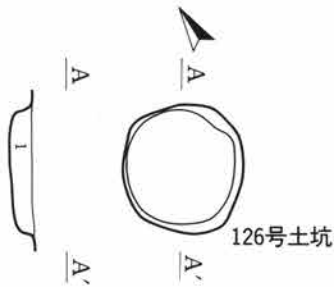
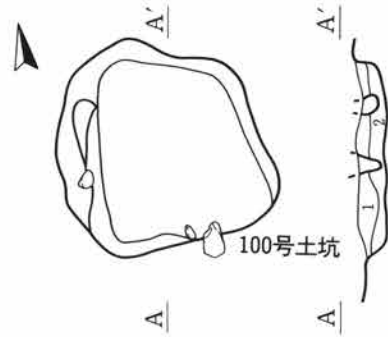
- 1 褐色土 浅間B軽石・小石・黄褐色土ブロックを含む
- 2 褐色土 黄褐色土ブロック・灰・炭化物を含む

B区128号土坑

- 1 黒褐色土 浅間B軽石を含む
- 2 褐色土 黄褐色土ブロックを含む

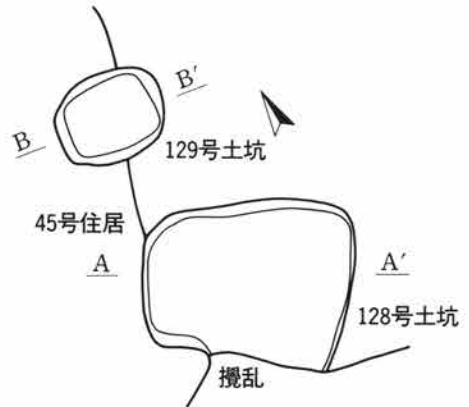
B区129号土坑

- 1 褐色土 小石・浅間B軽石を含む
- 2 褐色土 小石・黄褐色土ブロックを含む

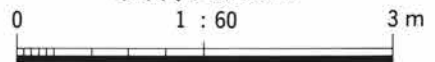


B区126号土坑

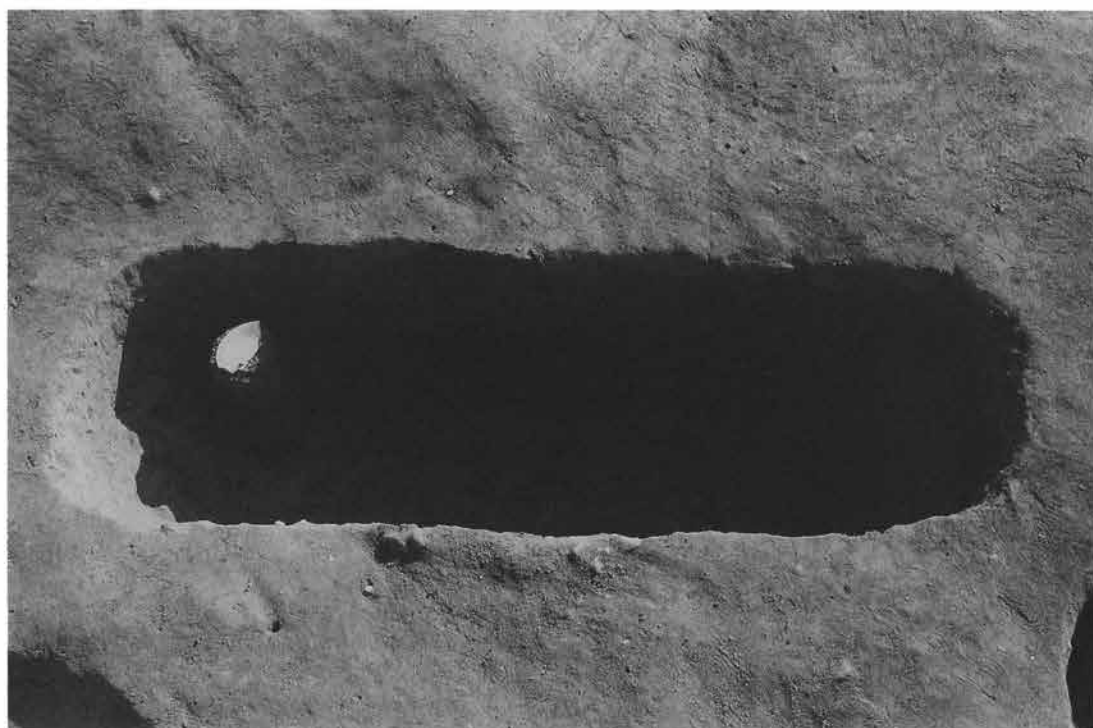
- 1 黒褐色土 砂質、褐色土ブロック・軽石を含む



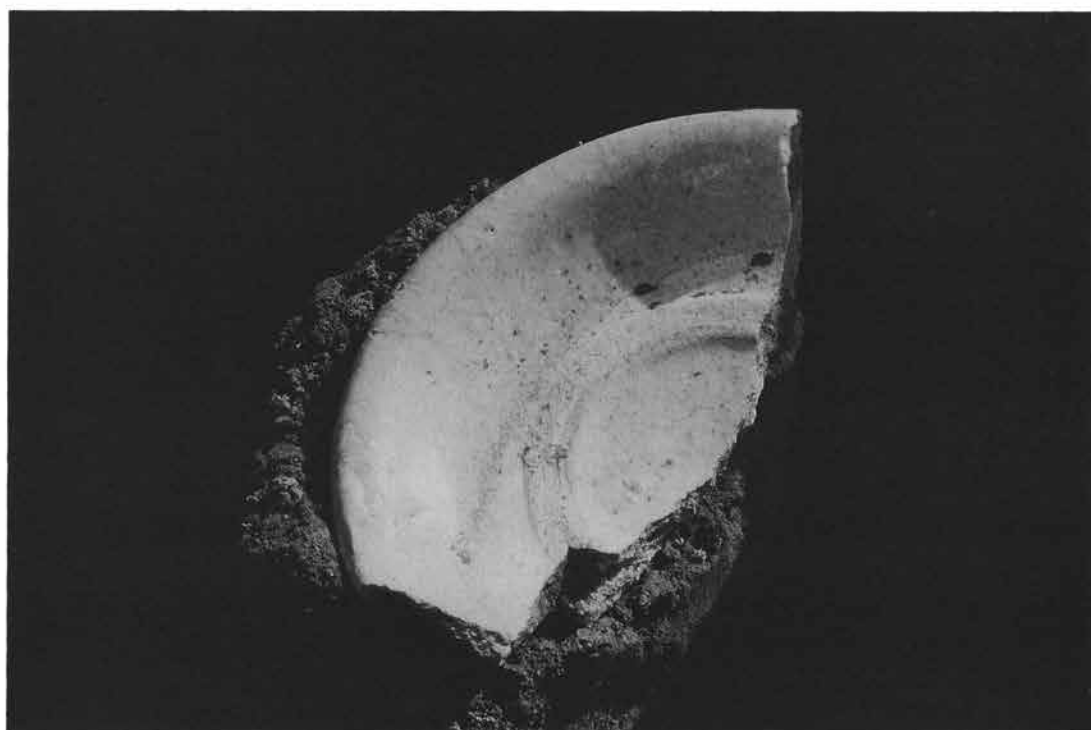
水糸高さ75.800m



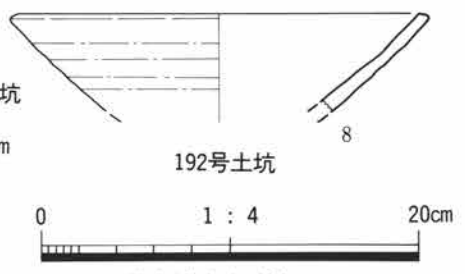
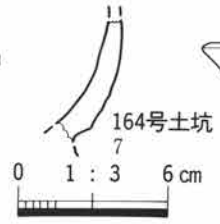
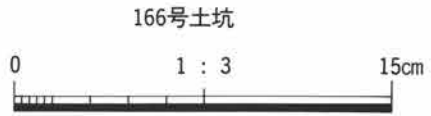
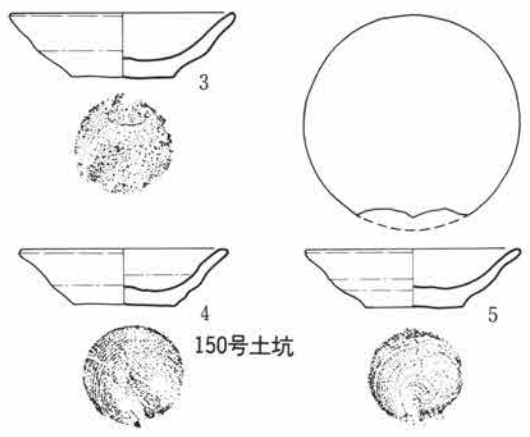
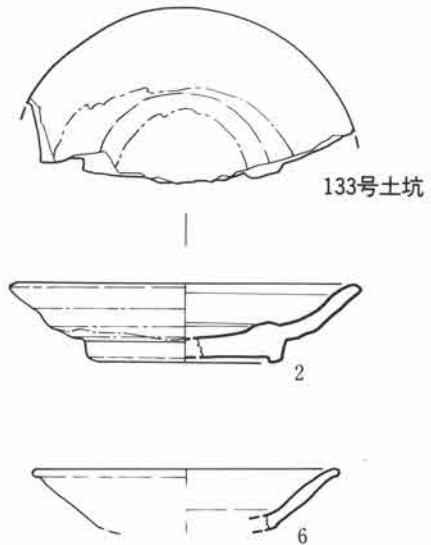
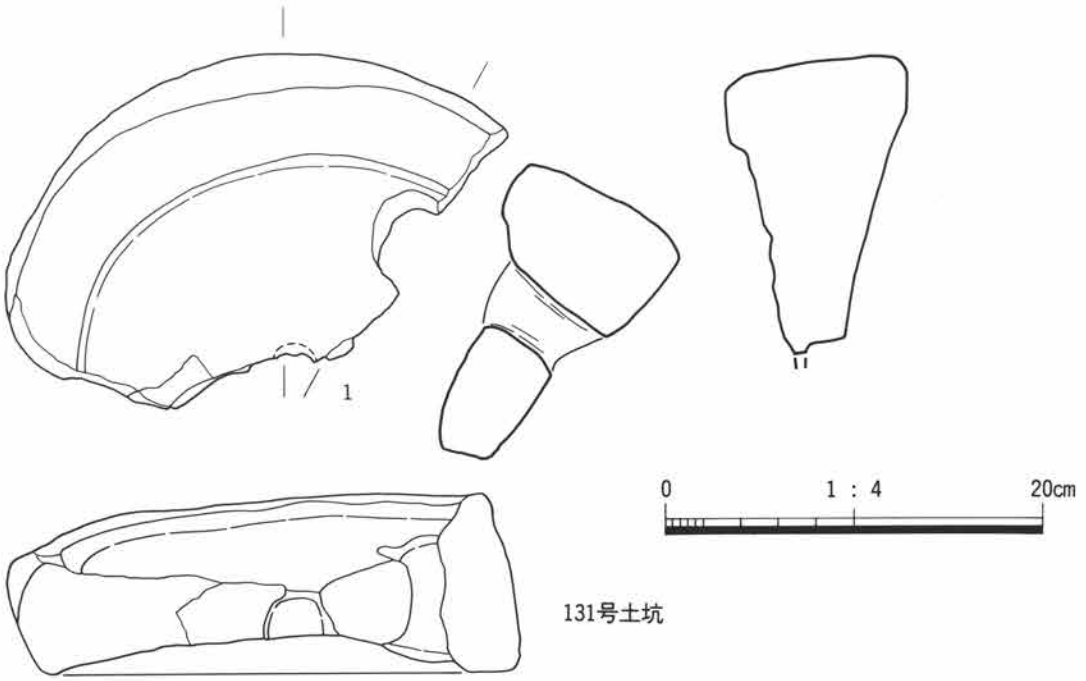
第116図 田端地区B区97・98・99・100・128・129号土坑



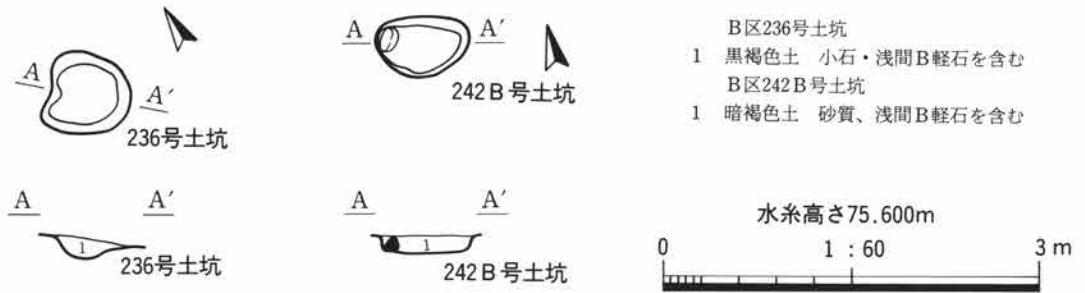
第117図 田端地区B区133号土坑（1）



第118図 田端地区B区133号土坑（2）



第119図 田端地区B区131・133・150・161・164・192号土坑出土遺物



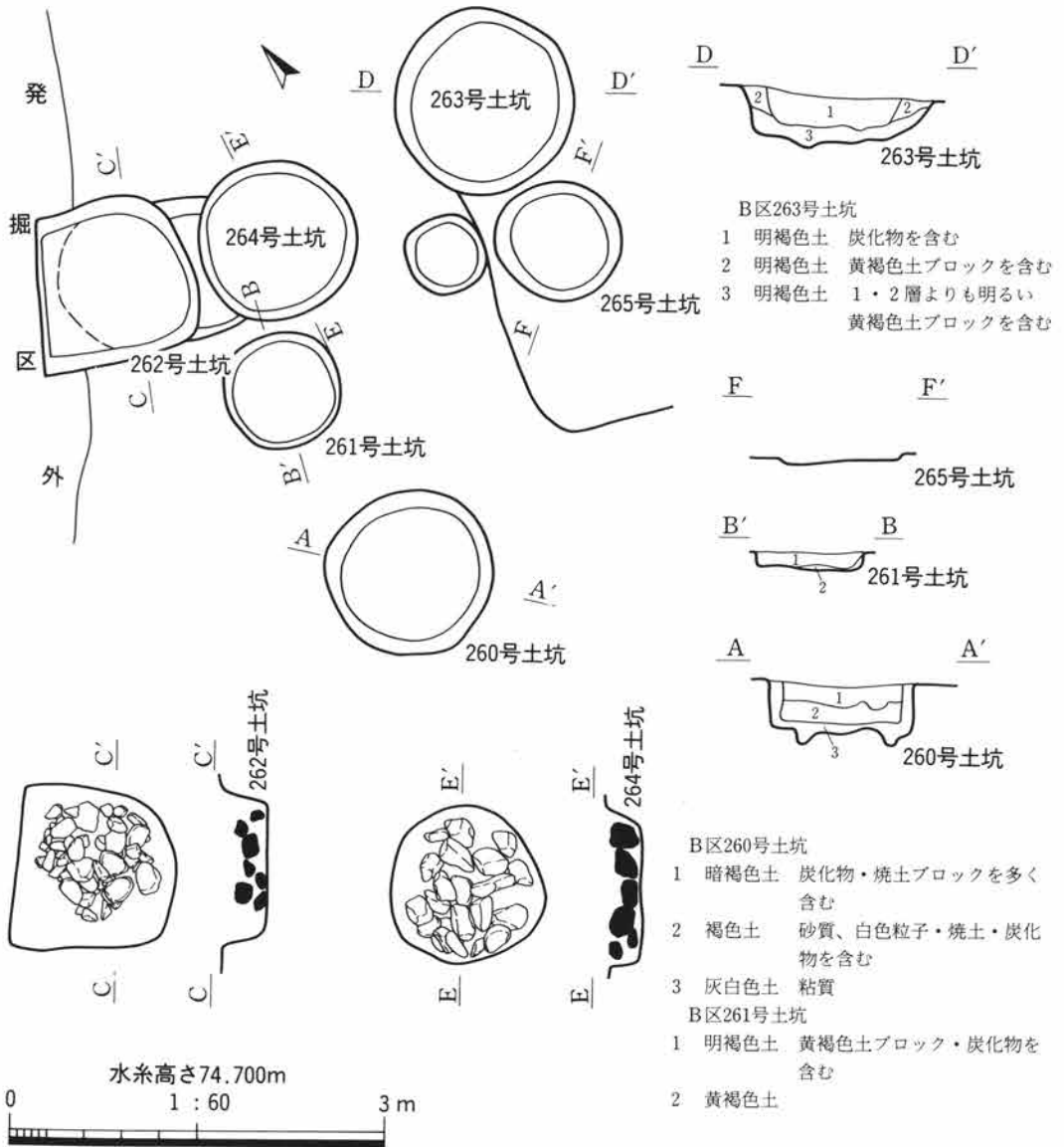
B区236号土坑

1 黒褐色土 小石・浅間B軽石を含む

B区242B号土坑

1 暗褐色土 砂質、浅間B軽石を含む

第120図 田端地区B区226・242号土坑



B区263号土坑

1 明褐色土 炭化物を含む

2 明褐色土 黄褐色土ブロックを含む

3 明褐色土 1・2層よりも明るい黄褐色土ブロックを含む

B区260号土坑

1 暗褐色土 炭化物・焼土ブロックを多く含む

2 褐色土 砂質、白色粒子・焼土・炭化物を含む

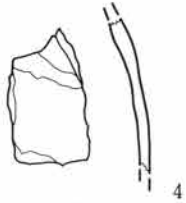
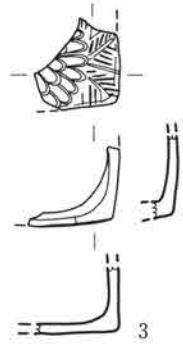
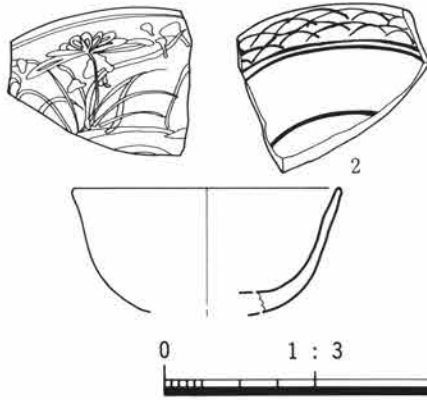
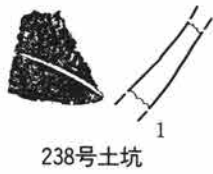
3 灰白色土 粘質

B区261号土坑

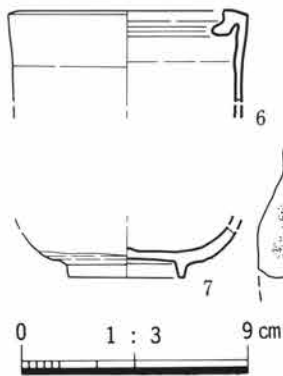
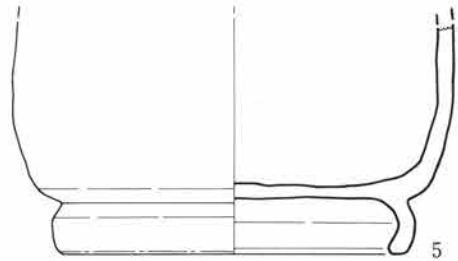
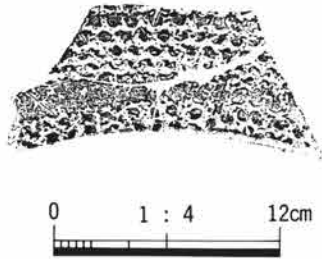
1 明褐色土 黄褐色土ブロック・炭化物を含む

2 黄褐色土

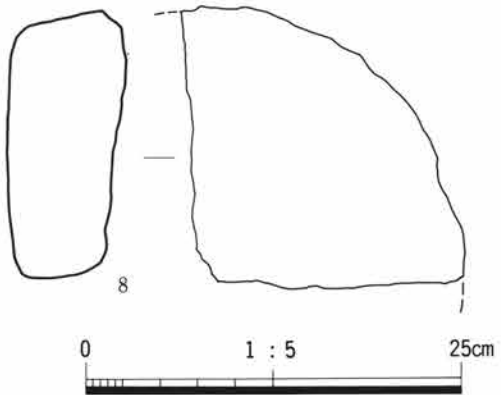
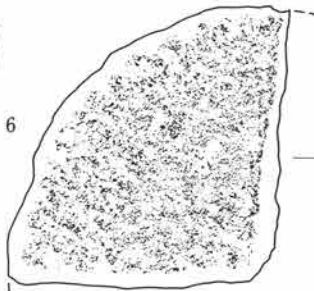
第121図 田端地区B区260・261・262・263・264・265号土坑



260号土坑



261号土坑

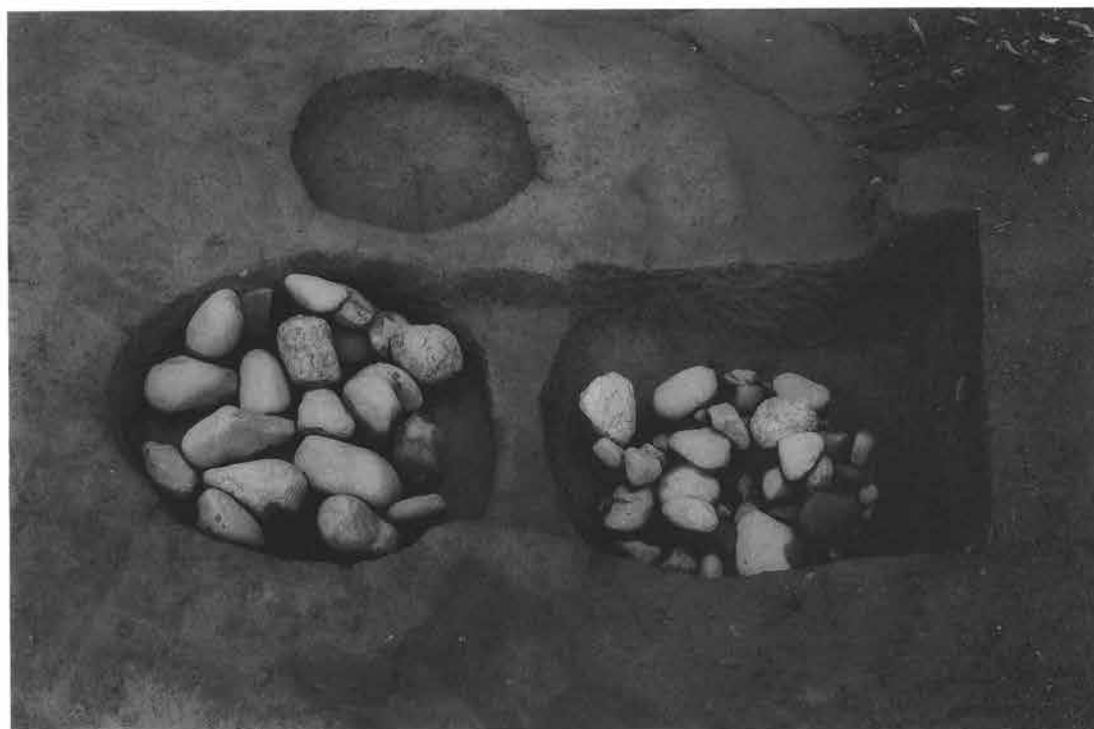


1 : 238号土坑
 2 ~ 5 : 260号土坑
 6 ~ 8 : 261号土坑

第122図 田端地区B区238・260・261号土坑出土遺物



第123図 田端地区B区260号土坑



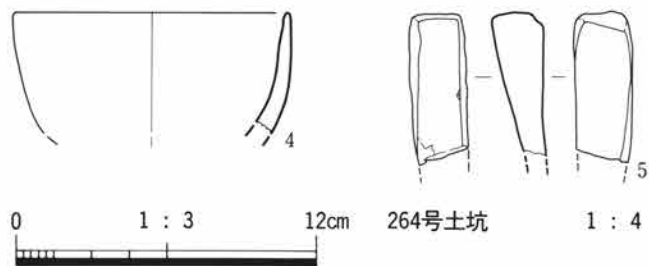
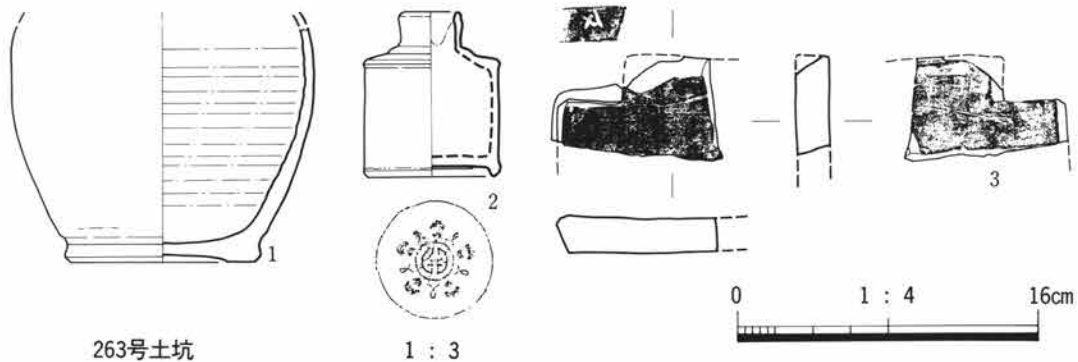
第124図 田端地区B区261・262・264号土坑（1）



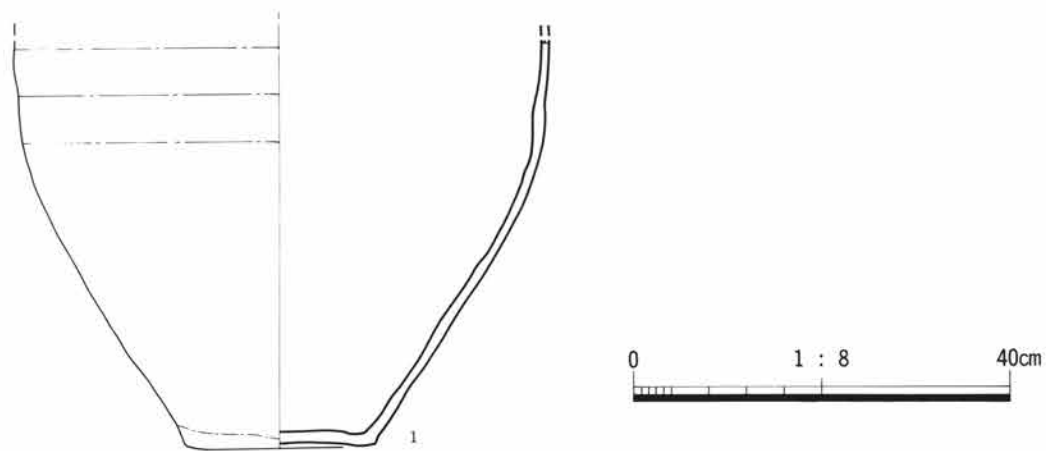
第125図 田端地区B区261・262・264号土坑（2）



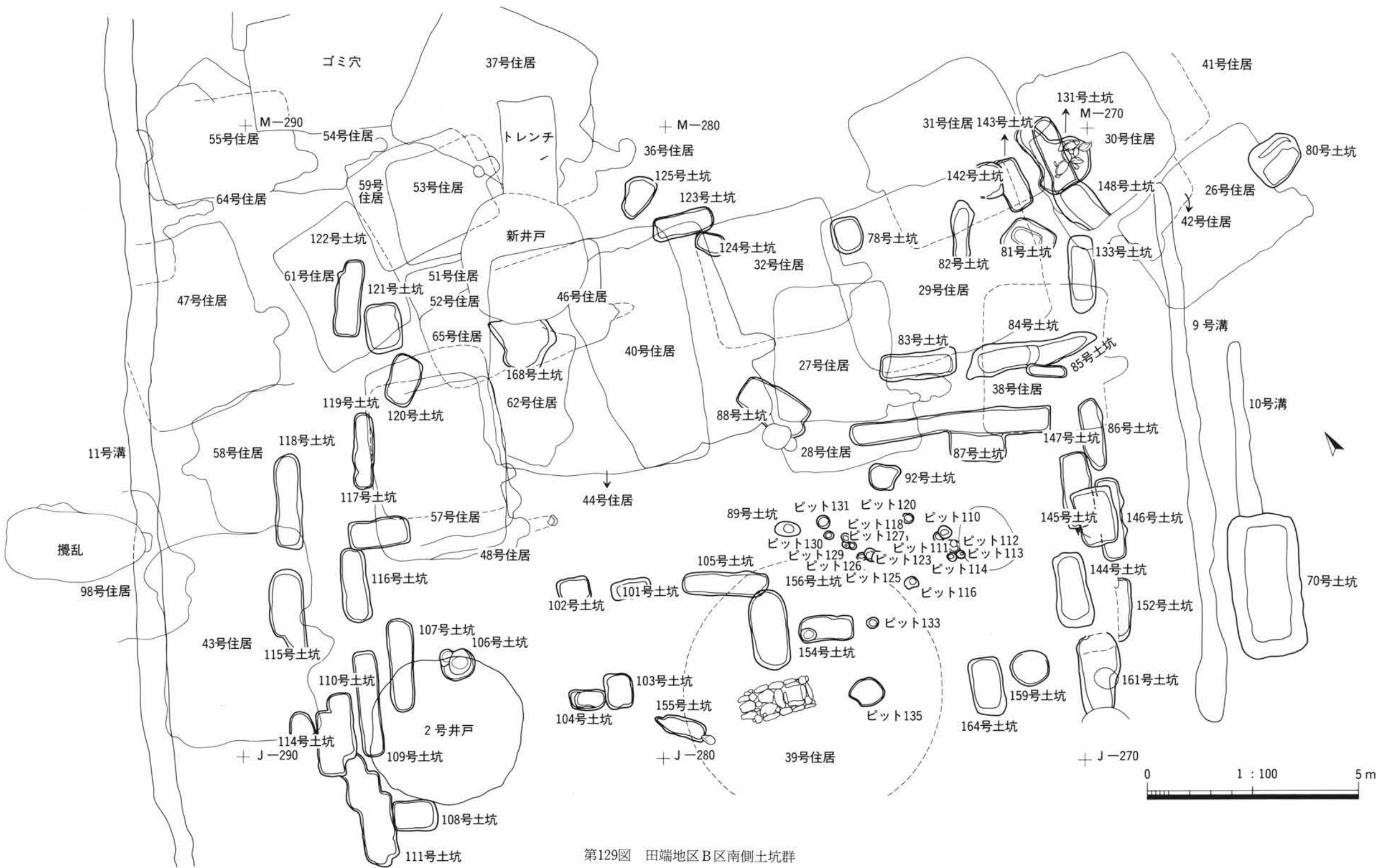
第126図 田端地区B区263号土坑



第127図 田端地区B区263・264号土坑出土遺物



第128図 田端地区B区21号ピット出土遺物



第129図 田端地区B区南側土坑群

田端地区B区南側土坑群（第129図、図版5・6）

J-Mライン・71km270～71km290m付近で検出した土坑群を一括して扱う。確認面は第2層である。これらの土坑群は互いにはほぼ直交する方向をもち、形状は楕円形・長方形を主体とする。東側を9・10号溝、西側を11号溝によって限られた東西25mほどの範囲に分布する。その中央部の墓壇群の西側にはピットが集中している。土坑群はすべて住居跡よりも新しい。

いずれも内部に、浅間A軽石を何等かの形で含んでおり、18世紀後半以降の所産とみられる。遺物はそれぞれ軟質陶器・陶器・磁器を出土した。70号土坑はとくに多量の遺物を出土している。

これらの土坑群は、調査当時は「いも穴」と呼んでいたが、遺構の性格付けとしては適切ではないだろう。ここでは不明としておく。ただ、溝によって限られた範囲に分布しており、調査直前の家屋分布と重ね合わせる必要がある。

田端B区第21号ピット（第128図、図版5・43）

Mライン・71km254m付近で検出した。確認面は第2層である。10号住居・33号土坑と重複しており、本ピットが最も新しい。

掘形は径60cmほどの円形を呈し、内部に大型の甕が据えてあった。この甕は体部の中位以下が遺存しており、上半の形状は不明である。調査中および復元・実測の過程でも異様な臭気が残っていたことから、本ピットは便所の肥甕または人糞の保存に使用されたものと考えられる。

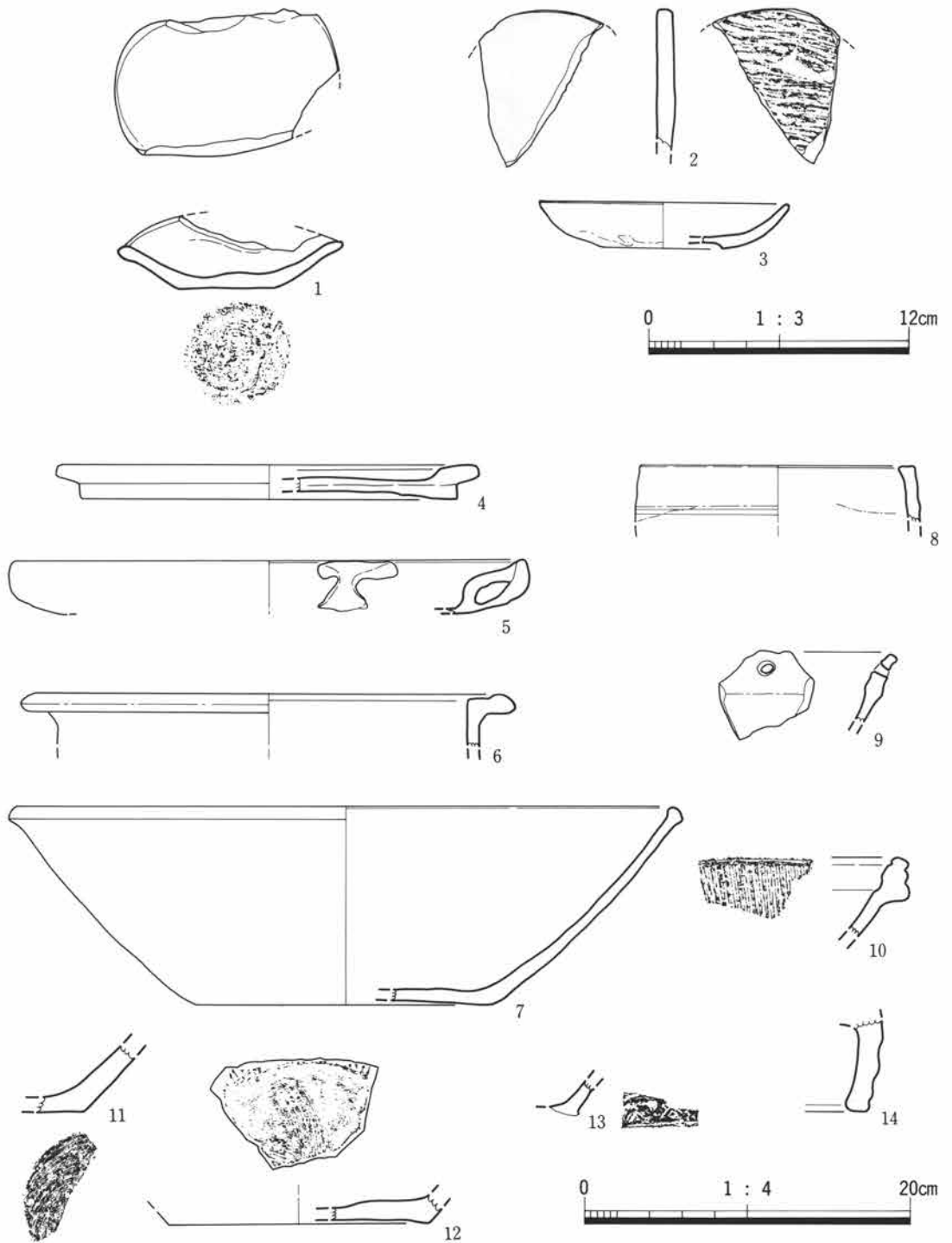
出土甕は常滑製品とみられる。時期は確かな根拠をもたないが、19世紀以降であろう。

田端B区ゴミ穴（第130・131図、図版43・44）

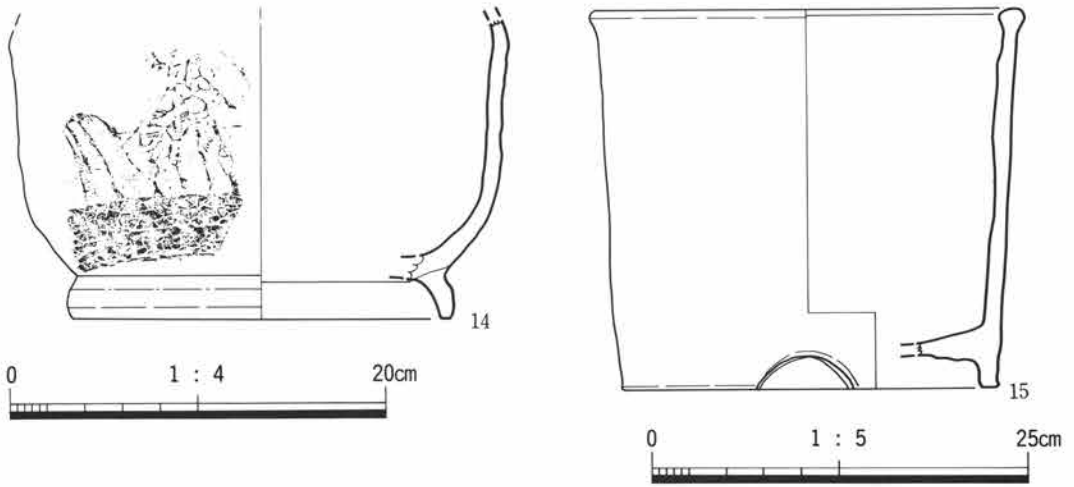
O-Pライン・71km283m付近の攪乱はゴミ穴で、覆土はごく新しい様相を示していたため、とくに土坑番号を付けずに掘り下げた。中から平安時代の遺物と近世以降の遺物が出土している。平安時代の遺物のうち図示できるのは耳皿・須恵器甕体部片を加工して転用した硯の2点である。本ゴミ穴は周辺の住居、土坑を切っていることから、これらの遺構から流れ込んだものと考えられる。その他の遺物は19世紀以降の様相を示す。

田端地区B区遺構外出土遺物（第132～135図、図版44～47）

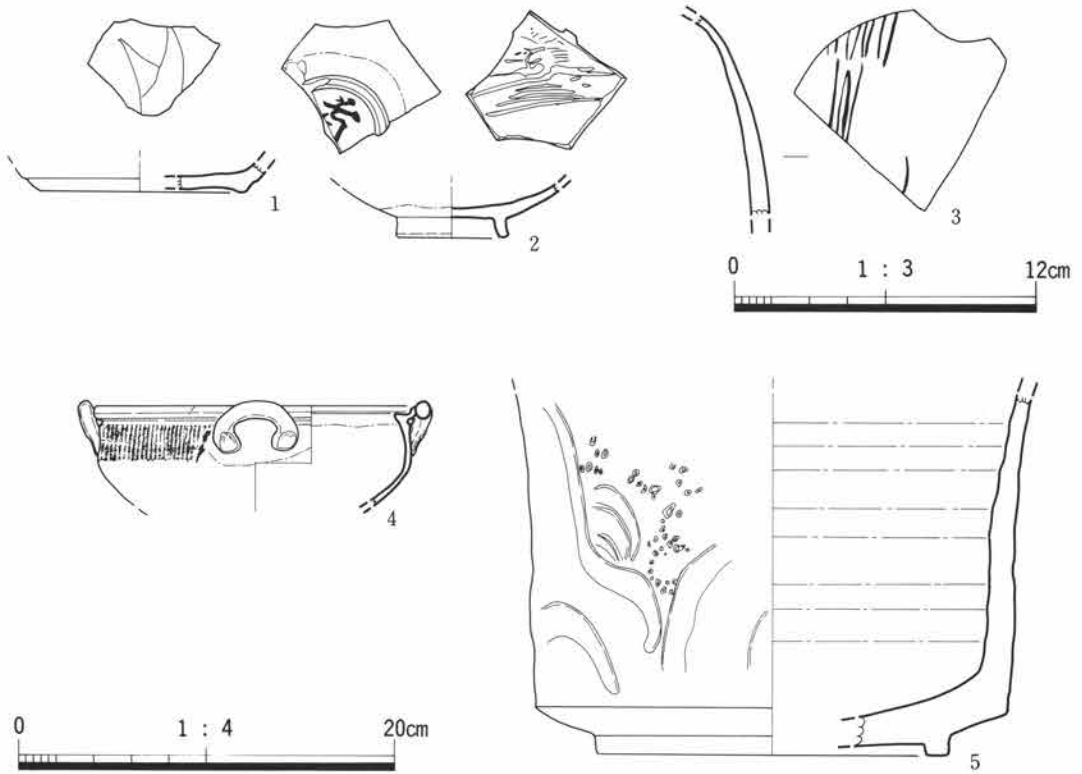
第132図 遺構外出土遺物（1）の1～5は陶器・磁器で、2は外底の高台内に「首」らしい墨書がある。（2）図、（3）図は石製品で、（3）の1～3は五輪塔の空風輪、4は水輪である。（4）図の1は左回転糸切り痕を残す杯、2は本体と高台との間に左回転糸切り痕を残す高台付椀の一部、5は内底に墨書のある灰釉陶器皿、6は灰釉陶器段皿、7は緑釉陶器破片、9は須恵器大型甕の口縁部小片である。



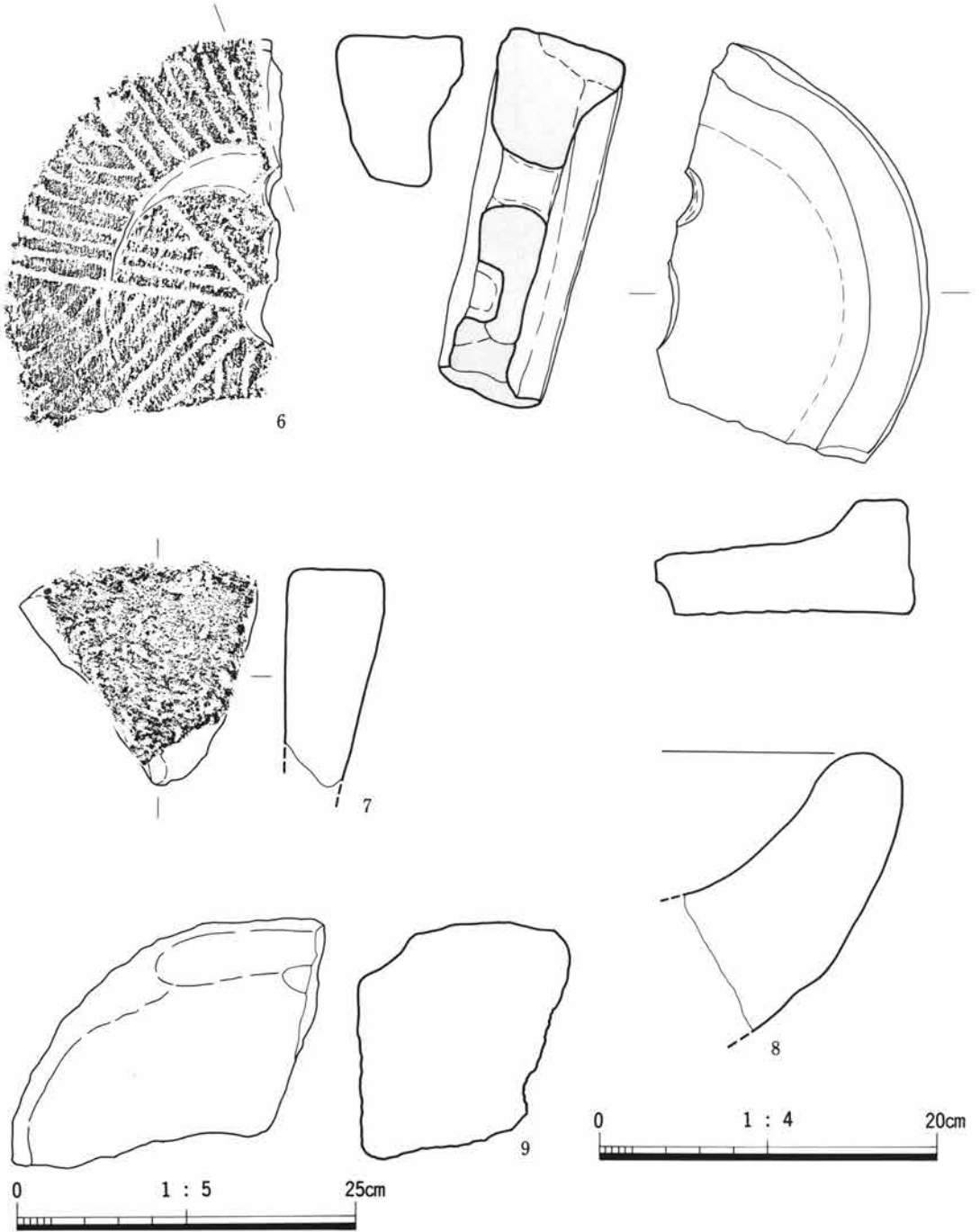
第130図 田端地区B区ゴミ穴出土遺物(1)



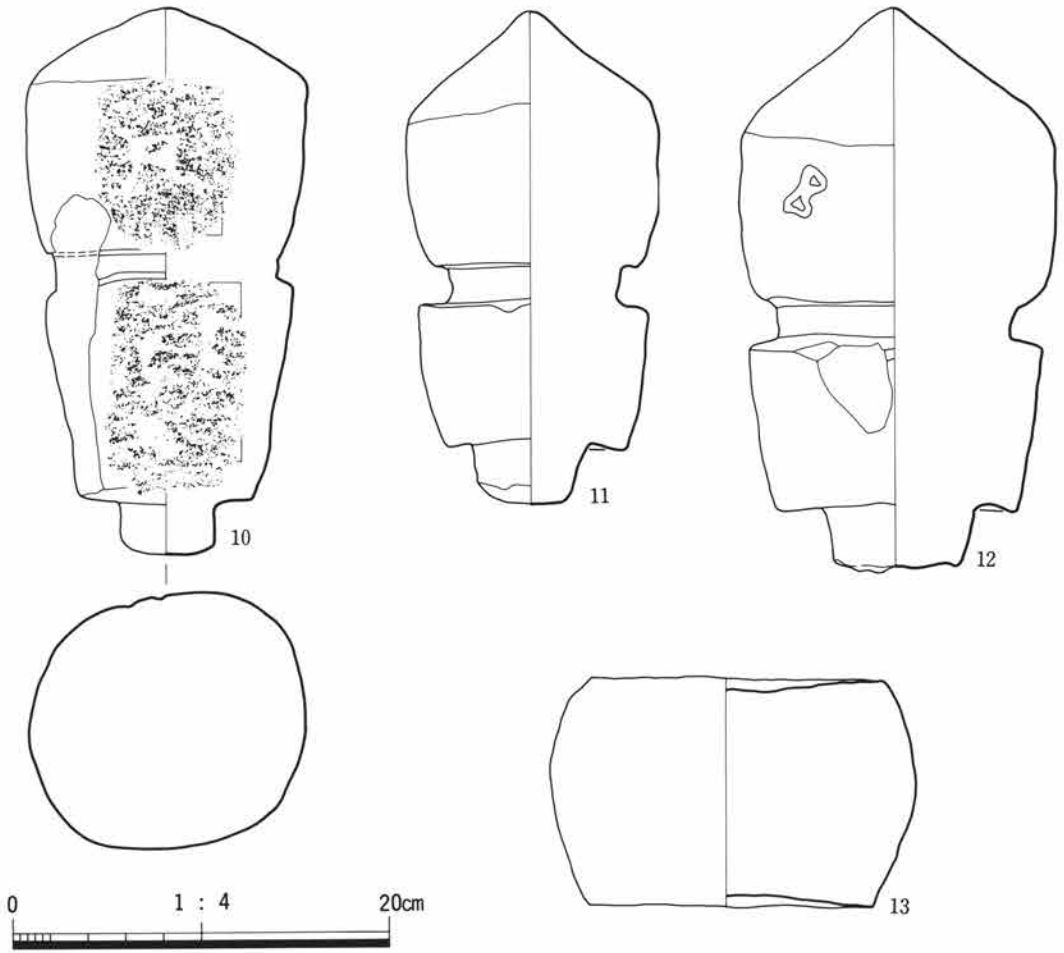
第131図 田端地区B区ゴミ穴出土遺物（2）



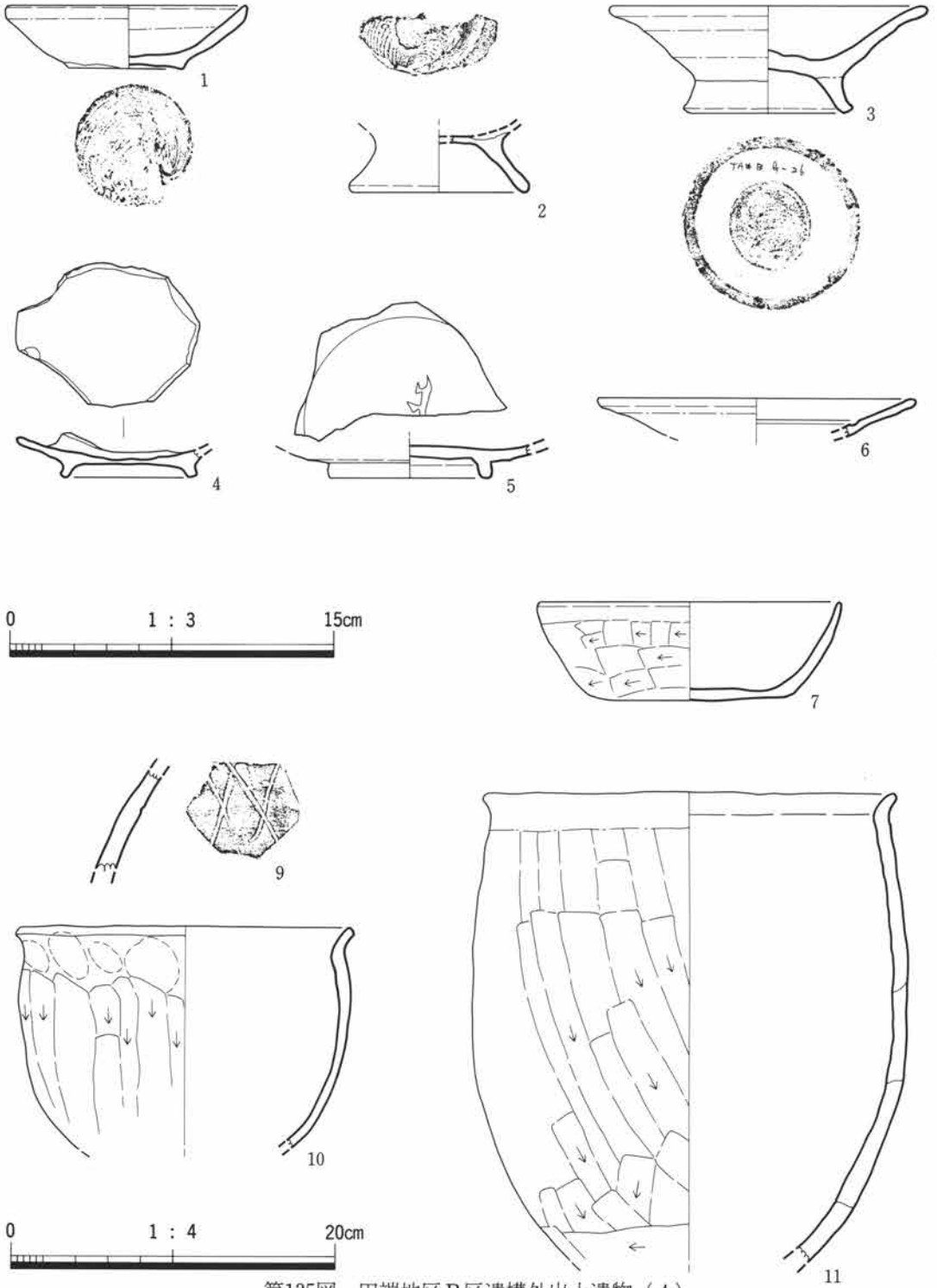
第132図 田端地区B区遺構外出土遺物（1）



第133図 田端地区B区遺構外出土遺物(2)

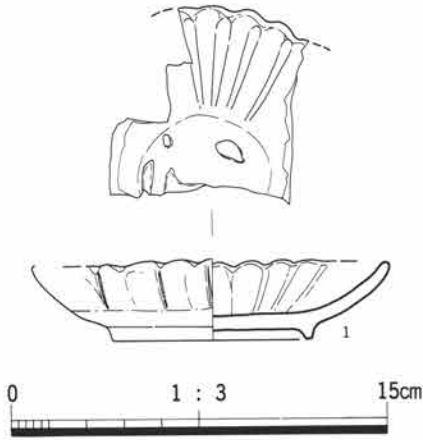


第134図 田端地区B区遺構外出土遺物（3）



第135図 田端地区B区遺構外出土遺物(4)

4 田端地区C区

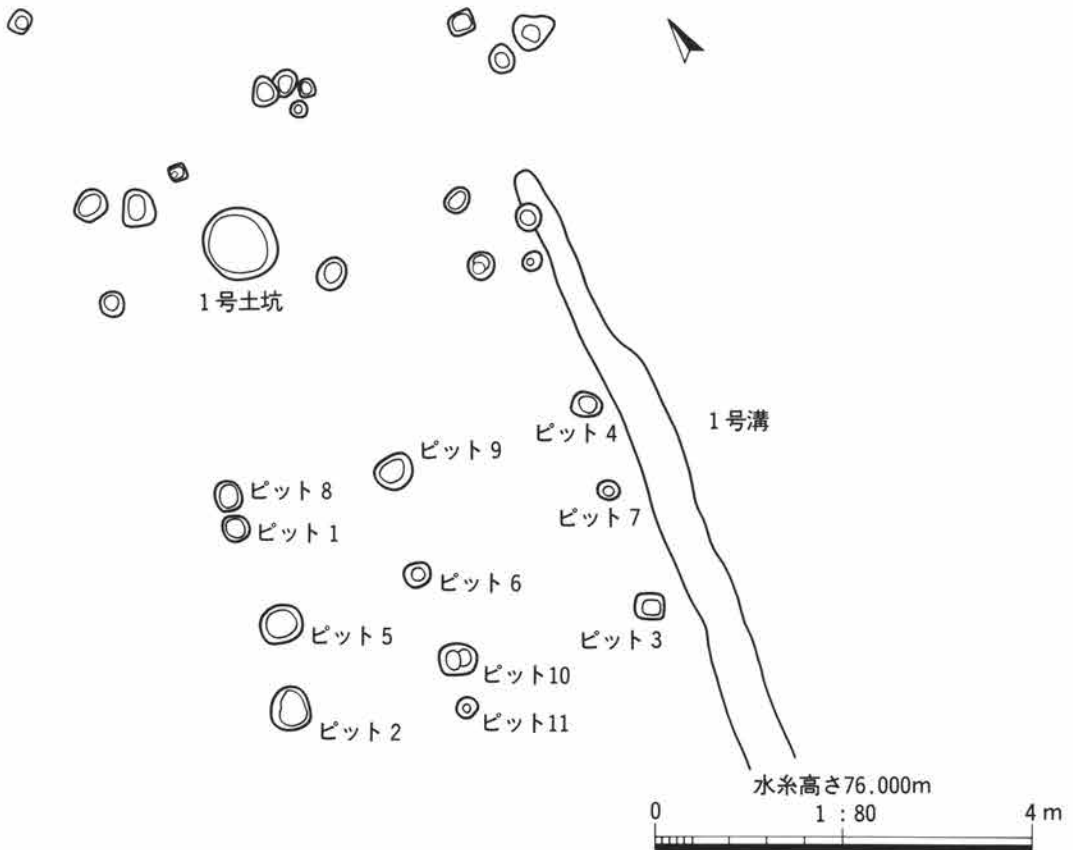


第136図 田端地区C区1号掘立柱建物跡出土遺物

田端地区C区掘立柱建物跡

(第137～140図、図版48)

1号掘立柱建物跡はMライン・71km370m～71km400m付近に推定した。多数のピットがほぼ長方形を呈して並んで検出されたが、柱通りが直線的に結べない。東西約25m、南北15mほどの建物になると推定できる。周囲とピット群内部に土坑を検出している。また、12号溝・2・3号溝・4号溝はこれらのピット群を囲むような位置で検出している。11号溝は12号溝に平行し、1号溝は2・3号溝とほぼ平行している。各ピットの計測値は割愛した。遺物はピット中から菊皿1点が出土したの



第137図 田端地区C区2号掘立柱建物跡



第138図 田端地区C区1号掘立柱建物跡



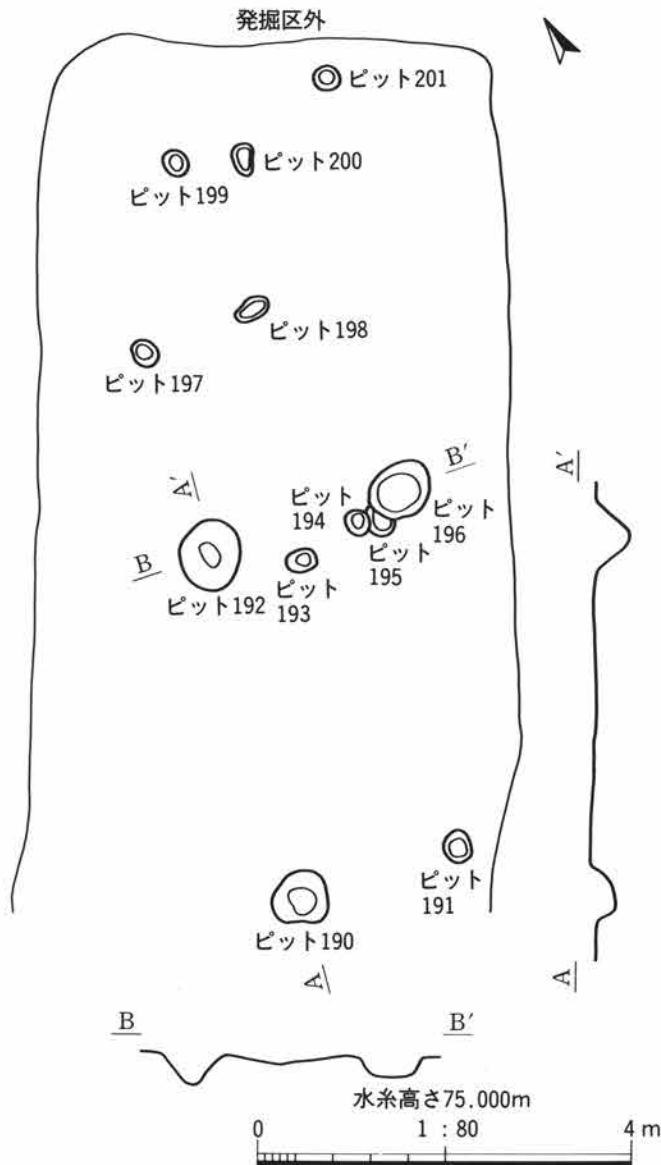
第139図 田端地区C区1号掘立柱建物跡

である。時期は18世紀ころとみられる。

M-Nライン・71km410m～71km420m付近の、1号溝の西側のピット群を2号掘立柱建物跡とした。南部の柱穴は2×2間・総柱の掘立柱建物のように並んでいるが、柱穴は直線的に結べない。各ピットの計測値、ピット間の距離は表の通りである。遺物の出土はない。

O-Pライン・71km365m付近で、ピット群を検出した。これを3号掘立柱建物跡とする。3本の柱穴を発見しているが、これらと組み合う南東部のピットは検出できなかった。各ピットの計測値、ピット間の距離は表の通りである。遺物の出土はない。

以上、3カ所の掘立柱建物跡を考えたが、それぞれ東西・南北方向の柱通りがみられ、ほぼ同様の方向を示していることから、3棟は同じ頃に設営されたものとみられる。



第140図 田端地区C区3号掘立柱建物跡

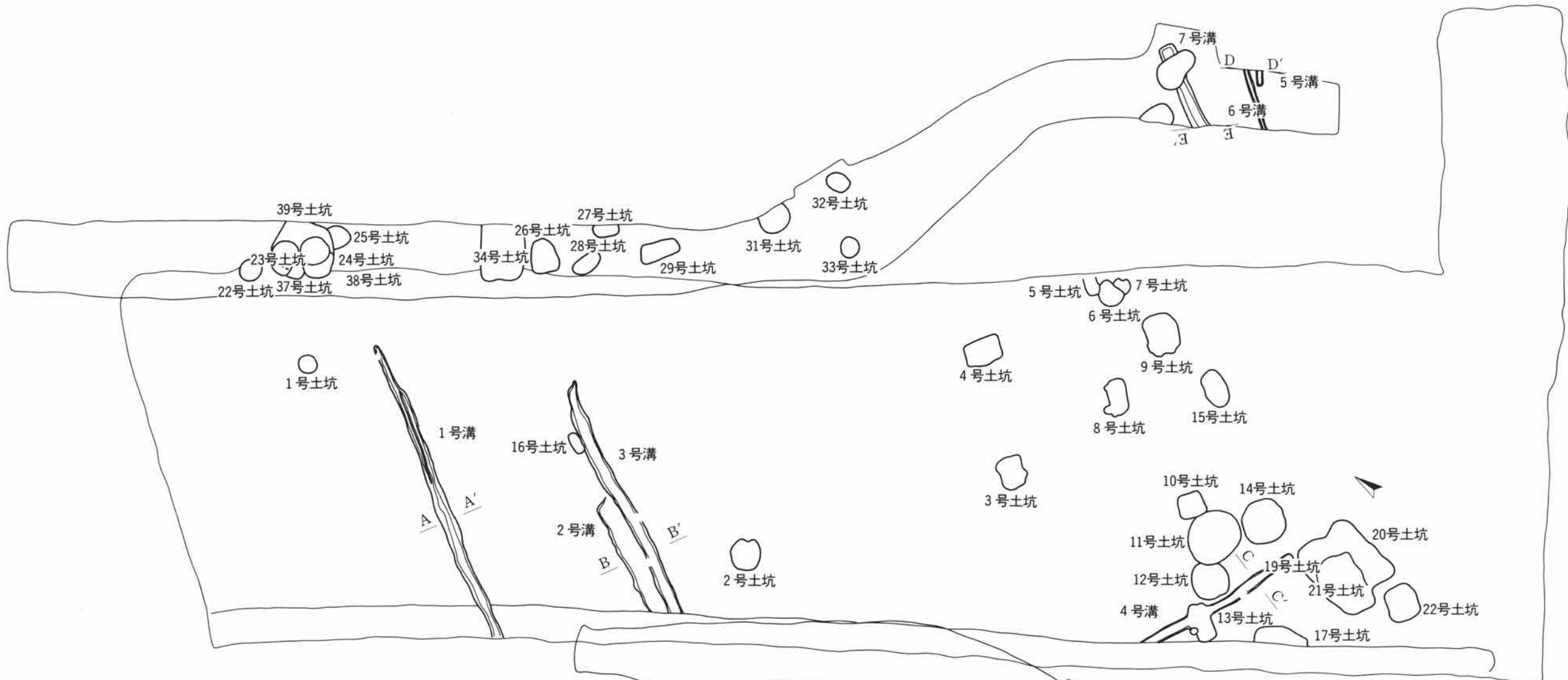
第9表 田端地区C区 第2号掘立柱建物跡 計測値表

長軸方向	桁行cm	梁行cm	桁行柱間cm	梁行柱間cm	番号	規 模		
						上バ ^ス cm 長径×短径	下バ ^ス cm 長径×短径	深さcm
N106°E	1-4 : 395	1-2 : 200	1-9 : 177	1-5 : 111				
	2-3 : 395	3-4 : 226	9-4 : 219	5-2 : 91				
	5-7 : 373	9-10 : 211	5-6 : 153	9-6 : 113	1	31×29	径 20	22
			6-7 : 220	6-10 : 98	2	48×42	38×25	25
			2-10 : 180	4-7 : 93	3	32×27	20×16	30
			10-3 : 216	7-3 : 134	4	32×28	19×16	31
					5	46×41	33×29	25
					6	30×25	径 13	20
					7	径 23	径 10	10
					8	33×29	24×19	19
					9	42×34	37×22	33
				10'	41×32	20×17	12	
				11	径 24	径 10	16	

※計測値は1/20原図から起こした数値である。柱穴間の距離は心線で計測した。

第10表 田端地区C区 第3号掘立柱建物跡 計測値表

長軸方向	梁行 cm	桁行柱間 cm	番号	規 模		
				上バ ^ス cm 長径×短径	下バ ^ス cm 長径×短径	深さcm
—	192-190 : 379	192-196 : 213				
		190-191 : 175				
			196	70×56	49×37	23
			192	75×66	28×18	34
			190	60×54	27×25	31
			191	33×29	19×16	23
			193	33×25	径 14	16
			194	27×24	17×12	7
			195	37×	20×	10
			197	31×25	径 17	15



A 75.500m A'



1号溝

B 75.500m B'



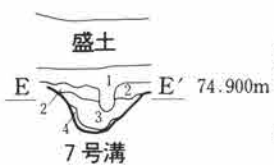
2号溝 3号溝

C 75.500m C'



4号溝

D 6号溝 5号溝 D' 75.000m



7号溝

- | | | | |
|-----|---|-------|-------------------------|
| 7号溝 | 1 | 暗灰色土 | 粘質、浅間A軽石を多量に含む炭化物・小石を含む |
| | 2 | 明灰褐色土 | 粘質、浅間A軽石を含む |
| | 3 | 灰褐色土 | 粘質、炭化物・浅間B軽石を含む |
| | 4 | 灰褐色土 | 粘質、黒褐色土ブロックを含む |

F F'

8号溝

H H'

10号溝

G G'

9号溝

I I'

11号溝

J J'

13号溝 12号溝

水糸高さ75.500m

1 : 100



0 1 : 200 10m



第141図 田端地区C区溝

198	39×20	30×12	4
199	28×24	径 14	12
200	33×22	24×13	9
201	径 26	径 13	9

※計測値は1/20原図から起こした数値である。柱穴間の距離は心線で計測した。

田端地区C区溝（第141～146図、図版48）

本地区の溝は1～12号まであり、そのすべてが他の地区に比較して細く、規模が小さい。これらの溝は、本地区中央東寄りに検出した1号掘立柱建物跡を囲むような位置に発見し、1号掘立柱建物跡の内部に相当する位置からは1本も検出していない。また、溝は1号掘立柱建物跡の柱通り（おおむね東西・南北の方向をとるが、必ずしも柱穴を通らない）にほぼ平行するような走行を示している。従って、これらの溝は1号掘立柱建物跡の存在を意識して掘削されたものと推定できる。

なお、Mラインを中心としたK～Oラインの間は第4次調査で、その他の調査範囲は第5次調査（橋脚上にのぼる斜路部分の調査）で検出した範囲である。

第11表 田端地区C区 溝一覧表

番号	幅cm	長さm	深さcm	重複関係 [旧→新]	遺 物	時 期	備 考
1	25～62	14	11～35				N11°E
2	84～112	5.5	10前後				N5°E
4・12	40～50	18.3	10前後	4溝→13坑		浅間A・B軽石の中間	N114°E
5	25	0.6	24			江戸18C以降	N30°E
6	23	2.7	23			江戸18C以降	N16°E
7	64	3.8	40	7溝→35坑		12C以降	N8°E
8	30	2.6	3～6			12C以降	
9	32～74	3.1	10			12C以降	
10	38～70	4.3	17			12C以降	N117°E
11	32～48	5	4～7			12C	N96°E
13	22～30	3	20前後			18C以降	

田端地区C区第1号溝 (第141・145図、図版48)

K-Nライン・71km412m付近で検出した。確認面は第2層で、調査区内で長さ約14mを検出した。走行はN11° Eで、深さは11～35cm、幅は25～62cmである。底面は平坦面をもち、壁は斜めに立ち上がる。遺物は陶器・磁器が出土している。時期は18世紀以降とみられる。

田端地区C区第2・3号溝 (第141・145図)

L-Mライン・71km404m付近で検出した。両溝は接して平行しており、走行はN5° Eをとる。確認面は第2層である。調査区内で2号溝は長さ5.5m、3号溝は約11mを検出したが、第5次調査ではその延長部を検出していない。深さは両溝とも10cm前後である。2号溝の方が広く、3号溝は北端部でやや湾曲する。

遺物は3号溝から布目のついた瓦が出土している。時期は確かな根拠をもたないが、他の溝と平行・直角関係にあることから、江戸時代以降とみられる。



第142図 田端地区C区5・6・7号溝

田端地区C区第4・12号溝（第141・145・146図、図版48）

K-Lライン・71km375～381mで検出した。確認面は第2層である。4号溝は第3次調査区内で長さ7.5mを検出し、12号溝は第5次調査で約7.5m分を検出している。両溝ともほぼ同規模・同方向であり、12号は4号の延長線上にあることから、両者は同一の溝とみられる。4号溝は13号土坑と重複しており、4号溝→13号土坑の順に新しい。

幅は40～50cmで、壁は斜めに立ち上がる。深さは10cm前後である。覆土に灰褐色砂を含み、浅間B軽石を含む層を切って掘り込まれている。調査区壁の土層断面で見ると、覆土上位に浅間B軽石を含んだ赤褐色土があり、溝は同軽石を含んで水平に堆積する層を切り込んでいる。溝の底面直上は灰褐色砂が堆積する。また、切り込み面の直上に浅間A軽石を含んだ層が、ほぼ水平に認められる。以上のことから、本溝は浅間A軽石・B軽石の降下の中間の時期に掘削されたと考えられる。

遺物は図示できるものが少なく、第145図にあげた1点のみである。



第143図 田端地区C区8・9・10号溝

田端地区C区第5・6・7号溝 (第141・142図)

P-Qライン・71km375～71km380m付近で検出した。確認面は第2層である。第5次調査の北側道で検出したもので、各溝の走行は5号溝がN30°E、6号溝がN16°E、7号溝がN8°Eである。

7号溝は35号土坑と重複し、7号溝→35号土坑の順に新しい。調査区内で5号溝は長さ0.6m、6号溝は2.7m、7号溝は3.8mを検出した。深さはそれぞれ5号溝が24cm、6号溝が23cm、7号溝が40cmである。覆土は明灰褐色の粘質土で、5・6号には浅間A軽石が含まれ、7号には混入しない。7号溝は浅間B軽石を含む層を切って掘り込まれ、覆土にも同軽石を少量含んでいる。底面は3本とも丸く、壁は斜めに立ち上がる。

遺物は出土していない。時期は7号溝が中世以降、5・6号が近世以降とみられる。

田端地区C区第8・9・10号溝 (第141・143・145図、図版48)

Jライン・71km375m付近で検出した。確認面は第2層である。第5次調査の南側道で検出したもので、8・9号溝は不整形である。8号と9号とは先端部が繋がらない。10号溝の走行はN117°Eをとる。8号溝は長さ2.6m、9号溝は3.1m、10号溝は4.3mを検出した。幅はそれぞれ30cm、32～74cm、38～70cmで、深さは3～6cm、10cm、17cm前後である。覆土は3本とも同様の明灰褐色土で、軽石の混入した黒褐色土ブロックを含んでいる。

遺物は10号溝から軟質陶器が出土している。時期は軽石の混入から、中世以降と考えられる。

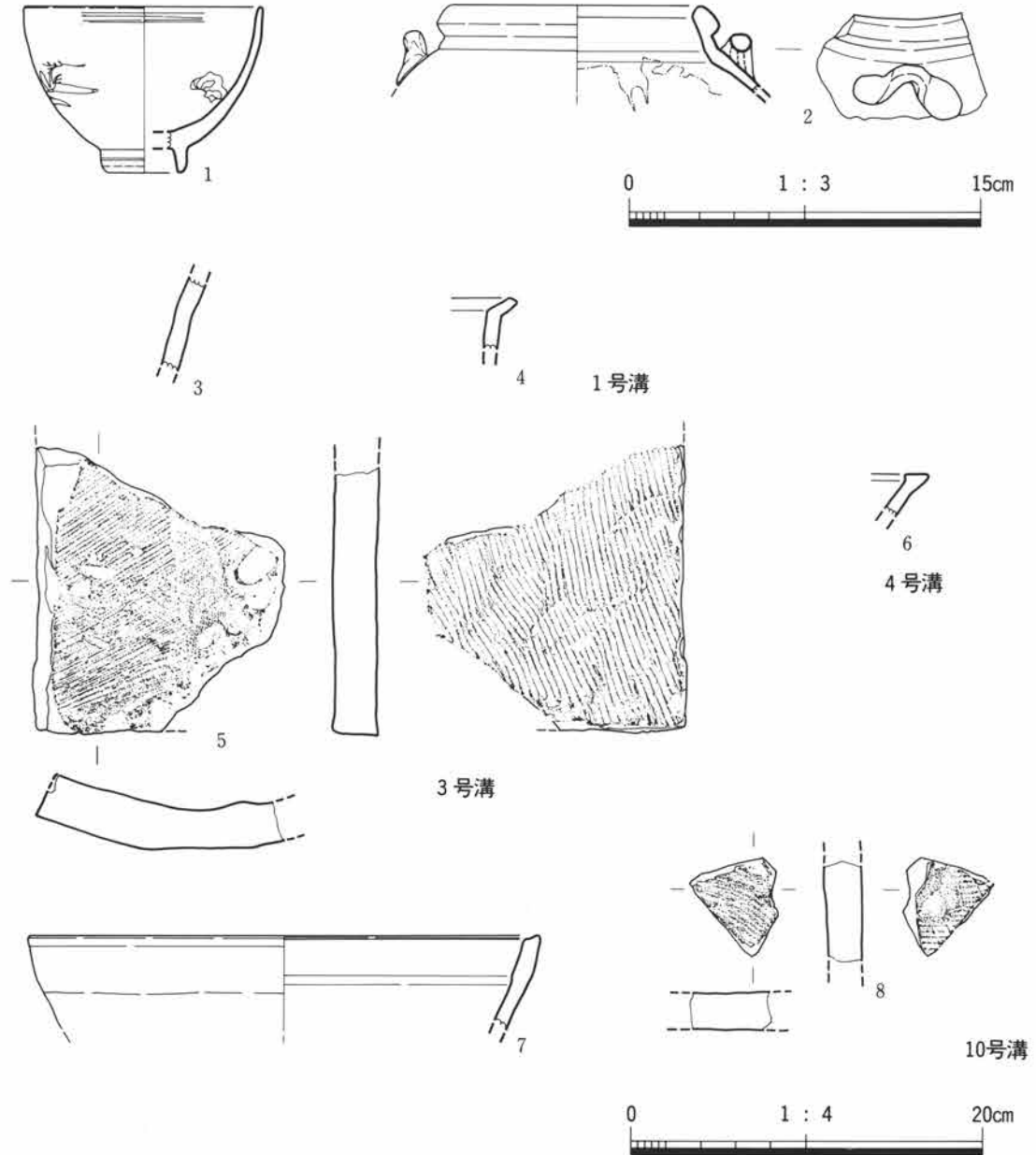


第144図 田端地区C区11号溝

田端地区C区第11号溝（第141・144図）

J-Kライン・71km380m付近で検出した。確認面は第2層である。第5次調査の南側道で検出したもので、長さ約5mを検出した。北西部の12号溝とほぼ平行しており、両者の間隔は約5.2mである。走行はN96°Eをとる。深さは4～7cmである。覆土は明灰褐色土に黒褐色土ブロックを含んでいる。底面は平坦面をもち、壁は斜めに立ち上がる。遺物の出土はない。

時期は8～10号溝と同様に、中世以降と考えられる。



第145図 田端地区C区1・3・4・10号溝出土遺物

田端地区C区第13号溝 (第141・146図)

J-Kライン・71km388m付近で検出した。確認面は第2層である。12号溝の南側に位置し、全体に「く」字状に曲がっている。調査区内で約3m分を検出した。深さは20cm前後である。覆土は明灰褐色土で、浅間A軽石を含んでいる。壁は斜めに立ち上がる。

遺物の出土はない。時期は近世以降とみられる。

田端地区C区土坑 (第147・182図、図版48～55)

本地区では1～42 (30号は欠番) 号の41基の土坑を検出した。これらのうち、覆土に浅間A軽石のみ含んでいたのは、3～5号・7～15号・19～21号・35号・40・42号の18基であった。浅間B軽石を下部に含んでいたのは、22～29号・31～34号・36～39号・41号の17基である。その他の土坑は不明。以下、特徴ある土坑を略記する。

第4号土坑は確認面で長方形の掘形のなかに円形の掘り込みが認められ、この円形の掘り込みを



第146図 田端地区C区12・13号溝

追ったところ、円形の桶または樽の存在が推定できた。壁面には木質がわずかに遺存していた。肥桶の可能性もある。

第5・6・7号土坑は短期間のうちに掘り込まれ、6号は5・7号に切られている。6号は軽石の堆積は確認したが、浅間A・Bのどちらであるかは判別できなかった。最も古い6号土坑は中から拳大～人頭大の石が集中して出土したが、並べた状態ではなかった。石は土坑底面からやや浮いた状態



第147図 田端地区C区2号土坑



第148図 田端地区C区3号土坑

である。性格不明。

第9号土坑は第6号と同様に、石が集中して出土した。石の状態は6号と同じである。

第10～12号土坑は重複して検出し、それらは12→11→10号の順に新しい。11・12号の底面からはやはり石が出土したが、6・9号のように集中していない。また、11号はやや大き目である。



第149図 田端地区C区4号土坑



第150図 田端地区C区5・6・7号土坑（1）

第19～21号土坑は当初3基の土坑として確認したが、掘り下げてみると、それらは同一の土坑とみることができた。覆土の堆積状態からは南西寄りの21号土坑がやや新しいものかもしれない。中から拳大の石が多量に出土し、底面近くから完形の陶器・リング状の銅製品が出土している。性格不明。

第23・24・38号土坑は円形～楕円形の掘り込みで、短期間のうちに作られたものとみられる。いずれも底面近くから拳大の石が出土し、なかでも最新の24号からは集中して出土した。

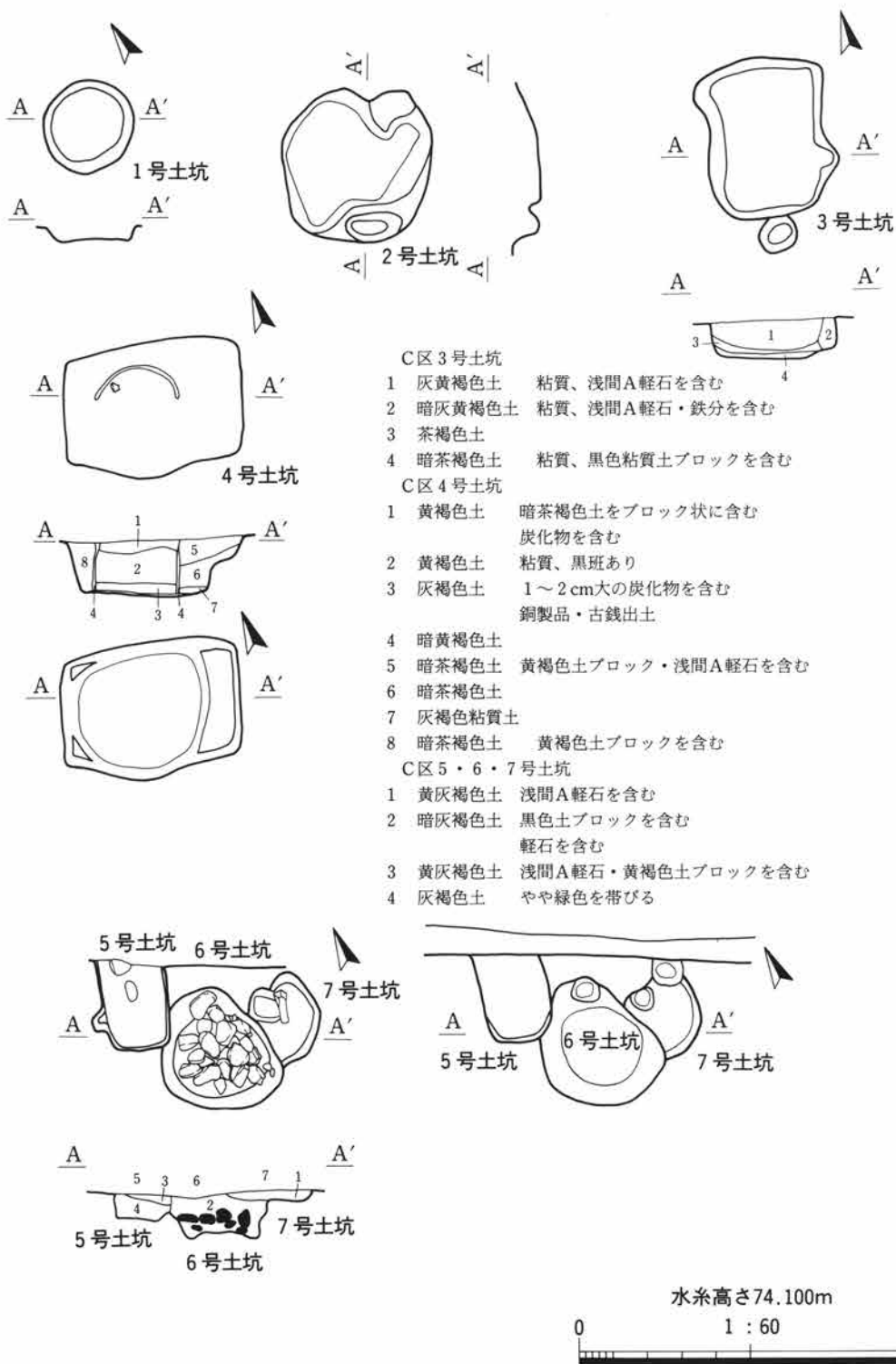
第39号土坑はこれら22・24・38号の下層から検出したもので、東側の壁の遺存が悪いが、略方形を呈するとみられる。底面は楕円形である。

第34号土坑は北西部で検出したもので、東辺に沿って人頭大の石が縁に並んで出土した。また、発掘区壁際からは浮いた状態で石がいくつか出土している。

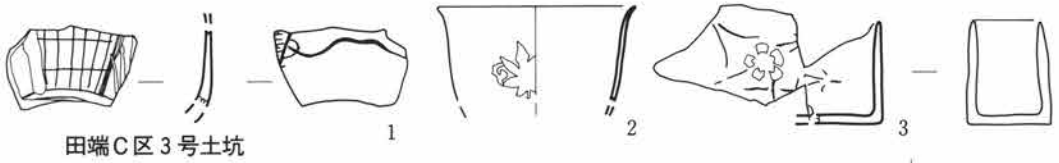
第31号土坑は11・12号とよく似た状態である。



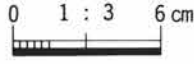
第151図 田端地区C区5・6・7号土坑(2)



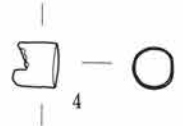
第152図 田端地区C区1~7号土坑



田端C区3号土坑



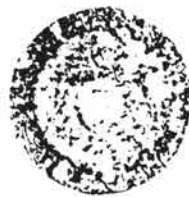
田端C区4号土坑



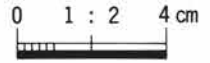
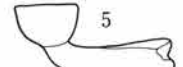
田端C区4号土坑



田端C区4号土坑



田端C区4号土坑



田端C区4号土坑



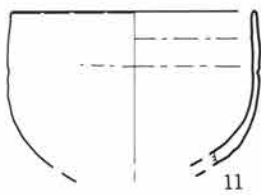
田端C区4号土坑



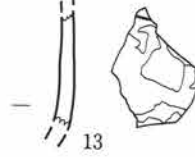
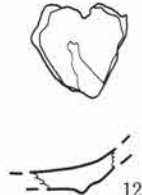
1 : 3号土坑、2~10 : 4号土坑
11~13 : 5号土坑、14 : 6号土坑



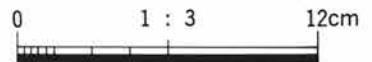
田端C区4号土坑



田端C区5号土坑



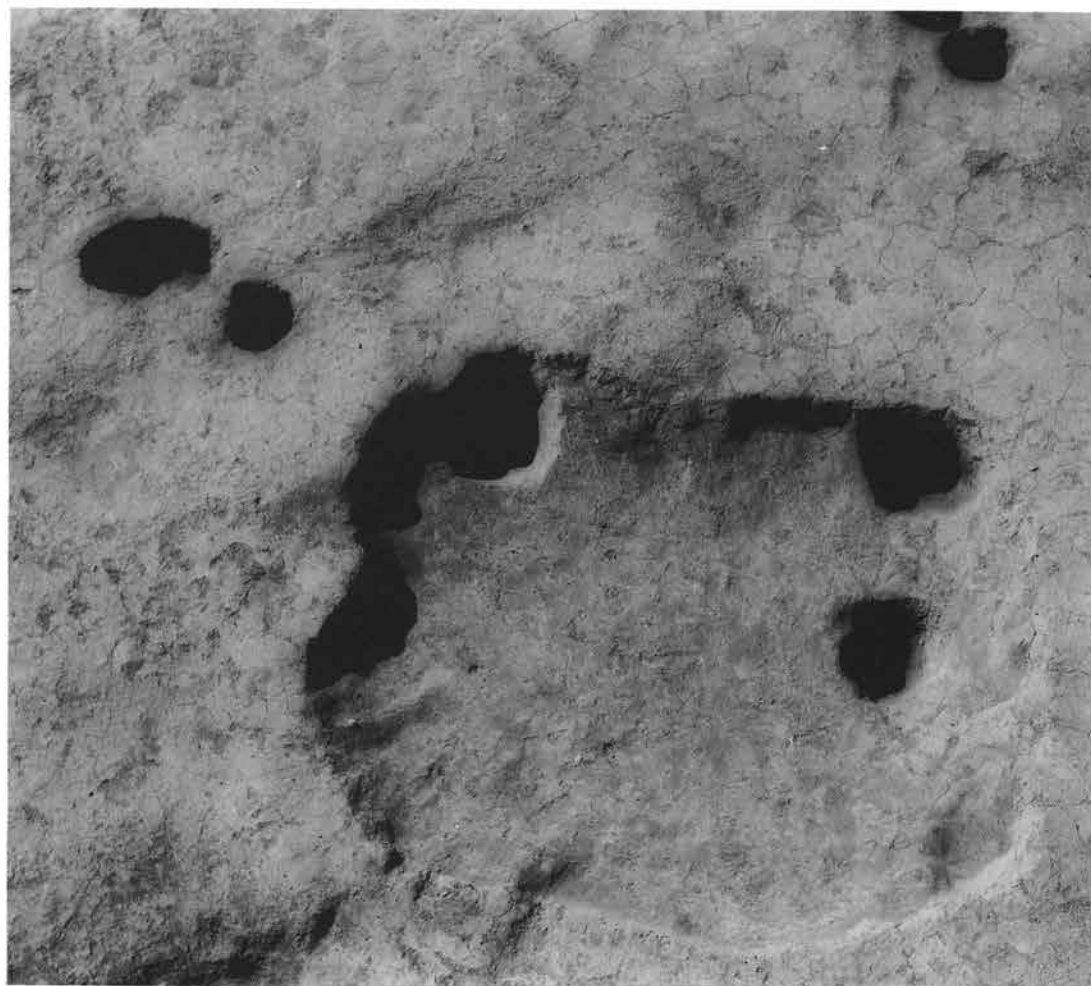
田端C区6号土坑



第153図 田端地区C区3・4・5・6号土坑出土遺物



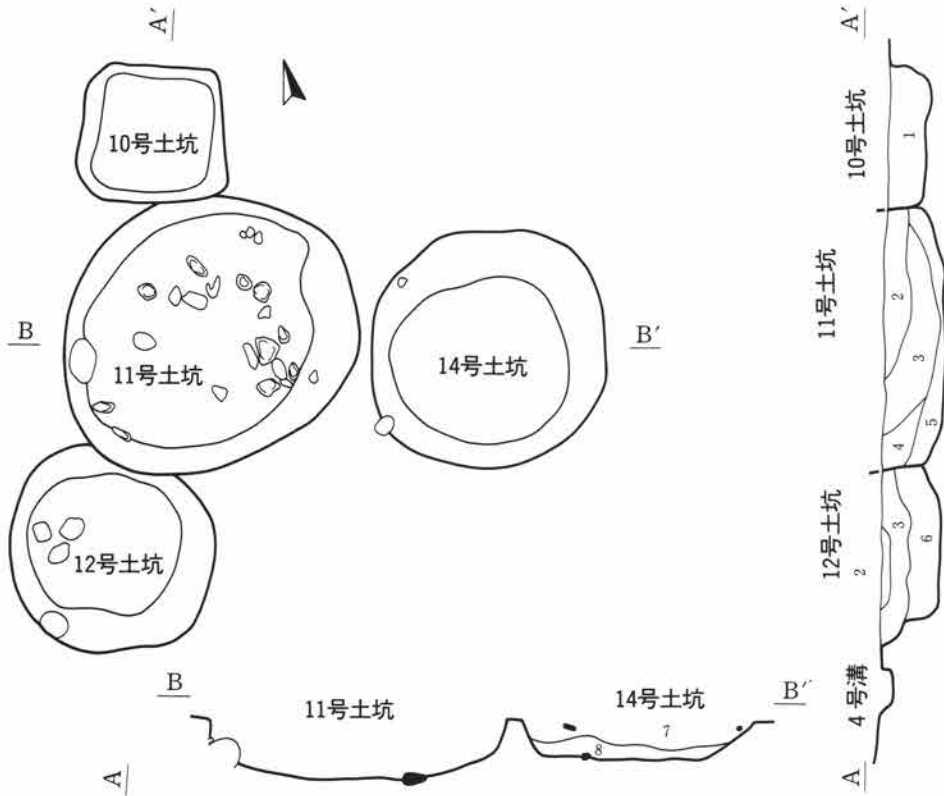
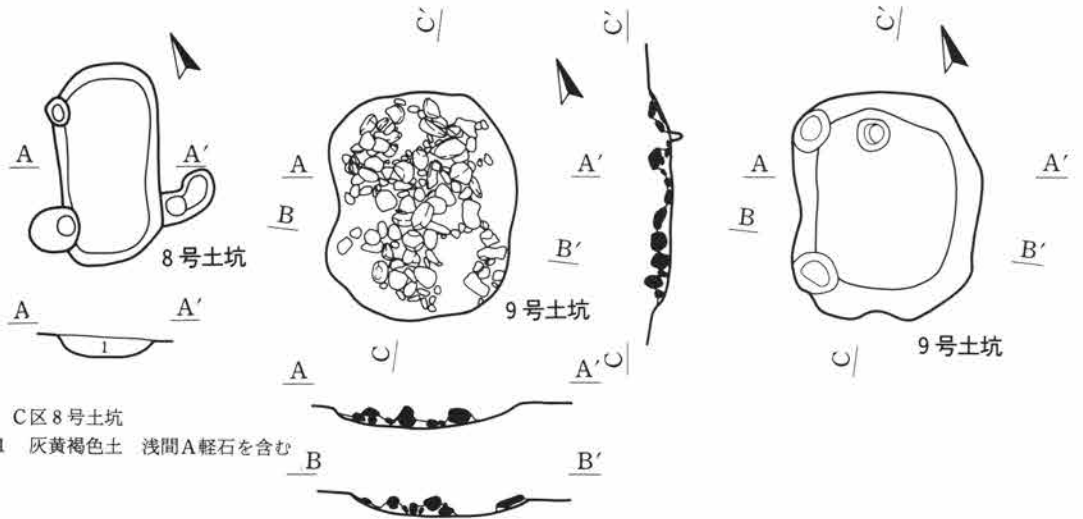
第154図
田端地区C区
9号土坑(1)



第155図 田端地区C区9号土坑(2)



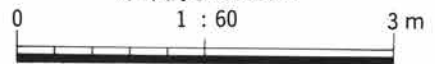
第156図 田端地区C区10～14号土坑



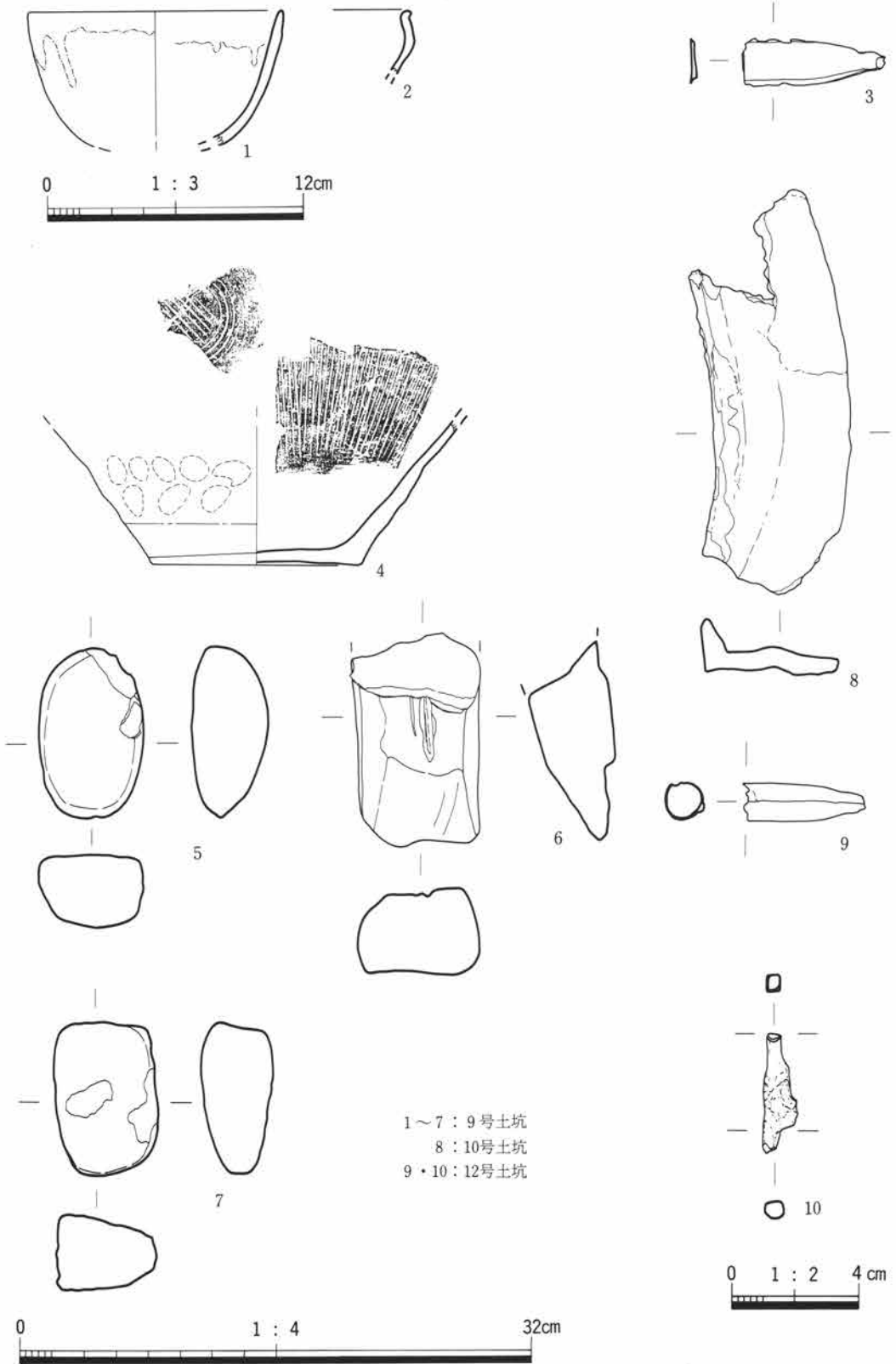
C区10・11・12・14号土坑

- 1 灰黒褐色土 浅間A軽石を多量に含む
- 2 褐色土 浅間A軽石・黒褐色土ブロックを含む
- 3 黄褐色土 灰褐色土ブロック・黒褐色土ブロックを含む
- 4 灰褐色土 黄褐色土ブロック・黒褐色土ブロックを含む
- 5 黒褐色土 灰褐色土ブロック・黄褐色土ブロックを含む
- 6 黄褐色土と黒褐色土との混合
- 7 2と同じ
- 8 4と同じ

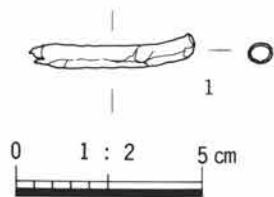
水糸高さ75.000m



第157図 田端地区C区8～12・14号土坑



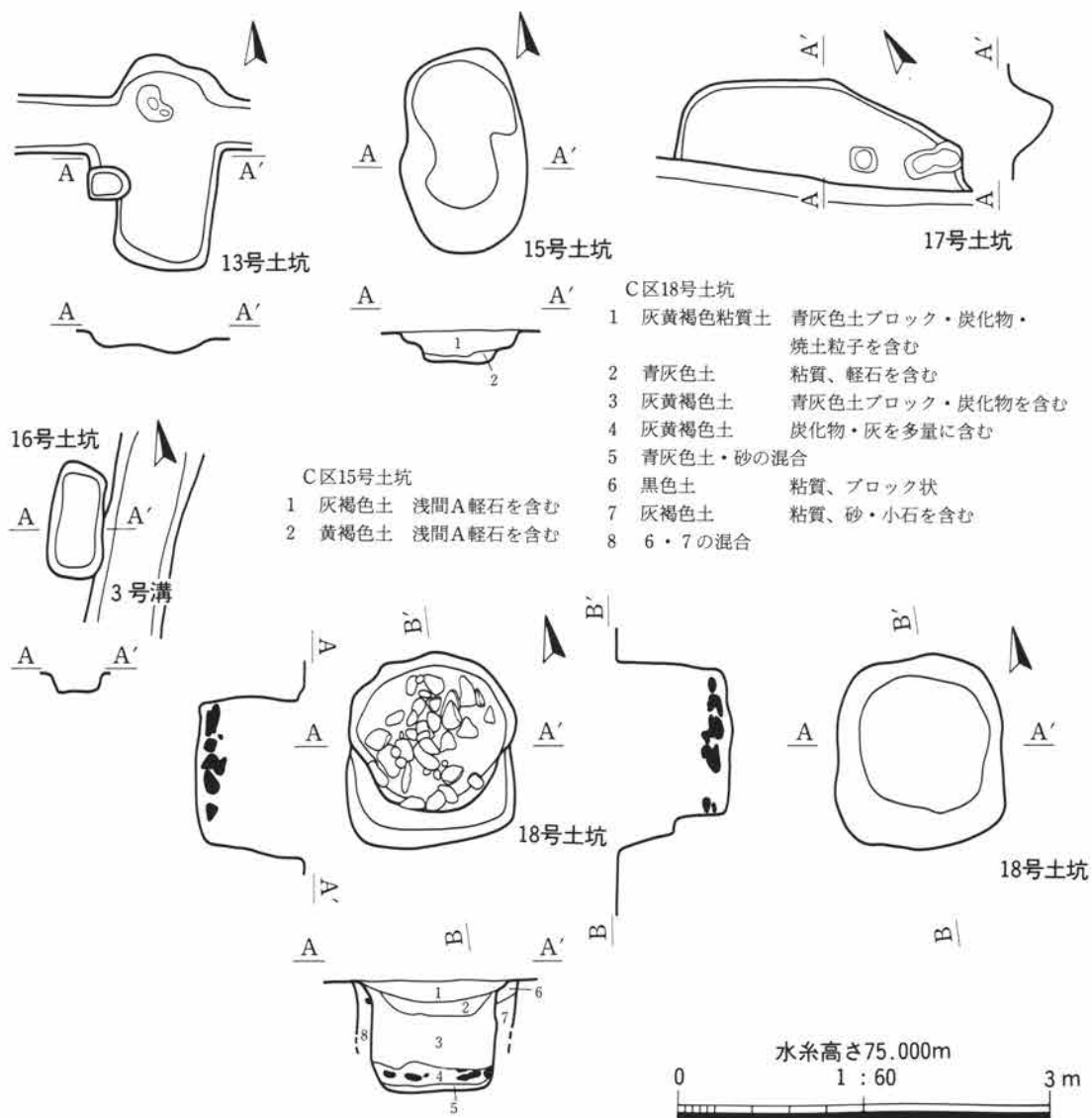
第158図 田端地区C区9・10・12号土坑出土遺物



第159図 田端地区C区18号土坑出土遺物



第160図 田端地区C区15号土坑



第161図 田端地区C区13・15~18号土坑



第162図
田端地区
C区16号土坑



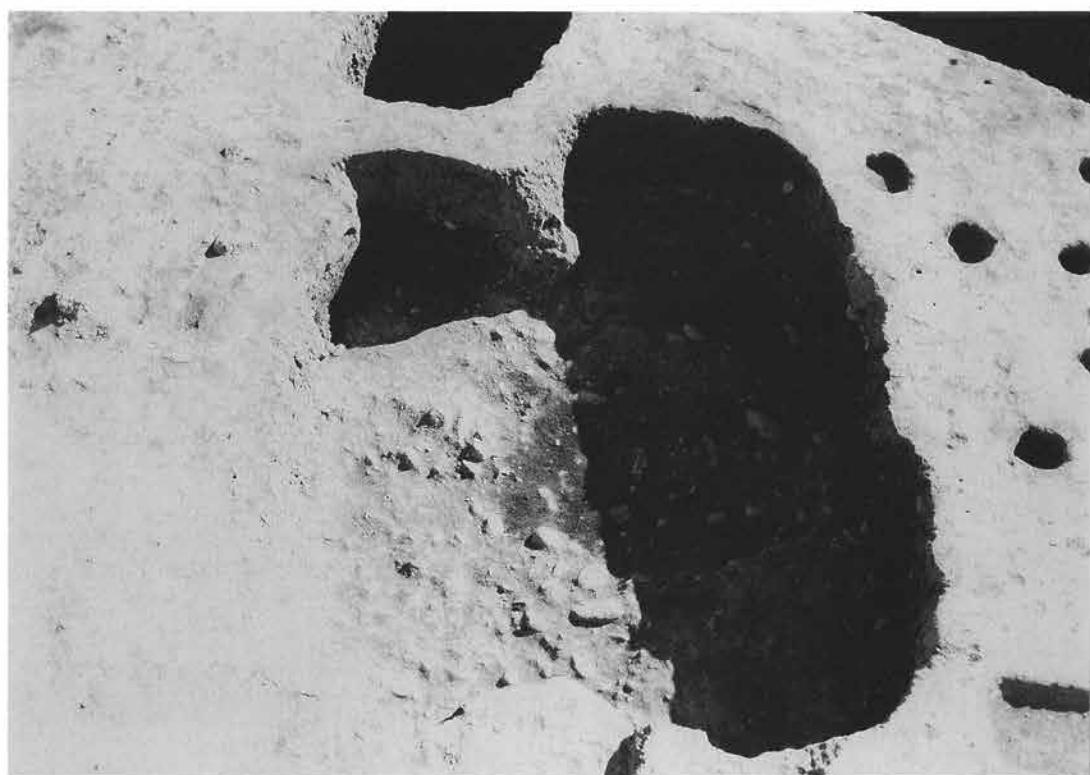
第163図
田端地区
C区18号土坑



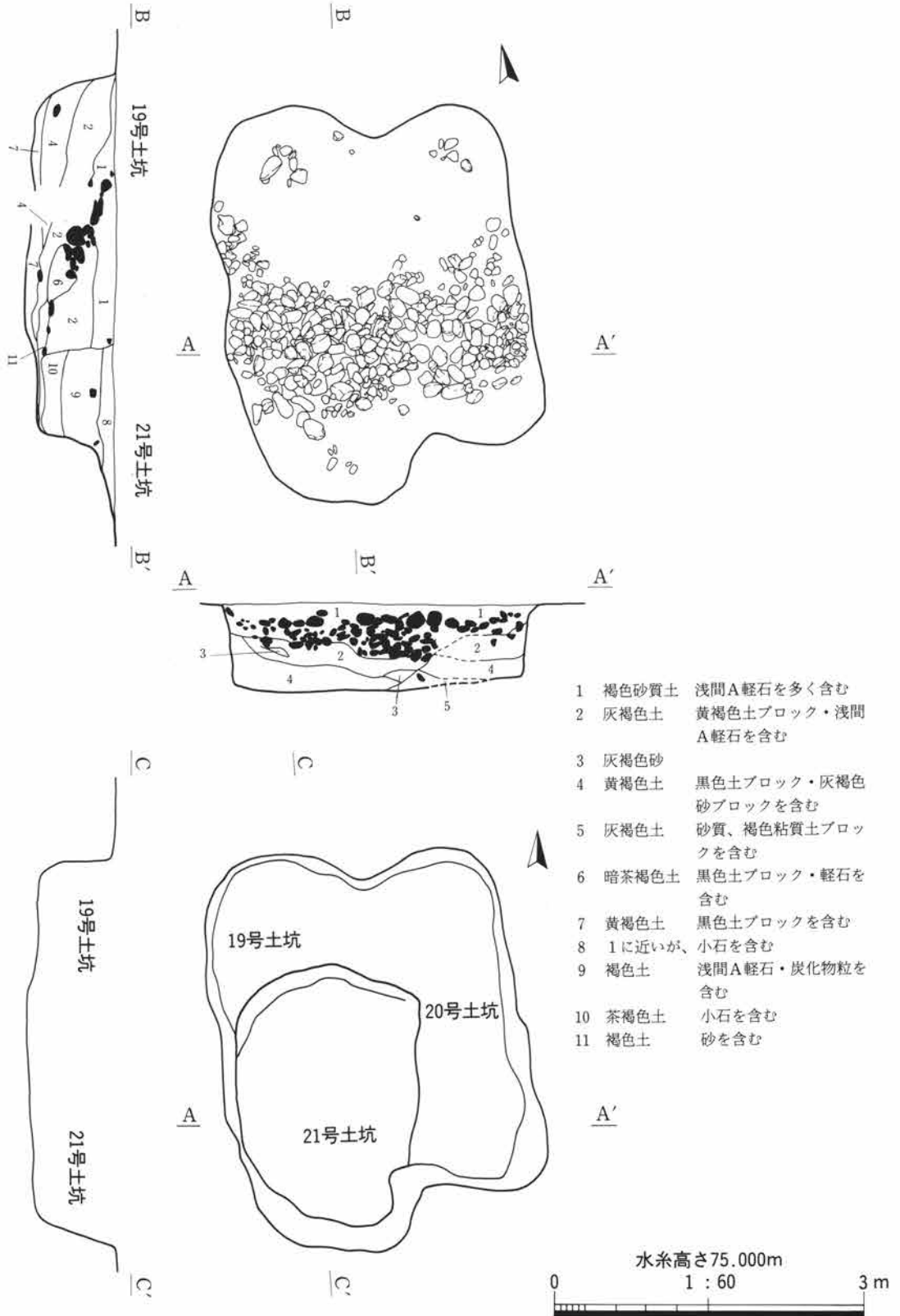
第164図
田端地区C区19号土坑遺物出土状態



第165図 田端地区C区19~21号土坑(1)



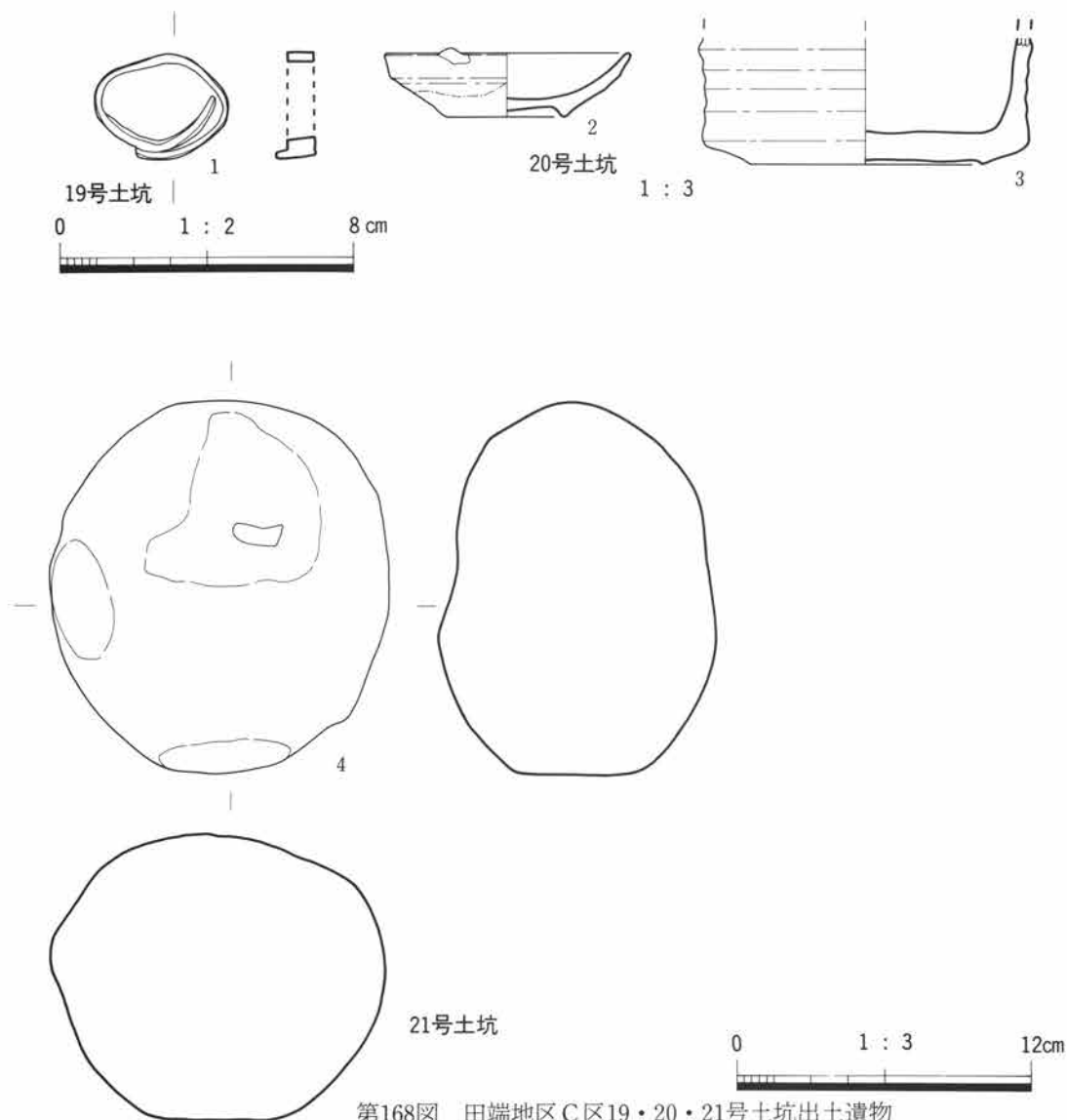
第166図 田端地区C区19~21号土坑(2)



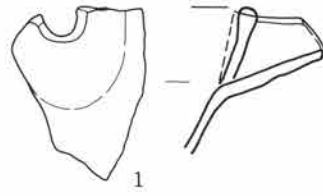
第167図 田端地区C区19・20・21号土坑

以上、特徴のある土坑をあげたが、これらはC区中央部に集中して検出したピット群の内部よりも、その周辺に位置している。これらの土坑類はピット群に伴ったものがあると考えられる。各土坑の計測値・出土遺物等は第12表（170頁）にまとめた。

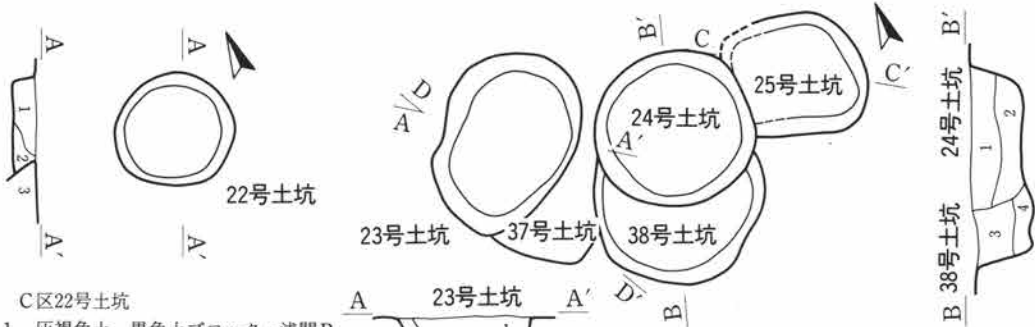
遺物は全体に近世の様相を示している。20号土坑からは香炉の破片が出土し、1号掘立柱建物跡と近接していること、掘り込み中に石組みをもつことなどから、1号掘立柱建物に伴う池の可能性がある。31号土坑出土の鉄製クワ先は通称「エンガ」と呼ばれる大形の農耕具である。34号土坑出土の染付皿は磁器であり、県内では現在のところ、例の少ない初期伊万里とみられている。34号土坑全体では、18世紀ころの所産であろう。42号土坑出土の遺物は陶器・磁器、在地製軟質陶器、農耕具、貨幣、瓦など多様な遺物を含んでおり、遺物群としての一括性を認めたい。風炉?の存在は近接する1号掘立柱建物跡との関連を推定すれば、1号掘立柱建物跡の居住者はかなり勢力を持った人々であったことを窺わせる。「村の庄屋」クラスの人々を推定したい。



第168図 田端地区C区19・20・21号土坑出土遺物



第169図 田端地区C区23号土坑出土遺物



C区22号土坑

- 1 灰褐色土 黒色土ブロック・浅間B軽石を含む
- 2 1よりも黒色土が多い、小石を含む
- 3 攪乱

C区23号土坑

- 1 灰褐色土 粘質、浅間A軽石を含む
- 2 灰褐色土 褐色土ブロック・小石を含む

C区25号土坑

- 1 明灰褐色土 粘質
- 2 39号土坑フク土

C区24・38号土坑

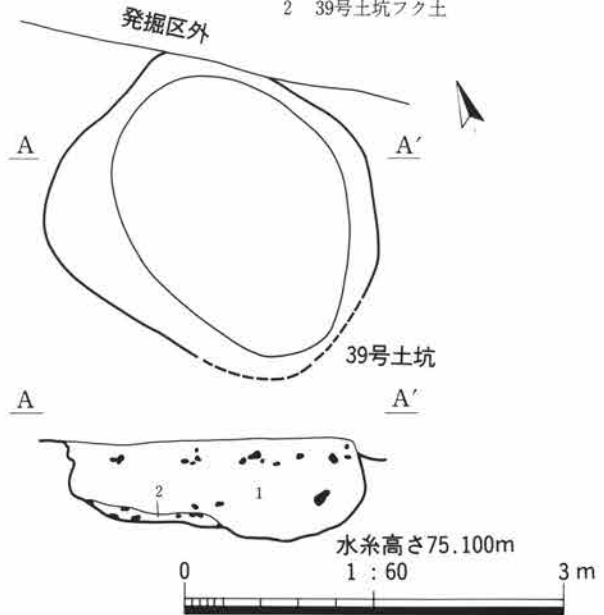
- 1 明灰褐色土 黒色土ブロックを含む
- 2 明灰褐色土 褐色土ブロック・砂を含む
- 3 明褐色土 褐色砂を含む
- 4 褐色土

C区37号土坑

- 1 明灰褐色土
- 2 1に小石・黒褐色砂を含む

C区39号土坑

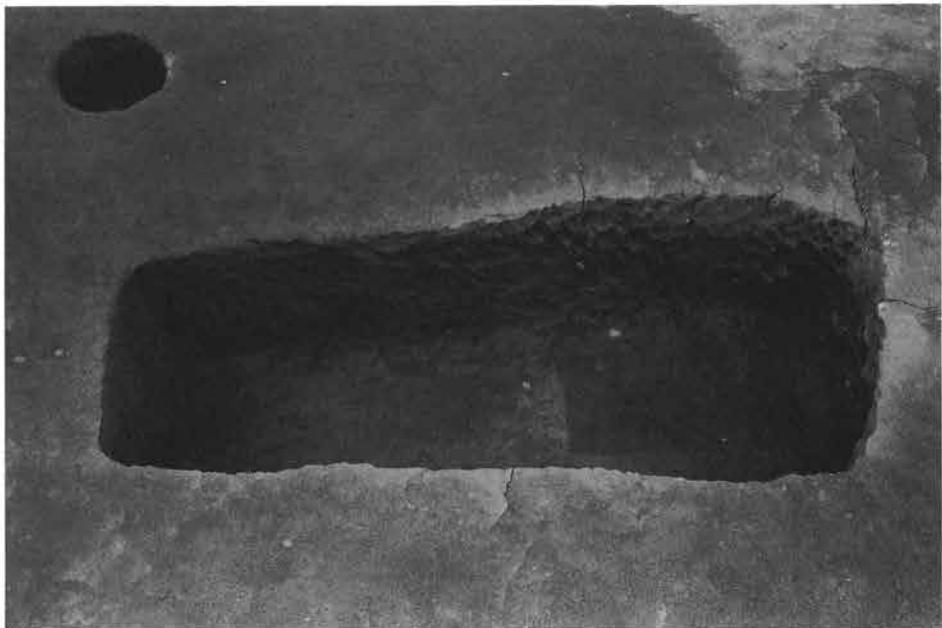
- 1 明灰褐色土 灰褐色砂・小石・黒褐色土を含む
- 2 褐色砂 小石を含む



第170図 田端地区C区22～25・37～39号土坑



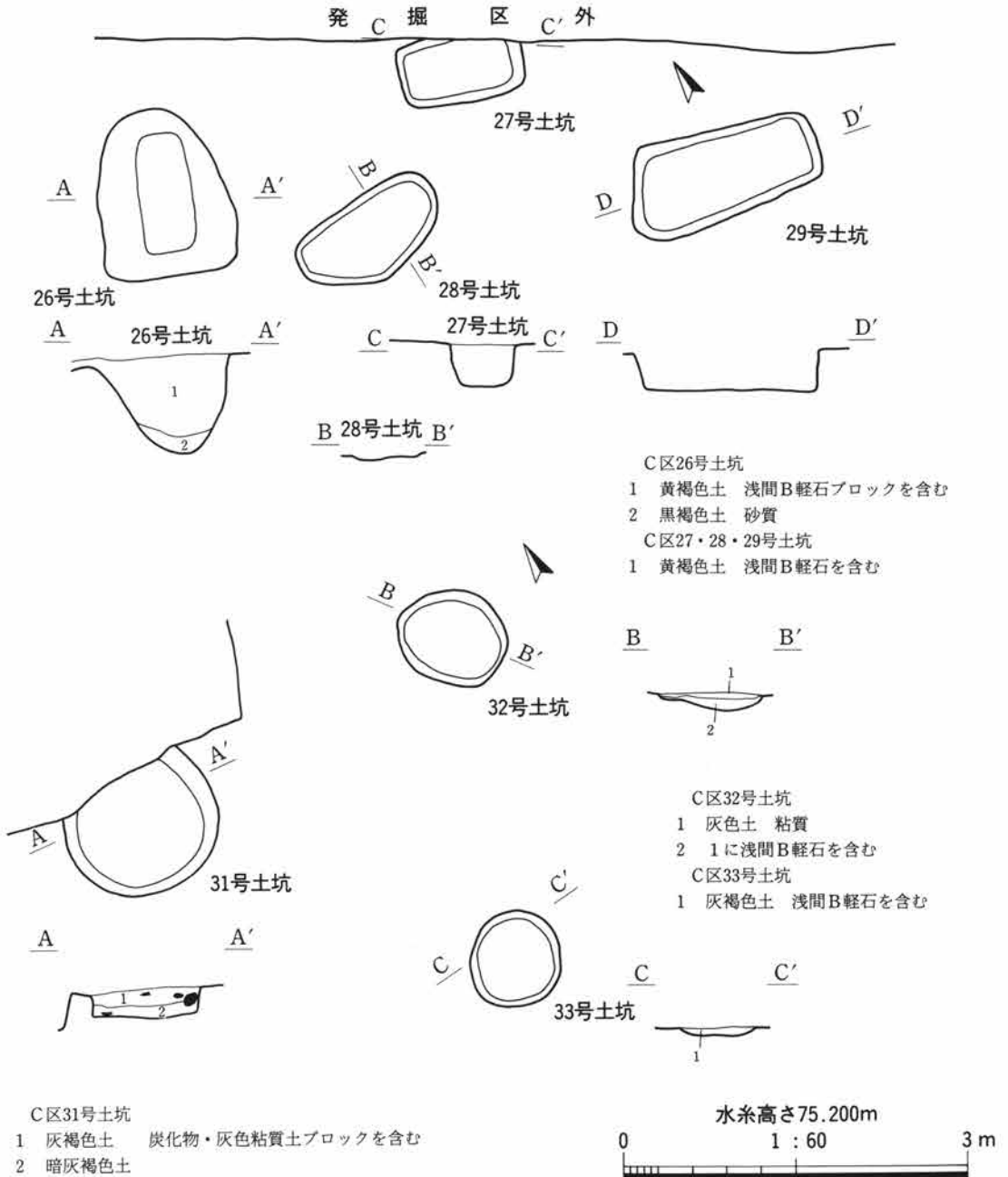
第171図 田端地区C区23・24・25号土坑



第172図 田端地区C区29号土坑



第173図 田端地区C区31号土坑



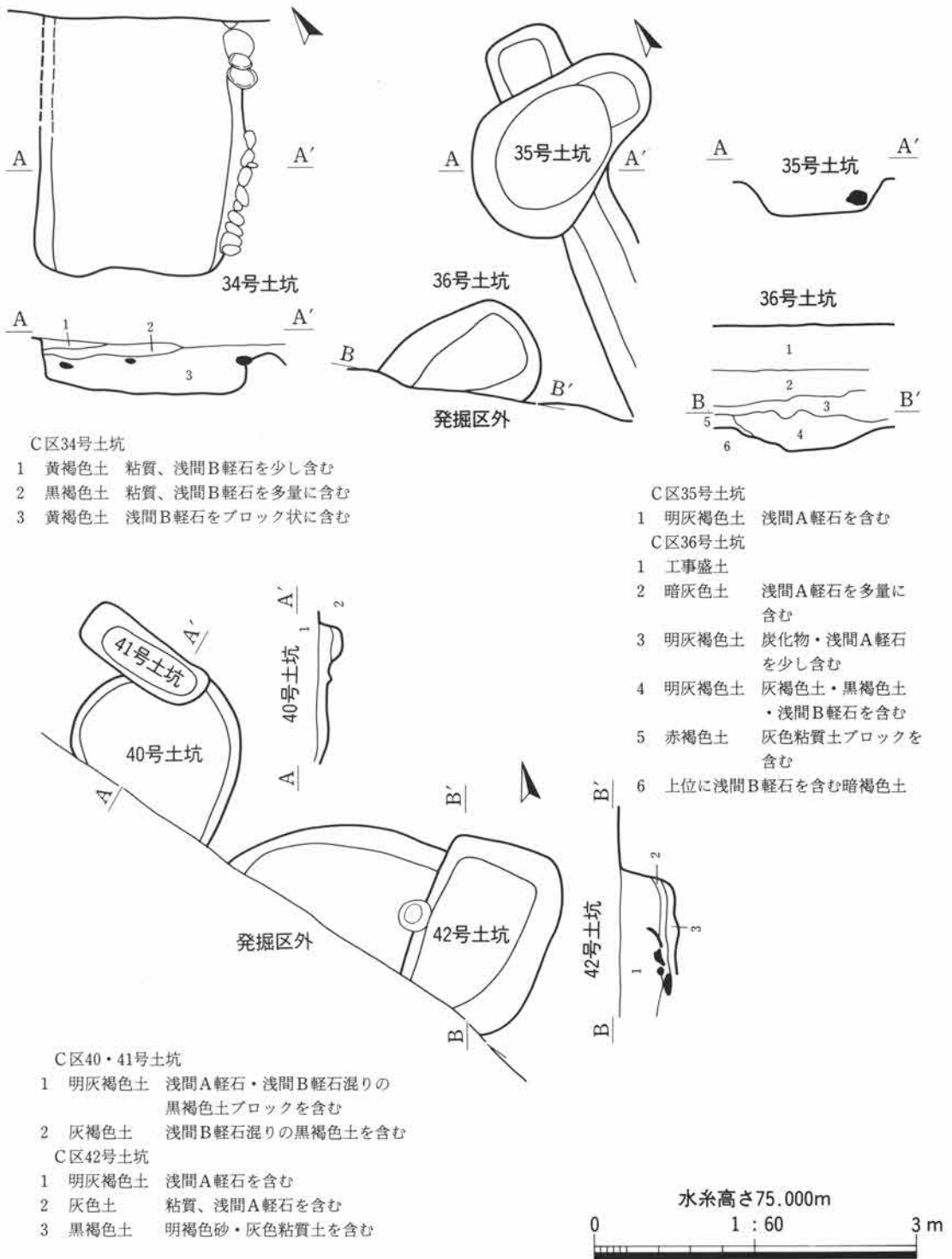
第174図 田端地区C区26～29・31～33号土坑



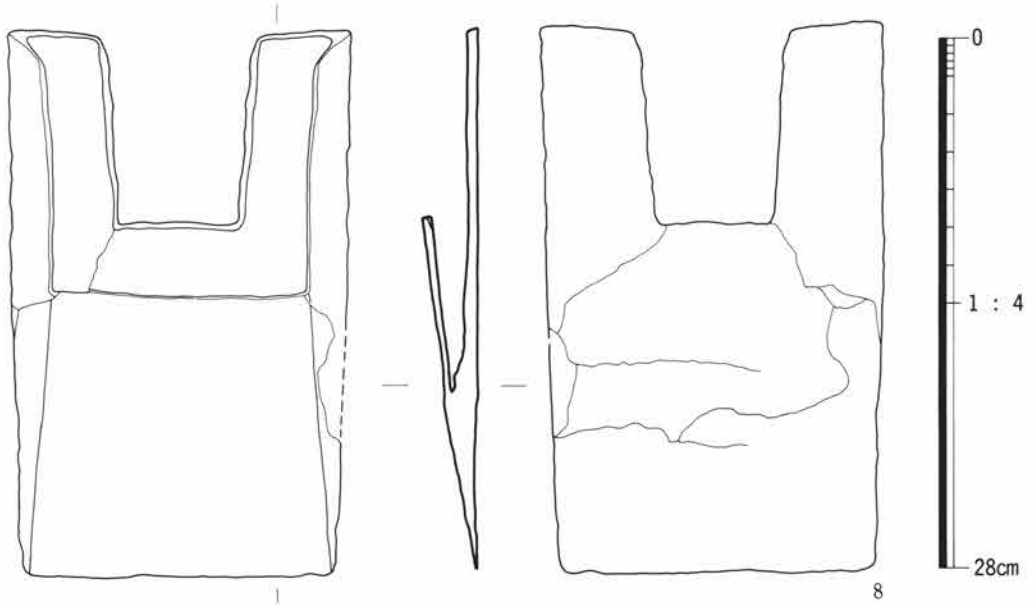
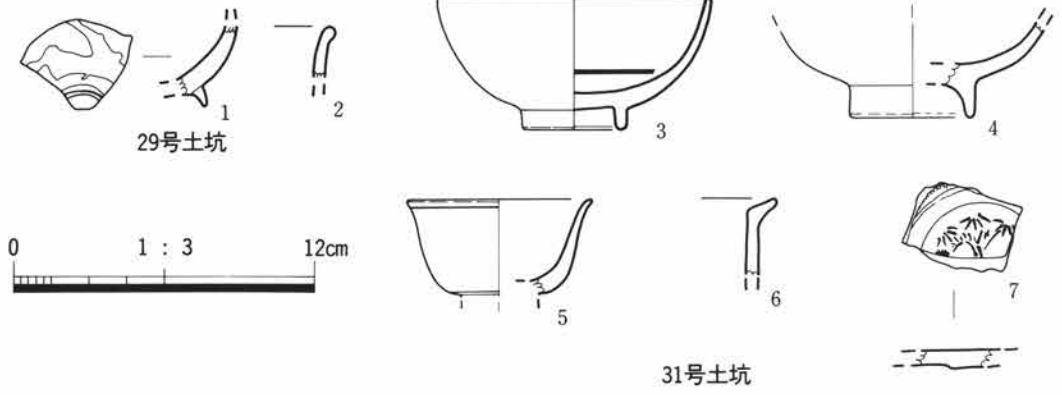
第175図 田端地区C区26・34号土坑



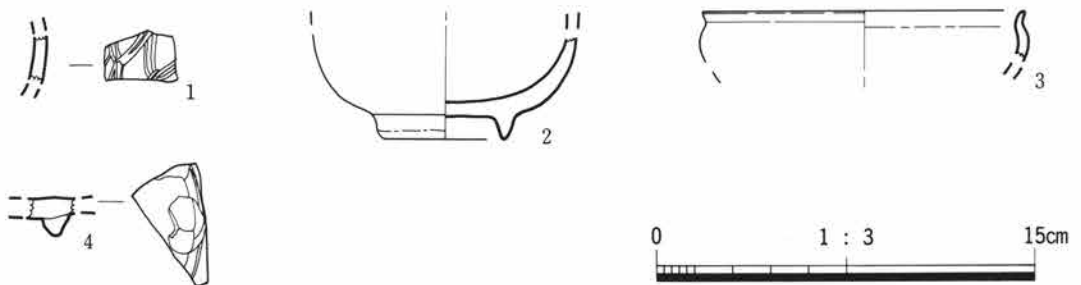
第176図 田端地区C区39号土坑



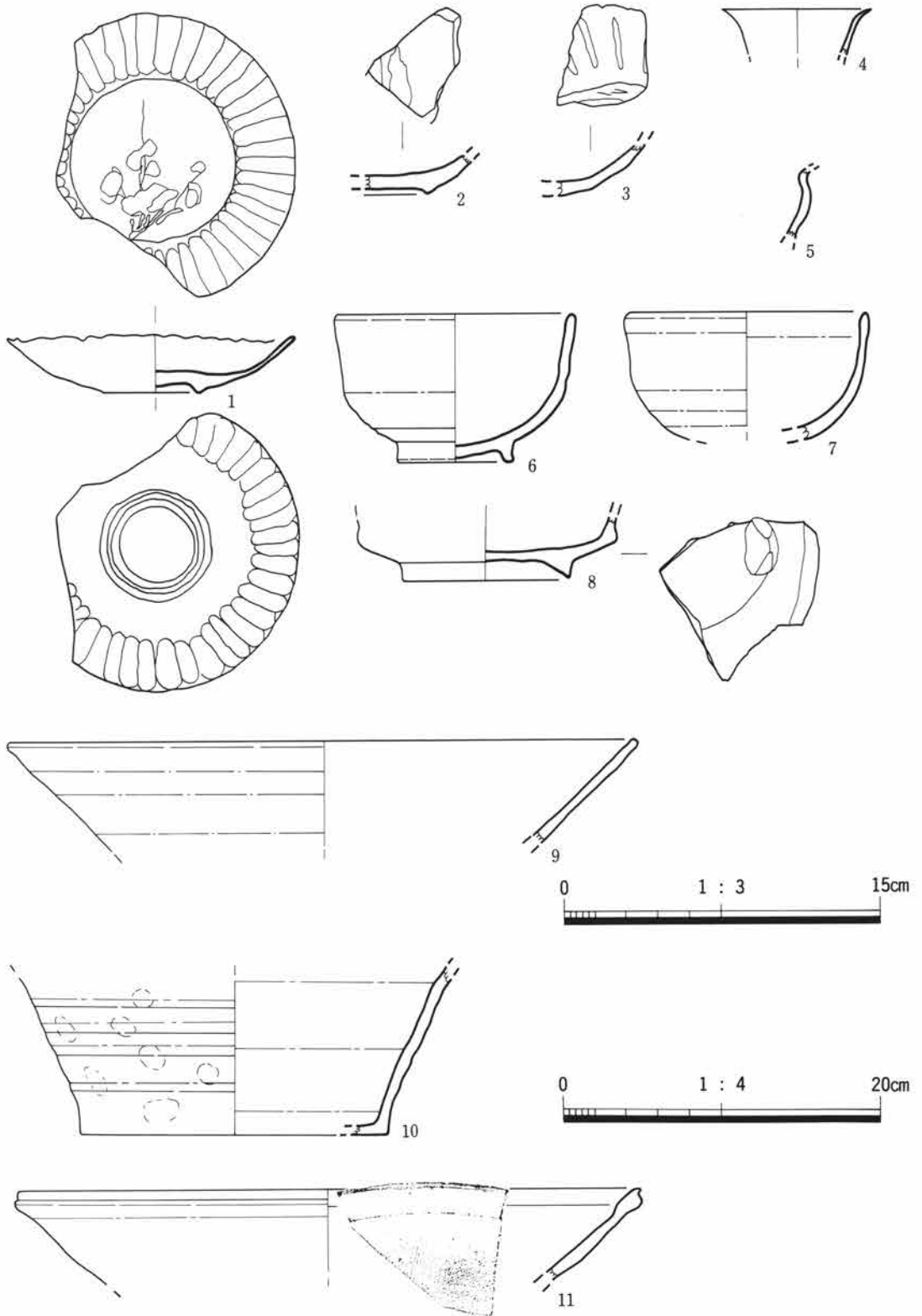
第177図 田端地区C区34～36・40～42号土坑



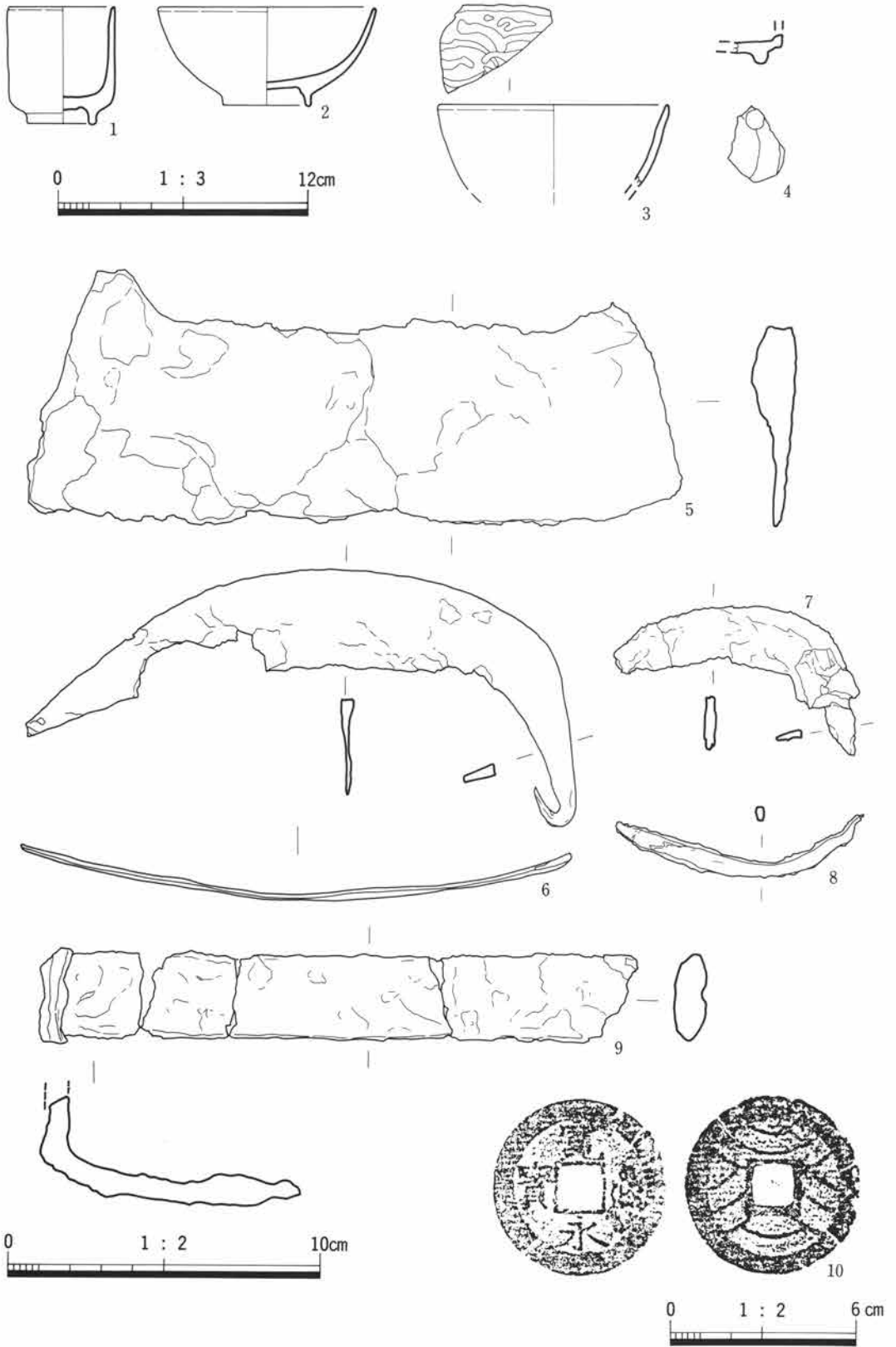
第178図 田端地区C区29・31号土坑出土遺物



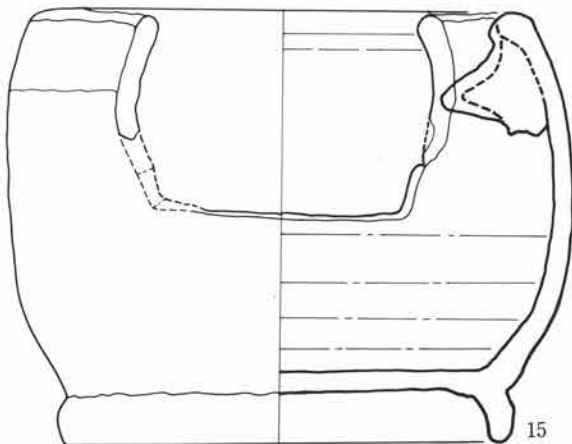
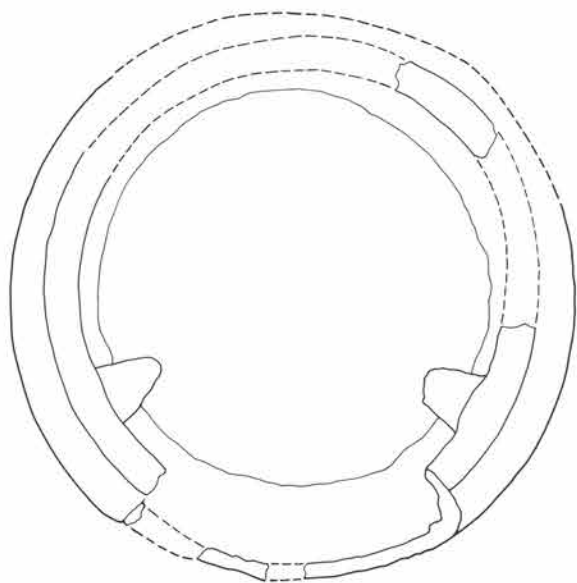
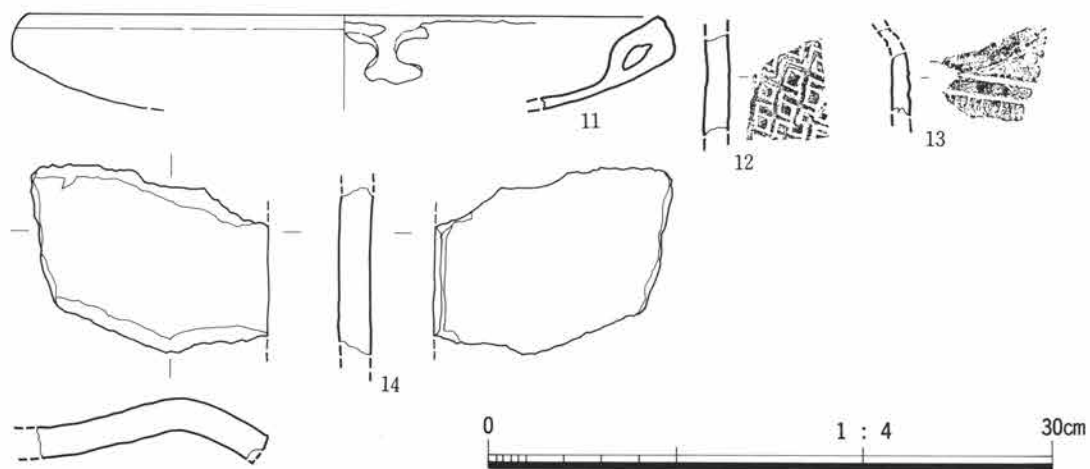
第179図 田端地区C区35号土坑出土遺物



第180図 田端地区C区34号土坑出土遺物



第181図 田端地区C区42号土坑出土遺物(1)



第182図 田端地区C区42号土坑出土遺物（2）

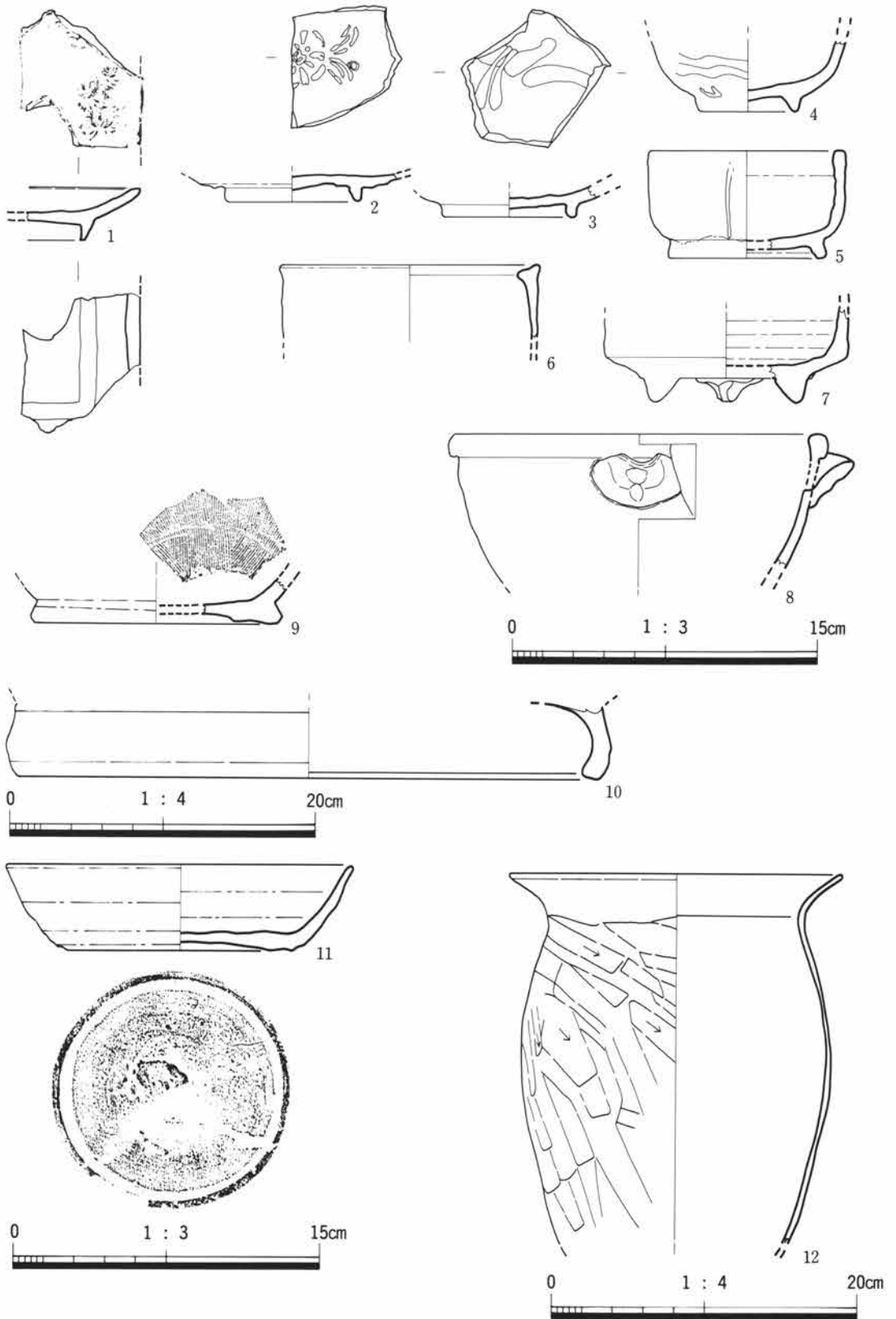
第12表 田端地区C区 土坑一覧表

番号	大きさcm・深さcm	重複関係 [旧→新]	遺物	時期	備考
1	78×81・13	単独	なし	不明	
2	120×131・22	単独	土器片2	不明	
3	137×103・31	単独	石、染付磁器	江戸、18世紀～	浅間A軽石含む
4	153×115・47	単独	石、土器、陶・磁器	江戸、17世紀～	浅間A軽石含、桶状痕
5	58×73～・24	6坑→5坑	土器、陶器	江戸、17世紀	浅間A軽石含む
6	110×105・33	6坑→5坑・7坑	陶器		軽石含む
7	78×58・19	6坑→7坑	なし		浅間A軽石含む
8	158×80・15	周辺ピット新	なし		浅間A軽石含む
9	182×148・18	単独	土器、陶器、磁器、砥石、軽石	江戸、17世紀前半18～19世紀	浅間A軽石含む
10	113×108・38	11坑→10坑	土器、陶器、磁器	江戸	浅間A軽石含む
11	216×237・39	12坑→11坑→10坑	土器		浅間A軽石含む
12	166×163・41	12坑→11坑	土器		浅間A軽石含む
13	173×78・19	4溝と重複	土器	平安	浅間A軽石含む
14	188×185・20	単独	土器		浅間A軽石含む
15	162×100・23	単独	土器	平安?	浅間A軽石含む
16	92×45・15	3溝→16坑	なし		
17		単独	なし		
18	153×132・89	単独	土器、軟質陶器、陶器	中世?	
19	385×300・99	20坑が新か	須恵器8C、陶器	江戸	浅間A軽石含む
20				17世紀	
21				江戸	
22	91×96・23	単独			浅間B軽石含む
23	146×110・19	27坑→23坑	陶器片口鉢	18世紀	浅間B軽石含む
24	125×127・39	38坑→24坑	土器	平安	浅間B軽石含む
25	95×—・18	25坑→24坑	陶器		浅間B軽石含む
26	147×116・85	単独	なし		浅間B軽石含む
27	58×109・37	単独	なし		浅間B軽石含む

番号	大きさcm・深さcm	重複関係 [旧→新]	遺物	時期	備考
28	73×136・5	単独	土器、陶器、磁器	江戸～	浅間B軽石含む
29	80×167・33	単独	土器、陶器、磁器、石	17世紀後半～	浅間B軽石含む
30	欠番				
31	99×96・26	単独	陶器、磁器	江戸	浅間B軽石含む
32	84×95・16	単独	なし		浅間B軽石含む
33	83×79・8	単独	なし		浅間B軽石含む
34	190×222～・46	1住→34坑	土器、軟質陶器、陶・磁器	17世紀	浅間B軽石含む
35	125×191・33	7溝→35坑	土器、陶器、磁器	江戸	浅間A軽石含む
36	104×133～・21	単独	なし		浅間B軽石含む
37	—×—・38	37坑→38坑	なし		浅間B軽石含む
38	140×—・50	38坑→24坑	なし		浅間B軽石含む
39	(260)×217・80	23・24・38坑より新	なし		浅間B軽石含む
40	—×160・10	41坑→40坑	土器、陶器	江戸	浅間A軽石含む
41	47×126・19				浅間B軽石含む
42	178～×122・57	番号なし土坑→42坑	土器、瓦、磁器	江戸	浅間A軽石含む

田端C区遺構外出土遺物（第183図、図版55）

第183図 田端地区C区遺構外出土遺物（1）の1は磁器角皿、6・7は香炉、8は片口、9は火鉢脚部である。11は外底をヘラ切りした須恵器杯、12は土師器甕である。11・12の遺物の示す時期の遺構は、本地区では検出していない。さらに下位の層に遺物に相当する遺構があったか、または周辺からの流れ込みと考えられる。



第183図 田端地区C区遺構外出土遺物

5 田端地区D区

田端D区第1号竪穴（第184～186図）

Dライン・71km458m付近で検出した。確認面は第7層である。3号溝が南東隅近くで本住居に重複し、両者は1→3号溝の順に新しい。覆土は自然に堆積している。壁は高さ40cm前後が遺存し、斜めに立ち上がる。床面は砂礫層に達しており、ほぼ平坦であるが、一般的な住居跡にみられる硬化した床面は確認できなかった。柱穴とみられるピットを10個検出した。これらは壁際に並んでいる。各ピットは垂直に掘り込まれたもの、外側に傾いて掘り込まれたものなどがあり、一定ではない。壁溝・カマド・貯蔵穴等は検出していない。

以上の遺構の検出状況から、本遺構は竪穴住居ではないと考えられる。

遺物はいくつか出土しているが、すべて覆土出土の参考品である。1号溝に平行していることから、本遺構の時期も中世以降に属するものとみられる。

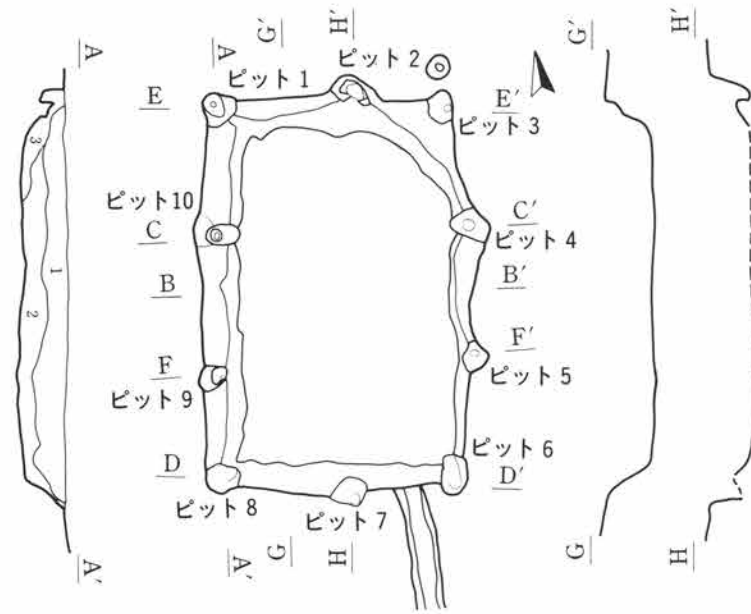
田端D区第2号竪穴（第187～191図、図版56）

E-Fライン・71km436m付近で検出した。確認面は第7層である。北半部分は調査区外にある。覆土は自然に堆積している。壁は20cm前後が遺存し、斜めに立ち上がる。床は砂礫層に達しており、平坦であるが、硬化面はみられなかった。柱穴はP1～6の6個を検出した。柱穴配置は1号竪穴と同様であるが、それより全体的に浅い。壁溝・カマド・貯蔵穴等は検出していない。

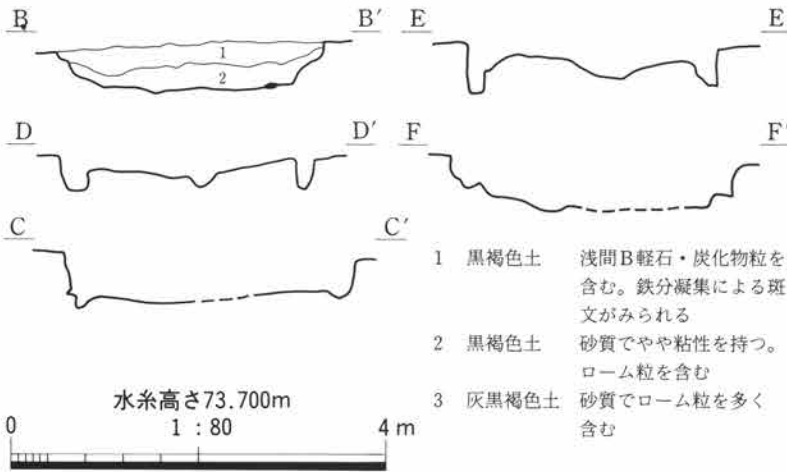


第184図 田端地区D区1号竪穴状遺構

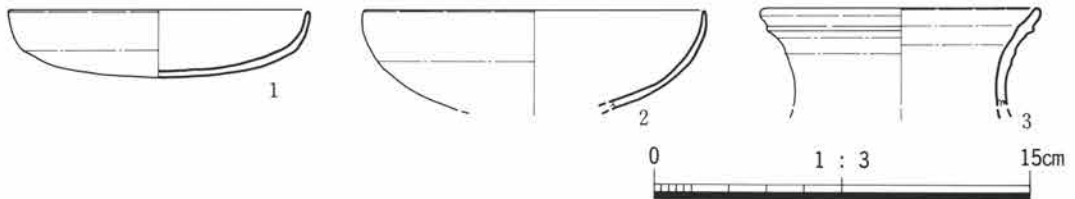
田端遺跡 田端地区D区1号竪穴
(単位cm)



平面形	長方形	規模	436×286
面積	12.5㎡		
壁高	31~50		
長軸方位	N 7°E		
柱穴			
	上バ径	下バ径	深さ
P 1	35	20×25	46
P 2	51×	21×14	41
P 3	28×33	9	41
P 4	41×32	7	40
P 5	28×33	6	31
P 6	28×40	14×32	31
P 7	40×31	8	36
P 8	31×34	8	37
P 9	33×25	7	33
P 10	34×22	5	57
柱間寸法 (心心)			
梁行			
P 1 - P 3	249	P 6 - P 8	236
P 1 - P 2	152	P 6 - P 7	110
P 2 - P 3	99	P 7 - P 8	133
桁行			
P 1 - P 8	390	P 3 - P 6	335
P 1 - P 10	139	P 3 - P 4	125
P 10 - P 9	146	P 4 - P 5	135
P 9 - P 8	106	P 5 - P 6	129



第185図 田端地区D区1号竪穴状遺構



第186図 田端地区D区1号竪穴状遺構出土遺物

以上の検出状況から、本遺構は住居跡ではないと考えられる。

遺物は底面からの出土があるが、遺物の出土レベルからみると床下に相当し、これらは下層の遺物を取り上げたものと推定した。

第191図 1・3は中央北寄りの底面下から出土した。2は覆土出土の参考品である。また、底面から、馬の骨（歯）が出土しているが、出土レベルは底面直上である。

時期は1号竪穴と同様に、中世以降に属すると考えられる。



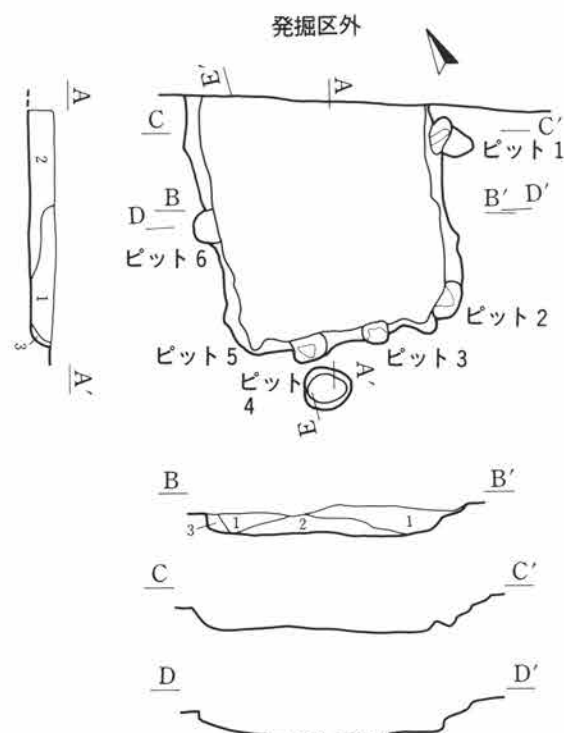
第187図

田端地区D区2号
竪穴状遺構（1）

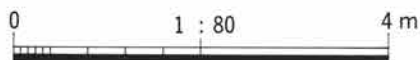


第188図

田端地区D区2号
竪穴状遺構（2）

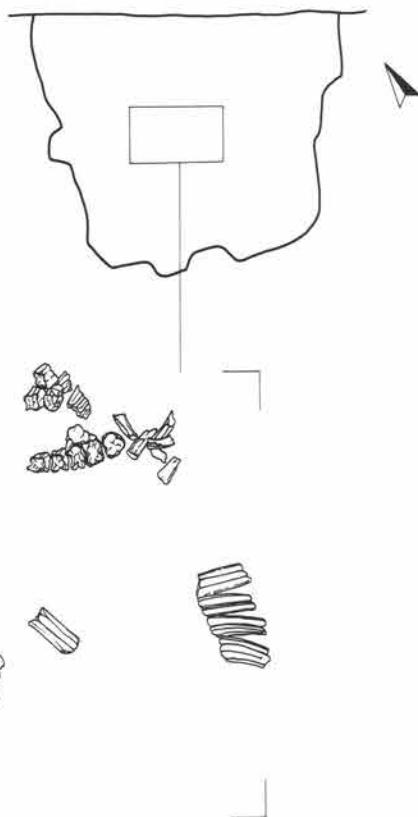


- 1 黒褐色土 砂質で粘性をもつ。
礫・軽石（時期不明）
を含む
- 2 黒褐色土 礫を多く含む
- 3 黄褐色土 粘性をもつ。地山の
流れ込みと思われる

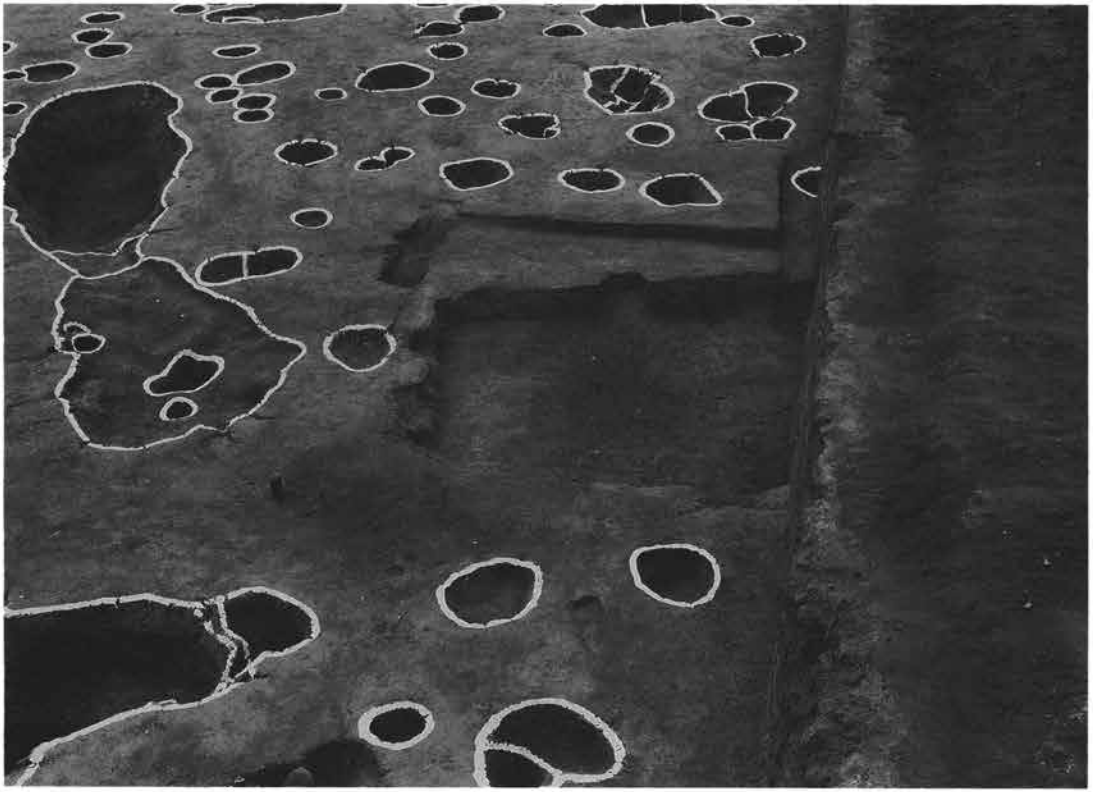


田端遺跡 田端地区D区2号竪穴 (単位cm)

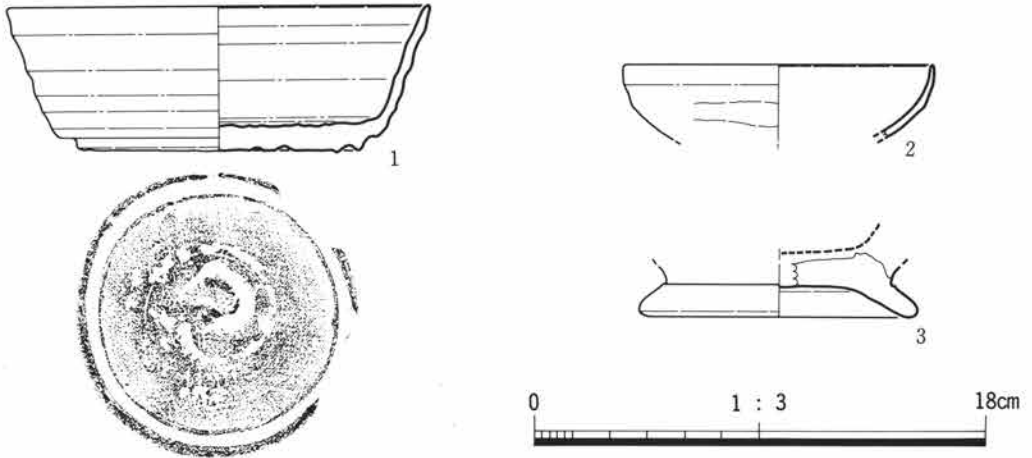
平面形	長方形	規模	256×280以上	
面積	—	壁高	14~25	
長軸方位 N19°E				
主柱穴				
	上バ径	下バ径	深さ	
P 1	38	10	18	
P 2	41	17	19	
P 3	27	17	6	
P 4	37	16	31	
P 5	26	14	19	
P 6	39	32	13	
柱間寸法 (心心)				
梁行	桁行			
P 2 - P 5	204	P 1 - P 2	172	
P 2 - P 3	80	P 5 - P 6	80	
P 3 - P 4	75			
P 4 - P 5	55			



第189図 田端地区D区2号竪穴状遺構及び馬歯出土状況



第190図 田端地区D区2号竖穴状遺構(3)



第191図 田端地区D区2号竖穴状遺構出土遺物

田端地区D区溝

本地区の溝は1～4号まであり、1・3号が南北方向、2・4号が東西方向に延びる。これらは多少の偏りがあるとはいえ、それぞれほぼ直交する方向にあることから、1・2号竪穴状遺構をも含めて互いに関連する遺構であった可能性がある。

第13表 田端地区D区 溝一覧表

番号	幅cm	長さm	深さcm	重複関係 [旧→新]	遺物	時期	備考
1	320～350	17.5	40～50	2・18坑→1溝、1溝→2溝	軟質陶器、瓦	12C以降	N3°E
2	80～110	12	20前後	1溝→2溝		12C以降	N97°E
3	30～40	11.5	50～60	1竪穴→3溝→1坑			
4	40～60	4.5	15前後	4溝→16坑			N86°E

田端地区D区第1号溝（第193～199図、図版56～58）

L-Oライン・71km 460m付近で検出した。確認面は第2層である。2・18号土坑と重複しており、本溝の方が新しい。また、2号溝との関係では、1号→2号の順に新しい。

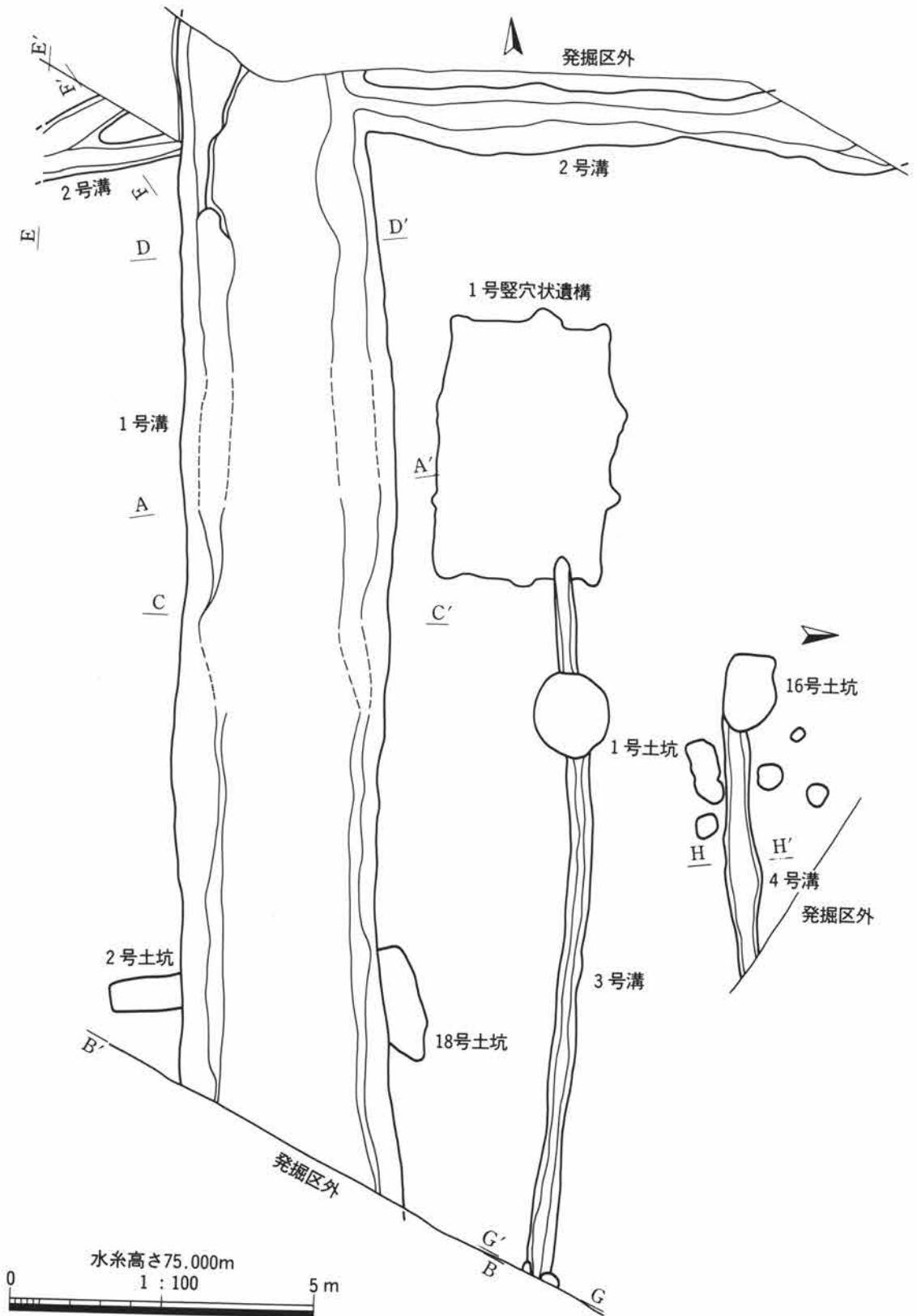
調査区内では長さ約17.5mを検出し、走行はN3°Eをとる。幅は320～350cm、深さは40～50cmである。覆土は自然の堆積状態を示し、上層に浅間A軽石を含んだ暗黄褐色土、底面直上に浅間B軽石を含んだ灰色土が堆積する。中位に黒褐色砂の層があり、礫を多量に含み、瓦を出土した。この黒褐色砂の層の直上は灰褐色土で、浅間B軽石を含んでいる。底面は凹凸があり、幅に比べて浅く壁は斜めに立



第192図
田端地区D区
1号溝遺物
出土状態



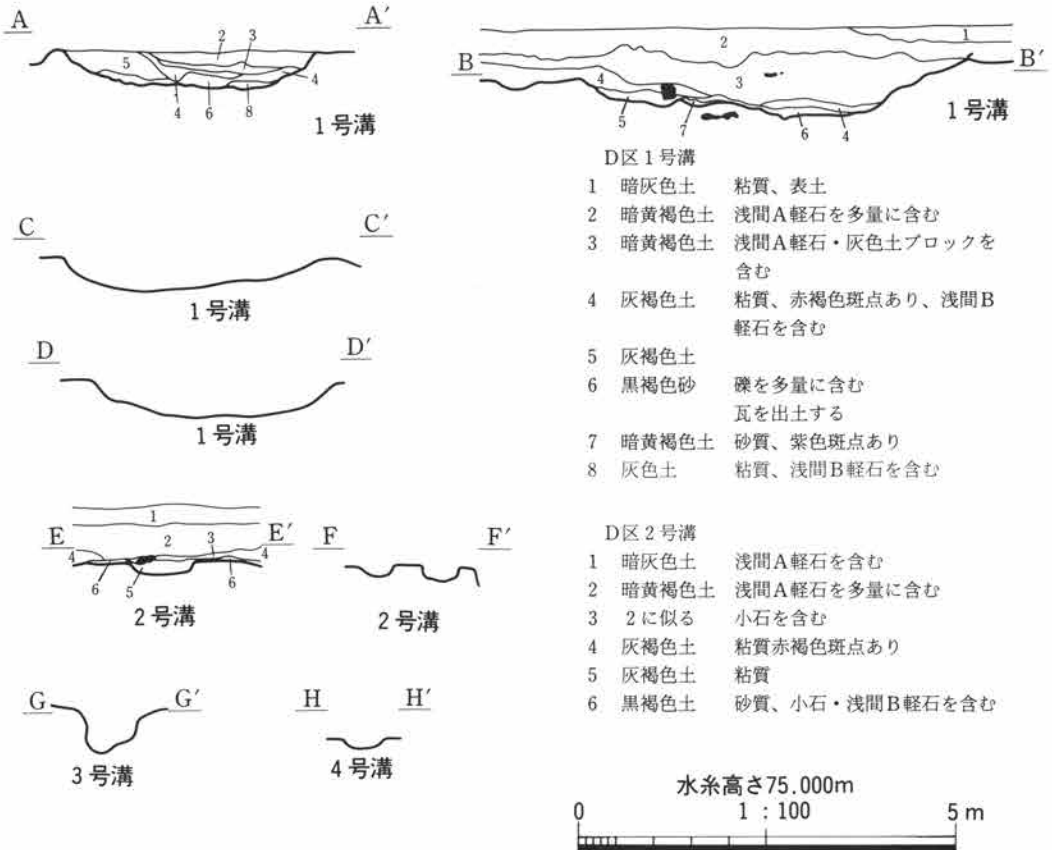
第193図 田端地区D区1号溝(1)



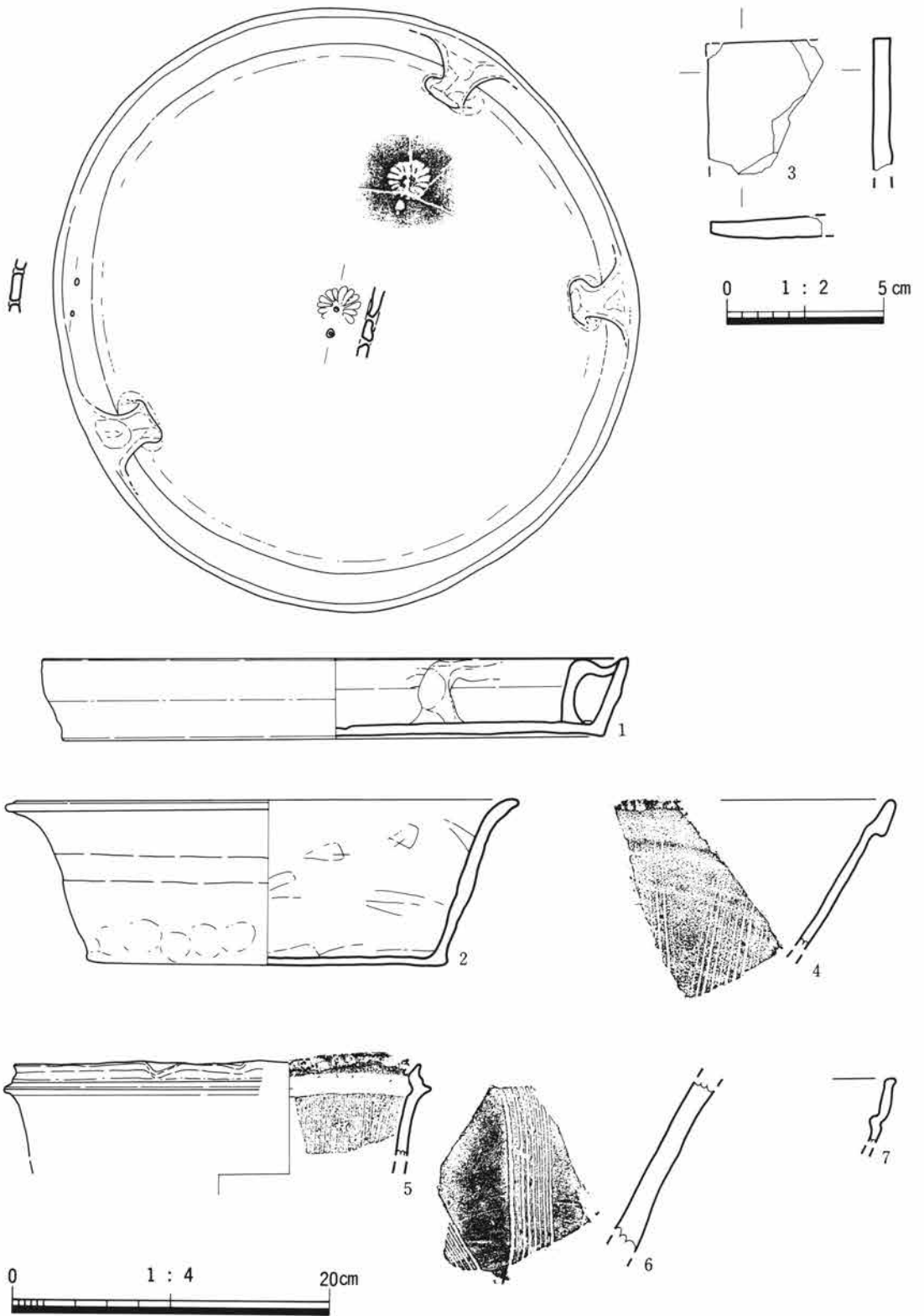
第194図 田端地区D区1~4号溝 (1)



第195図
田端地区D区
1号溝 (2)



第196図 田端地区D区1～4号溝 (2)



第197図 田端地区D区1号溝出土遺物(1)

ち上がる。

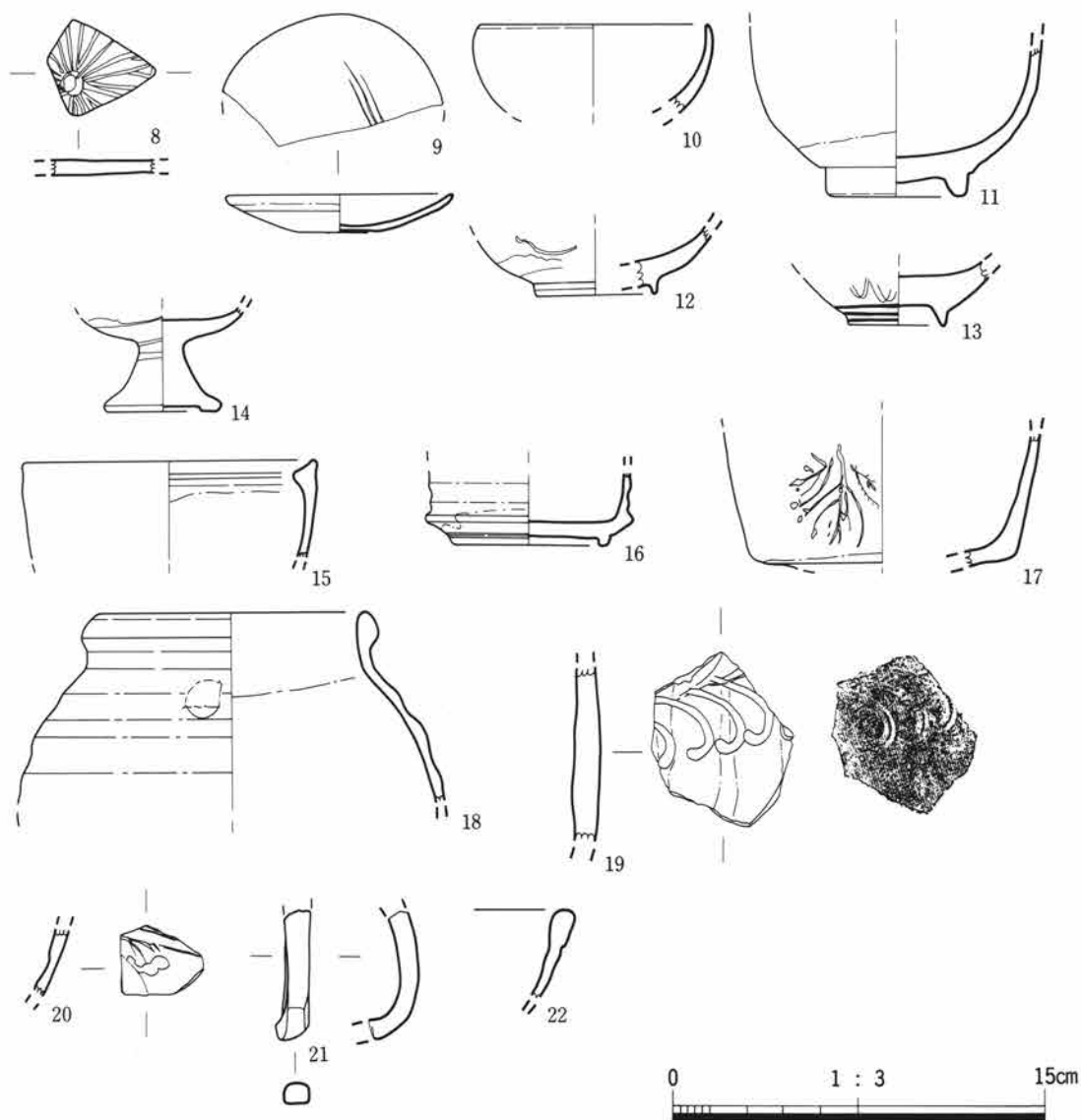
遺物は内耳土器、砥石、すり鉢、陶器・磁器、布目のついた瓦が出土している。瓦は軒丸瓦、軒平瓦があり、田端地区B区16号溝と同様の古いものである。

本溝の掘削は底面に浅間B軽石を含んでいることから、12世紀以降と考えられる。

田端地区D区第2号溝（第194・196・200～204図、図版59）

N-Oライン・71km456～71km470m付近で検出した。調査区北西部に位置する。確認面は第2層である。第1号溝と重複しており、1号→2号溝の順に新しい。

本溝は調査区内で長さ約14mを検出した。1号溝とほぼ直交し、1号東側での走行はN97°Eを示す。



第198図 田端地区D区1号溝出土遺物（2）

1号溝西側で一旦2本に分かれ、再び合流して調査区外へ向かう。深さは20cm前後である。覆土は自然の堆積を示し、1号溝と同様に、上層に浅間A軽石を含んだ暗黄褐色土が堆積する。溝の底面から3/4ほどは灰褐色土で埋没している。調査区壁の土層断面でみると、本溝は浅間B軽石を含む黒褐色土を切り込んで掘削されている。底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。1号溝西側の上面からは、小



第199図 田端地区D区1号溝出土遺物(3)

石が多数出土している。

遺物は軟質陶器、陶器碗が出土している。本溝の掘削時期は12世紀以降である。遺物の示す時期は18世紀～19世紀とみられる。

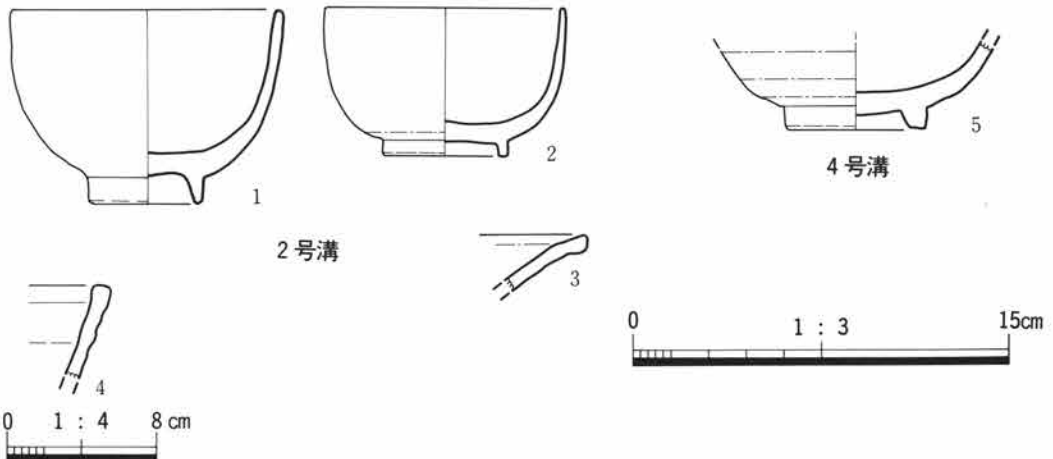
田端地区D区第3号溝（第194・196図）

L-Nライン・71km450～71km456m付近で検出した。確認面は第2層である。1号溝の東側を南北方向に平行して走行し、両者の間隔は2～3mである。3号溝は東側へ凸に湾曲している。

1号土坑・1号堅穴状遺構と重複し、これらは1号堅穴状遺構→3号溝→1号土坑の順に新しい。



第200図
田端地区D区
2号溝遺物出土状態（1）



第201図 田端地区D区2・4号溝出土遺物



第202図 田端地区D区2号溝遺物出土状態(2)



第203図 田端地区D区2号溝(1)



第204図 田端地区D区2号溝(2)



第205図 田端地区D区4号溝

調査区内では、長さ11.5mを検出した。深さは50～60cmで、壁は斜めに立ち上がる。底面は丸く、覆土は自然に堆積している。

遺物は出土していない。本溝は1号溝とほぼ平行していることから、1号溝と同じ頃に掘削されたと考えられる。

田端地区D区第4号溝（第194・196・201・205図、図版59）

O-Pライン・71km447～71km451m付近で検出した。確認面は第2層である。16号土坑と重複し、4号溝→16号土坑の順に新しい。2号とほぼ平行している。

調査区内で長さ4.5m分を検出し、走行はN86°Eを示す。深さは15cm前後で、幅は40～60cmである。底面に平坦面をもち、壁は斜めに立ち上がる。覆土は自然に堆積している。

遺物は図示できるものが少ない。本溝は3号溝とほぼ同規模で、これと直交する東西方向をとることから、3号溝と同じ頃に掘削されたと考えられる。

田端D区土坑（第206～208図）

本地区の土坑は不整形を呈するものが多く、出土遺物も少ない。うち、平安時代以前とみられるのは第7・10・11号土坑であり、その他の土坑は中世以降とみられる。11号土坑は覆土に浅間B軽石を含んだ層があり、中世以降に属する可能性がある。

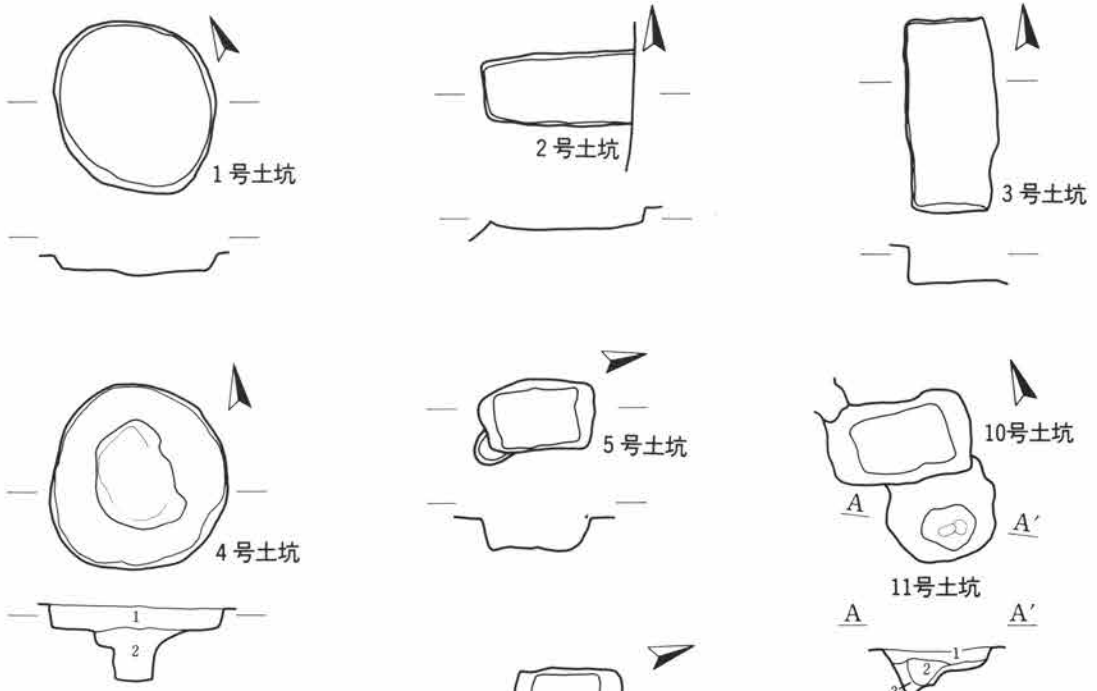
なお、遺構図はすべてここで扱い、7・10・11号土坑出土の遺物は第3分冊で報告する。

1号土坑は3号溝と重複し、3号溝→1号土坑の順に新しい。2・3号土坑は1号溝によって切られている。4号土坑は井戸の可能性がある。7号土坑は不整形な楕円形を呈し、中央部にはさらに一辺100cmほどの方形を呈する掘り込みがある。17号土坑は7号に隣接した東側にあり、不整形である。14号土坑は風倒木の跡かもしれない。16号土坑からは陶器の破片が出土しており、近世の所産と考えられる。

以上、本地区の検出土坑の概略を報告したが、奈良時代の遺物を出土した11号土坑も内部に浅間B軽石を含んでいること等、時期推定の決め手に欠けている。明確な根拠を持たないが、時期不明の土坑群は中世以降の所産と考えたい。

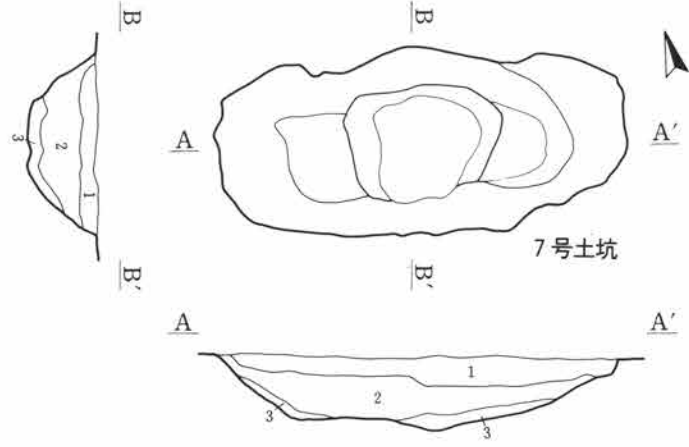
田端地区D区遺構外出土遺物（第209図、図版59）

第209図 田端地区D区遺構外出土遺物1は陶器皿、2・3は土師器杯で、2・3の遺物は8世紀ころとみられる。



4号土坑

- 1 黄灰色土 砂質でブロック状の堆積。浅間B軽石を含む
- 2 黄灰色土 砂質で粘性を持つ。比較的均質

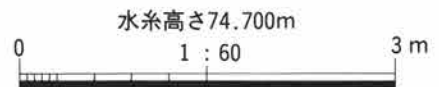
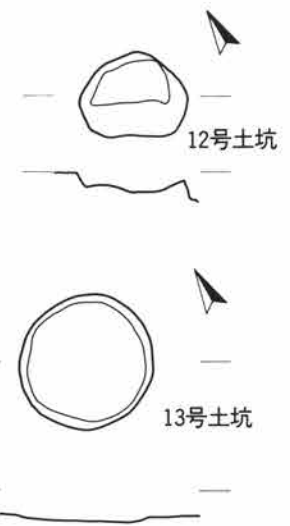


7号土坑

- 1 黒褐色土 砂質で粘性を持つ。浅間B軽石を含む
- 2 黒褐色土 黄褐色土ブロックを含む
- 3 暗褐色土 黄褐色土粒を多く含む

11号土坑

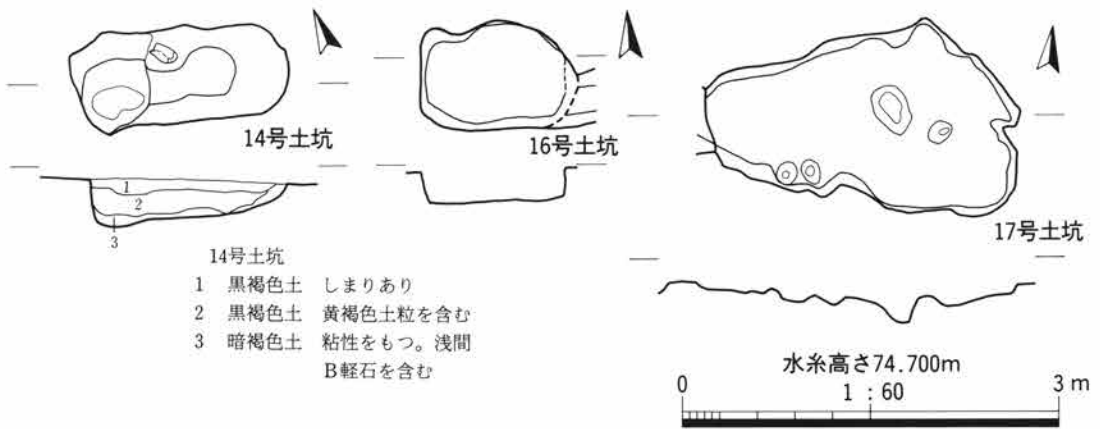
- 1 黒褐色土 粘性を持つ。浅間B軽石を多く含む
- 2 黒褐色土 1層よりも暗く、粘性を増す。浅間B軽石を含む
- 3 暗褐色土 ローム粒、浅間B軽石を若干含む



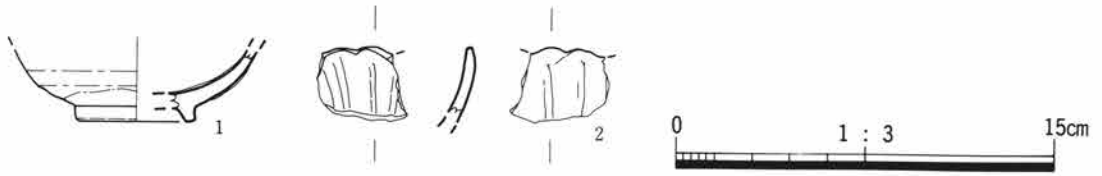
第206図 田端地区D区1～7・10・11・12・13号土坑

第14表 田端地区D区 土坑一覧表

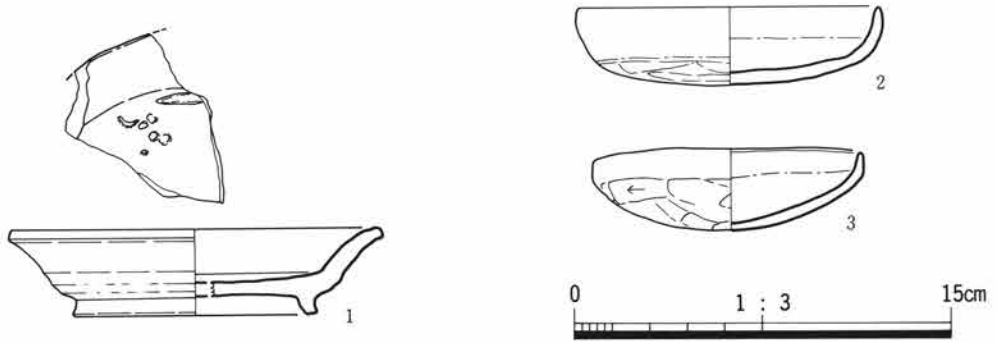
番号	大きさcm・深 さcm	重複関係 [旧→新]	遺 物	時 期	備 考
1	134×126・17	3溝→1坑			
2	57×121～・12	不 明			
3	153× 73・10	不 明	土 器	平安?	
4	146×141・31	単 独			小規模な井戸か
5	91× 55・22	単 独			
6	86× 46・44	単 独			
7	328×148・63	17坑と接する	土 器	奈良・平安	
10	113× 65・52	11坑→10坑	土 器	奈良?	
11	—× 85・52	11坑→10坑	土 器	古墳?	浅間B軽石含む
12	—× 86・15	単 独			
13	107×106・ 5	単 独			
14	76×173・37	単 独	土 器		浅間B軽石含む
16	87×127・25	4溝と重複	陶 器	16世紀・17世紀?	
17	144×249・12	7坑と接する	土 器		



第207図 田端地区D区14・16・17号土坑



第208図 田端地区D区16号土坑出土遺物



第209図 田端地区D区遺構外出土遺物

6 田端地区E区

田端地区E区溝

本地区の溝は7本あり、1号はごく最近の溝、2号は時期不明、3・4号は「T」字形に合流するとみられる同時期の溝である。5・7号は確認層位から奈良・平安時代に属すると考えられ、第3分冊で報告する。ここでは、1・2・3・4・6号溝を報告する。

第15表 田端地区E区 溝一覧表

番号	幅cm	長さm	深さcm	重複関係 [旧→新]	遺物	時期	備考
1	42~56	3.9	3~9	道路舗装前表土下	灰釉陶器平安土器	18C以降	N3°E、浅間A軽石を多量に含む
2	30~70	64.6	4~16	5溝→2溝	なし	中世?	N7°E(最長部)、切り込み面不明
3	270	17.5	84	3溝→6溝	5溝と混在	中世?	N97°E、浅間A軽石を含む層の下で切り込む
4	200	3.5	72	4溝→6溝	平安土器20片、1集石の土器混入	中世?	N14°E、3溝と同時期
5	200	48	75~120	5溝→2溝 5溝→3・4溝	平安土器片多数	奈良・平安	蛇行する、浅間B軽石を含む層の下で切り込む
6	38	3.5	4	3・4溝→6溝	なし	中世?	N5°E、フク土中に浅間B軽石を含む
7	210~230	5.0			なし	平安?	N127°E、5溝よりも1層下で切り込む

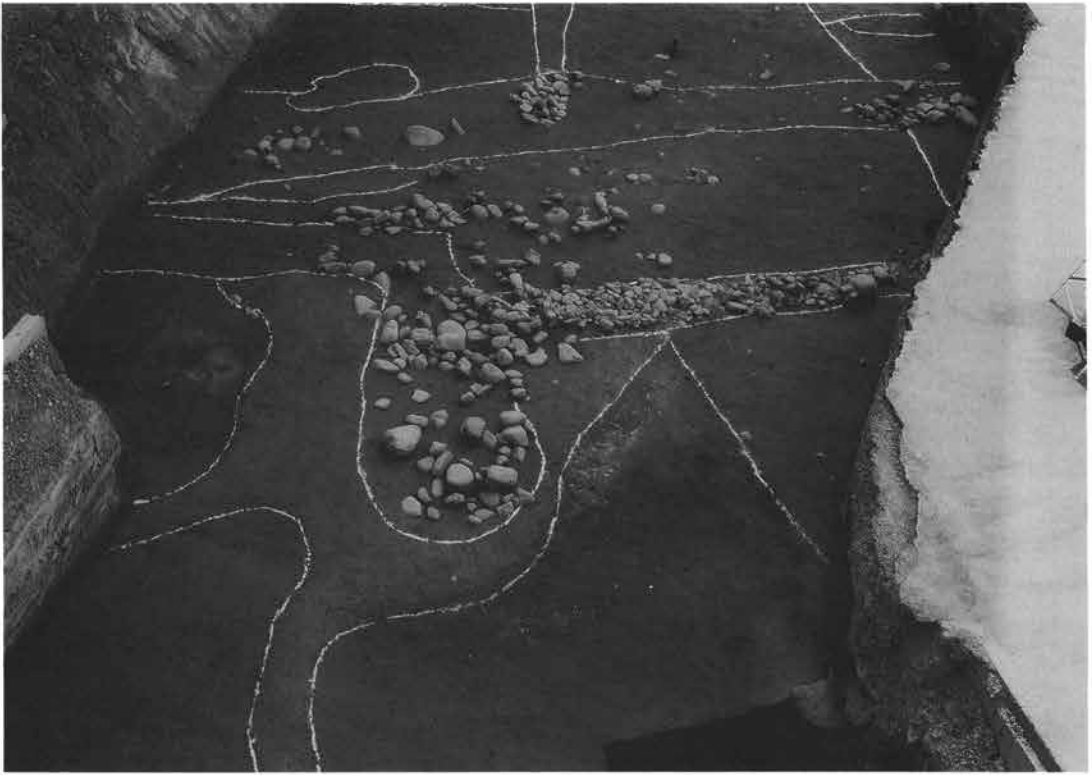
田端地区E区1号溝 (第210・211・216図)

Oライン・71km020m付近で検出した。確認面は第2層である。調査着手時に機能していた道路の直下であり、覆土に多量の浅間A軽石を含んでいる。道路の舗装工事直前までの、生活道路に付設された側溝と考えられる。

遺物は平安時代の土器が出土しているが、小片のため図示しなかった。時期は18世紀以降と考えられる。

田端地区E区2号溝 (第212・213・216図)

調査区全域で検出した。調査区内を「コ」の字状に走行している。北側の東西方向の走行は約5m、南側の東西方向の走行は約16.5m、南北間は約43mである。南北に走行する部分の中間は途切れているが、薄く堆積した砂を確認しており、本来連続していたことは確実である。本溝の覆土は砂であり、



第210図 田端地区E区1号溝（1）



第211図 田端地区E区1号溝（2）



第212図 田端地区E区2号溝(1)



第213図 田端地区E区2号溝(2)

流水があったか、または川の洪水で埋没した可能性がある。

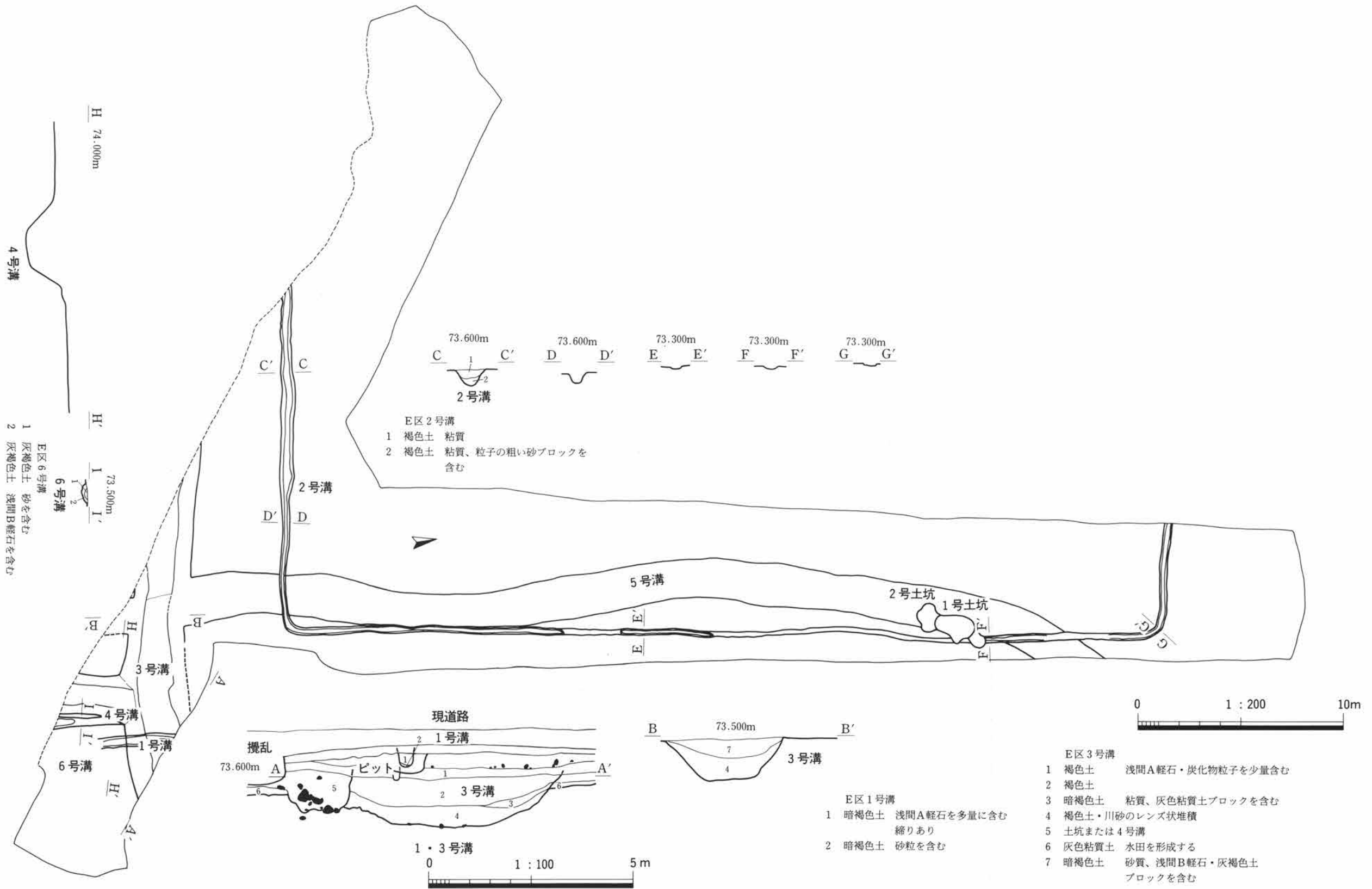
南北の調査区壁は台風と新幹線工事により破壊されたため、切り込み面を確認することはできなかった。しかし、平安時代の住居跡とみられる2号住居を確認した面で検出し、5号溝を切っていたことから、平安時代～中世にかけて掘削された溝と考えられる。南側の3号溝と平行・直角関係にあることから、心洞寺に関連する溝と推定する。遺物は溝脇から平安時代の土器が出土しているが、図示しなかった。



第214図
田端地区E区
3・4号溝



第215図
田端地区E区
3号溝土層断面



E区2号溝
 1 褐色土 粘質
 2 褐色土 粘質、粒子の粗い砂ブロックを含む

E区6号溝
 1 灰褐色土 砂を含む
 2 灰褐色土 浅間B軽石を含む

E区1号溝
 1 暗褐色土 浅間A軽石を多量に含む 締りあり
 2 暗褐色土 砂粒を含む

E区3号溝
 1 褐色土 浅間A軽石・炭化物粒子を少量含む
 2 褐色土
 3 暗褐色土 粘質、灰色粘質土ブロックを含む
 4 褐色土・川砂のレンズ状堆積
 5 土坑または4号溝
 6 灰色粘質土 水田を形成する
 7 暗褐色土 砂質、浅間B軽石・灰褐色土ブロックを含む

第216図 田端地区E区1～4・6号溝

田端地区E区第3・4号溝（第214～217図）

Oライン・71km020～71km035m付近で検出した。確認面は第2層である。両者は重複関係を確認することができず、ほぼ同時期に掘削された溝と考えられる。3号溝は調査区北側の壁面で土層を観察し、浅間B軽石を含む層を切っていることを確認した。底面は礫層に達しており、土層の堆積状態は寺東地区の1・5号溝に類似する。走行は3号溝がほぼ東西方向、4号溝はこれと直角に合流する。

遺物は5号溝と重複する地点で出土しているが、平安時代の遺物であり、5号溝に属する遺物と平安時代の住居跡から流れ込んだものと推定した。本溝の時期を示す遺物はない。時期は切り込み面から、中世以降とみられる。

溝の走行する方向を延長すると東側に接する寺東地区の1号溝に平行すること、埋没土の様子が寺東地区の1・5号溝に類似すること、切り込み面が中世以降とみられることなどから、本溝は心洞寺に関連する溝と考えられる。

田端地区E区第6号溝（第216図）

N-Oライン・71km021m付近で検出した。確認面は第2層である。3・4号溝と重複し、本溝の方が新しい。覆土に浅間B軽石を含んでいる。走行はほぼ4号溝に平行である。遺物の出土はない。時期は中世以降と見られる。

本溝も走行する方向と時期から、心洞寺に関連する可能性がある。



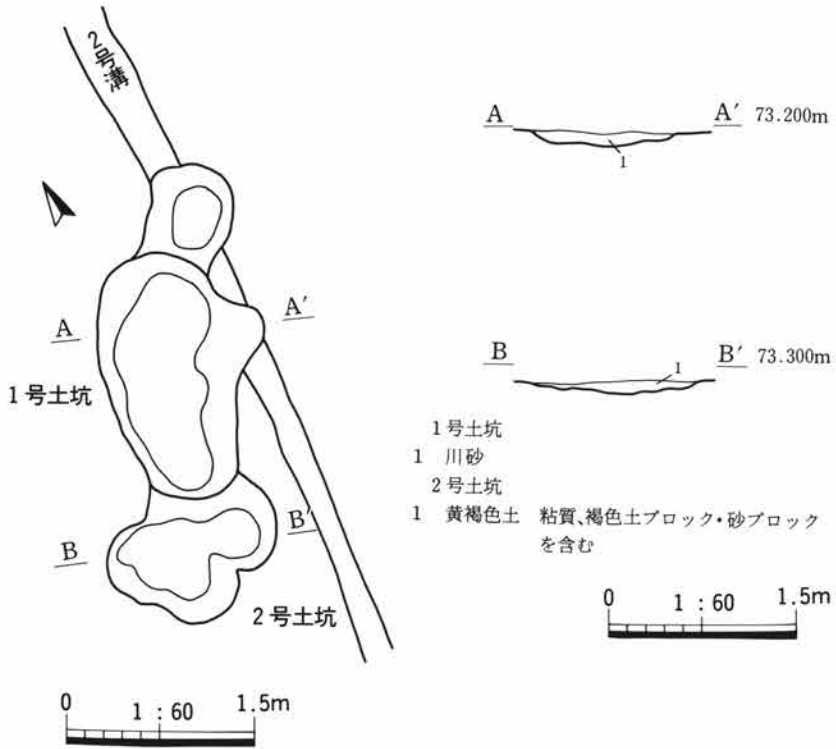
第217図 田端地区E区3号溝北壁土層断面

田端地区E区土坑（第218～220図、図版59）

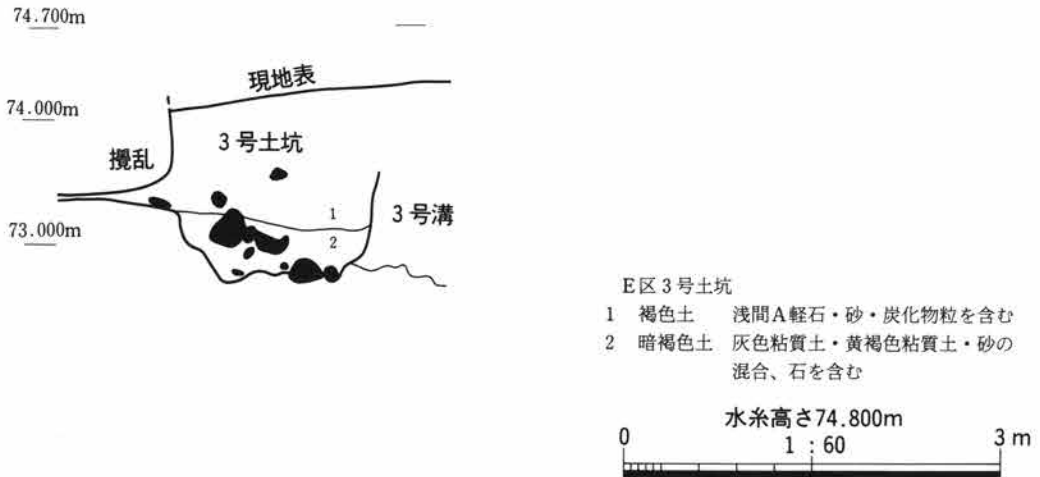
本地区検出の土坑は1～16号まであり、そのうち3号土坑が近世以降、1・2号が中世以降とみられる。4号土坑は水田アゼを切っており、平安時代とみられる。5～16号土坑はいずれも水田検出面よりも下位で確認している。

ここでは1・2・3号土坑を報告し、4号土坑は第3分冊で、5号土坑以下は第4分冊で扱う。

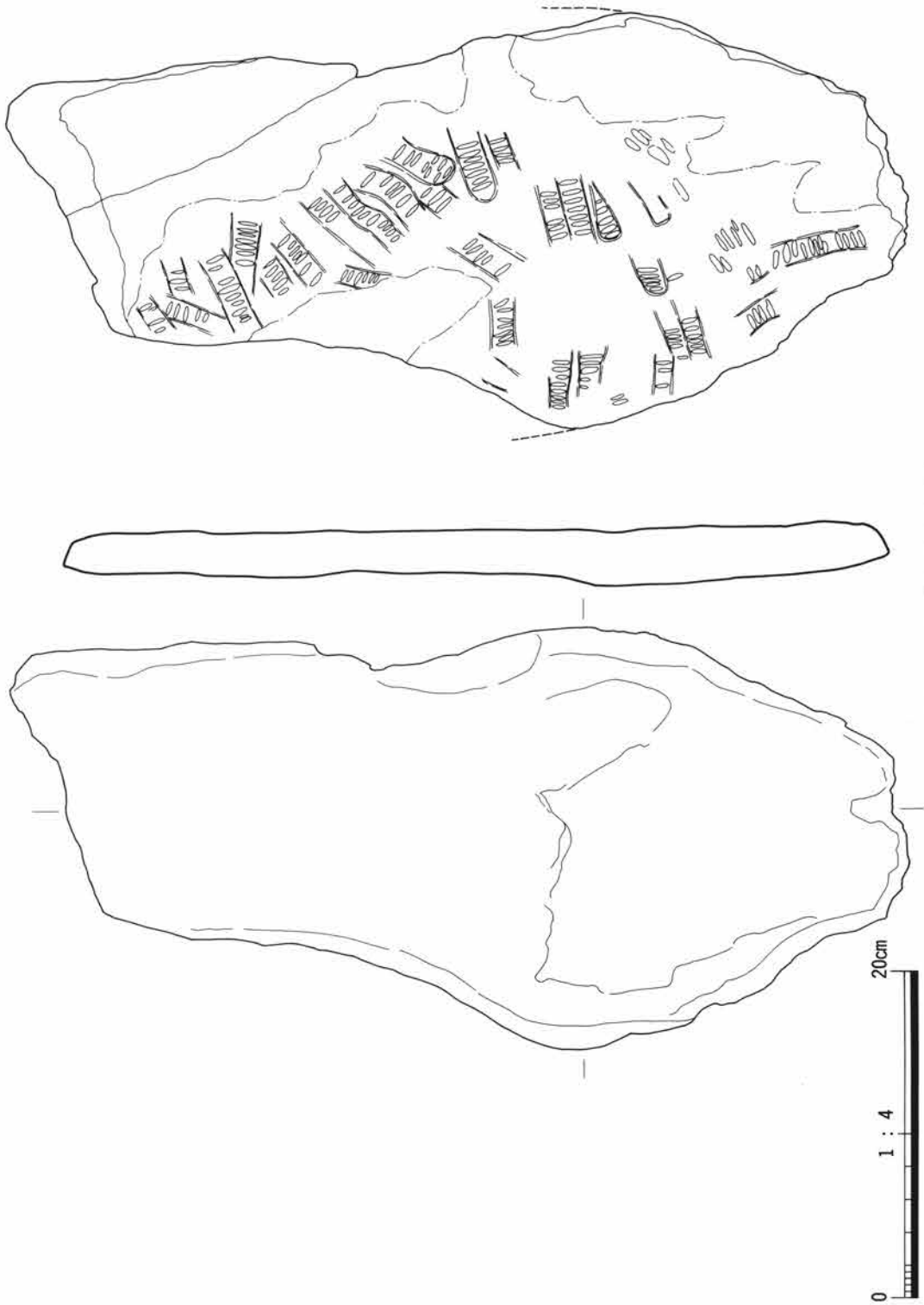
第3号土坑は側道調査区内の東側にあり、O-Pライン・71km025m付近の調査区北側の壁で検出した。覆土に浅間A軽石を含んでおり、18世紀以降に属するとみられる。中から板碑状の石が出土して



第218図 田端地区E区1・2号土坑



第219図 田端地区E区3号土坑



第220図 田端地区E区3号土坑出土遺物

いる。なお、この板碑については遺構外出土遺物とともに、本分冊末尾で扱う。

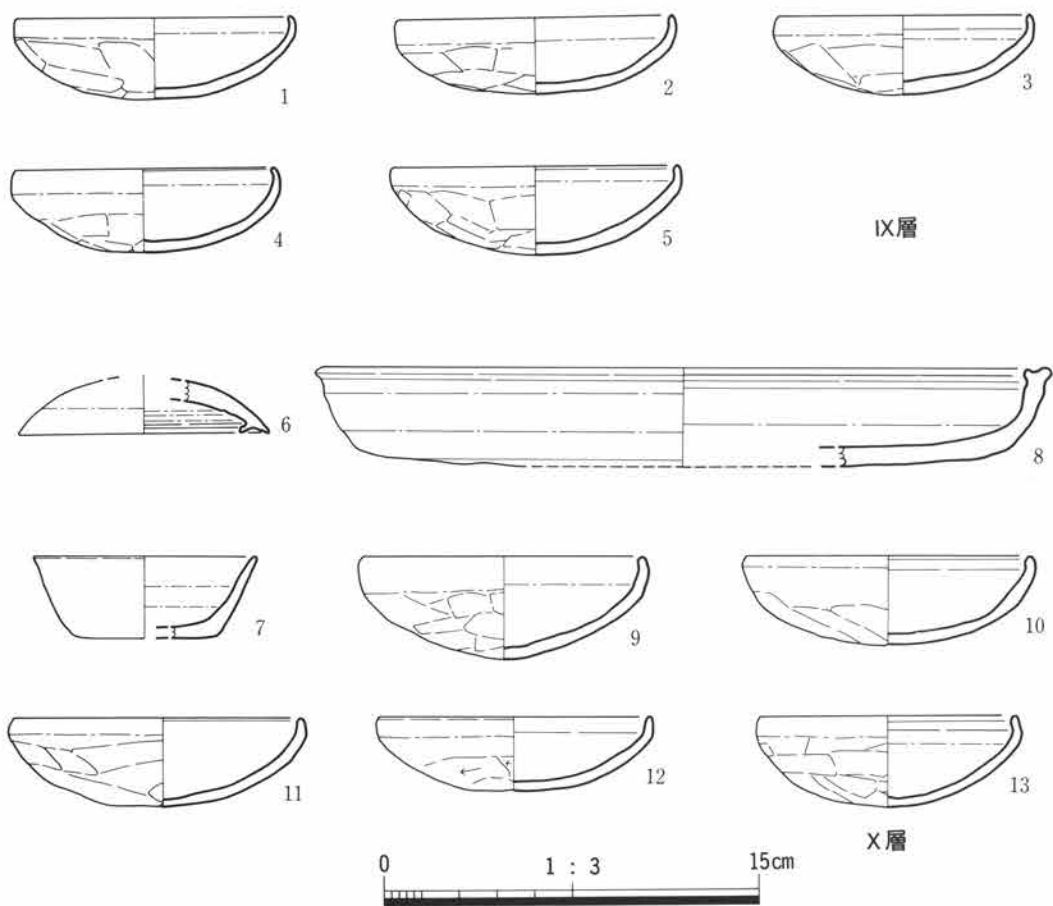
1・2号土坑はVライン・71km043m付近で検出した、不整形の土坑である。2号溝を切り込んでおり、2号土坑はその大半が5号溝に乗る。2号溝が中世以降の掘削とすれば、1・2号土坑も同様である。1・2号とも遺物の出土はない。

第16表 田端地区E区 土坑一覧表

番号	大きさcm・深 さcm	重複関係 [旧→新]	遺 物	時 期	備 考
1	195×135・10	2溝→1坑		中世～	
2	137×98・11	5溝→2溝→2坑		中世～	
3	—×—・—		板碑状の石	江 戸	浅間A軽石含む
4	143×104・5	水田アゼ→4坑		奈良・平安	
5	104×369・78	5坑→水田アゼ		古墳	
6	65×53・9	14住→6坑		古墳	
7	164×86・21			古墳	
8	63×112・8			古墳	
9	128×—・16			古墳	
10	126×—・13			古墳	
11	121×194・32			古墳	
12	56×—・19			古墳	
13	85×—・9			古墳	
14	86×—・7			古墳	
15	49×51・20			古墳	
16	52×55・—			古墳	

田端地区E区遺構外出土遺物（第221図、図版60）

発見層位は9層と10層であるが、遺構に伴わない遺物である。第221図1～5は9層から、6～13は10層からそれぞれ出土した。時期的な差は看取できない。



第221図 田端地区E区遺構外出土遺物

7 寺東地区

寺東地区第1号溝・土塁の土層断面（第222～236図、図版19～21・60～63）

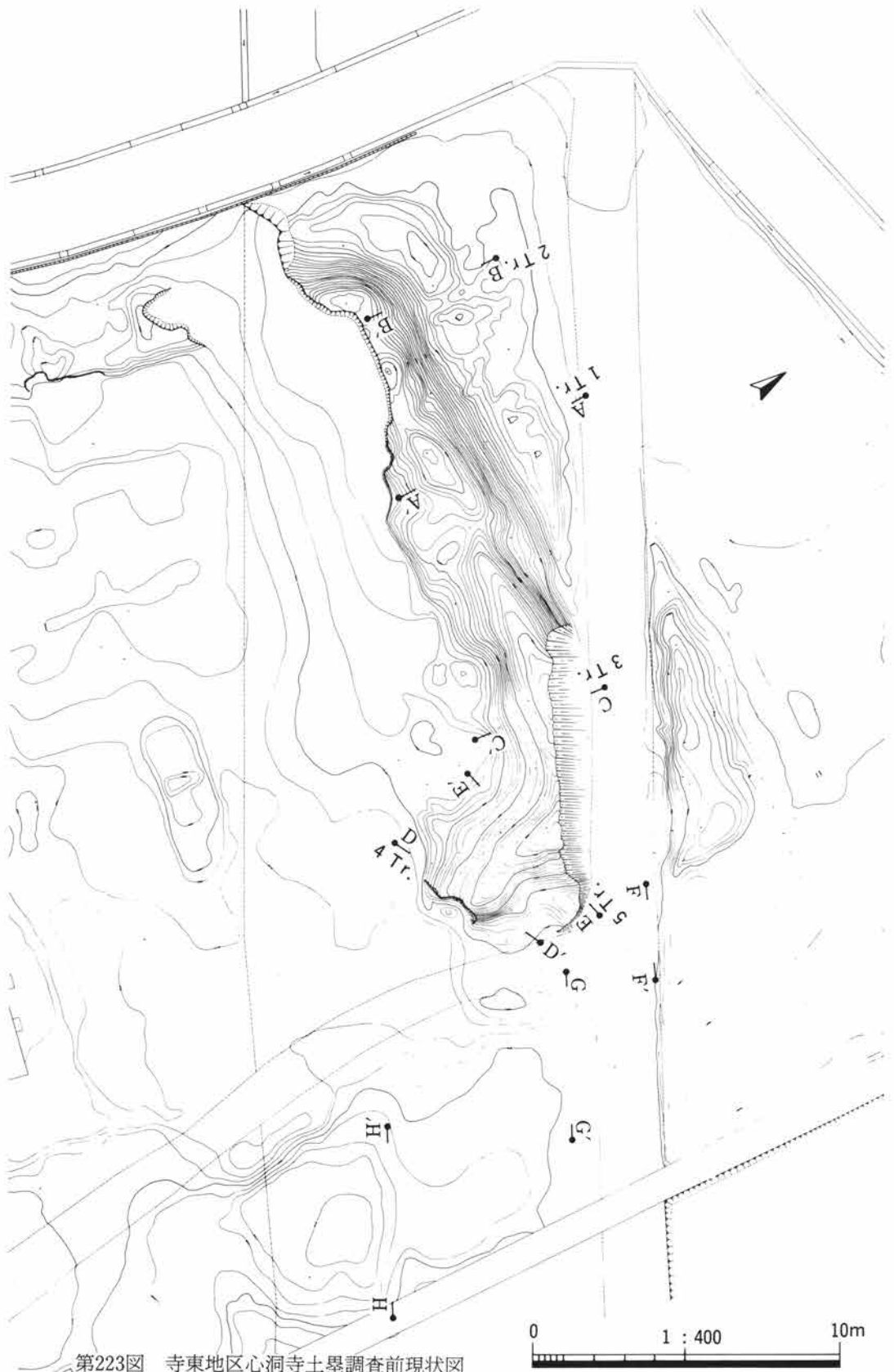
第1号と呼んだ溝は心洞寺にかかわる「濠」と考えられたことから、調査時に遺存していた土塁と1号溝とを通してトレンチを設定し、土層の堆積状態を観察した。トレンチは第1～第5トレンチを設定したが、調査中の排土置き場の都合と第1・2次調査の調査範囲との関係、安全対策上の問題等のため、溝と土塁とを通して土層の観察ができたのは第1・2トレンチのみであった。

土層番号2とした層は1～5トレンチでは、すべて土塁の内側から外側に向かって斜め上方に堆積していた。2層の内部は30～50cm前後の厚さで層をなし、小石や人頭大の石、川砂利、粒子の粗い砂を含んでおり、各層は締まりがない。さらに、第1トレンチではこの層の下部（第5層の直上）に浅間A軽石を含んだ土層を検出している。従って、調査時に盛り土が遺存していた土塁の構築時期は比較的新しい（少なくとも1783年以降）と推定できる。

土層番号3とした層は第3トレンチを除く他の断面で確認でき、水平ないしは凹みに合致して堆積していることから、河川の氾濫に伴う堆積と推定した。3層は中位に浅間A軽石の純層があり、純層以上の層には浅間A軽石を含み、純層の下位は粒子の細かい砂質土・粘質土が下方に凸の状態に堆積する。2層と3層との重複関係は、第1・2トレンチでは3層→2層の順に新しく、第5トレンチでのみ2層→3層の順になる。第5トレンチでは溝の土層と土塁の土層との関係は確認できないことか



第222図 寺東地区調査前の土塁1（東から）



第223図 寺東地区心洞寺土塁調査前現状図

ら、ここでは第1・2トレンチでの前後関係を重視して3層→2層の順に新しいとしておく。

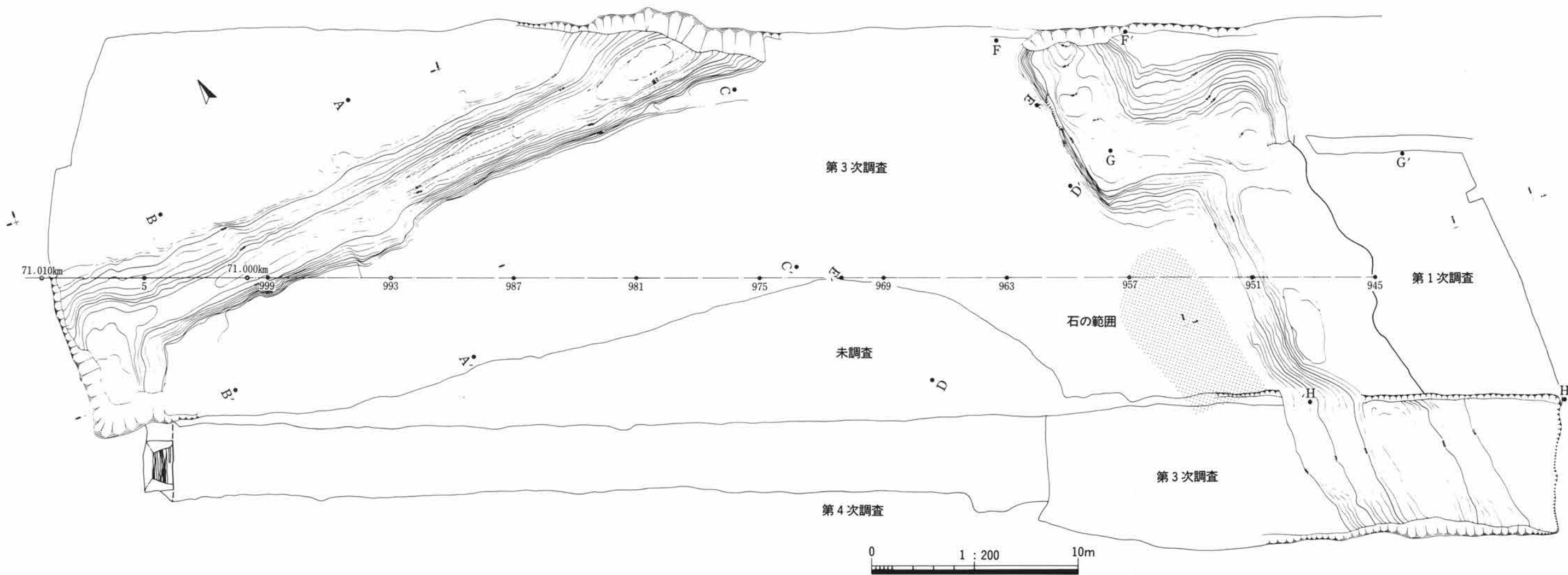
土層番号4とした層は土層3の堆積の直前までに埋まっていた溝の埋没土で、粘質土と砂質土が交互に堆積する。内部からは中世～近世の遺物や古墳時代の遺物が出土し、堆積は一時に埋没した状態ではない。下位の層は粒子の細かい砂質土・粘質土がレンズ状に堆積し、鉄分の沈着がみられた。また、所々に拳大～人頭大の石を含んでいる。これらのことから、この溝は常に滞水していたのではなく、当初「空堀」として掘り込まれたものが次第に埋没していったと考えられる。なお、古墳時代の遺物は堀の壁面から落ちたものであろう。この堀の壁は土層番号6とした浅間B軽石を含む層を切っていることを第1・2トレンチで確認している。従って、1号溝は浅間B軽石の降下以後の掘削であることが確実である。

土層番号8とした層は灰褐色を呈する粘質土で、寺東地区第4次調査（側道部調査）時に水田面を形成する層と認定したものである。この層の直下はオレンジ色を呈し、鉄分が多量に沈着した粘質土であり、本地区の第3次調査で鍵層の一つとしたものである。古墳時代の住居跡はこのオレンジ層の下位で検出している。

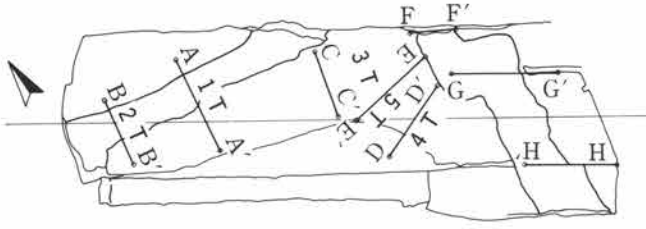
第4トレンチで土層番号12とした層は、拳大～人頭大の石と砂利とで形成する層で、第3次調査南側道の心洞寺側土層断面（第235図）で確認した土塁痕跡断面の状態と同様である。1号溝西岸の幅約4mの範囲に分布し、土塁の推定延長線上に位置する（第225図）石敷部分は、12層と同じものと考え



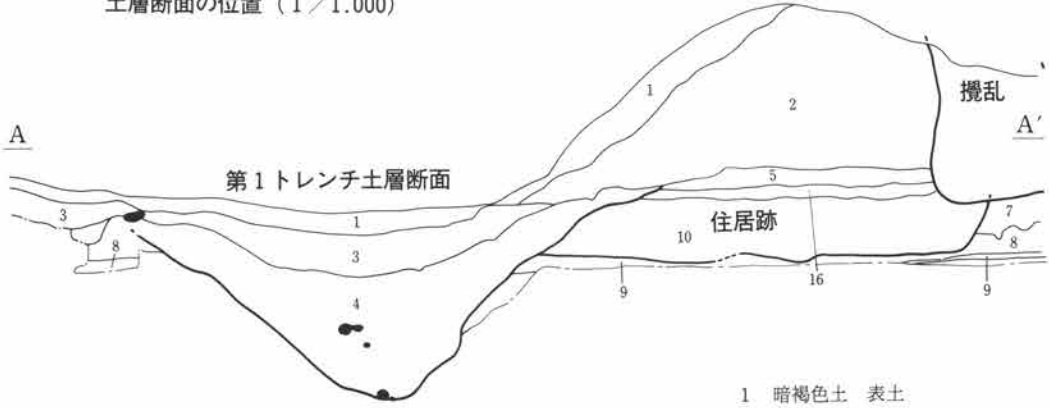
第224図 寺東地区調査前の土塁2（南から）



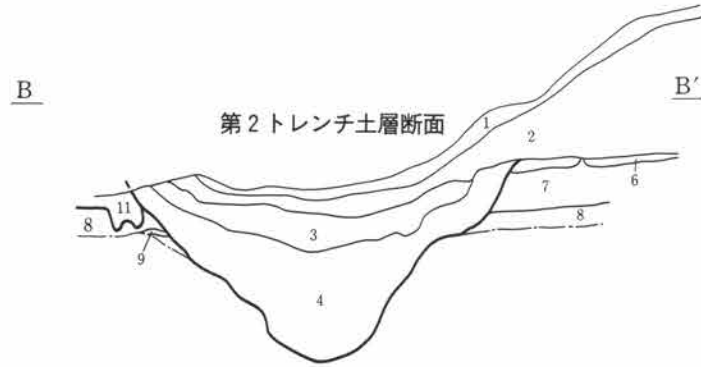
第225図 寺東地区1号溝（等高線）第4次調査



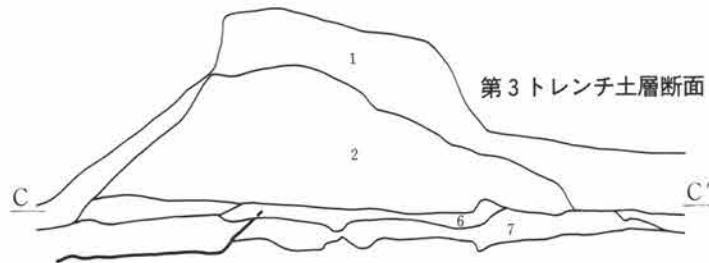
土層断面の位置 (1/1,000)



第1トレンチ土層断面



第2トレンチ土層断面



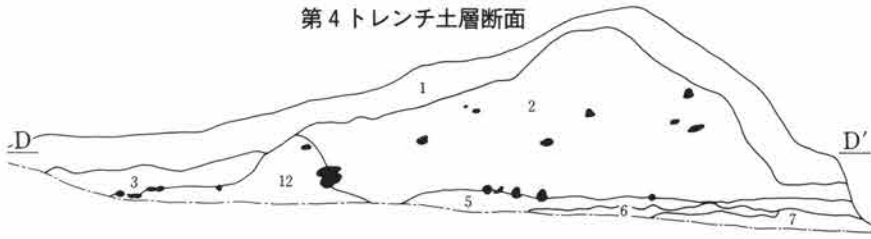
第3トレンチ土層断面

- 1 暗褐色土 表土
- 2 褐色土 砂・石・浅間A軽石をブロック状に含む土塁の盛土
- 3 褐色土 粘質、締っている凹みに堆積した洪水時の層か
- 4 褐色土 粘質土と砂質土が層状をなして堆積する小石・砂利をブロック状に含む
- 5 明褐色土 砂質
- 6 黒褐色土 浅間B軽石を含む
- 7 褐色土 砂質
- 8 灰褐色土 粘質
- 9 明褐色土 粘質、8の土層に鉄分が沈着
- 10 住居跡フク土
- 11 近代の墓壇（未改葬）
- 12 砂礫 当初構築時の土塁の盛土か

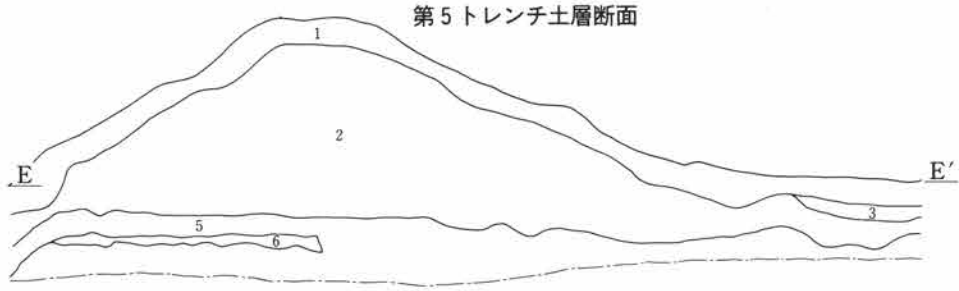


第226図 寺東地区1号溝・土塁土層断面 (1)

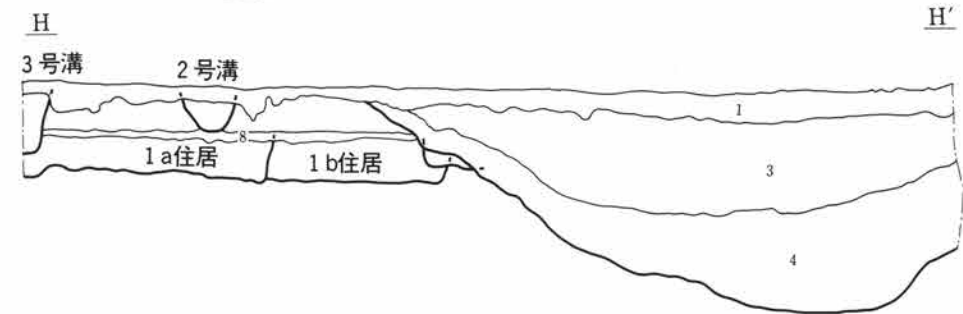
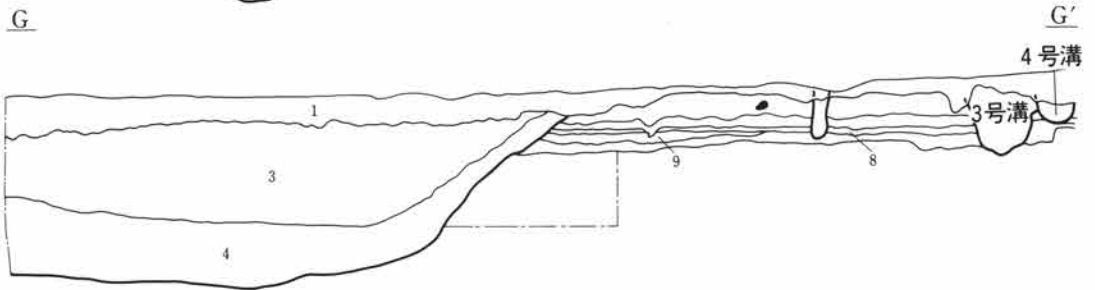
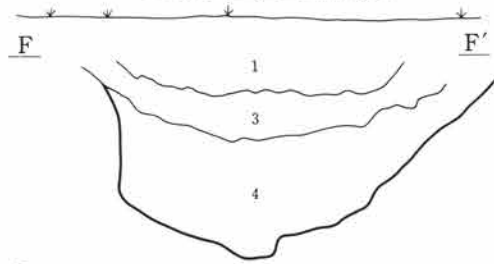
第4 トレンチ土層断面



第5 トレンチ土層断面



北東隅調査区壁土層断面



第227図 寺東地区1号溝・土塁土層断面(2)



第228図 寺東地区1号溝一土塁第1トレンチ土層断面（西から）



第229図 寺東地区1号溝一土塁第2トレンチ土層断面（西から）



第230図 寺東地区1号溝一土塁第3トレンチ土層断面



第231図 寺東地区1号溝一土塁第4トレンチ土層断面



第232図 寺東地区1号溝—土塁第5トレンチ土層断面



第233図 寺東地区1号溝北東隅北側土層断面（F—F'）



第234図 寺東地区1号溝G-G'土層断面



第235図 寺東地区南側道部南壁土層断面土壘下礫層

られ、これは上記の心洞寺側土層断面の石の層に連なると推定できる。さらに、12層は遺存土塁の下位で確認しており、遺存土塁構築時にはすでに存在していた層である。12層の時期は不明だが、遺存土塁基底部を形成する層であることは確かであり、仮に数回の土塁の修築を想定しても、12層は最も古い土塁の基底部を形成していた可能性を考えておきたい。

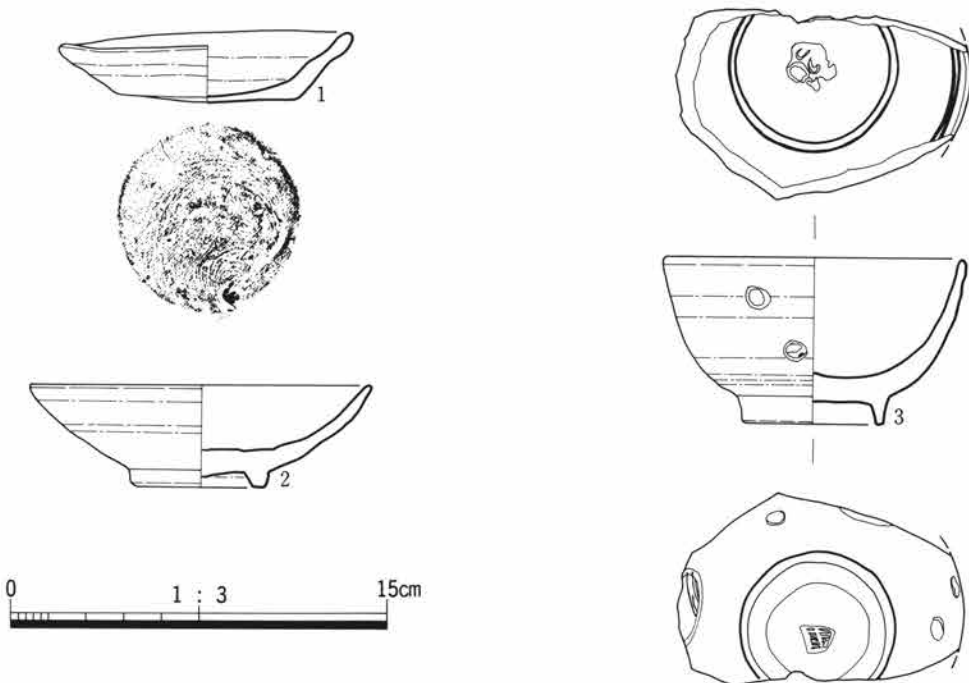
寺東地区土塁（第222～236図、図版19・20・60）

寺東地区70km953m以西で検出した心洞寺にかかわる土塁と考えられる。第1次調査時には新幹線敷地内の土塁はほぼ遺存していたが、第3次調査に着手した時点で南北の側道部分は工事の都合で削平されていた。従って、土塁の調査に本格的に着手した第3次調査時の遺存度はかなり悪い。

第3次調査に着手した時点での土塁の高さは約2.5m前後で、基底部の幅は8mほどであった。土塁と第1号溝との関係をつかむため、両者を通した第1～第5トレンチを設定して土層の観察を行った。その結果、次のようなことが判明した。

- ① 調査着手時に遺存していた土塁の構築時期は、少なくとも1783年以降である。
- ② 1号溝は常に滞水していたのではなく、当初「空堀」として掘り込まれたものである。
- ③ 1号溝は浅間B軽石を含む土層を切っている。従って、本溝は浅間B軽石の降下以後に掘削されたものである。

土塁の土層断面観察の後、さらに下層を調査するために土塁を削平してゆく過程で、トレンチ設定図に示した1号溝屈曲部直南の、溝内側に相当する部分で、拳大～人頭大の石が密に分布した地点を発見した。この石の分布は幅3.5～4m、長さ7.5mの広がりを持ち、1号溝に接する位置に相当するこ



第236図 寺東地区土塁出土遺物

とから、土塁基底部を形成する石敷と考えられる。このことは、石分布範囲付近の調査区南側壁（Iライン・70km945～70km951m）で、土塁相当位置から同様の石の堆積した層を検出していることから推定できる。また、この石敷部分は第4トレンチ（D-D'）の土層観察の結果、遺存土塁の下部で確認していることからみて、少なくとも遺存土塁の構築時期以前に、すでに敷き詰められていたと推定できる。

これによく似た状況の出土状態を示す遺構として、第2次調査で検出した1号石敷がある。1号石敷は1号溝とほぼ同様の走行をもち、幅1.5～2m、長さ5.5mの範囲で石が詰まった浅い溝状の遺構である。本遺構は1号溝内側に分布する石群の幅の約半分しかなく、これが土塁の基底部であるとの積極的な確証はないが、1号溝外側にも小規模な盛り土があった可能性を考えたい。それは、1号溝と平行して走る3・4号溝が、ちょうど1号溝東岸と1号石敷との中間に位置しているという位置関係から推定したものである。なお、1号石敷は道路であった可能性の方が高いであろう。

遺物は土器、陶器・磁器が出土している。第236図の3は第4トレンチ内で取り上げたものである。調査時点で遺存していた土塁は18世紀以降に構築されたと考えられる。

寺東地区第1号溝（第225～234・237～240図、図版19～21・61～63）

寺東地区70km945m以西で検出した。調査着手時において、現地形の表面観察の結果、着手時に遺存している土塁の外側に溝が存在していることが予想され、溝の規模・形状を確認することが課題であった。第1次調査では遺存土塁の東側に、土塁に平行して南北方向に深い溝を検出し、これが心洞寺の堀にあたることが判明した。しかし、第1次調査では堀の東岸を検出したのみで、西岸は設定された調査区内では確認していない。

第2次調査（第1次で調査した本線敷の南側道部分の調査）では、1号溝にかかる部分は調査区外にあり、1号溝に平行して南北方向に走行する3・4号溝の延長部分を検出している。

第3次調査に至り、初めて1号溝の両岸を確認した。その地点はI-Kライン・70km936m～70km949mの南側道の範囲である。その結果、1号溝の規模は幅約8m、深さ2.5～3mであることが判明した。底面は1.5mほどの平坦な面をもち、堀の壁は直線的に開いてゆく。さらに本線敷の調査では、堀と土塁との関係つかむため、1～5のトレンチを設定して土層の観察をおこなった。北東部の調査区内を掘り進めてゆく過程で、北東部が鍵の手状に屈曲することが判明した。すなわち、調査区外の溝推定延長線の北東隅から約15m南下した溝は、一度東側へ7mほど折れ曲がり、そこからまた南下することが確認できた。土層断面G-G'の底面がほぼ平坦に3.5mほども続くのは、この屈曲部の走行と平行に掘り下げたことによる。

調査区西端近くの71km004m付近で、1号溝は南へ折れ曲がることを確認し、1号溝の東西方向の規模がおおむね判明した。

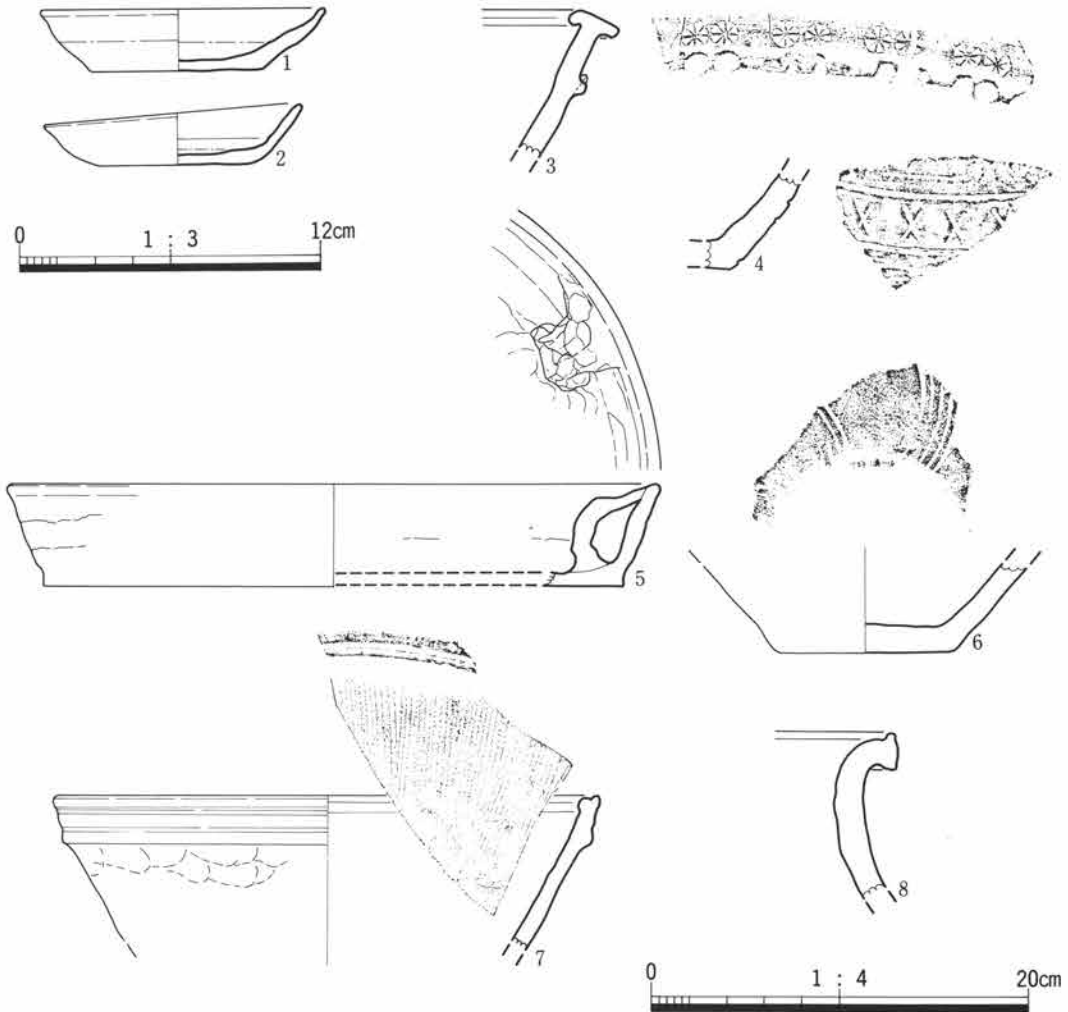
第4次調査では調査区西端の、南下する溝の延長線上に溝の東岸を検出し、1号溝がさらに南側へ続くことが確認できた。

心洞寺からみて北側の、東西に走行する1号溝は幅4m前後、深さ2.5m前後である。同じく東側に相当する（屈曲部の南側）Mライン付近では、幅6m前後になる。さらに南下したJラインでは幅8m

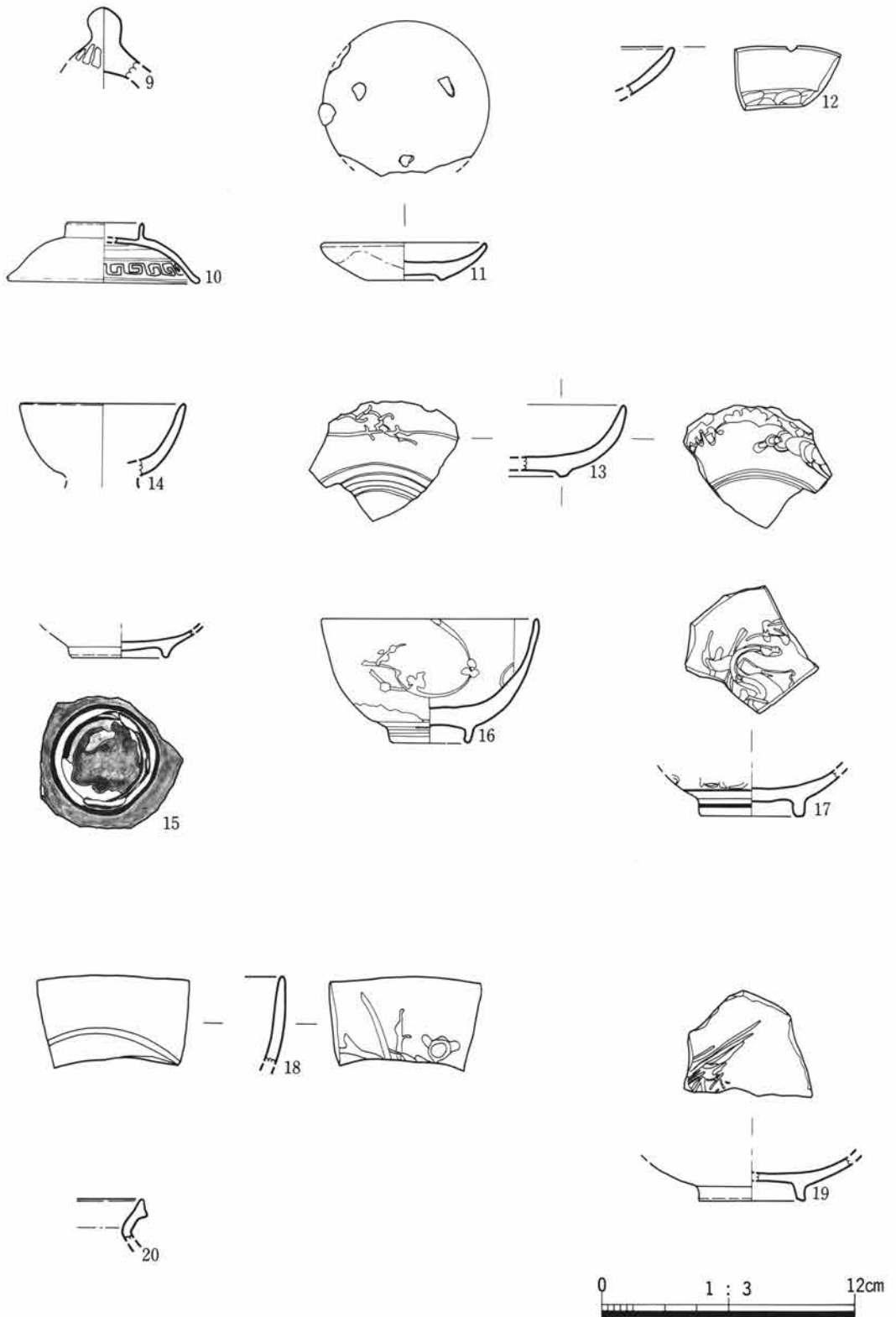
ほどに広がっている。第3次調査で確認した1号溝西端の南へ曲がる部分から、心洞寺北側の東西に走行する部分とほぼ平行に測ると、東西の規模は約44.5mである。

遺物は各種出土している。第237図1・2は土師器皿、3・4は火鉢である。8は甕口縁部の破片で、他の陶器・磁器に比較してやや古く、13世紀後半～14世紀前半にさかのぼる。9～19は陶器・磁器で、18～19世紀のものが多い。22は不明鉄製品である。貨幣は「永楽通宝」があり、「寛永通宝」も出土している。

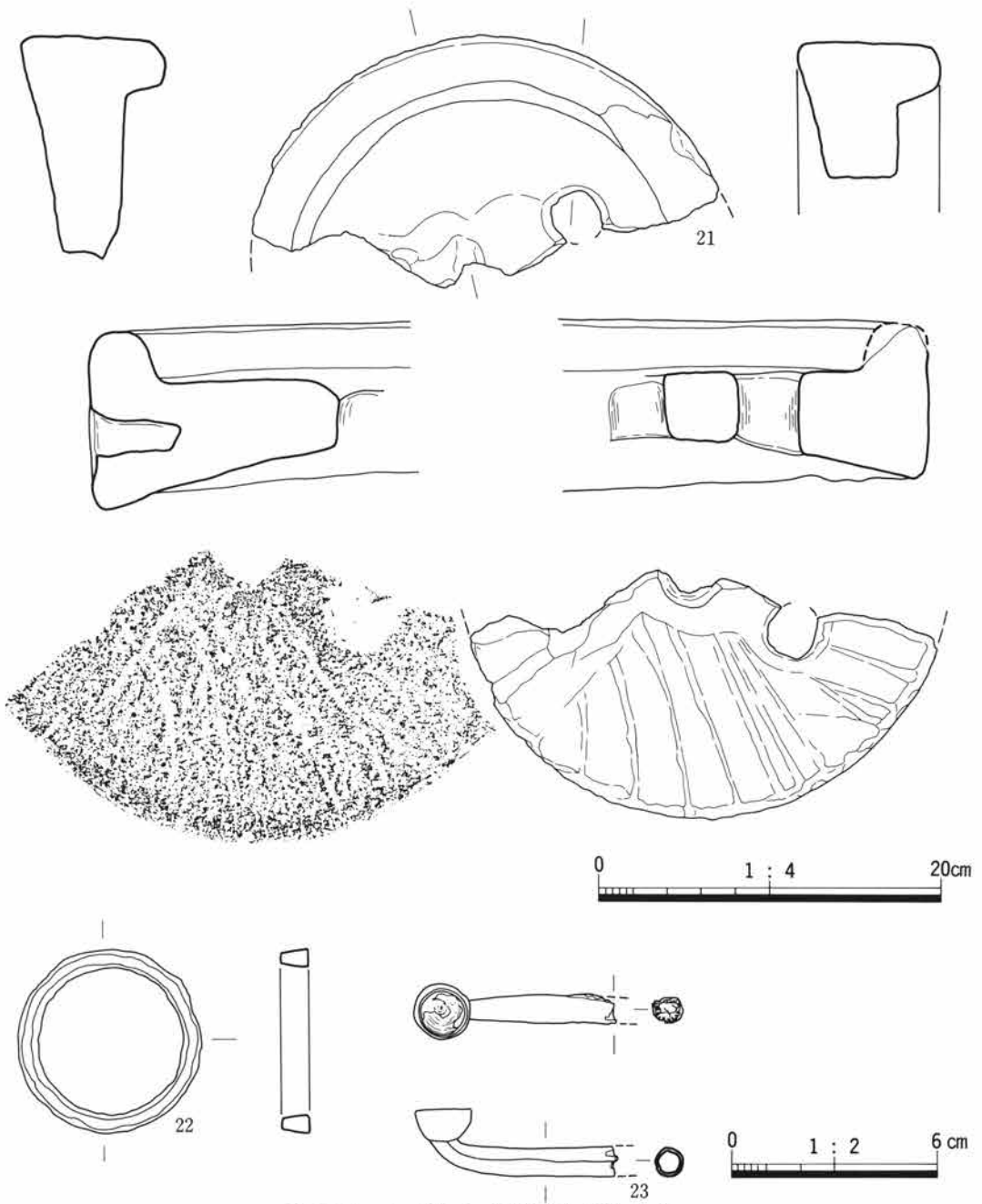
時期は、最も古い遺物の年代観を参考にすれば13～14世紀、遅くとも15世紀には周辺になんらかの施設があったと推定される。



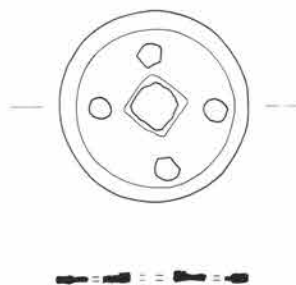
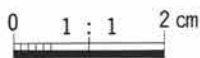
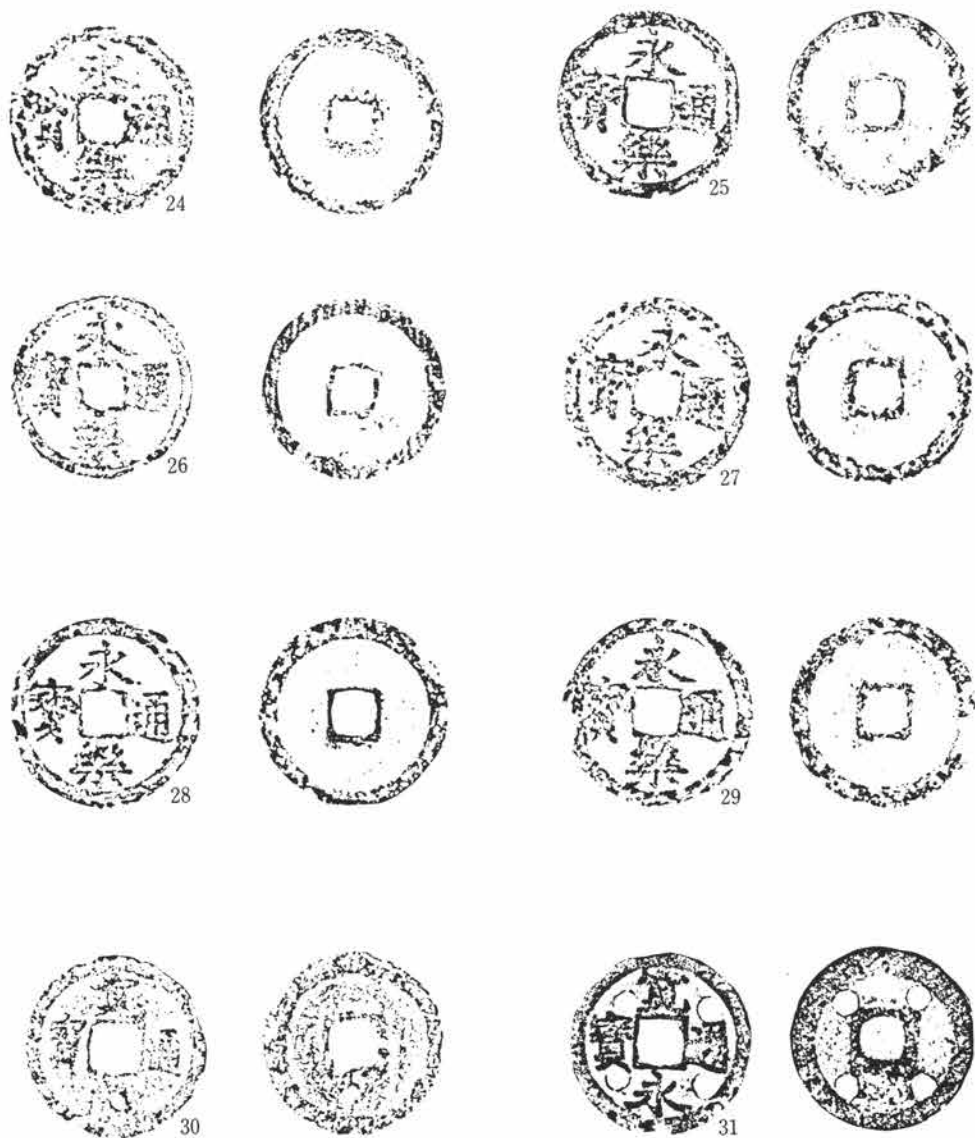
第237図 寺東地区1号溝出土遺物(1)



第238図 寺東地区1号溝出土遺物(2)



第239図 寺東地区1号溝出土遺物(3)



第240図 寺東地区1号溝出土遺物(4)

第17表 寺東地区溝一覧表

番号	幅cm	長さm	深さcm	重複関係 [旧→新]	遺物	時期	備考
1	西辺 北辺 東辺 屈曲部	11 33 26 —	— 250 290 260		軟質陶器、陶器、磁器、石臼、キセル、古銭	中世～	
2	80	19	50前後	7溝→2溝→3溝		平安	
3	45～105	27	45～75	2溝→3溝→4溝			N7°E
4	50～60	27	30前後	2溝→3溝→4溝		江戸18C後半	N8°E、底面に浅間A軽石あり
5	350前後	18	80～190			中世～	N21°E
6	70～130	17.8	100				薬研堀
7	20～30	7	20前後	7溝→2溝	古墳～平安土器19	平安?	N45°E
8	24	2.5	6				N3°W
9	110～160	5.8	55		古墳～平安土器、陶器片	江戸?	
10	140	5	70		古墳～中世土器、平安以降多い	江戸?	
11	170～330	6.1	35		内耳土器、陶器	江戸?	
12A	115～140	5.4	15			江戸?	
12B	100	9.8	20～35		火鉢、煤付き小皿	中世?	N6.5°E
13	35～50	8	10～15	13溝→土坑		中世?	N1.5°E、東側にビット列
14	80	3	15～20	14溝→29・30坑	古墳時代土器13点、須恵器高杯脚部片	古墳?	
15		6.1	30～38		土器10片、土師器杯1点、甕口縁部1点	古墳?	N5°E
16							東半でN91°E
17	30～80	17	5～15			中世?	
18	欠番						
19	75～100	5.1	13	19溝→ビット群1			N25°E
20	50～90	3.0	18	20溝→50住			N41°E
21	60	3.9	10	21溝→50住			N37°E
22	50～60	5.2	20				N28°E
23	40	5.8	10			平安?	
24	25～130	7.0	10			平安?	
25	30～40	10.3	15	25溝→57坑		平安?	N95°E
26	25～40	10.3	5		古墳～平安土器21片	平安?	

番号	幅cm	長さm	深さcm	重複関係 [旧→新]	遺物	時期	備考
27	35	4.7	10		土器18片	平安?	
28	30~45	6.5	10			平安?	
29	45	1.8	10			平安?	
30	30	2.2	18			平安?	
31	55	3.0	5		土器片1	平安?	
32	60~85	5.2	40~50		古墳時代土師器杯1		N32°E
33	40~60	3.4	5~8				N33°E
34	110~125	5.2	40前後		須恵器壺1点、その他2点	古墳~奈良	N22°E
35	85	3.6		35溝→60墓	古墳~平安土器46古墳内黒杯1点		N19°E

寺東地区第3号溝（第241・242・244~246図、図版63）

Qライン・70km945mからIライン・70km933mに延びる。センターラインのMラインでは70km939m付近を通る。調査区内で約27m分を検出した。確認面は第2層である。第2・4号溝と重複しており、2→3→4号溝の順に新しい。本溝は第1・2・4次調査で検出し、走行はN7°Eを示す。幅45~105cmで、深さは45~75cm、北へ向かうに従ってやや細くなる。

覆土は自然に堆積するが、粒子が細かく小石を含んでおり、底部近くは堅く締まっている。流水があったものと考えられる。重複する4号溝が浅間A軽石を含むのに対して、本溝はそれを含まない。壁は底部から急角度で立ち上がり、中位以上で緩く開く。底面は40~50cmの幅をもち、丸みをもってくぼんでおり、凹凸がある。

本溝は西側約5mに位置する1号溝とほぼ同じ走行を示し、心洞寺との強い関連を意識して掘削されたものと考えられる。

遺物は磁器、貨幣が出土している。第246図1は磁器椀、4は「寛永通宝」である。この貨幣は底部近くの覆土から出土していること及び浅間A軽石を含まないことから、本溝は江戸時代も浅間A軽石降下以前に掘削されたものと推定する。



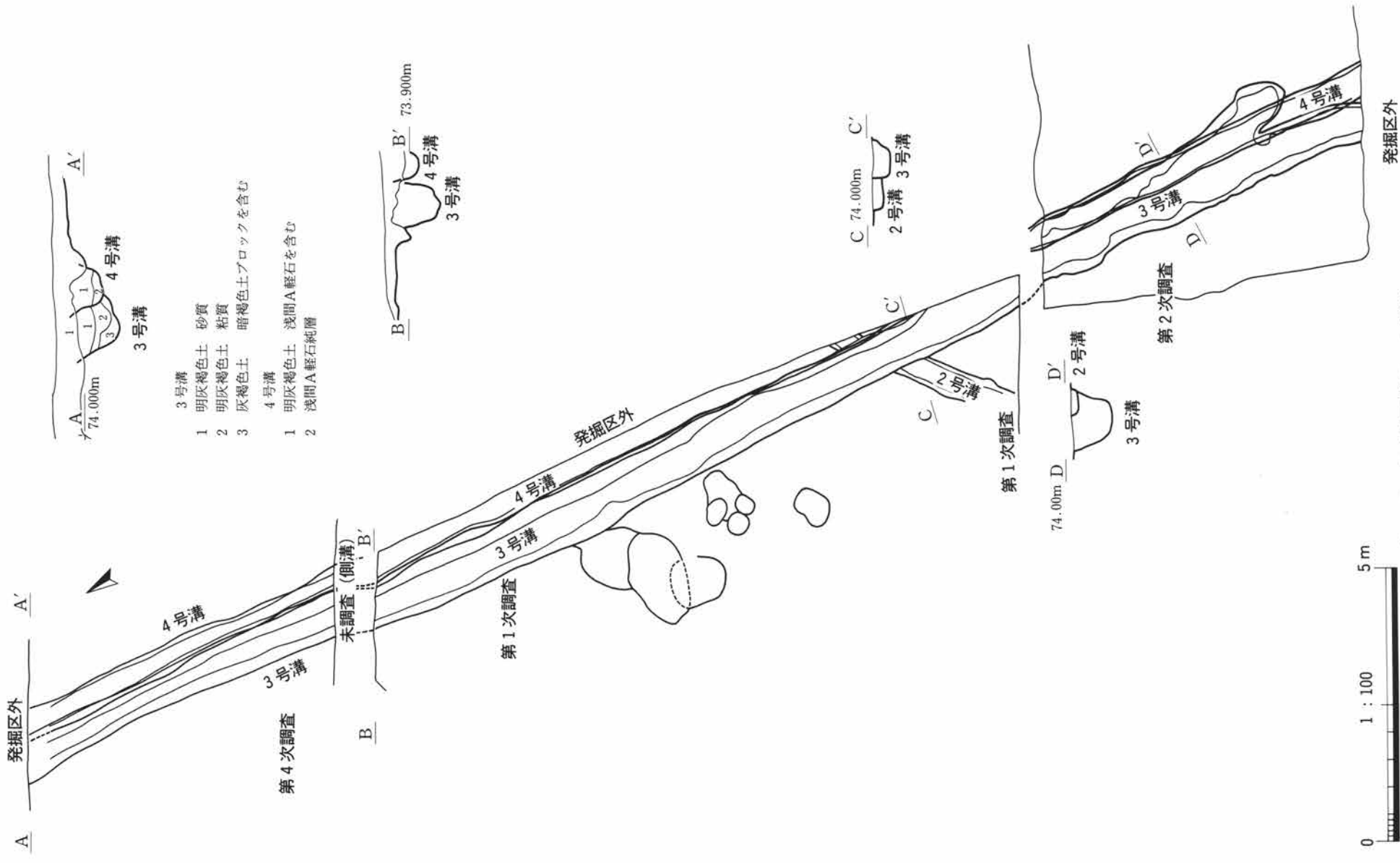
第241図 寺東地区第1次調査3号溝



第242図 寺東地区第2次調査3・11号溝



第243図 寺東地区第2次調査4号溝



- 3号溝
- 1 明灰褐色土 砂質
 - 2 明灰褐色土 粘質
 - 3 灰褐色土 暗褐色土ブロックを含む
- 4号溝
- 1 明灰褐色土 浅間A軽石を含む
 - 2 浅間A軽石純層



第244図 寺東地区第3・4号溝

寺東地区第4号溝 (第243～245図)

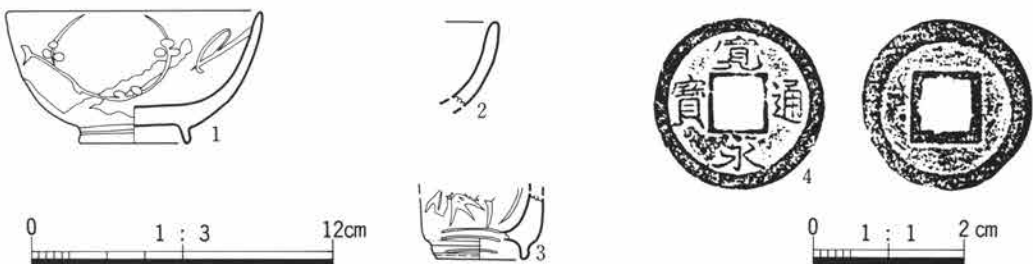
Qライン・70km944m付近からIライン・70km933mに延びる。調査区内で約27m分を検出した。確認面は第2層である。第2・3号溝と重複しており、2→3→4号の順に新しい。本溝は第1・2・4次調査で検出し、走行はN8°Eで、ほぼ3号溝と同じ方向を示す。幅50～60cm、深さは30cm前後である。

覆土は底面に間層を挟まず、直上に浅間A軽石が堆積し、その上位は浅間A軽石を多量に含んだ褐色土で埋没している。底面直上のA軽石は第一次堆積である。上層に水が常に流れていた形跡はない。底面は丸みをもっており、幅20～30cmで、壁は急角度で立ち上がる。中位以上はやや緩く開く。

本溝は第3号溝と同規模・同方向・同位置で掘削されていることからみて、3号溝が埋没した後、



第245図 寺東地区第4次調査3・4号溝



第246図 寺東地区3号溝出土遺物

3号溝の代わりに掘られたものと考えられる。この4号溝も掘削直後に浅間A軽石の降下によって1/3近くが直接埋没し、さらに周辺からの流れ込みによってほぼ全体が埋没したものと推定できる。遺物は出土していない。時期は1783年の浅間A軽石降下直前と考えられる。

寺東地区第5号溝（第247～253図、図版63）

K-Qライン・70km908m付近で検出した。第1次の本線敷調査、第4次の北側道調査で確認したもので、第2次調査の南側道の調査では相当する位置に検出していない。確認面は第2層である。

本溝は第1次・第4次調査合わせて長さ約18mを検出した。幅は3.5m前後で、深さは第1次調査で80～90cm、第4次調査の北側道調査区北壁の計測では190cmが遺存する。走行はN21°Eを示す。覆土は自然に堆積し、1号溝と同様の様相を呈している。底面は幅120～130cmで、壁は直線的に立ち上がる。

第2次調査の南側道では本溝の延長線上に同規模の溝を検出していないこと、本溝の南端が閉じていること等から、本溝の南側は通路状または土橋状に開けられた部分と考えられる。その幅は調査区内の5号溝の延長線上で計測して、7.5m以上あったとみることができる。第4次調査の北側道部分で



第247図 寺東地区第1次調査5号溝（1）



第248図 寺東地区第1次調査5・6号溝



第249図 寺東地区第1次調査5号溝(2)

は、本溝がさらに北方へ延びることを土層断面で観察している。

遺物は比較的多く出土した。土師器杯、陶器・磁器・軟質陶器、石臼がある。この石臼は小型であること、目が細かいこと、把手の座の剝離した痕跡があることなどから、茶臼とみられる。

時期は土層断面の観察と、1号溝とほぼ同様の走行を示すことから、1号溝と同じ時期またはそれ以前であり、心洞寺との強い関連をもつ溝と考えられる。

寺東地区第6号溝（第251・252図）

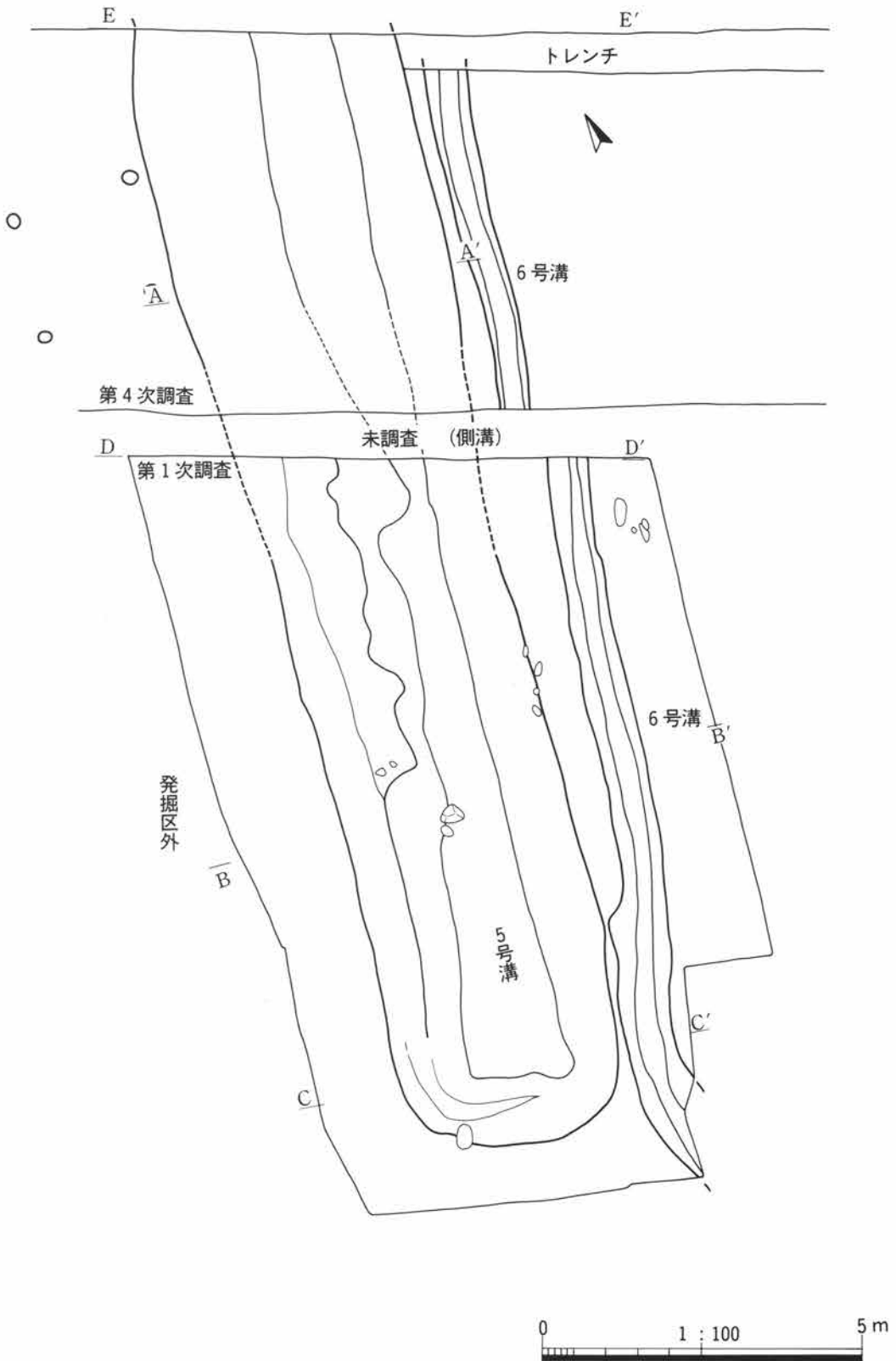
K-Qライン・70km904m付近で検出した。5号溝と同じく、第1次の本線敷調査、第4次の北側道調査で確認したもので、第2次調査の南側道調査では検出していない。確認面は第2層で、5号溝と同じである。

調査区内で長さ17.8m分を検出した。深さは100cm前後である。覆土は自然に堆積し、中位に粗い砂の層がある。底面は25cm前後の平坦な面をもち、ほぼ垂直に立ち上がった後、緩く開く。断面はいわゆる葉研堀の状態を呈する。本溝は南端で東の方向に曲がり始めており、5号溝に比較してその規模が小さいこと、走行が必ずしも5号溝に平行していないことなどから、5号溝とは性格が異なるものと考えられる。遺物は少なく、図示できるのは第258図1にあげた内耳土器のみである。

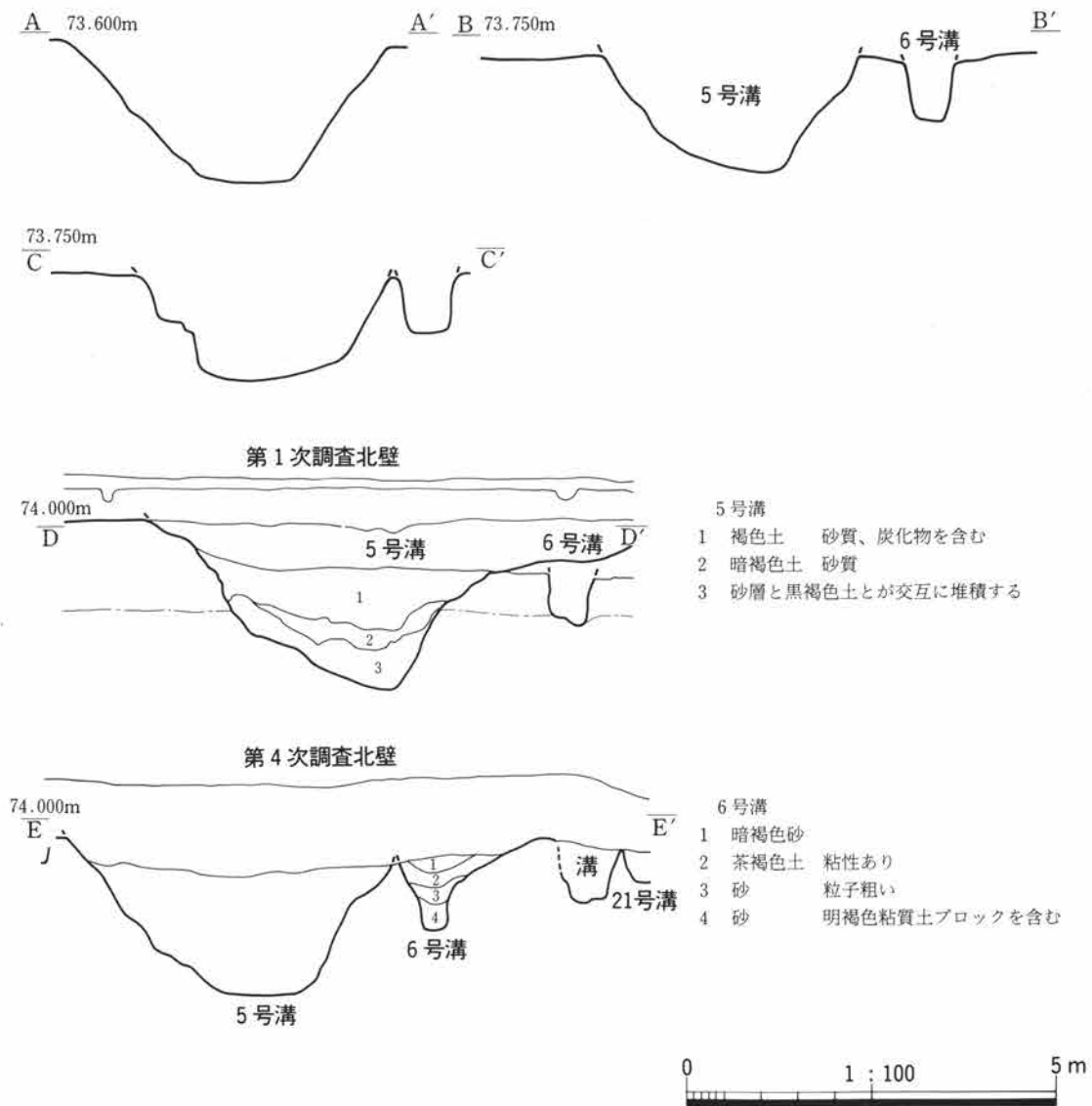
本溝は5号溝に接して南北方向に走っていること、同様の覆土で埋没していることから、5号溝と同様の時期と考えられる。



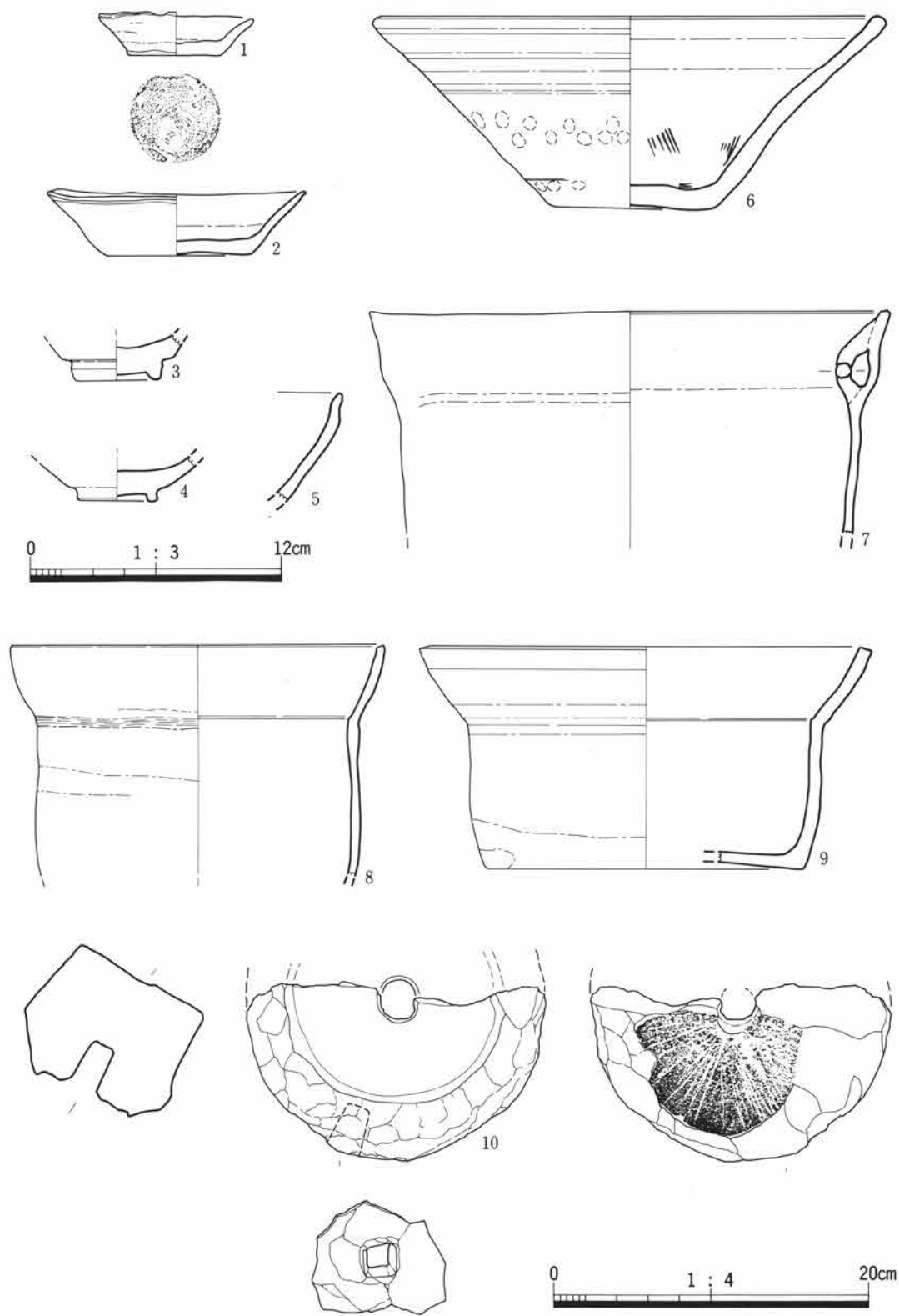
第250図 寺東地区第4次調査5号溝北壁土層断面



第251図 寺東地区5・6号溝 (1)



第252図 寺東地区5・6号溝(2)



第253図 寺東地区5号溝出土遺物

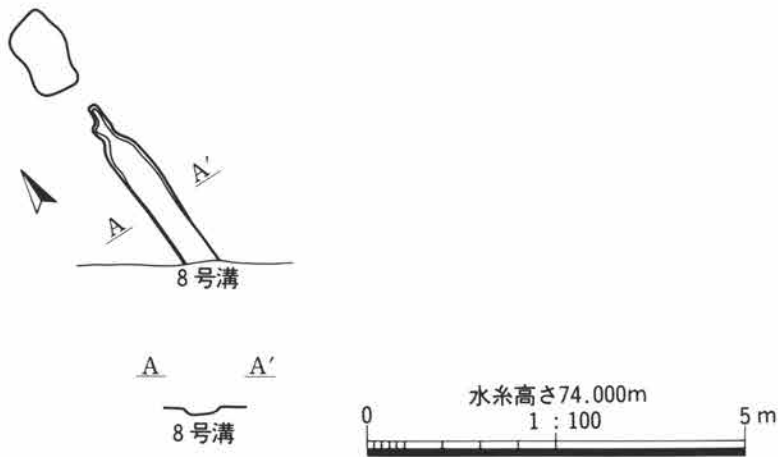
寺東地区第8号溝 (第254・255図)

I-Jライン・70km917m付近で検出した。第2次調査で確認した溝で、南側道の東端に位置する。確認面は第2層である。

長さ約2.5mを検出し、走行はN3°Wをとる。深さは6cm前後である。覆土は自然に堆積している。底面は浅くくぼんでおり、壁は斜めに立ち上がる。



第254図 寺東地区第2次調査8号溝



第255図 寺東地区8号溝

本溝は規模が小さく、調査区内での検出分が少ないので、性格を推定する根拠が薄いですが、他の1～6溝とほぼ同様の走行を示すことから、心洞寺に関連する遺構の可能性を推定しておきたい。

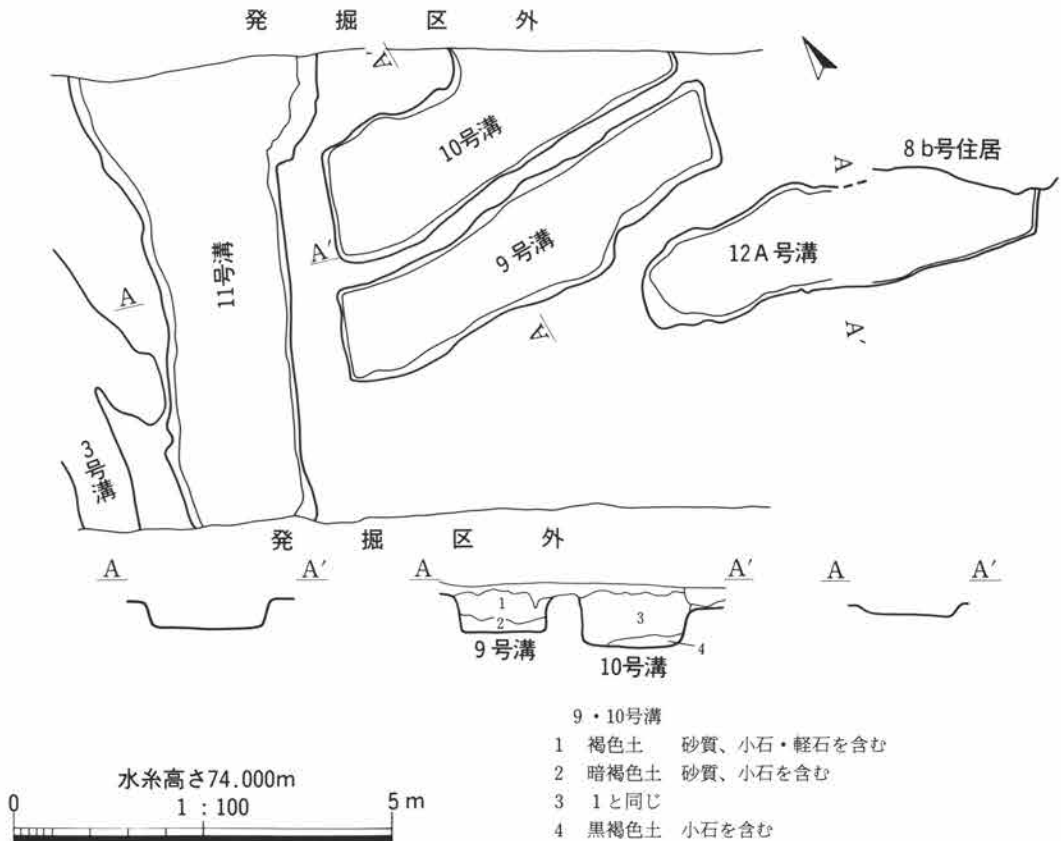
遺物の出土はなく、時期も不明である。

寺東地区第9・10・11・12A号溝（第256図、図版64）

J-Kライン・70km928m付近で検出した。第2次調査で確認したもので、南側道の4号溝と8号溝との中間に位置する。確認面は第2層である。

9・10・12A号溝はほぼ東西方向を向き、11号溝は北東～南西方向を示す。いずれも不整形な形状で、深さは一定ではない。性格不明の遺構である。

遺物は9号溝から平安時代以降の土器・陶器破片、10号溝からも同様の遺物、11号溝から内耳土器・陶器破片がそれぞれ出土した。時期は江戸時代以降とみられる。

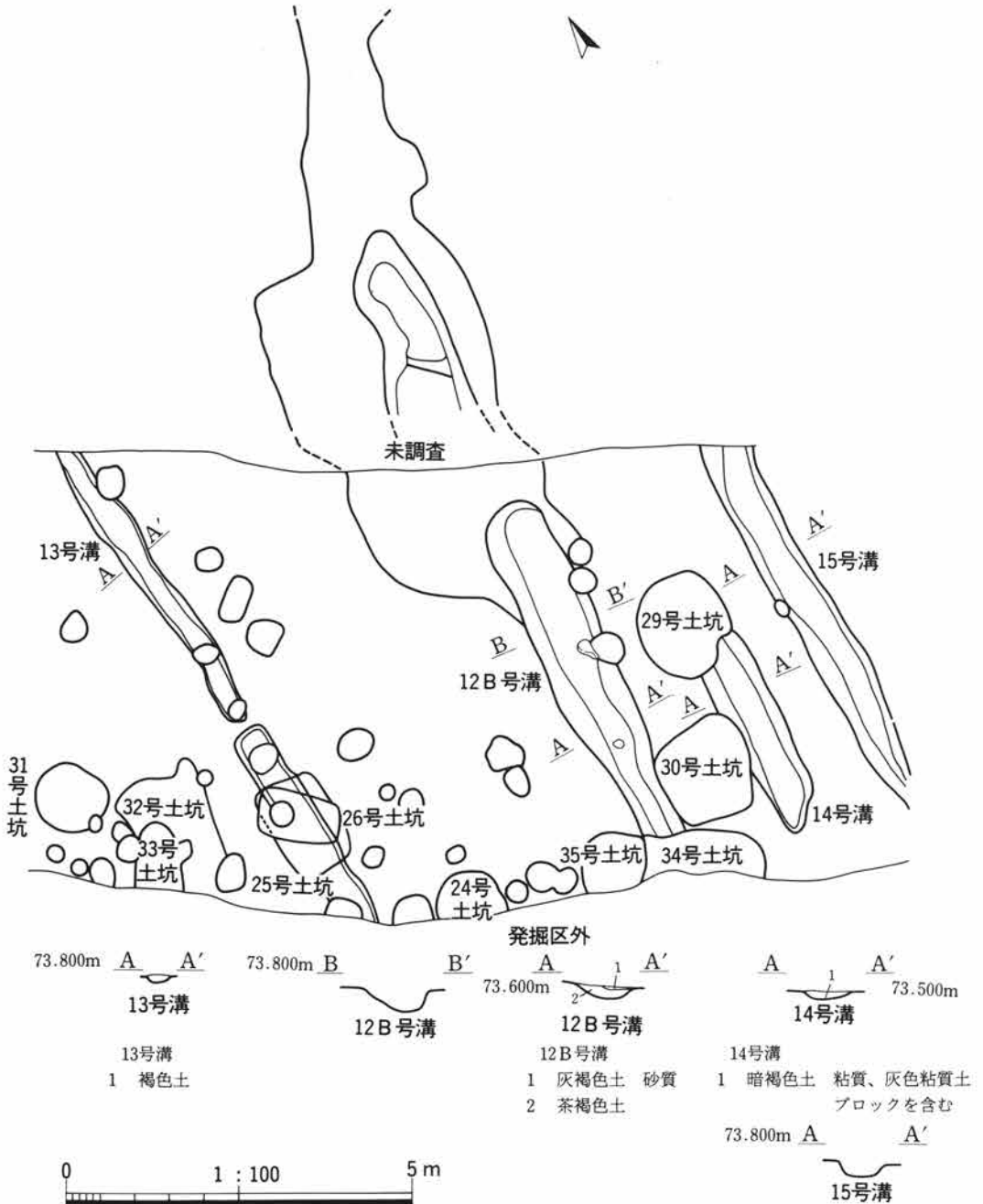


第256図 寺東地区9・10・11・12A号溝

寺東地区第12B号溝 (第257・258図、図版64)

Iライン・70km949m付近からMライン・70km954mに延びる。第3次調査で検出したもので、確認面は第2層である。

最深部は幅100cm前後で、全体では長さ9.8m分を確認した。K～Mラインにかけては、不整形な掘り



第257図 寺東地区12B・13・14・15号溝

込みをもち、Mライン付近で確認できなくなる。最深部の走行はN6.5°Eを示す。深さ20～35cmである。覆土は自然に堆積している。壁は底部から滑らかに立ち上がる。

本溝は1号溝の西側約1.7～2.0mのところをほぼ平行して走り、心洞寺と密接な関連をもつ溝と考えられる。

遺物は小片のみで、図示できるのは第258図4・5にあげたもののみである。4はススの付着した皿、5は口縁部外面に雷文をもつやや大型の火鉢である。時期は中世以降とみられる。

寺東地区第13号溝（第257図）

I-Kライン・70km956m付近で検出した。第3次調査の南側道部で確認したもので、I-Jラインの中間で途切れ、Kライン以北では検出していない。走行はN1.5°Eを示し、ほぼ南北方向をとる。確認面は第2層である。25・26号土坑と重複しており、本溝の方が古い。

調査区内での長さは8m分を検出した。深さは10～15cmである。覆土は自然に堆積している。底面は丸く、壁は斜めに立ち上がる。

本溝の東側に径20～50cmの柱穴が並び、溝の途切れた部分は柱穴の間隔もやや広がっている。また、溝の中にもピットが並んで検出されている。これらのことから、この付近に柵列状の施設があった可能性が推定される。本溝は1号溝・12B号溝とほぼ平行した方向をとり、心洞寺との深い関連を示しているようである。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが、1号溝との平行関係を重視すれば、中世以降と考えられる。

寺東地区第14号溝（第257・258図、図版64）

I-Jライン・70km948m付近で検出した。第3次調査の南側道で確認した土坑状の溝で、I-Jラインの中間でのみ検出している。北端は29号土坑によって切られており、南側の西辺は30号土坑によって切られている。走行はN7°Eを示す。確認面は第2層である。

長さ約3mを検出し、深さは15～20cmである。底面は丸く、壁は斜めに立ち上がる。

本溝も12B・13号溝と同じく、1号溝とほぼ同様の方向をとり、心洞寺との強い関連を示しているようである。

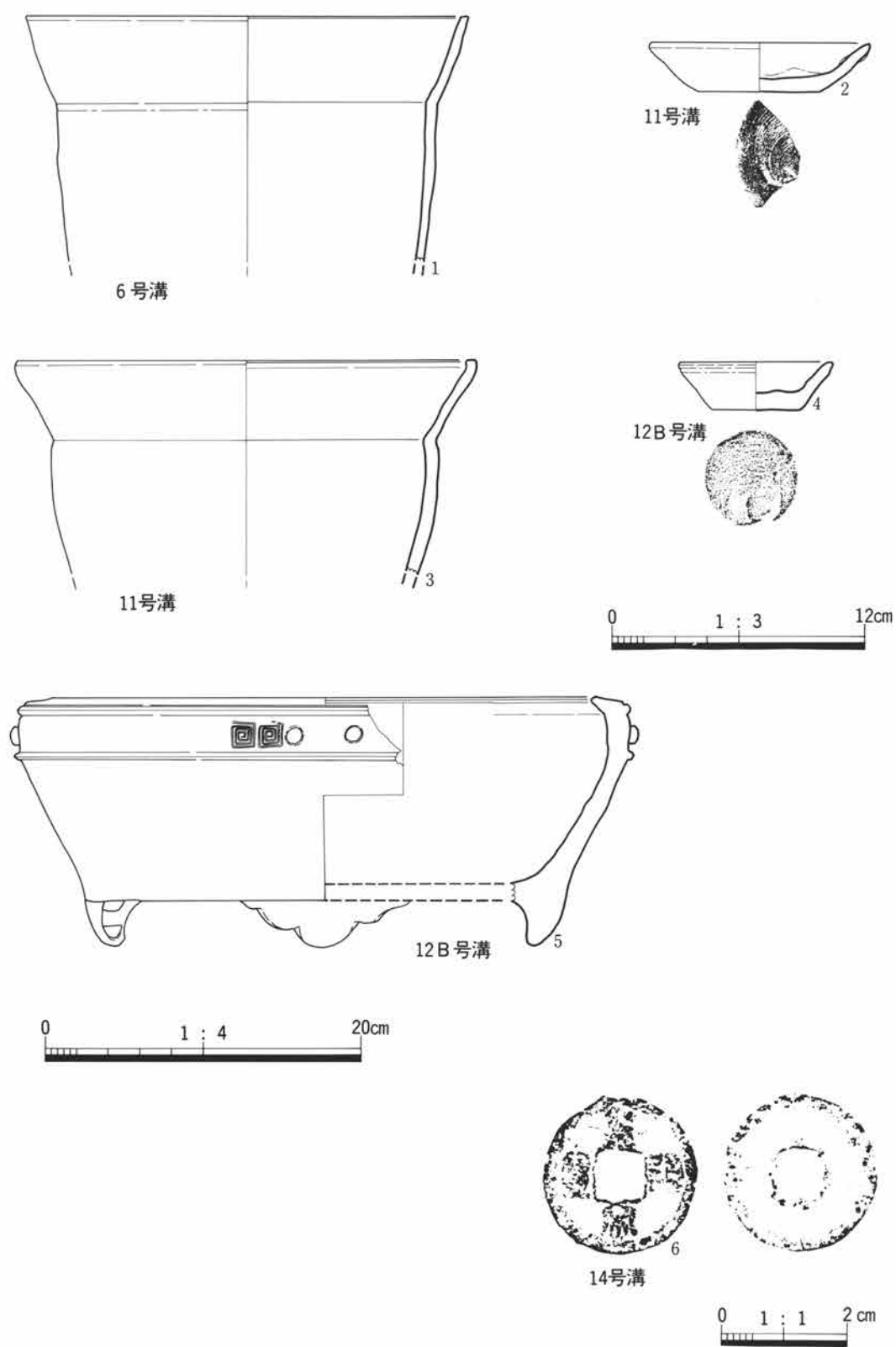
遺物は古墳時代の土器が13片出土し、そのうち1点は須恵器高杯の脚部片である。いずれも小片であるため、図示しなかった。そのほか、第258図6の貨幣1点が出土している。

時期は古銭の出土から、中世以降と考えられる。

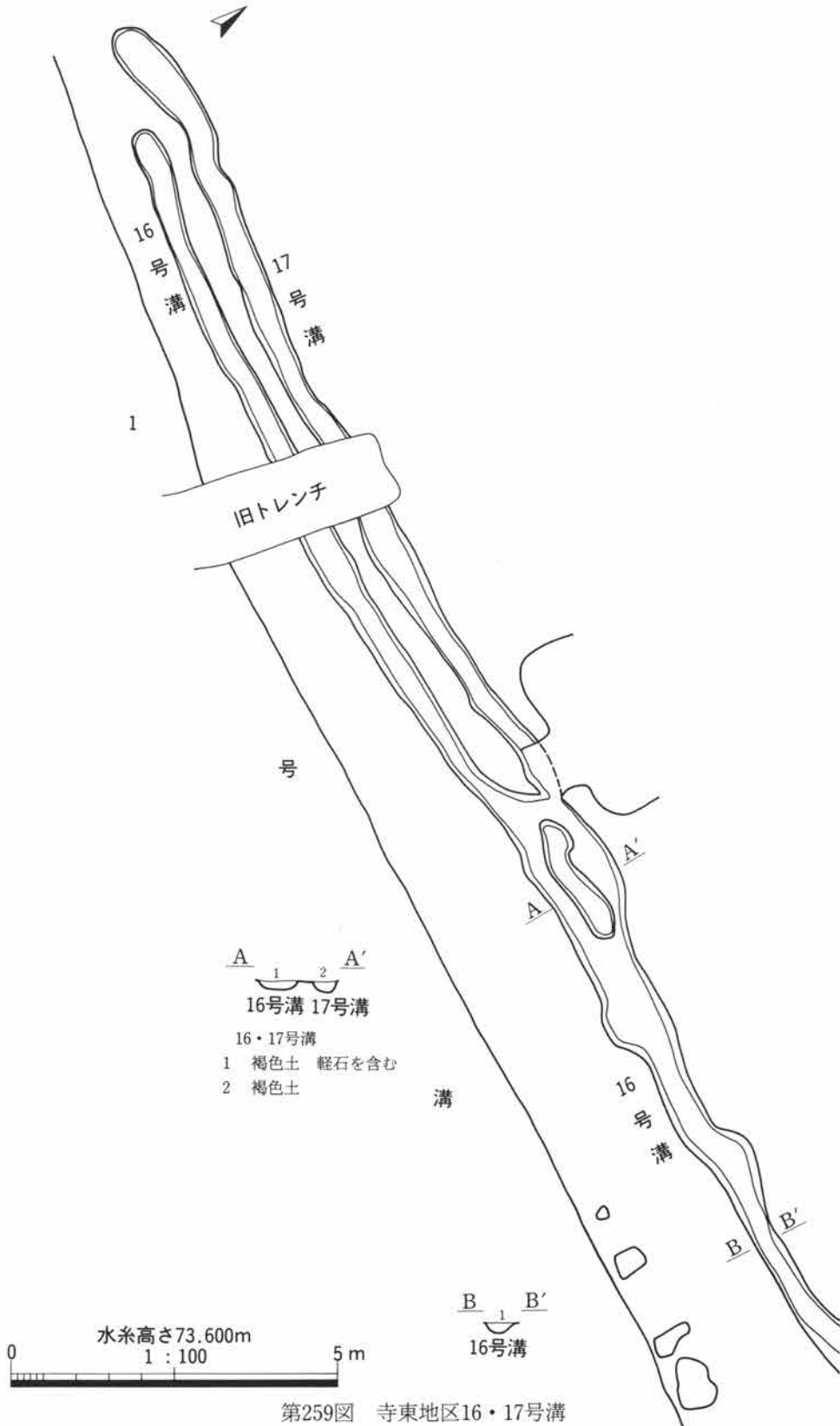
寺東地区第15号溝（第257図）

I-Jライン・70km949m付近で検出した。第3次調査の南側道で確認したもので、1号溝西岸に接して南北方向に走行する。方位はN5°Eを示す。確認面は第2層である。

南側道の調査区内で長さ6.1mを検出したが、Kライン以北では確認していない。深さは30～38cmである。覆土は自然に堆積している。底面は幅30cm前後の丸みをもった平坦面をもち、壁は斜めに立ち



第258図 寺東地区 6・11・12B・14号溝出土遺物



第259図 寺東地区16・17号溝

上がる。

本溝は12B・13・14号溝と同様に1号溝とほぼ同じ走行を示し、また1号溝西岸に沿って掘り込まれていることから、土塁の構築に深い関連をもつものと考えられる。ちなみに、12B号溝東岸と15号溝西岸との距離は2.3～2.6mである。

遺物は土器片が15片出土しているが、小片のため図示しなかった。そのうち1点は土師器杯、1点は甕口縁部である。

時期は1号溝・12B～14号溝との平行関係を重視すれば、中世以降とみられる。

寺東地区第16・17号溝（第259図）

M-Qライン・70km987m～71km007m付近で検出した。第3次調査の本線敷～北側道敷で確認したもので、北東部を16号と呼び、途中で分岐した北側の溝を17号と名付けた。走行は16号溝東半でN91°Eを示し、ほぼ東西方向をとる。確認面は第2層である。

長さは両者の東西端で17m分を検出した。深さは5～15cmである。覆土は自然に堆積している。底面は平坦で、壁は斜めに立ち上がる。

1号溝とほぼ平行して東西に走行することから、本溝も心洞寺に関連するものと考えられる。遺物の出土はなく、時期は不明である。

寺東地区第1号火葬墓（第260～263図、図版65）

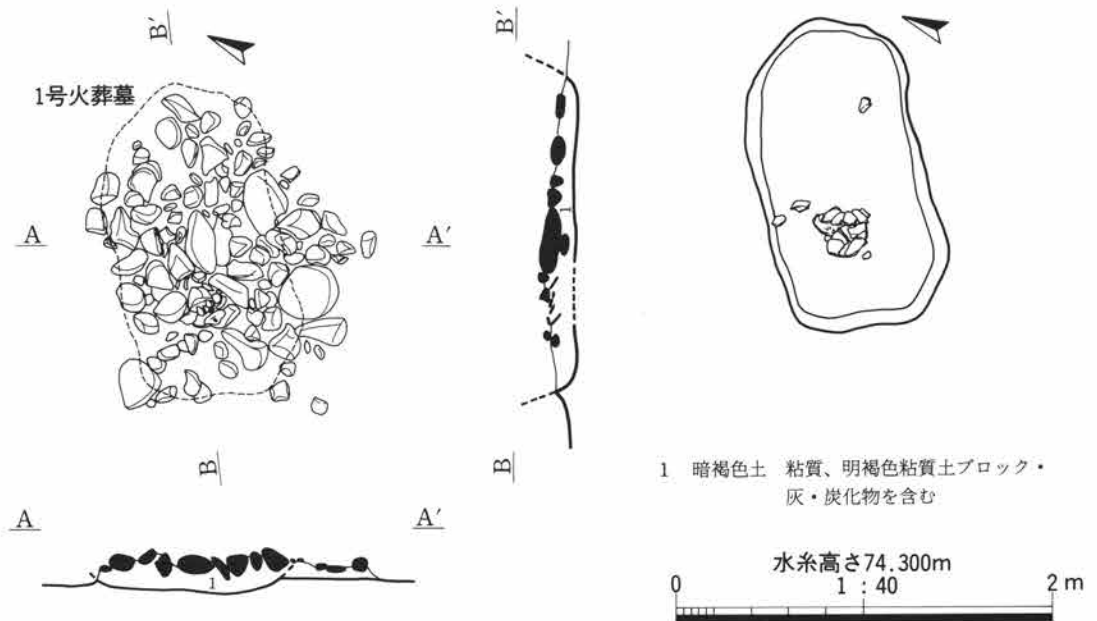
Nライン・70km916m付近で検出した。確認面は第2層である。第1次調査（本線敷）時に検出したもので、旧称ラインではDラインに相当し、1号土壙墓と呼んでいた。第2次調査においても1号墓



第260図
寺東地区
1号火葬墓
(1)



第261図 寺東地区1号火葬墓(2)



第262図 寺東地区1号火葬墓

墳を認定したため、多少の混乱を招いている。整理の過程で焼骨を伴うことが確認できたため、1号火葬墓と改称した。

墓壇の掘り込みは164×88cmで、深さ6cmであるが、切り込み面は不明である。墓壇の掘り込みは浅く、壁は斜めに立ち上がり、底面は平坦である。墓壇底面から浮いた状態で、拳大～人頭大の石が200×150cmの範囲から規則性なく出土した。これらの石の間から壺破片、覆土から骨片が出土した。壺破片は1カ所から集中して出土し、骨片は焼けており、壺付近から多く出土した。

壺を復原すると第263図ようになる。出土遺物の様相から、本遺構は火葬墓と考えられる。骨片の中には歯を含んでおり、鑑定によると青年期とみられる（第5分冊第3節参照）。

時期は中世か。

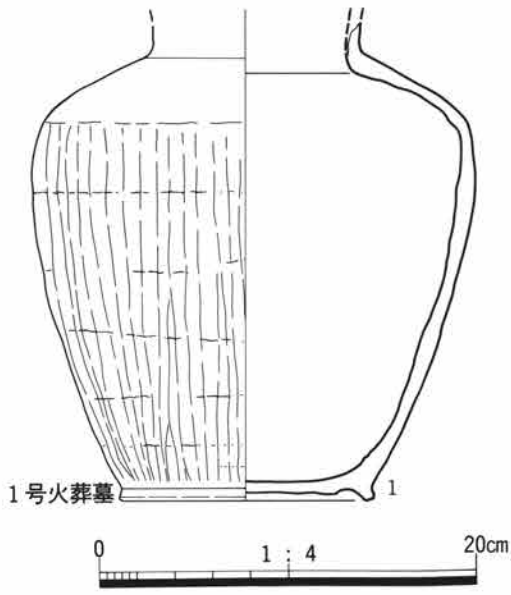
第18表 寺東地区 墓壇・土坑一覧表

番号	大きさcm・深さcm	重複関係 [旧→新]	遺物	時期	備考
1火	164×88・6	単独	壺、焼骨	中世	火葬墓
1墓	120×64・20	単独	土器、人骨、石	15C後半?	
2墓	欠番				
3墓	82×56・8	単独	古銭、人骨	中世?	
4墓	202×94・20	4墓→ピット5	土器、石、炭化物		
5墓	—×110・15	5墓→6墓	石		
6墓	176×110・4	5・7墓→6墓	人骨、石、土器		女性?
7墓	105×82・4	7墓→6墓			
8墓	95×62・15	8墓→ピット21		不明	
9墓	69×50・2	単独	なし		
10墓	126×65・19	1溝→10墓	土器片	中世以降	
11墓	—×83・5	ピットが新		不明	
12墓	—×—・24	13墓→12墓→1溝	土器、石	中世	
13墓	—×—・18	13墓→12墓→1溝	土器	平安～中世	
14墓	—×—・—	14墓→5溝	石	不明	掘り込みなし
15墓	448×112・32	単独	土器	平安	
16墓	76×66・31	単独		平安?	
17墓	64×45・5	単独	古銭2枚	中世?	

番号	大きさcm・深さcm	重複関係 [旧→新]	遺物	時期	備考
18墓	—×125・20	単独		平安?	長軸N123'E
19坑	欠番				
20坑	53×43・11	単独	土器	中世	
21坑	113×65・33	単独		平安?	
22坑	140×120・	単独		古墳	
23坑	103×62・	単独		平安?	
24坑					
25坑					
26坑					
27坑					
28坑	145×100・55	13溝→28坑			
29坑	158×137・37	14溝→29坑		中世?	
30坑	139×141・45	14溝→30坑		中世	
31坑	102×110・27			平安	
32坑	—×123・7	33坑→32坑		平安	
33坑	—×65・16	33坑→32坑		平安	
34坑	—×・32	34坑→35A坑			
35A坑	—×95・51	34坑→35A坑		中世	
35B坑	184×282・49	単独		平安	
36坑	72×76・22	単独		平安	
37坑	149×83・22	単独		平安	
38坑	295×113・68	単独		平安	
39坑	159×83・23	単独		平安	
40坑	188×62・18	41坑→40坑		古墳?	
41坑	133×95・62	41坑→40坑		古墳	
42坑	147×101・67	単独		古墳?	N17'W長軸
43坑	116×137・31	単独		古墳?	

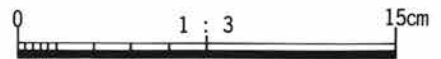
第V章 遺構と遺物

番号	大きさcm・深 さcm	重複関係 [[旧→新]	遺 物	時 期	備 考
44坑	130×134・19	単 独		古墳?	
45坑	148×140・14	45坑→柱穴		古墳?	
46坑	221×131・59	46坑→47坑		平 安	長軸N16°E
47坑	155×—・28	46坑→47坑		平 安	長軸N123°E
48坑	185×117・19	単 独		平安?	長軸N69°E
49坑	136×161・20	49坑→ピット		平 安	長軸N92°E
50坑	114×159・17	単 独		平 安	長軸N89°E
51坑	—×—・21	単 独		古 墳	
52坑	70×118・20	単 独	土 器	古 墳	
53坑	—×—・47	53坑→1溝	土 器	奈 良	
54坑	280×—・38	56B坑→54坑	土 器	古 墳	
55坑	110×—・11	55坑→43住	土 器	古 墳	
56B坑	—×121・11	56B坑→54坑		古 墳	
57B坑	95×77・19	33住→57B坑		古 墳	
56A坑	91×57・10	59坑→56A坑	人骨、古銭	中 世	墓
57A坑	87×42・12	25溝→57A坑		中世～近世	
58坑	55×111・5	単 独		中世～近世	
59坑	195×—・17	59坑→56A坑	人骨、石	古 墳	
60坑	(125×80)・—	35溝→60坑	人 骨	江戸?	
61坑	78×141・—	61坑→25溝		中世～	
62坑	—×—・27		人骨、土器	平安～中世	
63坑	—×65・9	63坑→1溝		平 安	
64坑	径64・—	65坑→64坑		古 墳	
65坑	—×53・14			古 墳	
66坑	—×103・21			古 墳	
67坑	欠 番				
68坑	67×59・18			古 墳	



1号墓

3号墓



第263図 寺東地区1号火葬墓、1・3号墓出土遺物

寺東地区第1号墓墳（第264・265図、図版65）

I-Jライン・70km733m付近で検出した。本墓墳は第2次調査で検出したもので、南側道部の4号溝から約1m東側に位置する。確認面は第2層である。11号溝と重複し、11号溝→1号墓墳の順に新しい。

確認面での掘り込みは120×64cmで、南北に長い不整楕円形を呈し、深さは20cmである。底面はやや凹凸がある。人骨は頭を北にし、左側を下にした状態で埋葬されていた。中から副葬品とみられる4個体の土師器杯が、下腹部から足にかけて出土している。銅銭は出土していない。人骨の背中に相当する位置からは長さ10～20cmほどの細長い石が出土している。

人骨は鑑定によると壮年期の男性とされている。時期は中世後半と考えられる。

寺東地区第3号墓墳（第266・267図、図版65）

M-Nライン・70km944m付近で検出した。第1次調査で検出したもので、旧称ラインはC-Dである。確認面は第2層で、この面での掘り込みは82×56cm、深さ8cmである。覆土は灰褐色粘質土に茶



第264図 寺東地区1号墓墳（1）



第265図 寺東地区1号墓墳(2)



第266図 寺東地区3号墓墳(1)

褐色粘質土ブロックを含んでいるが、全体に混合の状態であり、一挙に埋没した様相を示す。底面は凹凸がある。人骨は頭部が概ね北方向を向き、右頭部を下にした状態で検出した。南側は脚部とみられる骨がややまとまって出土している。人骨以外の遺物は古銭が3枚出土している。そのうちの1枚は天聖元寶（北宋、初鑄1023年）であるが、他の2枚（写真でみえるもの）は腐食が進行して判読できない。時期は中世とみられる。

寺東地区第4号墓墳（第268～270図）

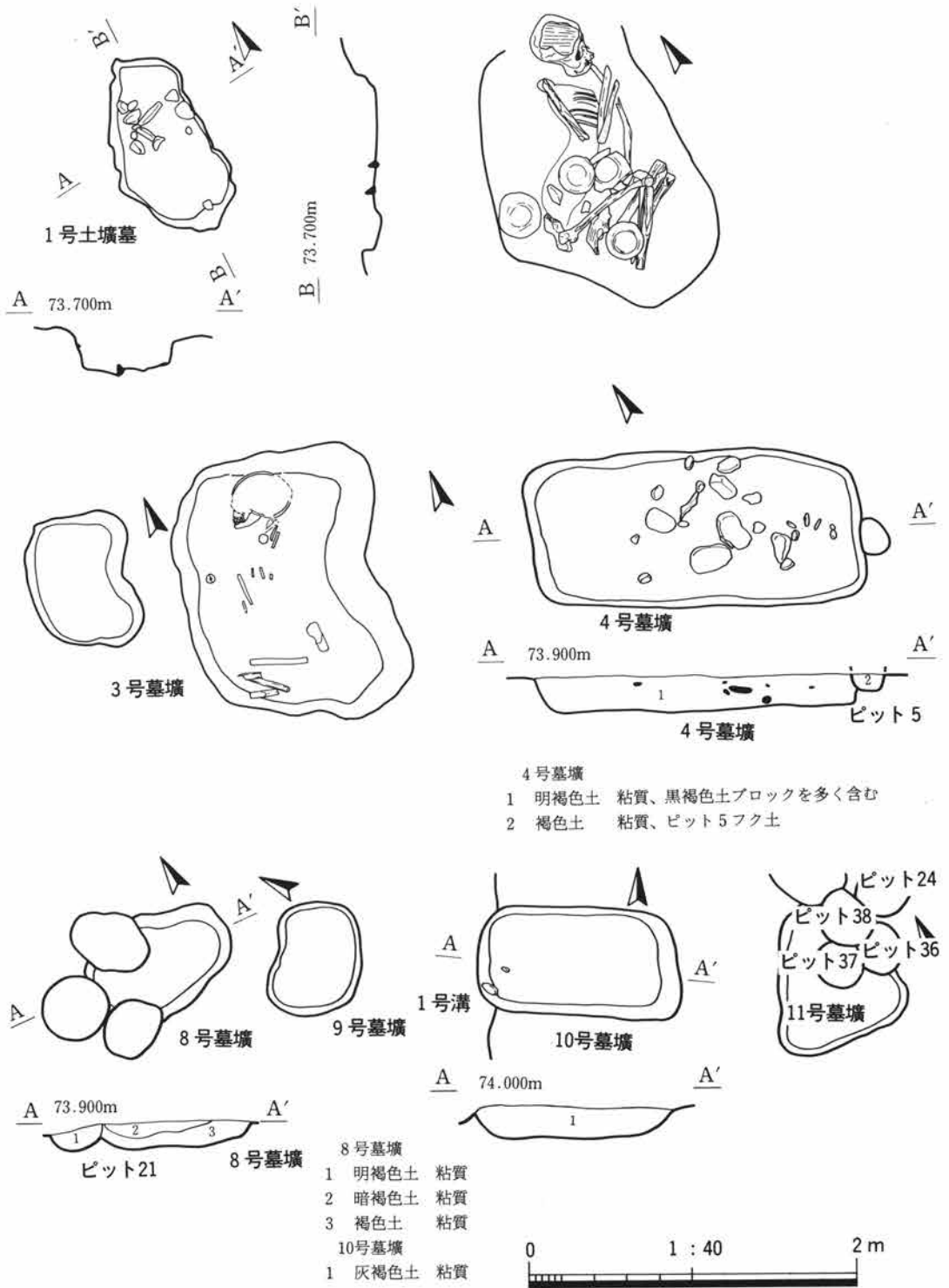
N-Oライン・70km945m付近で検出した。本遺構は第1次調査で検出したもので、旧称D-Eラインに位置する。確認面は第2層である。ピット5と重複しており、4号墓墳→ピット5の順に新しい。



第267図
寺東地区
3号墓墳（2）



第268図
寺東地区
4号墓墳（1）



第269図 寺東地区1・3・4・8・9・10・11号墓墳

確認面での掘り込みは202×94cmで、深さ20cmある。長軸の方向はN125°Eを示す。覆土は混合の状態を示し、一挙に埋没した様相である。底面は平坦である。墓壙中央部に拳大～人頭大の石が底面から浮いた状態で出土している。分布に規則性はない。その他、土師器破片・炭火物が少量出土したが、人骨は出土していない。人骨等の出土がないため、墓壙であることの積極的な根拠はないが、ここでは調査時点での認定を重視しておく。時期は不明である。

寺東地区第5・6・7号墓壙（第271～273図）

M-Nライン・70km941m付近で検出した。第一次調査で検出したもので、旧称ラインはC-Dラインである。確認面は第2層で、これら3基の墓壙は重複しており、5・7→6号墓壙の順に新しい。5号墓壙は3号溝によって切られている。

5・7号墓壙の覆土は似ており、淡茶褐色粘質土で、粒子はやや粗い。6号墓壙は褐色粘質土で埋没しており、灰のブロックを含んでいる。

5号墓壙の底面はややくぼんで皿状を呈する。立ち上がりは不明である。石以外の出土遺物はない。7号墓壙の底面は平坦である。灰とみられるブロックを含んでいる。出土遺物はない。

6号墓壙は楕円形を呈する掘り込みをもち、長軸はN113°Eの方向を示す。人骨(女性か)は頭部を西に向け、左側頭部を下にした状態で検出した。足の骨の出土状態からみると、膝を折り曲げた状態



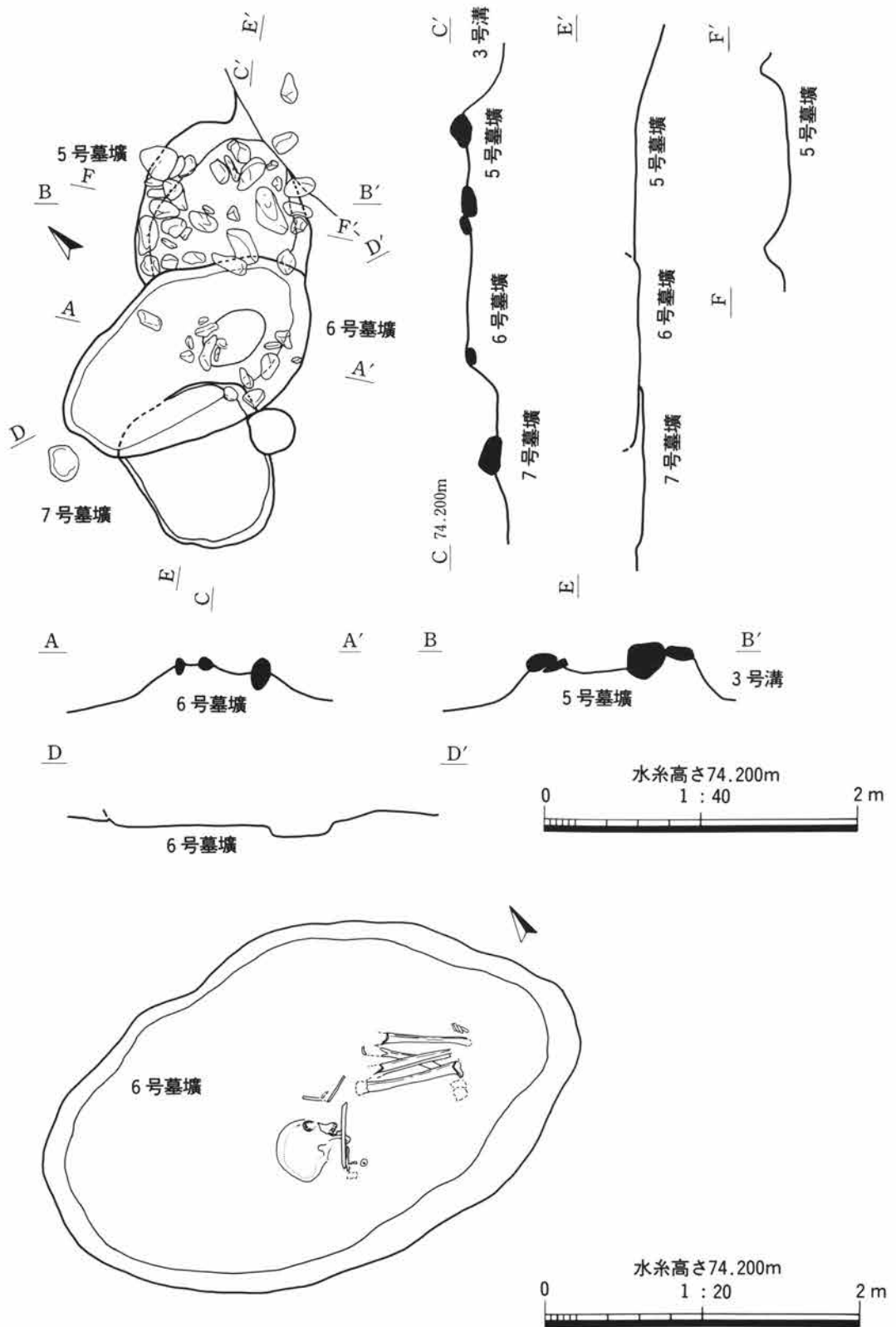
第270図 寺東地区4号墓壙（2）



第271図 寺東地区6号墓墳(1)



第272図 寺東地区6号墓墳(2)



第273図 寺東地区5・6・7号墓墳

で埋葬されたとみられる。その他の遺物は土師器小片・石が出土している。

5・7号は墓であるかどうかやや疑問であるが、ここでは調査当時の名称を継承する。それぞれ墓墳の時期は確かな根拠をもたないが、中世以降とみられる。

寺東地区第8号墓墳（第269・274図）

L-Mライン・70km940m付近で検出した。第1次調査で検出したもので、旧称B-Cラインに位置する。確認面は第2層である。略楕円形を呈するが、3個のピットと重複し、全体の形状は不明確である。ピット21は本墓墳よりも新しい。

覆土に炭化物を含んでおり、確認面での掘り込みは95×62cmで、深さ15cmある。壁は斜めに立ち上がり、底面は中央部がやや凸である。骨片の出土もなく、墓とするには積極的な根拠を欠いている。遺物は出土していない。時期は不明である。

寺東地区第9号墓墳（第269図）

K-Lライン・70km940m付近で検出した。第1次調査で検出したもので、旧称A-Bラインに位置する。確認面は第2層である。不整楕円形を呈し、掘り込みは69×50cmで、深さ2cmと浅い。覆土は黒褐色の粘質土で、粒子がやや粗い。底面は平坦で、壁は緩く立ち上がる。遺物は出土していない。時期は不明である。



第274図 寺東地区8号墓墳

寺東地区第10号墓墳 (第269・275図)

K-Lライン・70km944m付近で検出した。第1次調査で検出したもので、旧称A-Bラインに位置する。確認面は第2層である。1号溝と重複しており、1号溝→10号墓墳の順に新しい。

掘り込みは隅丸の長方形を呈し、確認面での掘り込みは126×65cmで、深さ19cmある。覆土は灰褐色の粘質土で、一挙に埋没したとみられる。

底面は平らで、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は土器片・炭化物が出土しているが、骨片の出土はない。時期は不明である。

寺東地区第11号墓墳 (第269図)

L-Mライン・70km941m付近で検出した。第1次調査で検出したもので、旧称B-Cラインに位置する。確認面は第2層である。ピット24・36～38と重複しており、11号墓墳→ピットの順に新しい。

掘り込みは略三角形を呈し、確認面での掘り込みは東西83cmで、深さは5cmである。覆土上部に浅間A軽石を含んでおり、壁は斜めに立ち上がる。遺物は出土していない。時期は江戸時代以降とみられる。

本遺構は墓墳とは考えられない様相を示している。



第275図 寺東地区10号墓墳

寺東地区第12・13号墓墳（第276・279・283図）

K-Lライン・70km941m付近で検出した。第1次調査で検出したもので、旧称A-Bラインに位置する。確認面は第2層である。両者は重複しており、また12号墓墳は1号溝とも重複している。これらは13号墓→12号墓→1号溝の順に新しい。



第276図

寺東地区12
・13号墓墳



第277図 寺東地区14号墓墳

13号墓墳からは拳大～人頭大の石が数十個出土し、中から土器片も出土している。12号からは土器片が出土したのみで、石は検出していない。両者とも壁は斜めに立ち上がり、底面は凹凸がある。12号の土器は須恵器質の厚手のもので、こね鉢状を呈し、一カ所にくぼみを設けて片口としている。これらの遺構は骨片の出土がないので、積極的な根拠を欠いているが、本地区の石の落ち込んだ墓墳の様相から、墓であった可能性がある。時期は根拠を欠くが、中世以降とみられる。

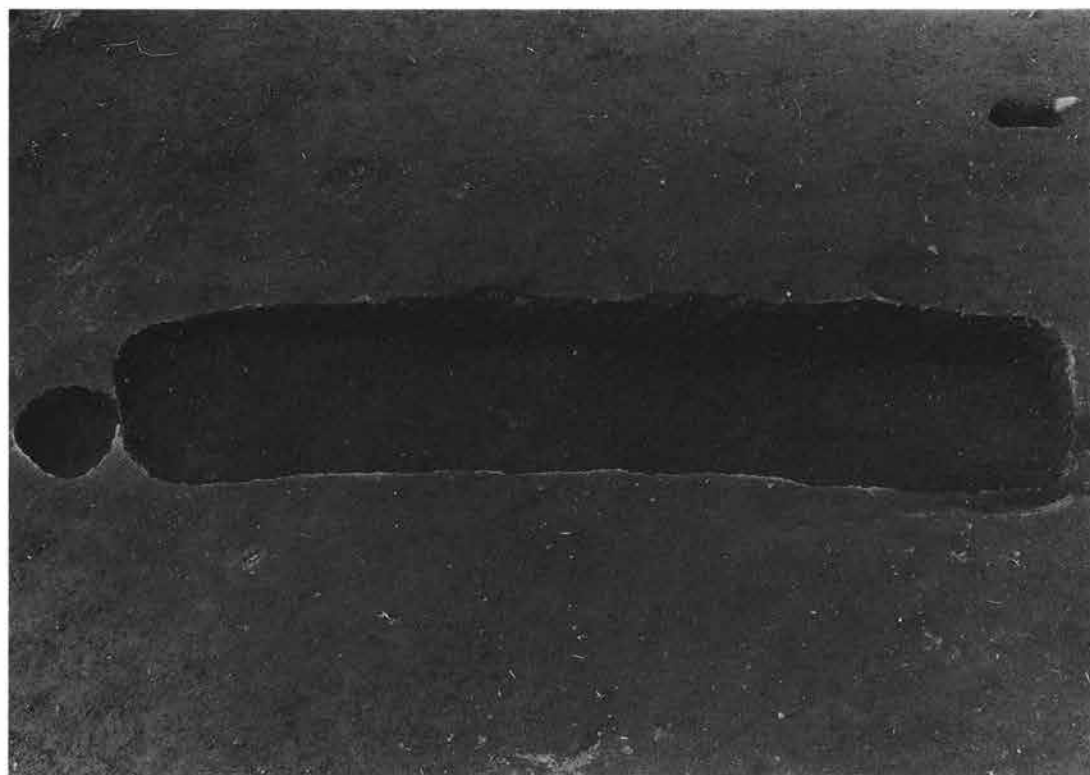
寺東地区第14号墓墳（第277・279図）

Mライン・70km908m付近で検出した。第1次調査で検出したもので、旧称Cラインに位置する。確認面は第2層である。第5号溝と重複しており、14墓墳→5号溝の順に新しい。本遺構は下層に掘り下げたところ、石群の直下に自然堆積の土層が接し、何等の掘り込みも検出できなかった。石以外の検出物はなく、墓墳とは考えられない様相を示している。時期は不明である。

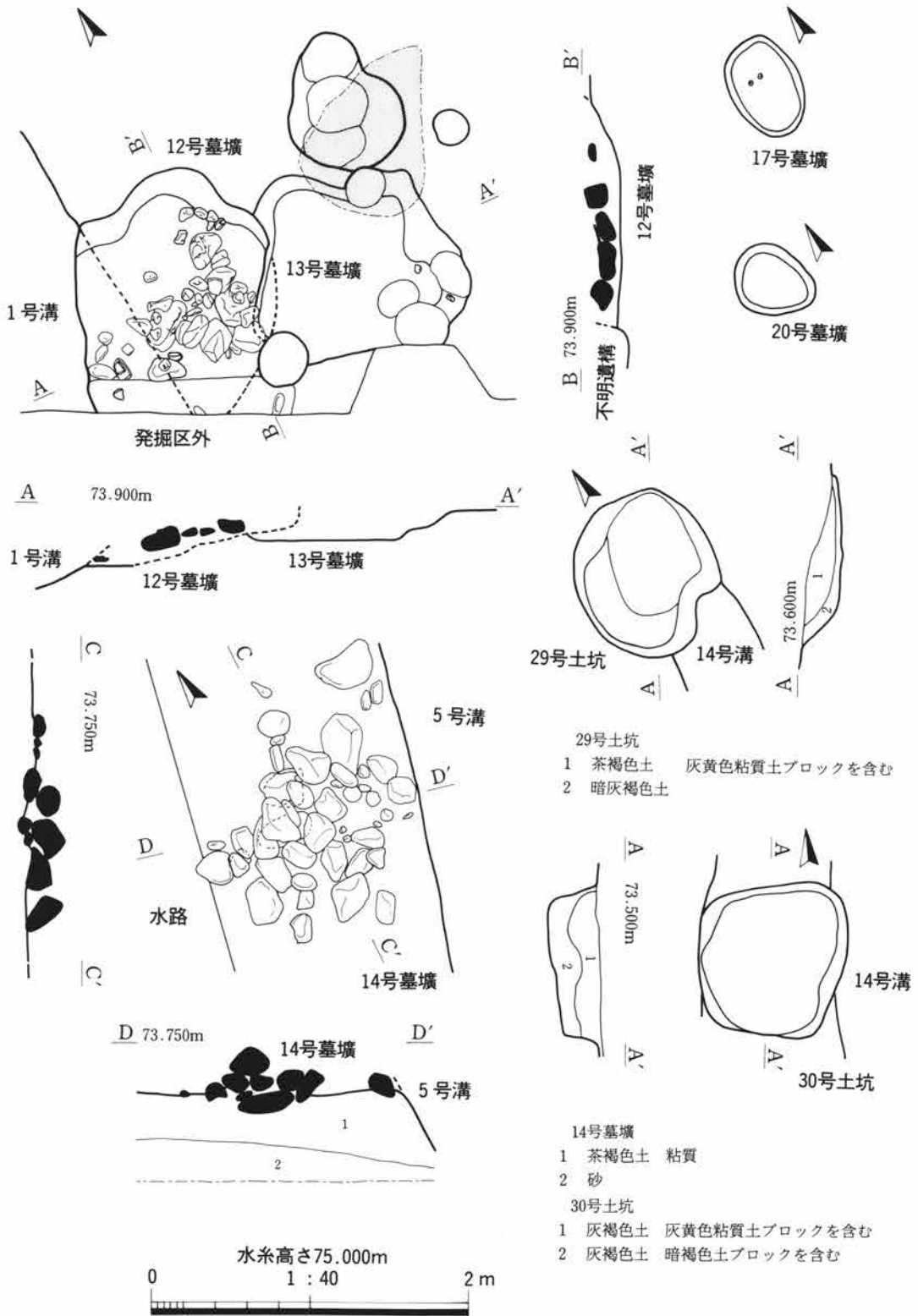
寺東地区第15号墓墳（第278・284図）

L-Mライン・70km916m付近で検出した。本遺構は第1次調査で検出したもので、旧称B-Cラインに位置する。確認面は第2層である。

平面形は隅丸の長方形を呈し、確認面での掘り込みは448×112cmで、深さは32cmである。壁はほぼ直に立ち上がる。底面は平坦である。遺物は土器片が出土しているが、小片のため図示しなかった。時期は出土土器でみると、平安時代以降と考えられる。



第278図 寺東地区15号墓墳



第279図 寺東地区12～14・17・20号墓墳、29・30号土坑

寺東地区第16号墓墳（第280・284図）

Oライン・70km918m付近で検出した。本遺構は第1次調査で検出したもので、旧称Eラインに位置する。確認面は第2層である。

平面形は略円形を呈し、確認面での掘り込みは76×66cmで、深さは31cmである。上端よりも底面の方が広がり、袋状の掘り込みとなっている。底面は平坦である。遺物は出土していない。

時期は不明である。

寺東地区第17号墓墳（第281・283図、図版65）

K-Lライン・70km923m付近で検出した。第1次調査で検出したもので、旧称B-Cラインに位置する。確認面は第2層である。

本遺構は楕円形を呈し、確認面での掘り込みは64×45cmで、深さは5cmである。壁は斜めに立ち上がり、底面は平らである。遺物は古銭が2枚出土している。

時期は古銭の初鋳年から、12世紀以降とみられる。

寺東地区第18号墓墳（第282・284図）

M-Nライン・70km914m付近で検出した。第1次調査で検出したもので、旧称C-Dラインに位置する。確認面は第2層である。東半部は調査区外にあり、検出分は東西285cm、南北125cm、深さは20cmである。長軸線の方向はN123°Eを示す。壁は斜めに立ち上がり、底面は平坦である。15号墓墳によく



第280図 寺東地区16号墓墳



第281図 寺東地区17号墓墳



第282図 寺東地区18号墓墳

似た形状を示す。

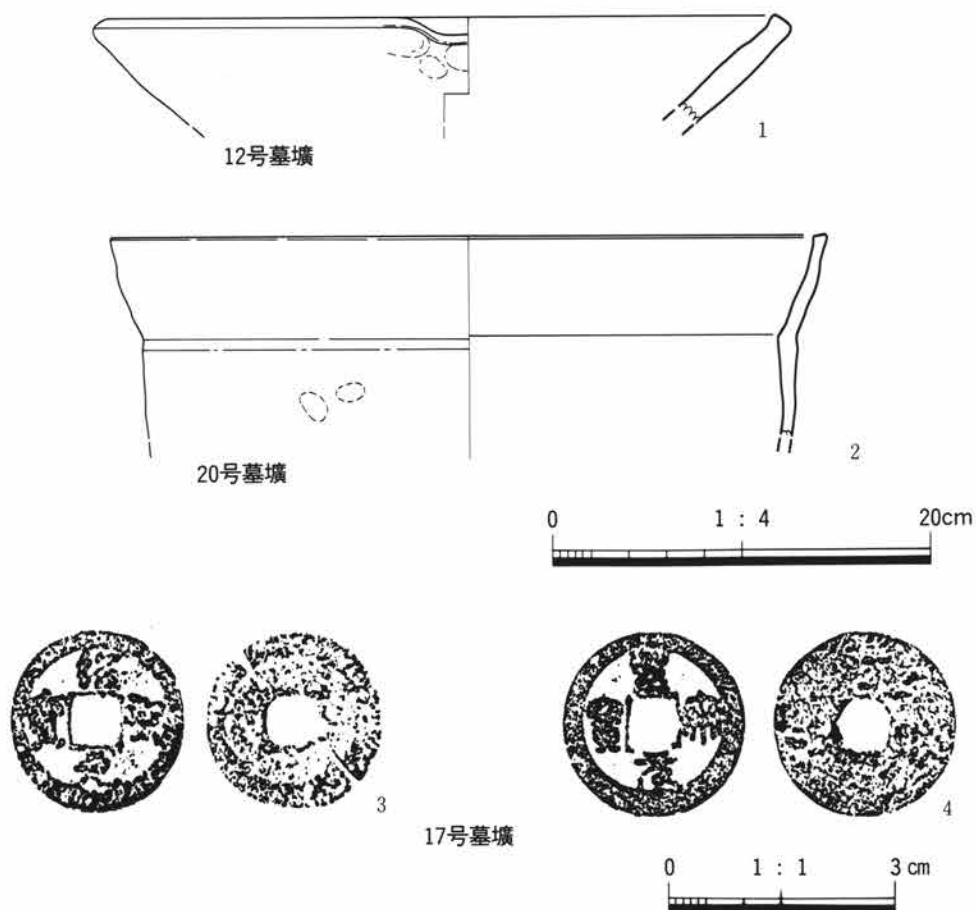
遺物は土器片が出土しているが、小片のため図示しなかった。時期は不明である。

寺東地区第20号墓墳（第279・283図、図版65）

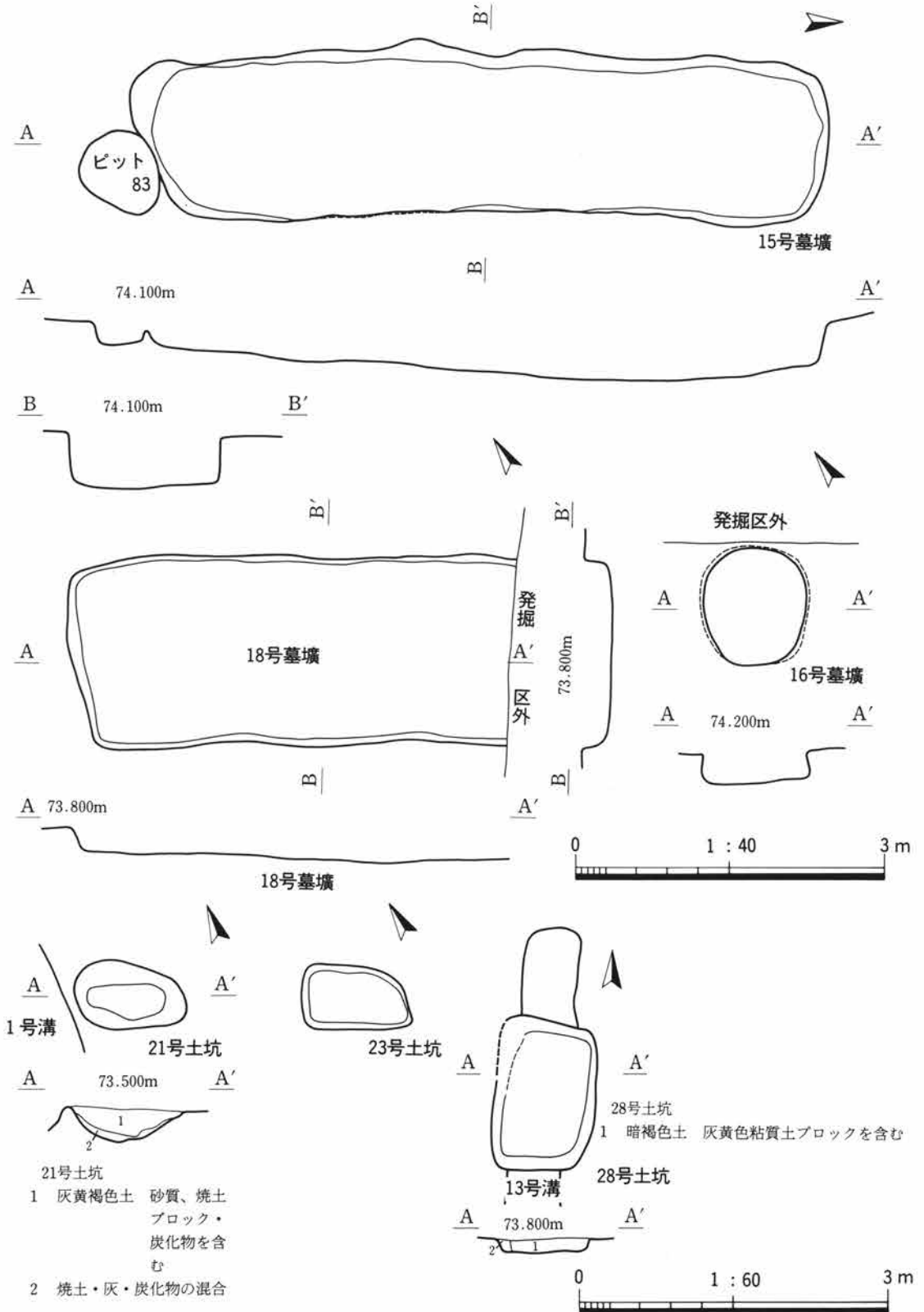
L-Mライン・70km928m付近で検出した。第1次調査で検出したもので、旧称B-Cラインに位置する。確認面は第2層である。

平面タマゴ形を呈し、確認面での掘り込みは53×43cmで、深さは11cmである。覆土は灰褐色の粘質土である。壁はほぼ直に立ち上がり、底面は平らである。

遺物は内耳土器が出土している。時期は中世以降とみられる。



第283図 寺東地区12・17・20号墓墳出土遺物



第284図 寺東地区15・16・18号墓墳、21・23・28号土坑

寺東地区第56A号土坑（墓墳）（第285～287・291図、図版66）

Pライン・70km949m付近で検出した。第4次調査で検出したもので、北側道の1号溝と重複している。確認面は第2層である。確認面での掘り込みは91×57cmで、深さは10cmである。長軸はN10°Eの方向を示す。墓墳は砂質の褐色土で埋没している。壁は斜めに立ち上がり、底面は平坦である。人骨



第285図 寺東地区56A号土坑（1）

はほぼ全身にわたって出土しているが、遺存状態が不良で、写真で示した人骨すべてを鑑定することができなかった。その他、古銭が11枚出土している。時期は中世～近世初頭に収まると考えられる。なお、出土人骨については第5分冊で扱う。

寺東地区第60号土坑（第287図）

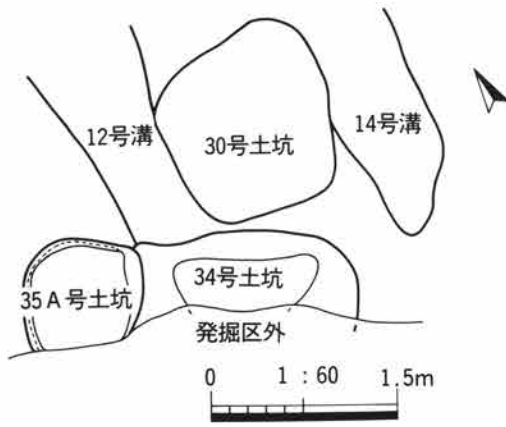
Pライン・70km924m付近で検出した。第4次調査で検出したもので、北側道の35号溝と重複し、35号溝→60号土坑の順に新しい。本遺構は35号溝と同時に調査したため、プランを検出できなかったが、ほぼ図のように復元できる。確認面は第2層である。人骨は頭部のみ検出し、その他の部分は遺存していなかった。時期は不明であるが、35号溝に似た畝状遺構よりも新しい、中世以降と見られる。

寺東地区第62号土坑（墓墳）（第287・289図）

O-Pライン・70km950m付近で検出した。第4次調査で検出したもので、北側道調査時に南側の壁

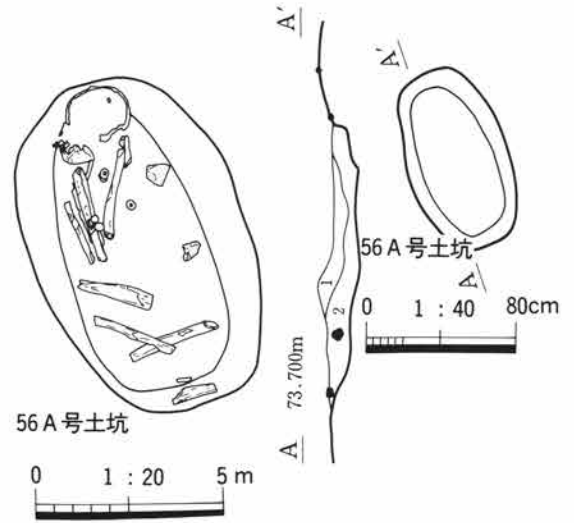
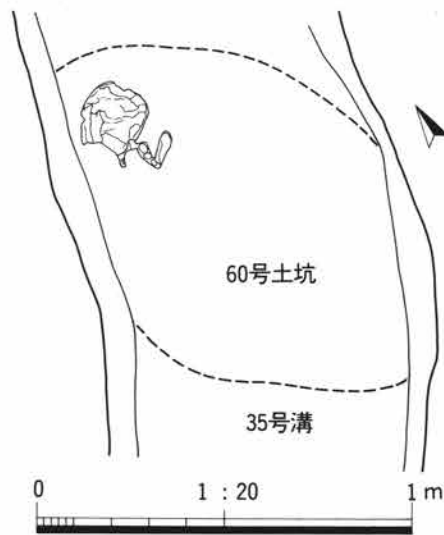
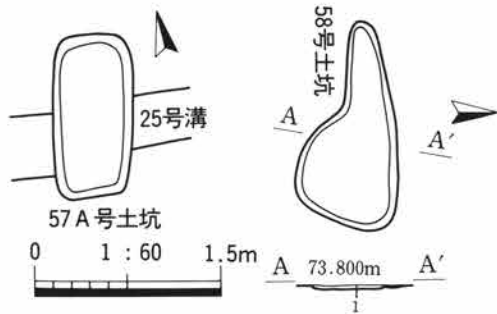


第286図 寺東地区56A号土坑（2）



58号土坑

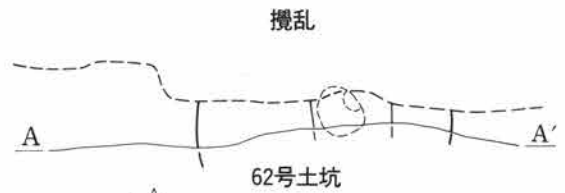
- 1 黄褐色土 粘質、細砂粒を含む



56A号土坑

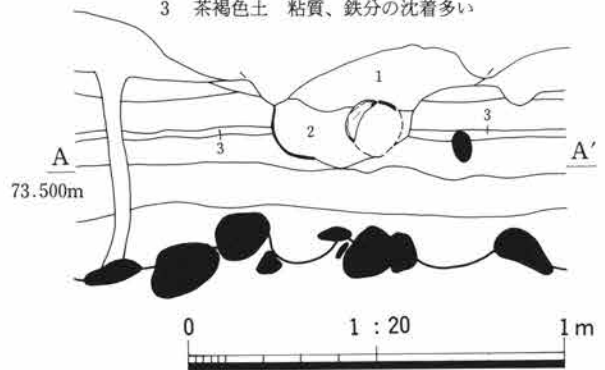
56A号土坑

- 1 褐色土 砂質、灰褐色粘質土ブロックを含む
2 褐色土 砂質、1に似るが炭化物を含む



62号土坑

- 1 褐色土 砂質、黄褐色粘質土ブロックを含む
2 褐色土 砂質
1に似るが粘質土が多い、焼土・炭化物粒を含む
3 茶褐色土 粘質、鉄分の沈着多い



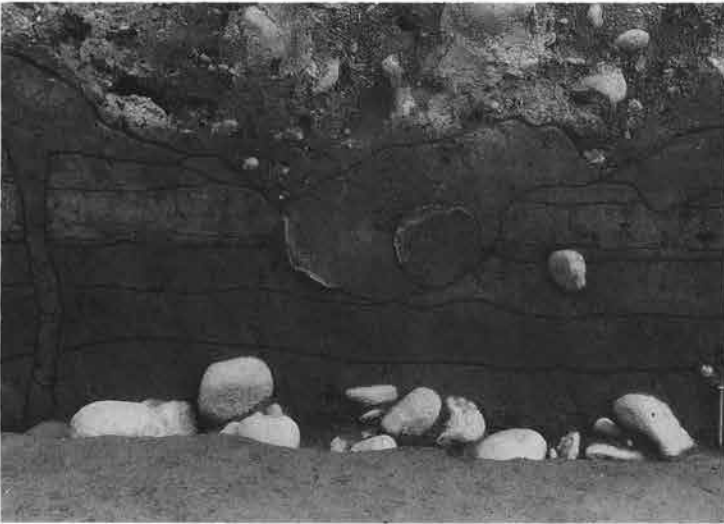
第287図 寺東地区30・34・35A・56A・57A・58・60・61・62号土坑

中に発見したものである。上層は側溝工事のために破壊されており、本遺構の切り込み面を確認することはできなかった。人骨は頭部を北に向け、頭骨を輪切りにした状態で検出した。発見当時は歯の遺存状態が最も良好であった。その他、墓壇の壁際から土器が出土している。

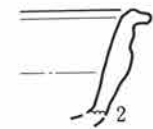
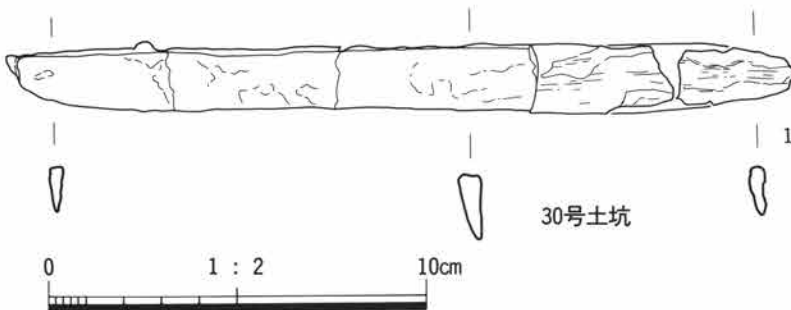
56A号土坑の覆土・方向・大きさがほぼ同様なので、本遺構の時期は中世以降と考えられる。



第288図 寺東地区61号土坑

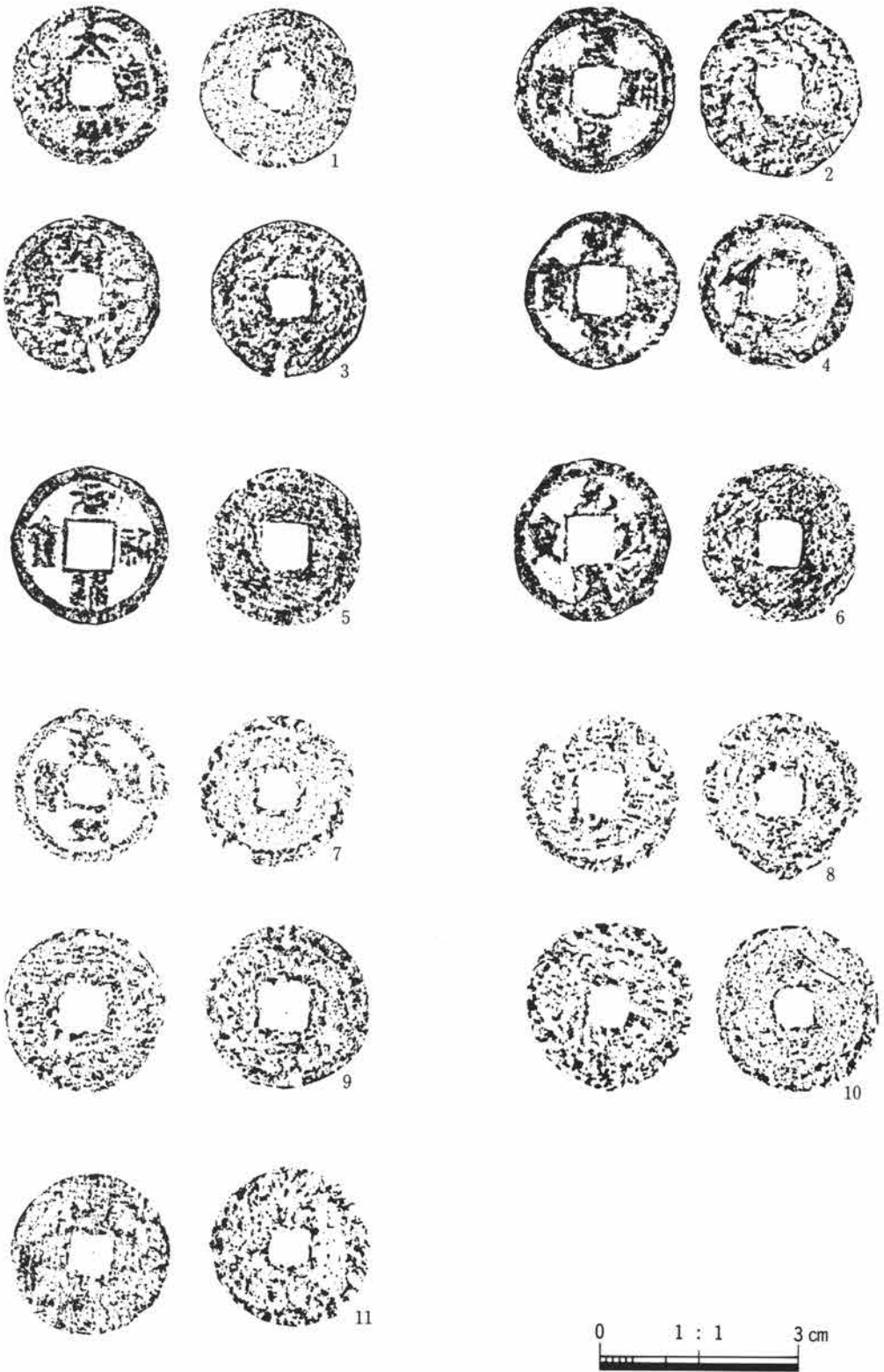


第289図 寺東地区62号土坑



35A号土坑

第290図 寺東地区30・35A号土坑出土遺物

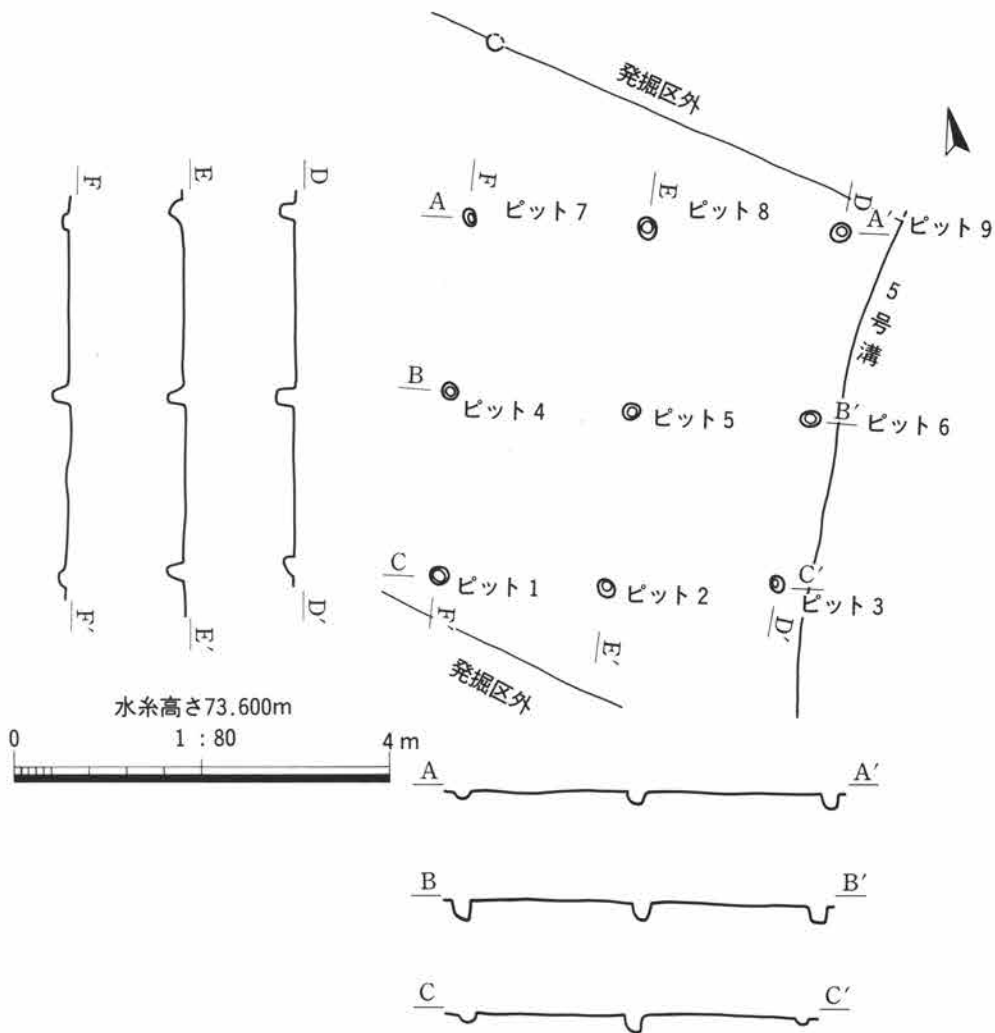


第291図 寺東地区56A号土坑出土遺物

寺東地区第2号掘立柱建物跡 (第292・293図)

O-Qライン・70km914m付近で検出した。第4次調査で検出した遺構で、確認面は第2層である。2間×3間以上の総柱で、長軸方向をN16°Eにとる。各ピットの計測値及び各ピット間の計測値は表の通りである。北側の調査区壁中に、他の柱穴とほぼ同様の規模の柱穴を検出しており、南北方向の柱間が3間以上あることが判明している。

本遺構は東側の柱通りが第5号溝に接し、かつ5号溝とおおむね同一の方向をとっていることから、5号溝とほぼ同時期の遺構と考えられる。5号溝は心洞寺に関連する1号溝と同じ方向をとっており、従って本遺構も心洞寺に関連する遺構と推定できる。遺物の出土はない。



第292図 寺東地区2号掘立柱建物跡

第19表 寺東地区 第2号掘立柱建物跡 計測値表

長軸方向	桁行cm	梁行cm	桁行柱間cm	梁行柱間cm	番号	模		
						上バcm 長径×短径	下バcm 長径×短径	深さcm
N17°W		1-3 : 361	1-4 : 195	1-2 : 180				
		4-6 : 387	4-7 : 184	2-3 : 182				
		7-9 : 397	7-10 : 187	4-5 : 194	1	径 20	径 12	8
			2-5 : 185	5-6 : 191	2	20×16	径 10	16
			5-8 : 195	7-8 : 188	3	18×14	径 6	10
			3-6 : 179	8-9 : 208	4	径 18	径 9	18
			6-9 : 200		5	18×16	径 10	19
					6	22×15	径 10	11
					7	18×13	12×5	6
					8	23×20	13×11	15
				9	21×17	径 11	16	
				10	径 20			

※計測値は1/20原図から起こした数値である。柱穴間の距離は心車で計測した。



第293図 寺東地区 2号掘立柱建物跡

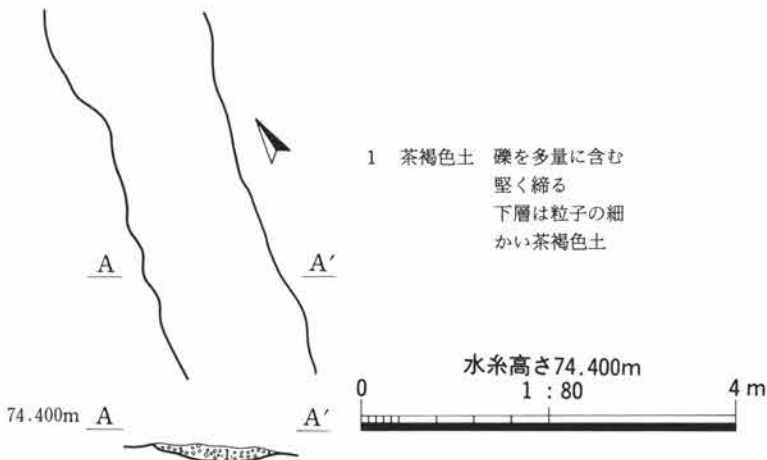
寺東地区第1号石敷遺構（第294～296図）

J-Kライン・70km928m付近で検出した。第2次調査で検出しているが、第1次調査では発見していない。確認面は第2層である。第10・11号溝と重複しており、本遺構の方が上層にあつて新しい。ほぼ南北方向のN13°Eの方向をとり、第1・3・4号溝と走行が非常に似ている。確認面での掘り込みは北端で170cm、南端で135cm、深さ20cm前後である。断面レンズ状に掘り込み、覆土は多量の石（径2～10cm）を含んだ茶褐色土である。遺物は土器の小片が出土したのみである。

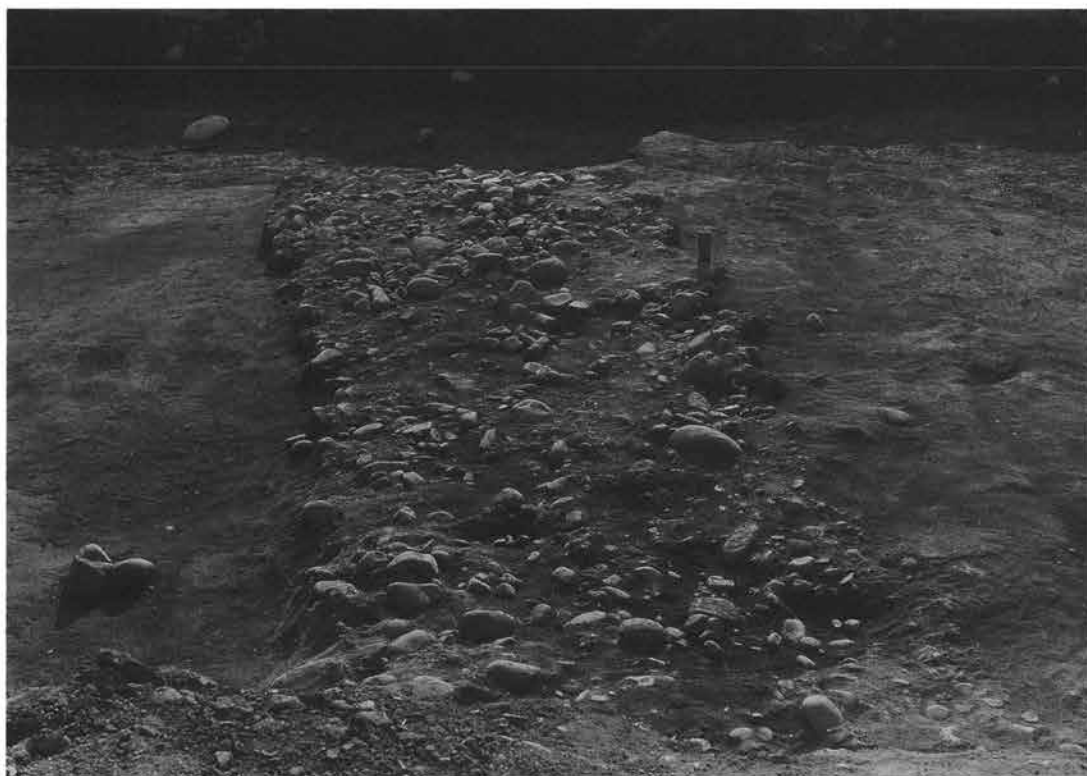
本遺構は礫の状態から推定して「道路」または「土塁」の基底部の可能性がある。時期は層位から中世以降と考えられる。

寺東地区遺構外出土遺物（第297～301図、図版66～71）

本地区の遺構外出土遺物には耳環・手鏡・貨幣などの金属製品、埴輪破片、石臼、陶器・磁器、心洞寺周辺採集の近代瓦等がある。磁器には小片ながら、輸入された青磁も含まれる。



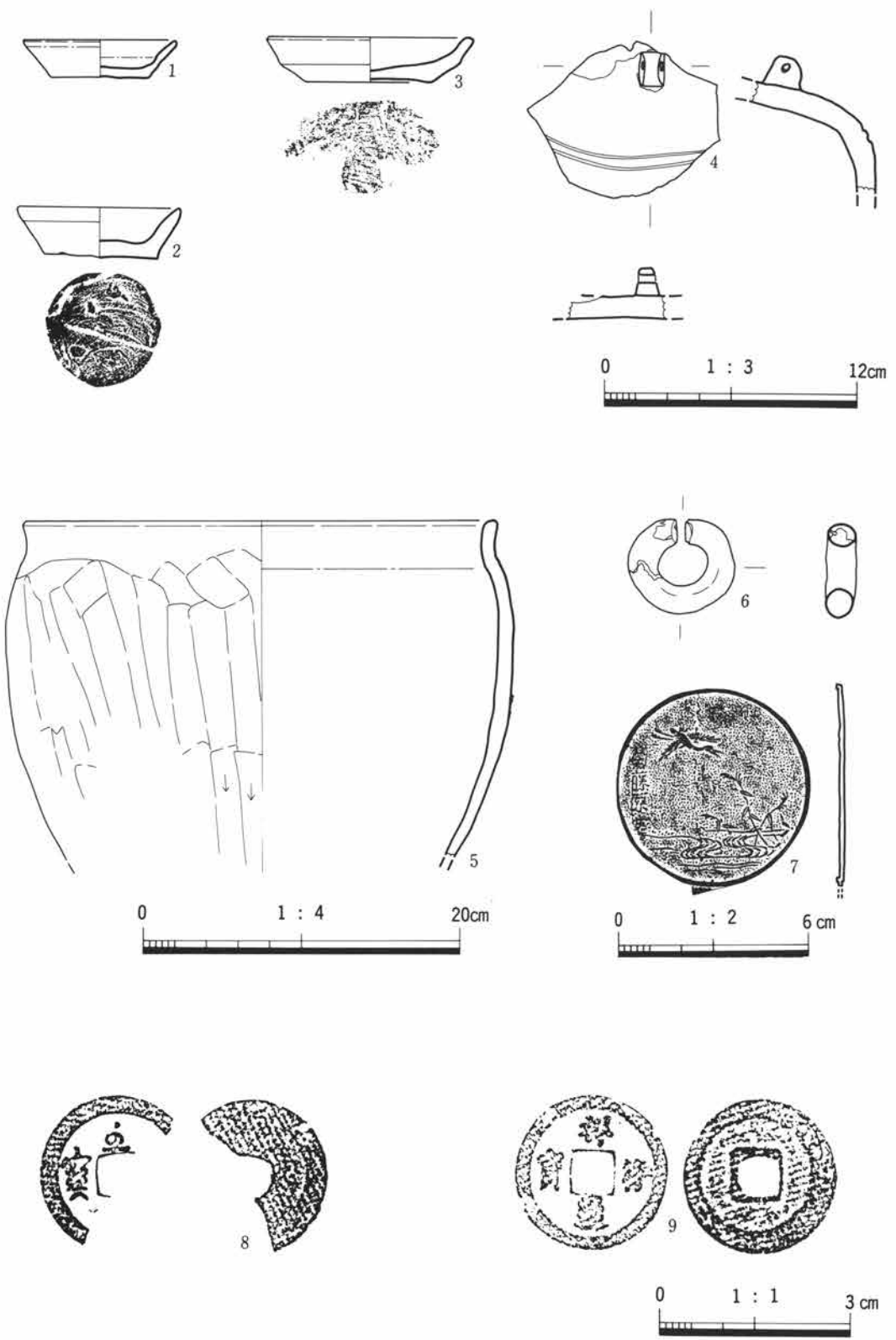
第294図 寺東地区1号石敷遺構



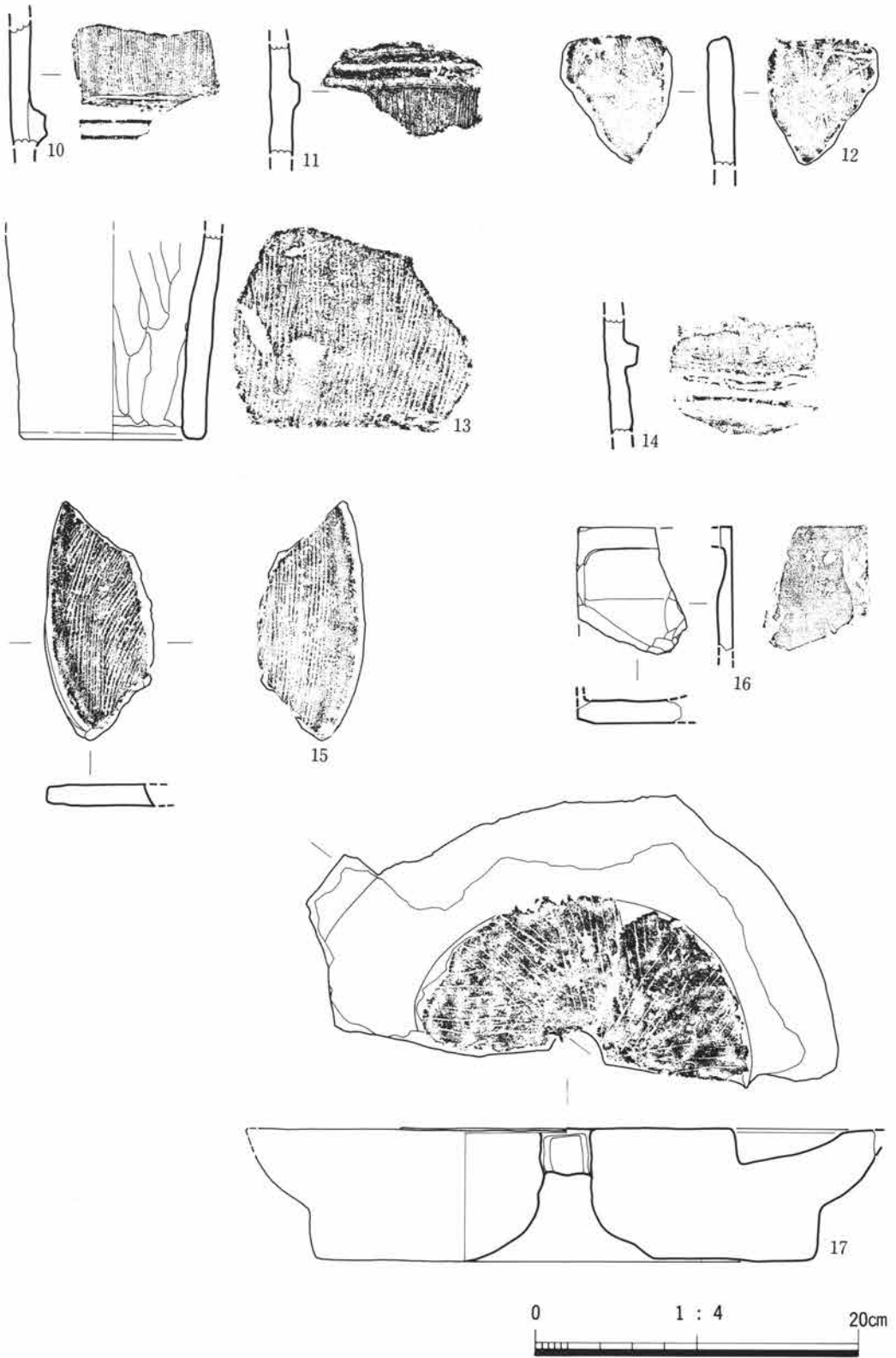
第295図 寺東地区第2次調査1号石敷(1)



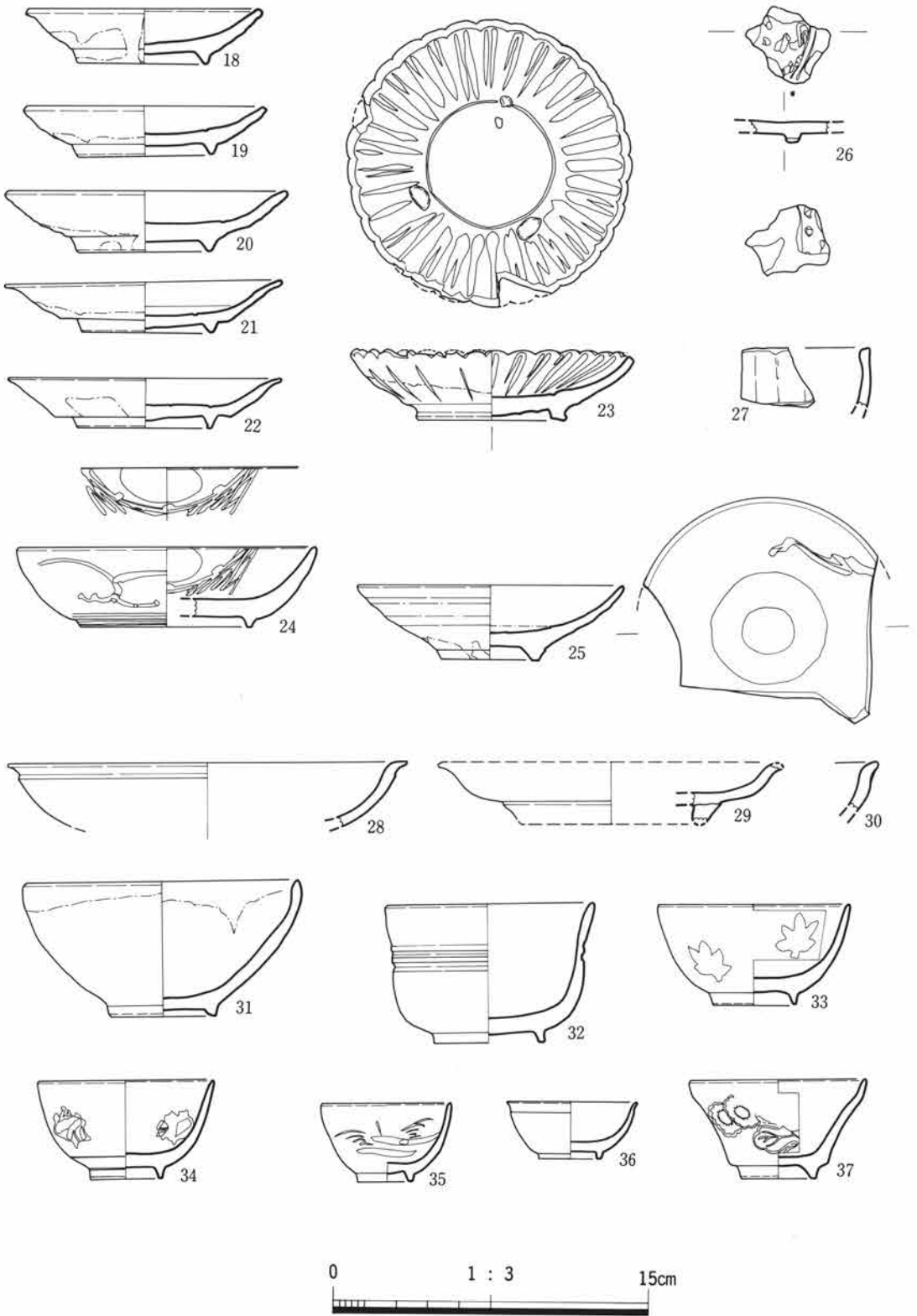
第296図 寺東地区1号石敷(2)石除去後



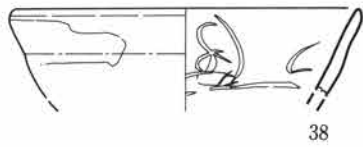
第297図 寺東地区遺構外出土遺物（1）



第298図 寺東地区遺構外出土遺物（2）



第299図 寺東地区遺構外出土遺物（3）



38



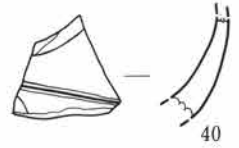
41



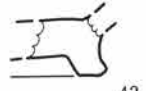
46



39



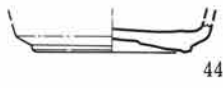
40



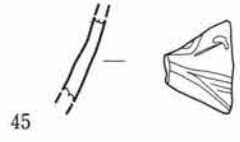
43



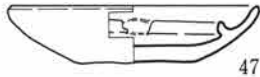
42



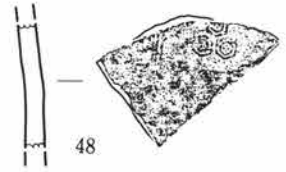
44



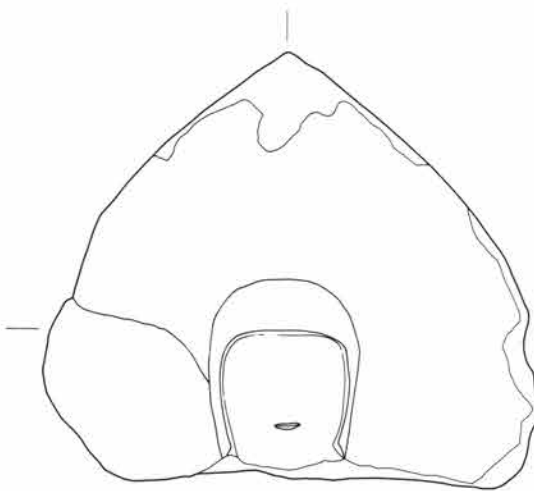
45



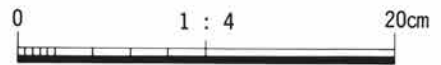
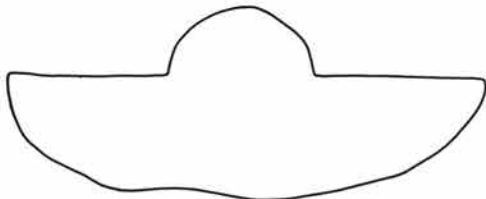
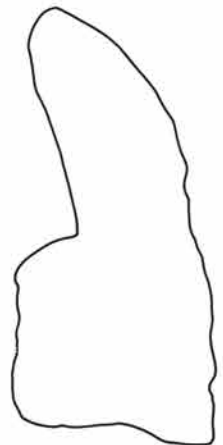
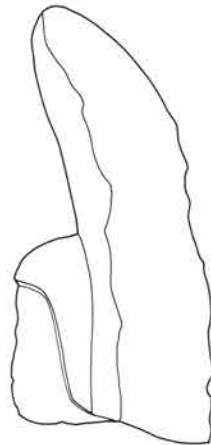
47



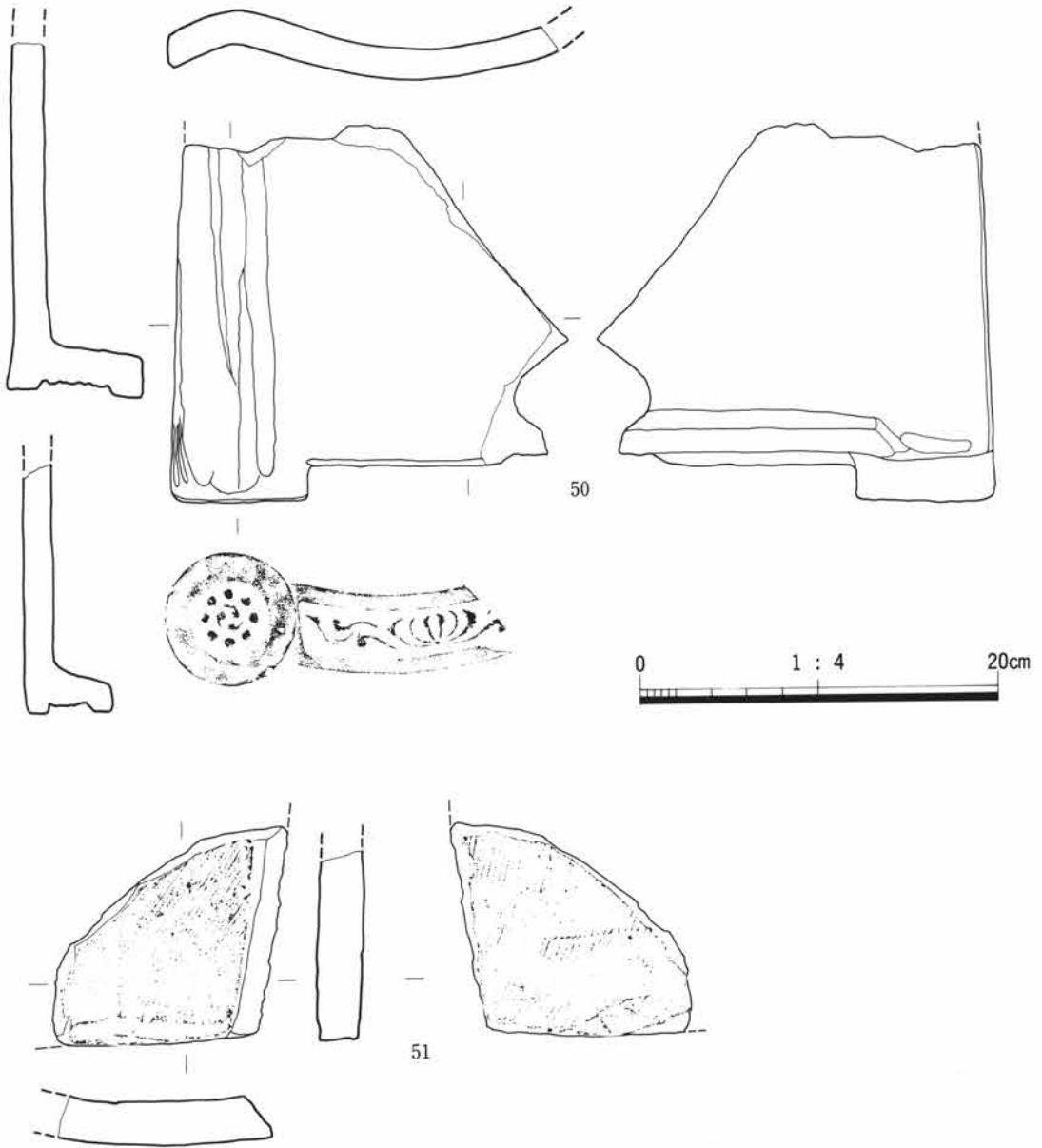
48



49



第300図 寺東地区遺構外出土遺物（4）



第301図 寺東地区遺構外出土遺物（5）

8 田端遺跡出土の石造物

1. 板 碑

田端地区E区3号土坑-1(第220図)

この遺物は、長さ56cm、幅25cm、厚さ4cmを測る板碑下半部の破片であり、上半部および左右側面の一部が欠損している。碑面(表面)は摩滅が著しく、種子・蓮座・紀年銘等の一切の彫り込みを逸しており、遺物の天地の判断はその形状より行った。裏面には、板碑を板状に整形する際の工具痕が部分的に残る。この工具痕は、基本的には板碑の天地に対して横方向に走るが、方向は必ずしも一定ではなく、高い部分を順次剝離していった様子が窺える。また、痕跡より考えられる工具は幅1.4mm弱の丸ノミで、一回の打撃により大きく剝離するのではなく、細かくノミを当てる方法で板状に整形していることが窺える。石材は、細粒の石英を多く含む緑泥片岩で、雲母をあまり含まない石を用いている。この石材は、出土時より脆く表面を薬品処理しなければならないほどであったことから、碑面の摩滅・剝離の要因は、石材の軟弱さのためであろうと考えられる。前記のとおり、欠損ならびに碑面の摩滅のため、紀年銘はもとより種子・蓮座も確認できない状態であるため、年代決定はほぼ不可能ではあるが、遺跡周辺を含む高崎市全域の板碑は、13世紀中頃より伝播が見られ、16世紀初頭には、ほぼ造立の終焉を迎える。この造立期間内において、本板碑は造立されたものと考えられるが、石材および裏面の調整方法(板状剝離後、磨きを行わず工具痕を残す。)から、初期の造立とは考えられず、恐らく14世紀中頃以降から16世紀初頭頃の造立と推察される。本板碑は、E3号土坑の覆土より出土したものであるが、遺構の大半が調査区域外に渡るため、遺構の性格については明らかではない。

2. 五 輪 塔

田端地区B区2号墓壇-1(第75図8)

この遺物は、高さ10.3cm、最大径約15.0cmを測る五輪塔の水輪部の破片であり、約4分の1弱を欠損している。石材は、本県の様名山ニツ岳噴出の軽石を用いており、軟質で脆い反面、加工は容易である。遺物の特徴としては、上面ないし下面にあたる部分にすり鉢状の穴を穿つ点があげられる。通常の五輪塔の場合、火輪の上面には空風輪の突起部分を接続するための穴が穿かれているが、水輪は上下面共にほぼ平坦、もしくは、浅い皿状を呈する程度である。この種の五輪塔の類例としては、本遺跡と同じ上越新幹線関連の下佐野遺跡I地区出土の五輪塔(注1)にも見られ、舍利容器(蔵骨器)あるいは、經典容器としての機能を備えていた可能性も考えられる。本遺物の造立年代については、不明である。

田端地区B区2号墓壇-2(第75図9)

この遺物は、高さ12.8cm、上径11.3cm、下径8.0cmを測る五輪塔の空風輪の下部(風輪)である。空輪部を欠損しているため、全体の大きさ、形状は明らかではないが、大きさより見て、後記の田端地区B区遺構外出土-79と同等の空風輪であろうと推察される。石材は安山岩を用いている。整形は丁寧な磨きを施していたことが判る。造立の年代については不明であるが風輪部に円みがなく直線であることから、中世末(室町期)から近世にかけての造立と考えられる。また、上・下面の割れ口が

磨滅していることから、転用の可能性も考えられる。

田端地区B区遺構外出土-78 (第134図12)

この遺物は、高さ29.8cm、最大径16.3cmを測る五輪塔の空風輪である。下部の突起の一部を欠損するが、ほぼ完形の状態である。石材は、安山岩を用い、丁寧な磨きを施している。空輪部の一部に種子らしき痕跡が残るものの明確ではない。造立年代については、空輪部と風輪部との区画が明確ではあるが、空輪部の頂点が尖り、風輪部が直線的であることから、中世の南北朝期から室町期にかけての造立と推察される。

田端地区B区遺構外出土-79 (第134図10)

この遺物は、高さ28.6cm、最大径14.6cmを測る五輪塔の空風輪の完形である。空輪・風輪の正面中央部に梵字の「キャ」・「カ」を陰刻する。石材は、安山岩を用い、磨きを施している。形状は空・風輪共に円みをもたず直線的である。このことより、造立年代は、中世の室町期から近世にかけての造立と推察される。

田端地区B区遺構外出土-80 (第134図11)

この遺物は、高さ26.0cm、最大径13.4cmを測る五輪塔の空風輪の完形である。石材は、榛名山二ツ岳噴出の軽石を用い、磨きを施している。石材の関係から、梵字は確認できない。全体の形状は、石材は異なるものの前記の田端地区B区遺構外出土-78と類似し、造立年代もこれに近いものと考えられる。また、火輪部が検出されていないため、不明であるが、後記の田端地区B区遺構外出土-83とは大きさ、石材などから同一個体である可能性もある。

田端地区B区遺構外出土-83 (第134図13)

この遺物は、高さ24.0cm、最大径39.0cmを測る五輪塔の水輪の完形である。石材は、榛名山二ツ岳噴出の軽石を用い、磨きを施している。石材の関係から、梵字は確認できない。上下面の径はほぼ同じであり、皿状に浅くくぼむ。造立年代は不明である。

3. ま と め

本遺跡出土の石造物の委細は、前記のとおりであるが、ここで石造物全体についてまとめてみたい。本遺跡出土の石造物は、残念なことに紀年銘の残る遺物は一点もなく、造立年代が確定できない。しかし、造立の背景については若干窺い知ることができる。まず、板碑であるが、石材のみでは産地同定は不可能な現状ではあるが、可能性としては二ヶ所の産地が考えられる。ひとつは、板碑の最密集所在地域であり、かつ、石材となる緑泥片岩（絹雲母片岩等を含む）の産出地でもある埼玉県秩父長瀬地方であり、もうひとつは、本県の西部（西毛地域）で、この地域では秩父山系と同一系統の御荷鉾山系の緑泥片岩が産出し、特徴として長石を多量に含む点紋長石緑泥片岩であるといわれるが^(注2)、同一山系に属する岩石であり、かつ、緑泥片岩の場合、石材の採掘層位によって同一の地点からの採掘であったとしても質の異なる緑泥片岩が採取されることから、石材より産出地（製作地）を同定することは実質的に不可能であると考えられる。しかし、現在のところこの西毛地域より産出する緑泥片岩を石材として用いたと思われる板碑は、西毛地域の一部の小範囲に分布し、県下全域に分布するものではないと考えられるため、本遺跡の板碑については、秩父地方よりの搬入と考えたい。板碑造立

の背景として一番重要な問題は、造立者の問題であるが、板碑造立者の実態は不明な点が多く、階層の限定も難しいが、卒塔婆を立てて供養を行うという仏教的な思想を持ち、造立に有する費用を負担でき得る人間という、やはり在地領主・土豪階層による造立と考えるのが妥当であろう。このことは、板碑に限らず五輪塔についてもいえることである。本遺跡出土の五輪塔、特に二ツ岳噴出の軽石を石材とする五輪塔などは、石材の入手及び加工が容易であることから、造立にかかる費用は若干低くなるやもしれないが、造立階層を大きく左右するものとは考えにくい。これらのことから、当遺跡周辺には出土の板碑・五輪塔を造立した土豪階層の人間の存在が推察される。

次に、供養塔の造立後を考えたい。遺物の出土状況を見ると、造立時に近い状態を示すものはなく、一貫して廃棄された状態で出土している。出土遺物中、五輪塔の空風輪部の出土量が多く、火輪・地輪部の出土がない理由は、地輪・火輪・水輪部は、転用される例が多く転用しにくい空風輪部のみ残され、廃棄されたものと考えられる。また、出土遺物の多くは摩滅・剥離しており、造立から廃棄までにはある程度の時間幅があったことが推察される。これらのことから、当遺跡周辺は当初、供養塔の造立地であったものが、勢力交替等の時代の流れとともに土地利用が変化し、新たに土地利用をするものの手により、石造物の一扫が行われたものと推察される。

(新倉)

注1. 下佐野遺跡I地区は、本稿執筆現在、整理中の遺跡であり、参考のため担当者の承認のもとに実見させていただいた。

注2. 「武蔵型板碑の周辺 ―小幡型板碑を考える―」磯部淳一（『群馬県立博物館紀要 第8号』1987所収）

遺物觀察表

田端地区A区第1号井戸出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
13	刀子製 鉄			フク土	長さ7.1cmが遺存する。茎の一部、身の一部があり、関の部分はサビで膨れている。身の最大幅は0.9cmである。④TAYAI井-28	

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
1	陶器 皿	フク土	1/2	①淡灰色②硬質③淡緑灰色	体部外面・底面を除いて灰釉を施す。付高台。④TAYAI井戸-10		瀬戸美濃系 17世紀 1
2	陶器 皿	フク土	底部片 底 5.9	①淡黄灰色②普通 ③乳白色	削高台。志野釉を施すが外底は露胎となる。見込に目痕1ヶ所あり。外底に若干スガが付着している。④TAYAI井戸-9		瀬戸美濃系 16世紀 2
3	陶器 碗	フク土	底部 底 5.9	①淡黄色、やや緻密 ②普通③茶褐色	褐釉。見込の白濁釉の斑より、口縁に灰釉系白濁釉を流し掛けた可能性。高台は釉を拭い錆色を呈する。畳付摩滅。貼付高台。④TAYAI井戸-4		瀬戸美濃系 17世紀・18世紀
4	磁器 皿	フク土	底部1/2	①白色②普通③白磁釉	内底蛇目釉ハギ。高台は露胎。高台と内底の釉ハギ部分砂付着。露胎部は赤味を帯びた肌色を呈する。④TAYAI井戸-2		伊万里系 17世紀後半～ 18世紀前半 3
5	磁器 碗	フク土	口縁～胴部片	①灰白色②普通③明 緑灰色を帯びた透明 釉	外面にコンニャク判による菊花文を施す。呉須は非常にうすく、文様は不鮮明。いわゆるくらわんか手。④TAYAI井戸-3		伊万里系 18世紀前半 4
6	陶器 碗	フク土	口縁部片	①淡黄灰色②普通 ③茶褐色	飴釉(鉄)を内・外面に施す。④TAYAI井戸-17		美濃焼 16世紀後半 5
7	磁器 瓶	フク土	底部	①灰色②普通③透明 釉、染付	外面は全面に施釉。畳付には砂が付着する。呉須の発色はにぶい。釉は透明であるが、胎土の色が灰色のため、くすんだ色となる。④TAYAI井戸-12		伊万里系 17世紀後半～ 18世紀前半 6
8	陶器 香炉	フク土	底部1/2	①濁黄白色②普通 ③飴釉	外面体部に沈線が巡る。釉薬は薄く不安定であり、やや新しい時期の遺物と判断した。④TAYAI井戸-5		瀬戸美濃系 18世紀以降 7
9	軟質陶器 焙烙	フク土	小片	①褐色、緻密②普通、 色調黒褐色	口縁は内傾し、体部は丸味を帯びる。内耳の下端は底部に付く。④TAYAI井戸-6		在地製 17世紀～19世紀
10	軟質陶器 焙烙	フク土	小片	①灰白色②普通	内面はやや光沢を持った黒色。外面は光沢を持たない黒色。④TAYAI井戸-8		在地製 17世紀～18世紀 (江戸時代)
11	陶器 鉢	フク土	底部片	①茶褐色②普通③白 土・淡褐色	内面に印文と圏線が施され、白土象嵌となる。外面に淡褐釉が高台際まで掛られ、見込中央は露胎で砂の付着と目痕あり。④TAYAI井戸-11		唐津系 17・18世紀
12	陶器 鉢	フク土	底部小片	①灰色、細砂～粗砂 含む②普通	器表は錆色を呈する。体部下端ヘラケズリ。④TAYAI井戸-7		焼締陶器 年代不詳

遺物観察表

田端地区A区第2b号溝出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴 ④整理番号	備 考
1	磁器碗	フク土	1/4	①白色②普通③透明釉、染付	染付は菊花の意匠。呉須は薄く、やや沈んだ藍色に発色している。④TAYYA2溝-b4	伊万里系 18世紀 8
2	軟質陶器焙烙	フク土	小片 口径 (29.8)	①暗褐色、砂粒多い ②普通	残存部分は全体に、布状の擦痕あり。内面底部に油煙様の付着物あり。④TAYYA2溝-b2	製作地不詳

田端地区A区第8・9・14号土坑出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特 徴	①胎土②焼成③色調④備考
3	砥石	略完		フク土	長さ7.3cm、幅3.9cm、厚さ2.3cmの直方体を呈する。短い端部に断面半円形の溝がある。ヒモ穴の残欠か。石質流紋岩(砥沢?)。④TAYYA8土-1	

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴 ④整理番号	備 考
1	陶器碗	8号土坑 フク土	底部1/2	①灰色、細砂多い ②普通③透明釉、染付	釉はやや厚く、貫入は粗い。鉄足が顕著である。④TAYYA8土坑-2	唐津系 18世紀 9
2	軟質陶器播鉢	8号土坑 フク土	口縁部片	①砂粒やや多い②硬質	卸し目は7本1単位、内面には乳緑色の降灰釉がかかっている。④TAYYA8土坑-3	常滑焼か
4	磁器碗	9号土坑 フク土	底部片	①白色②普通③透明釉、染付	貫入や気泡は少なく、器面はなめらか。高台端部は釉をふき取る。精製呉須で明るい藍色に発色。④TAYYA9土坑-1	伊万里系 19世紀後半 10
5	磁器そば猪口	9号土坑 フク土	底部	①白色②普通③透明釉、染付	やや大粒の気泡が外面に多く見られる。呉須は淡い藍色に発色している。径に比べて器高のある器形となろう。④TAYYA9土坑-2	伊万里系 17世紀後半 11
6	磁器碗(円盤)	14号土坑 フク土	体部小片	①白色②普通③透明釉、染付	呉須はペロ藍。円盤形に再調整した、おはじきと思われる。④TAYYA14土坑-2	伊万里系 19世紀後半 12

田端地区A区遺構外出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴 ④整理番号	備 考
1	陶器皿	I層	1/4	①黒褐色②普通③灰黒色	内面口縁端部と見込辺に鉄絵の圏線を施しているが不明瞭。全面に施釉。胎土黒く鼠志野風の釉調となる。二重貫入がある。	瀬戸美濃系 17世紀 13
2	磁器皿	2-1-J 7 III	口縁~底部小片	①白色②普通③透明釉、染付	釉には気泡が多い。呉須はややくすんだ淡い藍色に発色している。	伊万里系 18世紀 14
3	陶器乗燭	トレンチ		①淡灰色②普通③茶褐色	底部は露胎で糸切り痕が残っている。中央に焼成前の穿孔。釉は鉄分を含む釉で細かな貫入がある。	瀬戸美濃系 18世紀 15

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
4	陶器 皿(菊皿)	VII層	1/2	①淡灰黄色②普通 ③淡褐色・緑色	高台は付け高台で、しっかりしている。高台周辺は露胎。見込に3ヶの目痕あり。釉は緑釉と灰釉。		瀬戸美濃系 17世紀 16
5	陶器 片口	2-1-J -7 III(2 片)	口縁部小片	①醜脂色②普通③透 明・白土	片口部分は残存しない。口縁部は折り返しか。釉は白土掛の上に透明釉を施し、三島手に近い。内面一部露胎。		唐津系 18世紀~19世紀
6	陶器 播鉢	I層	口縁部片	①灰黄色、長石顕著 ②普通③茶褐色	薄手。細く鋭い1単位7本以上の卸目がある。全面に鉄釉を薄く施している。		製作地不詳

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
7	不 鉄	明 製		A区	長さ20.8cmが遺存する。中央部付近の断面は略方形を呈する。一端は尖っており、クサビ状を呈する。太いクギか。サビの様子は新しい。④TA¥AG-74	
8	貨 銅	幣 製	略完	トレンチ	「文久永宝」。裏面に波がある。④TA¥AG-75	

報告 番号	観察 通番	出土 地点	瓦の 種別	厚さ	胎土		焼成		成形技法						摘 要						
					素地	扶雑 物	焼き 上り	色調	粘土板剝取 凹面 凸面	一枚 作り	桶寄 木痕	粘土板 合せ目	布の合 せ目	タタ キ目		ロク ロ目	ヘラ ケズリ	布の擦消 凹面 凸面	側部 面取		
9	1554	BG	軒平	1.7	密	微	掃	灰	なし	なし		擦消	なし	なし	平行	撫	なし	なし	なし	なし	三重弧1A類
10	1555	BG	丸	2.0	#	含	#	#	なし	○			なし	#	#	なし	なし	なし	なし	なし	1A類

田端地区B区第4・6・8・9・10号溝出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	刀 鉄	子 製		フク土	長さ12.3cm分が遺存する。茎の一部があり、刃関がある。切先はサビのため不明。④TA¥B 4溝-6	

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
2	陶器 碗	6溝	口縁~底部小片	①灰白色②普通③茶 褐色、透明釉	外面2条の丸彫り沈線巡る。鉄釉を部分的に重ね掛け。④TA¥B 6溝-6		瀬戸美濃系 18世紀後半 38
3	陶器 碗	6溝	口縁~底部小片	①灰白色②普通③茶 褐色、透明釉	外面は長石釉と上下掛分。内面長石釉。やや粗い貫入あり。④TA¥B 6溝-8		瀬戸美濃系 18世紀後半 39
4	陶器 碗	6溝	底部小片	①灰白色、やや粗い ②普通③茶褐色	内面は飴釉だが、濃淡が著しい。外底は露胎となっている。④TA¥B 6溝-3		瀬戸美濃系 18世紀 40
5	陶器 碗	6溝	口縁部小片	①灰色②普通③透明 釉、染付	陶胎染付。呉須は薄く、沈んだ藍色を呈している。細かな貫入。④TA¥B 6溝-5		唐津系 18世紀 41

遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴 ④整理番号	備考
6	陶器碗	6溝	体部～底部小片	①灰色②普通③茶褐色、透明釉	内面長石釉。外面は全面に鉄釉を施釉しているが、上下掛分と思われる。体部に若干歪みがある。④TAYB6溝-4	瀬戸美濃系 18世紀後半 42
7	磁器碗	6溝	口縁部小片	①白色②普通③透明釉、染付	精製呉須の染付で、淡い青色に発色している。④TAYB6溝-7	伊万里系 明治以降
8	軟質陶器焙烙	6溝	口縁部～底部小片 口 (34.2) 高 5.5 底 (30.6)	①砂粒・石粒を含む ②酸化硬質③外面黒色内面灰色	口縁部は平坦で内傾し、外方へ若干つき出ている。耳は側面が強く磨耗している。外面にススが付着している。④TAYB6溝-2	在地製か 江戸時代
9	軟質陶器焙烙	6溝 P-11	口縁部～底部小片 口 (38.0) 底 (35.0)	①砂粒・石粒を含む ②酸化硬質③黒色底部外面灰褐色	口縁端部は内傾気味で丸い。底部は外側へつき出ている。外面上半にススが付着している。④TAYB6溝-1	在地製か
10	陶器碗	8溝		①灰黄色②普通③白色、鉄絵	鉄絵の上に、志野釉を全面に施釉している。やや細かな貫入が見られる。④TAYB8溝-2	瀬戸美濃系 16世紀～ 17世紀前半
11	陶器搦鉢	8溝 P-1		①灰黄色、やや粗い ②普通③茶褐色	卸目は13本以上。内面は磨滅。釉は鉄釉で、器面には光沢。④TAYB8溝-1	瀬戸美濃系 江戸時代
12	陶器碗	9溝 P-5	底部のみ 底 4.7	①淡灰黄色②普通 ③黒褐色	高台は削出。天目釉(鉄釉)を施す。釉の表面に細かな擦痕が多く、光沢を失っている。④TAYB9溝-2	瀬戸美濃系 18世紀 43
13	軟質陶器焙烙	9溝	口縁部～底部	①砂粒子・小石含む ②還元③うす茶色	口縁部はやや内湾気味で、上端は平坦で内傾している。底部は外側へ突出している。2次的被熱の影響で、器面はやや脆い。外面に若干ススが付着している。④TAYB9溝-1	在地製か
14	軟質陶器焙烙	10溝	口縁部～底部小片 口 (33.8) 底 (29.4)	①砂粒子・小石含む ②還元③暗灰黄色	口縁部は外側へ突出し、上面はわずかに窪んでいる。破損後にも2次的被熱を受けている。④TAYB10溝-1	在地製か

田端地区B区第5号溝出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴 ④整理番号	備考
1	陶器皿	P-10	口縁～底部	①灰白色②普通③淡黄褐色の長石釉で乳濁	高台貼付。口縁部外面に稜あり。見込縁辺は重焼時の高台部分の釉が剥れる。高台周辺を除き灰釉を施し貫入が若干入る。④TAYB5溝-22	瀬戸美濃系 17世紀 17
2	陶器皿	P-79	底部	①灰白色②普通③乳濁した緑色	内底は蛇目軸ハギでやや強く削り込んでいる。青緑釉を施すが残存範囲では外面露胎。④TAYB5溝-41	唐津系 18世紀 18

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴 ④整理番号	備 考
3	陶器碗	P-25	口縁～底部片	①淡灰色②普通③淡灰緑色	外面に2条の沈線が巡っている。灰釉が全面に施されており、やや粗い貫入が見られる。歪みあり。④TAYB5溝-13	瀬戸美濃系 18世紀 19
4	陶器碗	P-25	口縁～体部	①灰白色②普通③灰白色、茶褐色	外面に2条の沈線が巡る。鉄釉を斜に掛けた後、灰釉を全面に施している。5の碗と胎土・釉調ともに類似する。④TAYB5溝-21	瀬戸美濃系 18世紀後半～ 19世紀前半 20
5	陶器碗	P-17	底部	①灰白色②普通③灰白色、茶褐色	削り高台の造りは雑。内面1ヶ所に餡釉を落とした後、高台周辺を除き灰釉を施す。やや粗い貫入が見られる。④TAYB5溝-23	瀬戸美濃系 18世紀 21
6	陶器碗	P-27	口縁～体部	①灰白色②普通③黒褐色・乳白色	明瞭ではないが、体部は白土掛の上に餡釉を施す。口縁部にはうのふ釉状の乳白色釉を施している。④TAYB5溝-26	瀬戸美濃系 18世紀 22
7	陶器碗	P-22	口縁～底部 ^{1/3}	①灰黄色②普通③枯草色	外面底部周辺は露胎。餡釉の漬け掛けで、やや細かな貫入が多い。小さなブクを多数生じている。④TAYB5溝-17	瀬戸美濃系 18世紀 23
8	陶器碗	P-7	口縁～底部	①灰白色②普通③灰白色・茶褐色	体部上方から底部は餡釉、口唇部から上面は灰釉の上下掛分。畳付き部は露胎。④TAYB5溝-27	瀬戸美濃系 18世紀後半 24
9	陶器碗	P-68	底部片	①淡橙色②普通③茶褐色	内面に焼成時のヒビがあり、そこから破損している。餡釉の漬掛で高台周辺は露胎である。④TAYB5溝-37	瀬戸美濃系 18世紀 25
10	陶器碗	P-70		①灰黄色②普通③茶褐色	底部露胎。餡釉を漬掛している。④TAYB5溝-19	瀬戸美濃系 18世紀 26
11	陶器碗	P-26	底部	①灰白色②普通③茶褐色	高台部肉厚。餡釉の漬掛で高台周辺は露胎。④TAYB5溝-18	瀬戸美濃系 18世紀後半～ 19世紀前半 27
12	陶器碗	P-18	口縁～底部 ^{1/3}	①灰色②普通③透明釉、染付	釉は長石釉で、胎土に鉄分が多く若干赤色味を帯びている。細かな貫入が多い。呉須はやや沈んだ藍色に発色している。④TAYB5溝-15	唐津系 18世紀 28
13	磁器碗	P-48	体部～底部	①灰色②普通③透明釉、染付	見込内外に僅に砂粒が付着している。器面には細かな気泡が見られる。呉須は淡い藍色に発色している。④TAYB5溝-31	伊万里系 18世紀後半 29
14	陶器碗	P-62	体部～底部片	①灰色②普通③透明釉、染付	底部は薄い。畳付き部分は露胎で褐色になっている。釉は長石釉で若干黄色味を帯びている。呉須は淡い藍色に発色している。④TAYB5溝-14	唐津系 18世紀 30
15	磁器碗	P-71	底部	①灰白色、やや粗②普通③透明釉、染付	畳付に若干砂粒付着している。白磁釉はやや黄ばんだ発色。外面に網目文を配す。呉須はくすんだ藍色に発色している。④TAYB5溝-16	伊万里系 17世紀後半～ 18世紀前半 31

遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
16	磁器碗	P-56	口縁～底部片	①灰色②普通③透明釉、染付	白土掛の上に精製具須による染付を行なっているが、釉流れが著しい。釉は長石釉で粗い貫入が見られる。④TAYB5溝-29		瀬戸美濃系 18世紀後半 32
17	磁器徳利	P-77	底部片	①淡灰白色②普通③透明釉、染付	内面露胎。外面は全面白磁釉を施した後、畳付部分を釉ハギ。畳付部内側に若干砂粒付着。具須は沈んだ薄い藍色に発色。④TAYB5溝-33		伊万里系 17世紀 33
18	陶器香炉	P-58	底部片	①灰黄色②普通③黄緑色、一部白濁	底部全面ヘラ削り後、3足を貼付けている。灰釉が見込にのみ見られ、目痕は3ヶ所と思われる。④TAYB5溝-46		瀬戸美濃系 18世紀 34
19	陶器花生または徳利	フク土		①灰黄色②普通③灰白色	胎土目状の付着物あり。内面コテ痕が顕著である。④TAYB5溝-47		産地不詳 18世紀～19世紀
20	陶器徳利	フク土		①灰色、緻密②焼締	内外面とも幅約2mmのごく弱いカキ目状の擦痕が巡っている。外面に火襷あり、外面にススが付着している。④TAYB5溝-48		常滑焼 18世紀後半 35
21	陶器鉢	P-46	口縁部小片	①淡灰黄色、やや粗②普通③淡黄緑色	器種・時期は不詳。内湾気味である。残存部分全面に灰釉の漬け掛け。④TAYB5溝-38		瀬戸美濃系 江戸時代
22	陶器徳利?	P-69	底部片	①灰黄色、粗い②普通③黒褐色	高台周辺露胎。他は白土掛後、鉄釉を施している。胎土には夾雑物多い。④TAYB5溝-25		産地不詳、18世紀～19世紀
23	陶器鉢?	P-34	底部	①淡い臙脂色②普通③透明釉	内面は白土掛、施釉後、見込縁辺ハギ。更に露胎部分に白土掛する。外面は全面露胎。④TAYB5溝-44		唐津系 18世紀 36
24	陶器鉢	P-23	底部小片	①臙脂色②普通③暗褐色、内面透明釉	外面は鉄釉を施し、刷毛の痕が濃淡となっていて残っている。内面は白土象嵌の上に長石釉を施釉している。胎土目が残っている。④TAYB5溝-4		唐津系 17世紀後半～ 18世紀
25	陶器播鉢	P-81	体部～底部小片	①灰黄色、やや粗い②普通③茶褐色	卸目は14本1単位。外面にはヘラ削り痕が残っている。釉は胎釉でムラがある。見込縁辺と底部外縁部が磨耗している。④TAYB5溝-1		美濃焼 17世紀～18世紀
26	陶器鉢	P-49	口縁部～体部小片	①灰黄色②普通③茶褐色	卸目は14本以上。釉は鉄釉で濃淡のムラが著しい。④TAYB5溝-7		瀬戸美濃系 18世紀?
27	陶器播鉢	P-17	口縁部片	①灰黄色②普通③暗褐色	口縁部断面に折返し痕が観察できる。内面の稜はやや強い。釉は鉄釉でややテリが強い。口縁部外面端部が磨耗している。④TAYB5溝-6		瀬戸美濃系 18世紀中葉 37
28	軟質陶器焙烙		口縁部～底部小片	①砂粒を多く含む②酸化③外面黒褐色、内面灰色	口縁部上端に凹縁が巡っている。口縁部外面には指頭状の圧痕が規則的に並んでいる。2次的被熱により底部は脆弱化している。④TAYB5溝-8		在地製

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
29	石	白		フク土	上白。縁が割れている。裏面の目は磨り減っている。側面に柄を差し込む穴があいている。中心の軸受け穴は半欠している。④TAYB5溝-49	

田端地区B区第11号溝出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
1	陶器 皿	P-507	口 (11.9) 底 (7.3)	①灰黄色、モグサ土 ②普通③淡灰緑色	灰釉を全面に施し、細かな貫入が見られる。畳付きが若干磨耗している。④TAYB11溝-15		瀬戸美濃系 17世紀後半～ 18世紀前半 44
2	陶器 皿	ミソ下フク土	底 6.4	①淡い橙色②普通 ③灰緑色	削高台は畳付き部分がやや鋭く、底部中央が突出気味である。灰釉を施し高台周辺は露胎。見込周辺に重ね焼き痕が顕著。④TAYB11溝-19		瀬戸美濃系 18世紀 45
3	陶器 碗	P-10-1 その他-1	底 (5.0)	①灰白色、白色鉱物 ②普通③淡灰緑色	歪みが強く、畳付きも平坦でない。灰釉を施し高台周辺は露胎。④TAYB11溝-12		瀬戸美濃系 18世紀 46
4	陶器 碗	P-2,3片 溝フク土1片 P-1 1片 その他 2片	口 10.5 高 7.0 底 4.7	①灰黄色②普通③茶褐色	薄い胎釉の漬掛で高台周辺は露胎。口縁部上半にうのふ釉を施すが、その部分の釉剥れが目立つ。薄手で軽量。④TAYB11溝-7		瀬戸美濃系 18世紀 47
5	陶器 碗	溝下フク土3片 P-2 1片 P-16 1片 その他 2片	口縁～底部% 口 (11.8) 高 7.1 底 4.2	①灰白色②普通③茶褐色	胎釉の漬掛けて、口縁部は薄く緑色味を帯び、底部周辺では厚く黒色味のある釉調。高台周辺は露胎。口縁部内端若干剥落。④TAYB11溝-8		瀬戸美濃系 18世紀 48
6	陶器 碗	P-29 2片 P-30 1片 その他 1片	口縁～底部 口 (10.6) 高 6.3 底 4.8	①灰黄色②普通③黄銅色	全面に鉄釉を施し、畳付き部を釉ハギしている。釉は分離し、凹部を中心に白色味が強い。④TAYB11溝-23		京焼系 18世紀 49
7	陶器 碗	P-513	体部～底部 底 4.8	①藍脂色②普通③白土、透明釉	外面は波状の刷毛目・内面は不整な圏線状の白土象嵌上に全面に施釉。道具に融着した高台の剝離が目立つ。④TAYB11溝-22		唐津系 18世紀 50
8	陶器 碗	P-25	体部～底部小片 底 (4.8)	①暗い藍脂色②普通 ③濁白色、染付	外面下半に圏線を施す以外、染付は残存していない。長石釉を施し畳付き部を釉ハギする。やや大粒の気泡と細貫入が多い。④TAYB11溝-10		唐津系
9	陶器 碗	P-33	体部～底部片 底 5.5	①暗い藍脂色②普通 ③濁白色、染付	染付は呉須の発色が悪く不鮮明。長石釉を施し畳付きを釉ハギしている。細かな貫入と気泡がある。④TAYB11溝-24		唐津系 18世紀 51
10	磁器 碗	フク土 1片	口 (9.6)	①白色②普通③透明釉、染付	胎土やや灰色味を帯びるため、釉調も濁っている。染付けは繊細な筆使いである。呉須はやや沈んだ藍色に発色。④TAYB11溝-35		伊万里系 18世紀 52
11	陶器 小碗	P-14	口縁部～底部小片 口 (7.2)	①灰黄色、モグサ土 ②普通③淡黄緑色	灰釉の漬掛で細かな貫入が入る。高台付近は露胎となる。④TAYB11溝-16		瀬戸美濃系 18世紀 53

遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴 ④整理番号	備考
12	磁器 徳利	ミゾ下フ ク土1片	底部小片 底 (4.4)	①淡灰白色②わずかに軟調③透明釉	左回転ロクロ成形で釉は白磁釉の生掛。疊付き釉ハギで、砂粒が若干付着している。細かく規則的な貫入あり。内面露胎。 ④TAYB11溝-39	伊万里または明 17世紀前半 54
13	陶器 皿	ミゾ下フ ク土1片	底 4.0	①灰白色②普通③乳緑色	見込は蛇目釉ハギで強く削り込んでいる。青緑釉を施すが残存範囲では外面露胎。削り高台は中心がズレて幅が一定でない。 ④TAYB11溝-17	唐津系 18世紀 55
14	磁器 耳壺	ミゾ下フ ク土1片	肩部小片	①白色②普通③黒褐色	磁胎に褐釉を施した舶載品である。左回転ロクロで成形。耳は長方形に近い断面形。内面にも釉が流れ込む。貫入、気泡なし。 ④TAYB11溝-18	中国南部 15世紀～16世紀 56
15	磁器 徳利	ミゾ下フ ク土1片	底部1片	①白色②普通③透明釉、染付	疊付き部は平坦。露胎で若干砂粒付着。内面は部分的に白磁釉が流れ込んでいる。具須は淡い藍色に発色している。 ④TAYB11溝-37	伊万里系 17世紀後半～ 18世紀
16	陶器 香炉	P-514	口縁部～体部 口 (11.5)	①灰黄色②普通③淡い乳黄色	灰釉の漬掛で細かな貫入がある。内面口縁部以下は露胎である。 ④TAYB11溝-14	京焼系 18世紀 57
17	陶器 鉢?	ミゾ下フ ク土1片 P-512 1片	底 12.0	①灰黄色②普通③茶褐色	3足のうち1足のみ残存。外面体部下端以上に飴釉を漬掛。細かな貫入が見られる。 ④TAYB11溝-30	瀬戸美濃系 18世紀 58
18	磁器 油壺	フク土 2片	底 4.4	①白色②普通③透明釉、染付	初期伊万里。内面体部にコテ痕がある。生掛で疊付きは露胎、砂粒が若干付着している。具須は淡い藍色に発色している。 ④TAYB11溝-41	伊万里系 17世紀前半 59
19	陶器 袋物	P-11 1片	底 6.6	①灰黄色、モグサ土②普通③茶褐色、一部黒色	外底は糸切痕が無調整で残っている。外面体部下端以下が露胎で他は柿釉を施す。漬掛の可能性が高い。見込は黒色を呈す。 ④TAYB11溝-26	瀬戸美濃系 18世紀～19世紀 前半
20	陶器 徳利	ミゾ下フ ク土3片 その他1片	体部	①灰白色、緻密②普通③淡黄緑色	体部内外面に細かなロクロ痕が残り、肩部は凹凸少ない。外面に透明度の高い灰釉を施す。細かな美しい貫入がある。 ④TAYB11溝-9	瀬戸美濃系 19世紀前半 60
21	陶器 壺	P-6	口縁部小片 口 12.6	①灰黄色②普通③茶褐色	内側への折り返し口縁。外面と口縁部内側に飴釉を施すが器表面はカセている。口縁上端・内面最小径部分が磨滅している。 ④TAYB11溝-27	瀬戸美濃系 18世紀 61
22	陶器 香炉	フク土 1片	頸部片	①灰黄色②普通③茶褐色	袴腰香炉の体部破片。外面に鉄釉を薄く施す。細かな貫入が見られる。 ④TAYB11溝-28	瀬戸美濃系 18世紀 62
23	陶器 鉢	ミゾ下フ ク土2片	口縁小片	①臙脂色②普通③白土、透明釉	外面波状・内面圏線の刷毛目白土象嵌の上に透明釉を刷毛塗り。口縁上端は露胎となっている。 ④TAYB11溝-25	唐津系 18世紀 63

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
24	陶器鉢	P-31	底 (12.2)	①燕脂色②普通③白土、乳白色	三島手の大鉢。見込縁辺に胎土目がある。白土象嵌上に長石釉を施すが器表面はカセている。外面は畳付き以外は淡褐釉施す。	④TAYB11溝-20	唐津系 17世紀～ 18世紀初頭
25	陶器鉢	ミゾ下フク土1片 P-20 1片	底 (10.3)	①灰黄色②普通③黒褐色	貼付高台と思われる。内面に鉄釉を施している。畳付き部の磨耗が進んでいる。	④TAYB11溝-21	瀬戸美濃系 17世紀～18世紀
26	陶器播鉢	ミゾ下フク土6片	口縁部小片	①灰黄色②普通③茶褐色	卸目の残存しない口縁部破片。口縁部は折り返している。柿釉を全面に施し、やや光沢がある。	④TAYB11溝-32	瀬戸美濃系 18世紀前半～中頃 64
27	陶器播鉢	P-12 1片	底部 底 (13.2)	①灰黄色②普通③茶褐色	外底部に糸切痕が残る。卸目は体部で15本1単位だが、見込では幅広く深い別の工具を使用。磨減少ない。鉄釉を全面に施釉。	④TAYB11溝-34	瀬戸美濃系 18世紀～19世紀
28	軟質陶器焙烙	ミゾ下フク土4片 フク土2片	口縁部～底部片 口高 (33.7) 5.6 底 (31.7)	①普通②やや硬調③灰褐色	口縁部は直立気味で、小さな波状の歪みがある。器厚は薄めでシャープな作りである。2次被熱の影響が強い。	④TAYB11溝-4	在地製

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
29	石白	小片		フク土	上白。裏面の目は幅がやや広い。全体の1/10程度が遺存する。石質砂岩(牛伏砂岩)。	④TAYB11溝-42。

田端地区B区第16号溝出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	高台付椀灰釉陶器	底部 1/3	…… 現存高2.5 高台 (7.6)	フク土	体部以上を欠く。高台「ハ」字状に開く。内底は器表が滑らかで、硯に転用されたもの。割れ口にも墨がついている。	①精良②還元、硬質③灰色 ④TAYB16溝-70
2	高台付椀土師質	底部 1/3	…… 現存高2.5 高台 (8.6)	フク土	体部以上を欠く。高台は薄く、「ハ」字状に開く。一端は歪みをもつ。外底は右回転糸切り後、高台貼付け。	①砂粒を含む②酸化③ぶい ④TAYB16溝-71
3	高台付耳皿須恵器	底部	…… 現存高1.9 高台 (5.6)	フク土	体部中位以上を欠く。内底中央がくぼみ、体部の折れが一部遺存する。外底は右回転糸切り後、高台貼付け。	①砂粒を含む②還元③灰色 ④TAYB16溝-69
4	スリ鉢須恵器	小片	…… 底部現存高 7.0 ……	フク土	体部下半の破片。底部の台を欠き、体部中位以上もない。内外面ナデを施す。内底に焼成時の灰を被っている。	①細砂粒を含む②還元、硬質③灰色④TAYB16溝-72
5	羽釜土師質	口縁部 1/6	口径(25.0) 現存高8.1 ……	フク土	体部は直立気味に立ち上がる。鈔の断面は三角形を呈する。内外面ロクロナデを施す。甎の可能性はある。	①砂粒を含む②酸化③ぶい ④TAYB16溝-7

遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
6	羽釜 土師質	口縁部 小片	口径(15.1) 現存高5.0 ……	フク土	体部中位以下を欠く。口縁部は内傾して立ち上がり、口唇部に平坦面をもつ。鋸の下面に指頭大のくぼみがある。	①砂粒を含む②酸化③橙色 ④TAYB16溝-6
7	羽釜 土師質	口縁部 ～体部	…… 現存高 17.6 ……	フク土	体部中位以下を欠く。径復原できない。口縁部短く、直立気味である。内外面ロクロナデを施す。	①砂粒を多く含む②酸化 ③にぶい橙色④TAYB16 溝-1
8	砥石			フク土	長さ6.6cm、幅4.2cm、厚さ2.7cmの直方体を呈する。両端は折れているが割れ口は古い。4面を使用している。④TAYB16溝-82	
9	砥石			フク土	長さ5.8cm、幅4.3cm、厚さ4.5cmが遺存する。2面が遺存している。両端は折れ。④TAYB16溝-83	

() は接統瓦部を示す

報告 番号	観察 通番	出土 地点	瓦の 種別	厚さ	胎土		焼成		成形技法						整形技法				摘 要							
					素地	挟雑 物	焼き 上り	色調	粘土板剥取		一枚 作り	桶寄 木痕	粘土板 合せ目	布の合 せ目	タタ キ目	ロク ロ目	ヘテ ケスリ	布の擦消		側部 面取						
									凹面	凸面								凹面			凸面					
10	828	B16溝	軒平	/																	小片未分					
11	144	B16溝	軒丸	/	密	微	普	灰							平行							1A類				
12	347	B16溝	軒丸	/	密	微	軟	淡黄灰														未分1A類か				
13	830	B16溝	軒丸	/	密	微	硬	灰														未分1A類か				
14	236	B16溝	軒丸	(1.2)	密	微	締	灰	(なし)	(なし)		(なし)	(なし)	(なし)	(なし)	(なし)	(なし)	(なし)		I	接合法明瞭 未分1A類か					
15	41	B16溝	軒丸	/	密	微	軟	淡黄灰							平行							五当部・表・裏割 落。側部存。1A 類				
16	620	B16溝	軒丸	(2.0)	密	微	硬	灰	なし	なし		なし	なし	なし	平行	○	なし	なし				瓦当なし。1A類				
17	265	B16溝	軒丸	(1.2)	密	微	軟	淡灰	(○)	(なし)		(なし)	(なし)	(なし)	(平行)	(なし)	(なし)	(なし)				技法痕明瞭1A類				
18	752	B16溝	軒丸	(1.5)	密	微	軟	淡赤褐	(なし)	(なし)		(なし)	(なし)	(なし)	平行	なし	なし	なし				瓦当面欠。1A類				
19	153	B16溝	軒丸	1.2	密	微	軟	淡黄灰	(なし)	(なし)		(なし)	なし	(なし)	平行	(なし)	(なし)	(なし)		(1)		接合法明瞭。未 分1A類か				
20	343	B16溝	軒平	(1.7)	密	微	軟	灰	(なし)	(/)		(○)	(なし)	(なし)	素文	なし	なし	なし				1	曲線類三重弧文。 2類			
21	57-1	B16溝	軒平	(2.1)	密	微	締	灰	(なし)	なし		(○)	(なし)	(なし)	不詳	なし	なし	なし					曲線類三重弧文。 未分1A類か			
22	107	B16溝	軒平	(1.6)	密	微	普	灰	○	なし		○	(なし)	(なし)	平行太	なし	なし	なし					頸厚3.5cm。曲線類 1B類			
23	829	B16溝	軒平	2.5	密	含	締	灰	なし	なし		(○)	(なし)	(なし)	平行太	なし	なし	(なし)					1B類			
24	7-8	B16溝	軒平	(1.8)	密	微	締	灰	(○)	(○)		(なし)	(なし)	(平行)	(なし)	○	○						1	瓦当面地幅3.7 cm。曲線類三重弧 文1A類		
25	7-10	B16溝	軒平	2.3	密	微	軟	灰	なし	なし		○	なし	なし	平行太	擦痕	なし	部分						瓦当面地幅3.4 cm。曲線類三重弧 文1B類		
26	297	B16溝	軒平	(2.0)	密	微	硬	灰	(○)	なし		(○)	(なし)	(なし)	(平行)	(なし)	(なし)	(なし)						2	接合法明瞭 未分1A類か	
27	617	B16溝	軒平	(1.8)	密	微	締	灰	(○)	なし		(○)	なし	(○)	素文	なし	なし	なし							三重弧文。曲線類 2類	
28	510	B表	軒平	2.2	密	含	普	灰	(○)	(○)		(○)	なし	なし	(平行)	なし	なし	なし							三重弧文。1A類	
29	361	B16溝	軒平	(1.6)	密	微	締	灰	(○)	(なし)		(○)	なし	(なし)	(平行)	なし	なし	なし							1	重弧文曲線類1A 類
30	685	B16溝	丸	1.3	密	微	普	灰	○	なし		なし	なし	なし	平行	なし	なし	なし								1A類

報告 番号	観察 通番	出土 地点	瓦の 種別	厚さ	胎 土		焼 成		成 形 技 法						整 形 技 法				摘 要				
					素地	扶雑 物	焼き 上り	色調	粘土板剥取		一枚 作り	桶寄 木痕	粘土板 合せ目	布の合 合せ目	タタ キ目	ログ目	ヘラ ケズリ	布の擦消		側部 面取			
									凹面	凸面								凹面			凸面		
31	844	B16溝	軒平	1	密	微	硬	灰	(なし)	なし		(○)	(なし)	(なし)	平行太	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1	曲線類 1 B類
32	798	B16溝	軒平	2.4	密	微	軟	灰	(○)	(なし)		(○)	なし	なし	(平行)	○	(なし)	(なし)					瓦当片面 1 A類
33	789	B16溝	軒平	2.5	密	微	軟	灰	なし	なし		○	なし	なし	平行	なし	なし	なし				1	瓦当面欠 1 A類
34	360	B16溝	平	2.5	密	微	締	灰	○	なし		○	○	なし	平行	なし	なし	なし				2	粘土板接合明瞭 1 A類
35	231	B16溝	平	2.2	密	微	硬	灰	○	なし		○	○	なし	平行	なし	なし	なし				2	粘土板接合面に布目およぶ 1 A類
36	245	B16溝	丸	1.4	密	微	締	灰	○	なし		なし	なし	なし	素文	なし	なし	なし	なし				素文丸瓦好例 2類
37	1000	B区南表探	丸	1.0	密	微	軟	灰	なし	なし		なし	なし	なし	素文	なし	なし	なし	なし				3類
38	590	B区土坑群表探	丸瓦	1.0	粗	微	軟	淡赤褐	なし	なし		なし	なし	なし	素文	なし	なし	なし	なし				3類
39	7-7	B16溝	丸	1.9	密	微	締	灰	○	なし		なし	なし	○	平行	なし	なし	なし	なし			3	布の合せ目良好に残る。1 A類
40	665	B16溝	丸	1.7	密	微	硬	灰	○	なし		なし	なし	○	平行	なし	なし	なし	なし				1 A類
41	105	B16溝	平	2.0	密	微	硬	灰	なし	なし		○	なし	○	平行	なし	○	○					1 A類
42	43	B16溝	平	1.4	密	微	硬	灰	○	なし		○	なし	なし	素文	なし	なし	なし					素文の好例。1 A類
43	8	B16溝	平	2.1	密	微	締	灰	○	なし		○	○	なし	平行細	なし	なし	なし				2	粘土板の合せ目良好に残る。1 A類
44	24	B16溝	平	1.7	密	微	締	灰	○	なし		○	なし	○	平行	なし	なし	なし					ニカ所に布かがりあり。1 A類
45	996	B16溝	平	2.0	密	微	締	灰	○	なし		○	○	なし	平行	なし	なし	○				2	1 A類
46	425	B区B16溝	平	1.9	密	微	締	灰	○	なし		○	○	○	平行	なし	なし	なし				2	技法好例 1 A類
47	70	B16溝	平	1.9	密	微	硬	灰	○	なし		○	○	なし	平行	なし	なし	なし					粘土板接合が明瞭 16溝-17。1 A類
48	7-5	B16溝	平	2.5	密	微	締	灰	紐作	紐作		○	紐作	なし	平行	なし	なし	なし				2	紐作り。1 C類
49	795	B16溝	平	1.7	密	微	軟	淡赤褐	○	なし		○	なし	なし	平行太	なし	なし	なし					平行太好例。1 B類
50	805	B16溝	平	1.4	密	微	締	灰	○	なし		○	なし	なし	平行	なし	なし	なし				2	1 A類
51	839	B16溝	平	1.9	密	微	締	黒灰	○	なし		○	なし	なし	素文	撫	なし	なし				1	素文好例 2類
52	674	B16溝	平	1.5	密	微	硬	灰	○	なし		○	なし	○	平行	なし	なし	なし				1	1 A類
53	325	B16溝	平	1.8	密	微	硬	灰	○	なし		○	なし	なし	素文	撫	なし	なし					素文平瓦好例。2類
54	436	B表	平	1.9	密	微	硬	黒灰	○	なし		○	○	○	平行	なし	なし	なし					粘土板直接合。1 A類
55	612	B16溝	平	1.7	密	微	軟	灰	なし	なし		なし	○	なし	素文	なし	なし	○					布目が粘土板中に入っていく。2類
56	103	B16溝	平	1.3	密	微	軟	淡黄灰	なし	なし		○	なし	なし	平行太	なし	なし	なし					16溝-19 1 B類
57	804	B16溝	平	2.2	密	微	軟	灰	○	なし		○	なし	なし	平行太	なし	なし	なし				2	表に蔓なへこみあり。1 B類
58	191	B16溝	平	1.5	密	含	締	淡灰	なし	なし		なし	なし	なし	平行太	擦痕	なし	○					吉井か。1 B類
59	364	B16溝	平	1.8	密	含	締	灰	○	なし		○	なし	なし	平行太	撫	なし	なし					白色鉱物多い。1 B類
60	115	B16溝	平	1.4	粗	含	軟	灰	なし	なし		○	なし	なし	素文	なし	なし	なし				1	1 C類
61	799	B16溝	平		密	微	軟	灰	なし	なし		なし		平行									表面剝落。16溝-60 1 A類
62	536	B区西表探	平	1.7	密	微	普	淡赤褐	平行	なし		なし	なし	なし	平行	なし	なし	なし					表裏に平行印あり 16溝-46 1 A類

遺物観察表

田端地区B区第1・3号墓出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴 ④整理番号	備 考
1	磁器碗	1号墓	口縁小片	①白色②普通③透明釉	口縁端部に口錆を施す。長い貫入が若干見られる。④TAYB1墓-5	伊万里系 明治以降
2	陶器練鉢か	1号墓	口縁小片	①灰色、砂粒多い ②普通③灰黄色	口縁部は外側へ折り返している。釉は灰釉で薄く均一である。④TAYB1墓-6	瀬戸美濃系 明治以降
6	軟質陶器杯	3号墓P ₂	口縁～底部 $\frac{1}{2}$	①淡褐色。夾雑物多い ②普通③無釉	ロクロ成形であるが底部はナデで切離し痕を消している。ヘラ切りの可能性がある。④TAYB3墓-1	在地製
7	磁器碗	3号墓P ₇	口縁～体部小片	①白色②普通③透明釉、染付	呉須はペロ藍で、群青色を呈している。④TAYB3墓-8	伊万里系 明治時代
8	磁器皿	3号墓P ₉	底部小片	①白色②普通③透明釉、染付	見込に蛇目釉刺ぎ、中央に五花弁のコンニャク判を施す。畳付きに砂の付着あり。呉須は薄く沈んだ藍色を呈す。④TAYB3墓-10	伊万里系 18世紀前半 65
9	磁器皿	3号墓P ₈	底部～体部小片	①白色②普通③透明釉、染付	呉須は淡い藍色を呈している。No10と同一個体の可能性がある。④TAYB3墓-9	伊万里系 18世紀 66
10	陶器皿	3号墓P ₁₁	底部小片	①灰黄色②普通③乳白黄色	削出高台。長石釉で底部外面は露胎。見込縁辺に目痕がある。ごく細かな貫入が多く見られる。④TAYB3墓-2	瀬戸美濃系 16世紀 67
11	陶器掛瓶	3号墓P ₅	底部～体部小片	①灰黄色②普通③茶褐色	見込に下面からの刺突穿孔あり。内面は鉄釉の刷毛塗り。外面は釉が厚く、一部緑色味をおびる。畳付は著しく磨耗している。④TAYB3墓-5	瀬戸美濃系 18世紀後半～ 19世紀前半 68
12	陶器片口	3号墓P ₁₀	口縁小片	①灰黄色②普通③淡黄褐色、緑色	大形品となろう。灰釉。断面の刺突穿孔まで釉がかかる。④TAYB3墓-6	瀬戸美濃系 18世紀以降
13	陶器碗	3号墓フク土	体部小片	①茶褐色②普通③白土、茶褐色	内面は白土象嵌。外面下半は露胎となるものと思われる。④TAYB3墓-4	唐津系 17世紀～18世紀

報告番号	観察通番	製作年代	瓦の種別	厚さ	胎土				焼成					成形技法					整形技法				摘要
					素地	挟雑物	焼き上り	色調	粘土板刺取		一枚作り	桶寄木痕	粘土板合せ目	布の合せ目	タタキ目	ロクロ目	ヘラケズリ	布の擦消		側部面取			
									凹面	凸面								凹面	凸面				
3	1408	近世以降	棧瓦	1.8	粗	微	硬	灰	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	隅部、雲母粒含む、黒色燻 TAYB1墓-1		
4	1409	近世以降	棧瓦	2.1	粗	微	硬	灰	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	隅部、雲母粒含む、黒色燻 TAYB1墓-2		
5	1410	近世以降	棧瓦	1.8	粗	微	硬	灰	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	隅部、雲母粒含む、黒色燻 TAYB1墓-3		

田端地区B区第2号墓墳出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴 ④整理番号	備考
1	磁器碗	P ₁	径 7.9 高 4.4 底 3.1	①白色②普通③透明釉、染付	胎土は若干灰色味をおびているため、色調はやや濁った白色となる。呉須の濃淡の差が著しい。④TAYB2墓-3	伊万里系 18世紀後半～ 19世紀前半 69
2	陶器碗	P-2	体部～底部片底 (3.6)	①細砂粒含む、灰黄色②還元やや軟調③灰黄色(透明)	赤・緑・金彩の上絵あるが意匠不明。粗い貫入あり。高台付近は露胎。④TAYB2墓-12	製作地不詳
3	陶器油壺	P ₀	口縁～頸部片口 (2.8)	①淡灰色、砂粒含む②硬調③濃緑褐色	内外面に胎釉(鉄釉)掛。口縁部折り返しの内に釉が厚く乗っている。器面には細かな貫入がある。④TAYB2墓-13	瀬戸美濃系
4	陶器袋物?	P-3	口縁～胴部片口 2.9 孔 1.6	①灰色②硬調③淡緑色	耳の割れた痕あり。孔は蓋受けて蝶番い状。茶器か。外面のみ灰釉を施す。④TAYB2墓-11	製作地不詳 18世紀以降
5	陶器大皿	フク土	底部小片底 (15.0)	①灰黄色、やや粗い②普通③淡緑黄色	施釉(灰釉)は内面のみで、二重貫入である。見込み縁辺を楕円形に釉ハギしている。④TAYB2墓-5	瀬戸美濃系 19世紀 70
6	軟質陶器焙烙	P-6	口縁～底部片口 (34.8) 器 (5.4) 底 (32.3)	①砂粒含む②還元、やや軟調③灰色	口縁部中位の内外面に明瞭な接合痕が残っている。口縁部下端はヘラ削り調整。外面にはススが付着している。④TAYB2墓-9	在地製
7	陶器播鉢	P-8	胴部片	①灰黄色、モグサ土②普通③暗褐色	卸目は1単位10本以上。内外面に鉄釉を施す。器面の光沢が強い。内面はやや磨耗している。④TAYB2墓-10	瀬戸美濃系 江戸時代

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
10	キセル			フク土	吸い口のみ遺存する。長さ7.2cm、径1.1cmである。ラウの一部が遺存している。④TAYB2墓-15	

田端地区B区第4・5・9・10号墓墳出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴 ④整理番号	備考
1	陶器碗	4号墓P ₂	口縁～体部小片口 (10.4)	①灰白色②普通③緑色味をおびた褐色	釉は胎釉で厚さは不均等である。やや粗い貫入が見られる。④TAYB4墓-2	瀬戸美濃系 18世紀?
2	磁器碗	5号墓	口縁～体部小片	①灰白色②普通③透明釉、染付	植物文の染付で、呉須は濃い藍色を呈している。④TAYB5墓-2	伊万里系 18世紀後半 71
3	磁器碗	9号墓P ₁	% 口 (7.2) 高 3.8 底 (2.6)	①白色、やや粗い②普通③透明釉、染付	釉の厚さにムラがある。高台内端部に砂粒が融着している。呉須はペロ藍で濃い藍色を呈している。④TAYB9墓-1	伊万里系 明治時代
5	磁器碗	10号墓フク土	口縁～体部小片口 (9.7)	①灰白色②普通③透明釉、染付	外面にコンニャク判で施文するが、不鮮明で意匠は不明。呉須は濁った藍色を呈している。④TAYB10墓-1	伊万里系 18世紀 72

遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
4	不明石				長さ5.9cmの断面三角形に磨った石。用途不明だが、加工されている。石質軽石（二ツ岳）④TAYB9墓-2	

田端地区B区第1・5・18・20・23・38号土坑出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	杯土師質	略完	口径 9.7 器高 2.3 底径 5.4	フク土	口縁部はやや外反する。外底は右回転糸切り後、無調整。内外面クロロナデを施す。	①砂粒を含む②酸化③灰白色④TAYB1土-1
2	鎌鉄製	略完		フク土	先端部は尖り、柄部は巻き込んで、孔がある。身の厚さは0.4cmほど。全体の角度は鋭角をなす。④TAYB5土-5	
4	砥石			フク土	長さ5.9cm、幅2.4cm、厚さ1.9cmの略直方体を呈する。3面を使用している。キメの細かい石。石質点紋頁岩。④TAYB5土-3	
5	砥石			フク土	長さ3.9cm、幅2.8cm、厚さ0.9cmが遺存する。1面のみ遺存している剥片である。使用面は非常に滑らか。石質泥岩質準片岩④TAYB5土-4	
6	鉢？石製	口縁部破片	…… 現存高24.8	フク土	ツキ臼の可能性がある。全体に厚手で、口縁部付近で8cmほどである。底部を欠いているため、全体の形状は不明。石質W溶結凝灰岩(茶白山wt)④TAYB18土-1	

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
3	軟質陶器香炉	5号土坑 フク土	口縁部	①淡灰褐色②普通③無釉、燻	底面に切離痕なし。半円形の3足あり。燻は顕著。④TAYB5土-1		在地製 18世紀 73
7	磁器そば猪口	20号土坑 フク		①白色②普通③透明釉、染付	外面に幹を省略した松林を描く。呉須の発色は悪く、黒味を帯びる部分が多い。④TAYB20土-2		伊万里系 18世紀 74
8	磁器皿	フク土		①白色②普通③透明釉、染付	高台は細く、端部が尖る。施釉は全面で、呉須は淡い藍色。見込は菊文。④TAYB20土-3		伊万里系 18世紀前半 75
9	陶器小碗	38号土坑	底部片	①淡黄灰色②普通③褐色、淡緑色	内面は長石釉・外面の高台端部を除き鉄釉が施される。④TAYB38土-2		美濃焼 18世紀後半～ 19世紀前半 76
10	陶器皿	23号土坑	口 12.6	①淡黄白色②普通③灰釉	口縁部上半に施釉する。無釉部分は削り痕が見られる。④TAYB23土-3		美濃焼 17世紀 77
11	軟質陶器浅鍋	38号土坑	口縁部片	①淡灰色②普通③無釉、燻	口縁部の内・外面横撫。口縁下約1.7cmに焼入前の穿孔あり。④TAYB38土-3		在地製 17世紀～19世紀

田端地区B区第41・49・58号土坑出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
1	陶器 菊皿	41号土坑	口縁小片	①灰黄色②普通③黄緑色	灰釉を施すが濃淡の差がある。細かな貫入がある。④TA¥B41土-1		瀬戸美濃系 17世紀 78
2	陶器 碗	49号土坑	底部片	①灰白色、やや緻密 ②普通③灰白色	外面に鉄絵あり。透明度の高い長石釉を漬掛し、高台付近は露胎となっている。細かな気泡がある。④TA¥B49土-6		瀬戸美濃系 19世紀前半 79
3	陶器 鉢	49号土坑	小片	①淡い臙脂色②普通 ③白土、透明釉	三島手大鉢の口縁部中位付近の破片。唐草風の植物文の白土象嵌に長石釉を施す。④TA¥B49土-3		唐津系 17世紀～ 18世紀前半
4	陶器 碗	58号土坑	口縁～底部片	①灰黄色②普通③茶褐色、淡黄緑色	やや小形化している。内面灰釉、外面灰釉と鉄釉の上下掛分。畳付きは釉ハギで露胎である。灰釉には細かな貫入がある。④TA¥B58土-5		瀬戸美濃系 18世紀後半～ 19世紀前半 80
5	陶器 皿	58号土坑	底部～体部片	①灰黄色②普通	残存部分はすべて露胎で釉は不明。石皿と呼ばれる器形と思われる。底部は厚手でドッシリとしている。④TA¥B58土-4		地方窯 18世紀～19世紀
6	軟質陶器 焙烙	58号土坑	略完	小石等混入、やや粗 ②普通	口縁部内傾し端部は丸い。耳は小さい。内底は全体に磨耗している。底部脆弱化。底部縁辺から口縁にかけてスス付着。④TA¥B58土-1		在地製 江戸時代
7	軟質陶器 焙烙	58号土坑	口縁～底部片	①灰褐色②普通	耳は口縁上端まで達していない。外面はきわめて強いナゲのため器面に凹凸。底部はわずかに丸底傾向となる。口縁外面スス。④TA¥B58土-3		在地製 17世紀ごろ 81

田端地区B区第42・48号土坑出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
1	磁器 碗	42号土坑 フク土	口縁～体部 1/5	①白色②普通③透明 釉、染付	竹と筍の意匠。呉須はやや濃い藍色に発色している。④TA¥B42土-1		伊万里系 18世紀後半 82
2	磁器 碗	42号土坑 フク土	口縁部小片	①白色②普通③透明 釉、染付	口縁部は微に内傾している。外面は窓絵で呉須はやや薄い藍色に発色している。④TA¥B42土-5		伊万里系 18世紀 83
3	陶器 碗	42号土坑 フク土	底部	①灰白色②普通③透 明釉	釉は長石釉で外面体部下端以下は露胎となっている。やや粗い貫入が多く見られる。④TA¥B42土-6		瀬戸美濃系
4	磁器 碗	42号土坑 フク土	体部小片	①白色②普通③透明 釉、染付	外面にコンニャク判で菊花が施文してある。呉須は明るい藍色に発色している。④TA¥B42土-4		伊万里系 18世紀 84
5	陶器 大皿	42号土坑 フク土		①茶褐色、砂粒多い ②普通③黒褐色	見込縁辺に2条の沈線が巡っている。見込に目跡が2個見られる。釉は黒褐釉で、高台内側は露胎である。④TA¥B42土-10		唐津系 17世紀 85

遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴 ④整理番号	備考
6	陶器壺	42号土坑		①灰黄色、砂粒多い ②やや硬調③暗褐色	耳壺。右回転ロクロ成形。釉は褐釉で外面と口縁部内側に施されている。口縁端部が著しく磨耗している。内面にハゼあり。 ④TAYB42土-11	九州窯 17世紀 86
7~11	人形	42号土坑	小片	①精選され緻密②素焼③無釉	型造りの小型人形。1体以上か。1点は布袋である。④TAYB42土-12	
12	陶器碗	48号土坑	体部小片	①灰色②普通③透明釉、染付	釉はやや厚く、細かな貫入が数多く見られる。呉須は濃い藍色に発色している。 ④TAYB48土-2	唐津系 17世紀～18世紀

田端地区B区第50号土坑出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴 ④整理番号	備考
1	陶器碗	P15	口縁～体部小片	①淡灰白色、緻密。 ②普通③淡黄褐色、黒褐色	内面と口縁上半が灰釉。その他が鉄釉の上下掛分碗。釉境に4条のラセン状の凹線をめぐらす。灰釉部分に貫入あり。 ④TAYB50土-14	瀬戸美濃系 18世紀後半 87
2	陶器碗		1/3	①灰色②器表に淡黄色の斑文を有する ③透明釉に近い灰釉	高台際露胎。外面には白土で退化した細目文を、内面には意匠不明の文様を描く。 ④TAYB50土-2	瀬戸美濃系 18世紀 88
3	陶器碗	フク土	体部～底部片	①淡灰色②硬調③透明、染付	高台端部を除いて施釉。外面に染付が施される。④TAYB50土-3	唐津系 18世紀前半 89
4	陶器鉢	P14、2片	底部1/2	①淡黄灰色②普通 ③淡灰緑色	内面にトチンの目跡あり。体部外面上方以下を除いて灰釉が施される。④TAYB50土-26	美濃焼 18世紀 90
5	陶器碗	フク土	体部片	①淡灰色②普通③淡灰色、染付	内・外面施釉される。外面に染付あり。 ④TAYB50土-21	唐津系 18世紀 91
6	陶器碗		底部～口縁1/3	①淡灰色②普通③暗褐色	外面体部下半を除き鉄釉が施される。 ④TAYB50土-16	瀬戸美濃系 18世紀 92
7	陶器碗	P15		①淡黄色、やや緻密 ②普通、内面灰釉 ③外面鉄釉	畳付露胎。灰釉部分に貫入あり。上下掛分碗の底部。④TAYB50土-11	瀬戸美濃系 18世紀後半 93
8	陶器碗	フク土	底部片	①灰色②普通③透明釉、染付	高台端部は若干鉄状に酸化し、サヤとの融着と剥落が見られる。呉須はややくすんだ藍色。細かな貫入あり。④TAYB50土-17	唐津系 18世紀 94
9	陶器皿	P53	小片	①赤褐色②普通③長石釉（暗灰色）	皿の口縁下位で、外面下半は露胎。三島手白土象嵌。④TAYB50土-4	唐津系 17世紀～18世紀
10	陶器皿	P49	底部片	①淡黄灰色②普通 ③灰釉	高台削り出して端部は尖る。見込の縁辺に同一の大きさの高台の重ね焼き痕がある。 ④TAYB50土-24	瀬戸美濃系 17世紀 95
11	陶器皿	フク土	口縁小片	①紫色を帯びた暗赤褐色②普通③長石釉	口縁には、印文を施しているが、白土の象嵌は行っていない。④TAYB50土-10	唐津系 17世紀後半～ 18世紀前半

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴 ④整理番号	備 考
12	陶器 皿	フク土	底部片	①淡黄白色②普通 ③御深井釉	高台内部は無釉。見込に鉄絵の型摺絵が描かれる。細かな貫入あり。④TA¥B50土-20	瀬戸美濃系 17世紀 96
13	磁器 皿	P35	底部片	①白色②普通③透明 釉、染付	見込に釉剥があり、中央にこんにゃく判花文の染付がある。具須は淡い青色。④TA¥B50土-28	伊万里系 18世紀前半 97
14	陶器 皿	フク土	口縁小片	①淡黄灰色②普通 ③淡黄灰色	内・外面に黄瀬戸風の長石釉が施される。④TA¥B50土-25	美濃焼 18世紀 98
15	陶器 皿	フク土	底部片	①茶褐色②普通③透 明釉	削出高台で、端部はサヤと融着している。施釉は全面で、細かな貫入がある。④TA¥B50土-13	唐津系 18世紀 99
16	陶器 徳久利	P48、8 片	%	①淡灰色②普通③淡 灰緑色	灰釉が体部外面上方に施される。内面上方にコテ痕あり。④TA¥B50土-27	瀬戸美濃系 18世紀 100
17	陶器 播鉢	P12	底部片	①赤褐色、細砂含む ②普通③無釉	粗い卸目が密に入る。見込中央にも円を描いて卸目を入れている。④TA¥B50土-9	製作地不明 18世紀後半～ 19世紀
18	陶器 播鉢	P40	底部小片	①淡黄色と褐色縞状 を呈する。石英・長 石を含む②普通	器表はうすい錆色を呈する。粗い卸目を密に入れる。底部付近の卸目は摩滅している。④TA¥B50土-3	常滑系 18世紀～19世紀

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特 徴	①胎土②焼成③色調④備考
19	不明	体部片		フク土	上位と下位の端部を欠く。下部に径1.2cmほどの透かし穴がある。脚部の外面はザラザラ、その他の外面はロクロナデを施す。	①細砂粒を含む②酸化気味の還元③にぶい橙色 ④TA¥B50土-1

報告 番号	観察 通番	製作 年代	瓦の 種別	厚さ	胎土		焼成		成形技法						整形技法		摘 要	
					素地	扶雑物	焼き 上り	色調	粘土板刺取 凹面 凸面	一枚 作り	桶寄 木痕	粘土板 合せ目	布の合 合せ目	タタ キ目	ロク ロ目	ヘラ ケズリ		布の擦消 凹面 凸面
20	1422	近世以降	トリブ スマ	1.5	粗	微	硬	灰	/	/	/	/	/	/	/	/	/	自然釉 雲母粒含む 薄なし TA¥B50土-8

田端地区B区第64・71・80号土坑出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴 ④整理番号	備 考
1	磁器 碗	64号土坑 フク土	口縁小片	①灰色②普通③透明 釉染付	内面無文。外面二重綱目文。素地が灰色のため、具須絵は目だたない。④TA¥B64土-4	伊万里系 18世紀 101
2	陶器 びんだらい	64号土坑 フク土	高 3.5	①灰色②普通③御深 井釉。透明釉に近い。 鉄絵	外底無釉。外面は鉄絵による型紙摺。全面に貫入あり。④TA¥B64土-5	瀬戸美濃系 17世紀 102

遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴 ④整理番号	備 考
3	陶器 碗	64号土坑 フク土		①淡黄色、緻密②普通 ③淡黄色の長石釉	体部内面以下と高台際以下無釉。釉には細 貫入が入る。④TAYB64土-1	京焼系 18世紀～19世紀
4	陶器 壺	71号土坑		①淡黄色、緑②普通 ③鉄釉	内面と体部外面下半鉄釉。④TAYB71土 -2	美濃焼
5	陶器 急須?	80号土坑 フク土	蓋受部小片	①暗灰色②普通③鉄 釉(端部のみ)	外面の雷文帯は2個1対の印文を施す。80 土-9は同一個体の可能性。④TAYB80土 -7	製作地不詳
6	陶器 急須把手?	80号土坑 フク土	一部欠損	①赤褐色②普通③光 沢がある	把手上部に桜の透しが入る。釉色にはムラ があり。使用釉は不明。④TAYB80土-8	製作地不詳 19世紀
7	陶器 小壺?	80号土坑 フク土	底部～体部小 片	①灰色、緻密②普通 ③透明釉	内面と底部は露胎。底部は大きく凹ませる。 胎土は緻密で焙烙質に焼き上がる。釉に貫 入はない。④TAYB80土-6	製作地不詳 19世紀以降
8	陶器 急須?	80号土坑 フク土	体部小片	①暗灰色②普通③無 釉	白土により菊文を高彫様に描き、黄緑釉の 彩色を施す。下方に金粉が残る。 ④TAYB80土-9	製作地不詳 明治時代
9	磁器 小杯	80号土坑 フク土	1/4	①白色②硬調③白 色、染付	高台端部を除いて白磁釉が施され、外面口 縁下、高台際にペロ藍の染付圏文が施され る。④TAYB80土-1	伊万里系 19世紀～20世紀
10	磁器 皿	80号土坑 フク土	口縁～体部小 片	①白色、緻密②普通 ③透明釉。染付	口縁部内端が若干酸化する。具須はペロ藍。 ④TAYB80土-2	伊万里系 明治時代～ 大正時代
11	磁器 鉢	80号土坑 フク土	口縁小片	①白色②普通③青味 がかかった透明釉。染 付	口縁は肥厚している。外面には細い手法で 波状文風の文様を染付する。具須は藍色に 発色する。④TAYB80土-3	伊万里系 19世紀 103
12	陶器 片口?	80号土坑 フク土	口縁小片	①濁黄白色。粗。 ②普通③灰釉	器面は淡い緑黄色を呈し、やや細かな貫入 がある。④TAYB80土-14	美濃焼 17世紀～19世紀
13	陶器 壺	80号土坑 フク土	底部～体部片	①灰色②硬調③茶褐 色	外面体部下半・内面が露胎となり、他は鉄 釉が施釉される。④TAYB80土-5	製作地不詳 18世紀～19世紀
14	陶器 徳久利	80号土坑 フク土	体部小片	①淡灰色②普通③透 明。鉄絵	長石釉が外面に施され、さらに鉄絵あり。 内面は無文で轆轤目あり。④TAYB80土 -4	京焼系 18世紀～19世紀
15	軟質陶器 焜炉火受	80号土坑		①淡灰色②被熱して おり軟③無釉	火受の格子状をとどめる。④TAYB80土 -11	製作地不詳
16	軟質陶器 焜炉火受	80号土坑 フク土	小片	①淡灰色②被熱して おり軟③無釉	周縁の一部を残す。④TAYB80土-10	製作地不詳
17	軟質陶器	80号土坑 フク土	口縁部小片	①夾雑物粒微②酸 化、素焼	口縁部の内・外に横撫あり。内面剥落顕著 (火ハゼか凍ハゼか不詳)。④TAYB80土 -12・13	在地製 江戸時代以降

田端地区B区第70号土坑出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴	④整理番号	備 考
1	陶器 碗			①灰黄色②普通③茶褐色	小振りであるが、体部の腰のハリはあまり強くない。高台周辺は露胎で、他は胎釉を施している。④TAYB70土-13		瀬戸美濃系 18世紀 104
2	軟質陶器 火鉢?		底 16.7	①砂粒・石粒を含む ②還元一部酸化状態 ③暗灰色内面一部に ぶい橙色あり	乳頭状の3足を付ける。外底は板目。外面は飛ガンナ風の回転体押圧施文。中段以上の内面が被熱を受けており、スノゴを設けた七輪状の使用が考えられる。④TAYB70土-10		
3	軟質陶器 焙烙		口縁部～底部 1/6	①砂粒・石粒を含む 雲母細片含む②酸化 やや軟質③にぶい橙 色	浅い口縁部は内傾し、端部は丸い。耳を上方に付けているが使用痕は明瞭でない。口縁部下半にススが付着している。④TAYB70土-3		在地製
4	軟質陶器 焙烙		口縁部小片	①砂粒・石粒含む ②酸化やや軟質③灰 色	耳に内面より小孔を穿っているが貫通していない。3と同一個体の可能性がある。④TAYB70土-5		在地製
5	軟質陶器 鉢		口縁部～底部 小片 口 (28.8) 底 (21.2)	①砂粒・石粒含む ②還元硬質③暗灰色	底部は板目。外面は横ナデだが、内面にはロクロ痕とやや異なる擦痕がある。全体にススが付着するが、体部外面が顕著である。④TAYB70土-8		
6	軟質陶器 鉢		口縁部～体部 小片 口 (20.0)	①砂粒・石粒含む ②還元硬質③灰色	口縁外端に2条の沈線を配し、体部に回転体による飛ガンナ状の施文を加え圏線状に磨消している。口縁上端が著しく磨滅しており、蓋の使用が考えられる。④TAYB70土-7		

報告 番号	観察 通番	製作 年代	瓦の 種別	厚さ	胎 土		焼 成		成 形 技 法						整 形 技 法				摘 要		
					素地	扶雑 物	焼き 上り	色調	粘土板剥取		一枚 作り	桶寄 木痕	粘土板 合せ目	布の合 合せ目	タタ キ目	ロク ロ目	ヘラ ケズリ	布の擦消		側部 面取	
									凹面	凸面								凹面			凸面
7	1428	近世以降	棧瓦	1.9	粗	微	硬	灰	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	5条のカキヤブリ 痕なし ④TAYB70土-24	
8	1430	近世以降	棧瓦	1.7	粗	微	硬	灰	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	5条のカキヤブリ 痕なし ④TAYB70土-26	

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特 徴	①胎土②焼成③釉調④備考
9	鉢? 石製	口縁部		フク土	体部中位以下を欠く。口径50cmほどに復原できる。口唇部に平坦面があり、厚さは6cm前後である。外面は凹凸が著しいが、内面は比較的平滑である。石質変質かこう岩。④TAYB70土-22	
10	硯 石製	略完		フク土	縁の一部を欠く。長さ15.5cm、幅5.7cm、厚さ2.5cmである。端整な長方形に仕上げている。陸部は余り摩り減っていない。石質流紋岩(砥沢?) ④TAYB70土-1	
11	軽石	略完		フク土	長さ7.0cm、幅5.3cm、厚さ2.8cmである。いわゆる「かかと」磨りのカルイシで、片面のみ使用できる。他の一面はくぼんでいる。石質軽石(二ツ岳)。 ④TAYB70土-16	

遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
12	不土明製	略完		フク土	径4.2cm、厚さ1.8cmほどの円盤状を呈する。片面は面取りを施し、側面は削って丸く仕上げる。素焼きの土器を加工している。④TA¥B70土-18	

田端地区B区第85・86・99・116号土坑出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
1	陶器鉢	85号土坑 フク土	小片	①淡黄色、ざっくりしている②普通③錆釉	卸目は9本。④TA¥B85土-1		瀬戸美濃系 17世紀～19世紀
2	磁器猪口	86号土坑 ピット	1/3 口 5.8 高 4.0	①白色②硬調③透明釉	器表面は細かな凹凸あり。高台内面一部で無釉。畳付きに若干砂粒が付着。④TA¥B86土-2		伊万里系 17世紀～18世紀
3	陶器碗	86号土坑 ピット	1/2 口 10.2	①淡黄灰色、砂質②普通③透明釉	外面底部付近は無釉。細貫入あり。外面底付近にフクを生じている。④TA¥B86土-3		京焼系
4	陶器鉢	86号土坑 ピット B-1層	小片 口 20.8	①濃い黒褐色②硬調③白土・透明釉	三島手の白土が体部外面に波状に入る。内・外面に施釉。透明釉は長石釉。④TA¥B86土-4		唐津系 18世紀 105
5	軟質陶器香炉	99号土坑	底部体部小片	①夾雑物粒微②酸化・燻③褐色	香炉の体部下半片で3足の一部が遺存。④TA¥B99土-4		在地製 18世紀～19世紀
6	播鉢	99号土坑		①淡黄灰色②普通③茶褐色	底面・体部外面下半を除いて鉄釉が施釉される。内面に13条の荒い卸目あり。底面は糸切による切はなし。④TA¥B99土-7		美濃焼 17世紀～18世紀
8	磁器皿	116号土坑	高台1/2	①淡黄色、口縁付近は白色②不十分③白磁釉(白濁)	内底釉ハギ。高台際以下は露胎であり。高台には割り込みを入れている。貫入はない。④TA¥B116土-1		中国製 14世紀 106

報告番号	観察通番	出土地点	瓦の種別	厚さ	胎土		焼成		成形技法						整形技法			摘要			
					素地	扶雑物	焼き上り	色調	粘土板剥取		一枚作り	桶密木痕	粘土板合せ目	布の合せ目	タタキ目	ロクロ目	ヘラケズリ		布の擦消		側面取
									凹面	凸面									凹面	凸面	
7	1549	B99土坑	平	1.7	密	微	軟	灰	○	なし	○	なし	なし	平行	なし	なし	なし	なし	なし	1A類 TA¥B99土-6	

田端地区B区第131・133・150・161・164・192号土坑出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	白石製	1/2		フク土	上白。中央の軸穴ともの落ちる孔の一部が遺存する。縁は断面方形を呈する。裏面の目は擦り減っている。石質砂岩(牛伏砂岩)。④TA¥B131土-3	
3	杯土師器	3/4	口径 8.7 器高 2.6 底径 4.1	フク土	体部は直線的に開く。内外面ロクロナデを施す。外底は右回転糸切り後、無調整。2次火熱を受けている。	①細砂粒を含む②酸化③橙色④TA¥B150土-1

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
4	杯 土師器	完形	口径 8.3 器高 2.2 底径 4.1	フク土	体部は直線的に開く。内外面ロクロナデを施す。外底は右回転糸切り後、無調整。2次火熱を受けている。内底中央は凸である。内面にススあり。	①細砂粒を含む②酸化③橙色④TA¥B150土-2
5	杯 土師器	略完	口径 8.5 器高 2.3 底径 3.8	フク土	外底はやや突出する。体部中位が膨らむ。内外面ロクロナデを施す。外底は右回転糸切り後、無調整。2次火熱を受けている。	①細砂粒を含む②酸化③橙色④TA¥B150土-3

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
2	陶器 皿	133号土坑 P ₁		①淡黄灰色②普通 ③淡灰色	釉は灰・長石釉。見込は刷毛による蛇目釉剥あり。外面は高台を除いて施釉。高台は削出。④TA¥B133土-1		美濃焼 17世紀 107
6	陶器 皿	161号土坑 P 1		①淡黄白色②普通 ③透明釉	外面底部は無釉。釉の厚さは不均等で、細かな貫入が入っている。④TA¥B161土-1		美濃焼 17世紀 108
7	陶器 碗?	164号土坑 P-1		①淡黄灰色。粗い ②普通	外面体部下半から底部は無釉。やや粗い貫入が見られる。④TA¥B164土-1		美濃焼 16世紀 109
8	軟質陶器 鉢	192号土坑	口縁部小片	①砂粒・白色粒多く 含む②酸化、軟質 ③浅黄色、灰	外面はロクロ痕状のナデ。口縁上端は平坦。④TA¥B192土-2		在地製

田端地区B区第238・260・261号土坑出土物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
1	陶器 鉢	238号土坑 フク土	小片	①嚙脂色②普通③白 土、透明釉	三島手大鉢の口縁部下半の破片。放射状の直線と波状線を組み合わせた白土象嵌上に長石釉を施す。圏線部分には象嵌ぬける。④TA¥B238土-2		唐津系 17世紀～ 18世紀前半
2	磁器 碗	260号土坑 フク土	口縁～体部片	①白色②普通③透明 釉、染付	口縁端部が屈曲し、底部付近が肥厚している。呉須は沈んだ藍色に発色している。④TA¥B260土-3		伊万里系 19世紀前半 110
3	磁器 水滴	260号土坑 フク土	底部小片	①白色②普通③透明 釉、呉須	上面は型造りで、菊花の意匠である。葉の部分を中心に呉須で染めている。正面は白磁釉を施すが、側面は拭き落としている。④TA¥B260土-4		伊万里系
4	陶器 瓶	260号土坑 フク土	体部小片	①灰黄色②普通③茶 褐色	内面には明瞭なロクロ痕が残り、その上に付着物が見られる。外面のみ胎釉を施している。④TA¥B260土-2		瀬戸美濃系 18世紀～ 19世紀前半
5	軟質陶器 火鉢?	260号土坑 フク土	底部	①灰色、夾雑物多い ②普通、燻③無釉	軽量の胎土を使用している。内面に横位のナデ痕が残るが、器面の凹凸多くロクロ成形とは考えにくい。高台外側に朱漆を施す。④TA¥B260土-5		在地製 江戸時代

遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴	④整理番号	備 考
6	陶器 香炉?	261号土坑	口縁小片	①淡黄白色。粗い。 ②普通③透明釉、鉄絵	蓋物。鉄絵（二色）はナデシコの意匠。釉は長石釉でやや細かな貫入が入る。	④TA¥B261土-1	美濃焼 17世紀 111
7	陶器 碗	261号土坑	底部小片	①淡黄白色②普通 ③透明釉	外面底部付近は無釉。釉は長石釉で細かな貫入が入る。	④TA¥B261土-2	美濃焼 18世紀後半 112

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特 徴	①胎土②焼成③色調④備考
8	白 石製	1/4		フク土	下白。上面の目は殆んどなくなっている。径32cmほどである。石質砂岩(牛伏砂岩)	④TA¥B261土-3

田端地区B区第263・264号土坑出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴	④整理番号	備 考
1	陶器 徳利	263号土坑	体部～底部片	①褐色②普通③淡灰・暗褐色	外面体部に白土掛し、内面、高台内面に鉄釉を施す。	④TA¥B263土-1	唐津系 18世紀～ 19世紀前半
2	磁器 インク壺	263号土坑	完形	①白色②普通③淡緑色	高台端部をのぞいて施釉。釉は淡い若葉色の発色。内面に黒色の墨様の付着物あり。	④TA¥B263土-2	明治時代～ 大正時代
4	陶器 碗	264号土坑 フク土	口縁～体部小片	①淡灰色②普通③茶褐色	広い口径に比べ、器高は低い。釉は胎釉で淡い乳青色の発色部分がある。	④TA¥B264土-2	瀬戸美濃系 18世紀後半 113

報告 番号	観察 通番	製作 年代	瓦の 種別	厚さ	胎 土 焼 成				成 形 技 法						整 形 技 法				備 考		
					素地	挟雑物	焼き上り	色調	粘土板削取		一枚作り	桶寄木痕	粘土板合せ目	布の合目	タタキ目	ロクロ目	ヘラケズリ	布の擦消		側部面取	
									凹面	凸面								凹面			凸面
3	1416	近世以降	棧瓦	1.7	粗	微	硬	灰	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	隅部、裏母粒含む。黒色燻 ④TA¥B263土-4	

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特 徴	①胎土②焼成③色調④備考
5	砥石	折れ		フク土	長さ7.9cm、幅3.0cm、厚さ2.8cmが遺存する。2面を使用し、一端は薄くなって折れている。石質流紋岩（砥沢?）。	④TA¥B264土-1

田端地区B区第21号ピット出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特 徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	甕 陶器	体部 底部	…… 現存高43.2 底径 20.1	フク土	体部中位以上を欠く。体部中位に丸みがあり、底部は急にすぼまる。外底は無調整である。外面は丁寧にナデつける。外面下位に黄白色の汚れがある。常滑焼か。	②焼締陶器③灰色 ④TA¥B21ピット-1

田端地区B区ゴミ穴出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	耳須恵器	体部 ～底部	長径 10.3 現存高 3.5 底径 4.5	フク土	口縁部の大半を欠く。長径部が遺存する。外底右回転糸切り後、無調整。	①砂粒を含む②還元③灰色 ④TA¥Bゴミ穴-20
2	転用硯須恵器壺			フク土	体部破片を使った転用硯。壺の内面はツルツルで、光沢がある。外面は平行タタキ目が残り側面は擦って丸く仕上げる。厚さ0.8cm。	①砂粒を含む②還元③灰色 ④TA¥Bゴミ穴-41

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴 ④整理番号	備考
3	陶器皿		口縁～体部小片	①淡い黄橙色②普通③茶緑色	高台部を鋭く削り込んでいる。灰釉を施すが外底周辺は露胎である。器表面は若干カサけている。④TA¥Bゴミ-44	瀬戸美濃系か 19世紀 114
4	軟質陶器 落し蓋		口 (26.0) 底 (23.2) 1/2	①砂粒・石粒を含む ②還元硬質③灰褐色	下面に強い被熱を受けたものと思われる剥落がすずむ。よって火消し壺の落し蓋と推定した。紐が付くものと思われるが残存部分に痕跡はない。④TA¥Bゴミ-40	製作地不詳 18世紀以降
5	軟質陶器 焙烙		口縁部片 口 (31.8)	①砂粒多く含む雲母含む。②酸化硬質③外面灰褐色内面に ぶい橙色	口縁部が浅く端部が丸い。底部は丸底気味。内面平滑に仕上げている。外面にスス付着。④TA¥Bゴミ-21	在地製 18世紀以降
6	軟質陶器 火鉢?		口縁部片 口 (30.2)	①砂粒・石粒を含む ②硬質③灰褐色	口縁部上面に黒色の漆が塗られている。外面は楕円形の波状文を下半だけ擦消す山形の文様が施される。④TA¥Bゴミ-28	製作地不詳 18世紀以降
7	軟質陶器 鉢		口縁～底部 口 (41.4) 高 12.1 底 (18.0)	①砂粒・石粒を含む ②還元硬質③灰褐色 外面スス付着	口縁部上端は内外に小さく突出している。2次被熱を受け外面にスス付着。上半の剥落がすすんでいる。④TA¥Bゴミ-43	製作地不詳 18世紀以降
8	陶器 壺		口縁部小片 口径 (16.8)	①砂粒・白色石粒を含む②還元硬質③に ぶい赤褐色	口縁部は平坦で内外へ小さく突出している。全面に鉄釉を施している。④TA¥Bゴミ-34	製作地不詳 18世紀以降
9	軟質陶器 土鍋		口縁部小片	①砂粒を含む②還元硬質③灰色	耳部破片、口縁部に耳部を接合し端部を指頭でつぶして山形に仕上げる。一孔が穿たれているがスレの痕跡はない。④TA¥Bゴミ-35	製作地不詳 18世紀以降
10	軟質陶器 播鉢		口縁部片	①砂粒・石粒を含む ②酸化硬質③にぶい 赤褐色	口縁部外面に薄く鉄釉を施した可能性がある。卸目は3本1単位と思われるが丁寧に刻んであり把握しにくい。④TA¥Bゴミ-38	
11	陶器 播鉢		底部片	①砂粒・大きい石粒 多い、粗②酸化やや 硬質③外面にぶい赤 褐色内面淡黄色	底部糸切痕が無調整で残っている。全面に鉄釉を施す。内面磨滅著しく卸目はほとんど残っていない。④TA¥Bゴミ-22	

遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴 ④整理番号	備考
12	陶器 播鉢		底部片 底 (16.0)	①砂粒・白色石粒を含む②還元硬質③に ぶい橙色	底部から体部へ強く屈曲して立ち上がっている。卸目は底部1単位7本、体部は6本以上だが工具は異なる。外面底部砂付着。体部は鉄釉を施している可能性。④TAYB ゴミ-36	
13	軟質陶器 火鉢		底部小片	①砂粒を多く含む ②酸化硬質③灰褐色	小形火鉢の高台部破片と思われる。外面に スタンプ施文を行ない、残存部分に単位の 境が1ヶ所認められる。下端に光沢ある黒 色の付着物があり、端部に漆塗りの可能性 がある。④TAYBゴミ-32	
14	軟質陶器 鉢		底部片	①白色砂粒・石粒を 含む②酸化?硬質	外面は丹念な研磨を行ない光沢を持っている。 凸部と畳付き部が磨耗している。 ④ TAYBゴミ-39	
15	軟質陶器 火鉢		口縁～体部片 底 (20.5)	①砂粒・石粒を含む ②酸化やや軟質③外 面いぶしか、内面に ぶい橙色	外面口縁部は指頭によると思われるレリー フ状の文様。体部下端には二段の型あてに よる文様がある。型は同一のものである。 口縁部上端の剥落が著しい。④TAYBゴミ -19	
16	軟質陶器 植木鉢		口縁～底部 口 (29.0) 高 24.9 底 (25.0)	①砂粒・石粒を含む ②還元硬質③暗灰色	体部は型押と思われ、割れ口はすべて縦位 となっている。付け高台。口縁部上端外側 の帯状の剥落著しい。外面に橙色のペンキ が霜降状に付着。④TAYBゴミ-42	近・現代

田端地区B区遺構外出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴 ④整理番号	備考
1	陶器 皿	B-1		①灰黄色②普通③乳 白色、鉄絵	所謂志野焼。植物文と思われる鉄絵が描か れ、暗褐色に発色している。高台部を除い て外底は露胎。④TAYB陶-2	美濃焼 17世紀
2	陶器 碗	B区一採	現存高 2.1 高台径 4.4	①淡黄灰色②普通 ③透明、長石釉	内面に鉄絵あり、体部外面下方以下露胎と なる。外底に墨書あり。④TAYB陶-4	京焼系 18世紀
3	磁器 徳利	B区一採	体部片	①淡灰色②普通③長 石釉、呉須	内面は無釉で、外面に網代文が染付される。 ④TAYB陶-5	伊万里系 17世紀～18世紀
4	陶器 土鍋	B-26住 フク土 (6片)	底部欠 口 (17.0)	①淡黄灰②普通③長 石釉	口縁部の内・外面は露胎となり、耳部には 施釉あり。外面下半にスス付着。④TAYB 陶-8	製作地不詳 19世紀以降
5	陶器 手あぶり	B区一表 採(2片)	体部～底部片 底 (18.7)	①淡黄灰②普通③長 石釉	外面は施釉され、高台際と内面露胎外面に 劃文あり。④TAYB陶-9	製作地不詳 18世紀以降

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
6	白 石製	¼			上白。裏面の目はしっかり遺存している。軸受の穴ともの落ちる孔の一部が遺存している。径約32cmほどに復原できる。石質粗粒安山岩。 ④TA¥BG-84	
7	白 石製				下白。遺存が少なく、全体の形状は不明。石質砂岩(牛伏砂岩)④TA¥BG-85	
8	鉢？ 石製	口縁部 小片			ツキ白の可能性あり。厚さは最大8.9cmである。口縁部は丸く仕上げる。内面は外面に比べて滑らかである。復原径は32.5cmとなる。石質粗粒安山岩 ④TA¥BG-86	
9	鉢？ 石製	口縁部 小片			白か。口唇部に平坦面をもつ。内面は比較的滑らかである。石質砂岩(牛伏砂岩)？④TA¥BG-92	
10～ 13					第1分冊270頁参照	
14	杯 土師質	略完	口径 10.9 器高 2.9 底径 5.1		体部は直線的に開く。口唇部肥厚して側面に平坦な面をもつ。外底は左回転糸切り後、無調整。内外面とも丁寧なロクロナデを施す。	①砂粒を含む②酸化③橙色 ④TA¥BG-1
15	高台付碗	底部 ½	…… 現存高 2.9 高台 7.9		本体の内底側に左回転糸切痕が遺存する。体部との接合部に粘土を補充している。天地を逆転して高台を貼り付けたとすれば、ロクロは右回転である。	①砂粒を含む②酸化③ぶい ④TA¥BG-17
16	高台付碗 土師質	½	口径(14.6) 器高 4.9 高台 7.0		体部は直線的に開く。内底中央は突出する。外底は回転糸切り後、高台貼付け。内面に赤褐色の塗彩を施す。	①砂粒を含む②酸化③灰白色 ④TA¥BG-26
17	耳皿 須恵器	¼	…… 現存高 2.1 高台 5.6		折り曲げた部分を欠く。外底は高台貼付けの後、ナデ付ける。内底は丁寧なナデを施す。	①細砂粒を含む②還元③灰色 ④TA¥BG-25
18	高台付皿 灰釉陶器	底部 ½	…… 現存高 1.6 高台 7.2		釉のかかる部分は遺存していない。灰釉陶器に比べて砂質の胎土である。内底に墨書があるが判読できない。	①精良②還元③灰白色 ④TA¥BG-23
19	段皿 灰釉陶器	口縁部 小片	口径(14.6) 現存高 1.7		内底と体部との境に段をもつ。釉は全体に薄くかかる。口縁部は丸みをもつ。	①精良②還元③灰白色 ④TA¥BG-22
20	皿または碗 緑釉陶器	体部 小片	…… …… ……		体部の小片のため、器種不明。内外面に緑釉がかかる。一部にススが附着する。割れ口は還元焼成の様相をもつ。やや硬質。	①精良②還元③暗緑色 ④TA¥BG-66
21	鉢 土師器	¼	口径(18.5) 器高 6.0 底径(11.8)		体部内面に暗文を施す。体部は内湾気味に立ち上がる。体部外面はヨコ方向のヘラケズリ、外底は非回転のヘラケズリを施す。内底の器表は剥落している。	①砂粒を含む②酸化③橙色 ④TA¥BG-16
22	甕 土師質	頸部 小片			大形甕の頸部破片。外面に「×」状の文様を施す。2次火熱をうけている。	①砂粒を含む②酸化③橙色 ④TA¥BG-3
23	甕 土師器	口縁部 ～体部	口径(20.9) 現存高 13.7 ……		底部を欠く。口縁部は短く、「く」字状に外反する。口唇部に平坦面をもつ。体部外面はタテ方向のヘラケズリ、内面はナデを施す。仕上げは雑で、口縁部に歪みがある。	①砂粒・白色粒子を含む ②酸化③褐色④TA¥BG-71

遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
24	甕 土師器	口縁部 ～体部	口径(26.0) 現存高 29.0 ……		底部を欠く。口縁部は短く、「く」字状に外反する。体部は下位に膨らみがある。体部外面はタテ方向のヘラケズリとナデ、内面はヨコ方向のナデを施す。口縁部に至みがある。	①砂粒を含む②酸化③にぶい橙色④TA¥BG-72

田端地区C区第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴 ④整理番号	備考
1	陶器 菊皿	1号掘立溝 3片	口縁～底部片	①淡黄灰色②普通 ③淡黄白色・淡緑白色	見込に布目がわずかに残っており、ロクロ引き後、型押ししたものである。目痕あり。高台は断面三角形に近い形状である。 ④TA¥C1掘-1	美濃焼 16世紀後半 115

田端地区C区第1・3・4・10号溝出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴 ④整理番号	備考
1	磁器 碗	1溝	口縁～底部	①白色②普通③透明 釉。染付	釉はやや青色味をおびた発色で、呉須は若干にじみ、やや沈む藍色に発色する。生掛け。器面にブクを生じる。④TA¥C1溝-4	伊万里系 17世紀前半 116
2	陶器 耳壺	1溝	口縁片	①灰色②硬調③茶褐色	内面を除き鉄釉が施される。口縁は玉縁、耳付着。内面に轆轤目あり。④TA¥C1溝-3	製作地不詳 17世紀
3	陶器 播鉢	1溝 フク土	体部小片	①淡褐色②硬調③無 釉	内面に6+2条を単位とする卸目あり。 ④TA¥C1溝-2	常滑 17世紀～18世紀
4	軟質陶器 内耳鍋	1溝	口縁小片	①淡灰色②普通③無 釉	鍋形。口縁部に布状の擦痕のある丁寧な作りである。④TA¥C1溝-1	在地製
6	陶器 皿	4溝	口縁部片	①淡黄灰色②普通 ③淡黄緑色	内・外面に灰釉を施す。口縁はやや外反し、内面に返りを持つ。④TA¥C4溝-1	瀬戸美濃系 15世紀後半 117
7	軟質陶器 内耳鍋	10溝	口縁部片	①淡褐色②普通③無 釉	口縁部片で端部が平ら。内外面は横撫。 ④TA¥C10溝-2	在地製 15世紀 118

報告 番号	観察 通番	出土 地点	瓦の 種別	厚さ	胎土		焼成		成形技法						整形技法		摘 要				
					素地	挟雑物	焼き 上り	色調	粘土板剥取		一枚 作り	桶寄 木俵	粘土板 合せ目	布の合 合せ目	タタ キ目	ロク ロ目		ヘラ ケズリ	布の擦消		側部 面取
									凹面	凸面									凹面	凸面	
5	1412	C3溝	平	2.2	密	微	締	灰	○	なし	○	なし	○	平行	なし	なし	なし	なし	なし	1	1A類 ④TA¥C3溝-1
8	1413	C10溝	平	2.1	密	含	並	赤褐	○	なし	○	なし	なし	平行	なし	なし	なし	なし	なし	なし	1A類 ④TA¥C10溝-1

田端地区C区第3・4・5・6号土坑出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴 ④整理番号	備考
1	磁器碗 小	3号土坑	体部下半片	①白色②普通③透明、染付	八角稜をなす。内外面に白磁釉が施され、さらに染付施文あり。④TA¥C 3 土-1	伊万里系 18世紀 119
2	磁器碗	4号土坑		①白色②普通③透明釉。染付	染付は精選された呉須を用い、鮮かな淡藍色に発色している。釉内に微細な気泡が多い。④TA¥C 4 土-2	伊万里系 17世紀後半 120
3	陶器 髪だら	4号土坑		①淡黄灰色②普通③透明釉。鉄絵	釉は長石釉で細かな貫入が入る。鉄絵は型紙摺で、桜花と松葉の意匠である。黒色に発色している。④TA¥C 4 土-1	瀬戸美濃系 17世紀 121
11	陶器碗	5号土坑		①淡黄灰色②普通③透明釉、茶褐色	外面は御深井釉と胎釉の上掛分。御深井釉には細かな貫入が入る。④TA¥C 5 土-1	美濃焼 18世紀 122
12	陶器皿	5号土坑		①淡黄灰色②普通③乳白色。鉄絵	釉は志野釉で全面に施される。見込の鉄絵は発色がやや悪い。④TA¥C 5 土-2	美濃焼 17世紀 123
13	陶器碗 ?	5号土坑		①淡白色②普通③透明。染付	やや粗い貫入が入る。呉須は淡い藍色に発色している。④TA¥C 5 土-3	唐津系 18世紀 124
14	陶器碗	6号土坑	口 (10.4)	①淡灰色②普通③濁緑色	釉は胎釉と思われ、細かな貫入が入る。上半部分で薄い。④TA¥C 6 土-1	瀬戸美濃系 18世紀前半 125

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
4	キセル製 銅	雁首		フク土	ガン首端部とみられる。径1.0cmである。④TA¥C 4 土-4	
5	キセル製 銅	雁首		フク土	火皿の径は1.5cm、厚さ0.1cmで、歪んでいる。ラウの挿入部は断面カマボコ形を呈する。本来の形状かどうか不明。④TA¥C 4 土-3	
6	貨幣製 銅	略完		フク土	「寛永通宝」。裏面はサビが著しい。④TA¥C 4 土-5	
7	貨幣製 銅	略完		フク土	「寛永通宝」。④TA¥C 4 土-7	
8	貨幣製 銅	略完		フク土	「寛永通宝」。④TA¥C 4 土-8	
9	貨幣製 銅	略完		フク土	「寛永通宝」。④TA¥C 4 土-6	
10	貨幣製 銅	略完		フク土	「寛永通宝」。④TA¥C 4 土-10	

遺物観察表

田端地区C区第9・10・12号土坑出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
1	陶器 碗	9号土坑 4片接合	口高 (12.0) 6.2	①淡黄色。緻密②普通③胎釉、口縁以外は発色悪い	口縁以外は釉厚がうすく、発色が悪く、光沢もない。④TAYC9土-1		瀬戸美濃系 17世紀前半 126
2	陶器 碗	9号土坑		①淡黄色、粗い②普通③茶褐色	天目碗形。天目釉はうすく、発色も悪い。口縁端部は小さく外反し、体部は外方に張り出す。④TAYC9土-2		美濃焼 17世紀 127
4	陶器鉢	9号土坑10片 P-1-1片 P-2-1片 13片接合	底 (13.2)	①淡い赤褐色、粗砂を多く含む②酸化焼成③無釉	体部外面には指頭圧痕がある。体部内面には粗い卸目を密に施す。見込にも卸目を入れる。内面下部は使用により磨滅している。④TAYC9土-3		信楽焼か 18世紀～19世紀

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
3	キセル 銅製			フク土	ガン首の一部。長さ4.5cmが遺存する。火皿部を欠く。全体に平らに潰れている。④TAYC9土-7	
5	不明 石製			フク土	一端を欠く。両面とも平滑に磨っている。用途不明。長さ11.2cm。石質軽石(二ツ岳)④TAYC9土-4	
6	砥石			フク土	一端を欠く。長さ14.0cmが遺存する。両面を使用しており、片面には金属で彫り込んだような鋭い溝がある。石質砂岩(新第三紀層)④TAYC9土-6	
7	不明 石製			フク土	両面とも磨っている。長さ9.6cm。用途不明。石質軽石(二ツ岳)④TAYC9土-5	
8	不明 鉄製			フク土	長さ12.6cm、幅4.3cm、厚さ0.2～0.3cmほどで、一端を「L」字状に曲げている。用途不明。農耕具またはカマドの縁か。④TAYC10土-1	
9	キセル 銅製			フク土	ガン首の一部。長さ3.8cmが遺存する。ラウの一部が残っており、径は1.1cmである。火皿部を欠く。④TAYC12土-1	
10	不明 鉄製			フク土	断面方形を呈し、中空である。長さ3.8cm、一辺0.4cmが遺存する。④TAYC12土-2	

田端地区C区第18号土坑出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	キセル 銅製			フク土	吸い口。長さ4.3cmが遺存する。折れ曲がっている。径0.6cm。④TAYC18土-2	

田端地区C区第19・20・21号土坑出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	不明 銅・鉄?			フク土	幅0.7~1.1cm、断面長方形の帯状の金属を曲げて輪にしている。用途不明。地金は鉄サビ状の色であるが、表面に緑青の膜がある。銅地か。	
4	不明 石製	略完		フク土	表面に3カ所の平坦面をもつ。平坦面で安定する。用途不明。石質粗粒安山岩④TA¥C21土-2	

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴 ④整理番号	備考
2	陶器 皿	20号土坑	口高底 20.0 2.6 4.9	①淡黄灰色②やや硬調③黄褐色	削出高台は端部がやや平坦。外面下半は露胎となる。黄瀬戸釉と胎釉の中間的な発色である。④TA¥C20土-1	瀬戸美濃系 17世紀 128
3	陶器 筒物	20号土坑 P-3-2片 P-2-1片	高底 5.1 (9.4)	①淡黄灰色②普通③淡黄灰色	外面底部に同心円状の幅広の削り痕がある。外面体部の凹凸は水挽痕。釉は灰釉で細かな貫入が入る。④TA¥C20土-2	美濃焼 17世紀 129

田端地区C区第23号土坑出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴 ④整理番号	備考
1	陶器 片口鉢	No-1	片口部片	①淡黄褐色②普通③暗褐色	内・外面に濃い胎釉が施される。④TA¥C23土-1	瀬戸美濃系 18世紀 130

田端地区C区第29・31号土坑出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴 ④整理番号	備考
1	磁器 碗	29号土坑 フク土	底部片	①淡灰色②普通③透明釉、染付	高台端部を除いて白磁釉が施される。外面に染付施文あり。④TA¥C29土-1	伊万里系 18世紀 131
2	陶器 碗	29号土坑 フク土	口縁部片	①淡黄色②普通③白色	内・外面に長石釉を施す。釉中に細かな貫入あり。④TA¥C29土-2	美濃焼 17世紀後半 132
3	磁器 碗	31号土坑		①白色②普通③印判、透明釉。染付	型紙の印判で、ペロ蓋は深い藍色に発色。外面にブクを生じている。④TA¥C31土-1	伊万里系 明治時代
4	陶器 碗	31号土坑		①淡黄白色②普通③淡黄緑色	釉は灰釉で、細かな貫入が数多く入っている。高台端部はかき落とす。④TA¥C31土-2	京焼系 18世紀 133
5	磁器 猪口	31号土坑		①白色②普通③印判、透明釉。染付	印判は型紙で、ペロ蓋は淡い藍色に発色。④TA¥C31土-5	伊万里系 明治時代
6	磁器 鉢	31号土坑 フク土		①白色②普通③印判・透明釉。染付	印判は型紙刷り。ペロ蓋は深い藍色に発色している。④TA¥C31土-4	伊万里系 明治時代
7	磁器 皿	31号土坑		①白色②普通③印判、透明釉。染付	蛇の目高台。印判は型紙刷りで、ペロ蓋は深い藍色に発色している。④TA¥C31土-3	伊万里系 明治時代

遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
8	鉄 先製 鉄 製	略完		フク土	通称「エンガ」と呼ばれる農耕具とみられる。先端部は袋状になっており、柄部が差し込まれる。柄部の側面は断面三角形を呈する。先端部の幅は16.7cm、全長30.0cm、柄部側の幅19cm、袋部の長さ約10cmである。④TAYC31土-6	

田端地区C区第34号土坑出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
1	磁器 皿	フク土- 7片接合		①白色②普通③透明 釉、染付	菊皿で弁表現あり。高台端部に砂付着。それを除き白磁釉が施される。見込に梅花文の染付あり。呉須は暗く沈んだ発色。 ④TAYC34土-3		伊万里 17世紀前半 135
2	陶器 皿	坩-1片		①淡黄白色②普通 ③透明釉。鉄絵	釉は長石釉で、やや粗い貫入がある。外面底部は無釉、見込に鉄絵を施す。見込に目痕あり。④TAYC34土-9		美濃焼 17世紀 139
3	陶器 皿	フク土 -1片	口縁部片	①淡黄灰色②普通 ③淡黄灰色	内・外面に灰釉を施す。外面下半が露胎となる。外面・口縁に菊皿の刻みあり。 ④TAYC34土-8		美濃焼 16世紀~17世紀
4	磁器 小杯	フク土 -1片	口縁部片	①白色②硬調③透明 釉、染付	内・外面に乳濁した白磁釉を施し、口縁の内外に染付圏線を施す。④TAYC34土-13		伊万里系 17世紀後半 141
5	陶器 天目茶碗	フク土 -1片		①淡黄灰色②普通 ③黒色	口縁端部を欠いているが、厚みは体部と変わらない。④TAYC34土-11		美濃焼 17世紀 140
6	陶器 碗	フク土 -7片		①淡黄白色②やや軟 調③透明釉	外面体部の削りが高く。器高も高い。釉は長石釉でやや細かな貫入が入る。 ④TAYC34土-4		美濃焼 17世紀 136
7	陶器 碗	フク土 -3片	口縁~体部片	①淡灰色②普通③透 明釉	内・外面に長石釉を施す。外面高台際は露胎となる。④TAYC34土-2		美濃焼 17世紀後半 134
8	陶器 香炉	フク土 -1片		①淡黄白色。やや粗 ②普通③黒褐色釉	見込みにリング状の目痕あり。鉄釉。 ④TAYC34土-6		美濃焼 17世紀 137
9	陶器 皿	フク土 -4片	口縁部片	①暗赤褐色②普通 ③透明釉、白土	内・外面に三島手の刷毛塗白土入る。さらに内・外面に透明釉を施す。外面一部露胎となる。④TAYC34土-7		唐津系 17世紀 138
10	軟質陶器 内耳鍋	体部~底 部片		①褐色②普通③暗褐 色	体部の内・外面に指頭疔痕あり。体部上方に横撫部を認める。底面は平底。襷あり。 ④TAYC34土-14		製作地不詳
11	軟質陶器 播鉢	フク土1 片	口縁部片	①黒灰色②普通③無 釉	内面に11条の卸目あり。口縁内側に段があり特徴的な口縁形態となる。④TAYC34土-1		製作地不詳 16世紀~18世紀

田端地区C区第35号土坑出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
1	磁器 皿	フク土		①白色②普通③染付、透明釉	外面に二重の網目文様。呉須はくすんだ藍色に発色している。④TAYC35土-4		伊万里系 18世紀 142
2	陶器 碗	フク土		①臙脂色②普通③透明釉、白土	内外面に白土掛け後、透明釉を施し、外面は波状となる。三島手であるが不鮮明。高台外端部にヘラ削りを施す。④TAYC35土-1		唐津系 18世紀 143
3	陶器 天目茶碗			①淡黄白色②普通③黒褐色	釉は鉄釉で光沢がある。口縁端部の剝落が多い。④TAYC35土-2		瀬戸美濃系 18世紀 144
4	磁器 香炉	フク土		①淡灰白色②普通③茶褐色	釉は褐釉で外面は露胎。④TAYC35土-3		瀬戸美濃系 17世紀後半～ 18世紀前半 145

田端地区C区第42号土坑出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
1	磁器 猪口		½	①白色②普通③染付、透明釉	銅版刷りで高台基部の両側に圏線を書き加えてある。畳付きに白色砂粒若干付着。ペロ藍。版の継ぎ目が明瞭に見られる。④TAYC42土-1		伊万里系 明治時代
2	磁器 碗		底部～体部片	①白色②普通③染付、透明釉	型紙刷りで外面に3単位。見込縁辺は圏線が加えてある。畳付きは釉ハギで露胎。釉はペロ藍。④TAYC42土-2		伊万里系 明治時代
3	磁器 碗		口縁小片	①白色②普通③透明釉、染付	腰のハリの強い器形である。呉須はくすんだ藍色に発色し、濃淡の差がある。不揃いの気泡を生じている。④TAYC42土-3		伊万里系 19世紀前半 146
4	陶器 ?		底部小片	①灰黄色②普通③白色	手捏ね。内面にナデ、外面体部にヘラ削りを施している。3足の付くものと思われる。外面体部にのみ長石釉を施している。④TAYC42土-6		瀬戸美濃系 17世紀 147
11	軟質陶器 焙烙		口縁～底部片	夾雑物多くやや粗 ②やや硬調③表にぶい橙、裏にぶい褐色	丸底気味。口縁部は肥厚している。耳の取り付けは雑。二次被熱の影響強く、口縁外面にスス付着している。④TAYC42土-11		在地製
12	軟質陶器 ?		小片	①灰色②普通③灰褐色	外面は回転具利用の施文。内面にはロクロ痕と思われる擦痕が見られる。二次的被熱は受けていない。④TAYC42土-10		在地製 19世紀?
14	軟質陶器 風炉	32片	完形	茶褐色②普通③褐灰色	内面にロクロ目状の凹凸あり。内側に3目を配す。耳内部は空洞。口縁部と高台に丁寧な研磨。内面火熱による剝落あり。④TAYC42土-16		在地製 18世紀～19世紀

遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特 徴	①胎土②焼成③色調④備考
5	鉄先? 鉄製			フク土	刃部の長さ20.8cm、幅約6cmが遺存する。全体にサビの膨れがある。柄部側の遺存状態が不良である。農耕具とみられる。④TAYC42土-17	
6	鎌 鉄製	略完		フク土	刃部の長さ15cm、身の幅3cmである。茎の先端部は巻き込んでいる。刃部は内湾気味で、横からみると刃部中央がくぼんでいる。全長17.7cm。④TAYC42土-18	
7	鎌 鉄製	略完		フク土	全長8.5cm、身の幅1.8cmほどが遺存する。サビが進んでいるため、観察不良である。④TAYC42土-19	
8	不明 鉄製			フク土	カスガイの金具か。全長8cmが遺存する。中央部の厚さ0.3cmほどである。④TAYC42土-20	
9	不明 鉄製			フク土	一端が「L」字状に曲がっている。幅2.6cm前後の帯状のもの。用途不明。④TAYC42土-21	
10	貨幣 銅製	略完		フク土	「寛永通宝」。裏面に波がある。④TAYC42土-23	

田端地区C区遺構外出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴	④整理番号	備 考
1	磁器 皿	表採	底部～口縁	①白色、緻密②普通 ③透明釉、染付	型物の瑠璃手角皿である。高台端部は釉ハギで露胎。内面は粒の不揃いな気泡が多く、群青の発色に冴えない。④TAYCG-23		伊万里系 18世紀 148
2	陶器 皿	P14	底部片 底 (6.7)	①淡灰色②普通③灰 黄色、鉄絵	見込に鉄絵、型絵摺りあり。底部は付高台で露胎である。内面は灰釉を施している。目痕が1ヶ所ある。④TAYCG-19		瀬戸美濃系 17世紀前半 149
3	陶器 皿	フク土	底部片 底 (6.5)	①灰黄色②普通③乳 白色、鉄絵	外底は付高台で露胎である。内面は鉄絵の上に不透明な長石釉を薄く施している。④TAYCG-20		瀬戸美濃系 17世紀前半 150
4	陶器 碗	フク土	体部～底部片 底 4.8	①暗褐色②普通③白 土、透明釉	高台端部は釉ハギ、外面は波状の刷毛目、内面は小斑状の白土掛け後、長石釉を施している。④TAYCG-9		唐津系 18世紀 151
5	陶器 香炉か	フク土3 片	底部～体部片 ～口縁片 口 (9.7) 高 5.2 底 (7.8)	①灰黄色②普通③淡 灰黄色	内面体部のコテ痕がやや強く、口縁端部を除いて露胎であり香炉と推測。外面に沈線を加えて8弁の蓮を意匠。灰釉で細貫入あり。④TAYCG-10		瀬戸美濃系 17世紀～18世紀
6	陶器 香炉	その他	口縁小片 口 (12.8)	①灰黄色②普通③茶 褐色	体部は薄手である。口縁端部はやや内傾。口縁上端から外面に鉛釉を施し、細貫入が多く見られる。④TAYCG-14		瀬戸美濃系 18世紀前半 152
7	陶器 香炉	フク土	底部片 底 (11.8)	①灰黄色②普通③暗 褐色	足は両脇から押し内面に絞り込まれている。外面体部に鉄釉を施すが、内面にもごく薄く施釉されている。④TAYCG-15		瀬戸美濃系 17世紀 153

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴 ④整理番号	備 考
8	陶器片 口片	フク土4片	口縁～体部 ～口部 口 (18.6)	①灰色②普通③白土、透明釉	外面波状、内面圈線状の白土掛け。長石釉を漬掛けするが外面下半まで及ばない。口縁上半は釉ハギ。④TA¥CG-12	唐津系 17世紀～18世紀
9	軟質陶器 火鉢		脚部片 口 39.6	①砂粒・細粒を含む ②酸化③褐色	火鉢の高台状脚部片である。全体的に褐色の燻がおよぶ。④TA¥CG-4	在地製
10	陶器鉢	フク土2片	底部 底 (15.9)	①灰黒色②硬調③茶褐色	1単位11本以上の細かな卸目である。外底は蛇目高台状。外面に柿釉風のテリの強い釉を施している。④TA¥CG-17	備前か 19世紀後半

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特 徴	①胎土②焼成③色調④備考
11	高台付杯 須恵器	⅔	口径 17.0 器高 4.2 高台 11.1	南トレンチ	体部は内湾気味に立ち上がる。外底はヘラ切り後、ケズリ出し高台にする。高台の高さは0.1cmほどである。体部は丁寧なヨコナデを施す。	①細砂粒を含む②還元③灰色④TA¥CG-2
12	甕 土師器	口縁部 ～体部	口径 21.7 現存高24.0 ……	南トレンチ	体部下位以下を欠く。体部上位にやや張りがあり、口縁部は「く」字状に外反する。体部外面は斜めのヘラケズリ、内面は丁寧なナデを施す。	①砂粒を含む②酸化③褐色 ④TA¥CG-1

田端地区D区第1号竪穴出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特 徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	杯 土師器	⅓	口径(11.9) 器高 2.7 深さ 2.5	フク土	口縁部は内湾気味に立ち上がる。体部と口縁部との境にぶい外稜をもつ。器表の摩滅が著しい。	①砂粒を含む②酸化③褐色 ④TA¥D 1-1
2	杯 土師器	口縁部 ～体部 小片	口径(13.6) 現存高4.0 ……	フク土	底部を欠く。口縁部と体部との境にぶい外稜をもつ。内外面とも器表の摩滅が著しい。	①砂粒を含む②酸化③褐色 ④TA¥D 1-2
3	壺? 須恵器	口縁部 1/6	口径(11.2) 現存高3.9	フク土	体部以下を欠く。口縁部はかるく外反し、外面に断面三角形の凸線をもつ。内外面ともヨコナデを施す。	①細砂粒を含む②還元、硬質③灰色④TA¥D 1-4

田端地区D区第2号竪穴出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特 徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	高台付杯 須恵器	¼	口径(16.8) 器高 5.7 高台 11.3 深さ 4.6	中央北寄 床面	口縁部の大半を欠く。体部は直線的に開き口縁部に至る。外底は左回転ヘラ切り後、高台を削り出す。体部と内底はロクロナデを施す。	①砂粒・白色粒子を含む ②還元、硬質 ③灰色④TA¥D 2-1
2	杯 土師器	口縁部 小片	口径(12.3) 現存高2.9	フク土	底部を欠く。外面に非回転のヘラケズリを施す。器表の摩滅が著しい。	①砂粒を含む②酸化③ぶい褐色④TA¥D 2-3

遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
3	スリ鉢 須恵器	底部 1/2	…… 現存高2.6 底径(11.1)	中央北寄 床面	体部以上を欠く。底部は高台のように「ハ」 字状に開く。体部との接合面を残している。 焼き割れを生じている。	①砂粒を含む②還元、硬質 ③灰色④TAYD 2-2

田端地区D区第1号溝出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴 ④整理番号	備考
1	軟質陶器 内耳鍋			①暗褐色②酸化焰、 燻	口縁端部はやや内傾し中央に沈線が巡って いる。見込中央に菊花様の印あり、口縁部 両側と底部中央に一对ずつの補修孔あり。 ④TAYD 1 溝-34	在地製 17~19世紀
2	軟質陶器 焙烙			①暗褐色②酸化焰、 燻	口縁部上半が強く外反。内面下半には息の 長い指頭状の横位の圧痕あり、口縁外面に スス付着。④TAYD 1 溝-35	在地製 17~19世紀
4	陶器鉢 搦鉢	礫層2片 接合	口縁~体部片	①淡黄灰色。粗い ②普通③鉄釉。テリ 強い	残存部全面に鉄釉。卸目は10条でやや弱い。 口縁端部が著しく磨耗している。④TAYD 1 溝-20	美濃焼 18世紀 154
5	陶器鉢 搦鉢		口縁~体部片	①茶褐色、夾雑物多 ②やや硬質③鉄釉	残存部全体に鉄釉。卸目は7条で、細かく 鋭い。片口部分は浅く平坦になっている。 ④TAYD 1 溝-21	常滑焼?
6	搦鉢?	礫層	体部片	①灰色。砂質②普通 ③無釉	卸目は8条で鋭い。④TAYD 1 溝-22	製作地不詳
7	陶器鉢 搦鉢	フク土	口縁部片	①淡黄灰色②普通 ③茶褐色	内・外面に鉄釉が施される。外面に一部露 胎の斑文あり。④TAYD 1 溝-30	美濃焼 18世紀~19世紀
8	磁器皿	フク土	底部片	①白色②普通③透明 釉。染付	削出高台か。釉は全面にかかる。細かな貫 入が多い。呉須はややくすんだ藍色を呈し、 見込全体に菊文を描く。④TAYD 1 溝-18	伊万里系
9	陶器 灯火皿	フク土	1/2	①灰白色、やや緻密 ②普通③透明な灰釉	外面は露胎。外面口縁下部以外は丁寧なへ ラケズリ調製。内面に3本のカキ目あり。 釉には細貫入が入る。④TAYD 1 溝-16	製作地不詳 17世紀~18世紀
10	陶器 碗	フク土4 片接合	口縁~体部片	①淡黄白色、粗い ②普通③鉄釉	口縁部の屈曲がなく、天目茶碗とは異なる。 釉は薄い。④TAYD 1 溝-23	美濃焼 17世紀 155
11	陶器 碗	フク土6 片接合	1/2	①灰色、やや粗く小 石を含む②普通③胎 釉。口縁部白濁釉か	高台際以下露胎。口端下部内面の一部に白 濁釉が流れており、口縁に灰釉系の白濁釉 を流していた可能性がある。石はざあり ④TAYD 1 溝-13	瀬戸美濃系 17世紀前半 156
12	磁器 碗	フク土	体部~底部	①淡灰色②普通③透 明釉、染付	高台端部を除いて内・外面に白磁釉が施さ れる。外面に呉須による染付あり、呉須は 淡い青色④TAYD 1 溝-24	伊万里系 18世紀 157
13	磁器 碗	フク土	底部1/2	①淡灰色②普通③透 明釉、染付	高台端部を除いて、内・外面に白磁釉が施 される。外面に二重網文あり。呉須は淡い 青色④TAYD 1 溝-26	伊万里系 18世紀 158

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴	④整理番号	備 考
14	磁器 仏飯器	礫層	脚部	①白色②普通③青味 を帯びた透明釉	脚部裏は露胎。杯部はやや大きい。釉がうすいため、呉須の一部は黒味を帯びている。	④TAYD 1溝-15	伊万里系 18世紀 159
15	陶器 香 炉	フク土	口縁～体部片	①淡黄色、やや粗い ②普通③褐釉	口縁は内傾し、内側に突出する。端部は磨滅する。内面口縁下位以下は露胎。	④TAYD 1溝-19	瀬戸美濃系 18世紀 160
16	陶器 香 炉	フク土2 片接合	底部 $\frac{1}{2}$	①淡黄色、緻密②普通 ③褐釉	内面と腰部以下は露胎。体部下位には沈線を、腰部には断面三角形の突帯をめぐらす。	④TAYD 1溝-14	瀬戸美濃系 17世紀 161
17	陶器 香 炉	フク土	体部～底部片	①淡黄灰色②普通 ③御深井釉。鉄絵	底部と内面下半は無釉。鉄絵の型紙摺と思われるが不明瞭。貫入の方向から判断すると左回りロクロ上の成形。	④TAYD 1溝-17	瀬戸美濃系 17世紀～18世紀
18	陶器 耳 壺	フク土2 片接合	口縁～体部片	①淡灰色②普通③茶 褐色	鉄釉が外面、口縁内面までおよぶ。耳が取れているが欠損痕あり。	④TAYD 1溝-28	製作地不詳 17世紀～18世紀
19	陶器 梅 瓶	1ミソ	胴部片	①淡灰色。気泡含む ②普通③鉄釉	印花文。葉研彫り。内面は紐作後やや粗い削り。釉は胎釉状。	④TAYD 1溝-29	瀬戸焼 14世紀 162
20	磁器 徳利または 油 壺	フク土	体部片	①淡白灰色②普通 ③白磁釉、染付	外面のみ施釉され、染付あり。内面は無釉でコテの挽跡あり。	④TAYD 1溝-25	伊万里系 18世紀 163
21	陶器 水 注	フク土	把手	①淡灰色②硬調③淡 黄緑色	全面に胎釉が施される。	④TAYD 1溝-31	瀬戸焼 17世紀～18世紀
22	陶器 鉢	礫層	口縁～体部片	①淡黄灰色②普通 ③淡黄色	大鉢片である。外面口縁部下に太い1条の沈線あり。全面施釉。	④TAYD 1溝-27	美濃焼 18世紀 164

番号	器種	遺存	法 量	出土位置	特 徴	①胎土②焼成③色調④備考
3	砥 石	小片		フク土	2面を使用しているが割片のため全体の形状は不明。図中の天部と左側面が使われている。キメは細かい。石質泥岩?	④TAYD 1溝-11

報告 番号	観察 通番	出土 地点	瓦の 種別	厚さ	胎 土		焼 成		成 形 技 法						整 形 技 法				摘 要	
					素地	夹杂物	焼き上り	色調	粘土板剝取 凹面 凸面	一枚 作り	桶寄 木痕	粘土板 合せ目	布の合 合せ目	タタ キ目	ロク ロ目	ヘラ ケズリ	布の擦消			側部 面取
																	凹面	凸面		
23	1048	D区1 溝	軒丸		密	微	軟	淡赤褐												中区部分1047と同一か未分1A類かTAYD1溝-10
24	1044	D区1 溝	軒丸		密	微	硬	黒灰												中区一部未分1A類か。TAYD1溝-7
25	1024	1溝	軒丸		密	微	普	黒灰					平行							素縁、中区僅かに残存1A類TAYD1溝-3
26	1066	D区1 溝	軒丸	(1.4)	密	微	軟	淡灰(なし)	(なし)	(なし)	(なし)	(なし)	(平行)	なし	なし	(なし)	(なし)			丸瓦直接合を示す好例1A類TAYD1溝-12
27	1047	1溝	軒丸		密	微	軟	淡赤褐												中区剥落未分1A類かTAYD1溝-9
28	1007	D区1 溝	軒平		密	微	普	黒灰												重瓦文類部のみ曲線類未分1A類かTAYD1溝-1

遺物観察表

報告 番号	観察 通番	出土 地点	瓦の 種別	厚さ	胎 土		焼 成		成 形 技 法						整 形 技 法				摘 要		
					素地	挟雑 物	焼き 上り	色調	粘土板剥取		一枚 作り	桶密 木痕	粘土板 合せ目	布の合 合せ目	タタ キ目	ロク ロ目	ヘラ ケズリ	布の擦消		側部 面取	
									凹面	凸面								凹面			凸面
30	1045	D区1 溝	平	2.2	密	微	硬	灰	○	なし	○	なし	なし	素文	撫	なし	なし	なし	1	素文好例2類 TAYD1溝-8	
31	1043	D区1 溝	軒平	(2.2)	密	微	硬	黒灰	(○)	なし	(○)	なし	(なし)	(平行)	なし	なし	なし	なし		重弧文類部欠1A 類。TAYD1溝-6	
32	1034	1溝	軒平	(2.1)	密	微	硬	淡黄灰	(なし)	なし	(○)	なし	なし	平行太	なし	なし	なし	1	曲線類三重弧文1 B類 TAYD1溝-5		
33	1013	1溝	軒平		密	微	軟	淡灰												曲線類三重弧文類部 のみ欠分1A類か TAYD1溝-2	

田端地区D区第2・4号溝出土遺物観察表

番号	器 種	出土位置	量 目	①胎土②焼成③釉調	特 徴	④整理番号	備 考
1	陶 器 碗	2号溝 P 2	略完形	①濃い黒脂色②普通 ③白土・透明釉	外面波状、内面渦巻状の刷毛目に白土を施した上から長石釉を施している。畳付き部は釉ハギで露胎である。④TAYD2溝-1		唐津系 18世紀 165
2	陶 器 碗	2号溝 P 5	1/2	①淡黄白色②普通 ③にぶい黄橙色	釉は透明釉で高台際以下は露胎。細貫入がある。外面に鉄絵あり。黒色に発色している。高台は端正な造りである。④TAYD2溝-2		京焼系
3	陶 器 鉢	2号溝	口縁部片	①淡黄灰色②普通 ③明オリブ灰色、 透明釉	釉は御深井釉で、細かな気泡と貫入が入る。④TAYD2溝-4		美濃焼 18世紀 166
4	陶 器	2号溝 P 1	口縁部片	①淡黄灰色②普通 ③黒褐色、黒色	釉は鉄釉でやや光沢がある。表面の風化が進んでいる。2次被熱を受けている可能性がある。④TAYD2溝-3		美濃焼
5	陶 器 碗	4号溝 フク土	体部～底部	①淡灰色。やや粗 ②普通③黒褐色	高台は太く、付き部分は広い。釉は胎釉で高台際以下は露胎。④TAYD4溝-1		瀬戸美濃系 17世紀前半 167

田端地区D区第16号土坑出土遺物観察表

番号	器 種	出土位置	量 目	①胎土②焼成③釉調	特 徴	④整理番号	備 考
1	陶 器 碗		体部～高台片	①淡灰色②普通③透 明釉	釉は長石釉で、やや粗い貫入が入っている。外面底部と高台付近は無釉である。④TAYD16土-1		瀬戸美濃系 17世紀 168
2	陶 器 菊 皿		口縁～体部片	①淡黄灰色②普通 ③茶褐色、濁緑色	釉の厚さは不均等で、光沢がある。④TAYD16土-2		美濃焼 17世紀 169

田端地区D区遺構外出土遺物観察表

番号	器 種	出土位置	量 目	①胎土②焼成③釉調	特 徴	④整理番号	備 考
1	陶 器 皿	VI層	口縁～底部片	①淡黄色、粗い②普 通③淡いオリブ色	高台は削出でやや高い。釉は灰釉で、外面下半以下は無釉。見込縁辺に重ね焼き痕がある。④TAYDG-1		美濃焼 17世紀 170

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
2	杯 土師器	略完	口径 12.1 器高 3.0	第3トレンチ	口縁部は内湾気味に立ち上がる。外底は非回転のヘラケズリ、内面はナデを施す。	①砂粒を含む②酸化③橙色 ④TA¥DG-2
3	杯 土師器	略完	口径 10.5 器高 3.3	9層	口縁部と体部との境にふい外稜をもつ。外底は非回転のヘラケズリ、内面はナデを施す。	①砂粒を含む②酸化③橙色 ④TA¥DG-3

田端地区E区遺構外出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	杯 土師器	⅔	口径 11.0 器高 3.1	9層	口縁部は内湾する。体部との境にふい外稜をもつ。外底は非回転のヘラケズリを施す。	①砂粒を含む②酸化③橙色 ④TA¥DG-7
2	杯 土師器	⅔	口径 10.9 器高 2.9	9層	口縁部内湾気味に立ち上がる。体部との境にふい外稜をもつ。外底は非回転のヘラケズリを施す。	①砂粒を含む②酸化③橙色 ④TA¥DG-6
3	杯 土師器	略完	口径 9.9 器高 3.1	9層	口縁部は直立する。体部との境にふい外稜をもつ。器表の摩滅が著しい。	①砂粒を含む②酸化③橙色 ④TA¥DG-5
4	杯 土師器	略完	口径 10.3 器高 3.2	9層	口縁部は内湾する。体部との境に外稜をもつ。外底は非回転のヘラケズリを施す。	①砂粒を含む②酸化③橙色 ④TA¥DG-4
5	杯 土師器	略完	口径 11.3 器高 3.5	9層	口縁部は直立し、口唇部内側は丸く肥厚する。体部との境にふい外稜をもつ。外底は非回転のヘラケズリを施す。	①砂粒を含む②酸化③橙色 ④TA¥DG-3
6	蓋 須恵器	口縁部 小片	口径(10.1) 現存高2.1	10層	天井部を欠く。口縁部内側にカエリをもち、わずかに突出する。外面はナデ、内面はヨコナデを施す。	①白色粒子を含む②還元 ③灰色④TA¥DG-12
7	杯 須恵器	小片	口径(8.9) 器高 3.2 底径(5.3)	10層	底部中央を欠く。体部は直線的に開いて口縁部に至る。内外面ヨコナデを施す。	①白色粒子を含む②還元 ③灰色④TA¥DG-13
8	皿 須恵器	¼	口径(29.3) 器高 3.9 底径(24.0)	10層	底部中央を欠く。口唇部に凹線をもつ。外底は左回転のヘラケズリ、内面はヨコナデを施す。仕上げは丁寧である。	①砂粒を多く含む②還元 ③明褐色④TA¥DG-69
9	杯 土師器	⅔	口径(11.1) 器高 4.0	10層	口縁部は内湾気味に立ち上がる。体部との境にふい外稜をもつ。外底は非回転のヘラケズリを施す。	①砂粒を含む②酸化③橙色 ④TA¥DG-19
10	杯 土師器	¼	口径(11.0) 器高 3.4	10層	口唇部は内傾して丸く肥厚する。外底は非回転のヘラケズリを施す。	①砂粒を含む②酸化③橙色 ④TA¥DG-17
11	杯 土師器	略完	口径 11.3 器高 3.4	10層	口唇部は内湾する。外底は非回転のヘラケズリを施す。	①砂粒を含む②酸化③橙色 ④TA¥DG-15
12	杯 土師器	略完	口径 10.8 器高 2.9	10層	口唇部は丸く肥厚する。外底は非回転のヘラケズリを施す。歪みあり。	①砂粒を含む②酸化③にふい ④TA¥DG-22
13	杯 土師器	略完	口径 10.0 器高 3.6	10層	口縁部は内湾する。体部との境にふい外稜をもつ。外底は非回転のヘラケズリを施す。	①砂粒を含む②酸化③橙色 ④TA¥DG-21

遺物観察表

寺東地区土塁出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	杯 土師器	略完	口径 11.4 器高 2.7 底径 6.9	L-9堀 15層	歪みあり。底部が薄い。外底は左回転糸切り後無調整。口縁部がやや厚手。	①細砂粒を含む②酸化③浅黄橙色④TEY土塁-1

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
2	陶器 碗	土塁下16区	口径 13.5 高 4.0 底 (5.2)	①淡灰色②普通③透明釉、青緑色	長石釉漬掛けの上に内面と口縁外端に緑釉を施している。見込は蛇目釉ハギで深く削り込む。外底も露胎。④TEY土塁-3		唐津系 17世紀後半～ 18世紀前半 171
3	磁器 碗	土塁4T内	口径 (12.0) 高 6.5 底 4.9	①白色②普通③透明釉、染付	厚手。疊付き釉ハギ。染付けは山具須で褐色味を帯びた発色である。見込にコンニャク判があるが意匠不明。④TEY土塁-2		伊万里系 18世紀 172

寺東地区第1号溝出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	杯 土師器	略完	口径 11.1 器高 2.4 底径 6.8	フク土	体部は直線的に開き、口縁部に至る。口縁部は強いロクロナデによって薄くなる。内外面摩擦が著しい。	①精良②酸化、軟質③にぶい橙色④TEY1溝-1
2	杯 土師器	略完	口径 10.1 器高 2.4 底径 5.9	フク土	底部を水平に置くと、口縁部が傾く。内面の底部と体部との境に強いロクロナデを施す。外底は右回転糸切り痕を残すが、摩擦している。	①細砂粒を含む②酸化③橙色④TEY1溝-2

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
3	軟質陶器 火鉢		口縁部片	①夾雑物多い、雲母散見②普通③濁灰褐色	口縁部外面に米印のスタンプと、貼り付けた隆帯を親指の脇腹付近で押圧した施文を行なっている。上端は平坦。		在地製
4	軟質陶器 火鉢		胴部片	①砂粒・細礫多い②普通③暗灰褐色	足の付く器形と思われ、底部割口にヘラ押圧の痕がある。外面体部下端の×印は刻線。割口は全体に磨耗。④TEY1溝-16		在地製
5	軟質陶器 内耳		小片	①灰白色、軽量②還元、硬調③灰褐色	耳は口縁上端まで達しているが、くねるような歪みがある。底部は若干丸底傾向。口縁部内外面に接合痕。④TEY1溝-3		在地製
6	軟質陶器 播鉢		底部	①砂粒・細礫多く粗い②普通③黒褐色・灰褐色	5本1単位の卸目を体部に6条配しているが、見込にはなし。内面のみ燻。使用の痕跡は少ない。④TEY1溝-18		在地製
7	陶器 播鉢		口縁～体部	①熟脂色②硬調	細く鋭い11本1単位の卸目をすき間なく施している。口縁部外面に2条沈線を配し、鉄釉系のわずかな施釉。④TEY1溝-8		産地不詳

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴 ④整理番号	備 考
8	陶器 甕		口縁部片	①黄褐色、白色鉱物 ②やや軟調③灰褐色、暗褐色	口縁部外面がやや下方を向き、常滑Ⅲ期の特徴を示している。2次の被熱を受けた可能性あり。④TE¥1溝-5	13世紀後半～ 14世紀前半 常滑か 173
9	陶器 蓋	I 9Ⅷ層	摘部	①灰黄色、細砂多い ②普通③茶褐色	14弁の菊花状に浮彫りした台を持つ。鉄釉を厚く施し、彫り込みの部分は黒褐色を呈している。④TE¥1溝-4	瀬戸美濃系か 17世紀～19世紀
10	陶器 蓋	22-1		①白色②普通③透明釉、染付	摘み端部は釉ハギで尖る。細線を多様する筆使いで清朝写の流れを引く。呉須はやや燻んだ藍色で発色悪い。④TE¥1溝-12	伊万里系 18世紀～19世紀
11	陶器 小皿	略完	口 7.9 高 1.8 底 3.4	①灰黄色②普通③濁黄褐色	見込に3ヶ所の目跡が残っている。底部を除いて鉄釉を施す。漬掛と思われる。灯明皿として使用。④TE¥1溝-10	瀬戸美濃系 18世紀～19世紀
12	磁器 皿	22-1		①灰白色②普通③透明釉、染付	口縁端部に鉄釉で口錆。呉須はやや沈んだ藍色に発色。白磁釉の発色も悪い。やや粗い貫入が見られる。④TE¥1溝-30	伊万里系 19世紀中頃
13	磁器 小碗	22-1	口縁片 口 7.8	①淡い灰白色②普通③透明釉、染付	下半で肉厚となる。残存部分では外面下端に圏線があるのみ。呉須は沈んだ藍色。器面には細かな気泡が多い。④TE¥1溝-22	伊万里系 18世紀 174
14	磁器 皿	22-2		①白色②普通③透明釉、染付	高台端部を釉ハギし、内側には白色砂粒が付着している。呉須はややくすんだ藍色を呈している。④TE¥1溝-33	伊万里系 18世紀 175
15	陶器 碗	西	高 1.6 底 4.4	①灰黄色②普通③黒褐色、淡灰緑色	内面鉄釉系透明釉・外面鉄釉の掛分。畳付きは釉ハギで露胎だが融着した付着物多い。内面に粗い貫入。④TE¥1溝-9	瀬戸美濃系 18世紀～19世紀
16	磁器 碗	22-3		①白色②普通③透明釉、染付	高台端部は釉ハギし、両側に白色砂粒が付着。呉須はくすんだ藍色で、外底銘は判読できず。一字は太か天。④TE¥1溝-35	伊万里系 18世紀 176
17	磁器 碗	22-33		①白色②普通③透明釉、染付	生掛けで微細な気泡あり。畳付きから高台内側に砂付着。ロクロ回転不明。呉須はやや沈んだ藍色に発色。④TE¥1溝-21	景德鎮窯系もしくは伊万里系 17世紀 177
18	磁器 碗	22-12		①白色②普通③透明釉、染付	古染付の写しだが、外面は唐草の意匠である。呉須は比較的鮮やかな藍色に発色。器面にやや大粒の気泡。④TE¥1溝-23	伊万里系 18世紀 178
19	陶器 碗	22-36	底径 5.0	①黄灰②普通③透明釉、染付。	内面に鉄絵が施される。高台際と外底部は露胎となる。④TE¥1溝-24	京焼系 18世紀
20	陶器	22-23		①灰色②普通③透明釉	内面に白土掛けの部分がある。長石釉を施している。光沢が強く、細貫入。上野焼等の九州諸窯の製品か。④TE¥1溝-51	唐津系 18世紀～19世紀

遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
21	石 白	1/2		トレンチ	上白。中央の回転軸の穴と物を入れる孔、及び回転を与える把手挿入の穴が遺存している。底面の目はほとんど擦れてしまい、方向が判明する程度である。④TE¥1溝-54	
22	リング鉄製	略完		フク土	サビの程度は新しい。外径5.2cm、内径4.2cmで、幅0.8cmである。用途・名称不明。④TE¥1溝-62	
23	キセル銅製?	火皿		フク土	腐食がすすんでいる。火皿の径1.3cm。ラウの一部が遺存する。④TE¥1溝-61	
24	貨幣銅製	略完		フク土	「永楽通宝」。初鑄1408年。24から29まで貼り付いていた一括遺物。④TE¥1溝-55。	
25	貨幣銅製	略完		フク土	「永楽通宝」。④TE¥1溝-56。	
26	貨幣銅製	略完		フク土	「永楽通宝」。④TE¥1溝-57。	
27	貨幣銅製	略完		フク土	「永楽通宝」。④TE¥1溝-58。	
28	貨幣銅製	略完		フク土	「永楽通宝」。④TE¥1溝-59。	
29	貨幣銅製	略完		フク土	「永楽通宝」。④TE¥1溝-60。	
30	貨幣銅製	略完		フク土	「寛永通宝」。④TE¥1溝-64	
31	貨幣銅製	略完		フク土	「寛永通宝」。4カ所に孔が空いている。オモチャにしたものか。④TE¥1溝-63	

寺東地区第3号溝出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
1	磁器碗	3溝		①白色②普通③透明釉、染付	やや小振りの碗で、染付の冴えた優品である。呉須はやや沈んだ藍色に発色。畳付き内側に砂粒が付着。④TE¥3溝-1		伊万里系 18世紀 179
2	陶器碗	3溝		①灰黄色②普通③淡い黄褐色	腰のハリの弱い体部である。灰釉を全面に施し、やや粗い貫入。④TE¥3溝-3		美濃焼 18世紀 180
3	磁器猪口	3溝		①白色②普通③透明釉、染付	高台端部はふき落して露胎となっている。呉須はベロ藍である。④TE¥3溝-2		伊万里系 19世紀後半

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
4	貨幣銅製	略完		フク土	「寛永通宝」。④TE¥3溝-8	

寺東地区第5号溝出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	杯 土師器	1/2	口径 7.3 器高 2.1 底径 4.2	フク土	口縁部は直線的に開く。外底は左回転糸切り後無調整。内外面ともスス付着。	①細砂粒を含む②酸化③褐色④TEY 5溝-12
2	杯 土師器	略完	口径 12.2 器高 3.1 底径 6.7	フク土	底部が厚く、体部～口縁部は均一に薄い。口唇部外面に浅い凹線をもつ。	①細砂粒を含む②酸化③にぶい橙色④TEY 5溝-2

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特徴	④整理番号	備考
3	陶器 碗	42-5	底部片	①灰黄色②普通③光沢ない黒褐色	見込中央が若干突出している。削り高台で底部肉厚、外底は露胎である。鉄釉を施している。④TEY 5溝-14		瀬戸美濃系 17世紀後半～ 18世紀
4	磁器 碗	フク土	底 3.8	①灰白色②普通③やや燻んだ空色に近い青磁釉	ロクロ回転は左と思われるが、粒の不揃いな気泡から初期の伊万里青磁と推定。釉は生掛け。④TEY 5溝-8		伊万里焼 17世紀 181
5	陶器 天目碗	フク土	底部～高台部片 底 (4.0)	①灰白色②普通③黒褐色	頸部のくびれの弱い器形である。鉄釉を施し、釉の薄い上半は茶色味を帯びている。ごく細かな貫入がある。④TEY 5溝-9		瀬戸美濃系 17世紀前半 182
6	軟質陶器 挿鉢	1/2		①夾雑物やや多い ②やや硬調③茶褐色、 下方に灰色味	6本1単位の卸目を体部下半から見込縁辺にかけてのみ配す。外底は糸切と思われるが磨耗進み不明瞭。④TEY 5溝-1		在地製
7	軟質陶器 内耳鍋	口縁～胴部		①砂粒含む。雲母目立つ②普通③灰褐色	断面の丸い小さな耳が付く。外面体部に若干ススが付着する。④TEY 5溝-6		在地製 16世紀頃
8	軟質陶器 内耳鍋	口縁～胴部		①灰色。砂粒・細礫含む②還元③灰褐色	小形で深い器形。口縁部割れ口付近には内側から押しつけたような歪みがあり、耳が付くものと思われる。④TEY 5溝-4		在地製
9	軟質陶器 内耳鍋	口縁～底部 1/2		①茶褐色、砂粒含む ②普通③茶褐色	小形だが肉厚で重量。歪みのない均整な器形である。口縁端部は平坦。外面には指頭による抉るような擦痕。④TEY 5溝-5		在地製

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
10	石 白	1/2		フク土	上白。下面の目は細かい。石質粗粒安山岩。側面に回転を与える把手の挿入穴があり、座の痕跡がある。④TEY 5溝-3	

寺東地区第6・11・12B・14号溝出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	土鍋 軟質陶器	口縁部～体部 小片	口径(28.1) 現存高15.2 ……	フク土	体部は直線的に開き、口縁部は内湾して開く。頸部内面に稜線をもつ。	③黒色④TEY 6溝-1

遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴 ④整理番号	備 考
2	陶器 杯	11溝 フク土	口縁～底部片 口 (10.5) 高 2.3 底 (5.6)	①灰黄色②普通③淡 緑色	口縁部が外反している。口径に比して器高がある。口縁端部に厚い灰釉を施し、粗い貫入がある。見込が磨耗し平滑である。 ④TEY11溝-2	瀬戸美濃系 15世紀 184
3	軟質陶器 土 鍋	11溝	口縁～体部片 口 (29.4)	①灰黄褐色、やや粗 い②普通③内面灰褐色、外面黒褐色	体部がふくらみ、頸部のくびれがやや強い。口縁端部は平坦である。2次被熱の影響が強く、外面スス付着顕著。④TEY11溝-1	
5	軟質陶器 火 鉢	12溝	口縁～体部片 口 (34.4)	①小粒の夾雑物多い ②硬調③茶褐色	口縁部外面を二重の隆帯で画し、雷文と乳頭状の突起で施文している。足は丈夫な作りで、ヘラで鋭く削り込んでいる。畳付き部分が磨耗している。④TEY12溝-1	在地製 14世紀～15世紀 183

番号	器種	遺存	法 量	出土位置	特 徴	①胎土②焼成③色調④備考
4	杯 土 師 器	略完	口径 7.1 器高 2.3 底径 4.0	フク土	体部は直線的に開き、口縁部に至る。外底は右回転糸切り後、無調整。口縁部の内外にスス付着。	①細砂粒を含む②酸化③黄 灰色④TEY12溝-2
6	貨幣 銅 製	略完			「皇宋通宝」。初鋳1253年。④TEY14溝-2	

寺東地区第1号火葬墓、1・3号墓墳出土遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴 ④整理番号	備 考
1	軟質陶器 壺		口縁～底部 底 13.5	①粗砂・細礫が多い ②酸化焙③淡褐色、 黒斑あり	器面に輪積痕と思われる凹凸が残っている。外面は縦位のヘラ磨き。内面は横位の粗い擦痕。付け高台。④TEY1火葬墓-1	各地で骨壺例あり

番号	器種	遺存	法 量	出土位置	特 徴	①胎土②焼成③色調④備考
2	杯 土 師 器	略完	口径 11.6 器高 2.4 底径 6.8	フク土	体部は直線的に開く。外底は左回転糸切り後、無調整。内底にスミが付着。墨書の跡か。	①細砂粒を含む②酸化③に ぶい褐色④TEY1墓-1
3	杯 土 師 器	完形	口径 11.9 器高 2.5 底径 7.0	フク土	体部は直線的に開く。外底は左回転糸切り後、無調整。全体に均一な仕上げ。	①細砂粒を含む②酸化③褐 色④TEY1墓-2
4	杯 土 師 器	略完	口径 13.4 器高 3.3 底径 6.8	フク土	体部は直線的に開く。外底は左回転糸切り後、無調整。内面の体部と底部との境がくぼむ。	①細砂粒を含む②酸化③に ぶい褐色④TEY1墓-1
5	杯 土 師 器	略完	口径 14.7 器高 3.2 底径 7.0	フク土	体部は直線的に開く。外底は左回転糸切り後、無調整。内面の体部と底部との境に強いロクロナデを施す。	①細砂粒を含む②酸化③に ぶい褐色④TEY1墓-4
6	貨幣 銅 製	割れ		フク土	サビのため文字不明。④TEY3墓-1	

寺東地区（1号火葬墓）（1・3・12・17・20号墓墳）（30・35A・56号土坑）

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
7	貨幣製 銅	割れ		フク土	サビのため文字不明。④TEY3墓-2	
8	貨幣製 銅	略完		フク土	「天聖通宝」。④TEY3墓-3	

寺東地区第12・17・20号墓墳出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	こね鉢？ 須恵質	口縁部 ～体部	口径(35.1) 現存高5.4 ……	フク土	口縁部の一部が片口状に曲げられている。須恵質の焼成。口唇部に平坦面をもつ。	①小石を含む②還元③灰色 ④TEY12墓-2
2	内耳土器 軟質陶器	口縁部 ～体部	口径(38.1) 現存高10.2 ……	フク土	体部下半以下を欠く。口縁部は内湾して開く。口唇部に平坦面をもつ。	①砂粒を含む②酸化気味 ③にぶい黄褐色 ④TEY20 墓-1
3	貨幣製 銅	割れ		フク土	「紹興元宝」？。初鑄1131年。④TEY17墓-1	
4	貨幣製 銅	略完		フク土	「聖宋元宝」。初鑄1101年。④TEY17墓-2	

寺東地区第30・35A号土坑出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	刀子製 鉄	略完		フク土	全長21cmが遺存する。木質が遺存しており、切っ先から木質部分まで14cmほどある。身の幅1.6cm、棟の厚さ0.5cmほどである。全体が5つに割れている。両関か。④TEY30土-1	
2	ホウロク 軟質陶器	口縁部 小片	…… 現存高5.5 ……	フク土	口縁部を水平近くまで引き出し、その直下を強くナデつける。在地製か。	①砂粒を多量に含む②酸化 ③黒褐色④TEY35A土-1

寺東地区第56号土坑出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	貨幣製 銅	略完		フク土	2枚がサビのため張り付いたままである。一方の貨幣は「太平通宝」と読める。初鑄976年。④TEY56土-5・6	
2	貨幣製 銅	略完		フク土	2片に割れている。「皇宋通宝」初鑄1039年。④TEY56土-12	
3	貨幣製 銅	割れ		フク土	裏面はアズキ色を呈する。「治平元宝」初鑄1064年。④TEY56土-11	
4	貨幣製 銅	略完		フク土	「熙寧元宝」初鑄1068年。④TEY56土-7	

遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
5	貨幣 銅製	略完		フク土	「元祐通宝」初鑄1086年。④TEY56土-8	
6	貨幣 銅製	略完		フク土	「元祐通宝」。④TEY56土-10	
7	貨幣 銅製	略完		フク土	「洪武通宝」。10と張り付いていた。④TEY56土-4	
8	貨幣 銅製	欠け		フク土	9と張り付いていた。サビのため文字不明。④TEY56土-1	
9	貨幣 銅製	周辺欠け		フク土	8と張り付いていた。サビのため文字不明。④TEY56土-2	
10	貨幣 銅製	略完		フク土	7と張り付いていた。サビのため文字不明。④TEY56土-3	
11	貨幣 銅製	摩滅		フク土	薄く摩滅して文字不明。	

寺東地区遺構外出土遺物観察表

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
1	杯 土師器	½	口径 7.1 器高 1.7 底径 4.6	15区I-6 IV層	底部から直線的に開いて口縁部に至る。内底周縁に強いロクロナデを施す。外底は左回転糸切り後、無調整。	①細砂粒を含む②酸化③に ぶい褐色④TEYG-16
2	杯 土師器	½	口径 (7.5) 器高 2.3 底径 5.3	A-C トレンヂ	1に似る。外底は左回転糸切り後、無調整。内底の周縁に強いロクロナデを施す。	①細砂粒を含む②酸化③に ぶい褐色④TEYG-26
3	杯 土師器	½	口径 (9.8) 器高 2.1 底径 5.8	17区 1～3	体部中位で屈曲し、口縁部に至る。体部～口縁部は厚手、底部は薄い。外底は回転糸切り後、無調整。	①細砂粒を含む②酸化③に ぶい褐色④TEYG-24
4	壺 須恵質	肩部		4号住居 フク土	壺の肩部小片。下半との境に凹線2本を施す。孔のあいた耳部が1つ遺存する。焼成時の灰を被っている。	①細砂粒を含む②還元③灰 色④TEYG-40
5	甕 土師質	口縁部 ～体部	口径(30.2) 現存高21. 2	16H04-1	体部下半以下を欠く。体部上半にやや膨らみをもち、口縁部は短く外反する。体部外面はタテ方向のナデ、内面はヨコ方向のナデを施す。	①砂粒を含む②酸化③に ぶい褐色④TEYG-36
6	銀 銅環地	略完			外径3.3cm、内径1.6cm、断面径0.85cm。銀膜を銅地に被せている。地金のサビが進んでいる。④TEYG-183	
7	鏡 銅製	柄折れ			柄部が折れて失っている。径6.2cm、厚さ1.5cmほど。背面に、水辺に草と鳥（鶴か）の絵がある。銘は「藤原」。④TEYG-180	
8	貨幣 銅製	半欠			「至道元宝」か。初鑄995年。④TEYG-175	

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特 徴	①胎土②焼成③色調④備考
9	貨幣製 銅	略完			「祥符通宝」。初铸1009年。④TEYG-174	
10	埴輪	小片		D南拡張区	円筒埴輪の一部。凸帯が遺存している。外面はタテ方向のハケ目調整を施す。	①砂粒を含む②酸化③にぶい褐色④TEYG-19
11	埴輪	小片		D南拡張区	円筒埴輪の一部。凸帯が遺存している。外面はタテ方向のハケ目調整を施す。器表荒れ。	①砂粒を含む②酸化③にぶい褐色④TEYG-22
12	埴輪	小片		北側下層表採	形象埴輪の一部か。ハケ目調整の後、三角文様を施す。ウラ面はハケ目調整のみ。	①砂粒を含む②酸化③にぶい褐色④TEYG-18
13	埴輪	小片		北側下層表採	円筒埴輪の一部。底部片で、径11.5cmに復元できる。外面は1単位9本の幅の広いハケ目調整を施す。器表荒れ。	①砂粒を含む②酸化③橙色④TEYG-17
14	埴輪	小片		D区	円筒埴輪の一部。凸帯の一部が遺存する。外面はタテ方向のハケ目調整、内面はナデを施す。	①砂粒を含む②酸化③橙色④TEYG-15
15	埴輪	小片		水田上採	形象埴輪の一部か。両面にハケ目調整を施す。盾等が推定される。	①砂粒を含む②酸化③橙色④TEY水田-2
16	硯石製	小片		B区	全体の形状は不明。石質頁岩。使い込まれて墨堂は平滑にくぼんでいる。④TEYG-9	
17	石白	1/8			下白。受け部の一部が遺存し、スリ目も比較的よく残っている。軸穴が半分残る。石質粗粒安山岩④TEYG-1	
49	石地藏	1/2			心洞寺南側の水田中から出土した。体部以下を失っている。後背の天部は尖り、前傾する。石質粗粒安山岩。④TEYG-121	

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴	④整理番号	備 考
18	陶器皿	17区改葬埋土	完形口 11.0	①灰黄色②普通③乳濁した灰緑色	口縁部外反し端部は丸い。高台は削出で端部は尖る。うのふ軸状の灰釉を漬掛したものと思われる。見込に重ね焼き痕。④TEYG-134		瀬戸美濃系 17世紀 186
19	陶器皿	17区改葬埋土	完形口 11.6	①灰白色、やや粗②普通③淡い灰緑色	高台は削出で端部やや尖る。灰釉を漬掛し、高台部、外底部は無釉。見込縁辺に重ね焼き痕が明瞭に残っている。④TEYG-133		瀬戸美濃系 17世紀 187
20	陶器皿	17区改葬埋土	完形口 13.2	①灰白色、やや粗②普通③淡い灰緑色	口縁端部若干外反する。高台は削出で端部尖る。釉は灰釉の漬掛で外底中心に偏って露胎。見込に重ね焼き痕あり。④TEYG-131		瀬戸美濃系 17世紀 188
21	陶器皿	17区改葬埋土	完形口 13.0	①灰白色、緻密②普通③淡い灰緑色	132と同巧だが見込の刻線はない。④TEYG-130		瀬戸美濃系 17世紀 189
22	陶器皿	17区改葬埋土	完形口 12.9	①灰白色、緻密②普通③淡い灰緑色	口縁端部外反。高台は削出で端部はやや尖る。見込に圈線状の刻線が巡っている。灰釉の漬掛と思われる外底部は無釉。④TEYG-132		瀬戸美濃系 17世紀 190

遺物観察表

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③色調	特徴 ④整理番号	備考
23	陶器 菊皿	17区改葬 埋土	完形 口 13.4	①乳白色②普通③淡 緑色	見込に圏線状の窪みあり、3ヶの目痕が 残っている。釉は漬掛。外底に墨書「佛□」。 ④TEYG-129	瀬戸美濃系 17世紀 191
24	磁器 皿	15道	1/4	①白色②普通③透明 釉、染付	高台は細く端部尖る。呉須は濃く沈んだ藍 色に発色している。全面に長石釉を施し、 畳付きのみ釉ハギする。黄白色砂粒付着。 ④TEYG-144	伊万里系 18世紀 192
25	磁器 皿	1519 A P純層	1/2 底 4.5	①白色②普通③透明 釉、染付	見込に蛇目釉ハギ、高台とその周辺は施釉 されず、露胎となっている。釉ハギ部は砂 粒の付着多い。山呉須で濁った発色。 ④TEYG-47	伊万里系 17世紀後半～ 18世紀前半 193
26	磁器 皿	B I、II		①白色②普通③透明 釉、染付	高台の大半を欠失している。白磁釉は生掛 けで粗い貫入が見られる。やや大粒の気泡 も多い。呉須は鮮かな藍色に発色している。 ④TEYG-156	景德鎮系 16世紀 194
27	磁器 皿	15道下碟		①濁った白色②普通 ③乳濁した水色	口錆(辰砂)を施す。菊花状の口縁部破片。 青磁釉はややくすんだ発色で、不揃いの粗 い気泡が入る。④TEYG-146	伊万里系
28	磁器 香炉	14～J 4		①灰白色、緻密②普 通③乳濁した水色	残存部分に施文なし。貫入なく、やや大粒 の気泡が若干見られる。151・153と同一個 体と思われる。七官青磁の可能性あり。 ④TEYG-148	伊万里系か龍泉 窯系 17世紀 195
29	磁器 香炉	14 J 4		①灰白色、緻密②普 通③乳濁した水色	三足のうち一足のみ残存している。畳付き 部を砥ぎ込んでいる。見込に劃文あり。148 と同一個体と思われる。④TEYG-153	
30	磁器	171—3 面表			148・153と同一個体と思われる。④TEYG -151	
31	陶器 碗	17南表	口底 13.2 5.0	①黄白色②普通③灰 黒色、透明釉	口唇部は内湾している。口唇部の両面に鉄 釉を施した後、全面に長石釉を施している。 全面に釉貫入が見られる。④TEYG-157	瀬戸美濃系 19世紀 196
32	陶器 碗	17第四次 南ソク第 二面表	口底 10.1 5.3	①乳白色②普通③茶 褐色、淡緑色	内面～口縁外面を灰釉、外面下半を鉄釉の 掛分。外面に不規則な押圧痕あり。畳付き は釉ハギで露胎。灰釉には粗い貫入。 ④TEYG-135	瀬戸美濃系 18世紀前半 197
33	磁器 小碗 (7片)	17面表	口底 9.2 4.0	①白色やや灰色味 ②普通	桐の意匠のコンニャク判を外面に6ヶ配し ている。畳付きを釉ハギし、内面に黄白色 の砂粒が付着している。④TEYG-136	伊万里系
34	磁器 小碗	17第四次 南ソク第 二面表 (5片)	口底 8.3 3.2	①白色②やや軟調 ③透明釉、染付	桐の意匠のコンニャク判を4ヶ配し、体部 下端と高台に圏線を加えている。畳付きを 釉ハギ。外面がカセている。④TEYG-137	伊万里系 19世紀 198
35	磁器 猪口	17、1～ 3面表	完形 口底 6.3 2.6	①白色②普通③透明 釉、染付	施釉は雑で外面所々に斑状の露胎部分があ る。細貫入が見られる。山呉須で発色悪い。 畳付きに黄白色の砂粒が付着している。 ④TEYG-139	伊万里系 19世紀 199

番号	器種	出土位置	量目	①胎土②焼成③釉調	特 徴 ④整理番号	備 考
36	磁器 猪口	17、1～ 3面表	完形 口 6.2 底 2.8	①白色②普通③透明 釉	口縁部に若干歪みがある。白磁釉を全面に 施している。高台上端で施釉が厚く、細か な気泡を生じ、青色味を帯びている。 ④TEYG-140	伊万里系
37	磁器 碗	17南表 (2片)		①白色②普通③透明 釉	口縁部は下半の外反と端部の屈曲が強く、 凹凸が顕著である。文様は銅版の2色刷り で、外底に「沢里」の篆書銘あり。④TEYG -138	大正時代か
38	磁器 碗		口縁～胴片	①淡灰色②普通③オ リーブ色	内面に劃花文あり。外面にも劃文あり。釉 はややくすぶった発色を呈す。口縁端部は 丸みをおびる。④TEYG-187	龍泉窯系 14世紀～15世紀 200
39	磁器 碗		底部高台片	①淡灰色②普通③オ リーブ色	底部厚く、見込に劃文あり。釉調はくすぶ った発色となっている。④TEYG-191	龍泉窯系 13世紀 201
40	磁器 碗	C-III層		①灰白色②普通③オ リーブ色	内面に劃花文あり。外面はヘラ削り痕が明 瞭に残っている。釉調は透明度が高く、貫 入なく気泡も極めて少ない。④TEYG-124	龍泉窯系
41	磁器 碗		高台～底部片	①淡灰色②普通③淡 い青緑色	外面は蓮弁状。見込縁辺にも浅い圈線状の 彫り込みあり。底部厚い。畳付きから内底 にかけて露胎。④TEYG-188	龍泉窯系 13世紀 202
42	磁器 碗	I 9 15層	高台部片	①灰白色、緻密②普 通③淡い乳青色	底部厚く高台もどっしりしている。釉は微 細な気泡を含み、砧手の発色をしている。 畳付きと外底は露胎となっている。 ④TEYG-53	龍泉窯系
43	磁器 碗		高台片	①淡灰色②軟調③白 磁釉	内面および、外面高台部上方に白磁釉が施 される内面底を立ち上り部との境に1条の 劃文圈線が入る。④TEYG-190	13世紀前後 203
44	磁器 香炉	15-I 6		①濁った白色、緻密 ②普通③くすんだ水 色	青磁釉は薄く、発色もくすぶっている。内 面には施釉しない。外底も露胎。④TEYG -154	伊万里系 18世紀 204
45	青白磁 梅瓶			①白色②普通③淡い 水色	内面にある弱いカキ目状の擦痕より、袋物 である。外面浮彫り後、全面に施釉。小さ な気泡でやや乳濁し、細かな貫入が見られ る。④TEYG-189	12世紀～13世紀 205
46	陶器 乗燭	17面側土 表採	高 4.3 底 3.3	①淡い橙色②普通	正置で口縁が傾く。内面にタール状のス スが付着している。④TEYG-145	地方窯 18世紀後半
47	陶器 燈明皿	16-1- 01～03表	完形	①灰黄色②やや硬調 ③暗い茶褐色	内面のカエリは貼付け。鉄釉を刷毛塗りし ているが外底は露胎。外面に重ね焼き痕が ある。内外面とも不規則にスス付着。 ④TEYG-142	地方窯 18世紀～19世紀
48	陶器 壺	15 I 6 IV		①暗灰色、やや粗い ②普通③茶褐色	外面に刻文あり。外面に柿釉を施す。胎土 に長石粒が多く、常滑焼に近似している。 ④TEYG-169	製作地不詳

遺物観察表

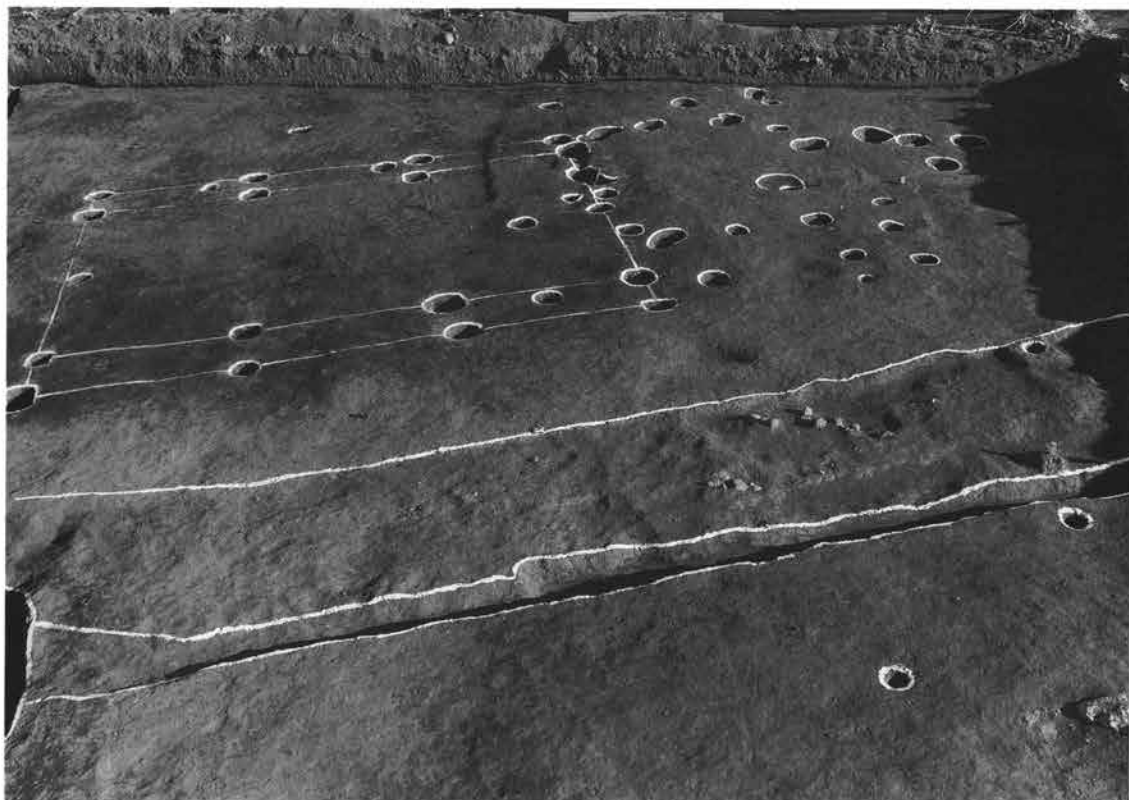
番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土②焼成③色調④備考
50	軒棧瓦			心洞寺	厚さ18mmで、外面にはミガキ、内面はナデを施す。刺り込みの一部は遺存しているが、長さは不明。明治以降（20世紀後半）の作りとみられる。地域的にみて、藤岡産か。④TEYG-37	

報告 番号	観察 通番	出土 地点	瓦の 種別	厚さ	胎土				焼成						成形技法						整形技法				摘要
					素地	挟雑 物	焼き 上り	色調	粘土板刺取		一枚 作り	桶寄 木痕	粘土板 合せ目	布の合 せ目	タタ キ目	ロク ロ目	ヘラ ケズリ	布の擦消		側部 面取					
									凹面	凸面								凹面	凸面						
51			平	2.5	密	微	硬	灰	○	なし	/	○	なし	なし	○	なし	なし	なし	/	1	④TEYPit-1 1A類				

写 真 图 版



田端地区A区 全景(東から)



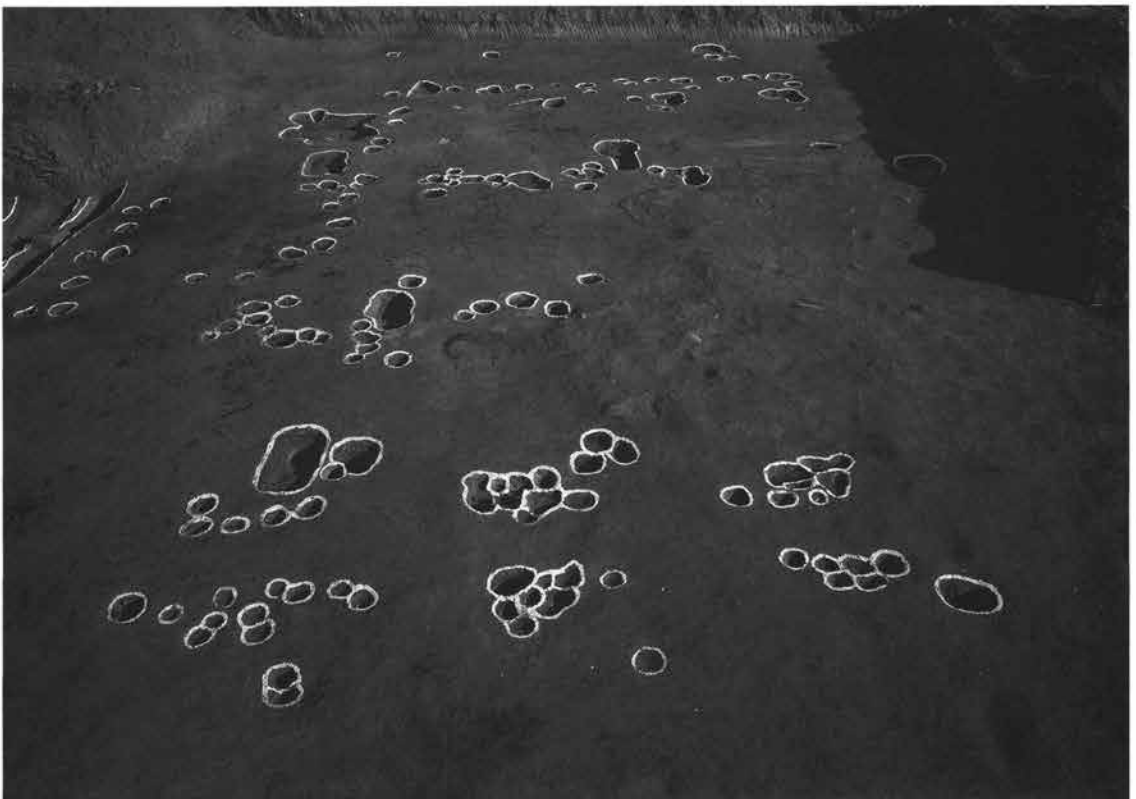
田端地区A区 第1面 東半部 (西から)



第1面 2a~2b溝 (北東から)



田端地区A区 第1面 1号掘立柱建物跡 (西から)



北部ピット群 (南から)



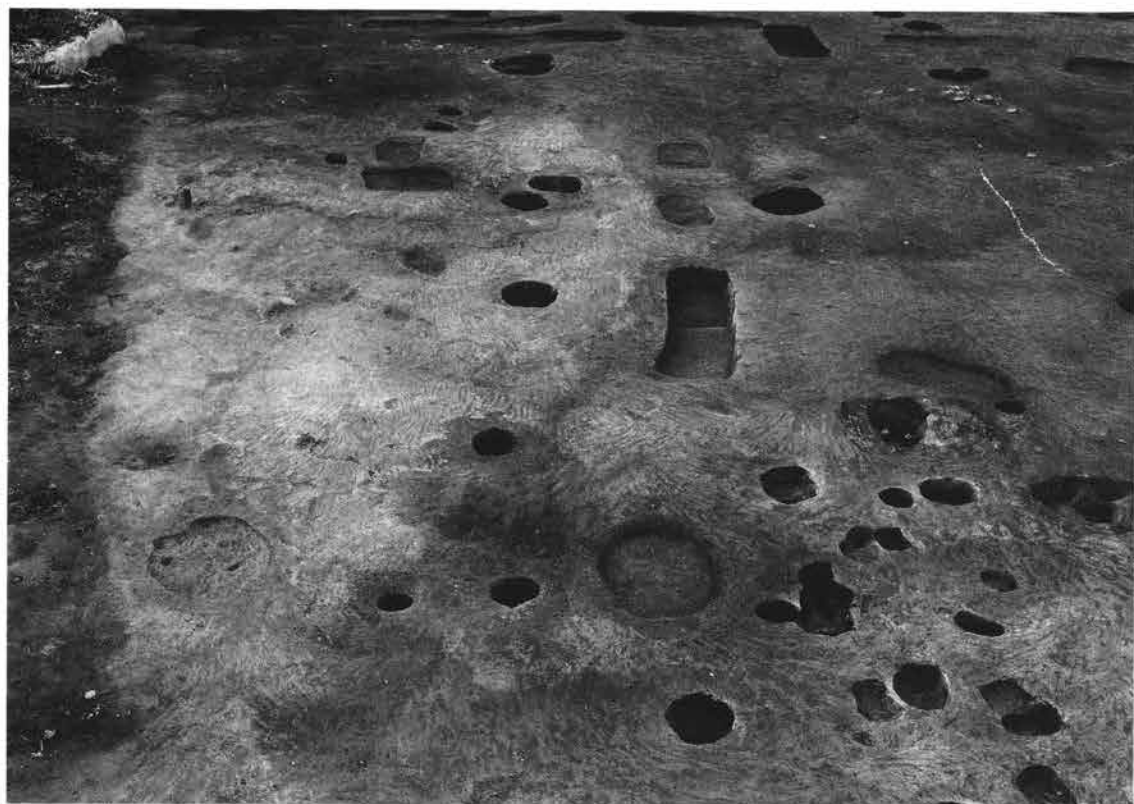
田端地区A区 南部ピット群 (北から)



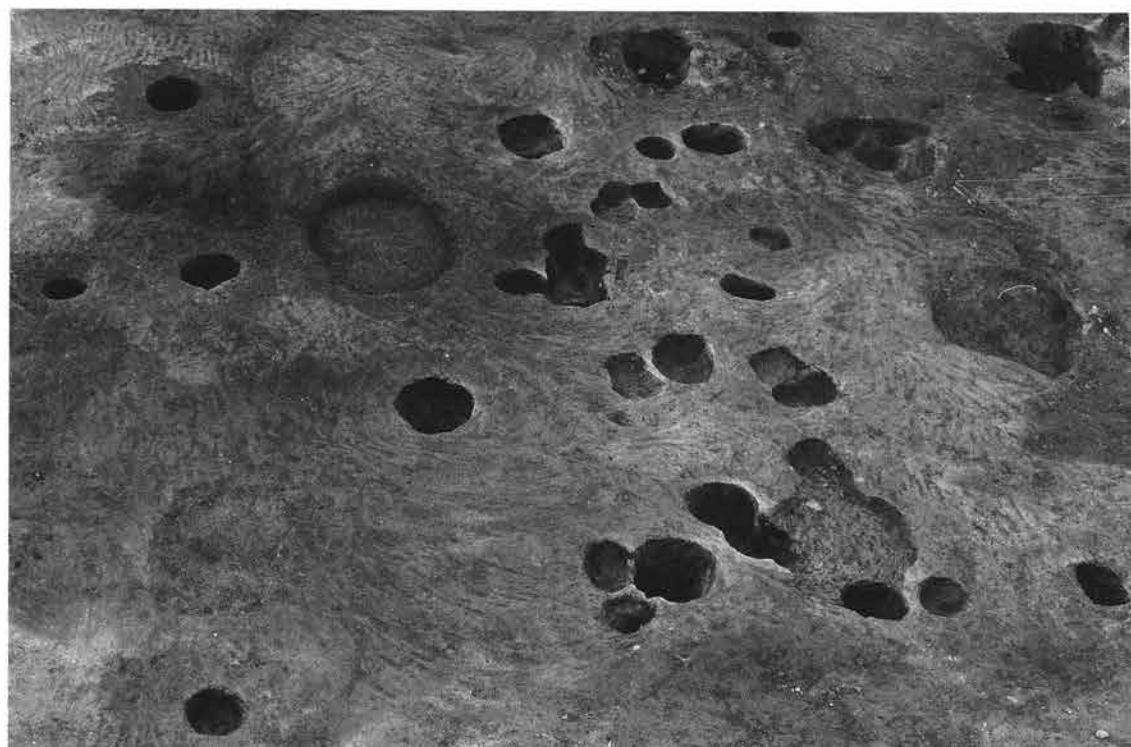
南部ピット群 (北から)



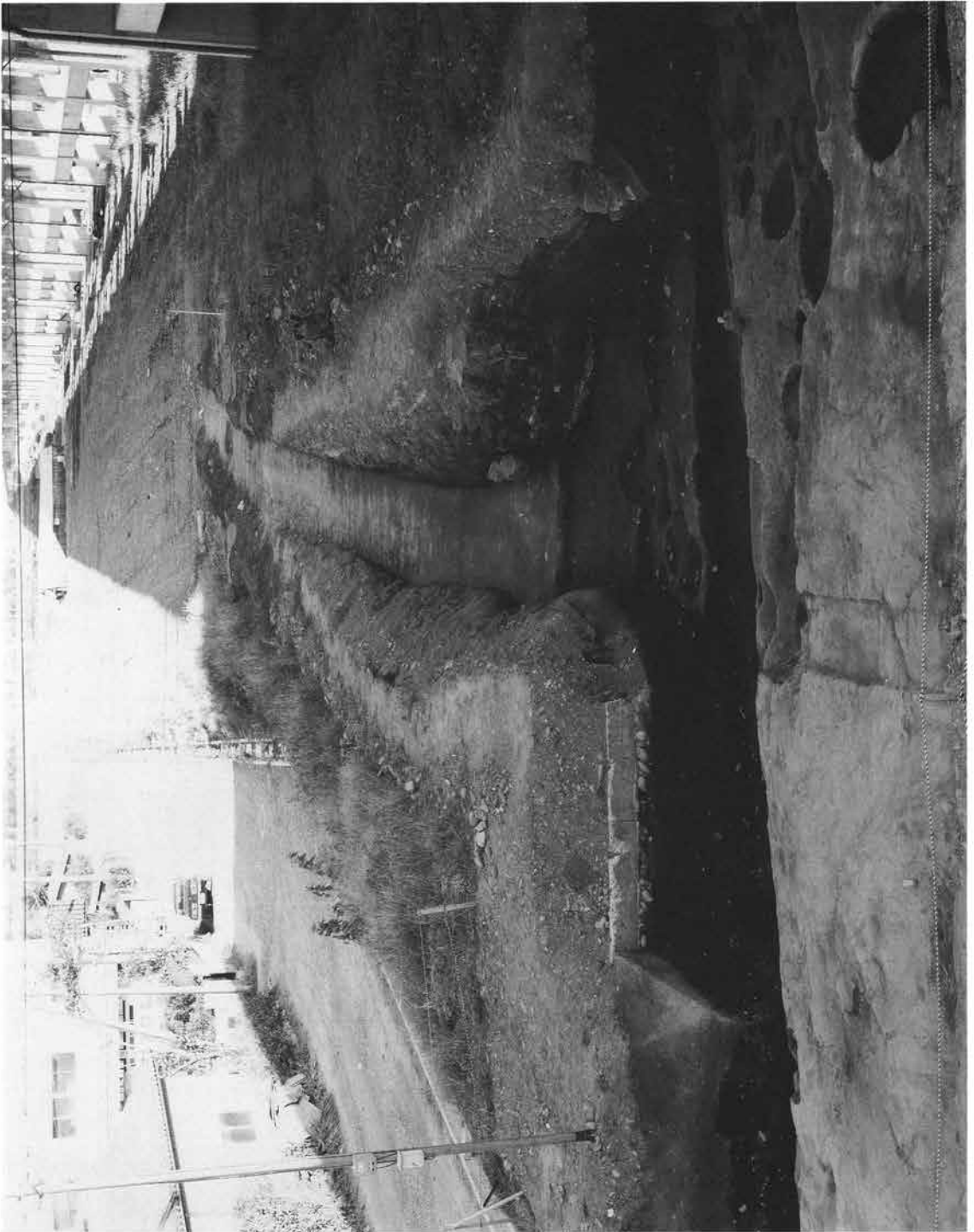
田端地区B区 南側土坑・ピット群（東から）



田端地区B区 南側土坑群 (東から)



同 上 (東から)



田端地区B区 北側道全景（西から）



田端地区C区 本線敷調査（西から）



田端地区C区 北側道（東から）



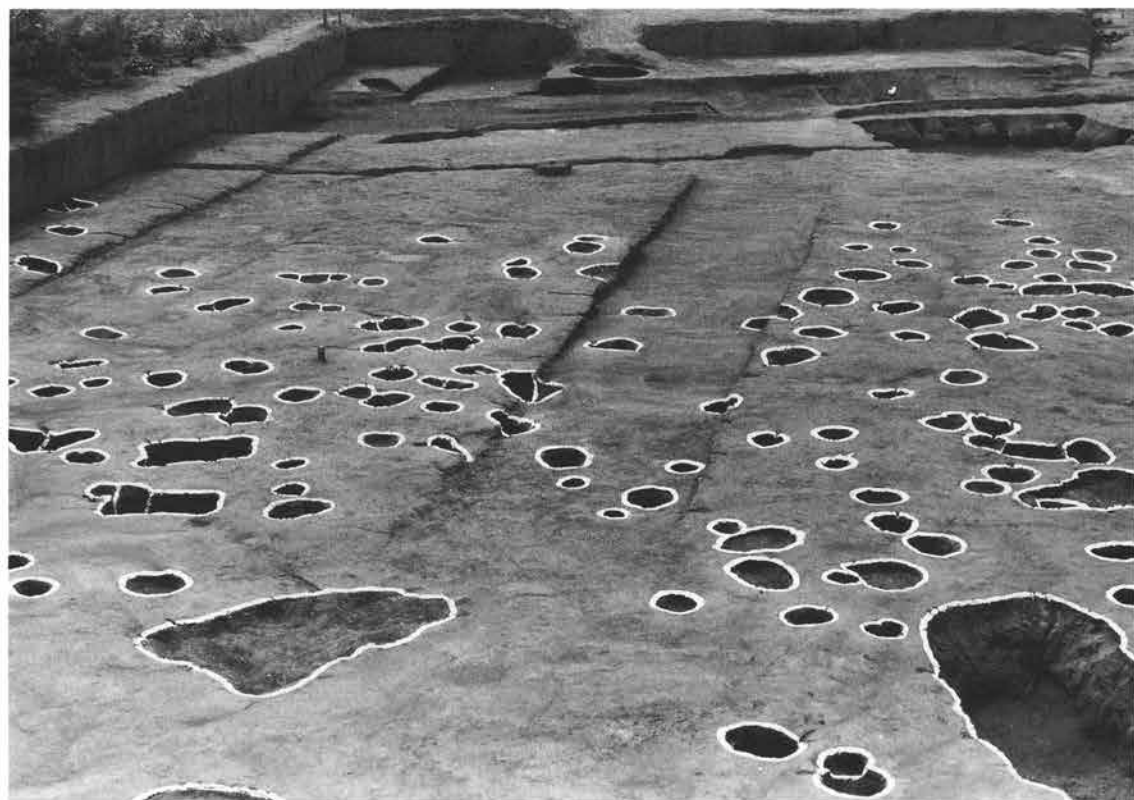
同 上（西から）



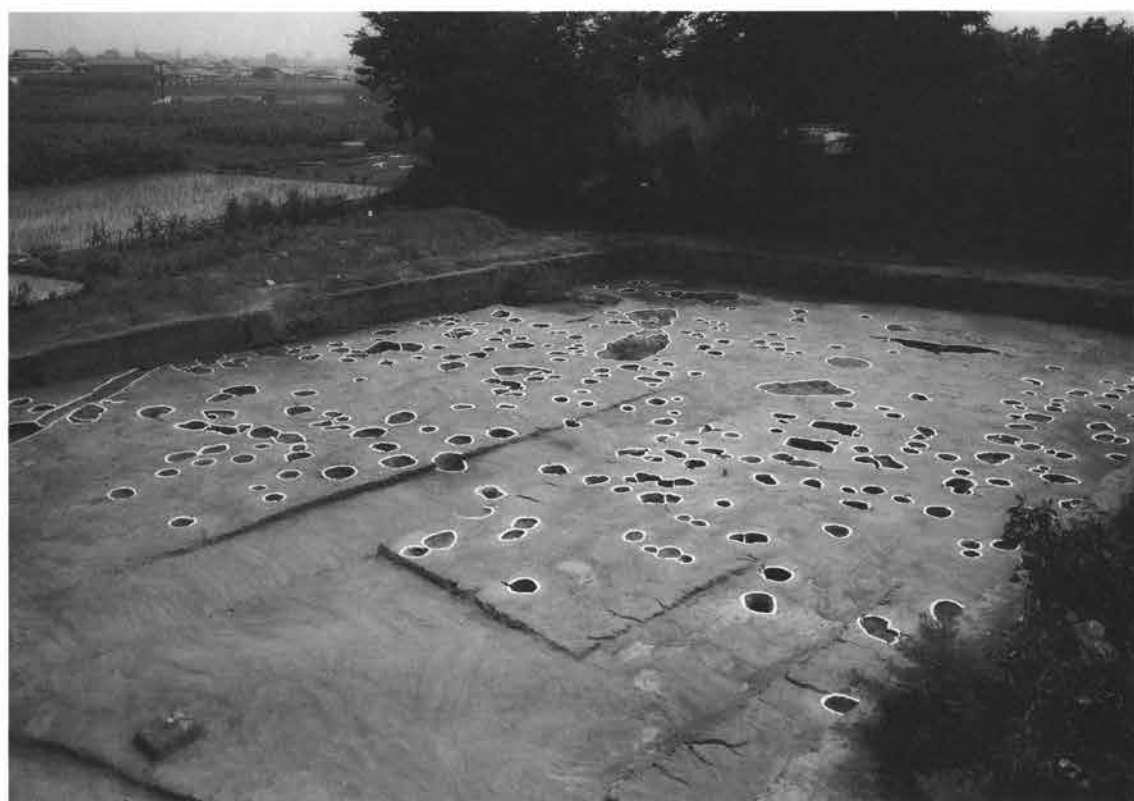
田端地区C区 南側道（東から）



田端地区D区 全景（西から）



田端地区D区中央部 ピット群（東から）



ピット群（南西から）



寺東地区 調査前 (西から)



トレンチ調査 (西から)



寺東地区 1次調査(西から)



同上



寺東地区 1次調査(東から)



同上



寺東地区 2次調査南側道（西から）第1面



同 上（東から）



寺東地区 2次調査南側道(東から)第2面



同上(西から)



寺東地区 2次調査南側道(東から)第3面



同 上 (西から)



寺東地区 1号溝-土塁トレンチ (西から)



寺東地区 1号溝-土壘(東から)



1号溝北辺(東から)



寺東地区 1号溝東辺（西から）3次調査



寺東地区 1号溝西辺（西から）4次調査



寺東地区 遠景 (西から)



3次調査 (西から) 第1面



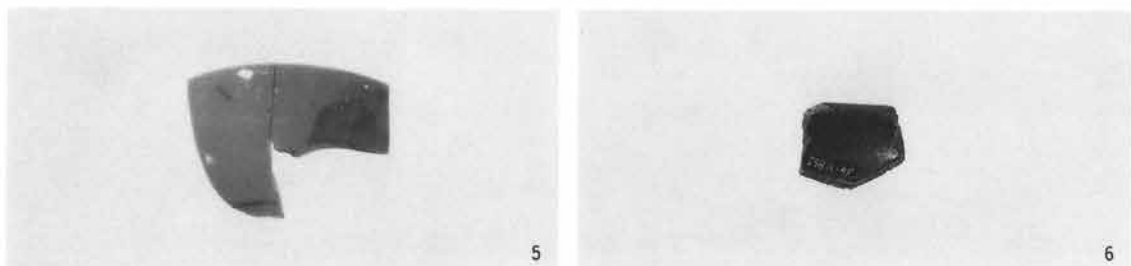
寺東地区 3次調査 南側道(西から)



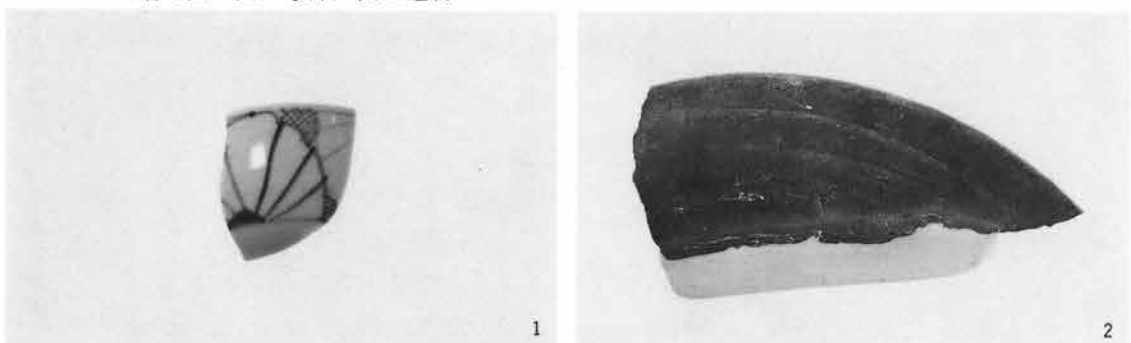
寺東地区 4次調査 南側道（西から）



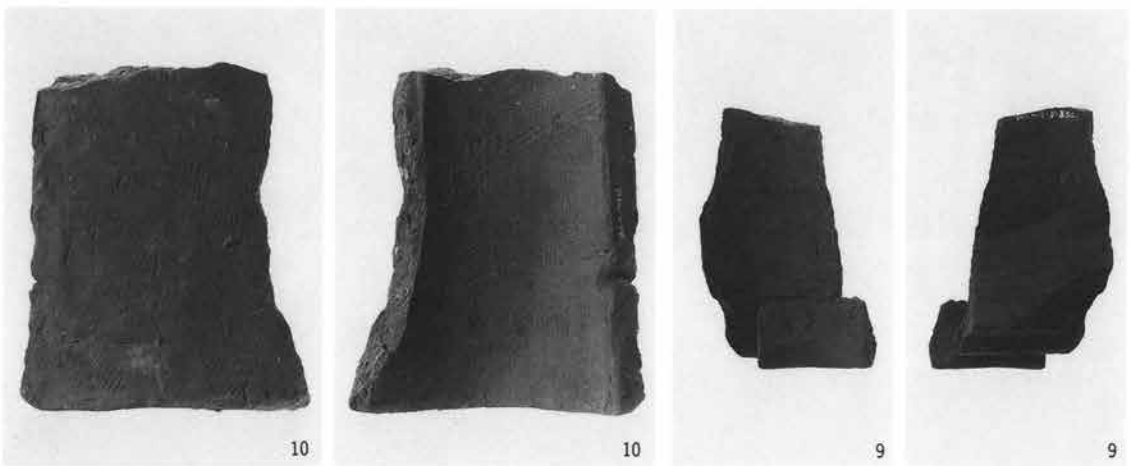
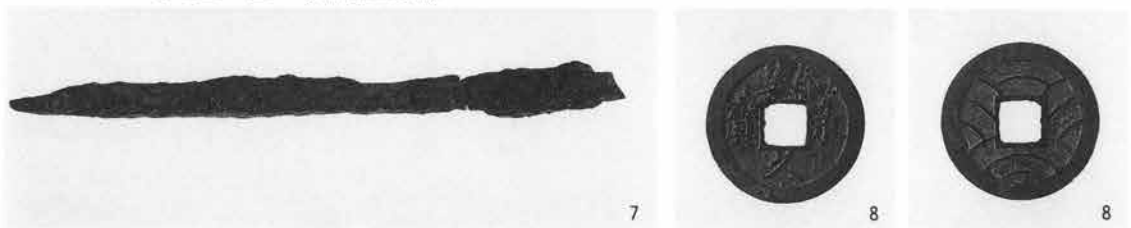
寺東地区 4次調査 南側道（東から）



田端地区A区1号井戸出土遺物



田端地区A区2b号溝出土遺物



田端地区A区遺構外出土遺物



田端地区B区
1 4号溝出土遺物



2



8

田端地区B区5号溝出土遺物(1)



1



5



3



5



4

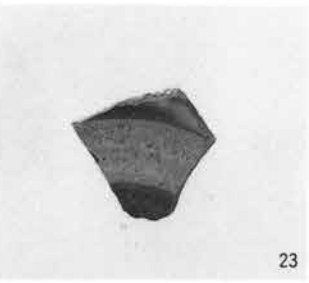
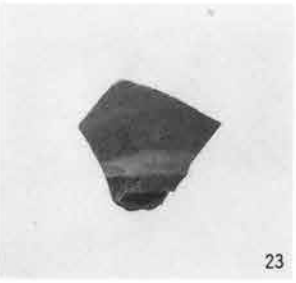
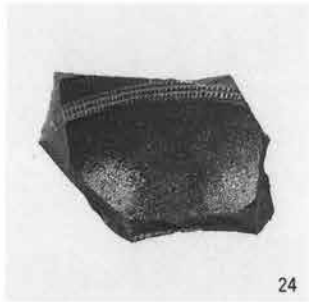
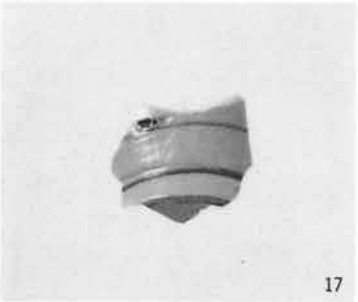
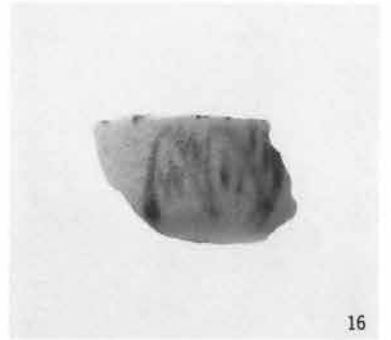
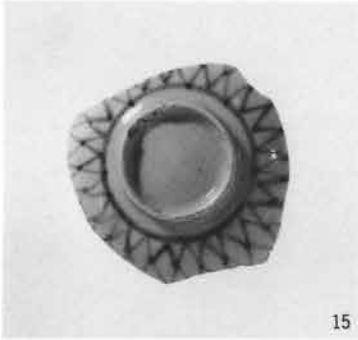


8

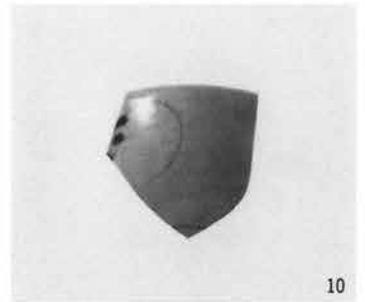


7

田端地区B区6号溝出土遺物



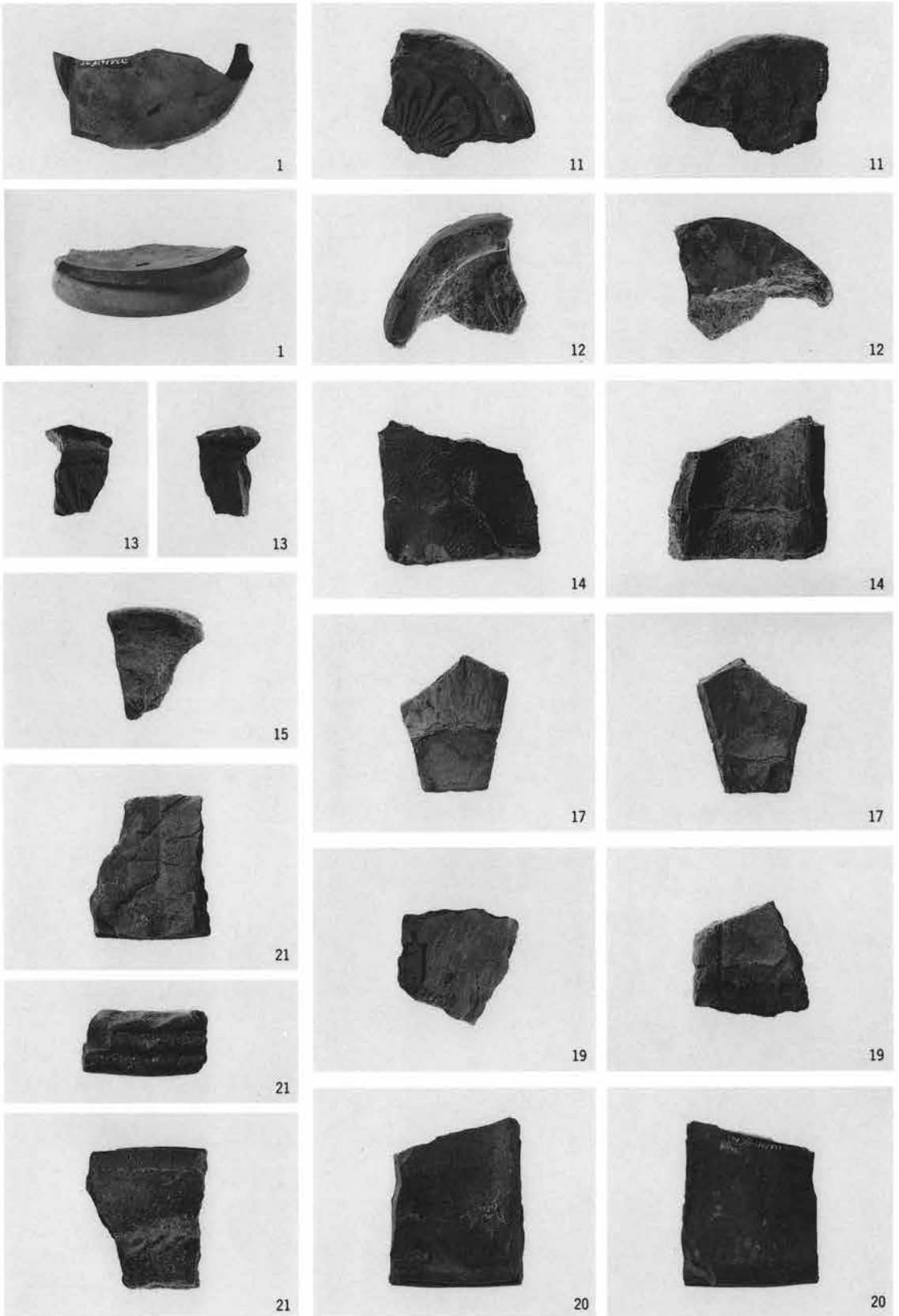
田端地区B区
5号溝出土遺物(2)



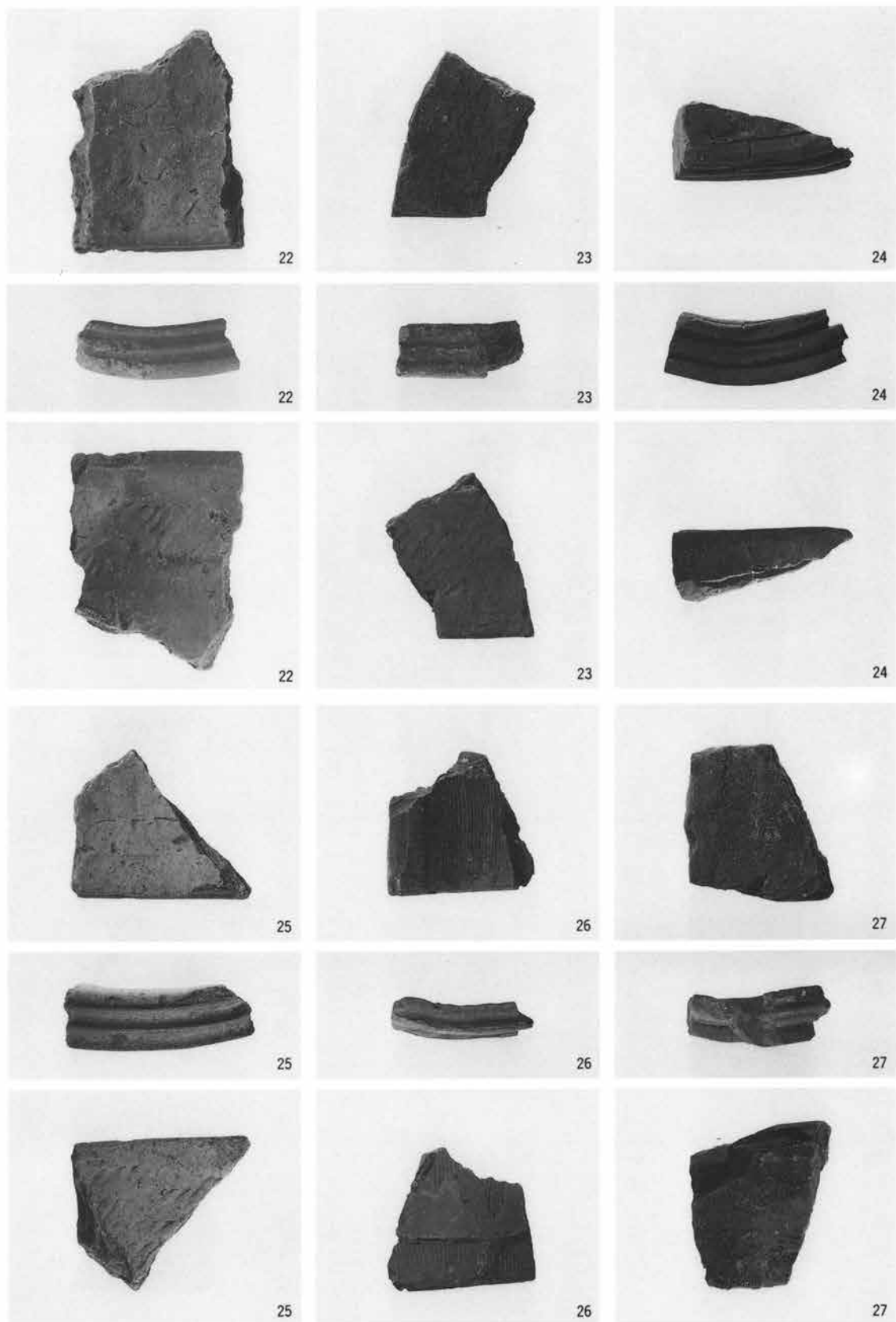
田端地区B区11号溝出土遺物(1)



田端地区B区
11号溝出土遺物(2)



田端地区B区16号沟出土遺物(1)



田端地区B区16号溝出土遺物(2)



28



28



28



37



37



38



38



32



32



34



34



35



35



36



36



39



39

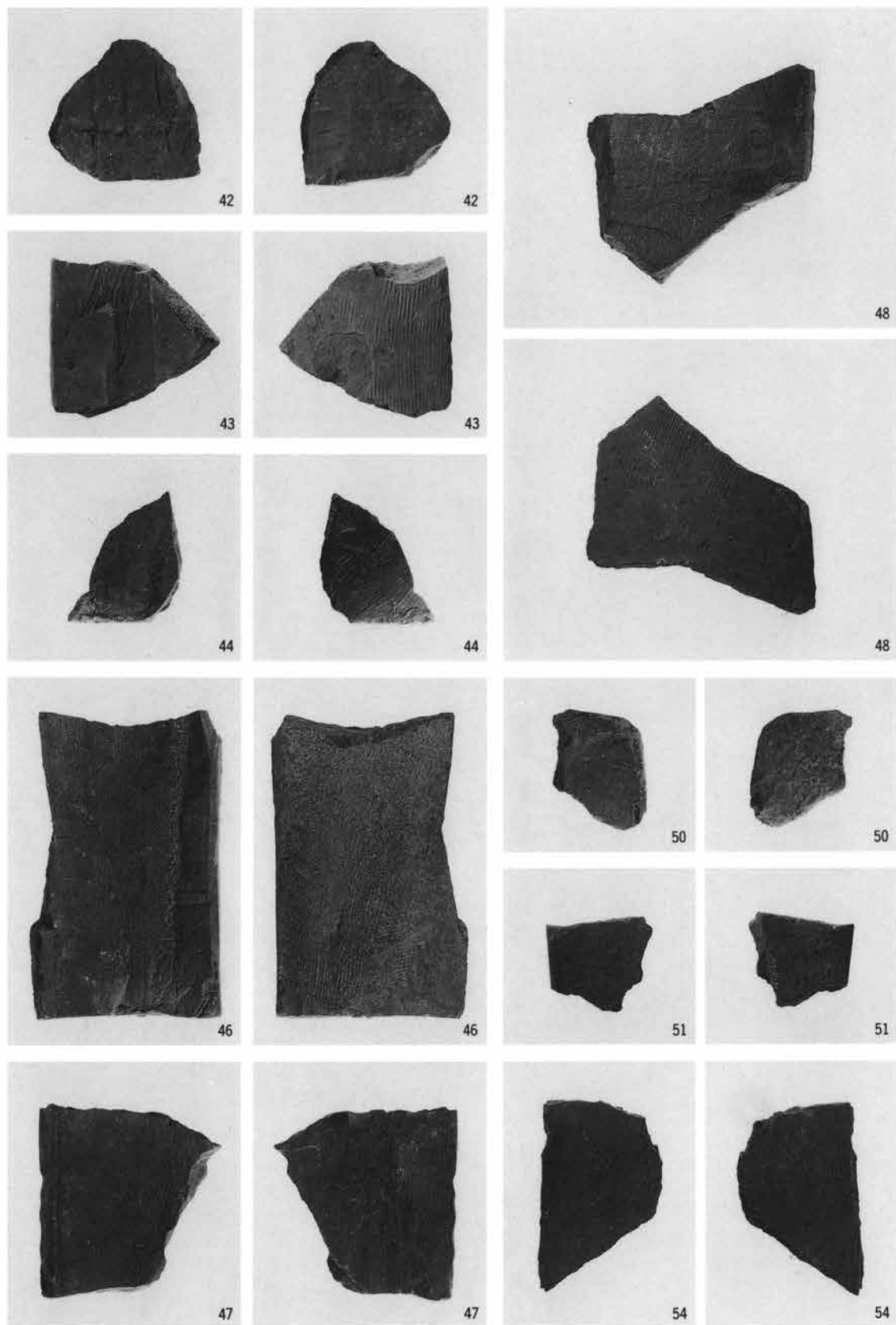


41

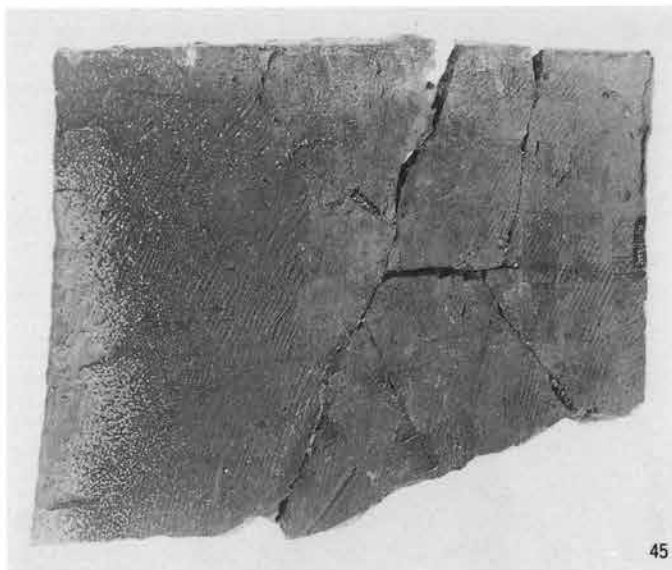


41

田端地区B区
16号溝出土遺物(3)



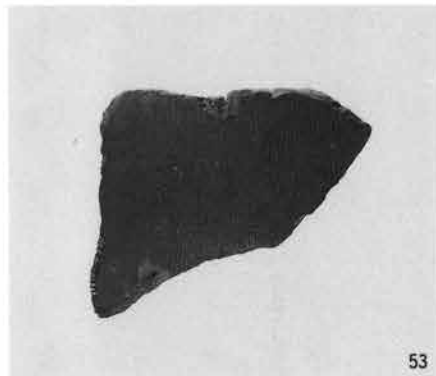
田端地区B区16号沟出土遺物(4)



45



53



53



45



55



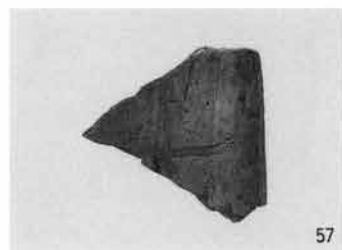
56



56



55



57



57



61

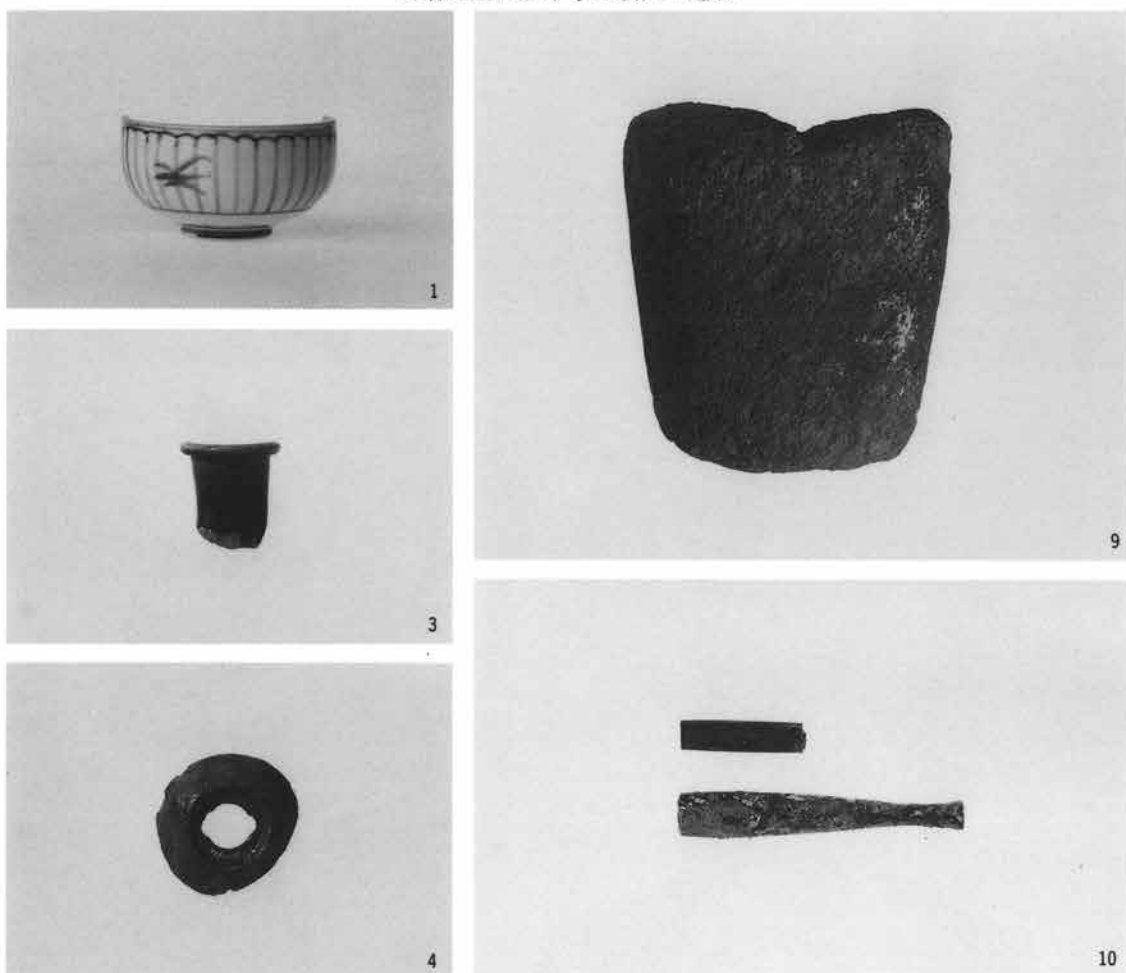


61

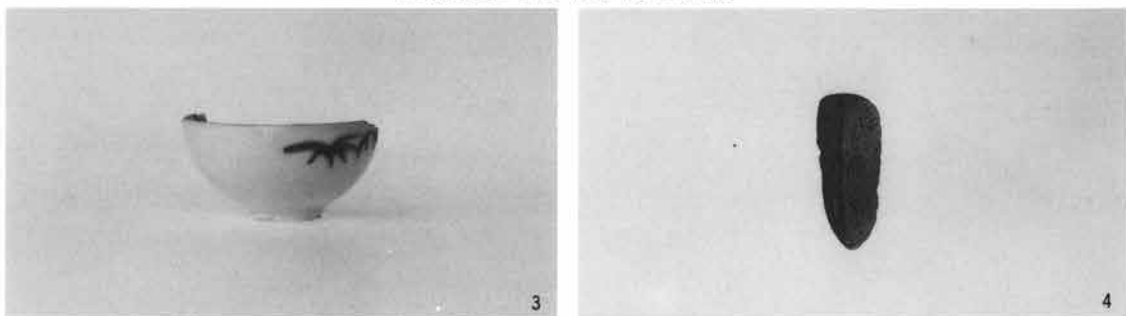
田端地区B区16号沟出土遺物(5)



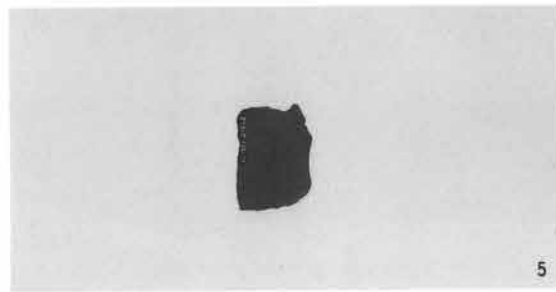
田端地区B区3号墓坑出土遗物



田端地区B区2号墓坑出土遗物



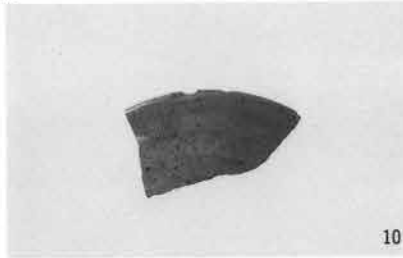
田端地区B区9号墓坑出土遗物



田端地区B区5号土坑出土遺物

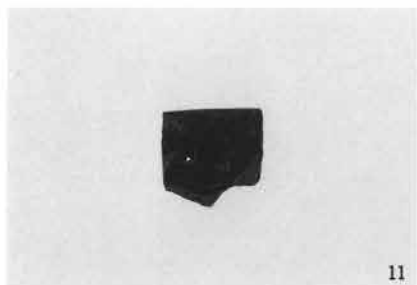


田端地区B区18号土坑出土遺物



田端地区B区20号土坑出土遺物

田端地区B区23号土坑出土遺物

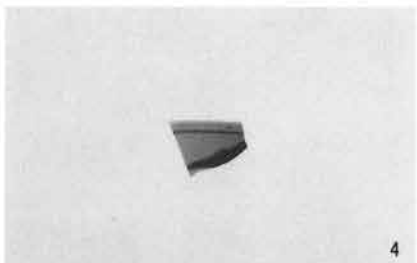


11

田端地区B区38号土坑出土遺物

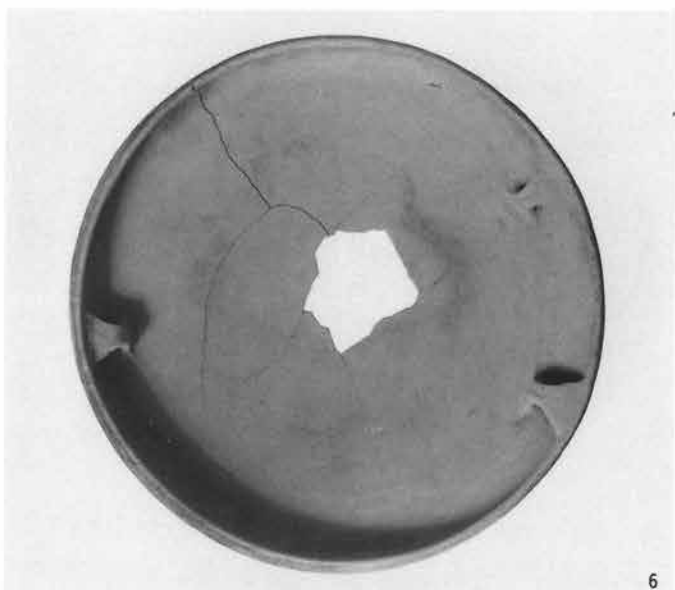


3

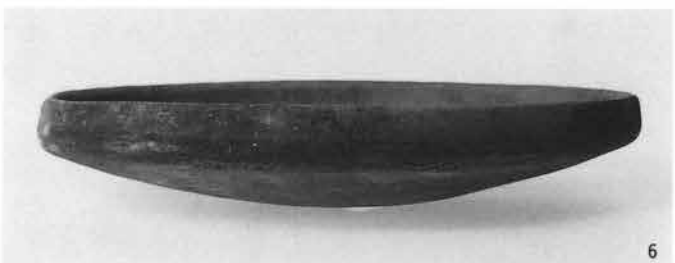


4

田端地区B区49号土坑出土遺物



6



6

田端地区B区58号土坑出土遺物



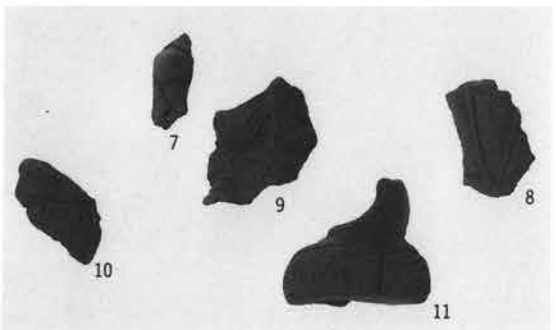
1



2



6

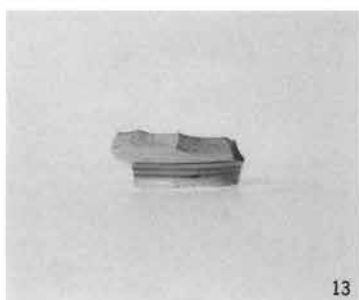
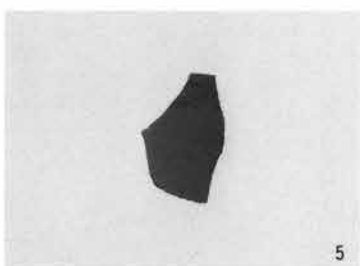


田端地区B区42号土坑出土遺物



12

田端地区B区
48号土坑出土遺物



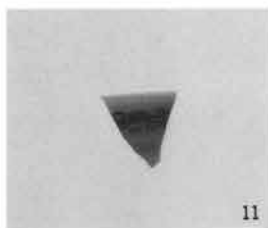
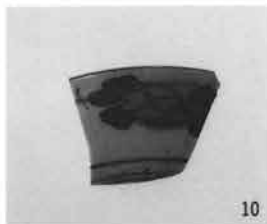
田端地区B区50号土坑出土遺物



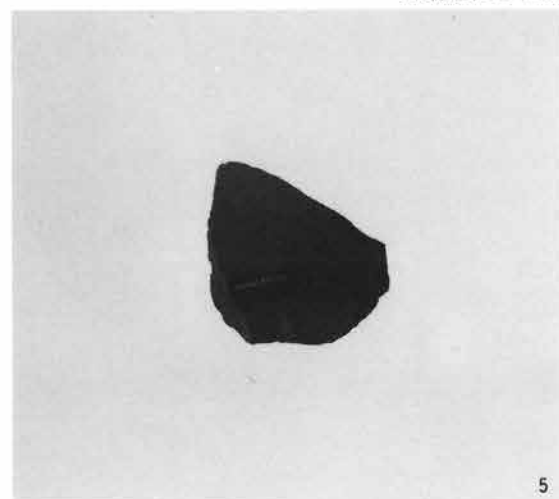
田端地区B区64号土坑出土遗物



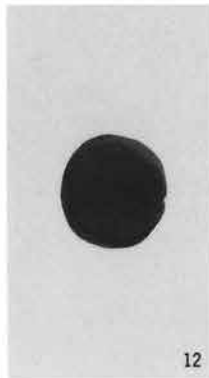
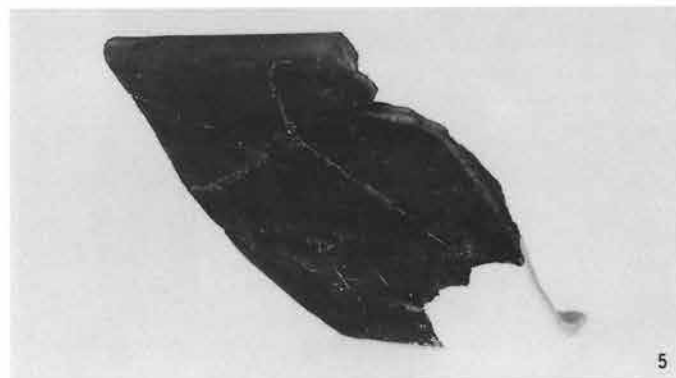
田端地区B区71号土坑出土遗物



田端地区B区80号土坑出土遗物



田端地区B区99号土坑出土遗物



田端地区B区70号土坑出土遺物



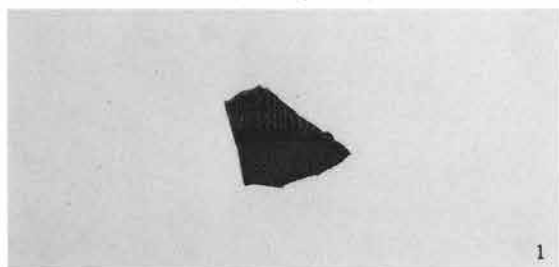
田端地区B区133号土坑出土遺物



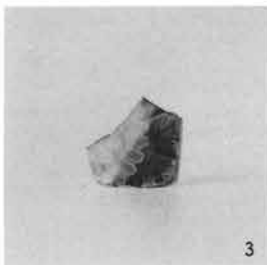
田端地区B区161号土坑出土遺物



田端地区B区150号土坑出土遺物



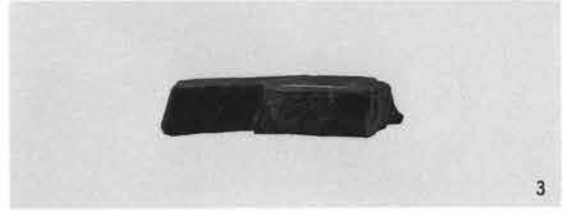
田端地区B区238号土坑出土遺物



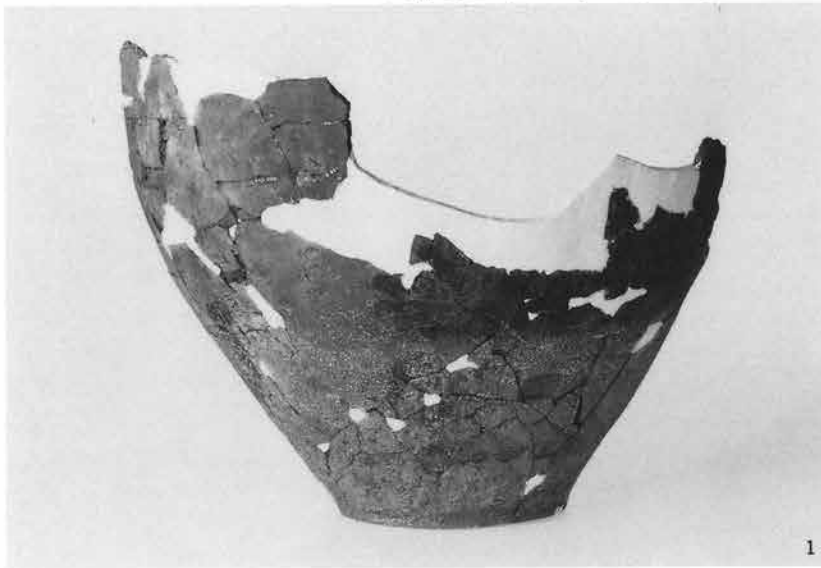
田端地区B区261号土坑出土遺物



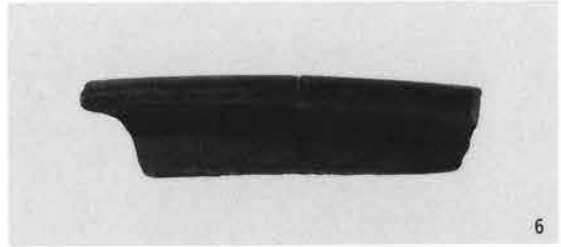
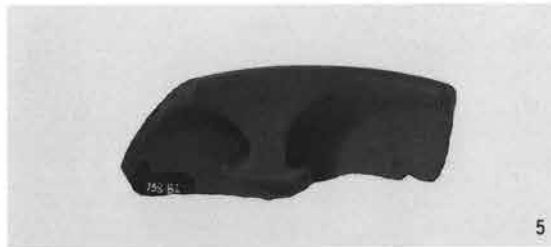
田端地区B区260号土坑出土遺物



田端地区B区263号土坑出土遺物



田端地区B区
21号ピット
出土遺物



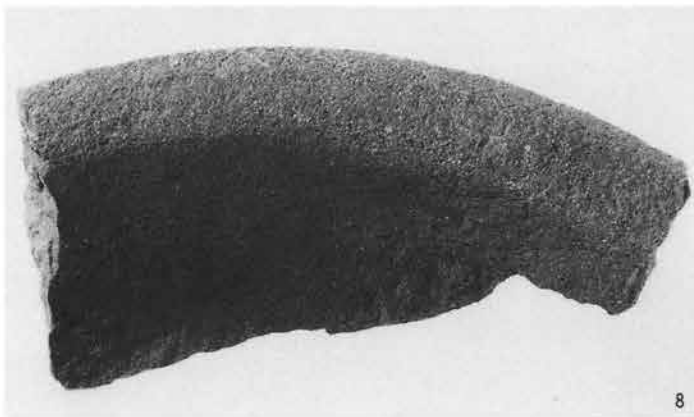
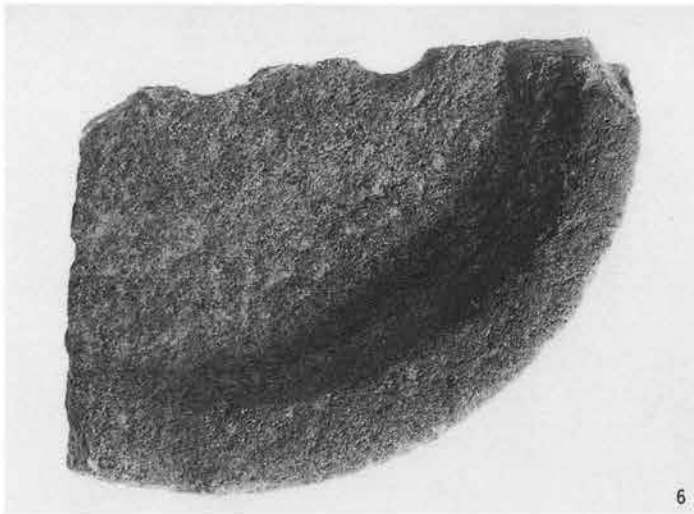
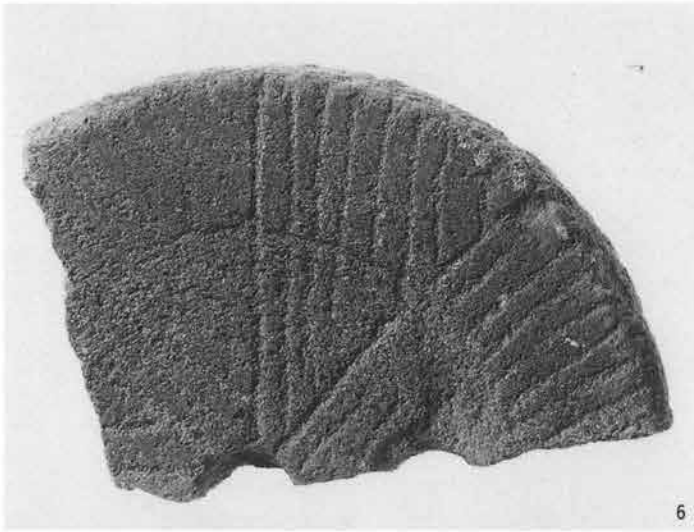
田端地区B区
ゴミ穴出土遺物1)



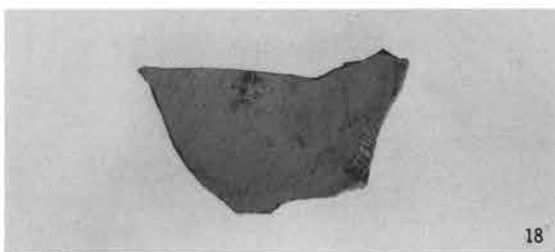
田端地区B区
ゴミ穴出土遺物(2)



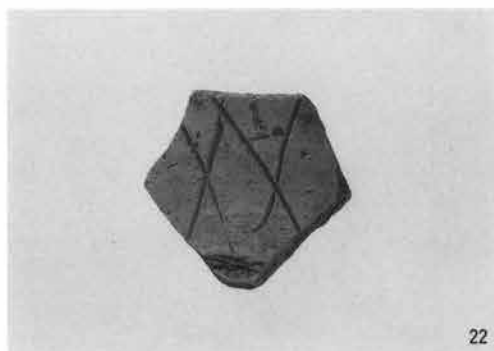
田端地区B区遺構外出土遺物(1)



田端地区B区遺構外出土遺物(2)



田端地区B区遺構外出土遺物(3)



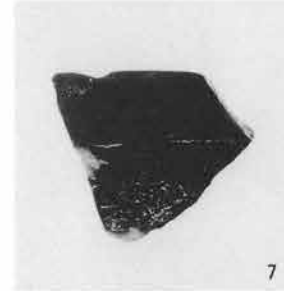
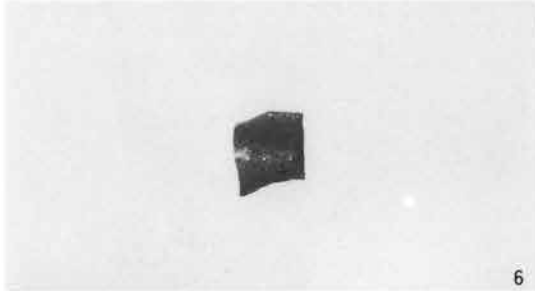
田端地区B区遺構外出土遺物(4)



田端地区C区1号掘立柱建物跡

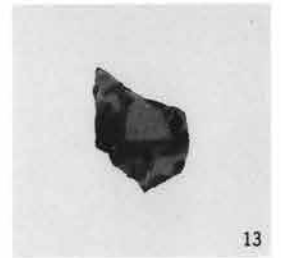
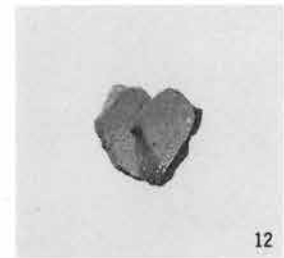
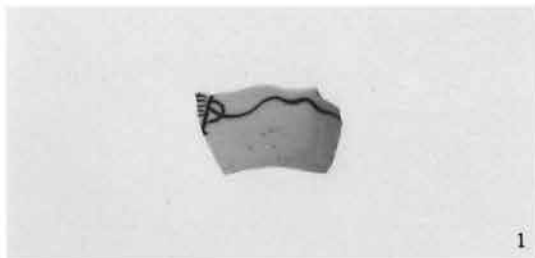


田端地区C区1号溝出土遺物



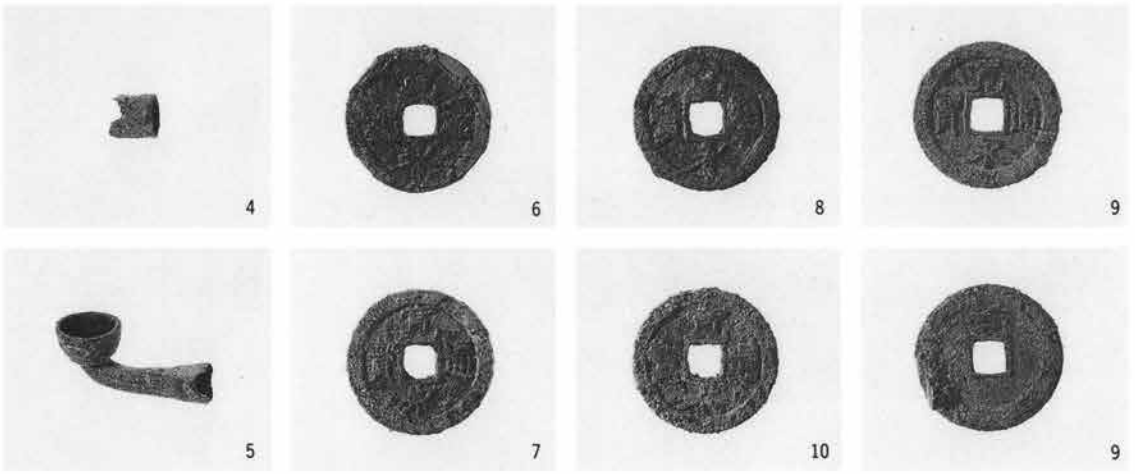
田端地区C区4号溝出土遺物

田端地区C区10号溝出土遺物



田端地区C区3号土坑出土遺物

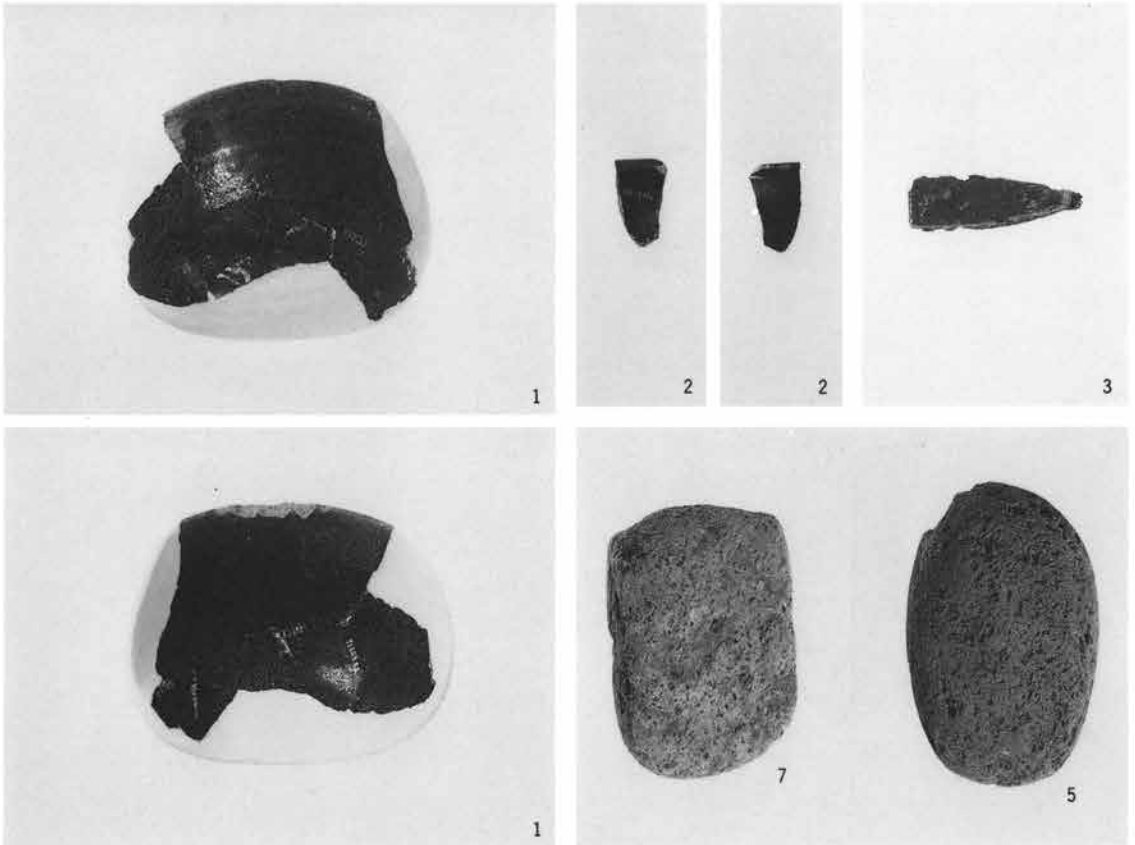
田端地区C区5号土坑出土遺物



田端地区C区4号土坑出土遺物



田端地区C区
14 6号土坑出土遺物



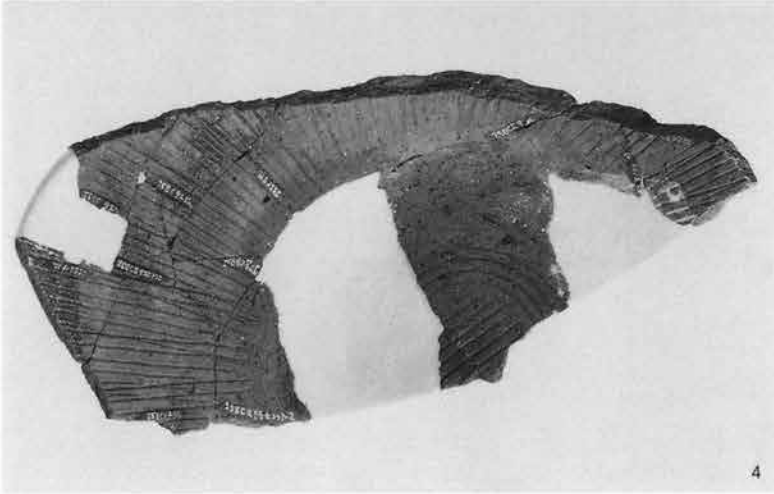
田端地区C区9号土坑出土遺物(1)



4



6



4

田端地区C区
9号土坑出土遺物2)



8

田端地区C区10号土坑出土遺物



9



10

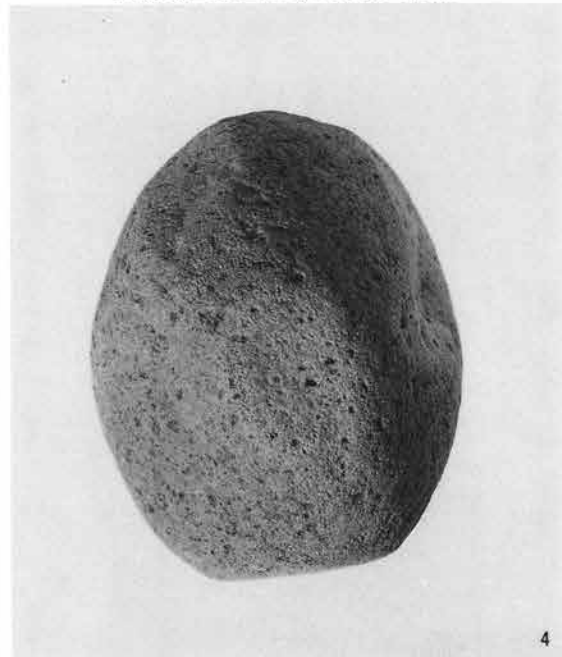
田端地区C区12号土坑出土遺物



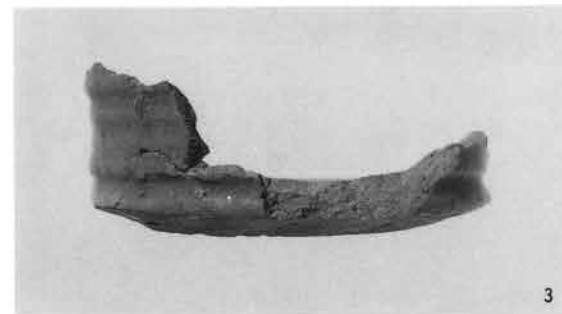
田端地区C区18号土坑出土遺物



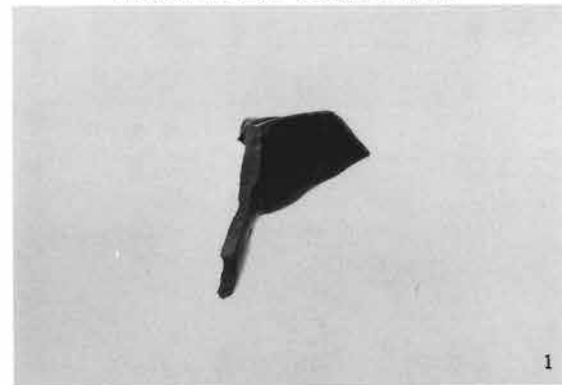
田端地区C区19号土坑出土遺物



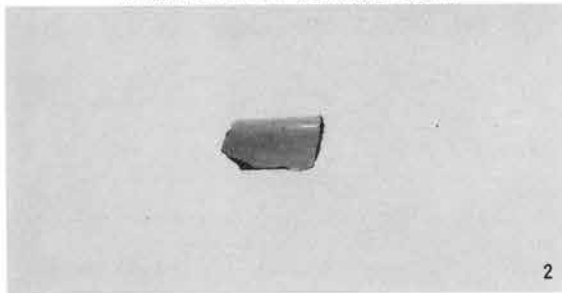
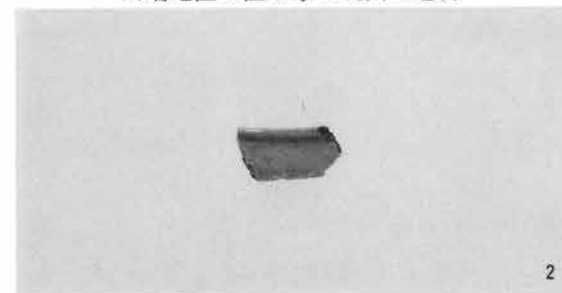
田端地区C区21号土坑出土遺物



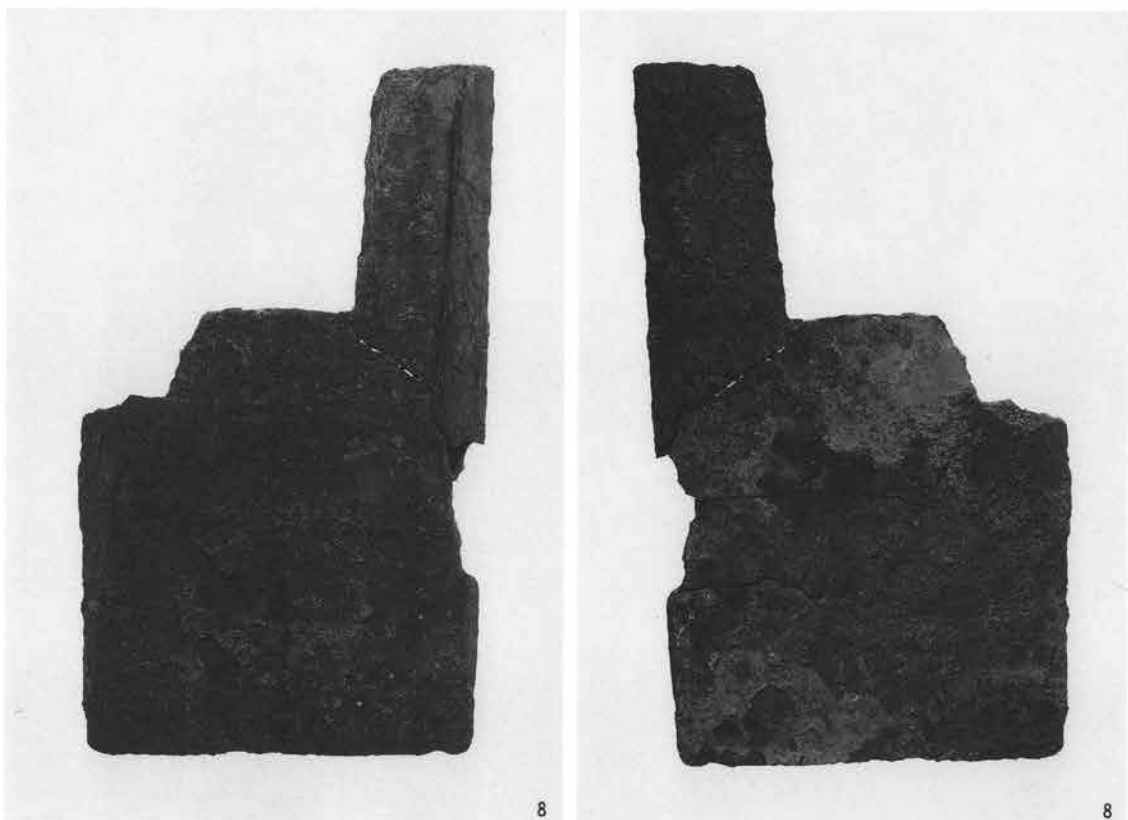
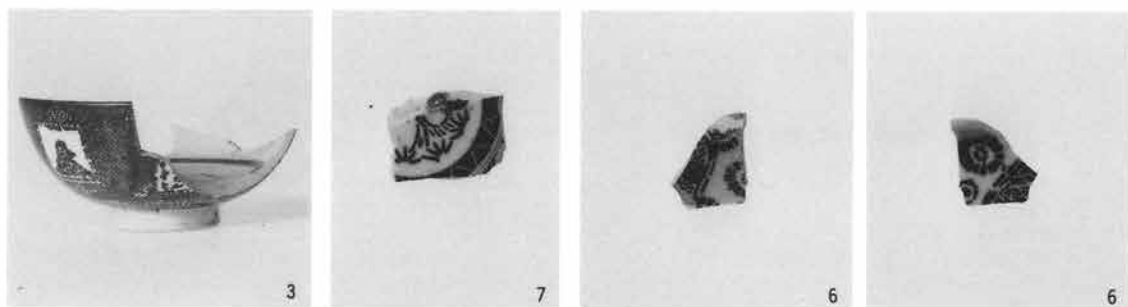
田端地区C区20号土坑出土遺物



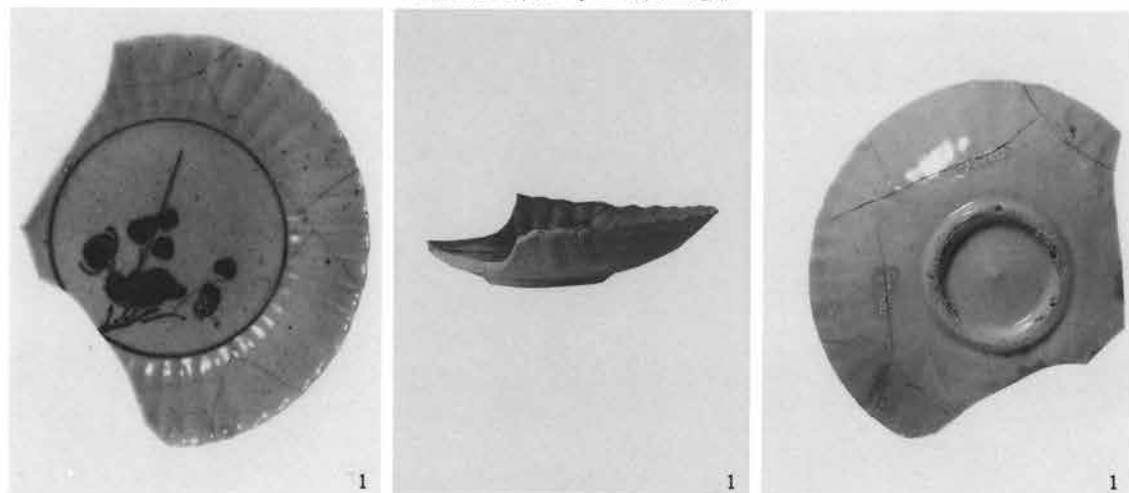
田端地区C区23号土坑出土遺物



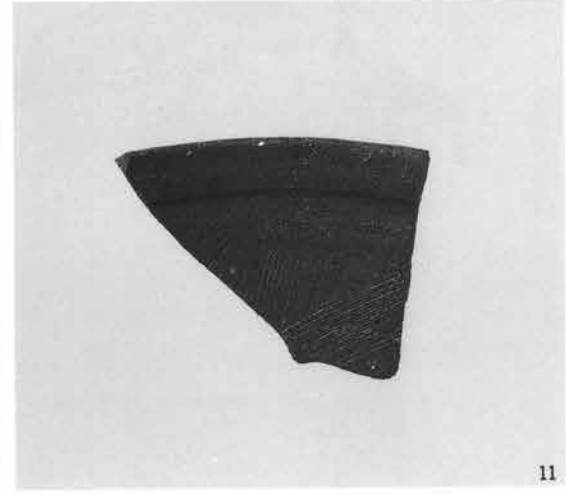
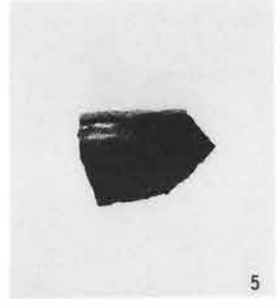
田端地区C区29号土坑出土遺物



田端地区C区31号土坑出土遺物



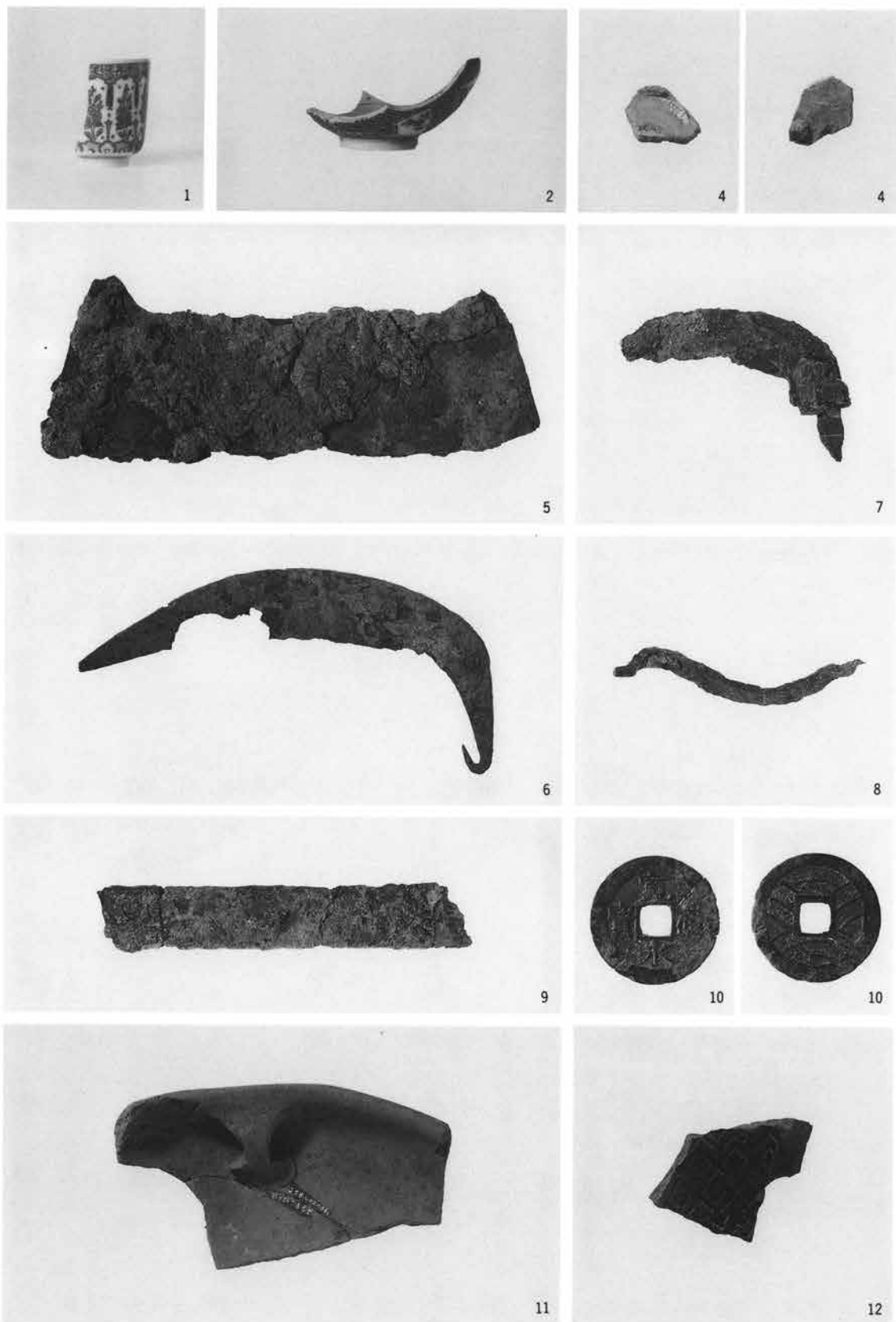
田端地区C区34号土坑出土遺物(1)



田端地区C区34号土坑出土遺物(2)



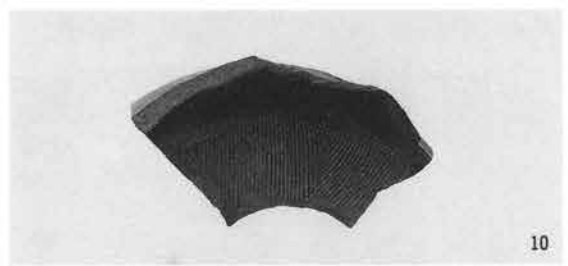
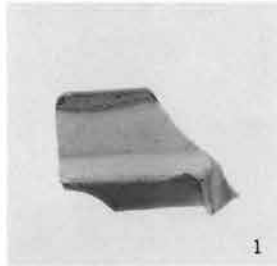
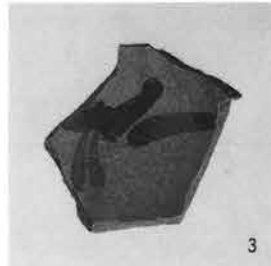
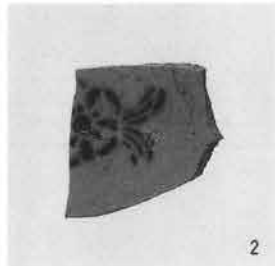
田端地区C区
35号土坑出土遺物



田端地区C区42号土坑出土遺物1)



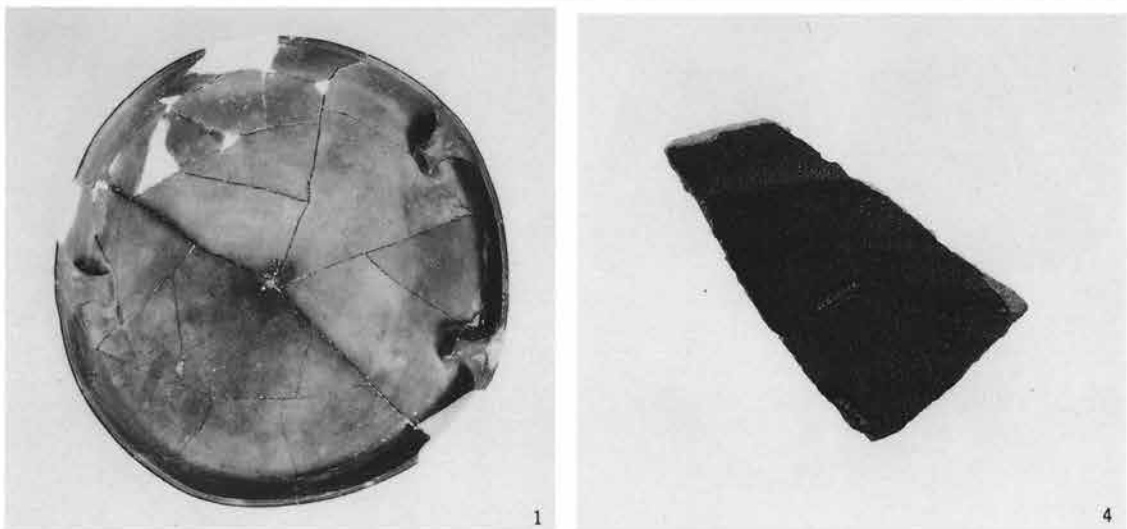
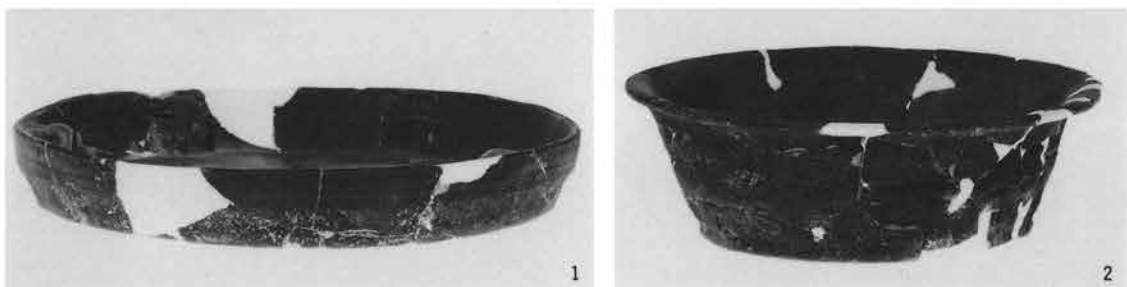
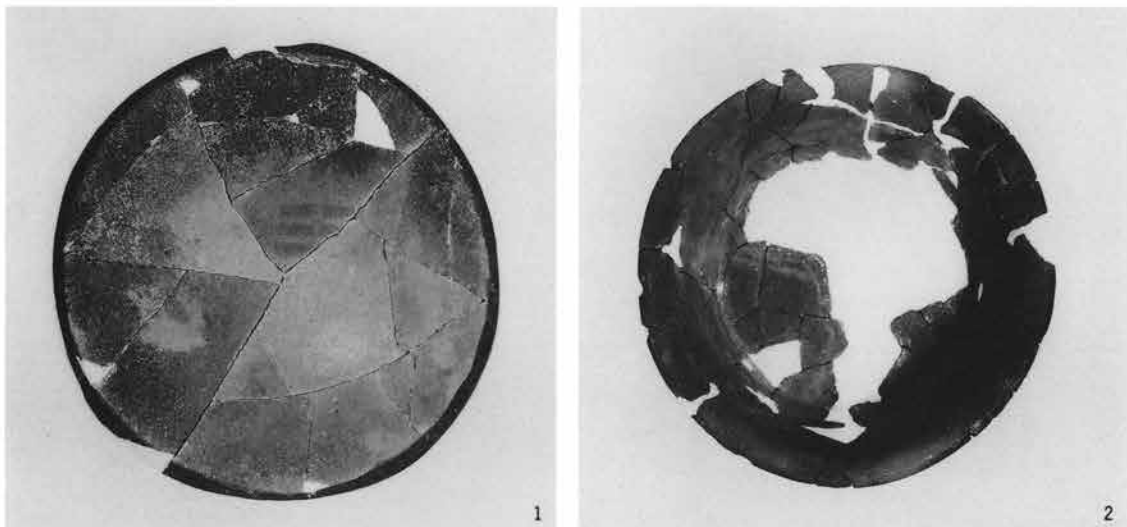
田端地区C区42号土坑出土遺物(2)



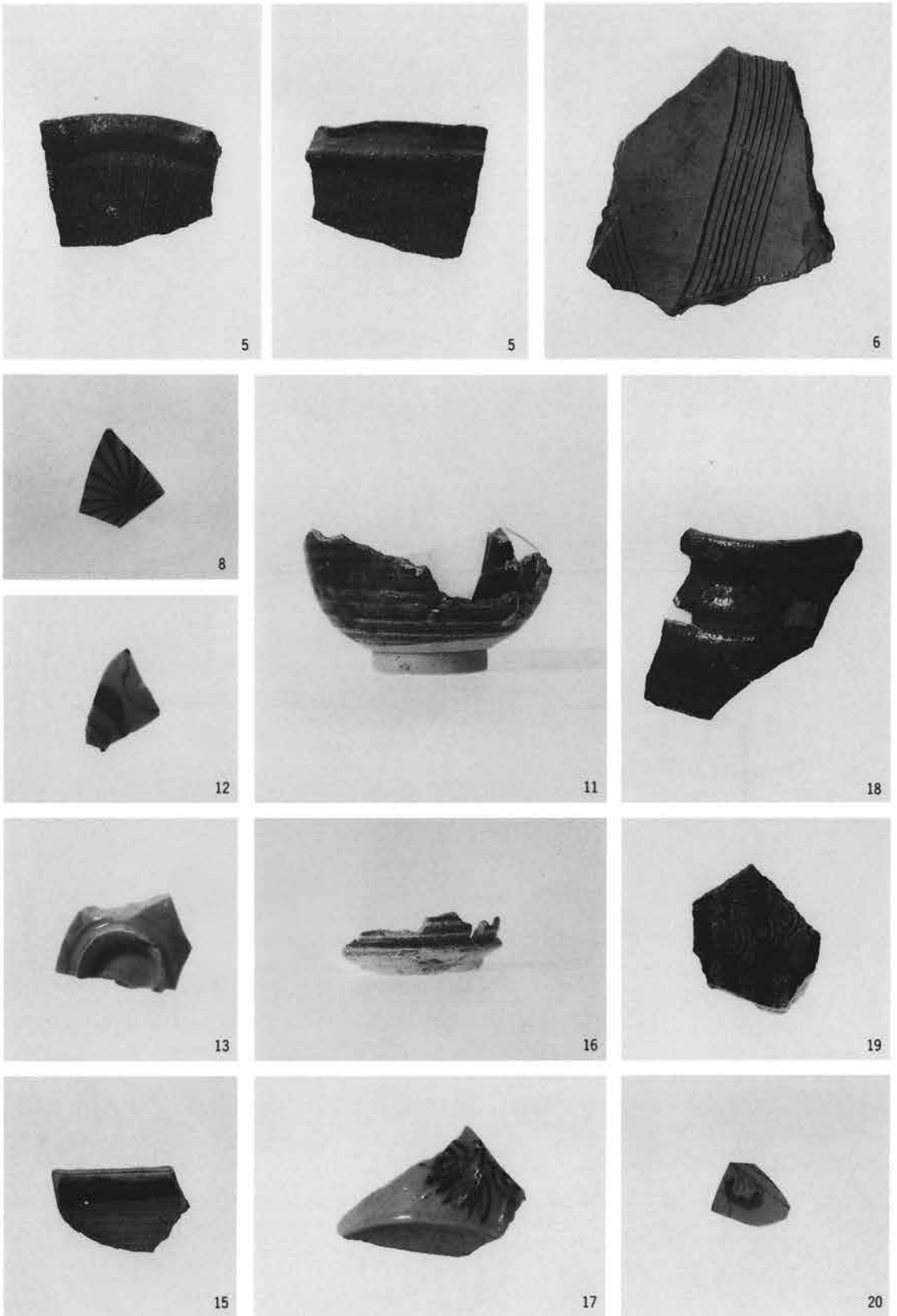
田端地区C区遺構外出土遺物



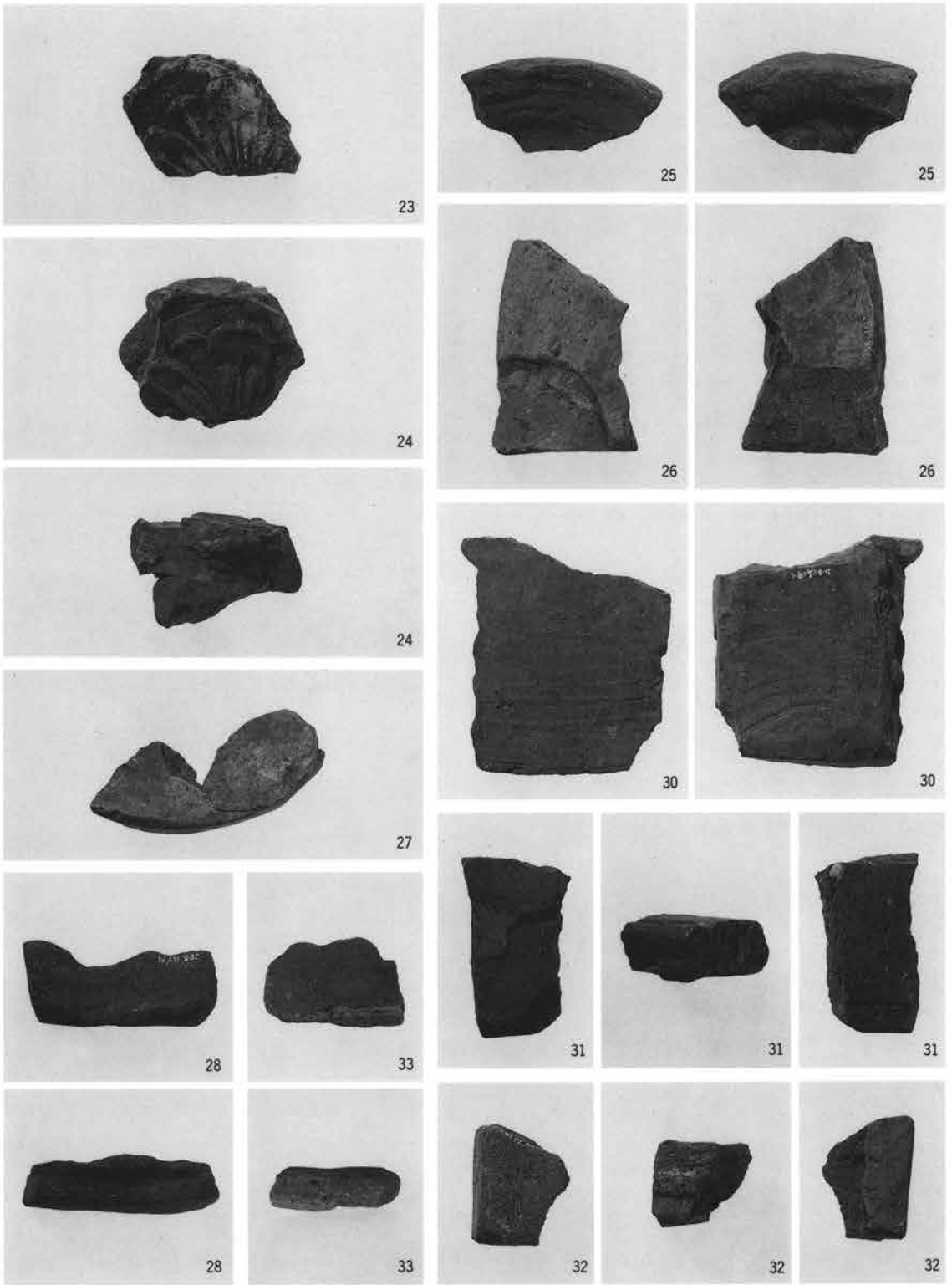
田端地区D区2号竖穴状遺構出土遺物



田端地区D区1号溝出土遺物(1)



田端地区D区1号沟出土遗物(2)



田端地区D区1号溝出土遺物(3)



田端地区D区2号溝出土遺物



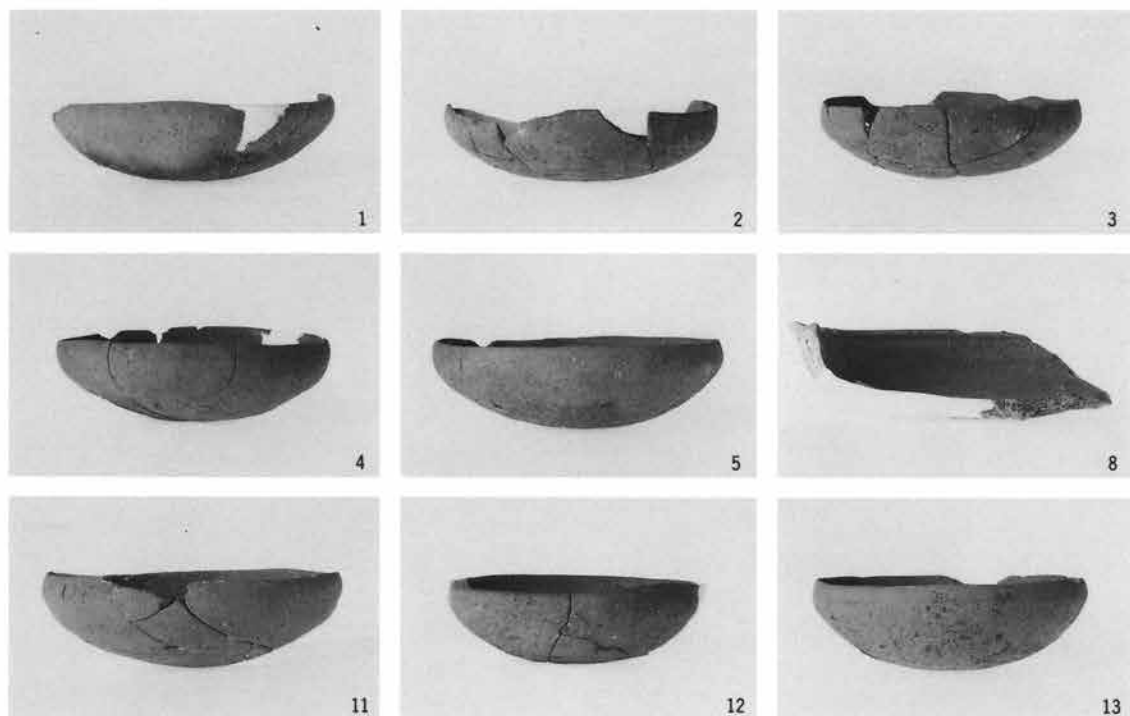
田端地区D区4号溝出土遺物



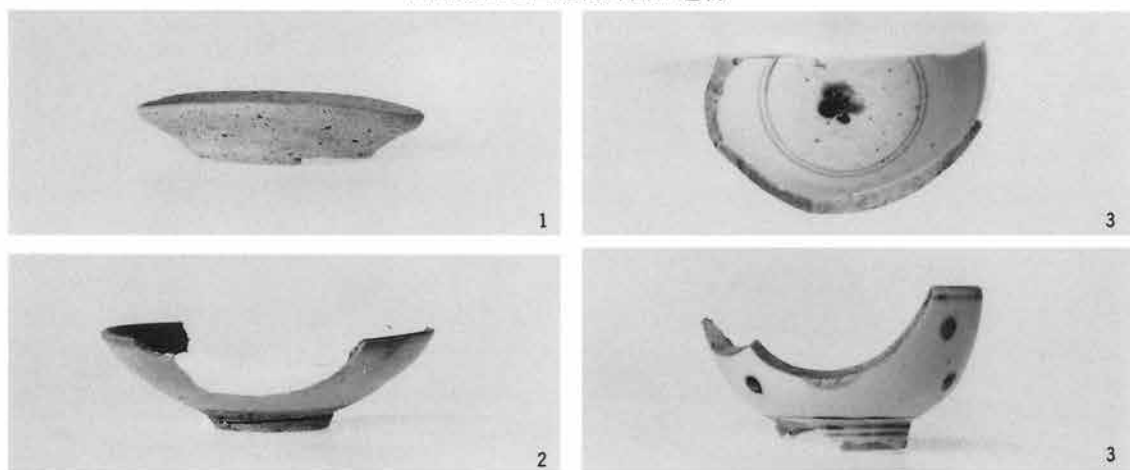
田端地区D区遺構外出土遺物



田端地区E区3号土坑出土遺物

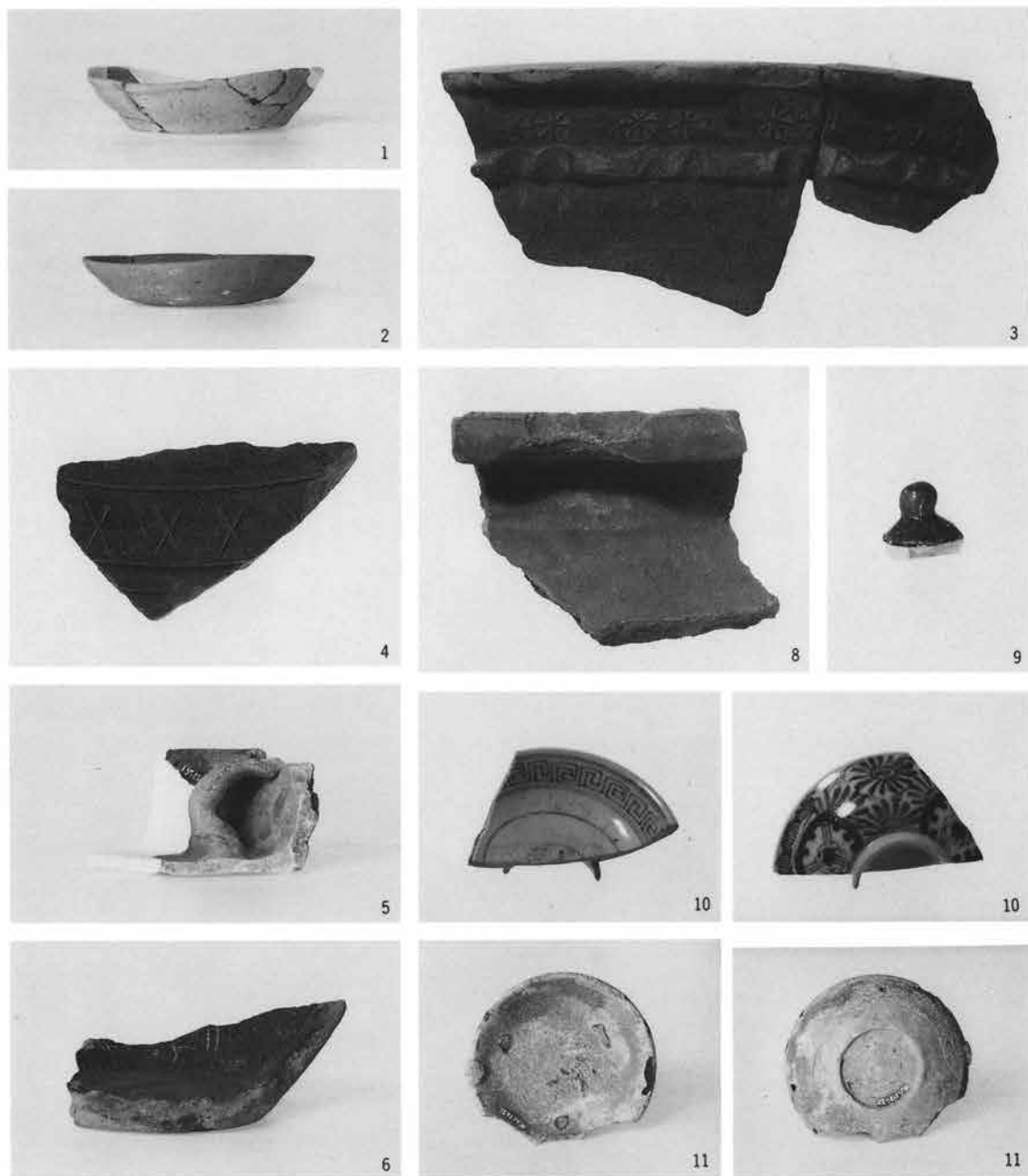


田端地区E区遺構外出土遺物

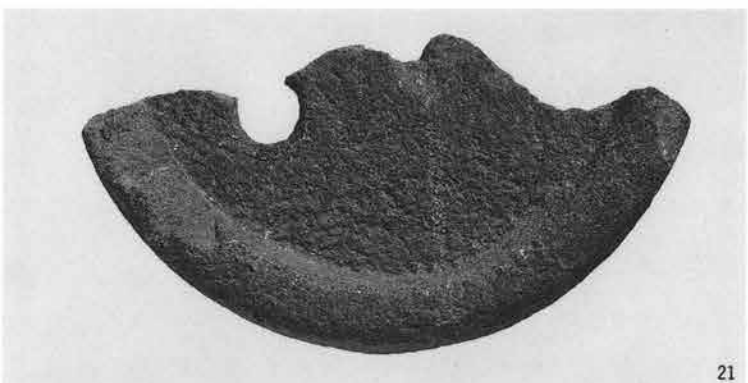


寺東地区
土壘出土遺物

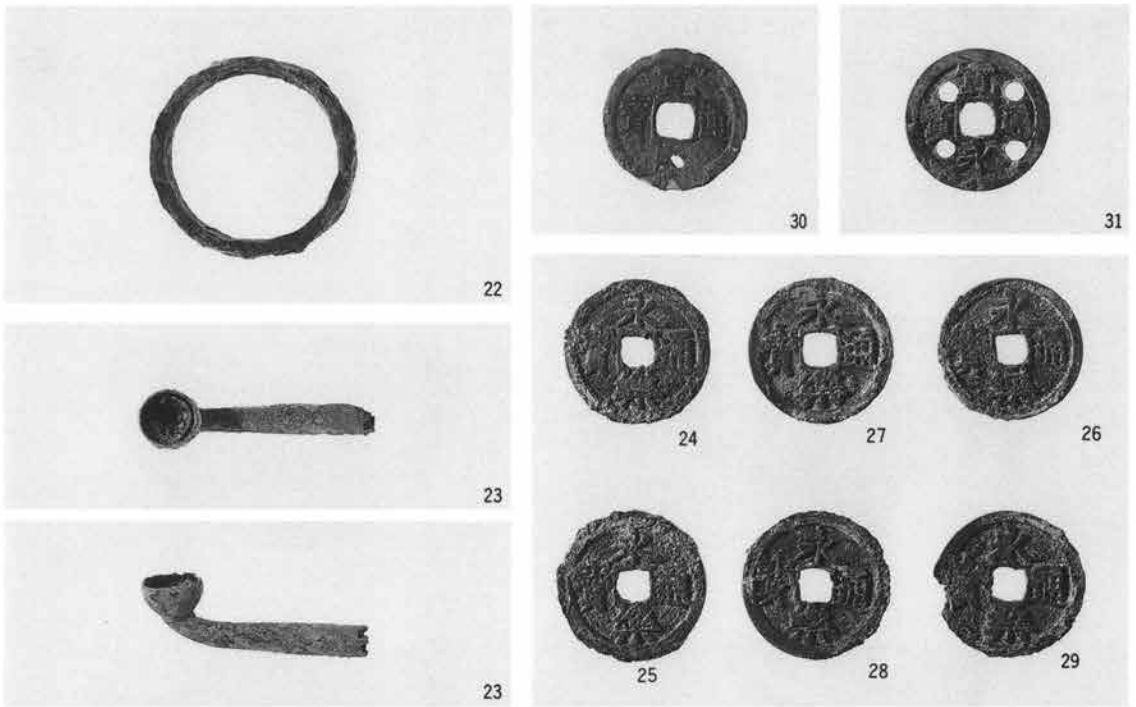




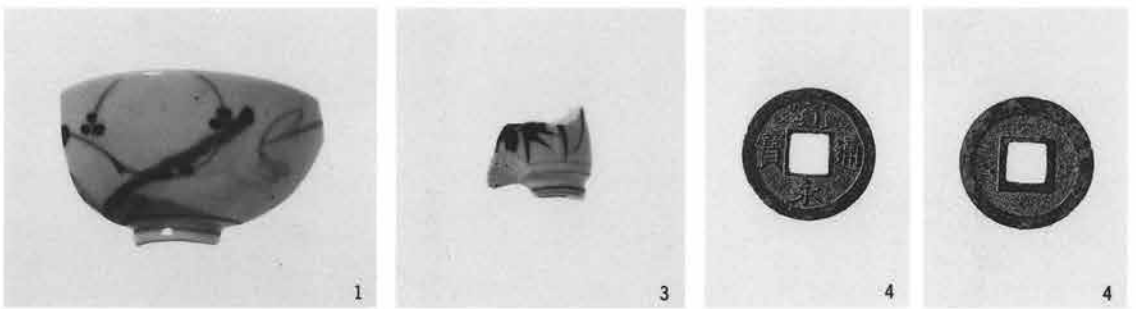
寺東地区1号溝出土遺物(1)



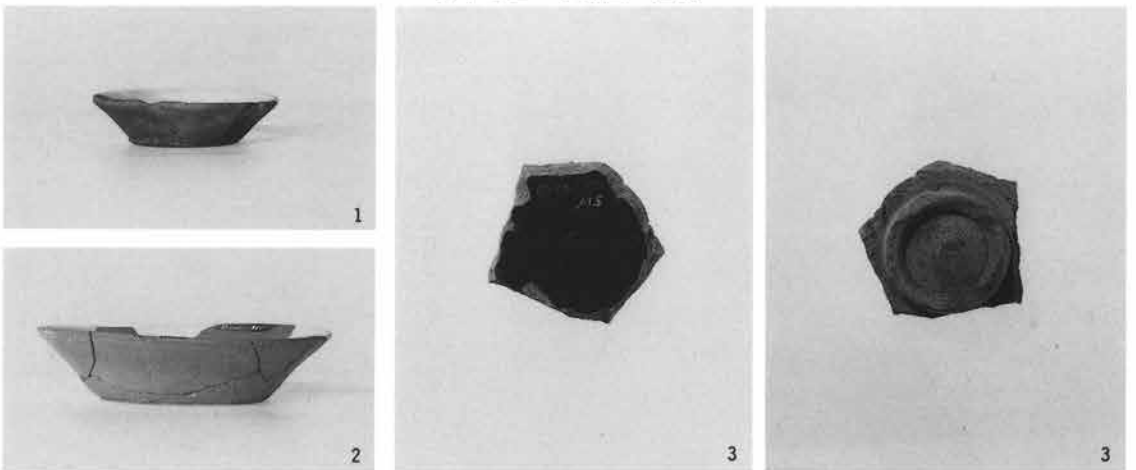
寺東地区
1号溝出土遺物(2)



寺東地区 1 号溝出土遺物(3)



寺東地区 3 号溝出土遺物



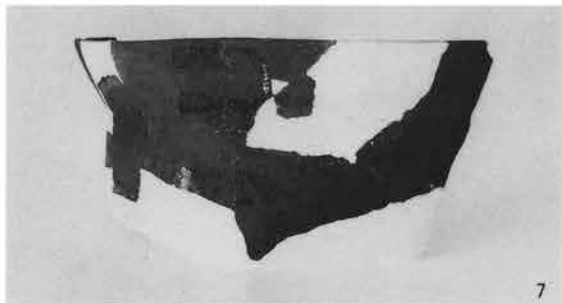
寺東地区 5 号溝出土遺物



6



5



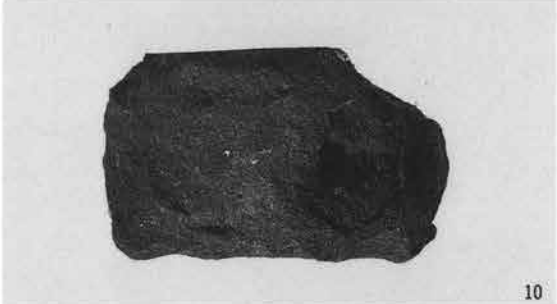
7



10



8



10

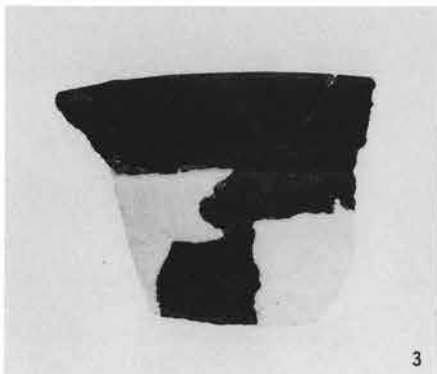


9



10

寺東地区5号溝出土遺物



3



5



6

寺東地区11号溝出土遺物

寺東地区12号溝出土遺物

寺東地区14号溝
出土遺物



寺東地区1号火葬墓出土遺物



2



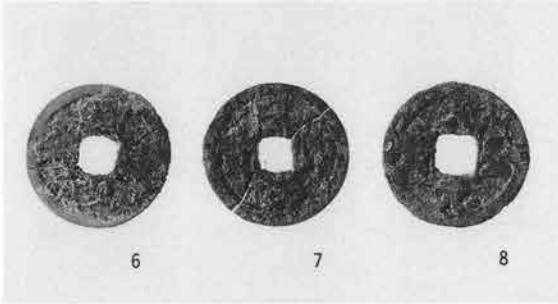
3



4



5

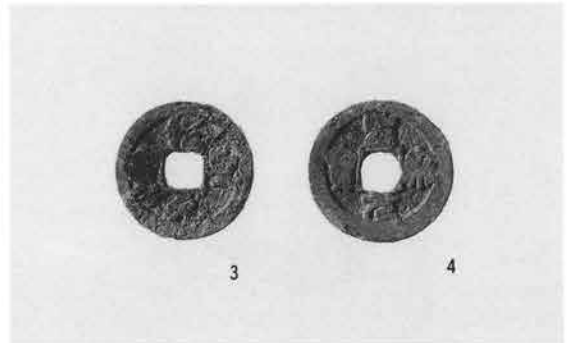


6

7

8

寺東地区3号墓墳出土遺物



3

4

寺東地区17号墓墳出土遺物



2

寺東地区20号墓墳出土遺物

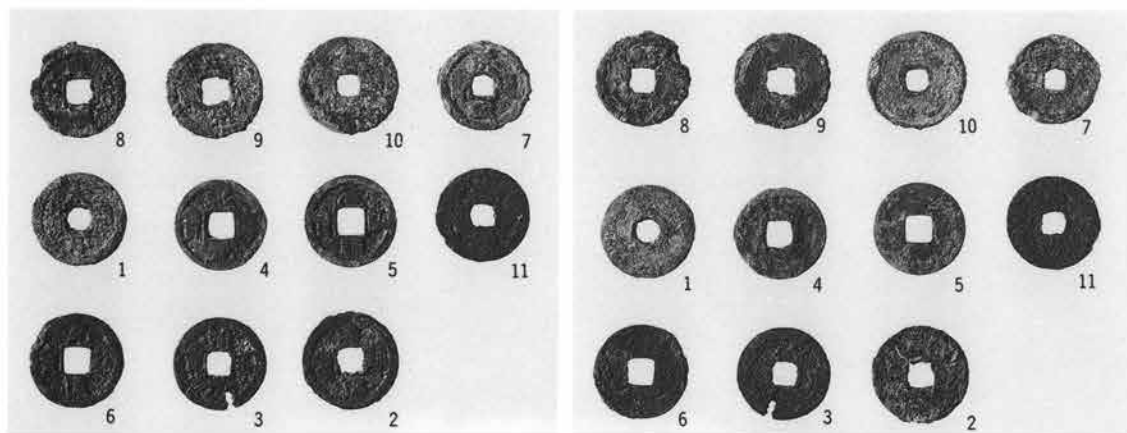


1

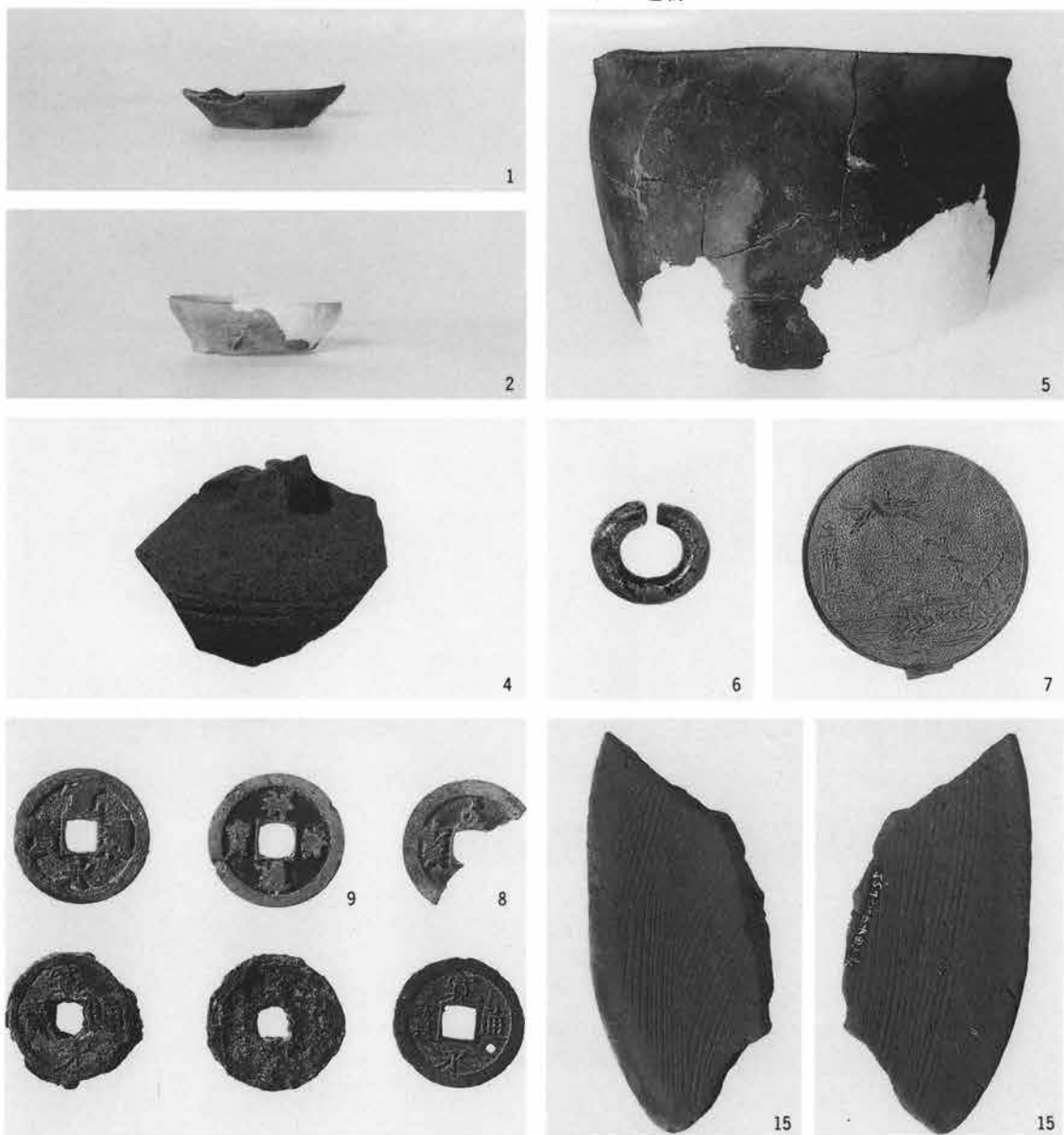


1

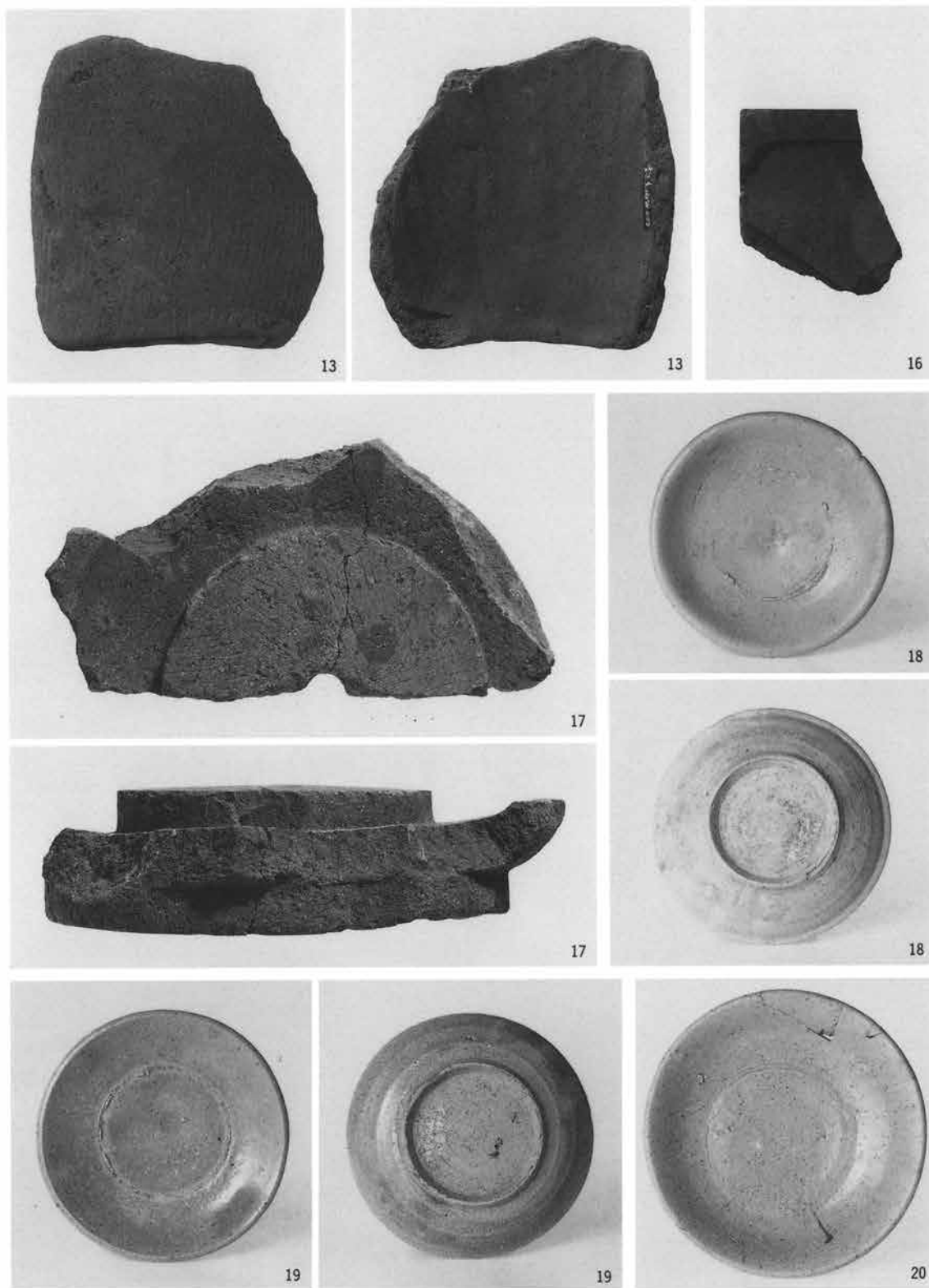
寺東地区
30号土坑出土遺物



寺東地区56 A号土坑出土遺物



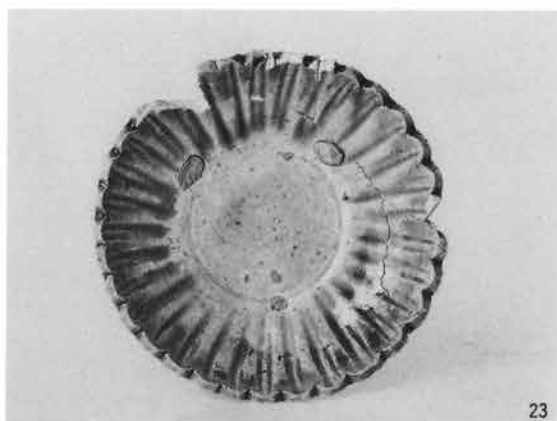
寺東地区遺構外出土遺物(1)



寺東地区遺構外出土遺物(2)



21



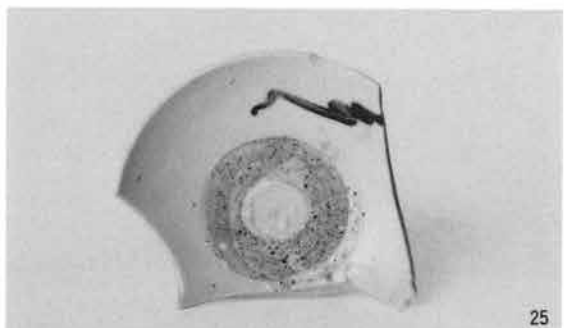
23



22



23



25



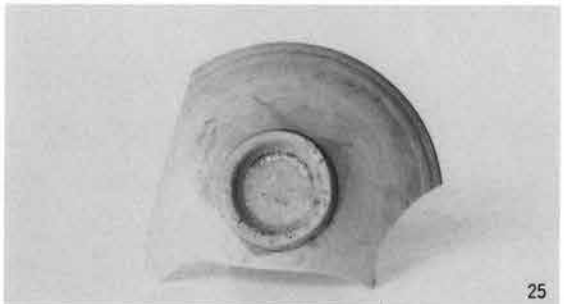
23



25



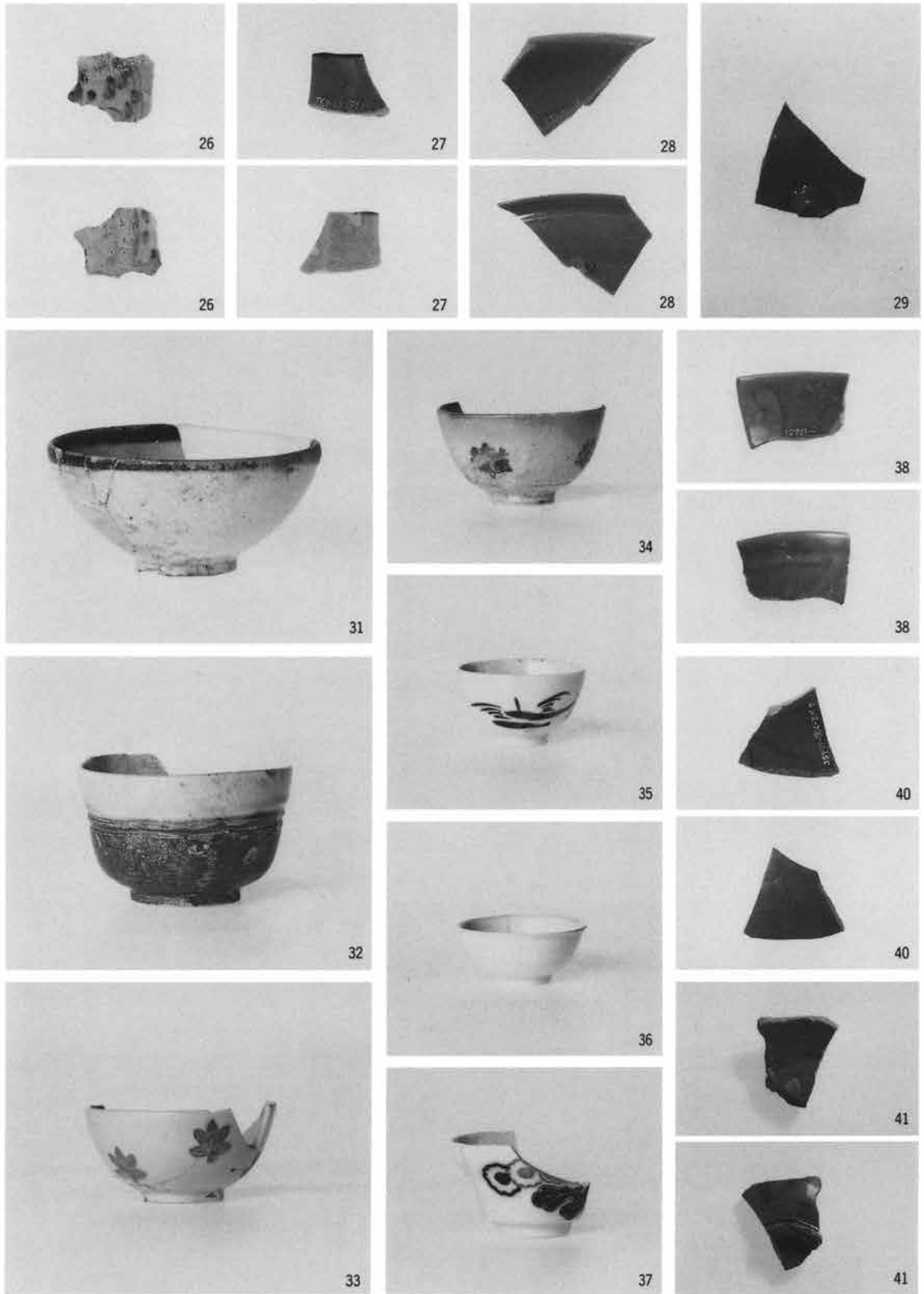
24



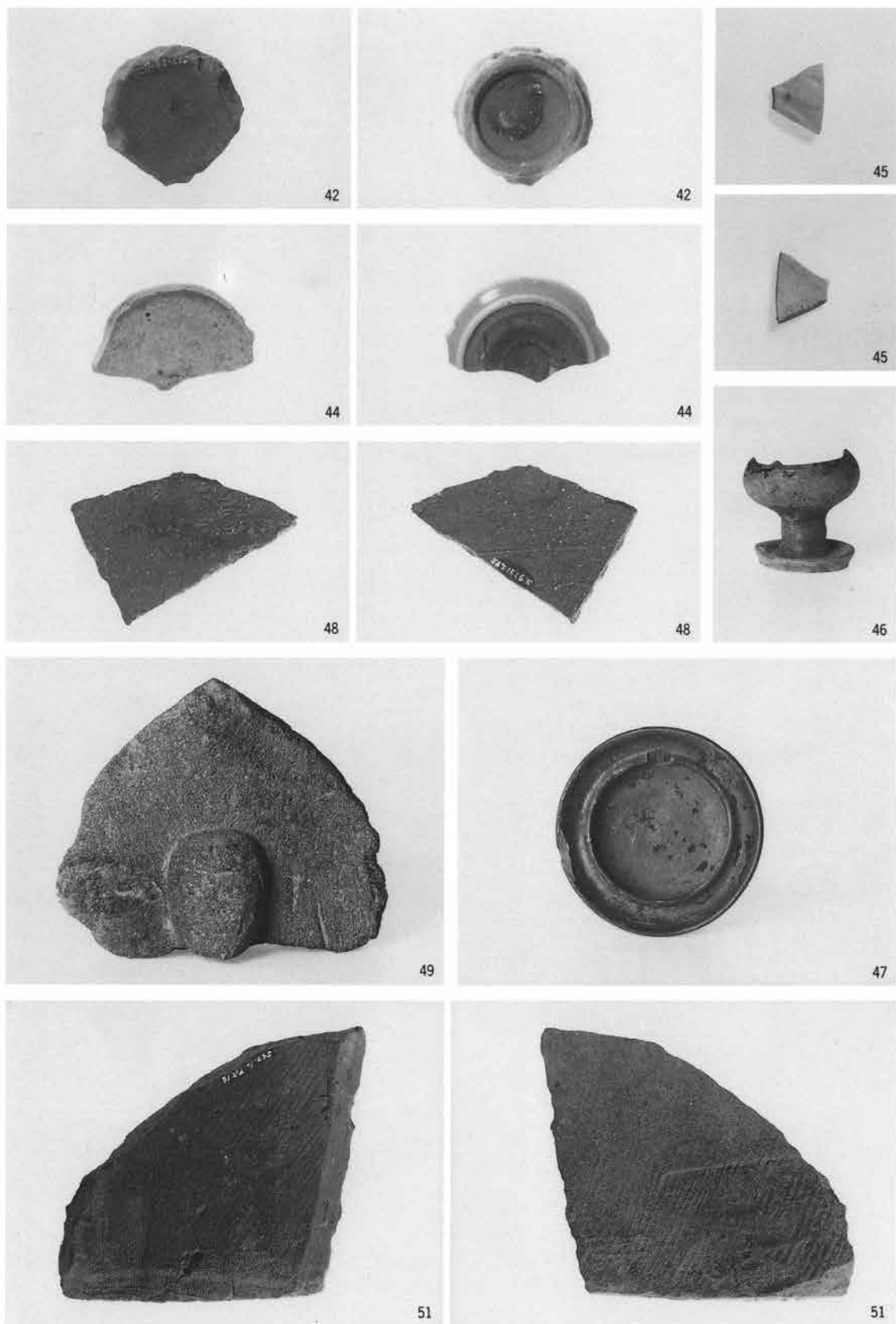
25



24



寺東地区遺構外出土遺物(4)



寺東地区遺構外出土遺物(5)



寺東地区遺構外出土遺物(6)

田 端 遺 跡

(第1分冊)

—上越新幹線関係埋蔵
文化財発掘調査報告第9集—

印刷 1988年3月25日

発行 1988年3月31日

編 集 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
(0279) 52-2511(代)

発 行 群 馬 県 考 古 資 料 普 及 会
勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
(0279) 52-2511(代)

印 刷 朝 日 印 刷 工 業 株 式 会 社
